
リリカルとマジカルの全力全壊

クラウン・クラウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルとマジカルの全力全壊

【Nコード】

N5261N

【作者名】

クラウン・クラウン

【あらすじ】

リリカルなのはに、F a t eのある者、物？がやってきます。

自重？ははは、何を言ってるんだい？

あいつの辞書にそんなものあるわけないだろう？

だって奴は・・・。

ネタ多し、むしろネタばかり、基本ギャグ

第一話 あいる・びー・ばっく（前書き）

少しでも運命を貫く漆黒の螺旋の設定が関わります。

第一話 あいる・びー・ばっく

…悪は滅びた。

いきなり全力全開でクライマックスな話だが、とにかく悪は倒された。

それは数人の勇者による、歴史や物語に残らない…いや、残してはいけない闘争の果ての話。

『フフ…ルビーちゃんは帰ってきますよ～アイシャルリターン』

そんな不吉な言葉を最後に吐き、勇者達を不安のどん底に陥れながらも悪は満場一致の意思で封印され、平和が戻ってきたのである。

だが、勇者達は甘く見ていた…あの愉快犯のしづとさを完全に理解しきれていなかったのだ。

『ふう～何とか逃げ切れましたね～』

ここではなく、どこでもない。

そんな次元の狭間…本来ならば何者をも存在し得ない空間に、ありうべかざる存在があった…一本の杖である。

しかも割烹着を着た悪魔な声でしゃべる杖、その名をカレイドステツキの人工天然精霊マジカル・ルビー。

とある世界の最高峰の魔術師が作成した魔術機、使用者に万全の恩恵と力、知識とその全てをまとめてチャラにするほどの迷惑をかけつつ趣味に走る伝説のメフィストより性質の悪い代物である…が、それなら尚の事、なんでそんなものがこんな次元の狭間にあるかと言うつと……ぶっちゃけ調子に乗りすぎたからだ。

彼女…多分、彼女だろう。

とにかく彼女は本来存在していた世界で、（本人達のことを無視して）魔法少女隊を結成し、文化祭のステージで（これまた本人達に断りなく）華々しいデビューステージを飾った…のだが…。

『う～ん、もう少しだったんですがあ～ルビーちゃん不完全燃焼で

すよ。』

これからは五人の魔女っ子達と共に、ご町内の平和を面白おかしく守っていこうと画策していたルビーだが、その野望は問題ありまくりというか問題しかないものであり、立ち塞がった赤い彗星モドキに金の子供、おまけに赤いコートのマフィアっぽいチンピラに阻まれてしまったのだ。

死闘…らしき物の果てに破れ、ルビーは嚴重に…本当にこれでもかと言うほど嚴重に封印されるはずだったが…それならばなおの事何故こんなところにいるかというと、封印される寸前に残された魔力のほとんどを使って時空に穴を開け、そこに滑り込んだのだ。あまりにも早技だったので、勇者達にも気づかれずにルビーはままと逃げおおせていた。

捕まるのも封印されるのも初めてではない、その経験が生きたようだ…ぜんぜん自慢にならないが…。

『それにしても…お腹がすきましたねえ。』

勿論、杖が飯を食うわけがない。

ルビーが言っているのは魔力切れという意味だ。

倒される直前、ルビーは5人の魔法少女達から魔力の供給を受けていた。

さすがに結構な量ではあったが、並行世界への道を作ることではほとんど消費してしまっている。

何とか並行世界への出口を作ることとは出来なくもないが、安易に開いて飛び込んだ先に魔力を持った人間がいなければ、ルビーはただの杖に成り下がる。

そうなれば動くことも出来なくなるだろう。

ルビーが機能を停止した場合、再起動するためには魔力を持った人間の血が必要になる。

そんな都合のいい偶然に期待するのは、魔術師の製作物としてどうよ？なもんだが…とはいえ、このままでも魔力を消費し続けて最後には止まってしまふのは変わらない。

こんな次元の狭間で機能停止してしまえば、それこそ再起動の可能性はゼロだ。

『安西先生は言いました。「諦めたらそこで試合終了ですよ」…安西先生、ありがとうございます!!』

…何時から安西先生の生徒になったんだ？

とはいえ、本当にどうした物かと考えていると、キューピンというニュータイプな効果音と共にルビーの感覚にヒットするものが来た。

『む、むむ!?こ、こりはあ!!』

ルビーが何かに反応して、その体をバンプ機能付の如く震わせる…実に子供用の玩具っぽい。

『感じる、感じますよあゝビンビン来るオトメのラヴパワー!!ルビーちゃんのアンテナに直撃じゃないですかあゝ!!』

ここに誰か他の人間がいれば、間違いなく退いていただろう。

外見も中身も色々怖い。

『あつちですねえゝ待っててくださいーい今ルビーちゃんが行きまあゝす』

さっきまで悩んでいたのはなんだったのか、ルビーはあつさり道を開くと異世界に飛び込んでいった。

その行動に一片の悔い無しと言うかの如く全速全力全開で…。

…少女が泣いていた。

一人で泣いていた。

おそらくは3歳くらいだろう。

オレンジの髪をツインテールにした藍色の瞳の女の子だ。

こんな子供が一人で公園のブランコに座って泣いている光景はどう考えてもおかしい。

周囲を見回しても、彼女の親らしい人影はいない…っというより

も人影そのものが少ない。

それもそうだろう。

そろそろ時刻は夕暮れ、昼と夜の境目の魔に逢う時間、逢魔が時……少なくとも彼女のような歳の子が外にいていい時間ではない……それでも少女は立ち上がろうとはしなかった。

……ここにいれば、家族の誰かが心配して迎えに来てくれる。それを期待しているのだ。

そんなことを考えていると、目の前の地面がガサリと鳴った。

少女は家族の誰かだと期待して顔を上げるが、目の前に立つ人物を見た瞬間に凍りつく。

「だ、誰？」

見たことのない男だ。

言葉を選べば恰幅がいい……要するにデブ……結構な歳に見えるが、たるんだ顔の肉が年上に見せているのか？

ぼさぼさで伸ばし放題の髪は、脂ぎっている。

無精髭が濃い。

何よりもアレなのが、男の着ているシャツ……アニメのキャラTシャツである。

男の肉に押されて左右に広がったり、横に伸びているためにキャラの原型が崩れていて、すぐには元が何なのかわからなくなっていた。

「お、お嬢ちゃん、どうしたのかな？」

ハアハアと、男の息が荒い。

少女は思わず立ち上がって後ずさる。

そういえば、最近この付近で少女くらい年齢の女の子が男にいたずらされる事件があっていて、少女も気をつけるようにと母や兄、姉から言われていたことを思い出す。

「い、いや……きゃ！」

更にあとずさるうとしたが、拍子にブランコに引っかかってこけてしまう。

「だ、大丈夫かな？」

男の手が少女に伸びる。

その顔には満面の笑み…助け起こそうとする以上の、何かの感情がそこにはあった。

少女がもう少し色々な経験をつんでいれば、男の笑みの名を欲情あるいは好色と言うべき物だという事を見抜いていただろう。

「怪我してないかな？」

「ひう」

男の手が伸びてくる。

少女は恐怖のあまり声が出ない。

その指先が、少女の足に触れようとした…が…。

『こんの変態があああ！！』

「ブヒー！！！」

「え？」

少女が見たのは、真横から飛んできた何かが男にぶつかってそのまま飛んでいったという事実だ。

本能的に飛んでいった方向を見た少女は目を丸くする。

「ブヒー！ブブヒー！！！」

『そうそう、肺の中の空気をすべて、ccc残らずしばらく出せ！』

男が木に礫になっていた、

正確には、男の鳩尾に何かが当たり、男の体を木に押し付けているようだ。

しかもドリルのように回転しながら、天元突破しそうな勢いだ、本当にやるとスプラッタなことになってしまっているのでそこまではやらない。

しかし、アレでは本当に空気を全て吐き出して失神するしかないだろう…えぐっている物に重なって、中年の波紋使いの姿が見える。そして少女の予想は現実になった。

男が白目になった所で、やっと回転が止まり、自分を助けてくれた何かが男から離れる。

支えを失った男の体は前のめりにどすんと倒れて痙攣を始めた…

死んではいないようだ。

『フウ、まったく、変態には困った物です。ロリータは目で見て愛でるだけ、イエスロリータ・ノータッチ、それが紳士の正義、^{ジャスティス}わきまえない豚が多くて困りますねえ。そう思いませんかお嬢さん？』
「え？に、にや？」

思わず少女から変な返事が返ってきたが、多分驚きすぎだろう。
彼女は自分に声をかけてきた存在を見て目を丸くしていたのだ。

「ま、魔法使いの杖？」

それは少女がいつも見ているアニメの主人公が持っている魔法の杖によく似ていた。

電池を入れると光ったり音が出るやつだ。

『うーん、厳密には魔術師の杖なんですが、まあそんな違いは些細なことですよねえ』

魔法と魔術師の区分設定を適当に流しやがった。

『初めましてお嬢さん？私の名前はマジカル・ルビーといいまゝす』
「あ、なのは…高町なのはっていうの」

本来ならば、出会うはずのなかった二つのリリカルでマジカルな運命はここに重なった。
――――

『そうですか、お父様が怪我をしたんですかあ』

「そうなの…お母さんもお姉ちゃんも忙しくて構ってくれなくて…お兄ちゃんは怖くなっちゃったの」

公園から離れたルビーとなのははお話中だった。

OHANASIではなくお話、ここ重要。

ルビーはなのはの手の中にあり、なのはがルビーに話しかけている構図だが、この位の年齢だとまだ好ましく見られてしまうので奇異の視線に晒されることはない。

変態豚な男（仮）？

勿論放置してきましたが何か？

ちなみに、舌っ足らずにもがんばって自分の事を話してくれるなのは見たルビーが実に良く萌えている…文章に起こせば、それだけで本が一冊出来そうだが、ともあれ、それを語り始めると脱線して長いので、ここはひとまず…ひーとーまーず置いて置く。

なんでも最近、なのはのお父さんが大怪我をして入院してしまい、喫茶店を始めたばかりのお母さんとお姉さんは店にかかりつきりになっていらっしゃるらしい。

兄も、これは良くわからないががんばっているようだが、逆にそれでなのはに怖がられているというわけだ。

『なんというか…』

うーんとルビーは悩む。

いつもはお気楽ご気楽だが、ある意味で確信犯のルビーは本当に苦しがつている人間や困っている人を前にしてまで、そのスタンスを貫くほど外道ではない。

「ねえルビーちゃん、どうしたらいいの？」

なのはが涙を浮かべて聞いてくる。

それを見たルビーは考えた…こういう時、シロウさんたちならどうするんでしょうねえ…？と…そんなのは考えるまでもない

シロウならなのはを助けようとするに決まっている。

『ではそうしましょうか』

「にゃ？」

なのはが独り言をつぶやくルビーに首をかしげるが、さつきからルビーのオトメのラヴパワーメーターは振り切っている。

しかも、なのはは魔術師ではないがかなりの魔力の持ち主だ。

あの凜やルヴィアすら凌ぎ、キャスターのメディアと同等かそれ以上…末恐ろしい才能だ。

そしてルビーはそろそろ魔力切れ…^{ガスケツ}しかしそんなことは関係なく、ルビーはなのはの力になってやりたいと思うようになっていた。

『なのはさん？お父さんを助けたいですか？昔のように家族全員で

過ごしたいですか？」

「え？う、うん。なのは、皆と一緒にがいいの！」

『判りましたあゝ。ではちょっとちくつとしますよあゝすぐ済みますからねえゝ、後、私の言う言葉を復唱してくださいさあゝい』

…数秒後、誰もいない路地裏で七色の光が立ち上った。

海鳴総合病院、その一室になのはの父、高町士郎は入院している。事故にあつたと担ぎ込まれてきてから数日、全身に包帯を巻いた高町士郎はベッドの上で意識が戻らないままに寝ている。

動く者のない室内に、不意に風が入り込んできた…看護師が窓を閉め忘れたわけではない。

”誰か”が…鍵を開けて…地上から五階分もの高さにある窓を外から”開けたのだ

『…ここですか』

「うん、そう」

声の主達は、音もなく室内に侵入する。

足音すら立てず、“空を飛んでいる”かのように…

「…う」

高町士郎は覚醒に向かう倦怠感に囚われながら、自分がどういう状況にあるかを分析する。

剣士として、戦士としての本能が自然とそうさせるのだ。

戦場において、情報は大きな意味を持つものだから…

『…う・丈夫…』

「お…さ…」

声が聞こえる。

すぐ傍に誰かいるようだ。

士郎はわずかに目を開け…。

「な…！」

驚きで半開きだった目を限界まで見開いた。

目の前にいるのはなのは、見間違えようもなく、同時に見慣れた自分の娘…だが、いくら自分の娘とは言え、それが空中浮遊をしているとくれば驚くには十分な光景だろう。

「おとうさん…！」

泣きながら胸の中に飛び込んでくるのはを受け止めて驚く士郎に、更に追い討ちがかかった。

『はじめまして高町士郎さん。わたくし人工天然精霊マジカル・ルビーと申します。お気軽にルビーちゃんと呼んでください』
「な…！」

聞いたことの無い声に顔を上げた高町士郎は、今度は空中に浮いている杖を見て絶句する。

『唐突ですがあゝとつても可愛くて素敵に無敵、一家に一本カレイドステッキはいかがですかあゝ？なんつて、もう契約しちゃったんでルビーちゃんの身も心もなのはちゃんの物なんですけどおゝキヤ―はずかし―ですねゝあはあゝ』

マシンガントークで惚気られた。

しかも赤くなって杖が身をよじっている…あの杖、弾力があるのか？

「…なのは、ちょっとどいていなさい」

「うん」

金魚のようにパクパクしていた口を閉じた士郎は、大怪我をしているはずの体に痛みを感じることなく自分の上に乗っていたなのはを避難させ、深呼吸をするかのように大きく息を吸い込んで…3…

2…1…0。

「なんで杖がしゃべってる…！！？」

…そして数年後、唐突過ぎるがお約束の流れで時間が過ぎた。

高町家の道場では8歳になったなのはと空中浮遊しているルビーが対峙している。

『それでは、今日も行きますよ！！^{マスター}なのはちゃん！？』

「はい、師匠！！」

ルビーの言葉になのはも気合を入れる。

ちなみに、なのはの体操服にブルマ姿はルビーの差し金だ。

『流派！東方不敗は』『王者の風よ！』

『全新！』『系烈！』

『「天霸狂乱！」』

『「見よ！ 東方は赤く燃えている！」』

ババーンと、周囲で魔力の花火が上がる。

極彩色だ。

無駄に凝った演出はルビーの担当。

『Good、流石なのはちゃんは天才ですうー一発でこれを物にするなんて！！』

「えへへ、そんな事ないよお」

『次回はこれで行きましょう。ああ、それにしても照れてるのはちゃんは何ってキュートなんでしょう。お姉さんのハートをどつきゅんストライクです』

「いや、師匠？何を言ってるか判りません。後ちよつと怖いです。身の危険を感じます」

『かは！！』

素に戻ったなのはの反応にルビーが吐血（幻視）した。

「…ねえ恭ちゃん？なのはとルビーちゃんが最近始めたアレって何？」

「俺も知らん、何か意味があるらしいが…悪くないな」

「は？」

予想外の言葉に、美由希が見れば、兄の恭也は士郎を見ていた。

「なあ親父、御神^{うち}にはああいうのはないのか？」

「ない。が、なければ作ればいい。だろ？」

「そうだな」

二人は実に良い笑顔で笑いあい、頷き合ってまじめにああでもないこうでもない、キメ台詞？らしき物を考え始めた。

しばらくして立ち上がると、適度な距離をとって向かい合い。

「師匠おおお！！！！」

「こんの馬鹿弟子がああああ！！！！！！」

そして始まる木刀の応酬、4本の小太刀が見えないレベルのラッシュをかわしている。

「ははっ男の子って好きだよ〜こういうの、女の子の私には理解できないかな〜」

二人共男だからな…蒸し暑い展開に飢えていたか？

我が家も毒されてきたな〜と思いつつ、美由希はすぐ傍にいる二人（一人＋一機？）の事はあえて無視する。

なんか自分だけ置いてけぼりを食らってる気がして鬱になりそうだったから。

「みんな〜ごはんできたわよ〜」

台所から桃子の声が聞こえてきて、4人＋1本？が朝食に向かって動き出す。

これがここ数年繰り返されている高町家の朝の風景だ。

第一話 あいる・びー・ばっく（後書き）

01 安西先生は言いました。「諦めたらそこで試合終了ですよ」
…スラムダンク

02 キュピーンというニュータイプな効果音…ガンダムシリーズ

03 『そうそう、肺の中の空気をすべて、—cc残らずしぼり出せ!』…ジヨジヨ、初代ツエッペリンさんの名言

04 ドリルのように回転しながら、天元突破しそうな勢い…グレ
ンラガン

05 『流派!東方不敗は』『王者の風よ!』の一連…Gガンダム

第二話 海鳴の都市伝説

日本の地方都市の一つ、海鳴市…海に近い町の中に、地元民に大人気の【喫茶 翠屋】がある。

家族経営の喫茶店は、甘味で有名で、特にケーキとシュークリームが絶品だ。

店主一家の名は高町…なのはは高町家の三人目の子供として生を受けた。

優しい両親…責任感の強い兄…優しい姉…数年前に父の大怪我という災難を経験したが、一家はそれを乗り越えた。

なのはは普通の両親の元、普通に学校に行き、普通にすくすく育った八歳の女の子…しかし、一つだけ…

『なのはちゃんにはとーっても大事な秘密があつたのです。何と何とあゝ彼女は魔術師なのでしたあゝ【リリカルとマジカルの全力全壊】、始まりまあゝす』

「ルビーちゃん、いきなり何を言っているの？」

『いえいえ…ちよつと電波を受信しちゃっただけですよ』

「あ、やつぱりそうなんだ」

『…なのはちゃんそれは素ですか？だとするとルビーちゃんはなのはちゃんの純真さがまぶしくて痛いですよ？』

「にや？ルビーちゃん、その電波は長くなるのかな？朝御飯、先に食べてきて良いかな？」

『イヤー！！私のなのはちゃんが放置プレイに目覚めちゃいましたー！！！！』

「ニヤー！！ルビーちゃん、人間きの悪い事言わないでなのー！！」
そして始まる追いかけっこ…こんな二人だが、なんだかんだで二人はとっても仲良しだ。

――

高町家の食卓は、基本的に食べる場所が決まっている。

長方形のテーブルの長い一辺に父・土郎と母・桃子が並んで座り、対面に長男の恭也と長女の美由希が座る。

なのはは短い一辺に一人だ。

高町家の食卓は、誰かが言い出したわけでもなく、自然とこの形に収まった……ここまでならば、普通に何処にでもありそうな家族の食卓だろう。

『あつたゝあゝらしいあつさがきたゝきばーのおあーさーだあゝ』
……With 杖が一本。

その名はマジカル・ルビー……本人曰く、ルビーちゃんだ。

『はい、土郎さんに桃子さん』

「あ、ありがとうルビーちゃん」

「すまないね」

しかもめちゃくちなじんでいた。

自在に空中を飛び回り、羽の部分をとんでもなく器用に使って高町家の皆にご飯をよそっている。

ただそこにいるだけで、日常を非日常にしているカレイドステッキ……しかし、高町家の五人は誰一人として驚いてはいない。

これが初めてではない証拠だ。

「………いただきます」………」

全員そろって合掌、もちろんルビーも羽を使って手？を合わせる。

「あ、ルビーちゃん？醤油を取ってくれるかな？」

『はいはい。どうぞー』

「ありがとう」

『どういたしましてえゝ』

食事が始まって、ルビーは高町家の一員だった。

最初のうちはいきなり土郎の怪我が全快していたり、いきなり飛んでしゃべる杖の登場にいろいろビックリさせてしまった。

「この物の怪！」とか言っつつかかってきた恭也を返り討ちしたはいものの、勢いが付きすぎて半殺しにしてしまい、あわてて怪我を治したのも今ではいい思い出…なのか？

何はともあれ、なのはとルビーが契約を交わしてから五年、いかに尋常ではない存在とはいえ、五年も一緒にいれば慣れるというもの、今では高町家はこの世界の理から外れた力、魔術という理論の存在を知り、その結晶であるルビーを家族として受け入れている。

「おっと、やばー！」

食事中、恭也の手が滑ってコップが落ちる。

とつさに掴もうとした指をすり抜けて、地面に叩きつけられたガラスは粉々に砕けた。

中身を飲み干していたのが不幸中の幸いか？

「…すまん失敗した」

「未熟だぞ恭也」

「あ、お兄ちゃんは下がって、なのはがやるの！」

得意満面に、なのはが椅子から降りて近づいてくる。

なのは位の子供には、割れたガラスなど危ないはずだが、破片に近づくなのはを誰も止めない。

むしろ何かの手品を見るかのように注目してじっと見ている。

そんな家族の見ている前で、なのはは割れたコップに両手向けると、目を閉じて内面世界にもぐりこむ

イメージするのは大砲、それも大きくて威力のある奴だ。

それにエネルギーが収束していくイメージを重ねると、なのはの体内にある魔力回路が起動する。

「…リリカル…マジカル」

なのはが起動キーを唱えると、散らばっていたガラスが逆再生のように一箇所に集まり、形を取り戻してゆく。

なのはが目を開けたときには、床に置かれたガラスのコップが元の形で存在していた。

「はい、できたよぉ」

コップを持ったなのはに皆が拍手する。

驚くよりも感心の色が強いのは、これもルビーと同じく初めて見るわけではないからだ。

「本当に便利だね、魔術って」

美由希がなのはからコップを受け取り、しげしげと見るが、割れたところかヒビ一つ見つけれない。

完全に元通りになっている。

なのはが使ったのは初歩の初歩とはいえ魔術、教えたのはもちろんルビー。

なのはの才能は出会った時点でルビーが見抜いていた。

そしてそれを本人に伝えたところ、「魔術教えてなの」と来るのはある意味当然だったのだろう。

別にルビーを使えば、すぐにでも大規模儀式魔術くらいのこととは簡単にやってのけられるのだが、それで納得しないのがなのはらしい。

最終的にはルビーが折れ、士郎達も怪我を治してくれたルビーならと許可してくれた。

魔術回路の製作など、危険なことが無いわけではないがルビーがそんなものを許すはずも無く、ルビーの指導の元でなのはは魔術回路を構築し、魔術師デビューとなった。

まだ見習いレベルとはいえ、何の下地も無く5年で魔術の基礎を物にしたのはすごい一言だ。

当然、魔術刻印などはないが、なのはの才能はそんな物を問題としない。

改めて詳しく調べたルビーが『連邦のモビルスーツは化け物か…』と口調も忘れて言った程である。

『ふむ、見事です。よ弟子よ!!』

「はい、ありがとうございますししよー!!」

ルビーが師匠でなのはが弟子…杖と幼女の奇妙な師弟関係…とはいえ、初級とはいえ魔術は魔術である。

神秘は秘匿しなければならぬ。

それを家族とはいえ複数の一般人の目の前で使ってしまった。

本来なら記憶操作その他の必要があるが、どうやらこの世界に魔術の概念は無かったらしい。

あつたとしても、あのルビーが自重したとは到底思えないが……ともかく、この世界では他に魔術師らしい人間がいないので無問題……まあ、あまり派手にやるとそれはそれで別の意味で面倒な事になるが。

「いいな～なのは」

「えへへ」

「私も魔術を使えたら便利そう」

「うーん、残念ですが」

ルビーが調べた所、どうも高町家で魔力資質を持つのはなのだけらしい。

恭也と美由希は養子だから仕方が無いとしても、直接血が繋がっている士郎と桃子にもなかった。

なのはだけが、他の家族の魔力を一身に集めたかのようにとんでもない資質を潜在的に持っていたのだ。

突然変異か、あるいは隔世遺伝のように先祖返りでもしたか……とはいえ、魔術を使えることは公にはできないし、高町家の面々は魔力が無くても困ったことは無い。

多少羨ましいと思う程度だ。

『でも、それらしくすることはできますよ？』

「え？」

『こんな風に』

いきなり、ルビーからビームが出た。

不意を衝かれた美由希は避ける事も出来ずにまともに喰らい。

閃光弾のような光が発生し、世界が真っ白になる。

徐々に光にくらんだ視力が戻ってくると、美由希は家族の視線が自分に集まっていることに気が付く。

「い、いきなり何するのルビーちゃん！？って何でみんな私を見て…キヤー！！」

美由希の姿が一変していた。

彼女は自分の通っている高校の制服を着ていたのだが、それがまったく別物になっている。

ブレザーだったのがセーラー服に…一昔前の「月に代わってお仕置きしちゃうぞ〜」で自称で美少女とのたまう星の名前の女戦士^{アマソネス}そのまんまである。

確かにぎりぎりで魔女っ子カテゴリーに入るかもしれないが、ここまで再現率が高いとコスプレである。

「何って事すんによー！！」

『アヴァローン！！！！！！』

顔を真っ赤にした美由希が噛みながらもルビーを掴んで壁に叩きつける。

頑丈そうな壁だったのだが、一撃でヒビが入り、ルビーが亀裂に刺さった。

乙女の羞恥心、恐るべし。

「イッヤー！！」

美由希が泣きながら自分の部屋に向かって走ってゆく。

追いかけない、声を掛けないのがこの場での家族愛、男性陣は美由希の名誉のために視線を逸らしたままだ。

「ルビーちゃん？」

ぼこりと言う音と共に、聖剣のごとくルビーを壁から引き抜いたのはなのはだった。

『な、なのはちゃん？』

「お姉ちゃんをいじめちゃメーなのー！！」

『はい、調子に乗ってすいませんでしたー！！！！』

涙を目に一杯溜めた幼女に勝てるわけが無い。

しかも、なのははいじめっ子に対してびんたをかましてからお説^{おは}教^{なし}をするという8歳児の猛者だ。

自分が悪い自覚があるからなおの事、幼女にマジな怒りを向けられると、罪悪感で死にたくなる。

『美由希さんには誠心誠意謝りますから許してください、なのはちやん!!』

「やれやれ、ルビーもなのはには形無しだな、大体何処からあんな物を…」

やっと前を見ることが出来た男性陣の内、恭也が聞いてくる。

士郎は唯苦笑していた。

『ああ、それなら桃子さんに教えてもらったんですよぉ』
「何？」

全員の目が、今度は桃子に集中する。

それを受けた桃子は唯いつものように笑っていた。

『そういえば、指定されたスリーサイズは美由希さんのじゃ無かつたんですね？桃子さん、あれは一体誰の…うひいー!!』

ルビーが悲鳴を上げた理由は明白だ。

笑顔のままの桃子から、とんでもないプレッシャーが発散されていた…ルビーちゃん？それ以上言ったらメーよ？である。

聞こえてきた幻聴に、ルビーがガクガクと震えて了解する。

この人だけはまともだと思っていたのに…時々怖くなるなあ…しかも謎だし…アイリスフィールや葵と同じように母性の塊なのだが、どうもそれに+αがある気がする。

「…さて店を開けるか」

一家の大黒柱は、これ以上追及しないでスルーすることを選んだ。

「あ、俺も学校に…」

「わ、私も…」

『ルビーちゃんもなのはちゃんに付いて行きますよぉ』

全員、士郎に倣うことにしたようだ。

触らぬ母に祟^{かみ}りなし。

「美由希はあとで私がO H A N A S H Iして学校に行かせるから気にしないで。皆、行ってらっしゃい」

さすがはなのはのお母さん。

士郎は店を開けるために、桃子は食事の後片付けに、子供達はそれぞれの学校へそして今日も高町家の朝は始まる。

「あ、なのは？」

「はい？」

「あんまり無茶しないでね、ルビーちゃんもなのはを宜しく」
『もちろんですよ〜』

――――

…さて、唐突ではあるが海鳴市には魔女っ娘がいる。

なんだそりゃ？っと思うだろう。

それが普通の反応で、漫画やアニメの中だけにしか存在しない架空の人物が実在すると聞いて、そのまま受け入れるような人間はその時点で何かがおかしいとはずだ…しかし、海鳴市だけにはその常識は当てはまらない。

多くの目撃者がその存在を語っているのだから…間違いなくいる。西の図書館で車椅子の女の子が困っていたら、颯爽と現れて本をとってあげ…東にお金目的で誘拐されようとしているツンデレ娘がいれば悪者を容赦なくつぶして助け出す。

しかも自称でなくかわいいらしい。

…そしてこれまた唐突に人気の無い路地裏。

「ぶ、ぶぶでぶ」

「い、いや…」

解りやすく変態豚が高校生くらいの少女ににじり寄っているという、いつか見たようなシチュだった。

「ブヒー、怖がらなくてもちよっと協力して欲しいだけデブよ」

「こ、こないで…」

男の首から提げているカメラのレンズが、光を反射して怖い。

一体何を撮るつもりだ？

「そこまでのー!!」

聞こえてきた声に、二人がはっとして振り返る。

そこにいたのは女の子だった。

小学生くらいだろう。

玩具みたいな杖を自分達に向けているその姿は…。

「ま、まさか噂の魔女っ娘？」

何処の誰だか知らないけれど、誰もが皆知っているそれは海鳴の都市伝説、困ったときに何処からともなく現れて助けてくれる杖を持った魔法使いの女の子。

「キタ

(。.)

!!!!」

「は!?!」

いきなり上がった奇声に、今度は二人の少女の声が重なった。

とつさに反応して見れば、変態男が目にも止まらぬ速度で下げたいたカメラを構え、魔女っ娘を激写している。

既に襲い掛かるうとしていた少女には目もくれない。

「し、しかも猫耳バージョンブヒー!!レア写真ゲットデブ!!」

「にゃー!!」

男が怖かったのか、魔女っ娘が文字通り猫のような悲鳴を上げた。海鳴の魔女っ娘の噂の一、魔女っ娘の衣装は毎回変わっている。男の言うとおり、今回の魔女っ娘の衣装は猫耳猫尻尾仕様のかわいらしい猫のデザインだった。

猫好きが見ればうつとりと見入るだろう程にかわいらしい……でざいんてつど・ばーい・桃子。

「あ、あの〜?」

「おお、協力感謝デブ!おかげで生魔女っ娘に会えたブヒー!!」
「え?…え?」

「でもごめんブヒー、僕は14歳以上の女に興味はないデブ、あ、魔女っ娘さーん?こっち目線下さいデブ、あとニャンニャンニャーって言うってポーズとって欲しいブヒー!!」

少女の中で何かが切れた。

魔女っ娘の正体は、当然のことながらなのはとルビーだ。

今のなのはにはルビーが微妙な認識阻害の魔術を使っている。

見ることが出来るし、会ったことを覚えているのだが、肝心なその正体やという声だったとか、印象などをぼやけさせてしまうというものだ。

故に、顔をさらしていながらも魔女っ娘の正体は不明のまま、ルビーはそれが魔女っ娘のロマンと言ってはばからない。

そのため、二人の事は大きな騒ぎにならず、都市伝説にとどまっている。

『帰りましようかなのはちゃん？』

「え？いいの？助けなくて？」

『助けるって…誰を？』

「ええ〜と」

ルビーの言葉になのはが戸惑う。

なのはの視線の先では、“豚男”が“少女”にぼこぼこにされていた。

「あんたが！！泣くまで！！殴るのを！！やめない！！」

泣くまでというか…既に滝のように泣いているし、鼻血やらなにやらだらだら流しているし、少女の握った拳が猟奇的に真っ赤になっている。

『ところであの男の人…もとい豚「言い直したほうがひどいよ！！」どこかで見たような気もするんですけど…「スルー！？これがスルーなの！？なのはさみしいよ！！」うん思い出せませんね…まあ良いか、心配しなくても大丈夫ですよなのはちゃん「はにや？」あの男をよっく見てくださいな』

言われて、なのはが男をじっと見る。

カメラは壊され、血だらけの男だが…。

「…何か喜んでいる？」

なんかめっちゃ嬉しそうに笑っていた。

そのキモさになのはが本能的に後ずさる。

『そのとおり、あの男の人は楽しんでいるんですから、邪魔されたら怒られちゃいますよお？』

「た、楽しんでるの？」

『世の中にはいろんな人がいるのです。ああ、なのはちゃんはそんなアウトローな話は知らなくて良いんですよ』

「そ、そうなんだ」

大人の事はまだ良くわからないのーとなのは思う。

ちなみに、豚男のようになのはに会うこと目当ての連中もいるので、ルビーが事前に魔術を使ってやらせかどうかを確認している。

「オラオラオラオラオラ！！」

「ブヒーーーーー！！！！」

「無駄無駄無駄無駄無駄ア！！！！」

「デブーーーーー！！！！」

だから、それをすり抜けたということは豚男のほうはともかく、

少女の方は本当に危険と恐怖を感じていたはずだ。

あのラッシュの嵐は間違いなくその反動だろう。

「豚かデブか統一しなさいよ！！」

『ごもつともおーキャラ立が甘いです』

ルビーが合いの手を入れる。

ちよつと終わりそうにない展開だ。

「あゝ、私もう帰りますね」

ルビーの言うとおり、これは手出し無用だなと感じたなのは、それにそろそろ子供にとつての門限が近い。

「あ、そうなの？ありがとうね、お姉さん助かった〜」

にこやかに微笑む少女の影になっているが、片手に握られているのは赤いぼろ雑巾…しかも殴っている少女の顔にも返り血が飛んで

いて壮絶だ。

「じ、じゃあさようなら」

なのはあえて背後を見ないようにして去った。

「ありがとう魔女っ娘さ〜ん」

背後で再びBGMのように響く打撃音など聞こえない聞こえない。

その後、男はずたばろの半殺し状態で警察に引き渡されたが、過剰防衛は成立しなかったらしい…男女平等なんて飾りですよ。

偉い人にはそれがわからんのです。

【変態には容赦なしの魔女っ娘】

【魔女っ娘様が見ている】

【白い悪魔からは逃げられない】

以上が今年の防犯標語…おかげで海鳴市での猥褻事件が激減したとかどうか？

「最後の悪魔って何!？」

『ああ、それってルビーちゃんが投稿したやつですよ、採用されたんですねえ〜』

「ルビーちゃん!!なのは、悪魔じゃないよ!!」

『こういう事を積み重ねてなのはちゃんも大人になっていくんでしようね〜、きっと世の中はこんなはずじゃなかったことばかりなんですよ』

「ミトメタクナーイ!!」

膨れたなのはが不貞寝した夜、海鳴市とその近辺に21個の流れ星が降った。

第二話 海鳴の都市伝説（後書き）

06 ルビーが『連邦のモビルスーツは化け物か…』と口調も忘れて言った程である。…シャア・アズナブルの名台詞。

07 無問題…ダウンタウンの岡村がこんな名前の映画に出てましたね。

08 「月に代わってお仕置きしちゃうぞ…」で自称で美少女と
のたまう星の名前の女戦士…あの恰好、ミュージカルを演じている
女の人達ってどんな気分だろうとか考えたりしません？

09 お姉ちゃんをいじめちゃメーなの！！…ガンパレののみち
やん。

10 何処の誰だか知らないけれど、誰もが皆知っている…月光仮
面のおじさんは…ってどこの誰だか知らないのにおじさん扱いです
よ。

11 「あんたが！！泣くまで！！殴るのを！！やめない！！」…
ジヨジヨ系はネタが豊富ですね。

12 「オラオラオラオラオラ！！」「ブヒーーーー！！！！」
「無駄無駄無駄無駄無駄ア！！」「デブーーーー！！！！」…
ラッシュラッシュラッシュ！！

13 偉い人にはそれがわからんのです。…部下は上司を選べんのです。

14 魔女っ娘様が見ている…マリみて、聖者がストーカー扱いですよ。

15 白い悪魔からは逃げられない…ガンダムネタって分かりやすくていいですね。

16 ミトメタクナイ!!…ハ口の手足ってすでにオミットされていないかと思う今日この頃。

第三話 トラブルのヨカン

気が付けば、夜の森を見ていた。

夜の闇は木々の枝葉という衣に隠されて、その深さを増しているようにも見える。

・・・まるで悲鳴さえも飲み込もうとしているかのように・・・では・・・正面の舞台に立つ一人の少年が今宵この場の犠牲者なのだろうか？

見たことの無い民族衣装のような服を着た、おそろくなのはとそう歳の変わらない子だろう。

クリーム色の髪をおかっぱ状にした少年だ。

「グルル・・・」

その緑の瞳が睨む先には黒い獣がいた。

熊ほどの大きさの毛むくじゃらだ。

その全てにおいて人体を破壊するには十分すぎる凶器に見えた。明らかに少年を敵と認識している。

飛び掛って来る気配を感じた少年が、ビー玉くらいの大きさの赤い玉を取り出して・・・。

「ーいや、って言うかなんですかこのB級厨二臭バリバリの展開は？」

「え？だあああー!!」

掛けられた声に、律儀にも反応した・・・反応してしまった少年の隙を付いて、獣が襲い掛かってきた。

獣が口を利けたのなら、きつと「抱きしめて、銀河の、果てまで」！」と言ったに違いない全身ダイブ、所謂フライング・ボディ・プレスという奴だ。

・・・最後はキラッじゃなくてプチッだったが。

地面に着地した音がいやに重い。

別の意味で痛い静寂が下りてきた。

「うわ、いきなり平面蛙ルートですか？」

どっこい生きてるシャツの中？

「っこんな所で死んでたまるか!!」

「おお、本当に生きてた!!」

流石に驚かすにはいられない。

プチッと逝っちゃったと思っていた少年が、その細腕で熊モドキを重量上げの如くりフトアップしたらそれは目を見張る光景だろう。

そんなものを見てしまっただけでは応援するしかないではないか。

「フイトー！」

「いっぱーっ！」

助け？を借りて、少年が熊モドキを放り投げた。

マッスルな超人の血を引いているようには見えないが、人間命の危

機に直面すると色々信じられない事をするものだ。

しかし、それで決着が付くほど甘くも無かつたらしい。
投げられた熊モドキがひらりと軽やかに着地する。

この熊モドキできる！！

唯の熊モドキじゃない！？

――そこに痺れる憧れるうゝ！！

「伊達にあの世は見てないぜ！！」

――え？ガチで？

「走馬灯はスタッフロールまで見たけどね！！」

どうやらマジらしい。

マジでこのギャグ補正とご都合主義の世界観の中で、少年は臨死体験を経験したようだ。

――と、という事はまさか死んでから現れるという8番目の感覚とかに目覚めて神に近い男になったりしたんですか！？

四六時中目を閉じるのがデフォになり、乙女座のくせに慈悲の心が無くなって、初対面の相手に跪けとか言う性格破綻のオプションが付いて来そうだ。

スカウターで計れば、あの無茶ぶりは確実にギルガメッシュ級の数字が出るだろう。

――おお、熱い、熱いですよぉーやれば出来るじゃないですかあ

「……！！ポップコーンとコーラのしを売っている売店は何処ですかー！？

一部脱力しそうな声も、今の二人（一人＋一匹？）には届かない。
互いに目の前にいる強敵^{ライバル}だけを見ている。

そして始まる決闘^{しんごう}。

「一避けてみる、ただし地球は粉々だ（グロロロロオ）！！」
「考えやがったなコンチクショー！！」

そんなくそ熱い地球をかけたバトルを経て……。

「一こんな形でなければ、お前とは友達になれたかもしれない・・
・（グルルルルル）」
「それは違うよ、僕と君は敵だから出会うことが出来たんだ」

な感じで最終的には種族や言葉を超えて分かり合った拳句に友情が芽生えたり・・・・そんな安易でお手軽で涙を誘う展開は全くこれっぽっちも無かった。
そもそも、これはそんな熱血格闘系ではない。

選択肢は三番、現実是非情である。

「……まあ、サイヤ人でもなければ死にかけたからっていきなりパワーアップはしませんよねえ」。

何とか赤い玉を使って熊モドキを撃退することに成功した少年だが、代償に大分手ひどくやられてその場で倒れてしまう。

「誰か・・・力を貸して・・・」

少年の言葉を最後に、風景がフェードアウトして行った。

『次回に期待して43点!!』

高町家、なのはのベッドの上で寝起きのルビーがのたまった。

事情を知らなければ寝起きの奇行に思わずカウンターを入れていたかもしれない。

さつきまで見ていた夢の批評なのだろうが、そもそもなんで杖が夢なんて見られる？

「えへへなのはもう食べれないなの」

ちなみに、部屋の主であるところのなのははまだお休み中。
幸せそうな寝顔で涎を垂らし、お約束の寝言を吐いている。

そんなものを見逃したら、愉快型魔術礼装の名が泣く・・・なので、
ルビーは当然の如く携帯の動画機能を起動、一部始終を撮影して朝食の席で披露して大爆笑を勝ち取った。

「なのは、どうしたの？」

「はにゃ？」

かけられた言葉になのはがはっとする。

私立聖祥大附属小学校、三年生のなのはが通う学校の屋上だ。

そして、声をかけてきたのは金髪のツンデレ・・・もとい、友人のアリサ・バニングだ。

その隣には、これまた友人の和風口リツ子・・・ではなく、月村すずかだ。

・・・最近、ルビーに毒されてきているのを感じるなのは苦笑い。

時刻は昼、三人はベンチに並んで腰掛けて弁当を広げていた。

ちなみに三人の馴れ初めはいじめっ子に、苛められっ子で、すずかの力チューシャをとって苛めていたアリサになのがアリサをひっぱたいてからお説教、その後は取っ組み合いの喧嘩に発展した。

肉体言語から始まるあたりが難だが、結果的に三人は親友となったのですべて良しである。

しかし、喧嘩してから仲良くなるなど、何時の時代の不良理論だ？

「何か心配事でもあるの、なのはちゃん？」

「すずかちゃん・・・うん、またルビーちゃんがね・・・」

「ああ、やつぱり？」

二人ともすぐに納得してくれた。

・・・割と良くあることなのだ。

「またルビーって奴が迷惑かけたの？いい加減にしなさいっていうのよ！」

ちなみに、二人はルビーをなのはの友人と思っている。
なのはがそう言ったからだ。

というよりそう言わざるを得なかった。

親友に嘘をつくのは心苦しいものがあるが、空を飛んで会話をし、しかも魔術まで使う無機物の存在をどう説明しろと？

「にははは、ルビーちゃんも悪気は・・・無いと思うんだ」
「その間は何よ？」

なのはの額に冷や汗が流れる。

頭の中に浮かぶのはいつも楽しそうに『あはあ』と言いながら空を飛ぶ友人で師匠で恩人の姿だ。

「そんなに迷惑をかけられて嫌じゃないの？」

「で、でも友達なの」

「なのは、あんた人が良すぎるわよ？」

呆れているアリサの後ろではさすがコメントに困っていた。

なのははルビーのことが嫌いではない。

むしろ好きな部類に入るが、あの悪戯好きはどうにかならないだろうかと時々思う。

悪いことをしたらちゃんと謝ってくれるし、二度としない。

しかし、ルビーはさらに手を変え品を変えて色々な事をやらしかしてくれる。

やっていることはどれも悪戯の域を超えないし、なのはや他の家族が本当に嫌がることは絶対しないのだ。

その境界線をきちんと把握した上で、デットラインのギリギリまで責めてくるチキンレースを楽しんでいる節もある。

今朝の寝顔暴露にしたって、なのはは恥ずかしかったが他の皆は笑顔だった。

ルビーにはそういった微妙なバランス感覚があるので、憎みきれないのだ。

・・・あれ？それって普通の悪い人よりたちが悪いって事じゃないなの？

「それに未だに紹介もしてくれないし」

「いやゝそれは・・・」

あんな物を紹介したら何が起こるか解った物ではない。

どんなにシミュレートしても、大騒動一択の未来しか予想できないのだ。

「なのは、ねえなのはったらー！」

「ふえ？」

「やっと帰還したみたいね？」

気が付けばアリサがなのはの事を呼んでいたようだ。
意識が軽くあっちの世界に旅立っていたらしい。

「な、何なの？」

「だから、今日の作文のことよ！」

いつの間にか話題まで変わっていたらしい。

アリサの後ろですずかがニコニコ笑っている。

空気を読んでくれるすずかちゃん私の嫁だとなのはは強く思った。

「聞ってるの、なのは？」

「うん、聞ってる聞ってる」

作文というのは今日の授業で出された宿題だろう。

内容は自分の将来について書くこと。

まあ、学生には定期的にあるイベントのようなものだ。

「アリサちゃんはずかちゃんは、もう結構決まってるんだよね？」

「うちは…お父さんもお母さんも会社経営だし…いっぱいちゃんと勉強して、跡を継がなきゃ…ってことぐらいだけど？」

「私は機械系が好きだから…工学系で、専門職がいいなって思ってるけど…」

・・・いや、将来について明確なビジョンを持つことはぜんぜん悪くない。

むしろ良いことだとは思うが、堅実すぎて8歳児のそれではないな
ーとも思う。

親にしてみれば、こんなしっかりした娘を持って安心アンド鼻高々
だろう。

「そういうなのははどうするのよ？」

「うーん、やっぱり翠屋の跡継ぎかな」

あくまで表向きである。

なのはの本当の夢は”魔術使い”になる事だ。
魔術使いになって、困っている人を救いたい。
それがなのはの本当の願いだ。

・・・そういえばとなのはは思い出す。

なのはが魔術を覚えてくれとルビーに言った時の話だ。

「泣いている子がいたら助けてあげたいの」と言ったら、あのルビーが珍しく真剣な雰囲気をもとったのだ。

『なのはちゃん？それは魔術師じゃなくて魔術使いです。とっても難しいことなんですよ？』

「魔術使い？なのはがんばるの！！」

『そうですか・・・正義の為でなく、誰かの涙を止める魔術使い』

ルビーはしばらく悩んでいた。

何をそんなに考えていたのかは、今でもなのはにはわからない。更に子供だった当時は尚の事だ。

『フッフ、やあーっぱりなのはちゃんには才能があつたんですね。よーっし、なのはちゃんががんばるならおねーちゃんがんばっちゃいますよあー』

そう言つてルビーは魔術を教える事を了承してくれた。

『まず初めにルビーちゃんの事はししよーと呼ぶのです』

「はい、ししよー」

『千里の道も一歩から、まずはご町内に愛される魔女っ娘から目指しますよあー』

「なのはがんばるよあー」

そんなこんなで海鳴の魔女っ娘は誕生した・・・あの頃は若かったな〜となのは（8歳）は思う。

その後、何故か桃子が参加してきて衣装のデザインを担当することになった。

自分から名乗り出たらしい。

ちなみに、新しい衣装ができたときには必ずファッションショーと銘打って家族にお披露目する絶対ルールが出来上がっている。

美由希はそんなのはをかわいいとほめた挙句に抱きついてくるし、父と兄は微笑ましく見ているが……最近、なのはもそろそろ何かおかしくないかとは感じ始めている。

自分はひょっとして着せ替え人形的な玩具にされていないか……とか……美由希は高校生だからなかなか乗ってこないし、いやがるけどなのは素直だから……なんて考えたら負けかなと最近になって思う。

ともあれ、魔術で困っている人を助けたいというなのはの根幹にあるのは、ルビーとの出会いだ。

あの日、泣いているなのはの前に颯爽と現れ、父親を癒し、バラバラになりかけていた家族をつなぎ戻して笑えるようにしてくれたルビーに、なのはは今でも感謝している。

……だから自分も……どこかで泣いている誰かを見たとき、その人を助けたいと思った。

その為の魔術だ。

そんな本心を本人に言うのは流石に気恥ずかしいので伝えてはいない。

もっとも本当に伝えたりしたら、ルビーは罪悪感や色々な物に生ま

れてきてごめんなさいするかもしれないが・・・なのはそんな事は知らない。

目の前で泣いている誰かの涙を止める。
それが魔術使いなのはあり方だ。

――――

「ねえ、今日のすずか、ドッジボールすごかったよね」
「うん、かつこよかったよね」

なのはが自分のあり方を確認した放課後、三人は歩いて塾に向かっていた。

塾に向かう停留所から、塾のある場所までは少し歩かなければならないのだ。

三人は体育の授業中のすずかの活躍で盛り上がっている。

すずかはおっとりした外見とは裏腹に、スポーツ方面ではクラスと言つか学年でも頭一つ分ぬきんでた身体能力を持っている。

運動神経の切れているっばいなのはにとっては羨ましい限りだ。

「ああ、こつちこつち。ここを通ると塾に行くのに近道なんだ。」

不意に、アリサがそんな事を言い出した。
指差しているのは公園の中だ。

「えっ、そうなの？」

「うん、ちよつと道悪いけどね」

そう言つて、アリサがさつさと公園の中に歩き出す。

この三人の中で先陣を切るのは大抵の場合でアリサだ。

それになのはとすずかがついて行くのが恒例だが、今回もそれは例外ではない。

「あ、おーいアリサちゃんやないか？」

「え？あ、はやて」

名前を呼ばれたアリサが振り向く。

それになのはとすずかが振り向けば、声の主はすぐに見つかった。

公園の反対側に、自分達と同年くらいの少女がいる。

車椅子に乗っている栗色の髪をショートボブにした女の子だ。

「はにや？」

それを見たなのはが軽く反応する。

名前は知らないが見たことのある顔だったからだ。

しかも、アリサの知り合いらしい。

「誰？」

唯一、この場で本当に彼女を知らないすずかがアリサに聞いた。

「ああ、ごめんね。最近知り合った八神はやて、私達と同年よ」

「はやて言います。よろしゅう」

車椅子で近づいてきたはやてが挨拶する。

「あ、こちらこそ」

「よろしくね、はやてちゃん」

あわててなのはとすずかも挨拶を返す。

「そや、アリサちゃん？また現れたらしいで？二丁目の路地裏で変態から女の子助けたらしいわ」

はやての言葉に、なのはが内心だけで反応する。
その場所と話の内容は、昨日女子高生が豚男を半殺・・・ゲフンゲフン・・・なのはが駆けつけた場所だ。

・・・なのはの背中に冷や汗が流れて鳥肌が立った。

「また人助けしてるの？よく飽きないわね」

「そこが魔法っ娘のいいところやないの？」

・・・なのはの胃がきりきり痛み出した。

これがプレッシャーというものなのかとなのはは学ぶ。

「ねえ、二人とも？一体何の話をしているの？」

話を振ってくれたすずかに、心の親指を立てる。

なのはから話を振れば、どんなぼろを出すか知れない。

何より、自分の噂なんて聞きたいような聞きたくないような・・・。

「すずかも知っているでしょう？魔女っ娘の話」

「ああ、そういえば聞いたことがあるかも」

「私達はその子に会いたいのよ」

「な、なんで？」

軽く引きつりながらもなのは聞く。

「実はね、私二ヶ月前に誘拐されたの」

「えええ!!」

あのいつもおっとりしたさすが、驚きの悲鳴を上げた。

まあ正しい反応だろうが、なのはは驚かない。

何故ならば知っているからだ。

ついでに言えば、その誘拐されたアリサを救い出した張本人がなのはだったりする。

いきなり『キュピーンと来ちゃいましたー』とルビーがニュータイプみたいな事を叫び、気が付けばアリサが監禁されていた場所に行き着いたと・・・助けない理由があるはずもなく、誘拐犯達にガンドを雨あられと叩き込んで殲滅。

連中は心に恐怖を刻まれ、刑務所の中で模範囚になっているような、性格がとて丸くなっているらしい。

なのはの魔術特性は収束、開放、制御、操作など、やたらと放出に傾倒しているため、魔力弾など使った日にはには漏れなくオーバーキル気味になる。

ガンドだって結構上位の魔術なのだが、初級魔術より早くなのはが真っ先に使えるようになったのがそれだった。

・・・本当に規格外な娘だ。

その後、万が一にも正体がばれたりしたら恥ずかしくてしょうがないので、アリサを開放したら逃げるようにその場を離れたのだ。

「そ、それじゃ・・・はやてちゃんも？」

「ん？いやいや、家はそんなお金持ちじゃないよ。うちの場合は図書館で本をとってもらったんよ」

これまたなのはがやった。

だから、なのはははやてに一方的な面識がある。

しばらく前、図書館に行った時の話だ。

なのはは高い場所にある本が取れなくて困っている車椅子の女の子を見つけた。

『ムム、フラグのにおいがしますよー！』

「フラグ？取りあえずお手伝いしてくるね」

それを見て当然手を貸してあげようとして・・・

『まっってくださいなのはちゃん、魔女っ娘が人助けをするときは常に変身してからですよー』

「え？別に変身しなくても・・・あー！ー！！」

・・・な感じでルビーが余計なことをした。

いきなり現れた魔女っ娘に図書館中の視線＋はやての驚きの視線を受けたなのはは頭に血が上り、はやてに本を取ってあげると全力全開全速力でその場を離脱した。

そんな訳で、はやてには初対面だがなのはははやてを知っていると
いう奇妙な状況が完成したのだ。

もつとも、名前を知ったのはついさっきのことだが。

「その魔女っ娘がね、お礼を言う前にいなくなっただけだから探し

ているのよ。そんな訳で色々探し歩いていたらはやてと知り合ったってわけ」

「うん、うちもお礼を言いたいと思って図書館に通ってたんやけど、現れてくれんな」

「にやははは」

アリサはともかく、はやてには悪いことをした。

探していたとしても会えるはずがないのだ。

最近、あの図書館には行っていないからエンカウントしようがない。正体はばれていないと思うが、羞恥心でなのはの心が折れた。

子供に羞恥心がないと思ったら大間違いだ。

魔女っ娘は正体を秘密にしなければいけないとルビーに言われているので、自分から名乗り出ることも出来ないから罪悪感がグサグサ刺さってくる。

『もしもばれたら・・・クククッ』

何故かと聞いたら、きっちり不安になるような部分で話をぶった切ってくれた。

おかげでなのはは怖くて誰にも自分が魔女っ娘である事は言っていない。

知っているのは家族だけだ。

「き、きつと魔女っ娘さんもアリサちゃんとはやてちゃんが感謝しているって伝わってると思うの」

「ん？」

「うーん」

苦しい・・・実に苦しい話だ。

「そんなわけないでしょうなの？」

「流石にそれはちよつとなあゝロマンチックすぎと思うわ」

「ははは、そだね」

・・・嘘をつくのは大変だとなのはは学んだ。

・・・そんな少女達を見る一对のアーモンド型の瞳がある。

その持ち主は人間ではない。

銀に近い灰色の毛並みが美しい猫だ。

自由奔放で移り気、一日の大半を寝て過ごす毛むくじゃらが一つのこと集中してじっと息を潜めているということは実は珍しい。せいぜい獲物・・・主に鼠とかゴキブリを狩る時位の物だ。

そして狩を成功させると彼らはそれを主人に見せる癖がある。

・・・死んだ鼠の死体やつぶれたゴキブリは実に鬱な気分にしてくれること請け合いだ。

そんな愛すべき彼の生き物は、背の低い植木の陰に隠れてじっと前を見て動かない。

まるで監視しているかのように・・・。

『猫さん？私はこう思っているんです・・・』

「・・・!?!」

猫が全身の毛を逆立て、尻尾をピンと立てて解りやすく驚いた。更に振り向いたところで硬直する。

何時の間にか、鋭敏な猫の感覚すらもすり抜けて至近に来ていたのは・・・空中浮遊する杖だった。

しかも微妙に男前な兄貴の幻視が見える。

『幼女はいいものだ・・・と』
「・・・・・・・・」

猫の表情から感情など読み取れないが、それでもあえて言うのなら、猫が杖をここに馬鹿がいるという目で見た・・・気がする。

『彼女達は夢一杯、可能性一杯です。大きい女性をからかって楽しむのもそれはそれで面白いのですが、それとは違ったファンタステイックでドラマステイックを感じませんか？』

クズだ。

ここにいるのは間違いなく外道の眷属だという目で猫は杖を見る。

実に表情豊かで芸達者な猫がいたものだ。

というか津久井ヴォイスを真似るな！！

クーガーの兄貴はそんな逆光源氏なことば言わない！！

「大は小をかねるのか？否、あえて言おう。大が小をかねたらとつても痛いと！！」

・・・世の中の幼女はこいつから逃げるんだーと猫は思った。

なんか色々混じっている。

こいつちゃんと自分の言っていることが理解できているのか？

『もちろん男の子もありですよ』

・・・男の子も全員退避ーと猫は思った。
こいつは真性だとも思った。

『ルビーちゃんのこんな思い、理解してくれますよねえ』さつきからなのはちゃんたちをガン見している同士の猫さん？』

「理解できるか！私は女でロリ趣味はない！！ついでにシヨタ属性もないから！？」

ーザー・ワールド、時は止まる。

『・・・おや？』

ーザー・ワールド、時は動き出す。

『今、貴方しゃべりませんでしたか？』

「・・・ニャー」

人間で言うとかバイと・・・そんな感じの表情を作った猫はそっぽを向き、ワザとらしい猫なで声を上げた。

毛皮がなければならだと汗が流れていたに違いない。

『そういえば、何か猫にしては妙に大きな魔力を持っているようですけど・・・』

ルビーと名乗った杖がプレッシャーをかけて来る。
猫はもう限界だと逃げ出そうとして……。

『はいはい猫さん？』

「……………っ！！」

振り向かなきゃ良かったのだが、既に後の祭りである。

猫の目に映ったのは回転するルビー……その動きに目が釘付けになる。

『カカカ、所詮は畜生！！本能には逆らえないでしょう？さあさあ、遊んであげましょう。さらには首をくすぐって上げますよー、なでなでして欲しかったら洗いざらいはいてしまうが いいのですよぉ』
「……………」

悪魔超人のように笑うお前の方がド畜生だと睨む猫だが、その前足はルビーに向かって一步を踏み出した。

所謂、悔しい！でも遊んじゃう！！な状態である。

目の前には実に猫のつばを突いた動きをするルビー……じりじりと、猫は恍惚とした表情で引き寄せられるかのようにルビーに近づき、その前足から爪を伸ばしてルビーを引っかこうと……。

（助けて……）

『あれ？この声は？』

肉声ではない声が聞こえて、しかも何か聴き覚えを感じたルビーは思わず回転を止める。

「は！わ、私は何を・・・フシャー！！」

正気に戻った猫が、また人間の言葉を発して一目散に逃げる。

『あ、猫さん』

ルビーの呼びかけに、今度は振り返ってたまるかと止まるところか加速して猫は逃げた。

『・・・世の中には変な猫がいるもんなんですわ』

・・・誰かが聞いていれば、お前以上に変な奴なんかいるかと突っ込みを入れていただろう。

そしてその夜・・・。

『え？魔力を持ったフェレット？』

「うん、そうなの」

何でも、ルビーが聞いたあの声をなのはも聞いたらしいのだ。

その時、ルビーは猫に構って見ていなかったが、なのはが声を頼りに探してみれば、怪我をして力尽きていたフェレットを見つけたらしい。

問題はその後、なのはの魔術師としての目は、傷だらけのフェレットからもれている物を見た。

フェレットは魔力を持っていたのだ。

なのはと違って、魔力を見る目を持っていないアリサとすずかは単純に傷だらけのフェレットに驚き、すぐに近くの動物病院に連れて

行った。

その後、急いで帰宅したなのは事の次第をルビーに相談して今に至る。

ちようど夕食時だったため家族も皆そろっているので全員の視線がルビーに集まる。

『それはいてもおかしくありませんよ。ルビーちゃんも今日魔力を持った猫にいましたし、この世界にも吸血鬼なんかがいるくらいですから』

「ぶー!!」

・・・何故か恭也が噴出したが、そこは武人一家。

美由希はひらりと軽く避け、土郎は桃子ごととんだ。

運動神経のないのはと夕食のおかずに関してはルビーが飛んできた物をシールドでそのまま跳ね返した。

おかげで、自分で噴出した物で恭也がダメージを食らってる。

「恭ちゃん、どうかしたの？」

「い、いや・・・何でもない」

妙に拳動不審になっておきながら、なんでもないはないだろうと思うが・・・。

「ル、ルビーちゃん？猫ちゃんはケットシー？」

『デブ猫じゃなかったですね〜長靴も履いていませんでしたし、でもやれば出来るかもしれませんよお言葉をしゃべってましたから』
「そっなんだ〜」

なのはが目をキラキラさせている姿を見てみると実に癒される。
何故、子供というのはこんな風に無条件に癒しオーラを持つのだろうか？

「それにしても言葉をしゃべる猫ね〜ルビーちゃんに関わってから常識って何だろうって時々思うわ」

美由希が苦笑しながら言う。

苦笑で済んでいるあたりが慣れだろう。

それでいてルビーの言葉を嘘だとは思っていない。

まあ、ルビーを見慣れていれば大抵のことは信じるだろう。

「それにしても、この町に吸血鬼？」

『いますよ〜なのはちゃんのお友達のすずかちゃんが吸血鬼じゃないですか？』

「ええ！？」

「何故知っているルビー！？」

トンでもサプライズを喰らったなのはの驚きを打ち消すかのように怒鳴ったのは恭也だった。

『何でって、感覚の目で見れば』

「そんなスタンドを見る感じでわかるもんなのか！？」

『割と』

「割とわかっちゃうもんなだー！！」

恭也がゲシュタルト崩壊を起こしていた。

そんな家族の姿に、女性陣は軽く引いている。

いきなり奇声を上げる人間を前にすれば、正しい反応だろう。

「恭也、知っていたのか？」

「う……その、すまない」

いい加減見かねた土郎が恭也に聞くと、もはや言い逃れは出来ない（ルビーの言葉と自分のリアクションでごまかしは不可能になった）と諦めた恭也があっさり認めた。

『すずかちゃんのお姉さんの忍さんももちろん吸血鬼ですからね』
「……そうだ。月村家は夜の一族と呼ばれる家系なんだ」

恭也の様子から嘘ではないと解る。
というか、仮にも付き合っている相手をこんな冗談のネタにする恋人はいないだろう。

「ル、ルビーちゃん？本当なの？」

やはり信じられないのだろう。
美由希がルビーに聞いてくる。

『ええ、まあ……とはいえ、あそこまで混血が進んでしまうとた
いした力は持っていないでしょう』

「そ、そうなの？」

『そうですね。普通の人よりちょっと運動能力が上がったりする位
じゃありませんか？健康のために日光浴だって出来ると思いますよ』

思い当たることがあるのか、なのはがコクコク頷いていた。

某騎士王を髭髯とさせるリアクションだ。

『もはや幻想種とはいえませんが、血は吸えるかもしれませんけど』

他人を死徒にする力も無いでしょう。ちょっと妙な体質を持った普通の人ですよ」

ルビーの基準では、吸血鬼とは噛んだ相手を食人鬼にするのは当然で、更に体内に666の獣を飼ったり、殺しても転生して死ななかつたり、条件がそろつたら現象として形をとつた拳句に自分の世界を作り出すようなそんな連中だ。

混血にしたって、見ただけで相手を燃やし尽くしたり、もしくは人外の膂力を發揮して素手で人体を破壊するとか、死神の目でも持っていないければ驚くに値しない。

そんな連中と比べれば、忍もすずかも一般の人間の力テグリーの中に入る。

「すずかちゃん・・・」

『言わなかったのは嫌われたくないからですよ、きつと・・・でもこれからなのはちゃんが魔術師として成長していけば、いずれ気づくことですからね、それでもすずかちゃんとお友達でいられますか？』

ルビーの問いかけはかなり突っ込んだものだった。

雰囲気にも他の誰も介入できないが、ここは二人以外の誰も入っていない話ではないと黙っている。

「すずかちゃんは・・・友達だよ。これからも・・・」

『なのはちゃんはいいい子ですねえ、ルビーちゃんとってもいいマスターに会えました』

ルビーがくるくる回りながら飛んで嬉しさを表現している。

聞いていた皆も、なのはの答えにほっとした。
一番安堵したのが恭也なのは言うまでもない。

『それにしても変ですね』

「へ？何が？」

『フェレットの話ですよ』

「あ・・・」

全員が思い出した。

もともとはのが見つけたそのフェレットが問題だったのだ。

『もー皆さん駄目ですよーわすれちゃ、メ！』

原因は多分にルビーに有る気がするのだが・・・これ以上脱線するのはアレなので口を噤む・・・後で覚えてるよと視線に思いを込めた。

『なのはちゃんの才能ってかなり偏っているからすずかちゃんの正体に気づかなかったのはまあ仕方ないです』

「うっ・・・」

なのは涙目、そろそろ恭也が小太刀を取り出し始めた。

『そんななのはちゃんに解ったくらいですから、そのフェレットの垂れ流しになっている魔力は結構多かったはずなんですよ』

「え？あのフェレット君が？」

『何者なんでしょうね、そのフェレット？』

何か起こりそうな気がしますよーなどと言いながら、ルビーは内心ときどきわくわくしていた。

しかし、何も起こらなかったとしてもそれはそれで問題ない。
何も起こらなかったら無理やり介入して何かを起こす。
それがルビークワリティー。

『しかし、この時はまだ誰も・・・ルビーちゃん本人さえ、あんな
結末になることなど予想してなかったのですマル』

「ルビーちゃん？何イミフなこと言ってるの？」

『最近推理物にはまっているんですよ』

「へーそれってじっちゃんの名に懸ける方？それとも真実は一つの方？」

『あえて言うなら古畑さん一択で』

「ああ、何かとっても納得出来たの〜」

アレも結構腹黒だから？

第三話 トラブルのヨカン（後書き）

両作品のすり合わせが難しいですね〜ギャグ方向なのでなおのこと難しいのか？

第四話 見よ、これが真戸律九素だ！！

「こ、これは・・・」

『うーん、どうにも手遅れっばいですね。南無南無』

「そんな悲しい事言わないでなのー！！」

なのはとルビーが並んでみている先ではとんでもない事になっていた。

町で唯一の動物病院、楨原動物病院の一部がダンプカーのぶちかましを受けたように崩れている。

「やっぱり、あのフェレット君が原因かな？」

なのは達がここに居るのは偶然ではない。

問題のフェレットの事は、明日にでもルビーに見てもらおうという事でさあ寝ようかとしたら、二人同時にあの声を聞いたのだ。

しかもどうやらSOSっぽい状況らしいので、駆けつけてみればこの有様。

明らかにフェレットのせいですありがとうございます。

病院の先生達にはご愁傷様である。

『あつちでマトリックス避けしているのがそうじゃないですか？』

「マトリックス避け！？」

見れば、黒い毛むくじゃらから逃げている赤い玉を首輪につけたフェレットが一匹、その柔軟性を遺憾なく発揮し、のけぞったり飛んだりと機敏な動きで毛むくじゃらの触手攻撃をよけている。

その姿、まさにマトリックス!!

とはいえ、ぜんぜん余裕があるようには見えない。
むしろ現在進行形でアレは泣いているのか？

『ウム、アレこそまさに真戸律九素!!』
マトリックス

「ネタにネタを被せてないで助けなきゃ!!」

『なのはちゃん、突っ込みは愛ですよ』

具体的には知っているのか雷電!?!とか？

そんなのはぜんぶまるっと無視して、なのはは左手を銃の形にして構える。

「れ、霊丸!!」

ズドンな感じでなんか出た。

黒くて丸い魔力の塊だ。

バスケットボールくらいの大きさがある。

本当はガンドと言っらしいのだが、ルビーはあえて霊丸で一つと言っていたので霊丸で正しいのだろう。

そんな感じでドスンとか言う音と共に毛むくじゃらは弾き飛ばされた。

その隙になのははフレットに駆け寄る。

「来て・・・くれたの? って今の何!? デバイスも使わずに攻撃魔法!?!」

「黙ってて!!」

「は、はい」

なんか小動物がしゃべっているが、おしゃべり機能なんて珍しくもないんだからかまっちゃいられない。

むしろうるさくて気が散るから黙ってるな感じた。

・・・それが一般的にどうなのかは知らないが、少なくとも目の前で見事な三角飛びを決めて襲い掛かってくる毛むくじゃらの対処より必要性は高くないだろう。

こっちはリアルに命に関わる。

このあたりの論理的な思考はルビーに実践込みで教えられた。伊達に魔女っ娘なんてやっていないのだ。

『あはあゝ私、参上！！ルビーちゃんの強さに貴方が泣きましたゝ！！』

そして、そんなのはを守るの是一本の杖、愉快型魔術礼装のカレイドステッキ。

『オーバー・ソウル！！宿れ、眼帯禿！！大河ーアパカ！！』
「ゴオオオオ！！」

いきなり魔力を纏ってアップーの軌道を取ったルビーが毛むくじゃらの顎をクリーンヒットする。

『ふははは！！仮面ナルシストのひょーは対空技の餌食になる運命なのでーす！！』

せめて技名くらいは言ってやればいいものを・・・マイナーなんて忘れたか？

「す、すごい・・・マスターの手を離れているのに魔法を発動させているインテリジェントデバイス!？」

「え? インテル入ってる? ルビーちゃんそんなに頭いいのかな? それはともかくフェレット君!？」

「は、はい? ああ、そうだ! ! 僕はある探し物の為に、ここではない別の世界から来ました。でも、僕一人の力では想いを遂げられないかも知れない。だ、だから・・・迷惑だとは分かっているのですが、資質を持った人に協力してほしい・・・」

フェレットは気づいていない。

なのはが笑顔で自分の胸を鷲掴みしていることを・・・。

「資質?」

「御礼はします! 必ずします! 僕の持っている力をあなたに使ってほしいんです! 僕の力を・・・魔法の力を! ! ! って何で持ち上げるんです?」

「そんな事は今はどうでもいいなの」

「え?」

そのままオーバースロー気味に腕を回し。

全力全開で体のばねを使って・・・。

「え? ええ?」

「ごめんね、邪魔だから! ちょっとあっち行っててなの! !」

「なあー! ! ! ! !」

慈悲も何にもなく投げた。

足元でちよろちよろしていたら踏みつけてしまうかもしれない。毛むくじゃらは明らかにフェレットを狙っている。

守りながら戦えないなら強制的に逃げてもらうしかないだろう。
この辺の割り切りは、きつちり魔術師なのはだった

「マトリックス避けをしていたくらいだから多分大丈夫なの!!っ
と言っ訳で問題なし!!行くよルビーちゃん!!」

『そんなのはちゃんが素敵に大好きです!!』

なのはがルビーを手に取る。

「『変身』」

そしてお約束の変身シーン、服が分解されるように消えて、新しく再構成される。

無駄にキラキラしたエフェクトが乱舞した後には、なのはの姿が一変していた。

『いよいよ格闘魔法少女デビューなのですね』

「ル、ルビーちゃん? だからってこれはちょっと違うと思うんだけど?」

なのはの姿はチャイナ服だった。

しかも青、ご丁寧な髪は左右で団子に結ってある。

元ネタは推して知るべし。

『チャイナなのはちゃん 爆 誕!!』

「うっ、恥ずかしいの・・・」

当然、横のスリットが深い。

しかも黒のストッキングに両手足首には棘の付いた腕輪に足輪。
確かに動きやすくはあるが・・・。

「も、もういいの！！早く終わらせちゃえば大丈夫！！その動物さん！？」

その言葉に、毛むくじやらがびくつと身を震わせる。

なのはの殺る気・・・もといやる気におびえているのか？

それを見たなのははにっこり笑って・・・。

「誰かに見られると恥ずかしいし、ご町内の平和の為に倒すの、お話出来なさそうだから答えは聞いてないの！！」

そんな死刑宣告を聞いた毛むくじやは、いきなり背を向けて逃げ出した。

本能的に目の前にいるのがどれだけヤバイかを悟ったらしい。

『毛むくじやは逃げ出した。しかし回り込まれてしまった』

毛むくじやらの頭を飛び越える形で、なのはが前に降り立つ。

基本的に運動が苦手なのはだが、持ち前の強大な魔力により体に強化の魔術を付加したらプロレスラーだって真正面から力で圧倒できる。

しかも、だからどうしたというわけではないがチャイナでもある。

「えい！！」

更に、急には止まらない毛むくじやらにカウンターで距離を詰め、五指を開いた手で喉輪を決めると反動で毛むくじやらの体となのはが浮く。

流れるように真下の地面に投げ落とした。

「ギャフー!!」

コンクリートに背中から叩きつけられた毛むくじゃらが悶絶する。
受身すらとりようがなかった。

「今時の魔女っ娘に格闘術は必須科目なの!!」

それはアカイアクマかアオイアクマ理論だ。

そんな間違った認識はルビーが教え込んだに違いない。

「ごめんなさい、でもこれって戦争なのよねなの」

言いつつ、開いた左手を毛むくじゃらに向けた。

その五指の指先には全て、ガンドの魔力が宿っている。

なのはは躊躇なくその全てを開放した。

高町なのは、やるときはやる女の子だ。

『・・・さて、どうしましょうかね?』

ほとんど一瞬で決着の付いた戦闘は、地面に倒れている毛むくじゃらが証明している。

だが、遠足が家に帰り着くまでと同じように、重要で面倒なのは何時でも後始末だ。

差し当たったの問題は死んではないようだがピクピク痙攣している毛むくじゃらをどうしたもんかである。

明らかに魔力を宿した生き物なので放っては置けない。

「あ、あの〜」

『「ん？」』

声に振り返れば、なのはに投げられたフェレットが戻ってきていた。

「そ、その生き物はジュエルシードって言うものから生み出されていて、封印しないととても危険なんです!!」

「封印って・・・どうやって？」

「こ、これを・・・」

そう言ってフェレットは器用に前足を使って首から下げていた赤い玉をはずして差し出す。

『あれ？それって・・・』

「知っているの、ルビーちゃん？」

『昨日、夢で見ました。ああ君があ・・・』

「お、御礼は必ずしますから」

詳しく聞こうとしたのはだが、フェレット君の必死な訴えに話がそれた。

横目で見ると、毛むくじゃらが何とか這って逃げ出そうとしていたので、なのはが指差してみると死んだふりして動かなくなる。

魔力も何もこめてはいなかったが、どうやら反骨精神ごとプライドとか色々な物をへし折られているらしい。

「御礼とか、そういう問題じゃないんだけど・・・ほっつても置けないよね、どうすればいいの？」

「これを！」

フェレットがなのはの手に赤い玉を握らせた。

「それを手に、目を閉じて、心を澄ませて、僕の言うとおりに繰り返して」

なのはが、一応伺いを立てるようにルビーを見た。
それに対してルビーは頷く。

「うん、わかったの」

「ありがとう!!」

なのはは赤い玉を受け取って言われたとおりに目を閉じる。

「我、使命を受けし者なり」

「わ、我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「えっと、契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は・・・」

「そして、不屈の心は・・・」

「この胸に!!」

赤い玉から光が放たれる。

発光しているのは魔力の入りだ。

「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ!!」
『stand by ready, set up』

電子音が響いた。

同時になのは足元に魔方陣が展開され、桃色の魔力が放出される。夜の町を真昼のように照らす光に、なのは自身がビクリしていた。

「な、なんて魔力だ……はっ、落ち着いてイメージして！君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を！そして、君の身を護る強い衣服の姿を！」

フェレットが色々言っている。

しかし、なのはが展開に付いてこれるかどうかは別問題だ。

「そ、そんな……急に言われても……え、えっと、え」と、
・と、取り敢えずこれで！」

どうやら服のデザインは決まったようだ。

同時に、なのはの姿が光の中に消える。

赤い玉が巨大化して、金属製のパーツが何処からともなく現れて接続される。

瞬きほどの時間ではじけたそこには、再び姿を変えたなのはがいた。

「成功だ！」

『間違っている……間違っているぞ、高町なのは！！』

「ええええ！？」

ルビーにゼロ風なダメだしを喰らった。

フェレットがびくりしている。

今のなのはの姿は、通っている聖祥大附属小学校の制服……細部はいじってあるが、ほとんどそのまんまだ。

『違うもん違うもん！・・・こんなの魔女っ娘じゃないもん！もつとフリルとか、かーいいのじゃないとヤダモン！！』

「そ、そんな幼児化してまで嫌がることかな！？だ、だってとっさにこれしか思い浮かばなかったんだから仕方ないよ！！」

『魔法少女がそんなことでいいと思っっているのですかなのはちゃん！？そんな大人、修正してやる！！』

思ったより、なのはルビーや桃子に毒されてはいなかったらしい。それは多分良いことだろう。

「そ、それよりも封印を！！」

「は、ナイスフォロ―だよフェレット君！！」

『つち、余計な事をこの小動物！！せっかくなのはちゃんの再教育を強引に押し切つて了承させようとしたのに！！』

「ルビーちゃんちよつと怖いから！！」

右と左の温度差にフェレット君が涙目になっていた。

この二人は仲間じゃないの？

「ええつと、僕らの魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です！！そして、その方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです！！そしてあれは、忌まわしき力の元に生み出された思念体。あれを止めるには封印して元の姿に戻さなきゃいけないんです！！」

何か少しやけっぱちになったっぽいフェレット君が一気にまくしたてる。

これ以上脱線して欲しくないという思いは十分に伝わってきた。

「そんなに一杯一度に言われてもわからないよ」

「攻撃や防御などの基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要なんです！」

「呪文？」

「心を澄ませて、心の中にあなたの呪文が浮かぶはずです」

「ああ、それなら簡単だよ」

呪文なら知っている。

いつも唱えている起動キーとイメージ。

「リリカル、マジカル・・・」

そこから更に頭の中に呪文が浮かんでくる。

どうも、赤い玉がなのはの頭に呪文を送り込んでいるようだ。簡単にこんなことが出来るあたり便利なものだ。

掲げた杖に魔力がこもってゆく。

「封印すべきは忌まわしき器！ ジュエルシード！・・・あ！」

「い？」

「う？」

「ギャワン！！」

杖から極太のビームがドーンと放たれ、ズキーンと来てズドンと未だに死んだふりをしていた毛むくじやらに容赦なく命中する。毛むくじやらは跳ねるようにして愉快的悲鳴を上げた。

『な、なのはちゃん？さ、流石に五体投地で無抵抗の相手にこの仕打ちはドン引きですよ？』

「ち、違うの！いつもどおりにしたただけなの！！」

『いつもどおりって、あの大砲の？』

「そ、そう」

『明らかにそれが原因です』

「はにゃー！！違うもん違うもん、なのはそんな外道さんじゃないもん！！」

今度はなのはが幼児化した。

「で、でも封印は出来たようです！！」
「え？」

フェレットの言葉にいやいやと頭を振っていたなのはの動きが止まる。

見れば菱形の青い宝石のような物体がうかんでいた。

「ジュエルシードの本体です！杖で触れて封印を完了してください！！」

「わ、わかったの。ジュエルシード！、封印！」

『sealing mode、set up』

なのはは言われた通りに杖を近づけた。

『standby、ready』

ジュエルシードに？？？のナンバーが浮かぶ。

「ジュエルシード！ シリアル21！ 封印！」

『sealing』

光と共に、杖の中にジュエルシードが吸い込まれて消えた。
どうやら無事封印が完了したらしい。

『さて、逃げましょうか？』

感慨にふけるまもなくルビーがそんな事を言った。

耳を澄ませば、遠くからサイレンの音が近づいてくるのが聞こえる。なのははフェレットを掴むと、強化の魔術で体を強化して駆け出した。

魔女っ娘にだって勝てない物は存在する。

国家権力とかはその最たる物だ。

「ご、ごめんなさいなのー！ー！！」

赤いイマジンっぽい、ちょっと情けない声をドップラー効果で置き去りにするほどの速度でなのはが駆ける。

その姿、まさに全力全開。

その十分後。

『被告人、名前は？』

「ボ、ボクハユーノ・スクライアデス」

フェレット改め、ユーノ・スクライアは高町家のダイニングテーブルで、フェレットの体で器用に正座して震えてていた。

向かって右に桃子と美由希、左に思いっきり睨みを利かせつつ殺気をぶつけて来る土郎と恭也・・・そのおかげでユーノは金縛り状態で正座を崩すことも出来ない。

そして背後におろしているなのはと・・・。

『はい、ではこれから裁判をはじめますよぉ』

正面で裁判官の木槌宜しく、自分の体でテーブルを叩いているルビ
ィ。

深夜にもかかわらず、高町家の居間で間違はなく人類初のフェレッ
トを被告人にした裁判が開催された。

第四話 見よ、これが真戸律九素だ！！（後書き）

ストーリーの方向性が決まりました。

それに次いでタイトルと各話のタイトルを少し変えようと思います。

リリカルとマジカルの運命交差Ⅱリリカルとマジカルの全力全壊

1～3話までは考え中、次の更新までには変更していると思います

第五話 ユーノ・スクライアの後悔

彼、ユーノ・スクライアは考える。

なんでこんなことになったんだろうか？と・・・。

彼は発掘で生計を立てるスクライア一族の出だ。

両親はいないが、自分を育ててくれたスクライアと名乗る者達全てが家族だと思っている。

そんな彼が、最近遺跡から発掘したものこそジュエルシードだった。青く輝く美しい宝石の姿をしたそれは、今は滅んでしまった魔法文明の産物、所謂ロストロギアと呼ばれる代物、手にしたものに幸運を呼び、望みをかなえる力があると言われているが、その代償に持ち主から様々な物を奪い、場合によっては次元震さえ引き起こすと言う危険な物だった。

それを管理封印するため、時空を渡る輸送船で移動させていた所、船が謎の事故を起こしてジュエルシードが封印を開放された状態で放出されてしまった。

落ちたのは第97管理外世界と呼ばれる、異世界の存在すら認知されていない世界。

本来ならば地の底で永遠に眠っているべき物を、再び日の当たる場所に出してしまった負い目と責任感から、発掘者として船に同乗していたユーノは単独でジュエルシードの探索に向かった。

問題の世界に魔法はない。

魔法の存在を知らない世界の人間がジュエルシードの引き起こす災害に対して適切な対応など不可能だと思ったからだ。

・・・のだが、ユーノの当初の予想は悉く裏切られることになる。

まずいきなり死にかけた。

一個も封印できずにである。

このままでは死ねないと、ジュエルシードを放つては置けないという思いから、念話で助けを求めたら、幸いにも魔力を持っている少女が駆けつけてくれた。

・・・そこから、またユーノの予想と言うかそんなものの初めからあったのか？とも思うが、とにかく何もかもが予想外だった。

呼びかけにこたえてくれた少女は、邪魔だからと自分を全力投球するほどバイタリティーにあふれた人物だったのが最初の誤算でそれは次々に連鎖する。

何より一緒にいる杖・・・初めは自分達の使うインテリジェントデバイスと同じものかと思っていたが、後で聞くとなんでも魔術と言う魔法とは違う技術の産物らしい。

魔法がない世界と思っていたが、独自の技術体系と理論が存在したということには素直に驚いた。

何でも、魔術の使い手たちは皆引きこもりで、^{ニート}社会不適合者の連中が多いから表に出てこないらしい。

それが今まで知られなかった原因だろうか？

そして杖の正体は本人曰く、彼らが作った礼装と呼ばれるマジックアイテム、中でも最高傑作に数えられるものの一つらしいのだが・

・これに関しては悪いがうそ臭いと思う。
思わざるを得ない。

そもそも、製作者は何であんな性格の人格をインストールしたのか
と言うところから疑問だ。

ともあれ、紆余曲折あったが・・・何とか一個目のジュエルシード
を封印することに成功し、そして現在・・・部族の皆、育て
てもらったのに罪を問われるような僕でごめんなさいな状況になっ
ていた。

ユーノは全然真逆の空気に挟まれて正座した状態で・・・今まさに
裁かれようとしている。

桃子と美由希は深夜に叩き起こされたと言うのに眠そうな気配はな
い。

「か、かわいいわ」

「まさかリアルでいるなんて感激!!」

むしろ正座しているフェレットの姿に、うつとりしている。

しゃべる小動物など、耳の大きなネズミさんの世界にしか存在しな
いと思っていたので感動しているようだ。

士郎と恭也は、深夜にいきなり叩き起こされたというのに、こっち
も眠気など微塵も感じられない。

と言うか言葉をしゃべるとはいえ、小動物に殺気フェレットのこもった視線を
向けて来るといふのは大人気なさ過ぎだ。

ユーノは・・・生きて帰れるのか？

「ユーノと言ったな？お前のせいでなのはが危ない目にあつたのか？」

口火を切つたのは恭也だった。

とっても平坦な声で聞いてくる。

「は、はい・・・申し訳」

「死刑だな」

「それ裁判じゃない！！」

思わずユーノは言い返していた。

確かになのはを巻き込んだことは言い訳のしようもないし、悪いとは思うが罪を認めた時点で弁護なんていらんとばかりに死刑が確定する物を裁判とは言わないだろう。

ごくごく自然に小太刀を抜きにかかる恭也にユーノがおびえ、本能的に桃子と美由希に助けを求めてしまったのは仕方がない。

女性に助けを求めるのはどうかと思うなかれ、この場にいる男は全てユーノに対して殺気を向けている。

残りは（女性×3）+杖^{ルビー}。

つというかルビーに期待するのは自爆行為だから助けてくれそんな人間^{ルビー}女性の公式が成立する。

ユーノは本能的に母性を感じる桃子に向けて飛ばうとして・・・。

「・・・え？」

いきなり目の前に現れた鏡に急停止する。

妙に細長い鏡だ。

しかも形が刀？

「って本物の刃物！？」

「何処に行くつもりだったんだいユーノ君？そっちには妻と娘がいらないよ？H a h a h a」

振り返ってみれば、ジヨジヨ立ちでゴゴゴと威圧している鬼が二人。アメリカ人のような笑いをしても騙されはしない。目がマジだ。

「お兄ちゃん、お父さん待つてなの！なのはは大丈夫だよ！！」

「・・・命拾いしたな？」

言いつつ小太刀を納める恭也だが、その目は未だにユーノの命を狙っているのがはっきりとわかる。

視線で金縛りになっているユーノはがたがた震えることしか出来なかった。

「しかし、ジュエルシールドか・・・」

恭也とは対照的に、大人の余裕を見せているのが士郎だ。

流石は一家の大黒柱・・・さっきノーモーションで小太刀投げつけたけど。

「恭也、ユーノ君を責めるのはかわいそうよ？こんなにかわいいのに」

実際問題として、ユーノがこの件に関して何らかの罪に問われるか

といえばそれはない。

船が事故を起こしたことは船長の責任だろう。

誰かの意図があったとしたら、それは実行した当人の責任のはずだ。

「う．．．母さん、しかし．．．なのはが危険なことに巻き込まれているんだ」

ユーノが罪に問われるとすれば、一般人を巻き込んでしまったという事．．．そして、その一点だけが恭也は許せない。
何故ならばシスコンだから！！

「ごめんなさい！！」

いきなりの謝罪に、全員の視線が集まった。

ユーノがテーブルに頭をこすり付けている。

「なのはちゃんは必ず守ります。だからもう少し、僕の魔力が回復するまで！そうすればもうご迷惑はおかけしません！！」

「返り討ちにされた分際で勝手なことを．．．「恭也」．．．親父？」

気が付けば、士郎が神妙な顔をしている。

ユーノから視線をはずし、なのはを見た。

「なのははどうしたい？」

「わ、私ユーノ君のお手伝いがしたい」

「なのは！」

恭也が声を荒げるが、士郎はなのはを、なのはは士郎を見たままだ。自分はお呼びでないと感じた恭也が押し黙る。

「私の魔術で人を助けられるかもしれないの、お願いお父さん」

なのはは本気だった。

こうなるとなのはは頑固だし、魔術で誰かを助けることはずっとなのはの目標だった。

その機会が訪れたならば、この妹は引き下がらないだろうと、恭也と美由希が士郎を見る。

士郎なのはの決意を聞いて、少し考えた後でまた別の方向を見た。

「ルビーちゃんはどう思う？」

次に士郎が意見を求めたのはルビーだ。

「私ですかあ〜？」

「私達は皆魔力とかそういうことに関して素人だ。専門家の意見が聞きたい。それになのはが関わることになれば、ルビーちゃんに頼らざるを得ない」

正論だ。

なのはが関わろうとしていることに対して、ルビーの存在は欠かさない。

問題はルビーを信用して良いかどうかということだが・・・いつもは色々問題行動が多いが、本当に大事なことはわきまえている・・・はずだ。

『そうですねえ〜まず何もしないという選択肢はないんですよ。残念ですけどお〜』

恭也が睨むがルビーは気にしない。

一つ一つ紐解くようにして説明を始める。

まずはあの毛むくじやら・・・あっさり倒しはしたが、それはルビーとなのはが対応したからだ。

放置しておけば一般人にも被害が出ていただろう。

最悪死人が出ていた可能性も否定できない。

そんな物が後20個もこの町には散らばって在るのだ。

『止められる力を持っていると知っていて何もせず、放って置いて被害が出たら寝覚めが悪くてしょうがないでしょう？なのはちゃんのトラウマになっちゃいますよ？』

「う・・・しかしなのはが無茶をすることは・・・」

『この件に関して、この世界になのはちゃん以上の適任がいるとも思えません』

魔術も魔法も超常の力の発露だ。

魔術師も魔導士もないこの世界では、対抗できる能力を持っている人間はほんの一握りだろう。

あるいはなのはだけかもしれない。

そんななのはのいる町に、ジュエルシードが降り注いだのはまさに奇跡的な幸運なのだ。

『それにルビーちゃんじゃ封印は出来ませんから、レイジングハートも必要ですし』

『Thank you』

魔法と魔術はその根本からして違う。

ルビーではあの熊モドキのような奴を倒すことは出来てもジュエルシードを封印できない。

破壊する事なら出来なくもないかもしれないが、ユーノの話を聞く限り、壊すとしてもない事が起きそうなのだ。

つまり、安全に封印するためにはレイジングハートが必須と言う事になる。

『結果論ですけどユーノ君のおかげで被害を最小限に納められそうです』

予想の斜め上に行く逆転無罪、ユーノがルビーの背後に後光を見ている。

だまされるな、それは孔明の罠だ！！

『・・・ってなんですか？皆、目玉焼きのような目でルビーちゃんを見て』

気が付けば、全員丸い目をしてルビーを見ていた。
解りやすい驚き方だと思う。

「ルビーちゃんが頭良く見える」

「何時の間にインテル入れたの？」

「いや、そこはインテルじゃなくてインテリジェントデバイスですって・・・」

『フッフ、ルビーちゃんは最高クラスの礼装なんですよーこのくらい朝飯前です』

「何でそれがいつもは出ないんだ？」

『そっちの方が楽しいからです』

・・・ルビーと話していると時々頭痛を感じるのは何でだろうか？と全員が思った。

例外は桃子。

しかも、ウィットに富んだ愉快型魔術礼装ジョークと思うなかれ、全部本気だ。

「とにかく、そういうことならなのはにがんばってもらうしかないだろう」

「なのはがんばるの!!」

「でも無理だけはしないでくれよ？ルビーちゃんもなのはを頼む。俺達に手伝えることがあれば手伝うから」

『喜んで』

恭也はまだ納得していないが、それでも仕方がないと理解はしてくれたようだ。

「皆さん、ありがとうございます!」

テーブルの上のユーノが深深と頭を下げた。

『でも調子に乗っちゃ駄目ですよ』

「え？」

ユーノが顔を上げれば、いつの間にかルビーがジョジョ立ちもしていない・・・出来ないくせに目の前でゴゴゴしていた。

『なのはちゃんは簡単にはあげませんからね?』
「はにゃ?」

名前が出たなのはが首をかしげる。
どうやら意味が解っていないさそうだ。

それもまあ当然で、言葉を話せようがフェレットなど恋愛対象のラ
ンク外だろう。

「あらあら、ルビーちゃん?それは士郎^{おじ}さんの立ち位置よ」

「も、桃子?俺は子供の恋愛を邪魔するような物分りの悪い父親じ
やないぞ?うん」

士郎が冷や汗を垂らしながら、物分りのいい父親の図になろうとし
ている。

わかりやすい反応だが・・・おいしい、笑顔が引きつっていた。

『ルビーちゃんの乙女回路が訴えるんですよ』将来、すらっとした
インテリ草食系ナイスガイに成長する気がするのです。要注意です
よ』

「あらあら?それじゃあ、ルビーちゃんはどんな男の人ならなのは
に相応しいと思うのかしら?」

『え?そうですね』シロウさんレベルの人がいれば文句はないんで
すが・・・』

「え?おいおい俺か?」

反応し、照れているのは高町さん家の士郎さんだった。

まあ、女の子の父親なら一回は通る道だろう。

そして十年も経てばウザイとか言われて敬遠されたりするのだ。

『ああ、士郎さん違いですよ』ルビーちゃんが言っているのは衛宮

士郎さんの事です』

「誰かなそいつは？」

一瞬で士郎が狩人の顔になった。

一体何を狩るつもりが目なんだそれは？

『シロウさんは”剣”です』

「剣？」

『そのまま、折れず曲がらず。愚直に理想を追い続けた人です』

ルビーがいつもと違う！？と全員が思った。

何か良い話をしそうなので黙って聞く。

『唯、誰もが笑顔でいて欲しいと・・・そんな思いを持って戦い続け、道に迷い・・・己すらも殺したいと絶望した不器用な人・・・』

重い話だ。

そして、その衛宮士郎は実在した人間なのだろうとなんとなく理解した

「・・・ルビーちゃん、そのシロウさんは・・・幸せになったのかい？」

聞いたのは士郎だ。

同名と言う以上に、シロウの生き方に何か感じるものがあつたのかもしれない。

『ええ、長い・・・心さえも磨耗するような本当に長い旅の果てに、シロウさんは答えを得ました。誰もが笑顔でいて欲しいというつくしい願いに憧れ、追い求めたのは間違いではなかったと・・・』

・そして」

「そして？」

『実はルビーちゃん、おいたが過ぎてシロウさんに完全封印されうになつてこの世界に来たんですよねえ』

「」「」「全部ぶち壊しだ（よ）！！」「」「」

・・・途中まではいい話っぽかったのに。

『あのときのシロウさんはまじめに怖かったです』

話から人格者っぽい人物をそこまで怒らせるとは、一体何したんだこいつ？

「でも大丈夫ですよ。おかげでルビーちゃんデッドラインの重要性を勉強しました」

実に嫌な意味で学んでやがる・・・だからこいつは忍耐力のギリギリまで掘削機のように削ってくるのかと合点が行った。

最後までシリアスを維持できない。

しかもかなり重要なサプライズまでつける。

それがルビークヲリティー。

『それにですね、シロウさんは背中ポの使い手です』

「せ、背中ポ？」

皆で顔を見合わせるが、誰も聞いたことがないらしい。

『ルビーちゃん的にはナデポ・ニコポを超えるレボリユーション！

「ただその広い背中を見せて一言！……付いて来れるか？」と言われたら男でも惚れますよ！！」

「そ、そうなんだ」

『あの技を使える人はシロウさん以外に知りません！！』

なのはが圧倒されている。

ルビーが乗りのりで熱く語っていた。

ここまで調子に乗っているルビーは、付き合いの長いのはもあまり見たことがない。

――――

……さてと。

表面的にはフザケながらも、ルビーは内心で考えていた。

テーブルの上に目立たなく置かれている騒ぎの元凶……ジュエルシードナンバー21。

……運命を感じずにはられません。

持ち主の願いをかなえる……持ち主の代償を引き換えに……運命という物は世界が変わってもつき纏うものなのか？

……一筋縄ではいきそうにないですね。

そんな気がする。

皆には言っていないが、ジュエルシードははっきり言ってヤバイものだ。

ルビーにはそれが解る。

なのはがそれに気づいていないのだから、他の誰もこの宝石の本当の危険性には気づいていない。

いや・・・発掘者であるユーノは知ってはいなくてはおかしいか？・・・しかし、ルビーが黙っているのと同じ理由で真実を言い出せないに違いない。

なのはがこれからやることは、例えるなら時限爆弾の解体に近いだろう。

士郎と恭也はなのはにそんな事をさせるのは絶対反対するのが目に見えている。

だが、やらなければもっとひどいことになる。

まるでシロウのあの悲劇のように・・・。

トラブルメーカーでトリックスターであるところのルビーは楽しいことが大好物だし、場を引っ掻き回すのが好きだと思われる。

はつきり言おう、それは実に正しい。

だからこそ・・・悲しみしか残らない、どんなに時間がたっても笑って思い出せないような”本当の不幸”は大っ嫌いだ。

・・・少し、布石でも打っておきますか。

だから取り得る限りの手を使って不幸の芽を潰す。

誰にも知られず、あるいは何もかもひっくり返して涙のエンディングをいつか懐かしく思い出せるような笑い話に作り変えてしまう。

不幸を幸福に・・・。

悲劇を喜劇に・・・。

泣き顔を泣き笑いに・・・。

その為なら損得を超え、善悪を度外視する。

それが道化師の持つ唯一絶対のプライドにして存在意義。

だから・・・。

『なのはちゃん？レイジングハートを貸して下さい』

「え？」

なのはが首をかしげながらも、レイジングハートを差し出す。
待機状態のレイジングハートがフヨフヨと浮いてルビーと同じ高さ
で静止する。

レイジングハートに自分で動く機能はないからルビーの力だろう。

『宜しく願いますね、レイジングハート？一緒になのはちゃん
を守りましょう』

『Of course』

突っ込みつかれてぐったりしていた全員がビックリして飛び起きた。
他の連中も・・・出会って数時間しか経っていないユーノもまとめ
てルビーから距離をとる。

「ル・・・」

『ル？』

「ルビーちゃんが壊れちゃったのー！！」

その日一番の金切り声だったのは言うまでもない。

「お、お父さん！ルビーちゃんが・・・ルビーちゃんがなんかおかしいよー！」

「ま、待ちなさいなのは、いつものルビーちゃんがおかしいのであって、今のルビーちゃんのほうがまとも・・・だからおかしいのか？」

愛娘に抱きつかれた土郎が、哲学的になんか好き勝手言っている。他の面子は初めて珍獣を目にしたかのように警戒していた。

・・・確か何年も一緒に過ごしてきた家族の設定だったはずだが？

『皆さんちよつと失礼じゃないですか？親しき仲にも礼儀ありですよ？プンプン』

いや・・・むしろ日ごろの行いがどれだけ重要かと言っている見本だと思う。

逆に言えば、日常でルビーがどれだけとんでもない事をやらかしているかと言つ証明にもなる。

『所でレイジングハート？』

『What?』

『ちよつと改造していいですか？』

ストレートにとんでもない事を言い出したルビーの言葉に音が消える・・・所詮、ルビーはルビーだということ。

『マ改造、あそゝれマ改造』

『Help!! Help me!!!』

『良いではないか良いではないか』

『Noooooooooo!!!』

そんなの関係ねえとルビーはレイジングハートを子牛の如く連れてゆく

ルビーと違って自分だけでは身動きする術を持たないレイジングハートは抵抗できない。

ドナドナドナドゥナ。

「無茶しないでええええ!! レイジングハートは精密機械なんだあああ!!」

元マスターのユーノの悲痛な絶叫は正しいとおもう。

『ウホ、良い反応』高町家の皆さんは皆なれちゃってなのはちゃん以外はなかなかそんな良い反応を返してくれないですよ』

これだから確信犯は・・・ド級のSめ!!

「だ、大丈夫だよユーノ君。ジュエルシードの封印はレイジングハートにしか出来ないんだし、ルビーちゃんだってわかっているから壊したりはしないよ」

ユーノをなのはが慰める。

ルビーのやることに一々まともに相手しては埒が明かないことを知っているのだ。

「ほ、本当に?」

ユーノがフェレットのつぶらな瞳で訴えてきて、なのはとっさに顔を背ける。

このままだと、8歳で何かに目覚めてしまいそうな可愛さだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・きつとね」

「沈黙が長い!!」

『まずはなのはちゃん衣装をもっとエロ格好良く、略してエロカッケーな感じにするとところから始めましょう』

ビシリと何かが固まってひび割れる音がした。

音源はなのはだ。

「な、なのはさん？」

「え？あ、なのはでいいよ、ユーノ君」

「わ、わかった・・・・・・・・なのははその・・・着るの？」

「え？」

なのはが首をかしげた。

どうも思考が付いてこれてなさそうだ。

それともさっきの一言を即座に記憶から消したか？

どっちにしても軽い現実逃避かもしれない。

「そ、その・・・エッチで格好良い衣装を・・・着るの？」

「エ、エロ格好良い・・・ニャー!!!ルビーちゃん、なのはに何を着せるつもりなの!？」

やっと自分にとばっちりがくると気づいたらしいなのはがトマトのようになくなる。

ルビーとの付き合いから、一番被害を受けている彼女は、ルビーは冗談のようなことをまじめに実行してくれやがる事を身をもって知っているのだ。

この場合、沈黙は被害拡大の結果しかもたらさない。

「淫獣・・・貴様、今なのはどんな姿を想像した？」

「つつ!？」

ユーノの全身から血の気が引く。

このシスコンの存在を忘れていた。

生皮剥いでマフラーにされたいかと問答無用に睨んでくる。

「・・・期待しただろう？」

・・・仕方ない、想像してしまうのは男の本能だ。

「ちっお前のことは後回しだ。まずはルビーを止めるのがさきだ。なのはをエロ格好いい、略してエロカッケー姿にするわけにはいかん」

「連呼しないでなのー!!なのは着るなんていつてないから!!でも早くルビーちゃん止めて!!」

『終わりましたよ』

「「「早いな!？」」「」」

『いやゝルビーちゃんまだまだ若いですしゝ久しぶりにハッスルしちゃいましたゝあはゝ恥ずかしいこと聞かないでくださいよゝ』

主語のない言葉だった。

主語しだいでは18禁になりそうな会話だった。

しかも身をくねらせるルビーがとっても卑猥だった。

・・・なにこの気味の悪い無機物？

相変わらずフヨフヨ浮いているレイジングハートは赤い玉のままで、特に変わったところは見られない。

だが、ルビーが何かして何も変化していないと思うのははっきり言
って甘い。

絶対何かある。

「えーっと。レ、レイジングハート？」

現在のマスターであるなのはが呼ぶと、レイジングハートがこれま
たフヨフヨ飛んでなのはの手の中に納まる。

『貴方を犯人です』

「えええ、なのは犯人さんだったの!？」

「いや、そんなことないから、そもそも何の犯人？」

美由希が突っ込みを入れる。

どうやら台詞なしの空気キャラではなかったらしい。

「・・・なんかいきなり鬱で泣きなくなったのは何故？」

三角形の方ではメインヒロインの一人なのに・・・リリカルになる
とひどいときには名前すら出て来ない事がある。

「レイジングハートが壊れたああああ!!」

「え？あーっと、ご愁傷様？」

マジ泣きしそうになったところでユーノが吼えくれたので美由希は
正気に戻る。

とつさにお悔やみの言葉をかけてしまったが、これに関しては素人の美由希では解らないのでそう言うしかない。

『もー、皆さんひどいですよールビーちゃんがそんなことするわけないじゃないですかー人格プログラムを上書きしただけですよー』
「嘘だ!！」

と言ったのはユーノだけだった。

本来なら、複雑なプログラムや機材が必要なそれをこの短時間で出来るわけがないという判断は正しい。

他のみんなは・・・その難しさを知らないのに加えて、まあルビーだから何やらかしてもおかしくないだろうと思っている。
人間の順応性はあなどれない。

同時にナチュラルにそんなことを思う時点で高町家はもう手遅れだ。

『失礼しました。なのは様』

「はにや? な、なのは様?」

『はい、私レイジングハートはご主人様であるなのは様の為、誠心誠意この身果てるまでお仕えします。どうぞ宜しくお願いします。マイ・マスター』

「こ、こちらこそ宜しくお願いしますなの」

なのはが思わず赤い玉に最敬礼で挨拶をしている。
しかし、それを見る周りの目は違った。

「う、嘘だよ・・・ルビーちゃんからこんな良い子(?)が出来るなんて・・・は、これは新手のスタンド攻撃の可能性がある!？」
「だめだ美由希、今そこにある現実リアルを見るんだ。というか俺は死ぬ

のか!？」

「ははは・・・何も無くてどうやって死ねるんだ恭也?」

『フッフ、ネオな感じになったレイジングハートは翡翠ちゃ・・・
もとい、洗脳探偵レイジングハート!! 技の二号ですよ! もちろん
力の一号はわたし。あはあ! レイジングハート? 私のことはお
姉ちゃんって呼んでくださいね!』

『はい、姉さん!』

「ね、ねえ・・・エロカッコいい姿ってどんな格好なの!？」

みんなそれぞれのやり方でパニックになっている。

真夜中だというのにテンションの高い一家だ。

「な、何これ?」

ユーノは目の前で展開される阿鼻叫喚を呆然と見ることに出来な
かった。

付いていけない。

というか付いていけるかどうかより、これに付いて行っているのか?

そんなことを考えていたら、ほんと頭に手が載せられた。

見上げれば桃子だ。

「改めまして高町家によこそユーノ君? ビックリしたでしょう?」

「え・・・はい」

社交辞令も何もなく、そのままに答えてしまった。

気を悪くさせてしまったかとも思ったが、桃子は楽しそうに笑って
いるので多分大丈夫だろう。

「今の皆はちよつとアレだけど皆良い人よ」

「は、はあ・・・」

間違いではないのだろう。

なのはを初めとして皆良い人だろうとユーノも思う。

・・・とんでもなく個性的な気がするが・・・特にあのルビーが、
きつとあの杖が全ての元凶だろう。

「これから、なのはを宜しくね」

「こ、こちらこそ・・・」

なのはを自分の失敗に巻き込んでしまった。

それを忘れてはならない。

ルビーやレイジングハートだけでなく、ユーノにも出来ることでは
のはのサポートをしなければ・・・責任は取らねばならないとユー
ノは改めて心に誓い、なのはを見ると・・・。

『さあ次はいよいよエロカッケーなのはちゃんをレイジングハー
トにインストールして・・・』

「させるかなのー!!」

霊丸と言いながらルビーに魔力弾を放つなのは・・・羞恥で我を忘
れたか？

『あははー早々あたるものではないのですよなのはちゃん』

それを完璧にしのぐルビーと、流れ弾を小太刀で切り裂く剣士三人・
・・・普通は魔力の塊を鉄で切るなんてできるわけがない。
やはりこの家の人達は世界に関係なく何か違っている。

『ご主人様、姉さん、私の為に争わないでください』

そして戦いの賞品とばかりに棒読みでなんか言っているレイジングハート・・・本当にこの人たちの力になれと？
どうやって？

結局、なのはが魔力切れでぶっ倒れるまで続き、気が付けば外はそろそろ白み始めていた。

「大丈夫、すぐに慣れるわ」

「は、はあ・・・」

桃子にはそう答えたが・・・この状況に慣れると言うことは実は色々とまずいのではないかと思うユーノであった。

ついでに、どうもラスボスは桃子らしいと動物的な直感で理解する。

・・・高町家のカオス発生率はルビーのおかげ（？）でとんでもなく高いので、最終的になれなきゃやってられないと気づいたのは三日後のことだ。

ユーノは改めてとんでもない所に来てしまったと、自分の行動をちよっただけ後悔したとかどうとか？

ちなみに、その日は子供達全員学校には遅刻した。

第五話 ユーノ・スクライアの後悔（後書き）

希望を取ったところ、土曜の22時と言う希望が多かったなので、これからこの日とこの時間で固定しようと思います。

第六話 類は友を呼びまくる

丑三つ時という時間がある。

妖怪、魑魅魍魎が最も活発に動き出す時間と言われている。

そして呪いをかけるのに最も適した時間だとも……。

「レイジングハート、セツトアップ!!」

『なのは様の仰せのままに』

そんな深い闇を切り裂くように、桃色の光を纏った少女がいる。

奇跡を起こす力の名は魔法、白き衣を身に纏い、少女は戦場に立つ。対するはこの世の常ならざる法則によって生まれ出た存在……ジュエルシードの怪物。

「速攻で決めるよ、レイジングハート!!」

『承知しました』

白き衣に身を包み、赤き玉を内包した鋼の杖を構える少女。

魔力の光が杖に集まり、半透明の白い翼が展開される。

怪物はその姿に恐れを抱いたのか、後ずさりして逃げ出そうとした。

「ジュエルシード、封印!!」

背中を向けた怪物に向けて魔力が開放され……ズドンとやたら腹に響く大きな音を立てた後に残ったのはジュエルシードだ。

なのはがレイジングハートを近づけると、例の如く数字が刻印されて封印される。

「ご苦労様なのは」

『お見事でしたよなのはちゃん』

「流石なのはだな」

全てが終わり、なのはをねぎらうユーノとルビーと士郎・・・走りながら・・・周囲の家々は真夜中だと言うのに明かりがつき始めていた。

明らかになのはがジュエルシードを封印した時の爆発音のせいである。

「い、ごめんなさい」

なのはにはそう言うしかない。

ここ数日、なのははジュエルシードを封印したら逃げ出すということとを繰り返していた。

『なのはちゃん、なのはちゃん？』

「何？ルビーちゃん？」

『右手の張り紙をご覧ください』

言われた瞬間、なのはは高速で顔を左に逸らした。

だが、振り向いた方向にも同じ張り紙がしてあって、どの道見るはめになってしまう。

【最近、真夜中に爆音を立てる愉快犯が出没して皆さんの安眠を妨害しています。悪質なのでそれらしい人を見かけたらすぐに警察にご連絡ください。】

それが張り紙の内容だ。

情報提供を求める同じ張り紙が数メートルおきに貼ってあった。

『正義の魔法少女が愉快犯扱いになってますね？ジュエルシードより先に騒ぎを起こしてどうするんです？』

「ハニャー！！」

あれだけ派手にやっていて騒ぎにならない方がおかしい。

ショックを受けたなのはツインテールが感電したかのようにビーンと立った。

あの髪はなのはの感情に反応するのか？

『申し訳ありませんなのはさま』

「え、いや・・・レイジングハートのせいじゃないよ」

実は・・・最初の封印のときのあの砲撃封印がデフォになってしまつて変更が効かなくなつたのだ。

その為、封印作業はいつも破壊音が伴うようになってしまった。おかげで夜の封印の度にご近所さんの安眠妨害しまくりである。

「ごめんねなのは、僕の魔力がもう少し回復すれば・・・」

ユーノの魔力が回復すれば、防音結界位は張れるらしいのだが、わずか数日ではそこまでの回復は出来ないらしい。

一応、ルビーが人払いの結果を張つてはいるが、ダイナマイト並みの破壊音と、撒き散らされるなのはの魔力の前では在って無きが如くであった。

『まったく、マスコット失格ですよなのはちゃんのエロカッケー姿を想像して欲情する淫獣』

「がは！！」

「ルビーちゃん、ちょっと厳しすぎ！！」

ユーノが吐血してなのはが突っ込む。

しかし、なのも否定していないので結局フォローにはなっていないことには気づいていないのか？

それとも解ってやっているのかは悩みどころだ。

士郎はそんな子供達をやれやれと言う風に見ている。

なのは、ルビー、レイジングハート、そしてユーノの4人が当面のジュエルシード探索班だ。

付き添いは士郎、美由希、恭也の三人でローテーションが組まれている。

ジュエルシードのモンスターはなのはにしか封印できない為、護衛と言う形でなのはをフォローしている。

本当は常に三人でなのはをサポートしたいのだが、世知辛い事に正義の味方とはいえ現実の生活をないがしろには出来ない。

特に士郎は喫茶店のマスターという仕事といういかんともしがたいものがあつた。

・・・ちなみに、夜遅くなるときは士郎が恭也の二択だ。

女子高生であるところの美由希は、どちらかといえば保護される側の人間なので夜に出歩いているとなのは共々補導されてしまう。

「ほら、なのは？」

「え？うん」

気が付けば、士郎がなのはに背中を向けて腰をかかめている。

親子のスキンシップカモンな土郎の意図を察したなのは、喜んでその背中に飛びついておんぶされる。

「えへへお父さ〜ん」

「はは、なのはもう少し重く「えい！」ぐおー！」

おんぶされたなのはが土郎の後頭部に魔術で強化した拳を叩き込んだ。

笑顔で・・・。

「でりかしーがないのはお父さんでも許さないのー！」

「イエス、ママ！しかしなのは？お話より先に肉体言語を使うのは父さん感心しないな〜」

はははと笑いながら、土郎の足は千鳥になっていた。後頭部は人体の急所の一つです。

良い子も悪い子もまねしちゃメー！！

「そつえばなのは、今回の何個目だったかな？」

「6個目だよ」

最初っから波乱万丈に始まったジュエルシード回収だったが、ユーノあたりの不安をよそに成果は順調に上がっていた。

神社？

犬？

そんなもん速攻でフルボッコにして封印しましたが何か？

とつてもいじめっぼくって描写すると倫理的に問題ありそうですが

何か？

「お父さんのおかげだよ。ありがとう」

しかも内一つはなのはではなく士郎が見つけてきた。

なんでも指導しているサッカークラブの一人が見つけたらしい。

拾った本人は、マネージャーの子にプレゼントするつもりだったらしいが、そこを頼み込んで譲ってもらったらしい。

おかげで、代替品のために士郎の財布が相当に軽くなっただけ、愛娘のためならえーんやこらだそうな・・・親ばかりかめ！！

『今時のマスコットは可愛いだけじゃ駄目なんですよ。可愛いだけじゃ！！』

「申し訳ありません・・・って僕はマスコットになりたいわけじゃないですから！！残念！！」

『今の貴方にそれ以上の何があるっていうんです？』

「うっ・・・魔力さえ回復すれば・・・」

そんなアットホームな士郎となのはの後ろではルビーがユーノに未だお説教している。

ユーノも反論しているようだが、言い負かされてへこんでいた。

・・・内容がとんでもなくあれなんだが、実際役に立っていないのでユーノも反論できない。

内心でなのはを巻き込んでしまった罪悪感があるので小さくなりっぱなしだ。

これで必死で魔力回復に努めるだろう。

ルビーがそれを見越して、あえてつらく当たっていると全然思わないが・・・あれはいびつて楽しんでいるだけだ。

「ところでなのは？」

「はにゃ？」

「明日・・・やっぱり話すのか？」

「・・・うん」

その一言で、なのはが静かになる。

士郎からは見えないが、父は娘がどんな顔をしているかわかるような気がした。

「うん・・・やっぱりなのはだけが知っているのは良くないと思うなの」

「そうか・・・」

それがいいかどうかは自分で決めることだろう。

8歳児とか、そういう問題ではない。
心の問題なのだ。

『ふむ、友情のためですか』

隣を飛んでいたルビーはなのはの答えに首をかしげるような仕草をする。

それを見るなのはは悲壮な覚悟を決めていた。

「すずかちゃんとはお友達でいたい・・・だからお願いルビーちゃん！」

魔術を家族以外にばらすのは初めてだ。

うに控えていた。

「どうしたの恭也？お茶会の前に改めてお話があるなんて、珍しいわね？」

「ああ、今回は俺じゃなくてなのはの話なんだ」

「なのはちゃんの？」

忍が問いかけ、恭也が答え、なのはの名前にすすかが反応して視線がなのはに集まる。

「う、うん・・・すすかちゃん。あのね・・・なのは・・・こんなことが出来るんだよ」

言うなり、なのはが見えやすいように掲げた手の中に火が宿る。
小さなライターくらいの大きさの火だ。

それを見たなのはと恭也以外の全員が目を丸くする。

「すごい、なのはちゃんこんな手品が出来るなんて、何時覚えたの？」

「忍、なのはのこれは・・・手品じゃないんだ」
「え？」

目を輝かせて感心していた忍の間違いを、恭也が指摘する。
忍だけでなく、すすかやメイド二人もその意味を理解できずに？マ
ークを浮かべていた。

「なのはは・・・魔術師なんだ」

「魔術師って・・・御伽噺の？」

「そうだ。忍たちと同じ御伽噺の中の存在だ」

「つつ、恭也!!」

思わずと言う風に忍がソファから腰を上げ、ノエルとファリンが立ち位置を移動する。

忍とすずかを庇う位置に……。

「恭也……いくらなのはちゃんとは言え……契約違反よ?」

「解っている。しかし知られてしまったんだ」

「すずかちゃん!?!」

場の緊張の全てを無視して、なのはがすずかに声をかけた。

真っ青になってブルブル震えていたすずかが反応して顔を上げると、涙の雫がその頬を伝った。

きつと知られてしまったことに恐怖しているのだろう。

彼女は誰より、アリサと……なのはには知られなくなかったはずだから……。

「ごめんねすずかちゃん、今まで黙っていて」

「なのはちゃん……」

「でもね、なのは……すずかちゃんとお友達でいたい……だから……」

それを聞いて、事前に話をしていた恭也以外の大人達はやっとなのはの行動の意味を悟った。

魔術を見せて自分の秘密を打ち明けたのは、一方的に秘密を知ってしまったのはが、すずかと対等になるためだ。

友達でいたいから……唯それだけのために、なのはは自分の秘密を明かしたのか?

「わ、私もなのはちゃんと友達でいたい・・・」

沈黙はすずかの泣き声で壊れた。

しかし、硬直までは解けないこの場の誰も声をかけることさえ出来ない。

金縛りになったように固まっている。

「だったら、友達でいようよ」

「で、でも私・・・は・・・」

「大丈夫、ルビーちゃんに聞いたもん！すずかちゃんは普通の人間とほとんど変わらないって！！それにすずかちゃんを信じてるから！！」

「なのは・・・ちゃん」

「吸血鬼なんてルビーちゃんに比べたら全然大した事ないよ！！」

思わずと言う風に、すずかが駆け出していた。

その勢いのまま、なのはの腕の中に飛び込んでくる。

なのははそれをやさしく受け止めた。

・・・後は、すずかの泣き声だけが部屋の中を満たしている。

それは親友にも話せなかった自分の秘密を理解してくれた喜びゆえの涙だろうか？

「・・・何って言うか、なのはとすずかに良いところもってかれたわね？」

「ああ、そうだな」

ソファ―に座りなおした忍と恭也が苦笑した。

「よかったね、すずかちゃん！」

感極まったファリンがすずか以上に泣きながら二人まとめて抱きしめ、その胸が圧力でフニヨンと形を変えるのを見た恭也が眼を奪われるが、とっさに視線を逸らす。

しかしばつちり見ていた忍は、にこやかに笑っているのに目のハイライトが消えていた。

ノエルはいつの間にか音も立てずに忍の後ろに移動して控えている。良く見ればその口元は笑みの形になっていた。

「ねえ恭也？」

「なんだい？」

「ひよつとして私達、貴方を悩ませてた？」

今まで、恋人である忍にもなのはの事を明かさなかったことを、忍は裏切りとはおもっていない。

吸血鬼とくらべてどうかはわからないが、魔術師という秘密とその異能は十分に秘匿されてしかるべき物だ。

ばれたら自分達同様、誰かに狙われるかもしれない。

恭也がなのはの告白を止めるどころか説明したところを見ると、なのはの意思だろう。

すずかはよい友達にめぐり合えたと思う。

これが恭也本人の事だったならすぐにでも打ち明けてくれたかもしれないが、事は彼本人ではなく妹だ。

そのジレンマが恭也を悩ませていたのではないかと・・・そんな忍の内心を察した恭也が首を横に振った。

それに忍はほつとする。

「それにしても、恭也がこんなに口が軽かったなんて・・・ちよつとショックだったわね。って何で頂垂れるの？」

仲直りに、からかいを含んだ言葉をかけるが、反応は忍の予想を超えたものだった。

あの恭也ががつくりと疲れた風に影を背負っている。

・・・何か悪いことでも聞いてしまったのだろうか？

「だから違うんだよ。何度も言うけど俺が喋ったんじゃない、知られてしまったんだ」

「知られてしまった？誰に・・・って何で目を逸らすのかしら？恭也・・・なのはちゃんまで？」

恭也もなのはも、とっても言いずらそうに目を逸らしている。それを見た忍たちは互いに顔を見合わせた。

二人の反応が理解できない。

「・・・知っていると思うけど、私達のことを知られた以上は口止めをしないと」

「それは心配ない。あいつそのものが吸血鬼なんか問題にならないくらいふざけた存在だからな」

「は？・・・そういえば、そもそもどうやってその人は私達のこと

を知ったの？」

「感覚の眼で見たらわかったといっていた」

感覚の眼とはなんぞや？

忍は？マークを浮かべたままファリンを振り返る。

しかし、彼女も困惑しているらしく答えは期待できそうにない。

・・・相手のことを説明されているはずなのに、なおのこと解らなくなるとはこれ如何に？

「その・・・見抜いたのはルビーだ」

「ルビー？ずずかから聞いているわ、何でもなのはちゃんを困らせている人でしょ？」

「なのはだけじゃなく一家揃って被害を受けている。どんな人って言うか・・・むしろどんな物？」

「何それ？って何！？」

いきなり真っ暗になった。

しかも窓もふさがれているのか、外の光も見えない。

『呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン』

そして始まるオンステージ。

何処からともなく軽快なロックが流れ、スポットライトが放たれる。丸い光が一箇所に集まるそこにいたのは・・・。

「「「杖？」「」「」

忍達の声が重なった。

ルビーを初めて見た人間は、大抵同じ反応をする。

『そうです。私がルビーちゃんです!!』

ドドンとルビーの背後で七色の花火が上がった。

部屋を真っ暗にした上にこの演出・・・おかげですずかがビビッてなのはを更に強く抱きしめている。

「人様の家で何って事してんだ!？」

恭也の怒声、プライスレス。

「な、なのはちゃん？」

「大丈夫だよすずかちゃん。あれがルビーちゃんなの」

「あ、あの杖が？」

確かに、喋って空中浮遊をし、さらには人様の家の中で花火まであげる常識はずれに比べれば、大抵の事は受け入れることが出来るかもしれないというのは、すずか達4人の共通した感想だった。

・・・。。。そこで持って説明中。

・・・。。。説明中。

・・・。。。説明中。

・・・説明中

「・・・なるほど、魔術に魔法に礼装ね」

やっと全てを説明し終わると、忍はしきりに頷いて納得してくれた。吸血鬼という生まれの彼女だけに、常識外れな物に対する適応力は高いようだ。

普通でないものは何時でも鏡を見ればそこにいる。

「所ですか？」

「何、お姉ちゃん？」

「幸せそうね？」

「うん、とっても」

なのはの隣ですずかが微笑んでいる。

おかげで余裕のあったソファは三人がけで少し窮屈になっていた。

「にやははは」

対してなのはは困った顔だ。

その理由は二人の距離にある。

近い・・・いや、これでは語弊があるか・・・なのはの腕にすずかが自分の手を絡めているのだから、近いというより密着していると描写するべきだろう。
頬摺りまでしている。

なのはがすずかの秘密を受け入れて、本当の親友になったことになり嬉しいらしい。

『スールですね、わかります』

そしてとつくになじんでいるルビー・・・いきなりどうやって室内を真っ暗にしたのかと思えば、窓に暗幕が貼ってあった。

あの一瞬でどうやってと追求したいが、結局ルビーだからということに落ち着くのだろう。

ちなみに、花火そのものは魔術の演出で何も残らず問題ないが、暗幕の片付けはノエルとファリンに丸投げという面の皮の厚さだ。

・・・どこが顔なのかすらわからないが。

『姉さん、なのは様だと白薔薇が色的に相応かと思われませんが』

ロサ・キガンティア・アン・フットン

『すすかちゃんは白薔薇のつばみですか？じゃあ、アリサちゃんが紅薔薇で』

ロサ・キネンシス

『はやて様が黄薔薇ということだ』

ロサ・フェイダ

「そこ、リアル（？）姉妹で勝手な事言わないでなの！！」

さすがになのはも色々な危険を感じたようだ。

なのははすずかとお友達でいたいのであって、ユリユリな関係になりたいわけではない。

「なのはちゃん？」

「し、忍さん？」

気が付けば忍がとつてもいい笑顔をしていた。

ファリンは赤くなった頬に手をあてて目をキラキラさせている。

ノエルは・・・こっちは無言で頷かれた後に親指を立てられた。

「私の事はお姉さんって呼んでね」

「忍さん！！ち、ちよつと待ってなの、それっておにいちゃんと結婚するからって言う意味ですよね！？」

「すずか、幸せにね」

「ありがとうおねえちゃん」

「なのはの話聞いてなの！！」

ファイヤーでボンバーに訴えたが、なのはの言葉は誰にも届かなか

った。

やはりGNフィールドでも使わなければ、人は本当に分かり合えないのかもしれない。

・・・いつそ、人類補完計画でも起こすか？

「所で・・・」

なのはを無視した忍はルビーを見た。

気配と空気を察したルビーが向き合う。

二人の間に雷に似た緊張が走った。

「事情は理解しました。しかし、月村家の当主としてそれだけで貴方を信用することは出来ません」

『ほう・・・ではどうすると？』

忍とルビーの間で、何か決定的なものにヒビが入る音が聞こえた気がする。

「・・・貴方に聞きたい事があります」

『どうぞ』

「では・・・」

口頭による口撃・・・表面的には穏やかだが、有無を言わせない圧力と冗談を許さない威圧感がある。

先に言葉を発したのは、やはり忍だった。

「分解させてくれないかしら？」

『ヤです』

一瞬で訳のわからない鳥肌が立った・・・今、何が起こった？

「えーちよつと中身を見せて欲しいだけなのに」

『そんな〜ルビーちゃんの人に見せたことのない場所を見せるなんて。恥ずかちい〜ですよ』

「じゃあ私も脱ぐわ、恭也の前で」

『それは恭也さんへのご褒美でしょう？』

「解る？」

『わからないでかあ〜ってなもんですよ』

忍が・・・あのルビーと・・・真正面から渡り合っている？

忍が言っている事も大概無茶が過ぎるが、ルビーも何時もの様子で一步も引かない。

そんな事が出来るのは桃子くらいだと思っていたのはと恭也が一番驚いていた。

真の強者はこんな所にもいたのだ。

「忍・・・俺をまきこまないでくれ」

恭也が羞恥でHPが0になっていた。

今すぐにでも窓を破って逃げ出したいところだろう。

「まったく、恭也ったら何でもっと早くルビーちゃんを紹介してくれなかったの？」

『そうですよ恭也さん、こんなに話の会う人なんてそうはいませんよ？』

夢に裏切られた様に頂垂れる恭也に声をかけて慰めてやれる強者はいなかった。

コーナーポスト
部屋の角で真つ白な灰になっている。

きつと会わせなきゃ良かったと思っているに違いない。
恋人の新たな一面を発見してしまった恭也は、その日一日燃え尽きて役にはたたなかった。

第七話　ねこねこねこねこ

月村家は海鳴市の資産家で通っている。

どういう理屈での資産家なのかを知る者は少ないが、大きな屋敷と広い庭に少女数人が住んでいて、しかも生活に困っている様子はな
いとくれば大抵の人間はお金持ちだろうと思うだろう。
事実、結構古くから海鳴の地に根付いている家系らしい。

そんな月村邸だが、近隣住民からは猫屋敷の二つ名で呼ばれていて、これは自他共に認めている事実だ。

何故ならば、月村邸には猫がいる。

これでもかというくらいの猫がいる。

理由は次女のすずかが無類の猫好きであること。

彼女は迷子の猫や捨て猫を見るとほうつとけない性分のため、里親が見つかるまではと拾って来るのだが、そのほとんどがそのまま居ついてしまったため、屋敷の猫密度は人間の数よりはるかに多いことしかわからない。

その全てを把握しているのはすずかだけで、猫も自分達の主が誰がよくわかっているらしく、すずかになついている。

・・・しかし、今日に限って猫達はすずかにじゃれ付こうとしない。

それは空気を読んでいるのか、あるいは今のすずかに近づくのが嫌なのか・・・とにかく、今のすずかの周りは猫屋敷に在って猫の空白地帯になっていた。

「・・・・・・・・」

「はい、なのはちゃん」

「・・・・・・・・」

「い、良いよ。すずかちゃん、なのは自分で食べられるから・・・」

「・・・・・・・・」

「ねえ、アリサちゃん？」

「・・・・・・・・何？」

「ちよつと目が怖いよ」

なのはがすずか達に向かって全てを暴露してから30分後・・・も
もとの予定通りに月村の庭でお茶会が始まった。

参加者はなのは、すずか、アリサに最近友達になったはやてだ。

庭に用意されたテーブルにお菓子と紅茶を乗せ、周りを猫に囲まれ
ながら思い思いに語り合うのが彼女達のお茶会、おしゃべり会とい
つてもいいかもしれない。

しかし、おしゃべりするのための集まりなのに、参加者のアリサは一
言も喋らず対面に座っている二人の親友を睨んでいる。

「なんつちゅーか、今日の二人ともちよつとおかしいんちゃう？」

となりのはやても同様だ。

こっちは熱い熱いと掌団扇で自分を扇いでいる。
勿論ポーズだ。

「な、なのは良くわかんないよ」

なははと笑いながら話を逸らす・・・はやてとアリサの視線は揺

らない。

そしてなのは隣の隣では、当然といつかのようにすずかがなのは腕にぶら下がっている。

あまつさえ、反対側の手にはケーキの刺さったフォークを握ってなのは口元に向けている。

所謂、食べて・・・な状況な訳で、背中がかゆくなるくらい甘ったるい。

だれか空気に砂糖を混ぜ込んだんじゃあるまいか？

「どない思います？アリサの奥さん？」

「はやての奥さん、絶対あの二人怪しいですわよ」

「そこ、勝手な事言わないでなの！！」

昼ドラの主婦のようだった。

女の子は結局そこに行き着くものなのか？

夢も希望もありやしない。

「それなら、なんでそんなにすずかがなついているのか説明しなさいよ？」

「う・・・アリサちゃん・・・」

それが説明出来れば誰も苦勞はしない。

なのはの方とはかく、すずかの秘密に関しては誰にも他言しないことをついさつき誓ってきたばかりだ。

なのはも心苦しいが仕方がない。

「なのは様？」

「え、あノエルさん」

「紅茶のおかわりはいかがですか？」

見かねたのか、ノエルが紅茶のお代わりを申し出てくれた。
おかげでアリサの追求が途切れた。

「はい、なのはちゃん」

並んでファリンが新しいお菓子を追加してくれる。
良く出来たメイドさんだと思う。

「すずかお嬢様を宜しくねなのはちゃん」

「「ぶー！」」

そして更にご丁寧に爆弾まで投下してくれる・・・この天然娘！！

アリサとはやてが紅茶を吹き出して虹が綺麗だ。

淑女としてどうかとは思うが、そんなことに構っちゃられない。

あの信じられないものを見たという目は子供から見てもまずいと思う。

「あんた達・・・まさか本当に？」

「あかん、アリサちゃん・・・こちらはお邪魔だったようや、今日は退散しよ」

「なんでやねん!？」

思わず関西風に突っ込みを入れたのは・・・ファリンは額に怒りマークをつけたノエルに引きずられてゆく・・・アイアンクロウを掛けられたまま・・・痛すぎてうめき声さえ上げられないようだ。完全に自業自得だ。

・・・おーけー、Cool・・・なのはは魔術師、クールに行くなの。

まずはこの状況をどう乗り切るか・・・どうやって誤解を解くか・・・そして未だにじゃれ付いてくるすずかをどうするか・・・なのははこれまでにない危機感を感じていたが、どこぞの戦闘民族のようなワクワクは全然沸いてこなかった。

他の猫とは違い、離れた場所に隠れるように一匹の猫がいる。
どこかで見たような灰色の毛並みの猫だ。

『猫さんみつけた』

「ギニャー!!」

猫が潰されたような声を出す。

いや、実際物理的に潰されていた。

頭上から降ってきた能天気な声の主に潰されたのだ。

『あはあゝ隠れても駄目ですよ、魔力を消していないと障害物が在っても丸わかりです』

「あ、あんたまさか・・・あの子が言っていた!？」

『あれ？微妙に魔力の質が違う？別人ならぬ別猫？まあどうでもいいんですが』

どうでもいいのかという魂の訴えは当然スルーされた。

『ほらほら～ここですかあ～ここがいいんですかあ～』

「あ、ちよつとま、そ・・・そこは駄目だって・・・あ・・・ああ・・・

・・にゃん」

猫をひっくり返して羽の部分で腹をなでまくっているだけなので18禁にはなりません。

・・・10分経過。

『ネコさん？実は相談したいことがあるんですよ』

お前は相談相手をまず腰砕けにしてから話をするのかと言う目で猫が睨んでいる。

しかし悪態をつけるほどに回復はしていないらしく、荒い息をつきながら好き勝手に喋るルビーの話を聞くしかない。

『最近、なのはちゃんがルビーちゃんを使ってくれないんですよ。ジュエルシードを集める為には仕方がないことなんですけどお、エロカッケー衣装をインストールするから絶対駄目ってレイジングハートにも近寄らせてくれませんし』

良くわからないが、自業自得な気がする話だった。
しかも原因はルビーのほうにある。

『それでルビーちゃんは不安になっちゃったんです。このままではルビーちゃんは新しい武器とかが出てきたら昔の必殺武器が忘れられてゆくように、その他大勢にうずもれて過去の女になっちゃうんじゃないかって』

それはない。

こんな灰汁の強い存在は、周りがいくら真っ白でも垂らされた墨汁のように自己主張するに違いない。

そして周りを汚染して、最終的には自分色に染めてしまうに違いないのだ。

『所で猫さんは一体誰を監視しているんですか？』

「つつつ！！」

比喻でなく、猫の全身の毛が総毛だった。

とつさに俊敏な動作で猫がルビーから距離をとる。

明らかに警戒して、犬歯をむき出しに威嚇していた。

『二度も同じように息を潜めていてその反応、言い訳は出来ませんよ？』

「・・・おまえ」

・・・どうやら核心をえぐってしまったらしい。

猫の威圧感が上がって行く・・・しかしルビーは見た目平然としたままだ。

『まずなのはちゃんの線は真っ先に消えました。なのはちゃんの魔力に魅かれたかと思つて、ここ最近なのはちゃんに気づかれないように傍にいたんですけどおゝ貴方達の魔力は感じませんでした』

ルビーの声は楽しげではあるが、明らかに詰問だった。

『すずかちゃんを監視しているのなら、もっと近寄つて他の猫にまざればいい・・・でも貴方はそれをしていませんよね？自分がこの家の子でないと気づかれるのを警戒しているんでしょう？つまり、貴方は普段、月村の家にはいないことになる。狙いはすずかちゃんでもない。となると残っているのはアリサちゃんと・・・』

「・・・ただのインテリジェントデバイスかと思っていれば」

『なるほど、ユーノ君の同類ですか？』

「くっ」

『私をインテリジェントデバイスと呼ぶのはあなた方だけですよね、”魔導師”さん？』

猫が悔しげに顔をしかめて黙る。

これ以上の会話は相手に情報を与えるだけだと気がついたようだ。口数とは逆に、猫の魔力が上昇してゆく。

力で黙らせるつもりか？

『こういうのってルビーちゃんのキャラじゃないからいつもはレイジングハートに任せていますけど、やってやれないことはないんですよ？』

「デバイスだけで・・・何が出来る？」

『割と色々と、それとルビーちゃんはデバイスではなくて礼装ですよ。ここ重要。別になのはちゃんに関係ないなら放って置いてもいいんですけど、お友達に何かあればなのはちゃんが悲しんじやいますから』

一触即発の空気が高まってゆく。

『目的を教えてくださいませんか？』

「誰が・・・」

猫が獲物に向かって飛び掛る為に身を低くした。歯をむき出しにした顔にははっきりとした敵意がある。

『「ん？」』

緊張の糸が切れようとした一瞬前にドンと来た。

横からのいきなりの突風・・・しかしそれは自然の物ではない魔力の発露余波だ。

二人揃って声を上げると同時に、周囲が暗くなった。
何かの影に入ってしまったらしい。

「『うひょ?』」

なんだろな?と振り向いたそこにいたのは猫(?)だった。
ただしその大きさが普通のビルの二階分くらいのでかさの、体のバランスから子猫だとは思うのだが・・・そのキュートな瞳がルビーと猫を見ている。

『ほらほら猫さん、お友達が遊びのお誘いですよ』

「そんなわけあるか、明らかにあんた狙いだろ?」

「にや」

ずしんと、二人の間に子猫の足が振ってきた。

足が上がると、くつきりはつきり足跡が地面についている。

・・・一体何キロあるんだアレは?

・・・まさか自分達は獲物に見られているのか?

両者同時に青くなって理解する。

やり合っている場合じゃないと・・・。

「・・・仕方がない、1・2の3で左右に飛ぶよ、狙いを分散させるんだ!」

『はいはい了解です』

いまいち緊張感がない返事だが、猫は構わずにカウントを開始する。

「1・・・2の・・・」

「3！ってなんでルビーちゃんのほうに猫まつしぐら！？」

同時に両方に飛んだのに、子猫は同族には目もくれず、ルビーのほうを追って来た。

ルビー曰く、その魅惑のボディーが猫の本能を刺激するということをもったく考慮に入れていなかったのだ。

とつさにルビーが反対側を見れば、逃げてゆく猫が新世界の神の様な「計算どおり」の顔をして笑ってやがる。

『計ったな猫さん！』

「杖だからさ」

『その通りですが何か文句でも！？』

「うつさい！！あんたはそこでつぶれてろ！！」

こつちもこつちで猫まつしぐらに逃げてゆく。

ルビーは未だに子猫にロックオンされたままだ。

『クツ、仕方ありません！！技を借りるぜテンシンハン！！』

ルビーがペカーと輝いた。

フラッシュグレネードのような光に、子猫の目がくらむ。

『あばよとつつあーん・・・へぶ！！』

この隙に三代目怪盗宜しく華麗に逃げようとしたルビーだが、目がくらむとムスカみたいにパニックになった子猫の前足が降ってき

て地面に叩きつけられた上に踏まれた。

（ん？）

（どうしたの、レイジングハート？）

お茶会の席で、相変わらずずかを片手にぶら下げつつ、目の前のアリサとはやてに百合疑惑を向けられていたなのはが、レイジングハートの念話に反応した。

正直この状況はかなりきついので、逃げ出せるならなんでも良い気分だ。

（いま・・・姉さんの魔力が一瞬大きくなって・・・消えた）

（ああ、それならなのはも感じたけど、大丈夫でしょう？ルビーちゃんなら）

（それもそうですね、なのは様）

これは信頼とっていいのか？

（それどころじゃないよ！！）

さらにユーノまでルビーの心配をしている風ではない。
ルビーの生死より大変なことが起こった様だ。

（ジュエルシードの反応だよ）

（は、ルビーちゃんの魔力に気を取られていたなの！？）

（ちょうど姉さんがいた辺りですね？）

さあ、まずはなのはの腕につかまってヘブン入っているずかをど

うにかするところから始めよう。

――――

「・・・何あれ？」

「た、多分ジュエルシードが子猫の大きくなりたいと言う願いをかなえたんだと思うけど・・・」

どこにでも着いてきそうなずかを何とかなだめすかし、捨て猫のような瞳に後ろ髪引かれ、アリサとはやてからはもう筆舌に尽くしがたい目で見られた拳句、ユーノがいきなり逃げ出すという芝居を打って何とか脱出してきたのはたちが見たのは、とっても大きな子猫の姿だった。

『子猫が姉さんで遊んでいますね』

子猫”と”ルビー”が”遊んでいるではない。

子猫”が”ルビー”で”遊んでいる。

日本語はたった二文字違うだけで内容ががらりと変わってしまう言語である。

「ニャ」

『ね、猫さん！！ルビーちゃん眠くありませんから！！そんなぼんぼんされても寝かしつけられませんから！！むしろ二度とおきない眠りに逝っちゃいそうですから！！』

「フーフー！！」

具体的には、ビックな子猫が地面にいるルビーに猫パンチをかまし続けていた。

しかも何発も・・・子猫のほうは明らかに遊びに真剣のようで、恍惚として鼻息も荒い。

その目はルビーだけを見ている。

おかげでルビーは肉球に張り倒されて地面に激突、反動で上がってきたところにまた猫パンチと、ちよつと反撃できそうな空気はない・
・連続コンボに突入しているようだ。

「取りあえず止めるね」

ルビーに夢中の子猫をバインドで拘束する。

子猫には悪いがこのままルビーを見殺しにも出来ない。

『ふう・・・ヘルメットがなければ即死でしたあゝ』

ヘルメットなんて最初から被っていなかっただろうに、仮にかぶっていてもあの猫パンチに耐えられたとも思えない。

突っ込みどころは山盛りだが、そもそもなんであれだけやられて無傷？

一体ルビーは何で出来ているんだ？

「・・・はあ、封印するよ、レイジングハート？」

『承知しました。なのは様』

・・・色々突っ込みたいところはあるが、まずは封印が先だ。

このまま放っておけない。

「・・・まって」

「え？」

声に振り返れば木の枝に女の子が立っていた。

金の髪をツインテールにして、黒いレザーのような素材の衣装に黒いマントを着たのはと同じくらいの歳の女の子だ。

冷めた目でなのはを見下ろし、長い身長ほどはありそうな杖を向けてくる。

『T Oらぶるのヤミちゃんのコスプレですね？解ります』

「『それ絶対違う（います）！！』」

なのはとユーノとレイジングハートから同時に突っ込みが入った。

復活して早々、緊張も何もかもをぶち壊しにしてくれる・・・何故ならそれがルビーだから。

第八話 ふぁーすと・いんぱくと

前回までのあらすじ。

高町なのはは私立聖祥大付属小学校に通う小学3年生、高町家において3人兄弟の末っ子さんである。

数年前、愉快型魔術礼装・カレイドステッキに（不幸にも）めをつけられ出会い、魔術師を目指すことになった少女！！

ルビーにからかわれ、玩具にされながらもご町内の魔女っ娘として日々がんばるなのは。

しかも彼女の数奇な運命はそれだけに留まらず、成り行きもあつてジュエルシード危険物の回収に手を貸す事になってしまった。

そして今、なのはの前に新たなる魔法少女が姿を現す！！

「・・・ジュエルシードを渡してください」

金の髪と黒のマントを風になびかせ、冷めた目ではなのはたちを見下ろして来る少女！！

ジュエルシードを求める新たなる魔導師の登場に警戒するのは、ユーノ、レイジングハート・・・風雲急を告げる物語！！

そしてそのとき我等がルビーは！？

『ええ？金髪にツインテール、黒い拘束具みたいな衣装なのにヤミちゃんのコスプレじゃないんですか！？』

「何でそこで裏切られたみたいなのを出すのか理解できないの？」

『なんてこつたい!!』

どう考えても二話に渡って引つ張るようなネタじゃないはずのものを無理やり引つ張っていた。

『世間様に迷惑をかけず、部屋から出て人気のない所で思う存分厨二な台詞をはいたり、なりきって楽しむような剛の者コスプレイヤーに会えたと思っていたのに!?!』

・・・会ってどうする？

皆がそう思った。

誰もルビーがコスプレイヤーに会った後のことが予想できない。

ドンだけショックだったのか、ヨヨヨと泣き声に合わせるように急降下するルビー……。

『ルビーちゃん復活!!』

そこからギョーンと急上昇して戻ってきた。

意外に打たれ強いらしい。

あるいは立ち直りが早いのか？

『その貴女!?!』

「は、はい?」

びしっと言つ擬音と共にルビーに呼ばれた少女が思わず身をすくませた。

どうもいきなりの展開・・・っというかルビーの奇行があまりにも予想外すぎて面食らっているようだ。

まあ、ルビーの異常性に即時対応できるのは桃子か忍位の者なので、これはむしろ彼女が正常であることの証明だろう。
なのは達のそれは単純な慣れである。

『アナタノオナマエナンスカ?』

「・・・こ、答える理由がない」

必死に感情を殺した言葉と共に、彼女は杖を向けてくる。

だが、ルビーはそんなに甘くない。

戦闘準備を整えている少女に構わず、なのはを振り返った。

『聞きましたかなのはちゃん? やっぱりあの子クーデレですよ? あの萌えっ娘をぜひデレさせましょう』

「デレさせるって・・・」

またとんでもない事を言い出したものだ。

そもそもデレさせるって誰に対して?

まさか唯でさえすずかのことと頭の痛いのはじゃあるまいな?

・・・ルビーのことだから平然とYesと答えかねない。

「それにクーデレ? ツンデレじゃなくて?」

『それはクギミのポジションでしょう?』

「誰?」

『ああ、良く考えれば男っ気がないのにTラフコメoらぶる要素なんて必要ないですよね』

・・・まだそのネタを引っ張るつもりか?

「異議あり！ココ、ココ！！僕は雄と書いて男ですよ！！」

ユーノが珍しく自己主張している。

存在感が希薄になりすぎて空気になりかけているというのに、このまま男という事まで無視されては立つ瀬があるまい。

というよりユーノも結構ルビーのペースに慣れてきたな・・・。

『ほほう、ではユーノ君は男としてあの子の胸、あの子のふともも、あの子のふくらはぎに興味があるんですねー！！漢の子ですもんねー！！！！』

彼女のバリアジャケットは水着のようなデザインで体にぴったりフィットしている。

当然、胸も太股も足もラインがはっきり確認できるわけで・・・一体誰がデザインしたのだろう？

本人が考えたのだとすれば、少々彼女の見方を変えねばなるまい。

「いや、そこまで露骨には・・・」

「ひっ！！」

無いと言いかけて、ユーノが少女を見上げると、彼女が小動物チツクな悲鳴を上げた。

両手で自分の身を抱いて、更にマントを巻きつけて顔を真っ赤にしている。

どうも乙女の本能が危機を感じたようだ・・・彼女が何を想像したのか知らないが、見ただけで怯えられたユーノは男として地味にシヨックを受けている。

ついでに言つと背後でなのはが白い目で見ていたのでこれも怖い。

『でも、ユーノ君くらいの歳でそんな事を考えるのはただのマセガキですけどね』

「うばあ！！楽しい！？僕をからかつて楽しいの！？」

『ええ、とっても』

「ちくしょー！！」

一片のかげりもない答えにユーノが悶絶する。

ルビーに人間と同じ表情があったら、きつととっても綺麗な笑みを浮かべていただろう。

免罪符をちらつかせて叩き落す・・・何処までもいじられるユーノと、男相手には何処までも厳しいルビーであった。

・・・取りあえずユーノは味方のはずのルビーのせいで撃沈と・・・気を取り直して未だにルビーのターン。

『それじゃー改めましてこんにちわ、クーデレなコスプレイヤーの魔導師さん？』

「く、クーデレ？コスプレイヤー？」

『あるいは金髪ロリータ拘束具フェチのお嬢さん？』

「フェイト！フェイト・テストロッサです！！」

このままでは妙な名前を定着させられると危機感を感じたらしい少女「フェイト・テストロッサが自分の名を名乗った。

クーデレでコスプレイヤーな魔導師・・・金髪ロリータ拘束具フェチ・・・会う度にそんな呼ばれ方されたら実に鬱だ。

『イエーイ、なのはちゃん、彼女の真名GETしました』
「ル、ルビーちゃん、その聞き出し方はちょっと卑怯じゃないかな
と思うなの!？」

尤もである。

乗せられたことに気づいたフェイトが真っ赤になってあうあうと反論しようとしているが、うまく声が出てこないらしい。

アドリブに弱いのだろうか？

あるいは押しに弱いのか？

相手がルビーという時点でかなり不利なのは当たり前だが・・・ちなみに涙目。

『猫さんの関係者です?』

「猫?何の事?」

『別口ですか・・・』

ルビーにしか解らない事を言われ、全員が?マークを浮かべるが我が道を行くルビーは説明不足でも気にしない。

(こ、この人達何か変!?)

状況に流されているのを自覚しながら、フェイト・テストロッサは困っていた。

とある理由から半ば箱入りで育ってきた彼女だが、その彼女から見

ても目の前にいる人達は変だった。

彼女は这个世界に散らばったジュエルシードを集めるためにきたのだが、その最初から躓いてしまったのを認めないわけにはいかない。

とんでもない相手とエンカウントしてしまった。

特に宙に浮かんでいる杖が・・・濃すぎる。

この世界でフェイトより先にジュエルシードの回収をしていた栗色の髪の少女・・・彼女のデバイスらしきそれ・・・最初は珍しいインテリジェントデバイスだと思ったがそれだけだった。

言葉を話すデバイスなら自分のバルディッシュも同じなので、別に驚くほどのものではない。

だが・・・それは大いなる勘違いだった。

「と、とにかくジュエルシードはいただきます!!」

『じゃあジュエルシードはあげますからルビーちゃんの嫁になってもらいます!!』

何故かいきなりカウンターでプロポーズされ・・・フェイトはがっくりと脱力した。

何を言っても話が通じないのはこんなにも精神を疲弊させるものなのだと初めて知る。

視線の先で『これでフェイトちゃんはルビーちゃんの嫁ですよ』と喜びのダンスを踊っている杖を見ると疲労が倍増する気がするのは気のせいじゃあるまい。

傍で「何言ってるんだよ!? ジュエルシードはとっても危険な物なんだ!!」と言っているフェレット・・・がんばって!!

頼りになる使い魔も連れて来ていたが、彼女はこの世界での拠点を確保するために動いているのでこの場にはつれてきていない。

つまり、この状況はフェイト一人で切り抜けなければならないのだが・・・正直、無理じゃないかなーと思いは始めている。

「・・・え？」

なぜか視界の隅で、杖のマスターらしい少女・・・たしかなのはと呼ばれていた少女が杖に近づくのが気になった。

ハイライトの消えた瞳でうつすらと笑い、杖に手をかける。

「ルビーちゃん？」

『え？なのはちゃん？』

「お話が進まないからあの子とOHANASIしてきてなの」

「ええええ！？」

驚きの悲鳴はフェイトのものだった。

フェイトに見ている前で、なのはがルビーを投げたのだ。

しかもその先にいるルビーのOHANASI相手とは・・・。

『猫さんリターン！？』

「にゃー！！」

バインドを解かれ、ルビーが戻ってきたことで喜びの悲鳴を上げる子猫だった。

『なのはちゃんは悪魔ですねー！！』

「あくまでも良いよ。悪魔らしいやり方でお話ししているから子猫

さんを宜しく」

『のおおお！！きつい、なのはちゃんの突っ込みがきつい！！』

「にゃ～～ん」

『って言うか本格的にだれかたすけてくださいー！！』

そしてルビーが捕まって悪夢再び。

「あ・・・ああ・・・」

一部始終を見ていることしか出来なかったフェイトが啞然とする。

（か、母さん！！外の世界には怖い人達が一杯です！！）

いくら大丈夫とわかっていても、仲間（？）を解き放たれた獣・・・
あながち間違いじゃない・・・の目の前に話の邪魔だからと放り投
げるとするのは人として何か間違っているのではないか？

「にゃーーーー！！」

『あつはー！！さいつこうにハイって奴みたいですね子猫チャー
ーん！！』

子猫の玩具になって叫んでいるルビーを見ながら、フェイトはガク
ブル震えていた。

まあ、箱入り娘には少々刺激が強い光景なのは間違いない。

だから・・・気づけなかったとしてもそれはきつと仕方のないこと
だったのだ。

「これでゆっくり話せるね？」

「つつ!」

背後、すぐ近くで声がした。

あわてて振り返ったところにいたのは、やはり彼女・・・なのはだった。

「フェイトちゃんって呼んでいいかな？」

なのはの靴に飛行魔法の小さな翼がある。

ルビーに気をとられていた間に、この場所まで飛んできていたようだ。

魔法を発動させるにしても近すぎる。

ニコニコ笑っているその顔を見た瞬間、フェイトは金縛りになった。

「あ・・・あの・・・」

「ごめんなさいなの!」

「・・・え？」

そろそろ死の覚悟を決め始めたところで、いきなり頭を下げた謝られた。

「ルビーちゃんが調子に乗っちゃって・・・で、でもねあんなルビーちゃんでもないところはあるなの」

あたふたとルビーを庇うのは見て・・・フェイトの思考が停止したのもきつと仕方がない事だろう。

読心術など出来ないのはは内心冷や汗だらだった。

なのはとルビーのやり取りではあの程度はまだ普通なのだが、（ルビーと関わるという意味で）素人さんには思いつきり刺激が強かっただろう。

事実、目の前で彼女は硬直している。

自分も少なからずその一端を担った自覚がないのが（ルビーとの関係が）玄人の証拠だ。

「あ、あのね・・・なのは・・・貴女とお話したいなの」「話？」

まだ表情が硬いし、恐る恐るでもあるが、それでも何とか反応してくれた事に少しほっとする。

「なんでジュエルシードを探しているの？あれはとっても危ないものなんだよ？」

「貴女には・・・関係ない」

にべもない。

ルビーの言ったクーデレという言葉思い出すが消去した。

「・・・言っても多分、意味が無い」

「そ、そんなことないよ。話してくれば手伝えることだって「バルディッシュ・・・フォトンランサー・フルオートファイア！」「つつ！？」

『Photon Lancer』

なのはを無視して、フェイトはバルディッシュを砲撃モードにする。

バルディッシュの先端に、フェイトの髪の色と同じ黄金の魔方陣が展開され、稲光のような光があふれ、帯電のような雷がフェイトを包む。

「まって、猫さんが!!」

「・・・封印するだけ、ちょっと痛いかもしれないけど・・・仕方ない」

それでものはは不安に駆られて何か言おうとするが、それより早くフェイトの魔法が解き放たれた。

「え？」

「そんな!？」

『Why?』

しかし、封印の力を持ったフェイトの稲妻は猫の目の前ではじかれる。

「ふ、防がれた!？」

「な、なんで唯の猫が・・・ってあれ？」

良く見れば、猫の寸前でフェイトの放った魔法を受け止めている何かがある。

なのはが目を凝らしてみると、どうにも見慣れたシルエットが浮かんできた。

『あつはっははははあ~~~~!!』

なのはの中で何かがビキリッと音を立てる。

『やらせはせん、やらせはせんぞ！！』
「にゃーーーーー！！」

ここぞとばかりに、魔術式の障壁でドズルごっこをしていたのはルビーだ。

どうも二度の子猫せごめこのきねの相手でルビー自身、相当にハイになっているらしい。

子猫がとっても嬉しそう。

それを見たなのは中では何か切れた。

「ルビーちゃん、調子に乗りすぎなの！！」
『姉さん、お仕置きです』

一瞬でレイジングハートが砲撃モードに組み変わる。

感情に反応してか一瞬でチャージを終えたレイジングハートから、例の砲撃封印が放たれた。

しかも何時もより極太。

色々と物騒で迷惑な封印方法だが、この場においては実に都合が良
い。

ルビーを思いっきり吹き飛ばせるから！！

『くっ、だがしかし！ここでルビーちゃんが敗れてもすぐに第二第
三の「うるさいなの！！」サーセン！！』

フェイトの魔力と重なったなのはの砲撃は、ルビーの障壁を一気に破壊した。

子猫から封印状態のジュエルシードが飛び出し、気を失ったらしい

子猫の体が縮んで行く。

「バルディツシュ」

『Yes . s i r . . . B l i t z A c t i o n 』

「あ、フェイトちゃん？」

魔法を発動させたフェイトが一瞬で移動して、ジュエルシードをその手に掴む。

砲撃の残心中のなのはと廃熱中のレイジングハート　はそれに反応できない。

「・・・ごめんね、もう私の前に現れないで」

唯その一言だけを残しフェイトはまったく速度を緩めずに飛び去っていく、ほんの数秒で姿が見えなくなった。

・・・これはもう追いつけないだろう。

スピードに関してはなのはよりフェイトのほうが数段上のようだ。

「フェイトちゃん・・・」

『大丈夫ですよなのはちゃん、二人の初めての共同作業に成功したんですから、雨降って地固まる。ゆっくり友情を育んで行きましょう』

「ルビーちゃん・・・」

いつの間にか、なのはの隣にルビーが浮いていた。
流石に少し焦げたようになってる。

しかも、アフロの髪をかぶるという念のいりようだ。

・・・シリアスが台無しである。

「ねえ・・・ルビーちゃん？私もつと強くなれるかな？」

『何故、力を求めるんです？』

「・・・あの子、淋しそうな顔してた。きっと、何かあるんだよ。」

『ふむ・・・』

「でも、今のなのはじゃ勝てないかもしれない」

だから強くなりたいのだとなのはは言う。

『なのはちゃんには、フェイトちゃんはどんな風に見えたんです？』

「・・・今にも泣きたいのに我慢している。そんな風に・・・でも今のままじゃお話できないかもしれない」

だから力が欲しいとなのはは言う。

「私・・・あの子とお話したいの」

『なのはちゃん・・・私は誓いましたよ？なのはちゃんが涙を止める者である限り、ルビーちゃんはなのはちゃんと一緒ですよお〜』
「ありがとうルビーちゃん。それとね・・・」

おや？なのはの目が半眼になっている。

「最後だけ綺麗に納めようとしても、そうは問屋がおろさないの。
あとで色々OHANASIするの」

『・・・サーセン、お手柔らかにお願いします』

ちなみに、近くにいた癖に灰になったまま本当に役に立たなかった恭也は士郎と美由希から一方的に高町家伝統のOHANASIされた。

――

そして、月村邸からの帰り道での事。

なのは達は何時の間にか無人の町に立っていた。

「お前は危険だ」

「ここで排除しておく」

前後を仮面をつけた青年に挟まれて・・・。

第九話 誰にも秘密のトップシークレット

以下、ユーノ・スクライアの心の言葉から抜粋。

ユーノです。

今日はいきなり現れた女の子にジュエルシードを持っていかれたとです。

ユーノです。

意気消沈した帰り道でいきなり結界の中に取り込まれたとです。辺り一面モノクロの世界とか言ったら少しかつこよかたです。

ユーノです。

しかも結界の中には仮面をした男二人というドツからどう見ても怪しい男達が待っていたとです。

二人がじりつとすり足で距離を削ってきていますが、素人目に見ても訓練された動きをしているとです。只者じゃないとです。

ユーノです。

こんな怪しい連中に狙われる覚えは・・・一つしかないとです。本当に本当にありがとうございました。

『なのはちゃん一体何しちやったんです？』

「「「るびーちゃん明らかに前なののせいだろうが！！」「」」

4対1でもいじめと思うなかれ、数の暴力なんてルビーには当てはまらないのだ。

『えゝルビーちゃんのせいですかあゝ』

自覚なき加害者は醜悪な物である。

同情の余地なしでファイナルアンサー？

『でもでもゝルビーちゃん、いきなり結界の中に少女を連れ込んで色々悪戯しようとするような変態仮面の知り合いなんていませんよ
おゝ』

「人聞きの悪いことを言うな！！」

男達が異口同音に反論する。

なのはとユーノはルビーに翻弄される二人を生暖かい眼で見ていた。
あの二人の姿は、なのはもユーノも通ってきた道だ。

これは純粹に慣れるしかないので何を言っても無駄なのである。

『それにしてもこれが結界ですかゝすごいですねゝ。これなら近所にも迷惑をかけずに済みます。家の駄フェレットもこれくらいが
んばってくれるとなのはちゃんももつと楽なのに』

「げふ！！」

「ユーノ君！！」

油断していたユーノに飛び火して来た。

思わず吐血するフェレットの姿はとてもシユール、ルビーの傍に安
全地帯など存在しないのだ。

「な、なのは・・・僕はもう駄目かもしれない・・・」

「・・・ルビーちゃん、ひどいよ！！ユーノくんだってがんばって
るんだから！！」

「あ、ありが・・・」

「闘いで役にたたなくても、ユーノ君可愛いもん!!」
「僕の存在意義が愛玩^{それ}!？」

死に掛けだったユーノが飛び起きた。
無意識の加害者も結構ひどいと思う。

「が、がんばれフェレット!!」

「そうだよ、フェレットはイタチ科の肉食小動物なんだから!! ちゃんと牙も爪もあるんだよ!!」

「あ・・・あり・・・がとうございます」

何故か・・・多分、敵であろう仮面ブラザーズ（仮名）に同情されて、ユーノのつぶらな瞳からははらと涙が流れた。

『うさぎやげっ歯類とか狩るために飼われたりしていますね、ねずみ狩りもしますし』

「え？ユーノ君ってウサギさんやリスさんを食べちゃうの!？ひどいよ!!」

「なのは・・・!!」

ユーノの叫びは悲痛だった。

子供は無邪気だけに時々残酷になるのは気のせいかな？

男達もあまりにも哀れで顔を背ける・・・ユーノの不遇に泣いているのかもしれない。

『ちなみに、知ってますかなのはちゃん？ペットのフェレットって発情期になると体臭がきつくなったり凶暴になったりするから、ユーノ君のような雄の場合去勢されているんですよ?』

「そ、そうなんだ・・・」

『飼い主の基本です。ユーノ君はどうだったでしょうか？こんど動物病院につれていきましようか？』

「余計で物騒な事言うなーーー！！」

ユーノの叫びは必死だった。

男としては必死になるべきだし、ならざるをえない。
じゃないといろいろな意味で終わる。

これは男の本能だ。

「こ、この際言わせて貰うけど君だって役に立っていないじゃないか！？」

『ルビーちゃんが本気出したらすごいですよ？具体的に言うなら海鳴が真つ二つになりますね』

「うそだーーー！！」

「ルビーちゃん、それはさすがに言いすぎだよー？」

『えゝマジなのに』

なのはもユーノも信じていない・・・しかし、後日二人はとんでもないモノを目にして、このときの会話を思い出すことになる。

「くつつ、こいつ！？」

「落ち着いて、奴のペースに乗っちゃ駄目！！」

ルビーたちのやり取りに男達が苛立った言葉を交わす。
内容はもつともだ。

・・・微妙に女言葉なのが気になるが。

とにかくルビーに付き合っていたら全然話がすすまない・・・一回冷静にならないと・・・。

『所で貴方達、結局何しに来たんです？』

「お前を排除にきたって言っているだろうが！！」

「今気づいた風に言うな！！」

うん・・・冷静になるの無理！！

二人揃って既にルビーのペースの中、仮面の下表情がたやすく予想できる。

『うーん、狙われる覚えがありませんね』

「ふざけるな！！私の体を散々もてあそんだくせに！！」

「「な！？」「」

片方の仮面男がとんでもない事を言い出した。
その内容になのはとユーノが反応する。

「ル、ルビーちゃんどういうこちよなによ！？男のひちよのきやらだをもてあそんだって本当にやの！？」

『落ち着いてくださいなのはちゃん、じゃないとルビーちゃん萌えちゃいますよう』はい深呼吸、ヒッヒッフー』

「ヒッヒッフー」

深呼吸じゃないのはお約束。
テンプレ

「ルビーちゃん、責任は取らなきゃ駄目なの！！」

『なのはちゃん、全然落ち着いていませんね？とはいえ、ルビーちゃん本当に・・・あれ？』

何かに気づいたルビーが声を上げると、今度は男達の方がビクッと反応する。

「な、なんだ？」

「・・・変身魔法ですか？貴方達そろって姿を変えていますね？」

「つつっ！」

「それにこの魔力・・・ああ、貴方達の正体は・・・」

「それ以上しゃべるな！！」

二人同時に魔法を発動して距離を詰めて来た。

これ以上ルビーに喋らせないつもりだろう。

今のなのはには二人同時に相手をする事はできない。

片方に気を取られている間に、もう一人に隙を突かれてしまう。

それ以前に、バリアジャケットさえ着ていないのだ。

「仕方ありませんね、レイジングハート？」

「はい、姉さん」

「ちよつと早いですけどアレのお披露目、行ってみましょうか？」

「あ、レイジングハート？」

なのはの手の中からレイジングハートが飛び出した。

ルビーとレイジングハートが徐々に近づき・・・接触した瞬間、目がくらむような光が放たれ・・・ズドンという腹に来る爆発と共にドクロ型きのこ雲が立ち上がった。

「うーん、失敗しちゃったみたいですね」

「まだシンク口率の調整が足りなかったみたいです。すみません姉さん」

『気にしなくてもいいですよレイジングハート、誰もいきなりしょっぱなから成功するような主人公ご都合なんて期待していませんから〜』

煙が晴れた爆心地はクレーターになっていた。

周りにはなのはとユーノが目をナルトにして倒れている。

一応障壁で守ったし、あの様子だとビックリして気絶しているだけのようだが・・・問題の二人組みの姿が見えない。

『爆発で結界が壊れているようです』

通常空間に戻ることで、破壊された物が元の姿を取り戻してゆくが、これが通常空間だったら壊れた物に加えて人間もいたはずだ。

それを計算に入れての実験だったのだろう。

おかげで人的被害は一人と一匹ですんだ。

なのはとユーノにはご愁傷様である。

『警戒して一旦退いたようです』

『慎重ですね〜よっぽど悪いことをしているんでしょうか?』

世の中の慎重派の人間に喧嘩を売るような物言いだ。

『かなりダメージも負っていると思いますけど・・・』

結界を破壊するような爆発の目の前にいて無傷というのはありえないだろう。

しかし、追撃は出来ない。

何故ならば肝心のなのはが伸びたままだ。

『ふむ・・・さて、レイジングハート？彼らの姿は記録していますね？』

『もちろんです』

『それじゃあルビーちゃんのデータも送りますから・・・まずは・・・』

この後、ルビーとレイジングハートはそろってなのはから「あんな物騒なことしちゃ駄目なの!!」とOHANASIされることになる。

ちなみに、ルビーはなのはとユーノにあの二人についてある事ない事吹きこんだ。

何故ならそっちのほうが面白そうだったから、他に信じられる説明が出来る人間もいなく・・・これが元で次になのは達が再会した時に一悶着する事になるが、それはまだ先の話だ。

それよりも近い、約12時間ほど先の未来・・・つまり翌日。

「いたぞ、あそこだ!!」

「逃がすか!!加速装置!!」

「左から追い込め!!」

「「にゃー!!」」

海鳴の街中を、数人の男達に追われながら妙に黒く焦げた感じの二匹の猫が逃げていた。

一見して動物虐待の図だが、誰もそれをとがめようとしないうと...
つと言うよりも見た瞬間に悲鳴を上げて逃げる人までいた。

・・・追いかけている男達の目が普通じゃないのだ。

目が血走っている。

ギラギラと欲望に染まっている。

はつきり言って怖かった。

「じ、十万って何！？何なの！？」

「知らないわよ。ってひゃあー！」

「っちいー！」

横から不意を突いて伸ばされた腕を、寸前で何とかかわす事に成功する。

現れたのは一見してヲタ男・・・平日の昼日中からアニメのキャラTを着ていれば疑いの余地はない。

しかも、サイズが2サイズは小さいのを無理やり着ているのでシャツのキャラが引き伸ばされ、元の顔が解らなくなっている。

・・・サイズがなかったのだろうか、そこまでして着たいのか？

「デブ！！幼女のチツスがブヒーー！！」

さらに意味不明だった。

意味不明だけに余計に怖かった。

しかも目がオームの攻撃色みたいに真っ赤だ。

「っひっ！！」

二匹の猫は恐怖にかられてダッシュで逃げる。
逃げなければ何をされるかわからない。

「はあ・・・はあ・・・」
「ゼツ、ゼツ・・・」

何とか引き離れた二匹の猫は、植え込みの中に飛び込んで隠れると、息も絶え絶えに喘いでいた。周囲にはまだ猫達を探している男達の気配がする。

「なんで・・・急に・・・」
「あ、あれ！」
「え？なあああ！！」

”それ”を見た瞬間、二匹の猫は揃って追われている立場も忘れて声を上げた。

二匹が目を限界まで開いて見たのは、壁に貼られたポスターだ。

【尋ね猫 逃げ出してしまった飼い猫を探しています。良く似た双子の猫です。見つけてくださった方にはお礼として一匹十万円、そして美少女からのキッスを進呈しますよぉ〜】

そしてその下にはご丁寧に写真付き・・・写っている写真はどのような猫達だった。

更に、ポスターの最後には見覚えのある杖をかたどったマークがまるで笑っているかのように・・・。

「「あんのくそ杖！！！！」」
「なんか声がしたぞ！？」
「何処だ！？」
「あっちデブ！！」
「「っつ！！」」

ほとばしるパッションが思わず口から出てしまった。
周囲に人の気配が充満し始める。
包囲網は確実に狭まって来ていた。

「こ、こうなったら・・・」
「仕方ないよね、ね？」

猫達の魔力が高まり、その姿を灰色の魔力光が覆い尽くす。
はじけた魔力の中から現れたのは猫ではなかった。

昨日、なのは・・・というカルビーを狙ってきた二人組みだ。
当然だが仮面はつけていない。
おかげで素顔の状態だが、整った顔立ちの青年だ。

「ごめんねクライド、こんな事で姿を借りて」
「力をかしてね」

お互いの変身が完璧だという事を確認しあい、二人は並んで茂みの外に出た。

そのまま平静を装って歩き出す。

途中で自分達を追いかけていた連中とすれ違う。
飢えた獣のような姿がグールのようでびびる。

二人が並んで歩いていると人目を引くが、誰もが双子だと思い、それ以上に興味を引く事はない・・・はずだ。

「・・・なあんたら？」
「は、はい!？」

不意に声をかけられ、二人は揃って飛び上がりそうになるのを自制した。

「なんだ？」

「に、にやんでもありませんよ」

「そ、そうですにや」

なんか言葉が支離滅裂になっている。

どう見ても不審者のそれだが、止まらない止められない。

「なんか変だが・・・まあいいや、このあたりでよく似た猫を見なかったか？こんな感じの」

そう言って見せてくれるのは例のポスターのチラシバージョンだ。

ここまで用意周到にやらかしてやがったのか！？

一日で一体どれだけ広範囲にばら撒いたんだ！？

写真の中の自分と目が合った二人の顔が引きつる。

「さ、さあ・・・知らないにや」

「そ、そうにや、あっちのほうで見たようにや」

「何、本当か！？」

「「ホントホント」」

インディアン嘘つかないという風に肩を組み、頷きあう。

「ありがとうよー！おい、あつちらしいぞー！」

「俺、これが終わったら「お兄ちゃん大好き」って言ってもらって

からキスしてもらうんだ」

「甘え！！俺はすでに写真スタジオを押さえてんだ！！奇跡の瞬間を永久保存するんだよ！！」

「限定フィギュアに幼女のチッスなんて夢のようデブ！みーなーぎってきたブヒー！！」

「なのはの唇は俺が守る！！」

ドスドスとまるでバッファローの群れのように駆けて行く男達……いや、あえて漢達と呼ぼう。

彼らの姿が見えなくなるまで、二人はその場で互いを抱きしめあつて怯えていた。

まあ、あそこまで欲望に忠実な連中を前にしては無理もない……割と美青年の部類のそっくりさんが二人、抱き合っている姿がどういう風に見えるかはこの際置いておこう。

……ところで、最後に何か妙なのが混じっている気がしたのは気のせいかな？

「……くっそ……あの杖……今度こそぶっ壊してやる！！」

「何であんなのが存在しているのよ。ここは魔法が存在していない世界のはずでしょう！？」

口々にルビーへの怨嗟を並べ立てる二人。

割と美青年の部類のそっくりさんが二人、道端で悪態をついている姿がどれだけ痛く見られるのか……以下略。

「あーちよつとキミ達？」

「「え？」」

ルビーへの憎悪に熱くなっていたらしく、二人はいつの間にか自分の傍に第三者がいる事に気が付いていなかった。

そこにいたのは制服を着た青年・・・しかも一人ではなく5人ほどが周囲を固めている。

全員警棒を手に持って臨戦体制だ。

・・・二人にとってはWhat?な状況である。

「ちょっと訊きたいんだけど・・・これはキミ達かな？」

一番近くにいた警官が、一枚のポスターを見せる。

【変質者注意 ×月×日誘拐未遂事件発生 犯人逃亡中 二人組みの犯人は仮面をかぶっている為に素顔は不明 髪や体格、服装が良く似ているので双子と思われる】

そして例の如く、印刷された写真は昨日の襲撃のときの自分達だった。

「「げ!!」」

二人揃って声をあげてしまった事は責められるものではないだろう。たとえそれで容疑を固めてしまったとしても・・・案の定、警察官の目が鋭くなった。

「これって君達そっくりだよな？仮面はつけてないけど服装とか髪とか？」

「そ、そうかもしれませんね」

苦しいが言い訳を通すしかない。

魔法を使えば簡単かもしれないが、管理外世界での魔法の使用はご法度だ。

しかも、彼等は現在隠密行動中で派手な事をするわけにもいかない。下手をしたらあのくそ杖に気づかれてしまう。

「ちょっとOHANASI聞かせてもらえるかな？」

「は、はい……」

ニコニコ笑う警察官に、二人は頷く事しかできなかった。

余談では在るが、別世界にある巨大組織の……それも結構上位の男性が、いきなり休暇を取って第97管理外世界と呼ばれる世界にあわてて向かったという未確認情報がある。

更には、その97世界のとある町の交番にイギリス紳士風の老人が現れ、容疑者の身元引受人になって引き取ってゆくという事があったそう。……ちなみに、老人の組織では軽く対人恐怖症になった二人のネコミミな女性が「杖怖い〜杖怖い〜」と呟いている姿がしばらく見られたそう。

――――

『フフ、これでしたらあの猫さんは海鳴に来るのを躊躇うでしょう』

『姉さんも裏で煽っていたようですし……トラウマになっているのでは？』

『え〜何のことかルビーちゃんわかりませんよあ〜』

深夜、子供だけでなく大半の大人も寝る時間、当然だがなのははベツドで、ユーノは部屋の隅の籠の中ですやすや眠っている室内で、二人を起こさないように気を使いながらルビーとレイジングハートが談笑していた。

酒がのめれば乾杯していたかもしれない。
内容は例のチラシとポスターと被害届についてだ。

『少し気の毒な気がしますね』
『それは誰がですか、レイジングハート？あの二人に関しては向こうから仕掛けてきたんだから、被害者は私達じゃないですかあゝ？』

一概にそう言え無い事が色々とレイジングハートのデータベースには記録されているが、過剰防衛などとは空気を讀んで口にはしない。

『それにしても、なのは様の唇を賭けるなんて、どう考えてもやりすぎですよ姉さん？』

『誰がなのはちゃんの唇なんて賭けますか？』
『え？だって幼女って・・・』

レイジングハートの中では幼女なのはだったらしい。
まあ普通は誰でもそう考えるだろう。
なのはが聞いてたらなんと言うか知れないが。

『ちゃんと似顔絵も描いていたじゃないですか？』
『・・・まさか姉さん』

あのポスターの最後にあつたイラストのことを言っているのではあるまいな？

『でもルビーちゃん口がないからどうやってキスしましょ？』

テヘツと笑っても誤魔化されない。

それを世間様は詐欺と言うのだ。

今頃、血眼になって猫を探している連中はそのまま血涙を流すかもしれない。

そもそも、ルビーの何処が少女だ？

『女というのはピュアな心を持ち続ける限り何時までも少女なのです』

『姉さん、それダウトです』

『ええ？』

『ピュアの意味を知っていますか？』

『純粹つて言う意味でしょう？ルビーちゃん何時でも純粹ですよ』

ああ・・・その通りだ。

ルビーは何時でも何処でも純粹に面白おかしく引つ掻き回す。

これは話になら^{ためたな}ないとレイジングハートは話の矛先を変えることにした。

『それにしたつて、あの賞金十万円というのは・・・』

『”本当に捕まえることが出来たら”、それこそ忍さんに文字通りルビーちゃんが一肌脱いでもお支払いしてましたよ』

ルビーも連中が捕まるとは露ほども思っていない。

少なくとも、この世界の一般人が何の用意もなく魔導師をどうにかできるとは思えない。

連中の目的は不明だが、かなり後ろめたいことをしている様だと言

うのはわかる。

自分から騒ぎを起こすことは極力避けるだろう。
同じ理由で秘密を守るために必死で逃げ回るはずだ。

そこまで計算した上での、はっきり言って嫌がらせ以外の何物でもなかった。

あの連中はそれに見事にはまったのだ。

『国家権力って偉大ですよ〜日本の警察って本当に優秀ですよ〜』

そして今日、例の二人組みの姿をしているところを警察に捕まったらしい。

決定的な証拠がない事と保護者の人間が引き取りにきてアリバイを証明して連れ帰ったという警察無線をレイジングハートが傍受した。

これで少なくとも連中が三人以上であるという事がわかった。

何が目的かはいまいち漠然としているが、連中に地の利がこつちにあることも示せたので牽制くらいにはなるはずだ。

ちなみに被害届を出すときには、ルビーがウィンウィンな感じに魔術を使い、警察官を操って作らせた。

『あの人達の目的はジュエルシールドじゃないようでしたから、これだけしておけば安易に手を出してこようとは思わないでしょう』

少なくとも、あの猫の姿と男の姿で町中を歩く事は出来まい。
かなり行動は制限されるだろう。

最終的にはどうにかしなければならぬかもしれないが、ジュエルシールドの問題を抱えている現状、そこまで手が回らない。
なのはの負担が大きすぎる。

なので実はこれが今出来る精一杯だったりするわけで、先にジュエルシードの問題を解決するのがルビーの判断だ。

『……姉さん？聞きたいことがあります』

レイジングハートが不意に改まってルビーを呼んだ。

『何ですか？』

『なのは様は……”候補者”なのですか？』
『……』

ルビーが沈黙した。

静寂が刃物のように鋭く場を満たしてゆく。

話の中心であるなのはスウスウ寝息を立てて眠っていて起きる様子はない。

『……誤魔化しは無駄のようですからあゝ質問を質問で返しますが、一体どうやって知ったんです？そんな情報を与えた覚えはないんですけど？あゝ？』

『平行世界の概念、そして姉さんの能力、魔法使い……それらを総合的に見て姉さんの”本来の在り方”を推理しました。……すいません』

『気にしないでいいですよあゝむしろさすが洗脳探偵、感心しますねゝあの凜さんもシロウさんも、結局ルビーちゃんの本来の用途には気がつかなかったって言うのに』

ルビーに不快な様子はない。
これはむしろ楽しんでいる？

『ルビーちゃんに関してはレイジングハートは気にしなくても無問題、貴女の立場ならルビーちゃんも同じ事を聞きましたよ。なの^マはちゃんに^ス関わる事ですからあゝ』
『ではやはり・・・』

レイジングハートは確信した。
自分の推論は正しかったのだと。

『やはり、なのは様は候補者・・・』

『さて、それはどうでしょう？』

『え？』

『ルビーちゃんのマスターになることと、候補者であることは必ずしも同意ではありませんから』

『・・・しかし、姉さんだけはなのは様が候補者なのかどうかを知っているはず。姉さんは本来その為の礼装のはずです』

ルビーはいったん言葉を切る。

会話は終わりというよりも、何を話そうかと迷っているようだ。

『ルビーちゃんの製作者のくそ爺はですねゝ、作っている間に気づいちゃったんですよ。ルビーちゃんがパンドラの箱だって事に、一応は完成はしてくれたんですけどゝ』

『それは・・・確かに姉さんの能力にはそういった一面がありますが・・・そのせいで封印を？』

『爺がどういふつもりだったかは知りませんし、知りたくもないですけど、概ねそういうことでしょう。シロウさん達は最後までルビーちゃんの性格のせいだって思い込んでいましたよ、失礼ですよー？』

それに関しては否定できない。

レイジングハートだって、ルビーの正体に感づかなければ同じように思っていたかもしれない。

『なのはちゃんに嫌われたくないから、レイジングハートの疑問にはノーコメントです』

『・・・判りました』

『ところでえ〜』

ルビーの口調が変化する。

『・・・ユーノ君？寝てますよねえ〜？寝たふりで乙女の会話を盗み聞いたりしていませんよねえ〜？』

おどろおどろしいルビーの声に、籠の中で丸くなっているユーノの毛が一瞬、ボワツと逆立ったように見えた。

『なのはちゃんには秘密ですよ〜もし話したりしたら問答無用で〜ねじ切ります”から』

ユーノの寝ている籠が小刻みに揺れている。

それに満足したルビーは、定位置であるベッドで寝ているなのはの枕元に移動して寄り添った。

レイジングハートも話は終わりとばかりに何も言わない。

ユーノは「なんかとんでもない秘密を知ってしまったー！！」と「一体何をねじ切られるの!?」で眠れない夜が続き、体重が激減することになる。

第九話 誰にも秘密のトップシークレット（後書き）

次回ですが、少し投稿が伸びます。

少し筆が止まってしまつて、来週の投稿に自信がないので休みます。
一週間あれば何かもう一味つかめると思っていますので。

第十話 とある愉快型魔術礼装の一日

・・・例えば、日はまた昇る。

・・・例えば、明けない夜はない。

・・・例えば、朝は誰にでも等しく訪れる。

昔の人は良い事言った。

実に真理だ。

朝は誰の上にも平等に訪れる。

もちろん高町家にも・・・母の桃子が作った朝食を食べる父の士郎に長男の恭也、長女の美由希・・・とここまではまともだ。

古い歴史を持つ剣術を受け継いでいて、桃子以外はそれぞれが結構な使い手だが・・・現代の魔術師であり魔導師でもあるなのは、人語を話し魔法を使うフェレットのユーノ、魔法の補助をするデバイスのレイジングハートに・・・何よりルビーと比べたらまともな部類だろう。

真人間とファンタジーの比率が半々なこの面子が一堂に会している状況をまともと捉えていいのかどうかという問題はあるが、それはそれである。

ちなみに、ルビーとレイジングハートは当然物を食べはしないが、既に家族扱いなので団らんの場には必ず混ざることになっている。

『うっん』

「どうしたのルビーちゃん？」

妙にうなって困っているのをアピールしているルビーになのはが問
いかけた。

『足りない・・・と思うんですよ』

「何が？」

『刺激が』

・・・刺激は高町家の日常であり、つまるところおおむねドタバ
タであり、原因がルビーだったりするのはもうデフォルトだ。

その元凶が刺激が足りないなどと片腹痛い。

「・・・また何かするつもりなの？」

『なのはちゃんも魔術師として成長して、魔導師としてもがんばっ
ています』

「うん、なのはががんばっているよ」

ユーノが合いの手を入れてきた。
なのはが心なし嬉しそうだ。

「もう僕に教えられることはないのかもしれない」

『あれ？ユーノ君なのはちゃんに何か教えていましたっけ？』

「教えてるよ！！魔法の構成とか構築とか色々！！」

『えー？なのはちゃんの魔法の先生はレイジングハートだと思って
いました』

ユーノいじりは既にルビーの日課となっている。

最初は落ち込んでいたりしたユーノだが、何とか持ち直すというか
ある程度までなら耐えられる程度には順応しているらしい。

「ルビーちゃん、ユーノ君もとってもがんばっているよ」

「な、なのは・・・」

「ユーノ君が後ろを守ってくれるから、背中が暖かくて安心できるんだよ」

助け舟はなのはの方からやってきた。

ユーノは全米並みに感動の涙を流している。

「何時もありがとうね、ユーノ君」

「・・・そうか、僕にはまだ帰れる場所があっただね、こんなに嬉しい事はない」

「あはは、大げさだよ」ファースト乙だね」

あれ、なんで士郎さんと恭也さんの箸と茶碗が握りつぶされているんだろーか？

『とにかく、このあたりでマンネリを防ぐために何か新しい要素を加えるべきじゃないかと思うんですよ』新しいアイテムとか必殺技とか伊達じゃないニユーなお仲間とか』

・・・また訳のわからないことを言い出したものだ。
そんな物が都合よく現れるわけがあるまい。

『そういえば、なのはちゃんのエロカッター衣装のお披露目がまだでしたね』

「そんなものは一生封印していて良いの!!」

『えー仕方がない。美由希さん着てみませんか?』

「断固拒否するわ!」

以前のセーラーな自称美少女ファイターがよほど嫌だったのか・・・

美由希が小太刀を構えて拒否してきた。
朝食の席に真剣を持ち込んでいたらしい。
しかもじりじりと距離をとっている。

「・・・あのルビーちゃんビーム（なのは命名）が相当に堪えたらしい。」

『駄目ですか・・・それじゃあ桃子さんは・・・』
「何かしら？」

『・・・いえ、何でもありません』

ルビーはあっさり引き下がった。

だって・・・あんな世紀末霸王のスタンドが背後に見えるような相
手にお茶目は出来ないしくない。

ピンポン

「「「「「ん？」「」「」」」」

全員が来客を告げるインターフォンの電子音に反応する。

「誰だろ？」

誰かが来る予定はなかった。
それに今は朝食の時間だ。

誰が来たにしても早すぎるだろう。

「あ、なのはが出るよ」

首を捻っていると、一番玄関に近い場所にいたなのはが名乗りを上げた。

誰が来たにしても、直接見れば全ての疑問は解決する。
名探偵もビックリだ。

そんなことを思っていたら二度目のチャイム。

「はいはい、今行くなの」

テテテと走っていく末っ子を見送る皆の目が優しい。

なのはが玄関にたどり着くと、やはり外に誰かがいるらしく、ガラス越しに人型のシルエットが見えた。

「たのも」

「どちらさまですか？・・・え？」

玄関を開けてたなのはが固まったのは、その先にいる人物が見ず知らずの人物だったからではない。

寧ろ良く知っている人間だったからこそ固まった。

「おはようなのはちゃん、改めましてたのも」

ニコニコと、彼女は何時もの物静かさはちよつとずれた調子でたのもを繰り返す。

「えっと・・・すずかちゃん？」

見間違えじゃないのはわかるがそれでも疑問符が付いてしまう。
なのはを見てニコニコ笑う彼女は間違いなくすずかだ。

・・・なのはは確かに平穏が崩れ去る音を聞いた。

――――――――――

「弟子にしてください!!」

「「「「「な―――!?!?!」」」」」

「あらあら?」

家に上がり、家族を前にしたさすが開口一番、放った言葉に感心している桃子を除く全員が悲鳴を上げた。

弟子入り自体は確かに驚きの申し出だが、それだけでは悲鳴を上げたりはしない。

士郎はすでに恭也と美由希を弟子にしているのだから、後はさすがの資質とかそういう問題である。

しかし、さすがが頭を下げている相手は・・・。

『ルビーちゃんにですか?』

「僕に?」

ルビーとユーノだったからさあ大変だ。

つまり、すずかは魔導師か魔術師になりたいらしい。

「す、すずかちゃん落ち着いて、ユーノ君はともかく、ルビーちゃんに弟子入りなんてそんな人生投げ出すような事言っちゃ駄目だよ!」

「え?でもなのはちゃんも自分で師匠に弟子入りしたんでしょ?」
「既に師匠扱い!?それはそうんだけど・・・あのときのことは時々認めたくない若さゆえの過ちだったような気がしたりしなかつ

たり・・・」

思い出すのは・・・魔法少女したり、漫画の特訓をそのまま実行され、しかも疑う事なくがんばったじぶんだったり・・・ろくな思い出がない。

一応、きちんと魔術師にはなれたが、わき道寄り道は当たり前で脱線しまくりだった。

「し、忍さんは何って言ってるの？」

「え？お姉ちゃんが礼装とかデバイスに興味ない？って薦めてくれたの」

そういえば、すずかは技術者志望だったと思い出す。

ルビーやレイジングハートに興味を抱かないわけがない。

忍など直接分解させるなどと言い出していたほどだし・・・やはり姉妹か。

その為には魔法と魔術を学ばないわけにはいかないという流れなのだろう。

・・・あとついになのはと一緒にいられるからとかそういう理由があるかどうかは突っ込まない。

「・・・忍」

最近、恋人の新たな一面ばかり発見する恭也が頂垂れているが・・・ごめん、フォローできるやつがない。

「うーん、教えてあげたいのは山々なんだけど・・・」

ユーノが申し訳なさそうに謝った。

既に毒は食っている気がするので、皿までも構わないのだが、ユーノのデバイスレイジングハートはなのはに譲ってしまった。

つまり、魔法文化のないこの世界ではさすがのためのデバイスが用意できない。

勿論、デバイス無しで魔法を使うことは不可能ではないが、ユーノはそもそもにして教師ではない、本業は発掘家なのだ。

基本的に、魔法のほとんどはレイジングハートの中に入力していたのを使っていたので、デバイス無しに教えられる魔法は多くない。

「念話や簡単な結界くらいでいいなら・・・」

「それでいいです。ユーノ君、お願い！！」

「わ、わかった」

まあそのくらいならとユーノは了承した。

大きな魔法は無理だが基礎くらいなら何とかなるだろう。

自分で言っている通りに、そろそろなのはにユーノが教えられることはなくなっている事もあるし・・・それに問題はもう一人の師匠候補のほうだ。

『すずかちゃんが弟子二号になればなのはちゃんとあわせてプリティイーでキュアキューアですねー！！』

まずい・・・面倒こじな方はユーノより乗り気だった。
しかもとんでもない未来構想まで立ち上げている。

・・・ところでやはりすずかが黒か？

最近、なのはがレイジングハートばかり使っていたので寂しかったこともあるかもしれない。

さすがに魔術師になれば、自分の出番が増えると黒い事も考えているのだろう。

・・・このままでは大事な友人までがルビー色に染まってしまうと考えたら・・・なのはの口は勝手に動いていた。

「す、すずかちゃん！！なのはが教えるの！！」

「「「「「え？」「」「」「」」」」

いきなりの爆弾宣言に、すずかだけじゃなく全員が目丸くする。

・・・なのはがすずかに魔術を教える？

「・・・なのは、友達とはいえ人に物を教えるというのは難しいことなんだよ？」

「う・・・」

士郎がなのはを嗜めた。

既に二人の弟子を持つているため、その言葉には説得力がある。

「そもそも、なのはもまだルビーちゃんに教えを請うている立場だろう？こう言っちゃ何だがまだまだ未熟だ。そんななのはが弟子を取るなんて・・・」

『いえいえ、なかなか面白いかもしれませんよ』

「ルビーちゃん？」

士郎の言葉に異を唱えたのは何とルビー本人だった。

『最終的にはなのはちゃんと一緒にルビーちゃんが色々教えることになると思いますが、魔術回路構築以前の基礎ならなのはちゃんが教えても問題ないでしょう。なのはちゃんのおさらいにもなりますし』

「うーん、確かに一理あるか？」

実際、恭也が美由希の修行を見ることがもある。

それが両者にとっての相乗効果を生み出すことがあると士郎も知っていた。

基礎を教えるということは自分の能力を見直すことになるのは勿論、自信に繋がる事もある。

ルビーの言葉を借りればいい刺激になるだろう。

『おねがいしますよ、なのはちゃん・・・じゃなくてなのは先生』

「せ、先生なの？」

「宜しくね、なのは先生？」

「す、すずかちゃんまで？」

高町なのは、8歳にして初めて弟子をとる。

これが彼女の未来に大きな影響を与えたり与えなかったりするかもしれない。

そして昼時・・・ルビーは翠屋にいた。

意外かもしれないがルビーはちゃんと仕事をしている。

もちろん表に出るわけにはいかないので、厨房で例のテレキネシスのな何かを使った手伝いだ。

『食っちゃ寝のニート騎士王とは違うのですよ』

本人が聞いたら平行世界の果てだろうと理想郷アウアロンだろうと関係なく、約束された勝利の剣を持つて突撃してきそうだとはいえ、こればかりは事実であり、覆せない。

しかも、ルビーはなのはとパスが繋がっている限り疲れ知らずなので、重宝されていたりする。

デメリットは人を雇えないということだが、これに関してはルビーが必要以上にがんばってくれるので問題無し・・・経営を圧迫するのは何時だって人件費なのだ。

『・・・あれ？フエイトちゃん？』

「ん？どうかしたのかい？」

『近づいてる？チャンス！土郎さん、すいません・・・少しはずしていいですか？』

ルビーの言葉に土郎が苦笑して頷いた。

「がんばってくれているルビーちゃんに駄目なんていえないな」

これまた意外かもしれないが、ルビーはやるべき事はきちんとやる義理堅い性格でもあった。

何時もの悪戯でプラマイナゼロなのだが・・・苦笑する土郎に許可を得たルビーは厨房の窓から飛んでゆく。

『じゃあ、ちよつとすいませ〜ん』

フェイトはジュエルシードを探して街中を歩いていた。

実は、昼間っからふらふらしているということでは何度か補導されかけていたりする。

見た目小学生の彼女が、一人で学校にも行かずに歩いていれば十分職質対象になるが、こればかりはしょうがない。

ちなみというか、当然というか、当たり前というべきかバリアジヤケットは解除して、この世界で買い揃えたシャツにスカートの服一式を着ている。

不意打ちされるとつらいが、あの格好で街中を徘徊していると補導が通報にレベルアップしてしまう。

「・・・そんな事をつらつらと考えていたら、」それがフェイトの目の前に現れた。

「・・・何これ？」

「・・・それは”畏”だった。

まず、角を曲がった先の道のだ真ん中に、何故か皿に乗ったシュークリームが、何故か何の脈絡もなく置いてあった。

それだけでも変だが、何故かシュークリームの傘になるように、何故か漫画にしか出てこないようなメートル単位の大ささのザルがつつかえ棒で支えられている。

しかも何故かザルの色が赤い。

現状の描写に何故と5回も繰り返してしまったが、それだけ意味不明だということを解って欲しい・・・という意図があるのだろうか？

確かに分類上は罾にあたるのだろうか、これはむしろ馬鹿にするために用意したのではあるまいか？と思う。

しかも、つかえ棒には縄が結ばれ、反対の端は道路の植え込みの中に繋がっていた。

・・・どう見ても植え込みは小さすぎて人の隠れるスペースはない。

だが、それがむしろフェイトの危機感を煽る。

確かに、あの植え込みに人が隠れるスペースはない。

しかし、もっと小さなものだったらどうだろうか？

・・・例えば、杖とか？

脳裏に浮かんでくるのは先日出会ってしまったとんでもデバイス・
・あの大きさなら、植え込みの中にも隠れることが出来るのではないだろうか？

無視するか・・・それとも魔法をあのかの植え込みに叩き込むかで迷う。

「・・・見なかったことにしよう」

フェイトが選んだのは前者だった。

余計なことをして蛇を出すのはごめんだし、自分から関わりになりに行くのはもっとごめんだ。

おそらく最も建設的な結論に達した彼女の心境を言葉にするならば、
「スゲーーッ爽やかな気分だぜ、新しいパンツをはいたばかりの正月元旦の朝のようによォ~~~~~ッ」ッとまあ女の子の心理描写としてどうかという問題はあるかもしれないが、そんな感じだった。

即座に竜巻がおきそうな速度で180度ターンを決めつつ駆け出すために足に力を入れ……。

『何処に行くんですか？』

「え？ ツツキヤー！ー！！！」

……振り返れば奴^{ルビ}がいる。

「キヤーキヤーキヤー！！！」

いきなり意表を突いて、しかもそれが今会いたくないなーとか思っていた相手ならなおさらパニックになる。

フェイトもそれは例外ではなかったらしく、しりもちをついて後ずさった。

魔法を使うことさえ思いつかない慌てぶりだ。

そのせいでスカートがめくれて乙女のトップシークレットがチラチラ見えている。

『眼福眼福』

……さて、フェイトは目の前の罫を見て真後ろにきびすを返したのを覚えているだろうか？

ということはだ、そのまま後ろに下がっていったらどうなるかという……。

「あ……」

『フィーツシュー！！』

フェイトの手がザルのつつかえ棒を払ってしまった。
当然、支えを失ったザルが落ちてきてフェイトにかぶさる。

『フェイトちゃん、ゲットだぜ!!』

ザルの色が赤かったのはそういうことだったらしい。

「・・・貴女は何を考えているんですか？」

偽モンスターボールに捕獲され、そのまま『幼女お持ち帰りイイ
!! イヤッフリー!!』と近くの喫茶店・・・翠屋に連行された
フェイトは「私は今、怒っていますよ?」と・・・口にはい
ないが蝸牛の迷子のように不満を全身で表現していた。

おかげで目の前にあるおいしいそうなシュークリームにも手をつけ
ようとはしない。

・・・ちなみに、罠に使われていたものだ。

『何がです?』

そして対面の席に座っているのは・・・座っていないで浮いている
のはルビーだ。

「・・・この世界には魔法はないはずだ。それなのに貴女は堂々
と・・・」

『それなら大丈夫ですよ、人払いの結果ははっていましたが、だ
からフェイトちゃんがあんなに叫んでも誰も来なかったでしょう?』

「う・・・」

フェイトが赤面する。

今思い出してもちよつとどころじゃなく恥ずかしかったらしい。

・・・スカートがめくれて色々見えていたし・・・そういう意味では人払いの結界に感謝をしなければならぬだろう。

『それより、シュークリームをどうぞまだあったかいんですよ〜焼き立てですよ〜後でおいしくいただくスタツフはいないので出来れば食べて欲しいんですよ〜』

白昼堂々、拉致をやらかしておいてシュークリームを薦めてご機嫌を取ろうとする思考はやはり未知だ。

しかもメタだ。

明らかにフェイトには荷が重い。

念話で相方に応援を呼んでおいたほうがいだろう。

『あはぁ〜ついでに〜フェイトちゃんとゆっくりお話がしたかったんで、このお店にも結界を張らせていただきました〜』

「な!？」

言われて気が付いた。

念話が妨害されている・・・声が届かないし聞こえない・・・何時の間に!？」

魔力の発動の兆候は感じられなかった。

となると考えられるのは最初から結界を展開されていたということだ。

『ルビーちゃんたちの結界は魔導師さんたちの結界ほど強固じゃありませんけど、逆に隠密性は上のようにです』
「くっ!!」

もつと早くに気が付くべきだった。

人払いの結界にしたって、言われるまでフェイトはあの場に結界が張ってあったことに気が付かなかったのだ。

フェイトの警戒心がMAXを振り切る。

思わずポケットに手を入れ、周囲を見回して・・・いない？

『なのはちゃんなら今は学校ですよーユーノ君も付いて行っているからいません』

「つつ!!」

心の中を読んだようなルビーの言葉に、フェイトがはっとする。

『この結界は念話の妨害くらいにしか役に立ちません。気に入らなかつたら普通に外に出られますから魔法は勘弁してほしーのですよ。お店にいる人は一般の人なんですよおー』

数秒間、フェイトがルビーを睨むが・・・諦めてポケットから手を出した。

テーブルの上に三角形の金色の金属プレートが置かれる。

『これがフェイトちゃんのデバイスですか？お名前は？』
「・・・バルディッシュ」

フェイトは素直に答えた。

先日のようなのはごめんなのだろっ。

それくらいならば自分ではらしたほうがいいと思っっているらしい。

『こんにちわ、バルディッシュ?』

『・・・Hello』

「何故・・・デバイスがマスターの手を離れて自由行動している?」

フェイトの疑問は尤もだろう。

通常、デバイスは主と常に共に在るものだ。

そうでなければ意味がない。

ルビーの圧倒的な奇行に面食らっていなければ、真っ先に聞くべきことである。

『ルビーちゃんはデバイスじゃないから問題なしです』

「デバイスじゃない?それなら貴女は何?」

『ああ、その前にちよつと待ってください』

「え?」

『んゝつと』

フェイトのしている前で、ルビーはきよろきよろと周囲を見回すように回転する。

どうやら何かを探しているようだが、フェイトには何を探しているかは解らない。

バルディッシュも同様だ。

やがて、目的のものを見つけたのかルビーの回転が止まる。

『ジョセフ!!貴様、見ているな!?!』

何故かドドドドという効果音と共に、ルビーはそんな事をのたまった。

『・・・さっ、これでいいです』

「え？ええ？」

訳がわからなかった。

この杖の考えることは一生かかっても理解できないだろうとフェイトは思う。

『一つだけ聞かせてください。フェイトちゃんは集めたジュエルシードをなんに使ったつもりなんです？』

「・・・・・・・・」

『警戒しなくてもいいですよ。場合によってはなのはちゃんとユーノ君に手を引くように話してもいいです』

「・・・どうということ？」

交渉の第一段階はクリアしたと、ルビーは内心でほくそ笑んだ。相手が黙り込んでいては文字通りお話にならない。

ゆえに、交渉事はすべからず、相手をこちらと話す気にさせるところから始まるのだ。

『フェイトちゃんは頭がいい。ジュエルシードは危険なものだというのはご存知ですね？』

フェイトがコクリと頷いた。

『あんなものがこの世界で野放しになっている現状は・・・実はとくっても危険です。ユーノ君には悪いですけどあゝルビーちゃんはそんなものは誰の手に落ちるのであっても、この世界から持ち出し

てくれるなら構わないと思っっているんですよ」

場合によっては、この世界そのものに致命的な影響を与えかねない代物・・・ルビーはジュエルシードをそいう風に認識している。

ルビーにとって最重要事項はなのはとその周辺の安全の確保、その最大の懸念材料であるジュエルシードの排除は何物にも優先されるというのが魔術師としての考えだ。

フェイトはジュエルシードを回収する・・・ルビーは安全を手に入る・・・少しいびつかもしれないが、れっきとした等価交換だ。

『かといって、持ち出された後でこの世界に致命的な何かをされたら話にならないんですよね』

「だから・・・何に使うかはつきりさせたい？」

『そのとおりにします
Exactly!..!』

ジュエルシードの秘めたエネルギーと願いをかなえるという特性は魔術師としては無視できない代物だろう。

しかし、現状なのはにそれを制御する能力も意思もないとすれば唯の危険物だ。

もって行くならもって行けという感じである。

「・・・知らない」

『・・・え?』

「聞いていないから・・・知らない」

ルビーは戦慄した。

フェイトはすずかの屋敷で会ったとき、なのに対して「話しても意味がない」といつていた。

だからてつきり目的があつて集めていると思つていたのだが・・・フェイトは集めたジユエルシードがなんに使われるのかを知らないという。

これは・・・これはつまり・・・。

『がは!!』

「ええ!？」

『Oh!!』

いきなり吐血（魔術で作った3D）したルビーにフェイトとバルディッシュが揃つてびびる。

そのまま机に突つ伏したルビーがピクピク痙攣したかのようにハイブレーションを始めた。

『スゲエ・・・スゲエよフェイトちゃん・・・クーデレに加えて天然属性まで持つとは・・・もはやなのはちゃんを越えてるかも知れねーよ。フェイト・テストロッサ・・・怖い子!!』

もうなんか無茶苦茶だった。

ルビーも口調が変だし・・・フェイトはフェイトでルビーの変化についていけず、ついでに怖い子扱いされて怯えている。

『フフフ、ちよつと取り乱しちゃいましたよ〜大丈夫ですからバルディッシュを置いてください』

「ちよつと？」

ルビーの様子に、テーブルの上のバルディッシュを掴んで臨戦態勢

に移行しようとしていたフェイトが、説得を聞いて思いとどまる・
・元の場所に戻そうとはしないが・・きつと内心ではルビーを魔法で攻撃するか？でも一般人いるらしーしなーとか葛藤しているに
違いない。

『・・・フェイトちゃん、つかぬ事を聞きますけど貴女の知っている
人に何時も前髪を垂らして顔の半分を隠している人とかいません
よね？』

「え？母さんを知っているの？」

『月影せんせー！ーい！ー！』

「きゃー！！」

ルビーは決めた！！

フェイトの言うお母さんに会うことがあればぜひ『時代が彼女を求
めている』って言わせよう。

・・・わかる人にだけわかればいいんですよ！！
偉い人にはそれがわからんです！！

「も、もういやー！！！」

『あ、フェイトちゃん！？』

フェイトは逃げ出した。

どうやら限界だったらしい。

魔法を発動しなかったのはさすがというしかないだろう。

――――

「はあ・・・はあ・・・」

翠屋・・・というよりルビーから逃げ出したフェイトは離れた場所の公園までノンストップで駆け抜けた。
ルビーの言ったとおり、あの店に張ってあった結界は閉じ込める為の物ではなかった様だ。

しかし・・・しかしである。

白い女の子はともかく、あのルビーには勝てる気がしない。

強いとか弱いとか・・・そんな物差しから外れた場所にいるような気がしてならないのだ。

「ううう・・・」

しかし、ジュエルシードを集める過程で会わずに済ませることは出来ないだろう。

あれと・・・また会うのか？

「見つゝけた」

「ひゃ!？」

色々内に籠って考えてたら、いつの間にか傍に誰かが立っていたことに気づけなかった。

すわ!! またルビーか!？と思わず身構えるフェイトが見たのは、栗色の髪をストレートにした大人の女性だ。

・・・どこか見覚えがあるような気がするが・・・ちなみにバルデイッシュは彼女に気づいた時点で黙っている。

「はい、これ」

「え？」

女性が差し出したのは紙箱だった。

目の前に出されて思わず受け取ってしまう。

「手をつけていなかったから、持ち帰れるようにしてきたの」

「え？」

なんだろうと開けてみれば・・・ルビーが用意したシュークリームだ。

そういえば、最初に道路で発見してから触ってすらいなかったと思
い出す。

「で、でも私・・・こんなの頼んで・・・」

「いいのよ。おばさんのおごり、それに食べてもらわないと作った
人間としては悲しい気持ちになるの」

女性はどうかやらのシュークリームの製作者らしい。

確かに、自分の作ったものを食べられなかったら悲しいだろう。

「その・・・ありがとうございます」

フェイトは悩んだ末に受け取ることにした。

ここで断つては、態々追いかけてきてくれた女性の気持ちが無にな
る。

それに・・・何だかんだで甘いものに興味がある女の子なのだ。

「この辺りでは見ない子ね？何処から来たの？」

「え・・・っと・・・その・・・遠くからです」

そう言うしかなかった。

真実をこの世界の人間に語るわけには行かない。

「そう？ 誰かのお使い？」

「そ、その・・・母さんの・・・」

「お母さんのお使い？ 偉いわね」

女性はフェイトの頭に手を置いて撫でる。

いきなりのものでビックリしたフェイトだが、手を振り払ったり逃れようとはしない。

むしろ、撫でられることが気持ち良くてうつとりしているようにも見える。

・・・だから、フェイトは気づかなかった。

自分を撫でる女性が・・・どんな顔をしていたのか・・・。

カランと、扉に取り付けられた鈴がなって翠屋に來客を知らせる。しかし、今回入ってきたのは客ではなかった。

『お帰りなさい。桃子さん』

入ってきたのは桃子、迎えたのは後片付けをしていたルビーだ。

「・・・ルビーちゃん、あの子がなのは以外のもう一人の魔法少女？」

『ええ、しかも彼女気づいていませんけど監視されているようです』

ね〜身を案じてということも考えられますけど〜」

最初のルビーの奇声はフェイトを見ていたサーチャーに向けてのもだった。

フェイトは気づいていなかったようだが・・・誰かに見られている。

「あの子、お母さんのお使いでこの町に来たって言っていたわ」

『そうですか、フェイトちゃんのお母さんが・・・』

ルビーは既に気が付いている。

フェイトの背後に誰かがいることを・・・本当にジュエルシードを求めている何者かがいることを・・・サーチャーで見られていた事もそうだが、フェイトは会話の中で無意識に決定的な一言を漏らしていた。

彼女は言ったのだ・・・自分はジュエルシードの使い道を”聞いていない”と・・・つまりそれはフェイト自身がジュエルシードを求めているわけではないという事・・・そして、桃子はフェイトが母親の使いでここに来たと聞いた。

・・・ということは、黒幕の正体はフェイトの・・・これは本当にフェイトの母親に是が非でも会う必要があるそうだ。

『すいません桃子さん。嫌な役を押し付けてしまって・・・』

桃子に頼んだのは、この場にいる面子の中で最もフェイトに警戒されないだろうというチョイスだった。

ルビーは問題外、見た目に加えて日頃の行いが悪すぎる。

「私のことはいいのよ。あの子をだますようだったのは心苦しかった

たけれど、でも・・・フエイトちゃんはお母さんに愛されたいのかもしれないわね・・・だから必死になっている。・・・そんな気がするわ」

『なのはちゃんも寂しそうな目をしていると言っていました。同じようなことを思うのは、やはり親子という事ですか？』

「年の功って言っても許してあげるわよ？それに母親だから・・・」

桃子はフエイトが出て行った扉を見る。

その目には複雑な感情が揺らいでいた。

「でも・・・私はなのはがあの子と同じ目をしていたときに気づいてあげられなかった。だから気になるのかもしれない。偽善ね・・・あの子を通してあのときのなのはを見ている」

『桃子さん、昔の話ですよ。なのはちゃんだって気にしていませんし、忘れているかもしれませんが』

「そうね・・・でも私は忘れちゃいけないし、感謝しているわ、ルビーちゃんがなのはの前に現れてくれたことに・・・ねえルビーちゃん？あの子も救ってあげられる？」

『ええ、もちろん・・・今度はなのはちゃんと一緒に・・・』

微笑む桃子は母親の顔をしていた。

「ところでフエイトちゃんって・・・」

桃子が一転して真剣な顔になる。

ルビーも黙って次の言葉を待った。

「犬耳がすごく似合いそうな気がするんだけど？」

『ですよねー！！』

はて？・・・厨房のほうで誰かがずっこけたような音がしたが気のせいだろうか？

「それで、ルビーちゃんはシュークリームの箱にこっそり何を忍ばせたのかしら？」

『あらやだ、気づかれちゃってました〜？フフフ・・・彼女があれを最後まで見たときすごいですよ〜フェイト・テストロッサの戦闘力は数倍になります』

「ルビーちゃん？・・・酸素欠乏所になっていないでしょうね？」

「――体は萌えて出来ている

「――ロリータクーデレ、心は天然

「――幾たびの魔女っ娘を越えて不敗。ただ一度の突っ込みもなく、ただ一度のポケもなし

「――担い手はここに萌え、癒しオーラをご馳走様

「――ならば、可愛さに理由は不要ず

「――この体は無限の萌えて出来ていた。

『・・・は、今デムパが――！！』

「あらあら？ルビーちゃんは常に受信状態でしょう？」

『あ、そうですね〜ルビーちゃんうっかり〜テヘ』

何時ものことじゃないとにこやかに笑う桃子はやはり大物だ。

そんな店内の会話を聞きながら、厨房でずっこけたままの士郎はフ

エイトの未来に不安を感じずにはいられなかった。

――――

夜ゆるる夜だよ。

「うん」

なのはが机に向かっている。

広げられたノートに何か熱心に書いているようだ。

時々うなっているのは、何か難しい問題集でもしているのだろうか？

『なのはちゃんは何をしていますか？』

「えへへこれはね、すずかちゃんの修行計画表なの」

いきなり先生になることになったのはだが、本格的に教えるのは
ジュエルシードの回収の後ということで話がまとまっている。

やはり、負担が大きすぎるというのが周囲の大人たちの一致した結論だ。

すずかも、魔術の修行には興味があるが、それで親友やユーノの負担になるのはということで自重してもらった。

当面はなのはもユーノも、簡単に出来ることから教えてゆくことになるだろう。

なのはの書いている計画表というのは、ジュエルシードを回収し終えた後での話だ。

『なのはちゃんはちゃんと先を見据えているんですね』

「にやははは」

目の前の厄介ごとだけじゃなく、その先のことまで既に視野に入れている。

悪いことじゃない。

それに、なのはが楽しそうだ。

『なのはちゃんは教師とか向いているのかもしれないね』

「先生か、いいかもしれないの」

『昼間は教師、夜は街を守る魔女っ娘、略して魔法先生・・・いっそずかちゃんと仮契約しちゃいます』

「ルビーちゃん・・・なのはにいったい何を求めているの力ナカナ？」

いかん、なのはがそろそろ猟奇的な物を纏いだした。

鉦とか似合いそうな感じた。

「僕が言える事じゃないけど、無理はしないでね、なのは？なのはは自分の魔法の訓練や魔術の修行があるんだから」

「わかったのユーノ君」

ユーノがなのはを気遣う。

楽しそうなのはに言うのは気が引けるが、ある程度周りがセーブしてやるのも友情だろう。

ジュエルシードの回収が重要なのは変わらない。

「所でルビーちゃん？これってルビーちゃんのこと？」

『え？』

なのはがどこか見覚えのあるケースを持っている。
開けてみると、これまた見覚えのある印字入りのDVDだ。

「《これで貴女も明日からクーデレる！！ヤミちゃん＋タバサ＋長門由希＋αシーンダイジエストVol.2 編集Byルビー》・・・
って何これ？」

『おやゝ？』

意味不明なタイトルになのはが首を捻るが、ルビーは疑問で首を捻るどころか一回転する。

『・・・おやゝ？』

そうしていると扉がノックされた。
なのはが返事をして、扉を開けて入って来たのは恭也だった。

「お兄ちゃん？」

「なのは、俺の借りてきたDVD知らないか？」

「はにや、DVD？タイトルは？」

「《戦慄、恐怖パニックホラー・200分ノンストップ恐怖シーン
詰め合わせパック》」

「にやー！！そ、そんな怖そうなの知らないもん！！」

「あはは、そうだよなゝなのはが見たら一人でトイレにいけなくなるかもしれないもんな」

「うっ、お兄ちゃんが意地悪だよー」

兄と妹の心温まる光景だが・・・ルビーはそれどころじゃなかった。

『おやおやゝ？』

ルビーのDVDはここにあるはずがない。

フェイトの戦闘力^{クイデレ}をアップさせるために、シュークリームの箱にそつと忍ばせておいたはずだからである。

何故ないはずのDVDがあるのか？

何故あるはずのDVDがないのか？

しかも無いのはホラー物・・・これはつまり？

・・・みぎやーーーーー！！！！

・・・ぴぎやーーーーー！！！！

『あり？』

「どうしたのルビーちゃん？」

『今、悲鳴が聞こえませんでしたか？具体的には二人分の？』

「えう？聞こえないよ？」

「僕も聞こえなかったけど？」

「俺もだ」

『私もです。姉さん』

なのはとユーノと恭也とレイジングハートが揃って聞こえなかったというのなら、それはルビーの空耳ケーキか、もしくは聞いてはいけない声を聞いたのかのどっちかだ。

『・・・気のせいでしょう』

そうしておいたほうがいろいろな意味でいい気がする。

4人はふーんと、それ以上気にすることはなかった。

やがて恭也がDVD探しに部屋を出てゆく・・・何故かDVDは見

つからない気がした。

「ところでルビーちゃんは今日は何があった？」

『いいえ、なのはちゃん。何時もどおりの日常でしたよ』

そして、今日も一日が終わる。

・・・終わるったら終わるんだ！！

第十話 とある愉快型魔術礼装の一日（後書き）

そろそろ原型がなくなってきたな・・・。

第十一話 おっぱい使徒襲来

『ルビーちゃんど〜』

『・・・レイジングハートの〜』

『『^{デバイス}教えて礼装先生ー』』

・・・この取り合わせの場合、どっちが司会のお姉さん役で、どっちがマスコット役なのかの判断が難しい。

『さ〜って今日の教えてキッズは誰かな〜？』

『・・・海鳴の闇に潜み、獲物を狙う白き野獣、被害者製造機の二つ名を持ち、高町家に絶賛居候中のその名はフェレット・ザ・ユーノー』

『そんなリングネームのような名前じゃないから！！そんな物騒な二つ名なんてないから！！どれだけ突っ込ませれば気が済むんだよ！！』

白い小動物が怒髪天で有頂天に反論する。

子供の夢壊しまくりの光景だ。

『さてさて、ユーノ君の教えては何かな〜？』

『無視ですか、そうですか・・・え〜っと、ルビーセンセイレイジングハートセンセイコンニチワ』

『『こんにちわ〜』』

『キヨウハ”オンセン”ニツイテオシエテクダサイ』

とっても投げやりでカンペ棒読みなユーノ君でした。
絶望具合がよくわかりますね。

『日本人なら温泉と無関係じゃいられませんか？』

『はい、日本は大陸プレートの境目にあるため、火山が多い事で知られています。おかげで地震も多いですが、ぶっちゃけ何処を掘っても水脈さえあれば温泉が出るといった土地柄です』

「へえ」

ユーノがまじめに感心している。

ルビー達のおふざけはそれとして、温泉に興味があるのは本当のようだ。

『温泉とは地熱で暖められた摂氏25度以上の温水か、規定された成分を一定量含むものとされているんですよ』

『温度による分類を下から冷鉱泉、微温泉、温泉、高温泉の四種類に分けられています。体に良いとされる療養泉は含有物から大まかに単純泉と塩類泉、それ以外のものを含む三つに分けられていて、11種類ほど存在しています』

「ほうほう・・・」

『解ったかな、ユーノ君？』

「うん、初めてルビーのことをすごいと思ったよ」

『フハハ、もつと感心していいですよ、崇め奉ってもルビーちゃんは平気です』

『姉さん、ほとんどの説明をしたのは私なんですが？』

・・・それもまた何時ものことである。

「ルビーちゃん、ユーノ君、レイジングハート？そろそろでかけるよー」

「『はい』』

高町家には、年に一度は翠屋を休みにして家族揃って出かけるという習慣が存在していた。

家族の絆を確認したり、単純に骨休めなど理由はいくつかある。

そして今年の目的地は冒頭の前振りを見ても解るとおり温泉だ。

温泉・・・そう、温泉である。

漫画だと何故か必ず馬鹿な男が女湯の覗きをやらかそうとするあの温泉である。

その場合は銭湯でも可。

・・・まあ今回はそんなべたないイベントは発生しないだろう。

参加者は高町家一同＋人間じゃない連中3に月村忍、ノエル、ファリンにすずかとアリサ、更に・・・。

「今日は誘ってもらってほんまありがとうございます」

はやてが参加していた。

「はは、誘ったのはなのはだよ？」

後部座席に座る少女・・・はやての感謝の言葉に乗っている普通車のハンドルを握る土郎が照れくさそうに笑った。

心底嬉しそうなはやての心情がそのまま伝わってくるような気がする。

「もちろんなのはちゃんには感謝感謝や、うち車椅子こんなんやからネットと読書だらけの引きこもりニート候補生なもんで、めったに外出

せんもんやから今日は楽しみですよー」

「そ、そうかい・・・」

・・・候補生？

本当に候補生か？

どうにもリアクションに困るのは、ジェネレーションのせいではないと士郎は思う。

現に、隣に座っている恭也も微妙な顔をしていた。

はやてのテンションが高いのは本当に喜んでいるからだろうと思うが、この子には何か独特のものを感ずる。

「ところでアリサちゃんは何ぶすくれとんの？」

話が急に飛んだが、そのことに関しては士郎も恭也も気づいていたので驚かずに付いてゆく。

後部座席、はやての隣に座っているアリサの様子が変なのだ。

具体的に言つと機嫌が悪そうにしている。

てつきりなのはと一緒の車に乗りたいたいと言いつつ出さず思っていたのに、何故かはやてと一緒にこちらの車に乗ると言いつつ出たところから変といえは変だった。

「相談なら乗るよ？」

「・・・最近、なのはとすずかが変じゃない？」

その一言で、士郎と恭也が内心でギクリと硬直した。少なくともビックな心当たりがある。

「いや、あの二人は最近、少しどころじゃなく変やん？」
「ぶ！！」

はやてがずばりと言う。
しかも続けて言いまくる。

すずかがなのはにべったりとか、特にすずかがなのはになついているところとか、あとはもちろんすずかがなのはを潤んだ目で見ていたりとか・・・変というより怪しい？むしろ妖しい？とか齒に衣着せぬというのはこういうことを言うのだろう。

「なんつちゅーか見ていて御馳走さまや」

そう言つて暑い暑いと手のひら団扇で自分を扇ぐ。

しかし、本人の父親と兄がいるのに遠慮なく言う子だ。

どうも、温泉に感激しすぎて、頭のねじが数本はずれている様にも見えるが。

「それはそうなんだけど、そうじゃなくてももっとこう・・・」

アリサもすずかの様子は認めざるをえないらしい。

だが、アリサははやてと違って目に見える形だけでなく、ほかにも何か感じているようだ。

やはり付き合いの長さだろうか？

「うーん、うちはまだ付き合い短いけど、なのはちゃんもすずかちゃんもいい子やと思うよ？話さんって言つより、なんか話にくいことなんちゃう？」

・・・女の子って言うのは時々何の理由もなく鋭いなーと士郎と恭也は思う。

女の勘という奴だろうか？

具体的には桃子とか忍とか・・・特に女関係の察知能力は二ユータイプ並みじゃないだろうかと思うことがある。

「そんな事・・・解っているわよ。でも悔しいじゃない。話してくれば力になれることもあると思うのに・・・」

・・・なのはとすずかは良い友達に恵まれたと思う。
同時に士郎と恭也は申しわけなくも思う。

自分たちは、彼女たちの悩みをすぐにでも解決できるというのに、それを伝えるわけにはいかない。
真実を口にできないジレンマだ。

一度なのはに話しておくべきだろう。

このまま、誤解されたままで友人が離れていってしまうのは忍びない。

何より、このままなのはとすずかに百合疑惑がついたままでは肉親として放ってはおけない。

「はははっ、しゃーないな」アリサちゃんは、なのはちゃんとすずかちゃんが仲良くて寂しいって言えばいいんや」

「な!？」

「そんなウサギチックなアリサちゃんは、このはやて様が構ったるでっ遊んだるでっ揉んで大きくしたるでっ」

はやてが悪魔のような顔になっている。
あれはいじめっ子の顔だ。
どSの顔だ。

「いや、ちよつと待ちなさい！！誰がウサギ！？特に最後の揉んで大きくするって具体的に何のことよ！！」

「ケケケツツンデレ乙、さっさとツン終了して存分にうちにデレるが良いわああ！！」

「誰がツンデレかー！！」

「アリサちゃんがツンデレなのは中の人のせいで絶対運命黙示録！！」

「良くわかんないけどそれは挑戦と受け取ったわよ！？」

はやてとアリサの闘気が高まってゆく。

二人とも素人のはずだが・・・何故だろうか？
絶対勝てないプレッシャーを感じる。

「・・・恭也？」

「わかつている」

余計な言葉は要らない。

目と目で通じ合ったから。

二人の心は一つ・・・はやてとルビーをあわせてはいけない。

何故か、二人を合わせると化学反応的にとんでもないことになりそうなのがする。

「ぎゃー、離せー！！」

「すぐにやわらかくなるって、アリサちゃんもボインボインがえー

やろ？」

「親父かあんたは！？8歳児に何を期待してるのよ！？」

某ボニテ中年オヤジスパイの言うとおり、彼方の女と書くくらい女性を理解するのは難しいということは士郎も恭也も経験則で知っている。

しかし、車内でキャットファイトは止めてほしいと思う。

下手したら事故するというのに・・・元気がいいのも考えものだろう？

「いやーママー！！」

「観念しいーやゝ？」

「うっ、私汚されちゃった・・・」

話の内容だけ見ればレイプ犯のそれだ・・・ついでに、前に座っている二人の事は？

いや、これは忘れているというよりむしろ場のノリか？

アリサには悪いが、男には不可侵のガールズトークということで、何も見なかった聞かなかった言わなかったことにさせてもらおう。あの会話に突入する勇気がなかった。

・・・アリサ・バニングスの冥福を祈る。

「とはいえ・・・」

士郎と恭也はバックミラーを覗く。

そこには自分達の車に付いて来ているワゴン車が写っていた。

残りの面子は皆あれに乗り込んでいる。

しかも一人（一匹）を除いて全員女だ・・・二人だけでこれなのに、あの中では一体どれだけの力オスが展開されているのか？

—————

ワゴン車に乗っているのはなのは、すずか、桃子、美由希、ノエル、ファリン+フェレット（ユウノ）士郎達の車の3倍の女性密度と1/2の男性密度になっていた。

『~~~~~♪』

「~~~~~」

しかし、二人の予想を裏切ってワゴン車の中は一人を除いて静かなものだ。

その一人というのは今現在、ノリノリでカラオケ宜しく熱唱している・・・ルビーだった。

この車に乗っている面子は皆魔法と魔術について知っているので遠慮なく姿をさらしている。

やがてルビーが歌い終わってもしばらく全員が驚きで固まっていた。

「す、すごいルビーちゃん、歌も上手なんだね！..」

片手に例の如くすずかをぶら下げたままなのはが本当に感心したと手を叩くのに習って、他の面子も運転しているノエル以外全員が拍手した。

「ねえルビーちゃん？それは何って言う歌なの？」

『これですか？これはですね〜高野直子さんの《with you》って言う曲なんですよ〜』

メタで危険な事を・・・無茶しやがって・・・それは上手く歌えて当然だろう。

むしろ上手く歌えなかったらそっちの方が問題だ。

『さてさて～続きましてはレイジングハート！！松来未祐さんの《フシギ…なぜかな？》～』

・・・士郎達の予想よりも地味だが、十分以上にカオスな車内だった。

《なあおい、これって因果律的にチョーやばくね？》

《ヤバイヤバイ》

《でも～ギリギリな気がするの～》

《ギリギリ・・・ギリギリ・・・》

《何が？》

《《《《ググレ》》》》

そんな感じで、世界が抑止の使者を出さずか出さないか悩む程度の地味なカオスだった。

—————

「パラダイスやー!」

「はやてちゃん、いきなりその台詞は正しいのなの？」

目の前の光景の感想を率直に口にしたのははやてになのはが突込みを入れる。

目の前の光景というのは温泉だ。

海鳴温泉の大浴場。

温泉にきたら一も二もなく温泉、昼間だろうが関係なく、部屋に荷物を置いたら直行するのはむしろ正しい。

そして、車椅子なのをもとめせずに先陣切って突撃したのははやてであり、先ほどの台詞につながる。

足が動かないにもかかわらずアグレッシブに、脱衣場から匍匐前進で行こうと（湯船に車椅子で入っていけるわけがあるまい？）する姿にはどろどろとした真っ黒な執念を感じて怖かった。特に目がやばかった。

確かに女湯で年頃の女性が入浴している姿というのは、見る者にとっては理想郷であろう。

はやてがパラダイスと評したのも間違いではないと思う。

しかし、それはあくまで見る人間が男であるという事が前提となる台詞のはずだ。

8歳の女の子が女湯に対して用いる感想ではあるまい。

「だってなのはちゃん、忍さんも美由希さんもノエルさんもファリンさんも美乳ぞろいやん！？お湯に胸が浮いてるで！！」

ぺったん娘には関係ないことだが、脂肪は水に浮くもんである。

「違う！！あれは脂肪なんて即物的なもんやないやない！！ドリームや、夢が詰まっとなのや！！」

「は？はやてちゃん、一体誰に答えているの？それとお風呂で騒ぐと反響して迷惑なの・・・あと、温泉に鼻血を混ぜないでね？」

同性の胸に興奮して鼻から血を流す8歳児の姿が・・・そこにはあった。

最近友人になったばかりで、まだ完全に彼女のことを理解しきれていなかったなのは・・・本当に友人になっていいかと真剣に考える。

今なら後戻りも可ではなからうか？

「しかも桃子さんに至っては子持ちって言うのはおかしすぎるやろ！？」

「それは・・・まあ・・・」

自分の母ながら、桃子の若さはどう見ても人外だ。

あれで間違いなく自分を生んだ母親のはずなんだが・・・授業参観の時にはどうしても歳の離れた姉妹にしか見られない。

アンチエイジングに何か大事なものを犠牲にしているとも驚くことはないだろう。

ファンタジーとは割りと近くに転がっているものかもしれない。

「ちょっとは自重しなさいはやて」

自分の欲望に忠実すぎるはやてを止めたのはアリサだった。

チョークスリーパーではやての頭をロックして締める。

・・・アレは地味にきつい技だ。

加減すると苦しいだけで気絶も出来ない。

「あいたたた！！ギブギブ！！アリサちゃんうちが身体障害者って

こと忘れとるやる!？」

「はやて・・・私はもうあんたを特別扱いしないことにしたから」

「してーな、特別扱いしてほしいわ!ー!そやないとうち足腰立たなくなるっちゅーねん!ー!すでに足腰たたんけどな!ー!」

自分のハンデを笑いに出来るのはすごい才能だと認めよう。

受けるかどうかは別であるが、ついになのは達は気がついた。

アリサの目からハイライトが消えている。

「あんたの敗因はたった一つのシンプルな理由よ・・・あんたは私を怒らせた」

ちよつとアリサの様子が尋常ではない。

まるで最強のスタンド使いのようだ。

さらに言うなら、アリサが言う所のたった一つのシンプルな理由というやつにも・・・心当たりがある。

「・・・アリサちゃん？」

「言わないで・・・なのは・・・」

「何で胸が真っ赤なの?しかもそれ手形に見えるんだけど？」

「言わないでったら!ー!」

なのはは考える

あれをお洒落とかボディペイントとかいう奴がいたら、どのレベルの脳腐れだろうかと・・・まあそんな感じである。

「見ないで、私を見ないで、私を、私の心を、壊さないで!」

アスカネタか・・・大分自我崩壊がすすんでるらしい。

これ以上はアリサの言うところの、たった一つのシンプルな答えに

手が届いてしまいそうなので自重する。
なのは父と兄に言われるまでもなく、もつとこの哀れな親友に優しくしようと思った。

はやてにいじられるアリサは、何故か他人事に思えないのだ。

――――

「・・・あの・・・ルビーさん？」

『何ですかユーノ君？』

「何故、私めはこんな状況なんでしょうか？」

現在・・・ユーノは縄で縛られていた。

しかもかなりマニアックな縛り方で・・・フェレットの体なのに再現率がすごいことになっている。

ユーノは羞恥と縛られた苦しさでなんか色々だ。

戻ってきた時に、新しい世界の扉を開けていても指差しちゃー駄目、追求しないのが優しさ――！

『なのはちゃんの貞操を守るためですが何か？』

「ドンだけ僕を信用してないんだよ――！？」

『ほう、なのはちゃんに興味がないと？あんなかわいい子に対していい度胸ですねユーノ君？』

「ぜんっぜん話が通じね――――！！」

士郎と恭也のいる男湯に入るという発想が、最後まで出てこなかったのは何故だ？

――――

「あー、さっぱりした」

「復活が早いわね・・・」

はやての車椅子を押しているアリサが、その明晰な頭の中で、そろそろはやての事を変態という名のオツパイ星人に認定しようとしていた。

このまま事故に見せかけて火サスのように抹殺した方が全世界の女性バストの為ではないかと脳内会議では議論されている・・・ちなみに現在、7 - 3で抹殺派優勢。

その後、女湯という極限状態にはやての理性がいい加減吹っ飛び、足が動かないくせに亡者の如く胸に向かつて行っただころを美由希たちに撃退されるとい一幕があった・・・この中で一般人は桃子くらいのもの・・・ある意味で彼女も一般人以上ではあるが。

一発でのされたはずなのに、全員が上がる頃には復活するのだから大したものだ。

そしてあれだけの事があったのに、はやての車椅子を押すアリサのお人よしも相当だと思う。

「ゲーム筐体は何処かなー？」

「はやて、こんなところに来てまでゲーム？」

「何言うとんやアリサちゃん？こういうところだからこそやないか」

気持ちにはわからなくない。

足の不自由なはやてに、温泉定番の卓球もないだろう。

そして8歳の子供に風流を愛でてじっとしているというのは、花見にきて花を見て酔えというようなものだ。

そんな奴がいるなら見てみたい。

やはり花より団子である。

「きつといまや何処にもない廃版ビデオゲームが現役のはずや！テトリスないかな？インベーダーゲームでもええんやけど、名古屋撃ちー！！」

八神はやて・・・コアなオタク決定。

テトリスはともかくインベーダー・・・現存しているのか？
名古屋撃ちと言われてわかる小学生が何人いるだろう？

現に、後ろをついてくるなのはとすずかは？マークを浮かべている。

（ユーノ君、解る？）

（なのはに解らないものが僕に解るわけないよ）

（そっか・・・ところでユーノ君？）

（な、何？）

なのはの肩に乗っているユーノのけがボワツと逆立った。

警戒してる？

怯えてる？

（・・・痛くない？）

（だ、大丈夫だよ）

（大変だったね？）

（・・・うん）

なのはの念話に、ユーノが男泣きする。

ユーノはなのは達が温泉から上がるのに合わせて開放されたが、そ

の体にはしつかり縄の跡が残っていたのだ。
さつきから他の宿泊客がユーノを見てぎょつとしているのがイタイタイ。

・・・それを見ないふりしてくれるなのは達の優しさ・・・単によくわかっていないということもあるが。

「はあゝい、お嬢ちゃんたち」
「「「え？」「」「」

話に夢中になりすぎていたようだ。
気が付けば見知らぬ女性が目の前にいる。

「「「う！」「」「」

4人は取りあえずビビった。

目の前の女性は何故か怒っている？
一応、笑いの表情をしているのだが、目が全然笑っていないし何よりピクピク震えている。
しかもジョジョ立ち、最初は道を塞いでしまっていたのが理由かと思っただが、とてもそんなレベルの怒りじゃない。

だが・・・こんな見ず知らずの女性を怒らせて、あまつさえガンつけられる覚えなど4人共ないのだが？

「や、やあゝこの前はうちの子共々世話になったね？」
「にゃ？」

話しかけられたのはなのはだ。

しかし、なのは方には心当たりがないので、何故この女性はこんなに敵意をぶつけてくるんだろうとたじたじになるしかない。

女性の視線がなのはを見て・・・肩に乗っているユーノに移ってびっくりとなる。

「何だい、この変態イタチは？」

（ぐは！！）

「ユーノ君！？」

触れられたくないものをソリッドにえぐられたユーノが、脱力して肩から落ちるのをなのはが何とか受け止める。

なのはの手の中で危険な痙攣を始めたユーノに、逆に女性の方がビビった。

「ちょっと、あんた何なのよ？」

喧嘩腰の女性と目を白黒させている親友を見かねて、アリサが女性となのはの間に割り込んできた。

それに気づいた女性がはつとして・・・まだ言い足りなさそうになのはを見る。

「ごめんね、人違いだったみたい」

・・・ここで騒ぎを起こすことを嫌ったのだろう。

女性はまだ引きつっているが何とか怒りを押さえ込んだようだ。

「なあゝに？酔っ払っているの？」

「おお、さすがアリサちゃん、ツンのときは容赦ないな、さっさとデレんと」

「はやて、あんたどうあっても私をツンデレにしたいようね?」

女性は二人に構わず・・・構っていると話がすまないと判断して手を伸ばし、なのはの頬に触れた。

なのはの頭の中に声が響く。

(子供はいい子にしないとガブツといくよ)

(だめ!!!!!!)

「うわ!」

いきなりの不意打ち的念話に、女性が肉声でうめく、ついでに体が軽くふらついていた。

しかも、あおりを食らったなのはとユーノも同様だ。

軽く目を回している。

(なのはちゃんを食べちゃうなんてそんなの駄目!!!!)

(す、すずかちゃん?)

なのはの手にしがみついてくる重さがある。

大音量の念話を飛ばしてきたのはすずかだった。

先日、弟子になったばかりのはずなのに、既に念話を使いこなしているようだ。

ちなみに、小さいがリンカーコアも確認されている。

(あ、あんたも魔導師だったのかい!?)

(なのはちゃんを■■■■して。。。なんてさせないわ!)

(は?すずかちゃん?何故か雑音が入ってよく聞こえないなの)

それは自主規制なのです。
せかいのしゅつせいりよく

R - 18 指定なんです。

子供には聞かせられないお話なのです。

（ちよっとお待ちよ！！あたしはそんな趣味なんてない！！）

（あまつさえ ▼ ▼だなんて！！ふ、ふけつよ！！！！）

それなのになんですずかが知っているのかというと・・・具体的には忍とか恭也あたりのせいだったりするのだが、何故かは追求してはいけない・・・三角形は基本的に18禁^{おこちまおこちわり}なのだ。

女の子は基本的に耳年増・・・そしてずかはいろいろ興味津々で聞いてしまうお年頃とだけ言っておこう。

（ねえ、ユーノ君？ずかちゃんは何の話をしているの？）

（え？えーっと・・・）

どうやらユーノは多少の知識があるようだ。

しかしこれほど答えに困る質問があるだろうか？

赤ちゃんはどうやって生まれるの？と同レベルというか直結している難易度の高さだ。

しかも男の子から女の子に？

（復活したばかりなのに、これなんって罰ゲーム？）

（え？ユーノ君何か失敗したの？）

（主に人生に・・・）

なのはの無垢さが眩し過ぎる。

そうこうしている間に、話を通じない上に大音量の念話というすずかの精神攻撃をぶつけられた女性が再度ふらつく。

「何よ、やっぱり酔っ払い？ 昼間っから迷惑な・・・」

「ち、違う・・・」

「いゝい？ お酒を飲んじゃ駄目なんていわないわ、でも大人ならもつと自制を働かせなくちゃ駄目！！ それで人様に迷惑かけるなんて社会人として問題よ！？」

「だから・・・違うって・・・」

確かに酔っていると言えば酔っているのだろう。

しかしそれはアルコールのせいではなく、念話酔いというかなんと言うか。

（しかももしかか最後にはなのはちゃんを・・・キヤーなのはちゃん逃げてー！！！！！！）

（す、すずかちゃん落ち着いてなの！！！！）

しかも未だにエンドレス・・・少女特有の甲高い念話になのはまで加わって来た。

念話というのは基本的に頭の中に声を叩き込んだり受信したりする技術なので、ダイレクトに頭に響く。

念話を切ればいいのだが、あまりにも至近距離過ぎて、ついでに大音量過ぎて無意識の部分で受信してしまう。

おかげで足元がおぼつかなくなる↓それがまた傍目から見れば千鳥足にも見えて↓それを見たアリサの目が吊り上がってお説教↓ループ突入。

「ちょっと聞いているの！？ 仕方ない。もう一度最初から言っわよ！？」

「だから、違う・・・」

しかもアリサの説教もエンドレス・・・内と外からの同時攻撃、最後には言っている内容どころか雑音にしか聞こえなくなってきた。

「うつぷ・・・」

ガンガンにサラウンドで来る声に本格的に気分が悪くなったのだらう。

女性がふらつと倒れそうになる。

「おっと、大丈夫ですか？」

「ああ、ありがとう・・・って何であたしの胸を鷲掴みしてんだい？」

倒れた場所が悪かったとしか言いようがない。

受け止めたのは車椅子に乗ったはやてだ。

そしてどう見ても待ち構えていた・・・確実に狙って微調整までして待ち構えていたはやてが女性の胸を掴んだのだ。

大事なことから待ち構えていたと二回言いました。

「おねーさんもええモンもってはいますな・・・Dか？」

「揉むな!!」

「無理や、うちの両手が真っ赤に燃えとるもん!!乳を掴めと轟き叫んどるもん!!」

神の指とかうまいことでも言いたいのか？

やっぱりこいつは女の子の姿をした親父だ。

更に素面で酔っ払える猛者だ。

しかも女という性別を十二分に利用してセクハラしまくる変態だ。

「ヒートエンドするでー!!」

「なんだいその理屈は!？」

ゴン!!とひどく鈍い音が響く。

初対面の相手からはやての頭に拳骨が落ちたが、これに関しては誰も文句は言わなかった。

・・・完全な自業自得だったから。

胸の拘束が外れたとたん女性は逃げ出す。

一目散に・・・すぐに姿が見えなくなった。

しかし、なのははその後ろ姿を見送らない。

なのはが見ているのは、一撃で撃沈したはやてだ。

「何って言うか・・・素でルビーちゃんみたいな子は初めて見ちゃったなの・・・」

本格的に、はやてとの付き合い方を考えたほうがいいかもしれないとなのはは思った。

これ以上ルビーのような人間が増えては流石に突っ込みきれ自信がない。

そして、将来的に胸をもまれる気がする。

あの桃子の娘なので、確実にDNAは受け継がれているはず。

・・・今から未来に暗雲が立ち込めてきた気がする。

ちなみに、逃げ出した彼女が念話をつかえるということは、すなわち魔導師関係の人間だということに思い至ったのはしばらくしてからだ。

リアクションがすごくて、印象が完全に流されてしまっていた。

――――――――――

「うっ、くっそ・・・あの狸娘・・・」

子供達から逃れた女性は温泉に逃げ込んでいた

（フェ、フェイト）

（ど、どうしたのアルフ！？）

女性・・・念話でフェイトにアルフと呼ばれた彼女は、温泉につかりながらしくしく泣いていた。

胸にははやての手形がくつきりはっきり付いている。

・・・まじめに痛そうだ。

文字通りはやてのお手つき。

（もう帰りたい・・・あいつらおかしいよ）

（何があつたのアルフ？アルフー！？・・・よ、よくわからないけど・・・ところでね、アルフ？）

（な、何？）

（ジュエルシードの反応を感じたよ）

「そうかい！！」

がばつと温泉から立ち上がったアルフは、まったく何も隠さないすつぽんぽんで男前な仁王立ちをした。

・・・握った拳がとってもイエスな気合の入りようを表している。

「回収しよう!!すぐに、そして家に帰るんだ!!」

(そ、そんなに帰りたいの?)

「あんな連中と何時までも一緒にいられるか!!お願いだよフェイトォーフェイトはあんな風に成長しないでくれ、何時までもそのままでもいいから!!」

エターナルロリータ希望?

(わ、わかった・・・)

念話だけでもフェイトが盛大に引いている姿がイメージできる。

(と、ところでね・・・)

「ん?どうしたんだいフェイト?」

(そ、そろそろ暗くなるよー早く来てー!!)

「わ、わかった!!!!すぐに行くから!!」

ざばつとお湯を掻き分けたアルフは、全速力で脱衣場に駆け込んだ。

・・・ところで、彼女は途中から感極まって念話が口から漏れていたことに気づかなかった。

同じように温泉に入っていたほかのお客さんからどういう目で見られていたかにも・・・温泉や銭湯には刺青や泥酔お断りのルールはあっても、人に見えないものを見てリアクションをとる人間を遠慮する規則は何処にもない。

そういう人を見たときは、勇気を出して黄色い救急車を呼ぼう。
お兄さんとの約束だ（キラッ）

――――

「・・・フェイトちゃん」

日が沈み、辺りが暗くなつてさあ寝ようとしたところにジュエルシードの反応を感じたのはは、親友達に気づかれないように旅館を抜け出し、何とか苦勞してブラッシングして縄の跡を消したユーノと共にジュエルシードの気配の方に向い・・・探し人を見つけた。

闇夜をくつきりと切り取る黄金の髪の少女を・・・。

「あゝらあら子供は大人しくつて言わなかったっけ？」

そして、共にある見覚えのある女性、With犬耳、犬尻尾・・・。

「あ、どうもさつきぶりです」

なのはの返しがとっても軽かった。

まあ、あれだけ無様をさらしておいて今更おびえろというほうが無理だ。

女性はなのはの様子にカチンと来たようだが、何とか自制心を保持する。

「気をつけてなのは・・・きつとあの女の人はフェイトって子の使い魔だ」

ユーノが冷静に、女性を見てその正体を見抜く。
それを聞いた女性が口笛を吹いた。

「へえ、やるじゃないか。その通り、私はこの子の使い魔のアルフ」
女性が変身する。

体のつくりそのものが変化して、あらわれたのは髪の色と同じ赤い毛並みに青い瞳、額に宝石を持つ大型犬だった。

「私はこの子に作られた使い魔、主の魔力によって生かされる代わりに、命を賭けて護る。・・・いい目をしてるじゃないか変態」僕を変態と言っな、ぶっ殺すぞ!!」うお!!」

ユーノの気迫に、アルフが気圧された。
どうも禁止ワードに触れてしまったようだ、今のユーノは本気で喉笛をかみちぎりかねない気迫を出している。

「あ、その・・・真面目にすいません」

気がつけば、アルフは素直に謝っていた。
動物の本能がここは謝らなくちゃダメつと判断したようだ。

「ユ、ユーノ君？最近ワイルドになったね？」

「ふ、新しいユーノ・スクライアをよろしく!!」

何か新しい自分を発見しかけているような気がするユーノだった。
この短期間で草食から肉食にクラスチェンジを始めているのか？
原因は間違いなくルビーだろう。

「・・・それはともかく」

少し気になることがあったのははアルフを見る。
その視線に気がついたアルフが気を取り直して見返してきた。

「あの・・・」

「んゝ、なんだい？お譲ちゃん？」

「はやてちゃんに揉まれた胸は大丈夫ですか？」

「それに触れるなー！！」

どうやらあの事はアルフの方の禁止ワードだったらしい。

被害者二号決定・・・どうやらすでに色々な意味で手遅れだったらしい・・・アーメン。

となると手形も禁止ワードだな。

「さて、つと・・・」

それはそれとして現状確認をしよう。

さっき感じたジュエルシードの発動の気配がなくなっている。

そしてここにフェイトがいるということは、残念な結論にしか繋がらない。

「フェイトちゃん、ジュエルシードは封印したんだよね？」

「う、うん・・・」

「あれ？」

何かフェイトの様子が変だな？

返事が弱い弱いというか震えている。

アルフの後ろに隠れてあは・・・怯えているのか？

しかも周囲の暗がりを感じているのか、せわしく辺りを見回して落ち着きがまるでない。

前回の彼女とまるで違うが・・・何があった？

「フェイトちゃん？どうかしたの？」

「つつ！！」

「何をぬけぬけと・・・」

アルフの陰に隠れたフェイトに代わって、アルフが牙を剥き出してうなっている。

「お前達が仕込んだDVDのせいだなーっ！！フェイトは！！！」

「だ、だめ・・・アルフ言わないで！」

「思わず漏らしちゃったんだぞ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何か白いものが通り過ぎたな？」

「アルフのバカー！！！！！」

とうとうフェイトが泣き出してしまった。

そんな彼女を全員で優しい目で見る。

「・・・うん、可愛い・・・可愛いけど哀れだ。」

「しかも、今も夜一人じゃトイレに行けなくなっただんだ！！どうしてくれる！！！」

余計なことを言わなければいいものを・・・とはいえ、彼女にとってはフェイトの不遇を訴えることに必死でそれ以上に頭が働いていないのだろう。

忠誠心は高いようだが所詮は馬鹿である。

「えっと・・・そういわれても何がなんだか・・・」

泣いている子供一人、威嚇してくる女が一人、何がなにやらわかっていない少女一人と小動物一匹・・・カオスだ。

『くっ・・・予想とは違うとはいえ・・・いや、予想以上の戦闘力アップ・・・フェイト・テストロッサの進化は止まることがないのか？』

・・・はい、犯人確定。

「「「「「やっぱりお前のせい^{ルビ}かー！！」」」」」

「ちよつと待てー！！！」

おおっと、ここで付き添いに駆けつけた恭也から待ったコール！！

「ま、まさかそのDVDは・・・DVDはどうしたんだ！？あれって借り物でレア物なんだぞ！？」

どうやら、会話の内容からDVDの正体を悟ったらしい恭也が青くなっている。

「はあぁー？そんなもん叩き割ったに決まってるだろう！？」
「がーん」

DVD代、15750円

恭也、口でショックを表現するほどプライスレス

後日、ルビーが翠屋のバイト代からDVDを弁償することになったが、一片の悔いもなかった。
むしろ恭也にありがとうありがとうと何度も繰り返し、倍の金額を渡したのだ。

そんなにか？・・・そんなにフエイトの進化もえが嬉しかったのか？

「お前がフエイトの言っていた杖だな！？とにかく、お前はここでぶっ潰す！！」

アルフがびしつと指差したのは当然ルビーだった。
他の連中はこの時点で眼中にない。

フエイトのことだけじゃなく、自分の分も込みかも知れない。
あれは多分ホラーを見てビビった人間の反応だ。

・・・あるいはアルフもフエイトと同じように？

『むう、仕方ありません。助さん、なのはちゃん、角さん？』

「な、かなルビーちゃん？」

『・・・なんですか姉さん？』

『ちよつと懲らしめてやりなさい』

「わかったよ」

『わかりました』

なのはが元気よく答え、レイジングハートも同意する。

砲撃モードにしたレイジングハートを、くるくる回しながら自分も回転して魔力を高めつつ・・・その何の感情もこもっていない冷え切ったおっかない目で”目標”を見る。

しかも口元に薄ら笑いまで浮かべて・・・。

「高町なのは、レイジングハート、目標を狙い撃つー!!」
『デイベインバスターです』

目の前にいたルビーに対して、躊躇なくゼロ距離砲撃を叩き込んだ。
ゼロ距離で狙い打つも何もあつたものではないと思うが・・・ルビーの姿が光の中に消える。

「懲らしめ終了！全くルビーちゃんは・・・」
『お見事ですなのは様』

お仕置き済みの煤けたルビーからの返事がない。
唯の屍のようだ。

少し時間を置けば自分で自分に復活の呪文でも使つて再生するだろうから問題なし、経験者は語るのである。

「さつて、これでやつとお話が出るね？フェイトちゃん？」

ストレスを発散してすっきりしたなのはが、レイジングハートで自分の肩をとんと叩きながら、極上の笑みでフェイトを見る。
ルビーのことで怯えさせてしまったのだ。

ここはなのはの誠心誠意を見せて警戒を解かなければならないだろう。

なのに・・・おや？

何かフェイトとアルフの雰囲気を変だ。

「えっと、なのはちゃん？」

「え？」

「い、いえなのはさん！ちょっとお聞きしたいことがあるんですが！？」

・・・何か変な事をしてしまっただろうか、アルフがさっきまでの不遜な態度が何処へやら、尻尾を丸めてプルプル震えている。

しかも敬語？良く見ればびっしり汗をかいて直立不動？・・・犬の姿なのに芸達者な。

しかも背後に庇っているフェイトは元々の涙目を更に崩して怯えていて・・・何故だろうか？

「そのOHANASIというのは「ハラワタ臓物ぶちまける！！」とか、「あんたの魂、いただくよ！！」などの言葉のスラング隠語でしょうか！？」
「え？いや、そんな物騒な台詞とは関係なくてただお話したいな！って」

「フェイト！？聞いたかい？大丈夫、大丈夫だよ！」

「あ、ありがとうアルフ・・・私、死ななくていいんだね？」

フェイトがアルフに抱きついてグシグシしている。

・・・
・・・あれ、ひょっとして今怯えられているのは・・・なのは？

フレンドリーファイヤーという言葉があるのを知っているだろうか？
仲間を背後から誤射してしまうという行為だ。

しかし、これはあくまで事故であって狙ってやるものでは決してない。

未来、あまたの次元世界で最恐の魔王として語られる伝説の1ページ目はフレンドリーファイヤーで始まる・・・かもしれない。

第十一話 おっぱい使徒襲来 (後書き)

はやてが活躍する機会があるかは未知です。
無印ではないかも？

第十二話 後より出でて我が道を行く物

「撃ち抜け・・・轟雷・・・」

斧状のデバイス、バルディッシュに魔力が宿り、闇を切り裂く黄金の静電気がほとばしる。

それは、主たるフェイトの魔力光だ

「サンダースマッシャー!!」

『Thunder Smasher』

バルディッシュの電子音声がフェイトの言葉を復唱し、先端から顕現させたのは、天の裁きに例えられる神鳴り、夜の闇を駆け抜ける黄金の刃。

『・・・プロテクション』

どこまでも平静な声が響く。

鋭い稲妻の矛先が向かう先に現れたのは、桃色の魔力光で形作られた魔法陣。

破壊と守り、正反対の方向性を持つ両者は、交通事故かと思うほどの轟音と共にぶつかり合う。

結果は拮抗・・・雷光が魔法陣を破る様子はない。

「・・・」

自分の放った電撃が防がれるのを見てもフェイトに焦りはなかった。この結果は予想のうち。

攻撃と防御、両者を比べた場合、余程の差がない限り盾となった魔法陣に軍配が上がる。

放出系の魔法は、目標に向かって飛ぶ間にある程度空气中に拡散してしまつたため、同量の魔力なら、術者の眼前で展開されるプロテクションが勝るのは常識だ。

「な!？」

だから、フェイトが声をあげてしまつたのはそれが理由ではない。

自分の攻撃を受け止めた桃色のプロテクションが自分の攻撃を受けとめながら・・・

「大きくなっている?」

否!!

これは近づいてきているのだ。

「くつつ!!」

とつさに回避行動をとつたフェイトの直近をプロテクションが通り過ぎる。

ちらりと、プロテクションに隠れるようにして白いバリアジャケットの後姿が見えた。

そのまま、人間大の砲弾となつたプロテクションは背後にあつた岩に衝突し、あっさりと打ち砕いて土埃を巻き上げる。

「あいたた・・・」

『大丈夫ですか、なのは様？』

「うん、ありがとうレイジングハート・・・でも失敗だね、プロテクションで攻撃をはじいている間は前が見えないんだもん」

立ち上る土埃を？き分けながら、立ち上がったのはなのはだ。

あれだけに派手に岩に突っ込んでいったというのに無傷・・・考えるまでもなくプロテクションをクッションにしたのだろう。

そうでなければ、自爆技以外の何物でもない。

「・・・・・・・・」

フェイトは彼女^{なのは}に対する認識を改めざるを得ない。

よけたのは正解だった。

今のをまともに受けていれば、大怪我を負っていただろう。

更に、プロテクションに残っていた自分の魔力も食らっていたはずだ。

「フェイトちゃん？」

見上げるなのはの紺色の瞳が、空中にとどまっていたフェイトを見る。

フェイトもそれを見てバルディッシュを構えなおす。

「フェイトちゃん？ジュエルシードを集める理由を教えてくださいなの？」

「・・・私と貴女はジュエルシードを集めている。なら・・・」

「戦うしかない？・・・そんな簡単に結論を出さないように、お話ししなくちゃいけないんだと思うけど？」

なのはも頑固だ。

すでに戦闘に入っている以上、お話も何もないと思うが、意地でもフェイトから話を聞くつもりらしい。

『フライアーフィン』

レイジングハートが魔法を発動し、なのはの靴に魔法の羽が発生する。

それを見たフェイトが、バルディッシュを構えなおした。

「どうしても、戦わなきゃだめなのかな？」

「賭けて・・・ジュエルシールドを・・・」

「・・・わかった。でも、なのはが勝ったらお話聞かせてもらおうからね!!」

次の瞬間、なのはが空に駆け上がる、
両者が自分の杖を構えて距離を詰め、戦闘が再開された。

シールド・バッシュ
「盾打だな」

「ああ」

一連の動きを見ていた土郎の、ぼそりとした呟きに恭也が頷く。

「知っているんですか？」

話についていけないユーノが説明を求めてきた。
魔導師に接近戦の知識は門外漢だろう。

「西洋の戦闘技術だよ。向こうは片手に剣、反対の手に盾を持つのがスタンダードだったんだが、その内に剣でだけじゃなく盾でぶんなぐることを考えたやつがいたんだ」

「なるほど・・・」

やり方に違いはあっても、その概念は共通している。

あの砲撃を防ぐ盾をそのまま攻撃に使ったらどうなるかと・・・その結果があれだ。

まともに当たっていれば、さっきの一撃で決着が付いていてもおかしくはなかった。

しかも、ある程度強力な砲撃を放つとき、術者はどうしても硬直して無防備になるタイミングが発生してしまう。

なのはの攻撃はそれを狙ったものだろう・・・8歳でこの戦闘センス、しかも魔法というものに触れてまだほんの僅かという事を考えれば、身内最良と言われるのを覚悟して、天性とか天才などという言葉を思わずにはられない。

なのはが力に溺れてしまわないかと、不安がないわけじゃ無いが・・・子供が正しい方向に枝葉を伸ばせるように導くのは、親や年長者である自分達の義務だろうと士郎と恭也は考えている。

・・・過保護だろうが気にしない。

「それに、あの金髪の子もなかなかできるな」

魔導師同士の戦いを見るのは当然初めてだが、おそらく彼女の戦い方が魔導師のスタンダードだろう。

あの歳で一つ一つの動きに無駄が少ない。

どちらかといえば、近接の方がメインか？

この辺りは、畑が違っても共通するものがある。
きつとよい師に恵まれ、本人の努力が合わさった結果に違いない。

一番感心するのは、戦闘開始前にあれだけルビーにペースを乱されていながら、いったん戦闘が始まってしまえば、そんな関係ないとばかりに切り替えられた彼女の精神力だ。
その点において、彼女はすでに一流の片鱗を見せ始めている。

「ふん、当たり前さ！！フェイトが負けるわけがない」

士郎達の意識を、なのはとフェイトの戦いからの引つ張り戻したのは、力強く誇らしげな声だった。
視線を下げると、挑戦的なアルフの目が三人を見返して来る。

「いや、そんな恰好で凄まれても・・・」

「だったら離せー！！！」

アルフの声が下から聞こえてきたのは、単純に声の出所が低いから・・・戦闘開始と同時に、なのはをフェイトにまかせ、邪魔になりそうな士郎達にとびかかってきた彼女だが、返り討ちにあつてこの有様だ。

飛べない御剣剣士はただの御剣剣士だが、空さえ飛ばなければ、御剣剣士二人相手に勝てるやつはそう多くない。

その結果、鋼糸とユーノのバインドでぐるぐる巻きで地面に転がされているというわけだ。

人道とか、男として思う所がないわけじゃないが・・・手を出して起き上がらせようとする、噛みつきとうとして歯を剥き出しに威嚇して来るので放置中。

下手なところを触ってしまったて、妙なフラグ立ても勘弁だし・・・その場合の男の立場とはヒエラルキーの最底辺に一直線だ。

ついでに、額に貼られた 賞品 の紙がかなりの遊び心を感じさせるが、士郎達もルビーとかかわって性格が悪くなったか？
しかし、ルビーならストレートに負け犬と書きそうな気がする、これはまだいい方だろう。

「・・・ところでユーノ君は大丈夫かい？」

「え、ええ・・・何とか結界をはれる程度には回復できましたから」
ユーノのいる地面には、白く光る魔法陣が展開されている。
なんでも広域結界という奴で、この辺り一帯を隔離しているらしい。
それがなければ、とくに大事になっていただろう。

桃色と金色の砲撃が飛び交う極彩色の戦場は、激しく目によろしくなさそうだ。

「おい、あたしを無視するなよ！！」

あらかさまに話と視線を逸らされて、怒り心頭なアルフだが・・・今の彼女は、犬モードから人間モードに戻っている。
おかげで胸とか太股とかが、鋼系とバインドに押しつぶされていて、ちよつと官能的なことになっていた。

・・・男三人は目のやり場に困る困る。

下心はないが、桃子と忍にばれた時が怖い。

万が一、なのはに害虫を見るような眼をされたら楽に死ねるだろう。

「あー、アルフ君と言ったね？解放したら何をするつもりなんだい？」

「もちろんお前らをぶっ飛ばしてフェイトの加勢に行くに決まってるだろ？」

「じゃあだめだ」

交渉ですらなかった。

ぶっ飛ばされると聞いて、素直に開放する奴などいるものか。

「ユーノ君・・・使い魔というのはみな彼女みたいな感じなのかい？」

やれやれという感じに、士郎がユーノに質問する。

「いえ・・・多分、彼女の場合はミッドチルダ・・・僕達の世界にいた狼をベースに使い魔を作ったんだと思いますが、まだ使い魔になって間もないんだと思います」

「なんだよ、文句あんのか？」

アルフが歯を剥き出して威嚇してくる。

今の彼女には、それくらいしかできないので仕方がない。

ユーノの説明によると、使い魔は生み出される時点で、術者から最低限の知識を与えられはするが、そこから先の知らない知識や能力は自分で経験を経なければ、身につかないらしい。

「なるほど・・・」

士郎は大体の事情を理解した。

アルフが使い魔になった経緯は問題じゃない。

重要なのは、狼だった時期を計算しなければ、彼女の年齢はおそらく5歳にもならないだろうという事だ。

つまり、見掛けは大人のアルフだが、その内容はなのはよりも子供・・・ところどころに見せる子供っぽい仕草や、感情的な所がむしろ彼女の素・・・つまり、アルフの直情的だったり、あまり深くものを考えない部分は、正しい意味で若さゆえの過ちということになる。

「・・・・・」

士郎は恭也と視線を向けると、恭也の目に理解の色があった。

先日の翠屋での事は恭也にも話してある。

故に、この状況のおかしさを理解したのだろう。

いかに優れているとはいえフェイトは子供だ。

それに随伴させるのが、見た目はともかくこれまた子供・・・しかも監視されているらしい状況で、アルフが無力化されたというのに助けに来ないということは、他に仲間がいないことを意味している。

ルビーはジュエルシードをかなりの危険物と判断していた。

つまり、おそらく黒幕だろうフェイトの母親は、子供二人にそんな危険物の回収を丸投げした上に、見ていだけで何のバックアップもしていない。

そんな事がありうるのだろうか？

それは・・・何らかの理由でフェイトの母親に余裕がないということ

とを意味するのではないだろうか？

微妙に、焦りに似たものを感じるのは・・・気のせいだろうか？

「・・・後でルビーちゃんに相談した方がいいかもしれないな」

ルビーも、事がなのはとフェイトに関する事なら少しはまじめに取り組むだろう。

そんな事を考ながら頭上を見上げると、なのはとフェイトの戦いが佳境に入りつつあった。

「くっ!!」

迫りくる桃色の閃光を、フェイトは空中でとんぼ返りを打ってよける。

砲撃の主は、こちらと距離をとって狙い打ってくるのはだ。

「うの・・・くらい!!」

なのはの砲撃は、正確にフェイトのいる場所に向かって放たれてくる。

最初にあのルビーを黙らせた砲撃、デイベインバスターだ。

一発でも食らえば、プロテクションの上からでも持って行かれかねない砲撃が、直ぐ傍を通り抜けて行く度に、フェイトの精神が消耗してゆく。

フェイトはじりじりとしたプレッシャーに押され始めていた。

このままではいずれ、精神的に疲労したところで回避を失敗する。

・・・勝負に出るしかない。

「バルディッシュ、ブリッツアクション!!」

『Blitz Action』

フェイトの移動速度が加速する。

なのはの姿が急速に近づく。

フェイトは、なのはの砲撃にさらされながらも、一つの仮説を立てていた。

彼女が遠距離からの攻撃に終始しているのは、接近されるのを嫌っているからではないだろうか？

最初のプロテクションによる特攻以降、フェイトとの距離を詰めようとはしていないのは、接近戦が不得意か、訓練不足と考えれば説明がつく。

近接戦闘というのは、技術と経験、相手とのかけ引き、加えて相手の攻撃を至近距離で食らうかもしれない恐怖を屈服させなければならない。

おそらく、実戦経験の少ないなのはには、それらの感覚が養われていないのだ。

フェイトはそこに勝機を見出した。

『デイベインバスター』

「くっつ!!」

防御はしない。

プロテクションを使えば、防げて足が止まってしまう。

その間に、再び距離をとられてしまっただろう。

だから、フェイトは純粋な身体能力と飛行魔法のみを使って、迫りくる桃色の砲撃の射線から自分の身をずらし、紙一重でかわす。

急旋回で体がねじれ、砲撃がかすってマントがちぎられるが、構っちゃいけない。

それで勝てるなら安いものだ。

「あ！」

フェイトの動きに驚き、対応出来ないのはの顔を横目に、彼女の直ぐ傍を駆け抜けて背後に回り込むことに成功した。

なのはが振り向こうとするが遅い。

デバイスは、砲撃の残心で、前方に向けられたままだ。

・・・完全に取った。

しかし、フェイトは魔法を発動させない。

魔法を発動させれば、どうしても次の行動までに、僅かとはいえタイムラグが生じる。

そんな隙を見せる気はない。

見せていい相手じゃないと思うから、斧状のバルディッシュで純粋に殴りに行く。

「・・・ごめんね」

振り向こうとしている彼女の横顔を見ながら、バルディッシュをが

ら空きの背中に叩きつける。

魔法を発動させていないバルディッシュは、非殺傷指定などないただの鉄の棒だ。

バリアジャケットの防御力で致命的なことにはならないだろうが、それでも衝撃を完全に消す事は出来ないだろうし、誰かに武器で殴りつけられるのは恐怖以外の何物でもあるまい。

・・・ここで彼女の心を折り、この戦いを終わらせる。

心でもう一度謝りつつ、しかし一切の手加減をせずにフェイトはバルディッシュを叩きつけた・・・ガキンという音と手ごたえが、バルディッシュを持つ両手に返ってくる。

「な!？」

跳ね返ってきた反動に、思わずフェイトが声を上げる。
明らかに、バリアジャケットの感触ではない。

「そんな、“剣”なんて・・・一体何処から？」

フェイトは見る。

なのはが背後からの攻撃を、“白刃”で受け止めているのを・・・
なのはは右手にレイジングハートを持ち、左手で細身の直剣を逆手に構えてフェイトの攻撃を受け止めていたのだ。

『デイベインバスター』

「くつつ!」

フェイトの本能が、認識より早く緊急回避を取らせる。

後ろではなく前、なのはの頭上を飛び越える最短ルートを通りながら、一瞬前までいた場所を桃色の閃光が通り過ぎるのを見た。

・・・ゼロ距離から放たれたデイベインバスター!?

見れば、なのはが剣を持つ左手の脇を通すようにレイジングハートを構えている。

魔法による加速の効果が残っていないければ、避けられなかっただろう。

「捕まえたよ、フェイトちゃん!!」

「つつ!!」

フェイトがはつとする。

レイジングハートに気を取られ過ぎた。

見れば、なのはが剣を持っている方の手の指が一本、自分を指している。

その指先には魔力の光が宿り、直後にズドンという音とともに、放たれた魔力弾がフェイトに迫る。

「が!!」

さすがに、これは避けられなかった。

体の中心に魔力弾が直撃する。

バリアジャケットでダメージは軽減されるが、吸収しきれなかった衝撃が、体突き抜けて背後に抜ける。

上手くいった・・・なのはは左手の剣・・・黒鍵を握りなおしながら思う。

黒鍵はルビーに作り方を教わり、なのはが作った礼装だ。

本当は、投げつけて使う物らしいのだが、まだ成長途中のなのはの小さな手では一本持つことしかできない。

柄だけの黒鍵に魔力を流すと、再び魔力で作られた白刃が現れる。魔法と違って、魔術には非殺傷などという便利なものは存在しないため、魔力を調整して刃はつぶしてあった。

なのはの持つ強大な魔力によって、右手のレイジングハートで魔法を使い、左手で魔術を行使するのが、魔導師であり魔術師であるなのは独自のスタイルだ。

そのおかげでなのはは魔導師であるフェイトより、一枚多い手数を保持することができるが・・・なのははそれを土壇場まで温存していた。

・・・千載一遇のチャンスをつかむために。

最初に、ディバインバスターディバインバスターを見せたところから全て・・・意味もなく最強の手札をさらしたように見せて、なのはとの遠距離戦に危機感を植え付け・・・距離をとって接近戦を嫌がっているように見せて誘い込み・・・勝利を確信したフェイトの裏をかく所まで・・・なのはとレイジングハートは魔術師としての計算された合理的な思考によって戦場を支配していた。

唯一の懸念材料はやはり接近戦だった。

フエイトの考えた通り、なのはは近接戦は素人に毛が生えた程度ではない。

魔術で体を強化して、やっとフエイトの斬撃を受け止めることができる程度・・・もう一度やれと言われても自信がない。

しかし、それでもやらなければ勝てないと思った。

魔法の訓練を積む時間のあったフエイトに対して、自分は魔法を手に入れてから半月も経っていないのだ。

これで両者に差がなければそれこそ詐欺だろう。

誰よりもなのはがそれを理解していたからこそ、リスクな賭けにできるしかなく、そしてなのはは賭けに勝った。

そのはず・・・なのに・・・。

「まさか、倒せないなんて・・・」

『手ごわいですね、なのは様』

軽い口調は内心の動揺を隠すため、なのはの耳には、心臓がすごい速さで鼓動を打っている音が聞こえていた。

「ゲホ、ゲホ・・・」

咳き込みながら、それでも落ちることなく空中にとどまり続けているフエイトがいる。

ガンドの威力が、バリアジャケットを貫けないのは想定していた。

それでも、威力の半分はフェイトの体に届いたはず……気を失っていてもおかしくないというのに、フェイトははまだ、バルディッシュを手放しさえしない。

「フェイトちゃん……フェイトちゃんにとってジュエルシールドは、そんなに大事なものの？」

「ゴホツ……貴女には……関係ない」

この期に及んで、フェイトは理由を語ってくれない。フェイトの眼には、覚悟と決意の色があった。

「……フェイトちゃん」

フェイトが、バルディッシュを構えるのを見たのはは、あわててレイジングハートと黒鍵を構えなおした。

フェイトがダメージを受けているのは間違いない。まだなのはの方が有利……だが……。

『なのは様？』

黒鍵とレイジングハートが小刻みに揺れている。

なのはのふるえが止まるより早く、再びフェイトが加速した。

――

「……バルディッシュ、もう一度」

『Blitz Action』

フェイトの速度が再び上がる。

わずかな思考の中で出したフェイトの結論は、やはり近接戦だった。

・・・分かったことがある。

なのは遠距離ではディバインバスター、中距離ではあの指から出す魔力弾、接近戦においては剣という風にすべての距離に対応できるらしい。

この中で一番厄介なのはやはりディバインバスター・・・またもとに食らえば間違いなく落とされるのだから、やはり砲撃戦は却下。

次に中距離戦、あの魔力弾は意表を突かれたとはいえ、バリアジャケットで受け止めることができた。

故にそれ自体は脅威とまでは言えないが、なのははどういうわけかデバイスとほぼ同時に魔力弾を放てるらしい。

動きが止まったところで、ディバインバスターを打ち込まれれば結果は同じだ。

そして近接戦・・・剣で受けられ、返す刀でディバインバスターを撃たれたものの、ほかの技術に比べ・・・あの剣技だけはどうにも素人臭かった。

もしあの時、剣をわずかにずらして体勢を崩されていたら、無防備なところにまともにディバインバスターを受けていたはず。

彼女の剣には、そう言った“技”に類するものが感じられなかった。例えるなら、力任せにたたき切るそれ・・・彼女の体格でそれだけの力が出せるのも疑問だが、今はどうでもいい。

重要なのは、彼女の接近戦には付け入る隙があり、自分は接近戦が得意ということだ。

「レイジングハート!!」

『デイベインバスター』

距離を詰めようとするフェイトに向けて砲撃が来た。

見え見えの大技は明らか誘い、しかしこのまま食らうわけにもいかないの、相手の想定内の行動と分かっていて射線から体をずらす。

「くっ!!」

案の定、避けた所になのはの左手から、マシンガンのような魔力弾の嵐が来る。

「こんな事までできるなんて・・・」

必死に回避する。

手足に数発食らってしまうが、無視して加速する。
止まってしまうのが一番まずい。

すでに、なのははデイベインバスターのチャージに入っているはずだ。

終わる前に距離を詰めなければやられる。

「でも・・・これなら・・・」

魔力弾に誘導性がないのは幸いだった。
最小の動きで、魔力弾の間をすり抜けて行く。

相対速度で視認などできない状況で避けられたのは、経験に裏打ちされた勘以外の何物でもなかった。

「早い!？」

さすがに、この速度はなのにも驚きだったようだ。

彼女の驚く顔が、何故か可笑しくてほほが緩みそうになるのを、無理やり押し込む。

フェイトは、速度をゆるめることなくなのはの下に飛び込み、バルディッシュを槍のように突き出した。

「で、でも!!」

早いとはいえ、動きそのものはただの直線行動、なののは剣を構え、バルディッシュの穂先に当てて狙いをそらす。

両者の間から火花が飛び、なののはとフェイト、二人の顔が火花に照らされ、至近距離で視線が絡み合う。

狙いを逸らされたバルディッシュは、なののはの顔の真横を抜けて背後にそれた。

「レイジングハート!!」

「させない!!」

なののはが、レイジングハートを向けようとしてくるのを、フェイトは足の裏で受け止めて抑える。

砲口を向けさせなければ、砲撃など怖くない。

「バルディッシュ、アークセイバー!!」

『Arc Saber』

・・・これで、詰んだ。

フェイトが魔法を発動した瞬間、なのはは自分の敗北を悟った。

背後、具体的には首のすぐ後ろに魔力を感じる。

死角なので確認はできないが、おそらくは魔力で作られた刃がある。

このまま、フェイトがバルディッシュを手前に引けば、ギロチンの如くなのはの首を魔力の刃が薙ぐだろう。
なのはの回避も防御も、間に合わない。

『・・・ジュエルシードをお渡しします』

「レイジングハート・・・」

レイジングハートから、ジュエルシードが吐き出された。

「・・・あなたの事を良く思ってくれる。・・・いいデバイスだね」

ジュエルシードが移動し、バルディッシュに吸い込まれる。

それを見たなのははため息をついた。

・・・レイジングハートの判断は正しい。

言い訳のしようもないほど、完全なのはの負けだ。

そして、最初にジュエルシードを賭けていた以上、フェイトにジュエルシードが渡るのも当然だ。

「・・・ごめんなさい。もう少しだけ」
「え？」

フェイトはそう言うと、なのはにバルディッシュを突き付けたまま、地上を見た。

そこには、拘束されて地面に転がりながらも、してやったりな顔をしているアルフと、その近くに自分達を見上げてくる士郎と恭也、ユーノがいる。

「・・・アルフを開放してください」

士郎が苦笑しながら手を振ると、アルフをからめ取っていた鋼糸がすべて外れる。

「あ、士郎さん!？」

「ユーノ君、ここは黙って言うとおりにしてくれないか？」

「う・・・」

フェイトの鎌は、なのはの首をとらえたままだ。

ユーノは、渋々ながらバインドを解除した。

それを見たフェイトは、なのはからバルディッシュを離し、ゆっくりと地上に降りて来る。

「・・・いいのかい？」

解放されはしたが、警戒心を保ったままのアルフが問いかけてきた。士郎と恭也の實力は、文字通り身を持って知っている。

二人とユーノの三人がかれば、アルフを再び捕まえられるだろう。

なのはが人質と言うなら、こちらはアルフを人質にする事も出来たはずだ。

「何、これはお礼さ、フエイトちゃんとの戦いは、なのはにもいい経験になっただろうからね」

実際、空が飛べないとはいえ、士郎と恭也がなのはに味方していれば、勝ち揺るがなかったはずだ。

しかし、だれよりなのはがそれを望まなかっただろう。

結果として戦うことになったとはいえ、なのはは、どうにもあのフエイトという子に感じるものがあるらしい。

戦う相手に、必要以上の思い入れを抱くのは危険だと思う。
彼女達は確かに幼い。

しかし、だからこそ純粋に真剣なのだ。

親としてはそれを大事にしてやりたいと思う。

子供の問題は、子供達だけで解決した方がいいに決まっているのだから……。

幸い、魔法には非殺傷設定というものがあるらしい。

本当に危険になる前には介入するが、逆にそれまでは二人の好きにさせる事で恭也達とも話し合っていた。

今回はなのはの負けだが、負けて学ぶことがあるのも知っている。それだけでも、この戦いの意味はあったと士郎は思うのだ。

後の子供達のフォローは大人の仕事……と言うより、そのくらいしか大人の出る幕はあるまい。

・・・親バカと言いたかったら好きに言え。

「・・・フン、フェイト!!」

士郎の答えに、おもしろくなさそうに鼻を鳴らしたアルフが駆ける先には、フェイトがいる。

「やったねフェイト! やっぱあたしのご主人様はすごいよ!!」

フェイトに抱きついて、全身で喜びを表現するアルフは、まさに犬のようなはしゃぎっぷりだ。

「うん、でも危なかったよ」

勝利者のはずなのに、フェイトは敗者のなのはよりダメージを受けていた。

二人を見比べて、フェイトが勝ったと思う人間はそう多くないだろう。

それでも、彼女が勝ったという事実は変わらない。

彼女はぼろぼろになりながらもなのはに勝って、ジュエルシールドを手に入れたのだ。

「さあ、目的は果たしたんだ。帰ろうフェイト」

「うん、そうだねアルフ・・・ってあれ?」

「おっと」

戦闘の疲れか、ふらついたフェイトをアルフが受け止める。

「大丈夫かい、フェイト?」

限界が来たか？

フェイトが勝ったとはいえ、ダメージは明らかにフェイトの方が多い。

「アルフ・・・何か変・・・」

「フェイト？」

フェイトの顔色が悪い。

妙に青ざめているのを見たアルフは不安になる。

「体が動かない」

「つつ！！」

言われてアルフも気がついた。
体の動きが鈍い、しかも徐々に動かしづらくなってゆくこれは・・・。

『ふふふっ 風下に立ったが主らの不運よ！！』

この場にいる全員が気付いた。
声が言う所の風上に何かがいる。

『今回ルビーちゃんが全然出てこないからって油断しちゃいましたね？ あはあ』

それは間違いなくルビーだった。
しかも、ルビーの周囲から何か燐分のようなものが発生して風下・・・つまり自分たちの方に流れてきている。

これは・・・

『忍法、春花の術ですよ！解説しよう！！春花の術とは、風上から粉末状の毒をばら撒いて風に乗せ、風下にいる連中を一網打尽にする忍法である！！Byカムイ外伝』

「「「「毒！？」「」「」」

律儀なルビーの説明に、全員の声が悲鳴になった。

バリアジャケットは、衝撃や魔力の防御には優れているが、空気を遮断するような機能はない。

「ってなんで僕たちまで！？」

抗議がユーノから来た。

彼だけでなく、士郎や恭也まで被害を食らって倒れている。

悲鳴が多かったのは彼等のも込みだったからか？

確かにこの術は人間を区別することはできない。

文字通り風下にいた不運というやつだが、そもそもなんでそんなものを使う？

・・・まさか本当に命にかかわったりする物をばら撒いていないだろうな？

「あ、あわわ・・・」

唯一、被害を受けていないのは、空中にとどまり続けていたなのだ。

しかし、みんなを助けようと下に降りれば、ルビーが言う所の春花の術に巻き込まれてしまう。

八方塞がりな状況についていけず、目を白黒させることしかできない。

『負けたらジュエルシードを渡すとは言いましたが、簡単に帰すなんて誰が言いましたかあ』

「この・・・卑怯者!!」

アルフの言葉を、誰も否定できない。

清々しい位の悪人で外道だった。

ルビーの答えに、アルフが齒を食いしばる。

「フェイトは・・・あたしが守るから」

「アルフ・・・」

しびれる体に鞭打って、アルフがフェイトを引き寄せ、抱き込んでルビーを睨む。

見上げた忠誠ぶりだ。

じりじりと、ルビーが二人に近付いていた。

『あはあゝスーパールビーちゃんタイムですよ・・・ん?』

何かに気づいたルビーの動きが止まる。

脈絡のなさに、全員の頭に?マークが浮かぶ。

『・・・スーパーよりすうぱ〜と平仮名の方がいいでしょうかね?』

「「「「「知るかあー!!!」」」」」

息の揃った全突込みだった。

『あはあゝそれでは改めましてゝお二人様ご案内ーい』

「ちくしょう、来るな!!」

「アルフ・・・」

アルフがフェイトを庇い、フェイトはアルフに強く抱きついて思わず目を閉じる。

カッポーーン

「は?」

次の瞬間・・・気がつけば、フェイトとアルフは並んで温泉につかっていた。

『あはあゝとうーびーこんでいにゅゝですよ』

・・・ルビーにかかわって、すんなり奇麗に終われると思う方が甘いのだ。

第十二話 後より出でて我が道を行く物（後書き）

何ヶ月ぶりという単位で、真面目に戦闘シーンを書きました。
温泉編が終わらない。

予定では一話のはずなのに三倍シャア？

第十三話 仕上げはお母さん？

フェイトとアルフはルビーの出鱈目さをほんのちょっぴりだが体験した。

い・・・いや・・・体験したというよりはまったく二人の理解を超えていたのだが・・・。。。

「あ、ありのまま起こったことを話すぜ？ 絶体絶命と思って覚悟をきめたら、何故か主従揃ってすっぱんぽんで温泉につかっていた。な、何を言っているか分からねーと思うが、二人共何をされたのかわからなかった」

「あ、アルフが何を言っているのか本当に分からないよー！？」
「は！？」

フェイトの大声に、アルフの目の色が正気に戻る。

「あ、あたしは何を・・・？」
「い、いきなり顔の彫が深くなって、陰影が濃くなってた。そ、それとね！髪がこう・・・重力に逆らってまっすぐ天を衝いてたよ？」

怒髪天じゃないな・・・きつとマッチョなフランス人の幽霊が、亀から抜け出してきて取り憑いていたに違いない。

それを聞いたアルフが、あわてて自分の髪を確かめて、いつもどおりの手触りでほっとする。

何とかギャグキャラ路線は回避できそうだ。

「ごめん、フェイト・・・何かあたし疲れているみたいだ」
「仕方ないよアルフ・・・」

事実、この数時間でのストレスはとんでもないことになっている。こんな状況が数日続けば、それだけで衰弱死できるかもしれない。

「・・・それで、ここは何処だい？」

「わからない・・・」

二人がいる場所は温泉・・・これは間違いない。

浸かっているのはちょうどいい温度のお湯だし、中央にある、自分達がよりかかっていた柱を中心にして、周囲をぐるりと石で囲っている。

露天風呂のようだが、海鳴温泉ではない。

実際に入ってきたアルフが断言できる。

そして、この温泉のおかしなところはここから先だ。

・・・白い、とにかく白いのだ。

「・・・何も見えないね？」

「ああ・・・」

湯煙？あるいは濃霧？

温泉の端までは視認できるのだが、その先は真っ白で先が見通せない。

360度万遍無く、ホワイトアウトしている。

一度でも離れてしまったら、この温泉を見失って帰り着く事が出来ない気がするの、考えすぎだと思いたい。

いきなり移動したことだけならば、転移魔法で説明がつくが、この場所やその他いろいろな説明がつかない。

幻覚とかご都合主義とか、そんなちゃんもんじゃだんじてねえ、

もつと恐ろしい物の片鱗を味わった二人だった。

特に、いつの間にか服を脱がされていたことについては、乙女的に危機感を感じずにはいられない。

幸い、いつの間にか体の痺れが解けて動けるようになっていたようだ。

「つたくー！あの杖・・・」

『ルビーちゃんの正式名称は、愉快型魔術礼装カレイド・ステッキの人工精霊、マジカル・ルビーと言います』

「そう、そのルビーは一体何でこんなところにあたし達を連れてきたんだ？」

ルビーの考えなど、理解できるのか？という気がするが、一応聞いてみたいと思う。

『だーって、二人とも泥だらけだったじゃないですか』

確かに、地面を転がされたり、汗をかいたり、フェイトに至ってはなのはと派手な空中戦までやってボロボロだった。

確かに、帰る前に一つ風呂浴びたいところではあったのは否定しない。

『これはもう、戦い疲れた体をルビーちゃんがリフレッシュして差し上げなくちゃと・・・』

「余計なお世話だってーの、あたしたちの事を考えてくれるってんなら、この世から消えてくれりゃあいいのに、っていうかあたしがぶっ壊してやる！！」

一通り言い終わって少しはすっきりしたのか、よし！と気合を入れたアルフがフェイトを見る。

そこに、目玉焼きのように目を見開いているフェイトを見て頷いた。

「今の声はフェイトじゃないね？」

「・・・うん」

バツと、返事を聞いた途端、お湯を跳ね上げて立ち上がったフェイトとアルフが背中合わせに立って、周囲を警戒した。
いいコンビネーションだ。

『あはあゝルビーちゃんの固有結界、ヴァルハラ温泉バージョンへようこそゝあんまり気持ち良すぎて、そのまま魂が昇天しないようにお気をつけください』

・・・相変わらず、相手の応答を待たずに話を進める声は聞き間違えではない。

しかも狙っているのか、言葉の中にどうにも聞き逃せない言葉を混ぜてきやがった。

「ど、どこに隠れているんだい!？」

四つの目が周囲を見回すが、ルビーのあの特徴的なシルエットを見つける事は出来ない。

フェイトは周囲を警戒し、アルフは歯をむき出しにして構えた。

『アルフさんバイオレンス過ぎ、なんかいいことあったんですか?』

「この上なく厄介な奴に目をつけられるって言う悪い事があったんだよ!！」

『カリカリするのはいけませんねゝ、お肌の大敵ですよ?温泉に胃腸系への効能を加えとききましたんでゆっくりしていただくさい

ね〜
」

ストレスの元凶が何言ってたんだ！？である。
会話をしているようで話が通じていない。

『ちなみに、さっきばら撒いていたのは毒じゃなくてしびれ薬です。
びつくりしました？』

「そんなこたー聞いてないし、どうでもいいんだよ!!」

命にかかわっていたかもしれない事でさえ、突っ込みどころの多さに埋もれてしまった。

「・・・・・・・・」

そんなアルフの怒声と、ルビーの能天気な声を聞きながら、フェイトはアルフの育て方を間違えたかなーと思いつつ、冷静に声の出所を探している。

近い・・・近くにいます。

ここまではつきり声が聞こえてくるのだから、間違いはあるまい。
だが、その方向が分からない。

周囲のすべてから聞こえてくるような気がする。
姿を消す魔法が何かを使っているのだろうか？

『何言っているんですか？ルビーちゃん隠れてませんよ。最初からここにいますでしょう？』

「「は？」」

あわてて周囲を見回すが、やはり白い湯煙ばかりで、何の姿も見つけない。

『ここですよ。ここ』

「だから、どこだよ!？」

『上をご覧ください』

「上……」

言われたとおりに、上を見上げた二人は……。

「ひゃ!？」

「デカ!!!」

悲鳴とともに硬直した。

そこにいた……いや、あつたのはルビーだった。

しかも、下手なビルより高いサイズになったルビーだった。

『どーですかフェイトちゃん?このジャイアントなルビーちゃんは?』

「すごく……大きいです」

『イエス、さすがフェイトちゃん!!期待を裏切らないその天然に惚れちゃいそうです!!フェイト惚れ!!』

「え、ええ!？」

……フォローのしようがないほどに、今のは完全にフェイトが迂闊だった。

……何が起こったのか理解できずにわたわたとしている辺りが実にほほえましかった。

箱入りにも程があるが……ナイス箱入り!!

「な、なんでお前、そんなにでっかくなっただよ!？」

アルフも、こういう未知との遭遇は流石に初めてで、パニックになっているようだ。

『え? うーん、なんででしょうね? 一生懸命頑張って育ったから?』

「どいう成長期だそれは!？」

「アルフ、ちよっと黙って・・・」

目の前で大慌てするアルフを見て、逆に冷静さが戻ってきたか? なおも怒鳴り倒そうとするアルフを押さえて、フェイトがルビーに質問してきた。

その判断は間違いなく正しいはず、このままアルフに任せておけば、ネバーエンドだ。

「固有結界ってなに？」

『魔導師の結界とは基本的に違いますね? ぶっちゃけ、ここはルビーちゃんの世界であり、世界丸ごとルビーちゃんってことです』

「端折り過ぎだ!！」

フェイトは、ここから帰れたらまず、アルフに徹底的に待てを覚えさせようと思った。

いい加減大声で耳が痛い。

ついでに、ルビーの言う事は話半分も信じていない。

いきなり巨大化したくらいだ。

ここまでの常識はずれが、いまさら何をしようと大抵の事では驚きはしないが、いくらなんでも自分の世界を作り出すなど・・・それは神の所業ではないか?

「・・・バルディッシュはどこ？」

気を抜くと、ルビーのペースに持つて行かれそうになるのをこらえて、フェイトが、一番肝心な事を聞く。

フェイトもアルフも、何も身につけていない。
当然だが、バルディッシュも手元になかった。

『え〜っと、バルディッシュはですね〜』

ルビーがいきなり言いづらそうに言葉を濁した。
まさか・・・破壊されてはいないだろうな？

バルディッシュの中には、フェイトのジュエルシート三つが入っている・・・解体して取り出した？

『ちゃんとお預かりしていますよ？』

「返して下さい」

『だめです』

「何故？」

『温泉に水着は邪道です』

「水着じゃないですから！！」

「え？」

最後の疑問符で時が止まった。

目を据わらせたフェイトが、ギギギっと言う感じで声の主・・・要するにアルフを見る。

「何、アルフ？」

「いや、ごめんよフェイト、あたしもあのバリアジャケットは水着兼用だと思っていた」

『水陸両用ですね。あ、空もか』

「違うもん！！アルフの馬鹿！！」
「げー！！」

ゼロコンマでのカウンター。

馬鹿と言われたアルフが、湯船の中にずぶずぶと沈んでいく。

「あ、アルフ？ご、ごめんね・・・ちょっと言い過ぎ・・・」

やはりフェイトはいい子！！

『フッフ、アルフさんをワンターンキル。成長しましたね〜フェイトちゃん』

「あ、貴女にそんな事言われたくないです！！それに殺してません！死んでません！！」

涙目のフェイトの言うとおり、ルビーにだけは何も言われたくないだろう。

「にやはは、アルフさん大丈夫？ルビーちゃんにまともな会話を期待しても無駄だよ」

「はっ！？」

あやうく、湯船に沈んで溺死しそうになっていたアルフが、三途の川の半ばから呼び戻された。

見ればルビーの根元で、最初の自分達と同じく背中を預けているのはがいる。

彼女もまた、服を脱いでバスタオルを体に巻いた入浴フォームだ。

「な、なのはさん！？いつの間に！？」

まだアルフからは、恐怖が抜けていないようだ。
敬語が治っていない。

基本的に、動物は自分より強いものには勝てないのだから、仕方がないと言えば仕方がないのだろうか？

「何って言うかね・・・もうルビーちゃんはそういうものなんだって割り切らないと、突っ込み疲れちゃうよ？」

にやははと笑うなのは笑顔に、あきらめの色を見たアルフが悟る。

「・・・マジで？」

「マジだよ」

敵同士のはずなのに、心と心が通じ合った。

敵の敵は、すなわち味方・・・かなり一時的なものに思えるが。

「な、何で彼女まで・・・」

なのはの登場で、一番動揺しているのは実はアルフではなくフェイトだったりする。

「フェイトちゃん・・・」

そしてなのはも、名前の後続く言葉がない。

『フフフッ戦い終えた二人は、裸で向き合う事によって新たな展開に発展するのです!!』

案の定、ルビーだけはいつもの通りだった。

更に、まんま昔の番長理論だった。
かなり使い古された展開を、リアルでやろうとするのはどうかと思う。

『さあ二人とも、思いのたけをぶちまけるのですよ！！レッツ・オ
ーブン・マイ・ハート！！』

「そ、そんな事言われても・・・」

「むちゃくちゃだよルビーちゃん？」

なのはとフェイトがたじろいだ。

・・・ど、どうしよう？

なのはは本当に困っていた。

フェイトとお話をしたいと思っではいたが、何を話せばいいかわからない。

何故かと言うと、なのははフェイトの覚悟を見てしまったから・・・
たとえ痛くても、怪我をしようとジュエルシードを手に入れるとい
う彼女の思い。

それが何なのかはなのはにはわからない。
でも間違いなくその思いは真剣だ。

それを目にしてしまったのは、彼女の邪魔をする事が良い事なのかと
いう疑問が浮かび、それによる迷いが震えとなって、戦いの中で現
れたのだ。

なのはがジュエルシードを集めるのは、ユーノにお願いされたとい

う事もあるが、自分に何ができるか試してみたかったからだ。
別に責められる物ではないと思うが、子供の清廉さと、フェイトの
意思を見てしまった後ではどうしても不純な気がしてしまうのは
だった。

・・・どうしよう？

そしてフェイトも困っていた。

彼女にはジュエルシードを集めなければならない理由がある。
しかし、本来の持ち主はなのは達の方であり、それを無理矢理に奪
っているのがフェイト達の方である。
泥棒猫と言われたら全く反論できない。

ジュエルシードをかけた勝負にしても、気が進まなそうだった彼女
に、こっちが一方的に吹っ掛けて強引に了承させたらうえに、脅しと
はいえ、首に刃物？を突き付けて人質にしちゃったのが、とんでも
なく後ろめたい。

フェイトも、これまた完全な割り切りができるほどに大人ではなか
った。

要するに、相手に負い目があるのはお互いさまなのだ。

――――――――――

「・・・・・・・・・・」

二人とも何も言わないが、それゆえに緊張だけが高まってゆく、地
獄のような空気の重さだ。

勝負の勝者と敗者。

勝ちましたがボロボロにされた方と、負けはしたけどボロボロにした方・・・そりゃゝ気まずい事この上なからう。視線を合わせるのですら勇気がいるはずだ。

「負けるな・・・がんばれ・・・がんばれフェイト・・・」

そして勝手に一人でヒートアップしている犬が一匹・・・温泉より暑苦しい。

空気も読めてなさそうだ。

『そういうバトル的な展開じゃないと思うんですけど?』

おかげで珍しいルビーからの突っ込みを食らった。

「うるさいよ。ご主人様を応援して何が悪いんだい?」

『やれやれゝアルフさんって、「フェイトはあたしが守る!!」ってなかなか無いお涙ちょうだいな感激シーンを素でこなしちゃったり、忠誠心MAXですよね? 前世はパトラッシュか忠犬八千代ですか?』

「知るか!!!」

古傷をえぐられた気分のアルフ怒鳴る。

顔が赤い。

あの時は必死だったが、今思い返してみると恐ろしく恥ずかしいと自覚したようだ。

「それで、どうすんだよこれ?」

気を取り直し、アルフがルビーに質問した。
なのはとフェイトは全然動かない。

肉眼で心の壁が確認できそうなほどに、声をかけるのも躊躇うレベルで部外者お断りでもある。

アルフだって声をかけられないほどだ。

埒が明かないので、真面目にどうにかならないものか？

『こ、こーなったら奥の手です』

「奥の手？」

『お助け主婦、高町桃子 のしょーかん！！』

ルビーがいきなりのたまうと、空間に穴があいた。
どうやらゲートらしい。

誰かが出てくる気配を感じる。

カードの演出をしない辺りで、まだましなのか？

「あーはいはい、もうあたしは何が起こっても驚かねーよ」

すでにアルフはルビーとの付き合い方を確立したようだ。

自分に被害が来ない限りにおいて突っ込まない。

下手に手を出すと飛び火してくるから。

「はい、呼ばれてきたわよ。ルビーちゃん？」

現われたのは本物の桃子だった。

しかも、バスタオル一枚を体に巻いただけの、入浴どんとこいな姿である。

・・・実は、こっそりスタンバっていた？

『お願いします。桃子さん!!』

「わかりました。二人の事は任せて頂戴」

そう言うと、微笑んだ桃子がなのはとフェイトの下に歩いて行く。
その後ろ姿がとっても頼もしい。

『やはり仕上げはおかあさんですよね』

「仕上げって言うか、丸投げだろ？」

『そうとも言いかもしれません』

「それ以外にどう言えって言うんだよ？」

アルフは、ルビーとの漫オスキルという実にいやなものを手に入れた。

「こんばんは、フェイトちゃん」

「つつ!？」

「あ、お母さん？」

深く考え込みすぎたのだろう。

いつの間にか、直ぐ傍に新たな人物があらわれていた事に気がつか
なかった。

「な・・・な・・・」

見覚えのある顔に、心臓が飛び出すかと思うほどに驚いたフェイト
が、何かを言おうとするが・・・まだ桃子のターンだ。

「ごめんなさいねフェイトちゃん？この前は騙す様な事しちゃって」
「あ・・・いえ・・・」

謝られたフェイトがどきまぎする。

騙したというのはこの前のシュークリームを受け取った時に、自分がなのは母親だと伝えなかった事か？

つまりあの時、彼女は自分が魔導師であると知っていた？

「そ、そんな事・・・気にしていません」

フェイトは騙されたとは思わない。

むしろ自分たちの関係を知っていれば、尚の事言いつらいだろうとすら思う。

・・・妙なところで物分かりのいい子だ。

「あれ、お母さん？フェイトちゃんのこと知っていたの？」

どうやらなのは知らなかったらしい。

フェイトとしては、桃子に感じていたデジャブの元が、どこから来ていたのかわかってすっきりした気分だ。

「それでね、お詫びをさせてほしいんだけど？」

「お詫び・・・？そんなこと・・・」

「フェイトちゃんの髪を洗わせてほしいの」

「え？ええ？」

言うが早いか、桃子はフェイトの体を温泉から引き揚げて連行してゆく。

こっちもまともに会話しようという気はないみたいだ。
フェイトはフェイトで、完全に泡を食ってアワアワ言っている。
されるがまま・・・桃子さん、案外強引。

「なのはもいらっしやい。久しぶりに洗ってあげる」

「あ、うん・・・」

なのはも桃子について行く。

「フェイトちゃんの髪って長いのに枝毛もなくてきれいね」

「あ、ありがとうございます」

桃子に、髪だけでなく全身泡だらけにされながら、フェイトはそう
言うしかなかった。

髪を誰かに洗ってもらうなど、どれくらいぶりだろうか？

・・・な、何故か・・・ドキドキする!？

フェイトの内心は心臓バクバクだった。

「私の名前は高町桃子、よろしくね」

「フェイト、フェイト・テストロッサです」

・・・自己紹介？

桃子とフェイトの会話に、なのははピンときた。

今までぼんやりしていた何かが形をとったようなそんな感覚だ。

「そうだよ・・・フェイトちゃん」

「え？」

「わたし、高町なのは！よろしくね」

「う、うん・・・」

今更の自己紹介に、フェイトがなのはの真意を測りかねる。

「私立聖祥大学付属小学校に通う、小学3年生なの」

そんなフェイトの戸惑いなんて知らないとはかりになのはは続ける。

「それでね・・・私がジュエルシードを集めるのは、ユーノ君に頼まれたから！ユーノ君はジュエルシードを見つけた人で、ばらばらになっちゃったからもう一度集めなくちゃならないの！！」
「・・・・・・・・・・」

フェイトの顔から表情が消えた。

冷めた目でなのはを見ているが、直ぐ傍にいる桃子は何も言わない。

「それだけじゃなくって、私が魔法や魔術を使ってお手伝いがしたいってこともあるんだけど・・・」

「なんで・・・そんな事を話すの？」

フェイトにはなのはの考えていることが分からない。

自分が話したから、フェイトにも何故ジュエルシードを集めるのか、理由を話せと言いたいのだろうか？

「ううん、そうじゃなくて・・・フェイトちゃんに知って欲しいの、

なのはの事を」

「ど、どうして？」

「・・・前ね、今のお友達と喧嘩したの・・・」

小学校に上がって、初めてアリサとすずかと同じクラスになった二年前。

すずかのリボンをアリサがとって・・・とられたすずかは泣いていて・・・それをみたなのははアリサをぶった。

思えばあの時、もっと良く話をしていれば・・・アリサをたたく必要はなかったのではないだろうか？

その後の取っ組み合いを防げたのではないか？

勿論・・・最終的に喧嘩することは防げなかったかもしれない。

それでも・・・。

「たとえば、目的のために競い合う事になっても・・・」

なのはは争いを否定しない。

結果的に、自分とアリサとすずかは友達になれた。

あの喧嘩がなければ、自分達は友達になれなかったかもしれないから・・・ぶつかり合う事でわかりあえることがあることを否定はしない。

「訳も分からずに傷つけあうのはいやなの！」

だが、相手の思いを無視して、問答無用で事に及ぶのは何か違うと思う。

ひょっとしたら、二人共に満足できる結果があるかもしれない。

「だから・・・」

まずは自分の事をフェイトに知って貰いたかったとなのは言う。
フェイトが自分の事を語らないなら、自分から歩み寄ろうとなのは言う。

「あ・・・その・・・」

ストレートな思いをぶつけられて、フェイトが答えに詰まった。

「すぐにじゃなくていいの、話したくなってからで・・・今日はなのはが自己紹介したかっただけだから」

「で、でも・・・私の名前は・・・」

「あんなのは自己紹介とは言わないの!!」

おちよくって名前を名乗らせるのを、自己紹介とは言うまい。
しかも、その時の相手はルビーで、なのはではなかったし。

「わ、私の名前はフェイト・テストロッサ・・・」

「うん、よろしくねフェイトちゃん？」

「よ、よろしく・・・」

ここに・・・改めて二人は名乗り会い、相手の名を聞いた。

「よかったわね、なのは？」

「うん」

「なのはをよろしくね、フェイトちゃん？」

「え？」

・・・何か今、桃子の言葉に何か含みがあるような気がしたが？

「お互いの名前を知るのは、お友達になる第一歩よ」

「え、でも・・・」

「大丈夫、この世界では本気でぶつかりあう相手を、宿敵とかライバルと書いてともと呼ぶのよ」

「そ、そうなんですか？」

何か騙されている気がするフェイトだった。

「・・・な、何か大事な台詞を取られた気がするの」

そしてなのはは、奇妙な予感を感じていた。

「ま、まあいいの！じゃあさっそくお母さん、なのはもフェイトちゃんのを洗うの！」

「いいわよ。フェイトちゃんも後でなのはの髪を洗ってもらえるかしら？」

「は、はい」

フェイトはこの後、かちんこちに固まってしまふ。

真つ赤にはなっても、抵抗する様子はなく、大人しく高町母娘に髪を洗われ、自分もなのはの髪を洗う事に・・・しかもそのあと、流れでなのはとフェイトに髪を洗ってもらった桃子がとても嬉しそうだったと言う事だ。

「すげえ・・・」

アルフはそう言うしかなかった。

視線の先では、なのはとフェイトが握手をしている。

しかしアルフの注目は、二人より桃子に向いていた。

あの場を支配しているのは、間違いなく桃子だ。

直接何をしろと言わずに、それとなくきっかけを与えることで子供たちの自主性を促して、場を収めたのだ。

母性の力？マザースキル？

しかも終わりはきっちり締めていた・・・よく分からないがとにかく凄いと思う。

そして・・・。

「・・・お前、何を知っているんだい」

アルフが、ギロリと擬音をつけたくなる視線でルビーを見る。

『なんでもは知りませんよ、知っていることだけです』

どこの猫な委員長だ？

しかしアルフはそんなものには突っ込まない。

だって元ネタを知らなかったから・・・ただじつとルビーを睨んでいたアルフだが、不意に視線をそらしてふっと笑う。

「まあいいさ、ちょっとくらいなら感謝してやってもいい。でもあんな家族にぬくぬくと愛されて育った甘ちゃんに何が出来るっただい？」

『なるほど、家族にぬくぬく愛されて育った甘ちゃんですか？』

アルフの本能が、嫌な何かを伝えてきた。
ルビーの言い方が気になる。

「何だい？」

『いえ別に、後でなのはちゃんにチクろつと一字一句忘れないように確認しただけです』

「が!!」

アルフが愉快的な悲鳴をあげてムンクになる。

「や、やめとくれよ。それはちょっと洒落になってないって・・・
後生だから」

一体どれだけ心に恐怖を刻まれているのだろうか？
犬耳がぺたんと垂れて、しっぱを隠して涙目のアルフの姿は・・・
結構かわいいかもしれないと思う。

「と、とにかく!! 次にあたしたちの邪魔したら手加減しないよ!」
「？」

気を取り直し・・・と言うか、何とか虚勢を張ってアルフがルビーを脅して来る。

『手加減ですか』

対して、ルビーはクスクスと笑いを漏らした。

「何だい？ 気味の悪い」

『いえいえ、ルビーちゃんの本気なんて、出さないで済むならそつ

ちの方がいいんですけどね」

「はあ？あんなフェイトとあたしをバカにしてんのかい？」

アルフの目が剣呑になる。

「その物言いじゃ、あんたがあたし達よりはるかに強いみたいじゃないか？」

『そんな事より、気をつけた方がいいですよ』

「何・・・アルフちゃん？」・・・え？」

名前を呼ばれ、振り向けば桃子がこっちをもっている。

「アルフちゃんも、こっちにいらっしやいな、髪が砂だらけよ？」

縛られて地面に転がされたからだろう。

よく見れば、髪や犬耳が埃っぽい。

「いや、いいよ・・・適当に自分で・・・」「・・・いらっしやい
うっつ！」

桃子は声を、荒げもしなければ冷ややかでもない。

しかし、アルフの中の何かが反応した。

「女の子が身だしなみに気を使わなくてどうするの？」

「はい、よろしく願います！！」

この人には逆らってはいけないと・・・なのはに通じる何かが、この女性にもあるとアルフは本能で感じたのだ。

いや、むしろ桃子のそれが本家か？

アルフのヒエラルキーがどんどん下がってゆく。

「そう、いい子ね」

見た目は大人のアルフを、完全に子供扱いしている。

考えてみれば、桃子は最初からアルフをちゃん付けしていた。

母としての直感が、それとも超感覚的な何かか・・・桃子もアルフの本質がまだ幼い事を見抜いたようだ。

結局、フェイトとアルフは主従仲良く高町母娘に泡だらけにされることになる。

そんな感じで過ぎる、温泉の夜を・・・次元の違う場所で見ている一対の目があった。

広いホールにいるその人物は、手に持った水晶玉状のモニターをじっと見ている。

光源がそれ一つしかないために、その人物が女性であるということ以外には表情すら読み取れない。

水晶玉に映っているのは・・・おそらく自分が見ていることに気が付いている一本の杖・・・フェイト達と一緒に、サーチャーまで取り込んだのは当てつけのつもりか？

「・・・・・・・・」

やがて女性は水晶玉の映像を消し、座っている椅子にもたれかかってため息をつく。

「・・・あの杖・・・まさか・・・ふ、ふはははははー!!」

くぐもった笑いが漏れる。

無人で静寂の支配する空間に、その声は驚くほど大きく響いた。

――――
同時刻

「ふふっルビーちゃん・・・これはちょっとやり過ぎなんじゃないかな？」

「ルビー・・・覚えていろよ」

「きつと忘れられていますよ。ルビーはそういう奴なんです」

毒で体がしびれたまま、放置された三人（二人＋一匹）の姿があった。

季節的には夏なので、凍死したりする心配はないだろう。

助けが来ないところを見ると、忘れられているようだが・・・未だに、しびれ薬の効果が続いていることに、性差別的なものを感じるのは気のせいだろうか？

「恭也？これはもう怒ってもいいんじゃないかと思うんだが、どう思う？」

「ここはきつちり怒るべき所だろう。親父？戦わなきゃ現実と！！」
「コノウラミ、ハラサデオクベキカ」

特に、ユーノがやばそうだ。
微妙に黒化している。

痺れている体を懸命に動かして、三人は手を握り合った。
ここに、ルビー被害者友の会が結成されたのだ。

その最初の活動は、一晩中ルビーに対する怨嗟を高め、悪口に花を咲かせる事……。つまり、彼らは朝まで放置される事になったという話。

第十三話 仕上げはお母さん？（後書き）

今回は難産でした。

そろそろ年末なので、更新が不定期になるかもしれません。

更新日が、土曜の夜と言うのは変わりませんが、確実に更新できるかどうかは未知です。

できるだけ定期は守るつもりです。

第十四話 女の子の初恋の相手は、大抵父親である

その日、海鳴にある高層マンションの屋上に二人分の人影があつた。フェイトとアルフ・・・彼女たちの足元には、光る魔法陣が存在している。

ここに、彼女たち以外の魔導師がいれば、魔法陣の公式を転移系のものだと見て取るだろう。

「バルディツシュ、座標設定をお願い」

『お任せください。マスター・・・やあーってやりますよ』

「そ、そう・・・がんばってね」

フェイトは、このバルディツシュの変化にはなれないなと思う。人格プログラムも魔法プログラムも何もいじられてはいない。

原因は、ルビーの孔明の罫と言うかなんというか・・・。

あの温泉の後、返されたバルディツシュを、フェイトは真っ先に調べた。

改造されていないかとか、壊れていないかとか・・・結果は問題なし、何もいじられていなかったし、ジュエルシードもバルディツシュの中に保管されたままだった。

唯一・・・バルディツシュのメモリーの隅に圧縮ファイルがひとつ増えていただけだ。

まさかウイルスかと、慎重に解凍してみたら、中身は大量のマンガのデータ・・・おかげであの無口なバルディツシュが饒舌になったものだ。

ちなみに、フェイトとアルフも嵌ってしまい、メモリ読みふけっ

てしまった。

「ねえバルディッシュ？なんで英語だったのが日本語になっているの？」

『英語だと台詞をマネられないからですが、なにか？』

英語と日本語を翻訳すると内容が微妙に違ってしまっから、日本語の台詞は日本語でやらなければならないと、バルディッシュは言う。

『お聞き苦しいなら止めますが？』

「別にかまわないけど・・・」

魔法は問題なく発動できるし、バルディッシュは言う事を聞く。

何も問題はない。

問題はないのだが・・・そこにあのルビーが関わっているので不安なのだ。

とはいえ、いまさらどうにもする事は出来ない。

人格プログラムと言うのはデリケートなもので、設定が難しい。

プログラムを弄るにしても、記録を修正するにしても一日じゃ終わらない。

ジュエルシードを集めなければいけない現状、そんな長い時間デバイスをメンテナンスしていたら、先を越されてしまう。

DVD付きテレビのDVDが故障して修理に出したら、テレビまで見れなくなると言えば分りやすいだろうか？

「フエイト、準備できたよ？」

「ありがとうアルフ」

転移魔法の準備ができたようだ。

バルディッシュに記録させた座標を組み込み、発動させると、魔法

陣から光が空に向かって放たれ、フェイトとアルフを転移させる。次の瞬間には、フェイト達は次元世界の挟間にある空間に浮かぶ巨大な島・・・時の庭園の原っぱに立っていた。

『改めてみると、思わずラピュタはあったんだって言いたくなりますね?』

バルディッシュの言葉通り、まさにそんな感じの場所だった。彼の引き出しは急速に、しかも順調に増築され続けている。魔法の発動時にしかしゃべっていなかった昔がうそのようだ。ジャパニメーション・・・悔りがたし。

「しかし、プレシアは何でいきなりあたし達を呼び出したんだろ?」

時の庭園の中心にある城に向かって歩きながら、アルフが疑問を吐く。

「わからない」

フェイトも本当に分からなかった。

定期報告のため、時の庭園に一時戻る必要はあったが、それはもう少し後の予定だった。

おかげで、お土産の一つもなくここに帰ってきてしまったのが引く掛かる。

やがて二人は、城の正面玄関を開けて場内に入った。

勝手知ったるなんとやらで、迷うことなく目的の場所へと向かい、大扉の前にたどりつく。

「・・・母さん、ただいま帰りました」

フェイトの言葉に応えたのか、大扉が重い音と共に開く、二人は揃って中に入った。

「何か用かいプレシア？」

フェイトに母と呼ばれ、アルフにプレシアと呼ばれた人物は、ホルの奥に備え付けられた玉座に座っていた。

紫のウェーブのかかった髪を長くのばした女性だ。

桃子達とは方向性の違う、硬質的で理知的な美人・・・ルビーの言う所の月影先生風なので間違いはないだろう。

「おかえりなさいフェイト」

プレシアは玉座から立つことすらなく、上から目線で娘を迎えた。

それにアルフが表情を硬くするが、空気を読んで何も言わない。

プレシアの方は、最初からアルフを見てはいなかった。

「ジュエルシードは集まっているかしら？」

「そ、それが・・・」

フェイトがバルディッシュに命じて、外に出したジュエルシードの数は三つ、それを見たプレシアの顔がわかりやすく歪む。

「たった・・・三つなの？」

「ご、ごめんなさい」

三つとはいえ、フェイトが海鳴に降り立ってからまだ数日だ。それでこの成果なら、むしろ順調と言っている。

それでも、プレシアは満足するには不満のようだが・・・。

「本当に無様、使えないわね」

「つつ!!」

フェイトが身をこわばらせる。

「私の娘ともあろう者が・・・この程度のお使いに手間取るなんて・・・」

「言いすぎだよプレシア!! フェイトはよくやってる!! あの杖さえ邪魔しなきゃあもつと・・・」

アルフの反論に、プレシアの表情が揺らいだ。
不満そうな顔に、笑みが浮かんだのだ。

「ええ、見ていたわよフェイトが敵とじゃれあっているのはね」
「あ・・・あんた、見ていたのか!？」

アルフの表情が、解りやすい怒りの形になる。

「見ていて放っておいたのか!？」

「どうでもいいでしょう? そんな事・・・それよりフェイト？」

「は、はい」

「お願いがあるの」

その時のプレシアの浮かべていた顔を、なんとと言えば正しく表現できただろうか？

「母さんね、あの杖とお話がしたいの」

「つつつ!!」

フェイトとアルフ、二人の息が止まった。

「だからあの杖をここに……」

「この腐れ外道が!!」

「え？」

言葉を遮られただけでなく、予想もしなかったレベルの罵倒を受けたプレシアが虚を突かれる。

「こ、この犬は……誰に向かって……」

「ただでさえ、面倒なジュエルシードを集める間に、あの厄介者と関わんなきゃなんないって言うのに!!」

「わ、私の娘ならそのくらい……」

「できるかボケ!!何が悲しくてあいつに進んで関わりに行かなきゃならないんだ!!」

「め、命令……」

「だが断る!!」

取りつく島もない。

相当に溜まっていたものが、火山のように噴火したようだ。

ここぞとばかりに不満をぶちまけるアルフは月光蝶……もとい、絶好調である。

「……アルフ」

「でも、フェイト!？」

「黙って……」

流石に、主人の言葉には逆らえないのかアルフが黙る。
それを見てほっとしたのは、実はプレシアだ。

アルフはこの通り激情家で、さっきの通りなら文字通り話にならないが、フェイトは娘と言う事でプレシアの言うことには従う。

「う……」

しかし、ここでまたプレシアは呻かざるを得なかった。
何故なら、フェイトが自分を見ている。

今にも泣きそうになりながら、上目使いで……。

「母さん？」

「な、何かしら？」

「……どうしてもやらなきゃだめですか？」

その言葉に、思わず駆け寄って頭をなでたりしてやりたくなったのを無理やり自重する。

「そ、そうよ！母さんのお願い！！」

思わず声が大きくなったが、なんとか許容範囲だろう。

何か、とんでもなく大事なものを見失いそうになっている気がするが。

「……わかりました」

そう言つて背を向けるフェイトの姿は、迷子の子猫を連想させた。

……な、何！？何でフェイトにこんなに胸がときめくの！？

「フェ、フェイト？」

「・・・はい？」

振り返ったフェイトの目から、ハイライトが消えている。

「そ、そんなに嫌なら無理しなくていいのよ？」

これにびつくりしたのは、フェイトとアルフだ。

プレシアが、フェイトにこんなやさしい声をかけたのは初めてかもしれない。

アルフはプレシアを気味の悪い物を見る目で見るが、逆にフェイトはパアッと花が咲くような笑顔になる。

「ありがとう、母さん。私頑張るよ!!」

「そ、そう？無理はしちゃダメよ？」

「わかった」

そう言つて、スキップしそうな勢いで部屋を出て行くフェイトを見ると、自然に笑みがこぼれる。

「・・・あんだ、何考えてるんだい？」

「・・・」

薄っ気味悪そうに言うアルフに、プレシアは何も答える事が出来なかった。

自分でも本当に何考えているのか分からない。

アルフがフェイトを追いかけ行くと、再びプレシア一人だけになる。

「う、家のフェイトがこんなに可愛いわけが・・・あるの？」

フェイトの萌・・・順調に成長中。
ちよつとだけ、運命が変わり始めた瞬間だったかもしれない。

『は！来た来た来ましたよー！！』
「ルビーちゃん、来たの！？」

いきなり緊張したルビーの雰囲気の意味を察したなのはが問う。

『その分だとなのはちゃんもですか！？』
「うん」

ルビーの返しに、なのはも頷く。

「私も・・・」
「『すずかちゃんも！？』」
「・・・」

一人だけ、無言で静かになったのはユーノだ。
毛皮の上からでもわかるほどに、だらだらと汗をかいている。
彼の手は前に伸び、今さっき切った牌の上に置かれている。

『ルビーちゃんの手は無駄ツモはありません。ロンですよ』
「ごめんねユーノ君、なのはもロン」
「なのはちゃんと一緒にあがるの、ロン」
「と、トリプルロン！？僕のシュークリームー！！」

家族麻雀はユーノのぶっ飛びで終わり。

ちなみに賭けたのはお金ではない。
以後、ユーノは三日のおやつ抜きが決定した。

「息抜きって大事だよ〜すずかちゃん？」

「うん、なのはちゃん。私たち魔法も魔術の修行も頑張ってるもん」
『お二人とも、その言い訳っぽいのは誰に向けて言ってるんですか？』

そしてその夜・・・なのは、ユーノ、ルビーはジュエルシードを探して街をパトロールしていた。

『は、この魔力は！？』

なのはとユーノは地道に足を使って探し、ルビーは空の高いところから見下ろして異常を探していたために、“それ”に気がつくのはルビーが一番早かった。

（な、何ですか！？もう僕には出せるものなんてないですよ！？）

念話でユーノがわけのわからない事をのたまう。

トリプルロンなどというものを食らった後遺症が抜けていない？

（正気に戻ってユーノ君！！フェイトちゃんの魔力だよ！！）

（はっ！？本当だ。しかもジュエルシードの魔力も感じる！？強制発動させようとしているのか！？大変だ！！）

ユーノがまともになった後の行動は迅速だった。

「間に合え！！」

とつさの機転で魔法陣を作り出す。

術式は封時結界、ユーノを中心として展開されたそれは、すんでの所でフェイトとジュエルシードの魔力のある場所を範囲の中に取り込む。

「ほえ、これが結界っていうもののなの？」

封時結界初体験の美由希が、全く同じではあるが別のものに置き換わった海鳴の街を見て感心の声を上げた。

「よし、よくやったユーノ!!」

「さすがユーノ君だ」

「そ、それほどでも・・・」

例によって、ついてきていた士郎と恭也が絶賛すると、ユーノは言葉はともかく、満更でもないように照れている。

『最近、あの三人って妙に仲が良いですね?』

「ん、そうかな?」

ルビーの言葉を、なのははスルーする。

興味がないらしい。

それよりも、今は前だけを見ている。

空に向かって立ち上る魔力・・・そこに彼女がいるはずだから・・・。

「見つけた。ジュエルシード!!」

たどりついたなのはが見たのは、無尽蔵で無制御の魔力を垂れ流すジュエルシードだ。

そして、その先に・・・。

「フェイトちゃん・・・」

「・・・・・・・・」

アルフを従えたフェイトがいる。

ビルの上から、なのはを見降ろしてきていた。

「なのは、今はジュエルシードを!!」

「うん!!」

背後からのユーノの声にこたえると、なのははレイジングハートを構えた。

「レイジングハート!!」

「バルディッシュ!!」

二人の杖から同時に封印魔法が放たれた。

桃色の魔力と黄金色の魔力は二人の間・・・ジュエルシードでぶつかりあう。

「どちらが早い!？」

封印されたジュエルシードは、封印した方向に向かうはずだ。

「動か・・・ない?」

ジュエルシードはその場にとどまり続けていた。

封印は成功したようだが、なのはの方にもフェイトの方にも向かわない。

二人の魔力が全く同時だったためか？

「・・・来たんだね？」

「うん、今度はフェイトちゃんのお話を聞かせてもらいたいから」

なのはに迷いはないようだ。

温泉で負けた事を、引きずっているようには見えない。

むしろ戦闘望むところ！！な顔をしていた。

これに関しては、フェイトの方にもいくらかは自業自得な部分がある。

「まずは、フェイトちゃんなのはのお名前を呼んでもらうの！！」

よく考えたら、なのはがフェイトの名前を呼ぶことはあっても、その逆はなかった。

「そ、そう・・・」

「あり？」

フェイトの返事に、なのはが肩透かしを食らう。

てつきりいきなり戦闘になるだろうと・・・おらワクワクすっぞ・・・
・もとい、気を引き締めていたなのはだが・・・何故この流れでフェイトがもしもじしななければならない？

「フェイト、ガンバ！」

「う、うん・・・な、なのはさん？」

「は、はい？」

・・・いきなり、名前を呼んでもらうという今日の目標を達成して

しまった。

「お、お願いがあります!!」

「は、はい!!」

思わず直立不動になる、何かフェイトの様子がただ事じゃない？

「あ、貴女のデバイスを貸して下さい!!」

『『『『『へ?』『』『』『』』』』』

フェイトの言葉は、なのはだけでなく全員の予想のはるか上を飛んで行った。

おもわず、デバイスも含めた全員が間抜けな声を上げてしまった。

「あゝ、まあそうだよね?」

フェイト以外では一人だけ、事情を知っているであろうアルフがさもさりななという顔をする。

「えっと・・・フェイトちゃん?レイジングハートを持って行かれると困るんだけど?」

『申し訳ありません』

レイジング・ハートがなくなれば、なのはは魔法を使えなくなるし、ジュエルシードを封印できない。

それに、レイジングハートの中にはなのはが封印したジュエルシードが格納されているのだ。

「そ、それは分かっています」

自分が無茶を言っている自覚はあるらしい。
実にバツの悪そうな顔をしている。

「わ、私が貸してほしいのはもう一つの方です!-!」
「もう一つ?」

全員の視線が、レイジングハートから移動する。
その視線が交わる場所にいるのは・・・。

『え? ルビーちゃんですか?』

どうしようもなく、空飛ぶ能天気だった。

「「「「「『・・・・・・・・・・・・・・・・ええー!-!-!-!-!」」」」」
「「『

一瞬どころかかなり遅れて、驚きの阿鼻叫喚世界が発生した。

「フエ、フェイトちゃん!! 頭大丈夫!？」

思わず、フェイトの正気を心配したなのはに悪気はない・・・十分失礼かもしれないが、それだけ驚きが凄かったと理解してほしい。

「あゝえっと、実はですねなのはさん、ルビーに会いたいつて言う奴がいて、決してフェイトの本意じゃないんですよ」
「すまない、アルフ君? ちょっと待ってくれ」

士郎がそう言うと、高町家+2本+一匹が全員集合する。

「どう思う?」

「自分で爆弾を呼び込もうとしている時点で狂っているんじゃないかと思えん」

『士郎さんも恭也さんも酷いですね〜?』

「「事実だ」」

士郎と恭也は正しく現実を見ている。

『この機会に、ルビーちゃんを厄介払いしようとしていませんかあ〜?』

「「否定はしない」」

そして素直だった。

「ねえねえユーノ君？ルビーちゃんに会いたい人って誰かな？」

「実態を知らないか相当の物好きかのどっちかだとおもうよ。変人ってことさ」

「それ、私の・・・母です」

最後のフェイトの言葉で場が凍る。

実に気まづくなった空気が針のむしろだ。

アルフなんか、うつむいたフェイトの横であちやーな顔をしている。

『ああ、なるほど・・・例の月影先生ですか〜ルビーちゃんに目をつけるなんてなかなかですね〜』

「は、そうだよみんな！ルビーちゃんはこれでも最高レベルの礼装なんだよ！？フェイトちゃんのお母さんはきっとそれを見抜いたんだよー！！」

「なのは・・・」

フェイトが感動で泣きそうになっている。

戦う前に友情が芽生え始めてる？

『天才と狂人^{バカ}は紙一重って言いますけどね』

「じゃらーっぷー！！ルビーちゃんはだれの味方なの！！」

・・・おや？

今、否定の言葉が混じっていなかったな？

『あえて言うなら自分・・・じゃない、なのはちゃんの味方ですよ』

どう考えても前半部が本心だろう？

「と、とにかく！そのデバイス？礼装？を渡して下さい！！」

フェイトがはつきりと自己主張する。

多少の強引さを手に入れたようだ。

軽く自棄になっているようにも見えるが。

『うーん、せつかくのお誘いですが、ルビーちゃんはなのはちゃんのものなので、なのはちゃんとOHANASIしてください』

「け、けしかけてる！？ルビーちゃん、フェイトちゃんをけしかけてる！？」

「バルディッシュ！？」

「フェイトちゃんもその気にならないでー！！」

バルディッシュのパーツが展開し、魔力の鎌を形作る。

温泉で、なのはに敗北を認めさせた魔力刃だ。

レイジングハートを握るなのはの手に力がこもる。

『死ぬぜー俺を見たやつは死ぬぜー』

バルディツシュが見たまんまデュオになっていた。
それに構わずフェイトは即座に加速する。

・・・さっき感じた友情は何！？

迫るフェイトの魔力刃を、とっさに黒鍵とレイジングハートを十字に構えて受ける。

「フェイトちゃん、落ち着いて、OHANASI・・・じゃなくて
お話しよう!!」

「何をいまさら・・・貴女は温泉で言った。競い合う事は構わない
と」

「確かに言っただけど、ルビーちゃんを賭けてだなんて予想の右斜め
上過ぎるよ!!」

最後のは悲鳴になっていた。

そして例によって例の如く、二人の戦闘は激化してゆく。

「あゝなんか、なのはモチベーションが上がらないみたいだね？」

初めて魔導師同士の戦いを見る美由希にもわかる。

放たれる魔力弾や、魔力刃による斬撃、魔法による高速移動とそれ
自体はどれも目を見張るものだが、それを行っている本人達が問題
だ。

結構意地になってさっさと終わらせようとしているフェイトと、目
を白黒させたまま回避し続けているなのはの構図は、どう見てもグ

ダグダである。

『二人共、私の為に争わないでくださいー!!』

そして元凶はノリノリだった。

口ではやめてくれと言っているが、正しく口だけだろう。

確かに、女ならば一度は自分を巡って争う二人と言うシチュにはあがれるかもしれないが、これは色々な意味で違つと断言できる。本当に、フェイトの母親はなぜこんな奴を連れてこいなどと言ったのだろうか？

フェイトもかわいそうに・・・。

「ねえ父さん、恭ちゃん？助けなくていいの？」

「うーん、なのはには手出し無用とは言われたが・・・」

自分達と同じように、アルフが二人の戦いに手を出さないのは、こちらのというよりなのはの意をくんでくれているからだろう。とはいえ、この状況はなのはの望むところではないはず。やはり一回、仕切りなおすべきじゃないか？

問題は、どうやってビルの間を飛び回る二人を止めるか・・・。

『あり?』

「どうかしたのかい、ルビーちゃん？」

『いえ、ジュエルシードが・・・』

「何？」

見れば、封印されてから全くその場を動いていなかったジュエルシ

ードが・・・。

「何かやばくないかあれ？」

恭也の言つとおりだった。

菱形の宝石であるジュエルシードから、脈動するように魔力が漏れ出ている。

「し、しまった！なのはとフェイトの魔力に反応している！！」

さすが発掘した張本人、ユーノは正しく何が起っているか見抜いた。

「まずいのか、ユーノ？」

「このままでは・・・でもまだ間に合います。僕がこの上からも一つ封印を重ねておきます。何とかこれで・・・」

ユーノが言う所の、封印を重ね掛けするためだろう。
ジュエルシードに向けて手をかざして・・・。

「あ？」

「い？」

「う？」

「え？」

「お？」

全員の見ている前で・・・桃色の流れ弾がジュエルシードに着弾した。

「「「「なのはー！！」」」」

『ワオ』

悲鳴を上げる全員の見ている前で、ジュエルシードの封印が解けた。封印にさえぎられていた魔力が膨張し、物理的な風となって、士郎達の体を後方に文字通り吹き飛ばす。

「え？」

牽制にはなったデイベインバスターが、ジュエルシードにドストライクをかましてしまったのを見たのはが真っ青になる。気分はやっちまったZEだ。

父や兄や姉が木の葉のように飛んでいる。

「ジュエルシードが!!」

無秩序に魔力を垂れ流すジュエルシードの姿をみたフェイトが焦る。彼女にとっては、ジュエルシードの回収も重要な目的だ。

「フェイト、まずいよ!!」

危険を感じたアルフが、フェイトのそばに飛んできた。

「恭也、無事か!？」

「ああ、美由希も無事だ」

「ユーノ君もゲットしてるよ!」

さすがは御剣剣士と言ったところか、吹き飛ばされはしたが、きちり受け身を取ってダメージを逃がしていたようだ。両の足で立っているだけでなく、ユーノとルビーをしっかりと確保している。

そこになのはが降りてきた。

「みんな大丈夫!？」

「」「」「今大丈夫じゃなくなった(よ)!!」「」「」「ごめんなさーい!!」

今回ばかりはなのはのせいで、それ以外のだれのせいでもない。

「ユーノ君？」

「は、はい!？」

「あれがまずいことになっているのはわかる。結論だけ聞くんがこのままでは何が起こる？」

「この世界が消えます!!」

簡潔すぎて聞き間違いようがない。

冗談ではなく、いきなり世界の危機だ。

「くっ、止める方法は!？」

「下手に刺激を与えるのは逆効果です!!このまま手を出さなければ安定する可能性も・・・」

「ちっつ!!」

士郎が説明を舌打ちで遮った次の瞬間、ユーノは士郎の姿を見失った。

「無茶しちゃいけない!!」

声にハツとしてみれば、そこに士郎がいた。
しかも一人ではない。

「は、離して下さい!!」

「暴れないでくれ、何するつもりか知らないけど、あれに近付くなんて無茶だ!!」

士郎は、フェイトをその腕の中に抱きしめるようにして抱えている。

「このままでは次元震が起きます!!その前に私の魔力で抑え込まないと!!」

フェイトの言葉で、ユーノにも事情が呑み込めた。

どうやらフェイトは、暴走しているジュエルシードを無理やり抑え込むつもりだったようだ。

それに気づいた士郎が彼女を取り押さえたという事だろう。

「無茶だってフェイト」

使い魔であるアルフも同意見のようだ。

魔力の有る無しにかかわらず、今のジュエルシードが危険なのは一目見て明らか、何よりジュエルシードを中心に吹き荒れる魔力の風で、近づくことさえ容易ではない。

「悪いがそんな無茶をさせるわけにはいかない」

フェイトを開放した士郎が、フェイトとジュエルシードの間に立つ。フェイトがジュエルシードの下に行くためには、士郎を打倒してゆ

かなければならない。

「子供の無茶を止めるのは大人の仕事だ」

「そんな事を言っている場合じゃ・・・魔力を持っていないあなたたちに何ができるっているんです！？私を行かせてください！！」

フェイトも譲らない。

士郎が、フェイトの肩に手を置く。

「君の言っていることは確かに正しい。自分を顧みない君の行動は英雄的ですらある」

「なら！！」

「それでも、子供が目の前で危険な事をして傷つくのを、黙って見ていられるわけがないだろう？自分で自分が許せなくなる」

「う・・・」

話になっていない。

理屈が通っていない。

「じ、じゃあどうするって言っんですか！？」

「それは・・・」

『そんな困った時のルビーちゃんだのみー！！』

「え？」

・・・緊張していた空気がぶち壊しになる。

「ルビーちゃんは何とかできるのか？」

『余裕』

・・・そう言う事らしい。

「頼む」

『よろこんで』

できると言うのならやらせるべきだろう。

世界がかかっているこの際、不安がないわけじゃないが試してみる気になった。

それに相手はルビーだ。

自分達に出来ない事を平然とやってのける可能性はかなり高い・・・そこに痺れたり憧れたりするかは別問題だが。

『行きますよー。たーすーけーてーネコアルクーーーーー!!!』

「「「「「「「え?」「」「」「」」」」」

ルビーの大声と、かなり奇妙な内容にあっけにとられた。ネコアルクって誰?

そのまま1・・・2・・・3・・・何にも起こらない?

・・・そう誰もが思った次の瞬間。

『きましたよー!!!』

「何が!？」

「誰が!？」

「空だ!!!」

「流れ星?」

見上げれば、空から星が一つ流れ落ちてきた。

「お、おい・・・あれ、こっちに来ていないか?」

恭也の言葉に全員が悟り、青くなった。
流星が丸く見えて、しかも大きくなっているという事は、それ以外
考えられない。

「避ける!!」

だれの言葉かは確認できなかったが、その内容はとっても正しい事
なので、全員が左右に奇麗に分かれた。

こういうケースの場合、真後ろによけるのは愚策だ。

正解は横にずれて目標のルートから体を外すことである。

モーゼの十戒の如く分かれた人の間を、着弾してコンクリートを砕
きつつ横滑りを始めた流れ星が通り過ぎる。

その進行方向にあるのは……。

「ビル？」

三階建てのビルだ。

容赦なく突っ込んだ。

「うわ、すご……」

思わず美由希がつぶやく。

流れ星に突っ込まれたビルが、破碎音と共に倒壊したのだ。
結構頑丈そうな鉄筋コンクリートのやつが一撃である。

よけた事が、正しかったと証明されたが……流れ星はどうなった？

「ネコでは駄目だというのかー!」

沈黙が壊れた。

何かが瓦礫をかち上げて出て、とんでもなく派手な登場をする。

「・・・なんだあの生物^{ナマモノ}」

思わず、恭也はそう呟いてしまった。

現われたそいつには猫の耳があった。

性別はたぶん女・・・この場合はメスと言っべきか？

アーモンド形の目は適当に描いたかの如く、しかも二頭身・・・かろうじて生き物だとは思うが、こんな生物は見たことも聞いたこともない。

白のトレーナー？にスカートをはいているところを見ると、ある程度の知能はありそうだ。

「じゃんじゃじゃーん。危うくネコ、地獄へまっしぐらになるとこだったにや」

そして、ビルに突っ込んだ代償だろう。

頭からだとしたら、致死量にしか見えない量の血を噴き出している。なる所だったじゃなく、今まさに旅立ってもおかしくはない・・・地獄へ。

「ニヤツと参上、ニヤツと解決、人呼んでさすらいのハ〜レ〜クイ〜ン！！恋の伝道師ネコアルクとはあちしの事にやー！！」

びしつとポーズをとる怪生物・・・何一つ理解できない。

誰もお前の事なんざ聞いていない。

大体、人呼んでなんて誰がお前のことをそんな風に呼んだ？

人外の生命体が、いつちよまえに人間の言葉をしゃべっているとい

うのに・・・言っていることが理解できない。

「ねえ恭ちゃん？なんか慣れ親しんだものをあの生き物から感じるんだけど？」

「奇遇だな、俺もだ」

呼び出したとか、そう言う事を関係なく理解できる。
間違いなく、あれはルビーの同類の不思議存在だ。

「SOSキャッチー！！しーきゅーしーきゅーいま助けに猫が来た！絶滅してないみたいで結構結構！！」

これまたふざけた事を言う怪猫だ。
さすがルビーの同類。

「そんでーあちしを呼んだのはどこの誰ぞなもし？いきなり呼ばれて木星への片道切符からバックトゥザ地球してきたですよー？」

『私です』

「こ、これはルビーの姉御じゃねえですかい！！」

怪物・・・ネコアルクと言う名前らしいそいつは、ルビーを見た途端両手を合わせてゴマを摺り出した。

やはり二人は知り合いらしい。

しかもルビーの方が上なのか？

「うへへー今日はどんな御用ざんしょ？」

思いつきりへりくだっている・・・二人つつーか、この一匹と一本の関係がとっても気になる今日この頃だ。

『お願いネコアルク！！世界を救って！！』

「オッケー理解したよん、後は任しておくんなまし!!」

・・・これを会話と言っているのか？

しかし、ネコアルクは迷いなくジュエルシードに向かってゆく。
何をしなければならぬかは理解しているようだ・・・そう思いた
い。

ところで・・・この場を任されたのはルビーだったはずだが、ネコアルクを呼んだだけで何もしていないな？

「にやにやにや、体は猫でできているー!!」

ネコアルクが体をユラユラ揺らしながらジュエルシードに近づいてゆく。

猫らしい柔軟な動きだが、なんでそんな動きだけで、あの魔力の放出に逆らって前に行けるのか全く分からない。

そして、十分に近づいたところで更に動く。

「ぬっころすぞ、ブーム！」

生物の構造をバカにして、ネコアルクの目から破壊光線が出た。ビカー！……とか擬音をつけたくなるような超太のやつだ。

「ええ!?」

衝撃を加えたらBADエンド的なものに何してんだこいつと全員が思う。

ビームの直撃を食らったジュエルシードが、はじかれて地面に落ちた。

何か猫モドキな怪生物のおかげと言つのを納得できるかどうかは別問題だが。

「つてあー！ー！！」

「「「「「「「「「「「「「「」

いきなりのユーノの悲鳴に、全員がびくつとなった。
意表を突かれて飛び上がりそうになる。

「ど、どうしたのユーノ君！？」

「ジュエルシードが！！」

言われて、見た全員が青くなった。

ジュエルシードが、ものの見事に砕けている。

「Oh、調子に乗り過ぎてやっちゃったぞなもし、何か大事なもんだったのかにや？」

事情を知らないネコアルクだけが、白くなった空間で元のままだ。
ほかの連中はみな、通夜のような状態になっている。
特にユーノなんか魂が抜けかけていた。

「んじゃ、そろそろホントのSOSサインに向かうとすつか。あで
ゆー皆のしゅー！！」

事情は分からないが、やり過ぎたと思うたのだろう。
顔がひくついで、でっかい汗の幻視が見えるネコアルクが早口でまくしたてる。

「え、ちよつとま・・・」

「さらばだ少年！この体は少年の日が見た幻想とか妄想とか悪夢とか、そういうもので出来ていたと思うがいにゃー！」

ネコアルクのスカートから、猛烈な勢いで煙が噴き出した。

誰かがそれに何かを言うより早く、ネコアルクの体が浮き上がる。

「グッパイ！よろしく勇氣！！」

最後まで訳の分からない事を言いつつも、ネコアルクの上昇は止まらない。

徐々に加速していく猫は、やがてミサイルのように、落ちてきたときは逆のルートを通って空に消え・・・いや、逃げた。

本当に悪夢のようだった。

しかも忘れることが出来そうにないだけにたちが悪い。

ところで、最初にあらわれたときからずっと結界は展開されたままなんだが？

「・・・ねえルビーちゃん？あの・・・ね、猫さんは何？」

なのはが一瞬言い淀んだのは、ネコアルクを猫にカテゴライズするのを本能的にためらったか？

『ペンフレンドです』

「文通しているの？ルビーちゃんは交友関係も一味違うね？」

『それほどでも』

皮肉に通じない相手は厄介だ。

「ルビーちゃんの謎がまたひとつ増えちゃったなの」
『ネコアルクはですね〜』

なのはの苦悩を華麗に無視しやがった。
しかも聞いてもないネコアルクの説明を始める始末。

『遠野家の地下に広がる《グレート・キャット・ビレッジ》に住む猫妖精なんですよ〜』

「ルビーちゃん謝って、妖精さんに謝って!!」

『どうしたんですかなのはちゃん?』

「あんなの妖精さんじゃないもん!!」

世の中の妖精が、全部あんなだったら、文字通り夢も希望もありやしない。

かといって、どこぞの記憶を吸い取る妖精さんもそれはそれで勘弁だが。

「妖精さんはミサイルのように飛んだりしないから!!」

『本人曰く、大気圏突破と突入能力があつて、月まで行つて落下してくる超技とかあるらしいですよ?本人耐えられなくて使えないらしいですけど』

「やめて!そんな夢のない自爆技を使う妖精さんなんて認めない!」

何か、なのはの中で最終防衛戦が展開されているようだ。
乗り越える・・・つと言うよりそれを諦めた時、彼女はまた一歩、大人に近づくのだろう。

『そんな事はどうでもいいじゃないですか〜さあさあさあ!!邪魔ものは全部片付きましたよーなのはちゃんもフェイトちゃんも、ル

ビーちゃん争奪戦の途中じゃないですか!？」

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

『汝、ルビーを欲するならば、己が最強を証明せよですよってあれ?』

やっと、場の空気に気がついたルビー。

全員が静かになっている。

「・・・フェイトちゃん? なんだか疲れちゃったから、お話はまた今度で良い?」

「うん・・・」

ジュエルシードは壊れた。

今更、ルビーを賭けてやりあう気になどなれない二人は背を向けあつて歩き出す。

「そ、その前に・・・」

そのまま立ち去るかと思われたフェイトだが、何故かくると振り返った。

何故、顔が赤い?

「あ、あの・・・さっきはありがとうございました」

「え?」

フェイトが士郎に頭を下げている。

「あーいや、こっちこそ素人が勝手な事を言つて悪かったね?」

「いえ、それでその・・・お名前を聞かせてもらつていいですか?」

「私かい? 私はなのはの父で高町士郎と言つんだ」

「士郎さん・・・ですか」

あれ？・・・何か二人の間の空気が甘い？

と言うより、フェイトが尊敬っぽい眼差しで士郎を見ている？

「ま、また会えますか？」

「そりゃあ、君がジュエルシードを追いかけているのなら、またなのはと会うだろうし・・・」

「わかりました」

何がわかったのだろうか？

聞き返すより早く、フェイトは背を向けて飛び去ってゆく。

「な、何か変だったな・・・」

「親父？」

肩に置かれたのは、恭也の手だった。

「うお!!」

振り返った士郎が思わず悲鳴を上げる。

子供たちの目が怖い。

虫けらを見るような目で、ハイライトが消えている!?

なのはに至っては、砲撃モードにしたレイジングハートを構えていた。

「相手はなのはと同じくらいの歳の女の子だぞ？」

「ま、まてまて！私は何にもしていないだろう!？」

「父さん・・・正直に答えてほしいんだけど、あのフェイトちゃん

の事をどう思う?」

「美由希? フェイトちゃんの事はかわいい子だと思うよ? って待て待てなのは! ! 無言で砲口を向けるんじゃない! ! 目が怖くなってる! !」

本人の意思を完全無視した、家族会議と言う名の修羅場が形成されつつあった。

ユーノなんか、さっさと逃げて物陰でおびえている。

すわ! 薄情者め! !

『あ、もしもし? 桃子さんですか? 士郎さんが幼女趣味に...』

「ちょーっとまったルビーちゃん! ! 桃子に携帯で何を言うつもりなんだ! ?」

ちなみに... 封時結界の中では携帯の電波は外に届かない。

「高町士郎さんって、大きくて暖かかった... ねえアルフ? お父さんって言うのは皆あんな風なのかな?」

「え? うーん、あたいにもよくわかんないよ」

フェイトの言葉を聞きながら、アルフはやはり父親と言うものは子供に必要なのかな? と考えるが、子供どころか恋すら未経験の身に、そんな事が解るはずもなかった。

... 女の子が、人生で最初に接する異性は父親である。

第十四話 女の子の初恋の相手は、大抵父親である（後書き）

ネコアルク登場！！

でももう出ない、多分！！

黒猫さんは無印での出番はないです。

第十五話 魔法少女は急には止まらない

覆水不返、あるいは覆水盆に返らずという諺を知っているだろうか？
まき散らされた盆の水を再び元のように戻すことは無理であり、一度やってしまったものは取り返しがつかないという意味である。

カチリ・・・カチリと言う音が、静かな室内に響く。

「ふ・・・ふふ・・・」

「ユ、ユーノ君？」

「なのは？あつちよつと待ってね、もう少しなんだ」

もう少しと言われたのは何度目だろうかとなのはは考えて、数えるのを止めた。

今のユーノは集中している。

「えっと、ユーノ君ってジグソーパズルとか得意そうだね？」

「うん、まあ発掘なんてやってると壊れ物の修復とかも結構やらされるんだ。よし、ここ」

かちりとまた音がした。

ユーノは、その片目にルーペをつけ、フェレットの体で器用にピンセットを持っている。

時計技師、あるいは宝石の鑑定人のような有様だ。

そして、そんな彼が今取り組んでいるのは・・・。

「じ、順調そうだね？」

ユーノの前には、菱形の青い宝石が据えられている。

見間違えようもないジュエルシードであるが、その姿は散々だった。

まず全体にひびが入っている。

そして所々欠けている。

前回、あの理不尽なネコアルクの暴力に、粉々に砕けたジュエルシードだった。

目の前で砕けたのに諦めがつかないのか、かけらを全部回収してきてから、ずつとかかりきりで、目の下にクマまで作って組み立てている。

なのはにしてみれば、どうしてあの欠片からここまで元の形に持つてこれるのか理解できない。

「ユ、ユーノ君？」

「何？」

「・・・何でもないよ」

・・・言えない。

あのジュエルシードからは魔力が感じられない。

正真正銘ただの石になっている。

組み立てた所で魔力は戻るまい。

ユーノがそれに気づいていないわけがないが・・・しかし、そんな残酷な現実をユーノに叩きつける事など、なのはにはできなかった。今回の件は少なからずなのにも責任がある。

・・・せめてこのまま、もう少しだけ夢を見せてあげたいの。

なのはの優しい目に気づかずに、ユーノは黙々とジュエルシードを組み立てている。

しかし、平穩が崩れることなど一瞬だ。

「は、フェイトちゃんとジュエルシードの魔力!？」

「あああ!!!」

いきなり、背後からの大声に、ユーノの手元が狂った。

ずれたピンセットの先は、復元中・・・あくまでユーノの中では復元中・・・に当たり、突き崩す。

「ノ、ノオオオオオ!!!!!」

「あ、ご、ごめんねユーノ君」

ユーノの努力も何もかもが無駄になった瞬間だった。

なのはは悪いとは思ったが、真っ白になったユーノをひつつかみ、ルビーと合流して魔力の放出を感じた場所へと向かい、辿り着いたのは、海のそばにある公園だった。

『ジュエルシードは触手プレイ好きなんじゃないかと言っ件について?』

「ルビーちゃん、しょくしゅぶれいって何？」

「ハハハ、なのは?そういう時はわかんないって言うのが正解なんだよ」

ルビーが話を振り、なのはが天然^{ボケ}、そしてユーノが突っ込む・・・いいシンクロ率だ。

そして三人の见ている前では触手プレイと言っかなんというか・・・今回のジュエルシードは木に取り付いたらしく、ファンタジーっぽく怖い顔を幹に付けて大暴れしている。

ドラクエ辺りに、こんなモンスターがいなかっただろうか？

そして、攻撃はポケモン風味っぽい奴、ルビーの言う所の触手である。

最初の毛むくじやらと言ひ、ジュエルシード自身は基本的に触手系なのだろうか？

そして、そんなモンスターに襲われているか弱い……つと言つと語弊がありまくる少女はフェイトとアルフだ。

強制発動したのだからいて当然だが、今回は結界を使うという気遣いを忘れなかったらしい。

「フェイトちゃん」

なのは、迷いなく戦場に飛び込んでいった。

フェイトに迫る蔦を、桃色の砲撃が尻いで、一掃する。

フェイトはそれだけで、自分をだれが助けたのかを理解した。

数度の接触、出会ってから短い時間、しかし自分と濃密な関係になった彼女だ。

「なのは!？」

「フェイトちゃん、大丈夫？」

現実には予想を裏切らなかった。

そこにいたのは、見間違ひようもなく白い彼女、黒い自分の正反對のような彼女は、いつもと同じ笑顔を浮かべている。

・・・敵であるはずの自分に向けて。

「まずは封印だよ!!」

「わかった。タイミングは任せる」

「りょーかい!!」

なのはとフェイトがそれぞれのデバイスを構える。

「デイベイン・・・」

「サンダー・・・」

筒先に宿るのは、黄金と桃色の魔力光、なのはとフェイトの色だ。

「バスター!」

「スマッシュャー!」

二色の魔力が絡み合い、螺旋を描いて飛んでゆく。

一人でも十分なところを二人分だ。

ジュエルシールドモンスターにあらがえる道理はなく、余波がはれたそこには、封印状態のジュエルシールドが浮いている。

・・・今回も、封印は同時に行われたようだ。

『成長速度のインフレって残酷ですよ〜初期の強敵が雑魚キャラ扱いで目にもされてませんよ?』

「なのはは最初っからジュエルシールドモンスターなんか相手にしていなかったじゃないか?」

ルビーの言葉に応えながら、ユーノは内心で同意する。

確かになのは最初から強かったが、ここまで歯牙にかけないほどではなかった。

この成長はなのは自身の才能もちろんあるが、フェイトと言う目標あつてのものだ。

友人として二人が出会っていたら、ここまでの急激な成長はあり得なかっただろう。

・・・それを運命とを感じるのは、いささか感傷的すぎるだろうか？

ロマンチック

「なのは・・・来たんだね？」

「うん、やっぱりフェイトちゃんとお話したいから」

「そ、そう・・・」

「・・・フェイトちゃん？お父さんなら来ていないよ？」

なのはの言葉を聞いた瞬間、フェイトが何で！？と言う顔になった。人間は言葉を用いなくても理解できると証明された瞬間だ。

「あ、あのね・・・結界が張ってあつたから・・・」

なのはやユーノなら問題ない。

同じ様に魔力を持つているルビーも可だ。

しかし、魔力を持たない士郎達は最初から取り込まない限り、展開された封時結界の中には入れない。

今回ばかりは、連れてくることができなかったのだ。

「そ、そう・・・」

落胆するフェイトには悪いが、士郎は最初から来ていない。

意識して連れてこなかった。

フェイトのそれは、彼女の事情は分からないが父性に対するあこがれだと思う。

というか思いたい。

士郎がいるとフェイトの気が散るだろう。

今は自分だけを見てほしい・・・と言うとなんか危ない言い回しになってしまった。

「そ、それにねフェイトちゃん!？」

「・・・うん？」

なのはに應えるように、フェイトがバルディッシュを構える。

とりあえず目的は見失っていないようなので一安心・・・武器を向けられてほつとするなんてかなりの末期だが気にしない。

「今日は・・・誰にも邪魔させないつもりできたの」

「・・・」

たとえ、彼らが結界の中に入ってこれても連れてこなかっただろう。ルビーとユーノの二人なら、アルフを押さえる事も出来るはずだ。なのははあくまでフェイトとのお話を望んでいる。

「ジュエルシードと・・・ねえ、フェイトちゃん?やっぱりルビーちゃんを賭けなきゃだめなの?」

「・・・うん」

一度バルディッシュを構えたフェイトだが、もう少し話を続ける気になっただけらしい。

なのはに向けていたバルディッシュを下ろす。

「貴女にとって・・・あの杖はなに？」

「何って・・・」

問われた内容に、なのはは下方を見る。

『なのはちゃんもフェイトちゃんも頑張ってくださいーい』

どっちの味方なんだろうな応援に、ちょっとだけむかつて来た。

あの杖は誰の為に、なのはが頭の痛い思いをしていると思っっているんだろう？

「ルビーちゃんは私の恩人で、師匠で、お友達なの・・・」

「迷惑しているように見えた」

「め、迷惑してないって言えないけど・・・ルビーちゃん、あんなハチャメチャだし・・・」

「貴女も・・・」

ルビーのとんでもダイジェストを脳内再生していたのはだが、フェイトの言葉に？マークを浮かべた。

「え？」

「砲撃をジュエルシードに当てて封印を吹き飛ばすあなたも十分ハチャメチャ」

「ニャーーーーー!!」

黒歴史と言つか、忘れたい事を掘り返されたなのはが猫のような悲鳴を上げた。

「話を戻すけど・・・いい？」

フェイトは何処までもドライだ。

「う、うん・・・望むところだよ」

本当に望むところだった。

このまま掘り返され続けられるほうが、なのはとしてはきつい。

「貴女が迷惑しているというのなら、手放しても問題ないはず？」
「手放す？」

なのはが考えもしなかったという顔になる。
迷惑の元凶であるルビーがいなくなれば、気苦労などが減るのは間違いない。

「うゝん、ごめんねフェイトちゃん。それはないや」

にやははと笑ってなのははきっぱり断った。
ほとんど悩む時間もなかった。

「やっぱりね、ルビーちゃんがないのって考えられないし、フェイトちゃんのお母さんはあとでルビーちゃんを返してくれるのかな？」

「それは・・・分からない」

フェイトがうつむく。

なのはから見ても、フェイトは素直すぎだ。
ここは嘘でもYESと返すべき所だろう。

「それじゃあ・・・」

「・・・仕方ないよね？」

再び、互いのデバイスが構えられる。

「行くよ。フェイトちゃん？ルビーちゃん達には手を出させない」

「私も、アルフに手を出させない」

これで付き添いは手出し無用だ。

「・・・前のようなのは嫌だから気をつけて・・・」

「うう、フェイトちゃんが意地悪だよおう」

「そ、そんなつもりじゃ・・・」

フェイトがワタワタする。

無垢と言ったかなんとというか・・・もう少し世間にもまれた方がいいな。

さて・・・そろそろ話す事も尽きた。

「正真正銘・・・」

「・・・二人だけで決着をつけよう」

二人のデバイスに魔力が宿る。

「レイジングハート！！」

『プロテクション、行きます』

なのはの目の前に魔法陣の盾が展開された。
本来防御用の魔法だが、この状態から攻撃できる技術をなのはは確立している。

「バルディツシュ!!」

『アークセイバー』

・・・思いつき^{ダウト}り嘘だった。

現われたのは魔力刃、しかしアークセイバーではない。
それを見たのはが目を丸くする。

「斧？」

どちらかと言えばハルバートの形状が近いだろう。
重さでぶった切るとか、押しつぶすとかいう感じた。

「私も、何もしてこなかったわけではない」

そう言う事らしい。

アークセイバーの刃が、分厚い斧状に展開されている。
攻撃力重視の形だろう。

・・・何故だろう？

あの斧・・・鬼神でも打^ぶった斬りできそうな気がするのだが？

「・・・ねえフェイトちゃん？その斧なんだけど、魔人狩りって名前じゃない？」

「・・・・・・・・」

フェイトが赤くなってコクンと頷いた。

なるほど、元ネタはやはり魂食いのあれか・・・鎌つなりと言うわけだ。

偉大なるかな、褒めたたえよジャパニメーション・・・思いつき

塩を送った形だ。

味方のはずのルビーが一番足引っ張っていないか？

「・・・行くよ」

「え？う、うん」

それはそれ、なのはとフェイトは今、敵として相對している。
不意を打たれても文句は言えない。

・・・気を引き締めないと。

「スウー」

大きく息を吸い。

「つつ！」

同時に相手に向かって飛んだ。

彼我の距離が、二倍の速度で削られてゆく。

守りの攻撃と、攻撃力を高めた攻撃が接触する。

「ストップ、そこまがふうふうっ！」

「あ・・・」

なのはとフェイトの声が重なる。

二人の見ている前で、黒い何か人間っぽい物が錐揉み回転して飛んだ。

なのはとフェイトは相手だけを見ていたために、避ける事はおろか、
反応すらできなかった・・・飛び出すな、魔法少女は急には止まれ

ない。

沈黙が痛かった。

なのはもフェイトも、何も口にしない。

いや、口にできないと言うべきか？

視界の外で、はじき飛ばしてしまった何か・・・声が聞こえた所から、認めたくはないが人間であろうそれが、悲鳴をドブプラー効果で置き去りに飛んでゆく。

人間跳ね飛ばしコンテストなどと言うものがあれば金賞だろう。

「によぼぼぼぼー！」

愉快的な悲鳴ついでに生々しい音が聞こえてきて、なのはとフェイトは揃って真っ青になった。

『なのは様？』

レイジングハートの声に、なのはが正気に戻る。

『悪いお知らせと良いお知らせがあります』

「悪いお知らせからお願いします」

そっちの方がダメージは少なそうだ。

『はい、私たちの魔法に非殺傷設定と言うものがあるのはすでに存じと思われますが？』

「うん」

だからこそ、なのは達は遠慮なく魔法を行使できるともいえる。
自分の放った魔法で人が死ぬかもしれないとわかった上で、それでも全力全開で戦える人間はすでに狂人だ。

『その非殺傷設定ですが、主に砲撃や魔力刃のためのもので・・・』
「つまり？」

『プロテクションには非殺傷設定なんてありません』

真っ青になっただのはが急降下する。

「良いお知らせは!？」

『日本の法律には人身事故のための法律がありますが、人間同士による空中衝突の為の法律はありません』

そりゃあ、こんな状況など想定していないのだから当然だ。
航空法だって飛行機相手のものである。

「違うよ、それはいいお知らせじゃないから!！」

『デバイスは何時だってマスターの味方です。弁護はおまかせください。勝ち目はあると判断します』

「すでに裁かれる事前提!？」

レイジングハートは、案外腹黒い。

なのはは涙目になりながら、哀れな・・・と言っべきか自業自得と言っべきか・・・とにかく跳ね飛ばされた被害者の下に急ぐ。

「い、いた!？」

乱入者はすぐに見つかった。

植え込みから足が二本、天に向かって生えている。
頭から突っ込んで犬神家になったようだが、前衛芸術っぽい。

「だ、大丈夫ですか！？つてはにやー！ー！！」

ずびつとばかりに、大根の如く引っこ抜いたなのはが悲鳴を上げる。
植え込みから救出された人物は白目をむいていた。

しかも頭にはマンガにしかないような特大のたんこぶが鎮座している。

地味に気持ち悪い。

『脈拍正常・・・生きています』

どうやら気絶しているだけのようだ。

バリアジャケットを着ているので、これでダメージが軽減されたの
だろう。

「こ、こついう場合どうしたらいいの？」

『そうですね、気絶しているだけですから・・・姉さん？何して
いるんです？』

「え？」

言われてやっと、なのはは気がついた。

いつの間にかルビーが地面に何かしている。

『事件は会議室で起きてるんじゃないんですよー現場で起きている
んです』

何をしているのかと思えば、何所から取り出したのかチョークで地
面に倒れている犠牲者の周りをなぞっている。

「いやー殺人現場みたいになってるのー!!」

『姉さん・・・勝手に殺さないであげてください』

『あはー冗談ですよ冗談』

ルビーはあつさりとチヨークを捨てる。

「いや、それ洒落になっていないから」

やっと駆けつけてきたユーノが突っ込みを入れるが、それで収まるようなら誰も苦労はしない。

『心配なら回復魔術でもかけときます?』

「そ、それだよルビーちゃん!!」

ルビーは以前、重症の士郎の怪我を完治させた前例がある。

この程度の怪我、何と言う事もない。

なのははあわててルビーを手に取ると、魔術回路を起動させてルビーに魔力を送った。

『きたきたきましたよー!! ひっさびさのルビーちゃん大活躍っ
!!!!』

ルビーに満ちた魔力が形を取り、放たれた。

この至近距離で、しかも気を失っている相手に外すわけもなく命中、たんこぶが徐々に小さくなって行き、白目をむいていた顔も安らかなものになる。

「な、なんとかなったなの」

ほっとしたなのは、安堵の溜息を吐く。

「・・・ん？」

しかし、改めて冷静になって見れば、違和感を感じて声が出た。

「ねえルビーちゃん？この子何か変じゃないかなの？」

『何がですか？』

「えーっと・・・うーん」

パニックになって視野狭窄になっていた為に気づかなかったが、なのはと同じくらいの背丈の娘だ。

黒髪を短く刈った中性的な寝顔をしている。

黒いバリアジャケット・・・多分バリアジャケットも元通り？になっているようだが・・・何だろうか？この違和感は？

「ってあ、フェイトちゃんは！？」

『申し訳ありませんなのは様、すでに反応が消えています』

ついでにジュエルシードも・・・彼女の目的の半分は果たしたことになるので退いたのだらう。あえて轢逃げとは言わない優しさ。

「あううーフェイトちゃんとの決着がー」

これで何回目だろうか？

二人気決着をつけようとすると、邪魔が入ったり有耶無耶になったりする・・・今回の邪魔者は地面に寝ている娘と言う事か？

「はあ・・・しかあないの。それで、この娘は誰なの？」

『結界に入ってきたことから、魔導師なのは間違いないでしょうね

」

ルビーの言うとおり、それプラスどういう理由かなのはとフェイトの戦いを止める必要性を持っている人間だ。

『ストップとか言いかけていましたから、おそらく止めようとしたんだとは思いますが、なのはちゃんとフェイトちゃんの魔法の威力が予想外すぎて潰されたってところでしょかね？』

この場合、被害者の間抜けをあざ笑えばいいのか？

それとも、なのはとフェイトの高魔力をほめるべきなのか？
判断に苦しむところだ。

少なくとも、自信があっただろうこの娘のプライドはズタズタだろう。

「う、ううん」

そんな事を考えていたら、目が覚めたようだ。

「父さん・・・何で死んだ父さんがいるの？」

「目を覚ませ！」

得体の知れない危機感を感じて、ユーノが強制覚醒を促す。

「・・・胸が痛い」

目を開けての第一声がそれだったが、鳩尾にフェレット式ドロップキックがクリーンヒットしたため、別に恋の悩みじゃない。
ユーノも結構な無茶をするようになったものだ。

「あ、あの・・・大丈夫ですか？」

「え？ああ・・・大丈夫だ」

そう言つて、直ぐに立ち上がろうとするのを見たのはがあわてた。

「だ、だめだよ。さっきまで気絶していたんだから」

「心配ありがとう。それでも鍛えているからね」

「で、でも女の子が無理しちゃ」

「は？」

虚を突かれてぽかんとした顔がなのはを見返して来る。

「・・・ちよつと待ってくれ、誰が女の子？」

「え？貴女が」

なのはの指はどのようなもなく、彼女が言う所の貴女を指していて・・・。

「僕の何処をどう見れば・・・ってなんじゃこらー！ー！！！」

彼女もとい、彼が自分の恰好を見て、殉職する熱血警察官のような悲鳴を上げた。

彼の恰好とは・・・黒のゴスロリである。

フリフリである・・・レースである・・・ヘッドドレス付きである。

恰好だけを見れば女の子以外の何物でもない。

なのはが引っ掛かっていた違和感の正体はこれだったのだ。

だってどう見ても女の娘だから・・・あるいは作品自体の男女の書

き分けが甘いせいかな？と思ってみる。
なるほどこれなら子が娘になるわけだ。

『イエー！！大成功ですよー！！いつつあノベルマジック！！』
新たな犠牲者爆誕！！

ルビーに表情があれば、きつとどや顔だ。

「ルビーちゃん、知ってたの？男の子だった？」

『ふ、愚問ですよなのはちゃん！面白そうな事があればやらすには
いられない。それがルビーちゃんクヲリテイ！！』

どこぞの山男のような持論を振りかざすルビーだった。

・・・10分後。

「時空管理局？」

聞き覚えのない名前に、なのはが首をかしげる。

『時空管理局とは、簡単にいえばこの世界で言う警察に当たる組織
です』

レイジングハートが補足説明をしてくれた。

『警察が犯罪者を取り締まるように、次元世界の犯罪を取り締まる
のが時空管理局です』

「その通り、僕は時空管理局アースラ所属の執務官クロノ・ハラオ
ウんだ」

そして彼が自己紹介する。

「ああ、だからバリアジャケットが黒い・・・」

「なんか文句あるのか毛玉？名前は関係ないいいいい！！」

「ひいいいい！！」

思った事を口にしようとしたユーノが、いきなりのクロノの豹変にビビった。

なんか石仮面の吸血鬼みたいだ。

どうやら地雷だったようだが、最近地雷持ちな人間が周りに多い気がする。

いつの間に地雷原になった？

「「クロノだから黒ね」ってなんでみんなそんな安易なんだ！？リ―ゼもロツテも事あるごとに「黒のクロノ」とか「まっくろくる助出ておいで」ってからかうもんだから、いつの間にか二つ名になって、部下もそう呼ぶし、母さんもそれならバリアジャケットは黒にしましうって僕の意味なんか無視ですか？ああそうですか？」

ブツブツとつぶやき出したクロノは怖かった。

リ―ゼとロツテがだれかは知らないが、ジブリ通？

きつと耳に残るほど言われたに違いない。

「な、なのは」

「わ、解ったよ」

ここでユーノからなのはにタッチ、話の方向と空気を変えなければならぬ。

「え〜っと、あの・・・」

「ん？」

「あ、その服ですけど、何時まで着ているんですか？」

「脱げないんだよ！！」

彼女改め、彼改め、クロノ・ハラオウンはいまだにゴスロリだった。10分間、全力で脱ごうとしていたが、全部徒労に終わったのだ。

「しかも僕のバリアジャケットも展開出来ないなんて一体どうなっている！？」

「ル、ルビーちゃんの魔術って割と呪いのだから・・・」

「そんなんで納得できるか！？」

「にゃーーーー！！」

ユーノの期待を背負ったなのは・・・二発目の地雷を踏む。

「一体何なんだあの杖は！？」

「ほんつとくにごめんなさいー！」

なのはは平謝りするしかなかった。

フェイトに素直に引き渡しとけばよかったと、思い始めている。

『クロノ、女の子を怯えさせてどうするの？そんなところで話し込んでいないで、アースラにご案内しなさいな』

軽く空気が悪くなっていたところに救いの手が入る。

空間に投影されているかの様に、モニターが現れた。

映っているのは若い女性で、制服のようなデザインの服を着ている。クロノを名前で呼んだ所から、時空管理局に関係者か？

「かあさ・・・いえ、艦長」

・・・どうやら親子だったらしい。

「フッフ、このくらいじゃ驚かないなの」

「そうだね、桃子さんと言う実例があるしね」

この世界の見た目年齢は当てにならない。

『その貴女、なのはさんと言いましたね？アースラ艦長のリンデイ・ハラオウンといえます。事情を説明していただきたいの、悪いけどこちらまで来ていただけるかしら？』

「あ、はい」

なのはは了承した。

断る理由がない。

ユーノとレイジングハートの話からして、無体な事をする連中でもないだろう。

『それと、その杖？確かルビーちゃんと言っていたわね、一緒に連れてきて』

「げー!!」

反応したのはクロノだ。

見た目が女の子になっているので、「げー!!」と言うのはいただけない。

「き、危険です艦長!!」

クロノ必死の抗議。

気持ちはよくわかる。

『命令です』

しかし、一瞬で敗北。

項垂れるクロノに、宮仕えの悲哀を見た。

『いいわね、クロノ？早く帰ってくるのよ？』

「ん？」

違和感を感じたなのは声が漏れた・・・はて、今リンディさんのクロノを見る目が妙に怪しかったのは気のせいだろうか？

クロノがなんだか冷や汗をかいているようにも見えるし・・・何となくだが、なのはとユーノはクロノに苦勞人くるわんどのおいを感じ取る。

しかし、実際何がができるわけもなく、ゴスロリ少年に同情の視線を向けることしかできなかった。

「おかえりなさいクロノ」

「は、艦長？エイミイまで？」

転送陣に入り、飛んだ先は転送ポットの中だった。

視界が変わったと思った瞬間、目の前に現れたのがさっきの映像で見たリンディ艦長ともう一人、彼女がクロノの言う所のエイミイさんだろう。

仮にも艦長と言うくらいだから、この場では一番偉いのだろうが、その彼女が直々に迎えにきた？

「つつ！？」

しかし、リンディの目を見た瞬間、なのははユーノを抱いて横に避けていた。

「うわー!!」

なのはの避けた場所を、リンディにタックルを食らったクロノがもみくちゃになりながら通り過ぎて行く。

「こんなにかわいくなっちゃって」

「や、やめてくれよ母さん!!」

「ああ、やっぱりなの」

なのはが危険を感じたのは、リンディの目がクロノにロックオンされていたからだ。

桃子が、なのはの可愛さを愛でる時とまったく一緒だったから・・・どうやら、彼女がメインで迎えに来たのは、なのは達じゃなくて息子の方だったらしい。

「・・・年齢不詳なところだけでなく、妙なところでもそっくりなの」

「ところでなのはさん？」

「は、はい？」

聞こえないように呟いていたはずだが、聞かれたかと思ってなのはがびくつとなる。

「ルビーちゃんといった。あのデバイスはどこかしら？」

リンディの興味はルビーにも向いているようだ。
きよろきよろと周囲を見回してルビーを探している。

「ここです」

「え？」

なのはが差し出したのは、両手で抱えられる大きさの玉だった。バスケットボールより、ふた回りくらいは大きいだろうか？

「この中にルビーちゃんがあります」

玉の正体は、バインドでこれでもかと言うほどに拘束した結果、球状になったバインドの塊だ。

さつきから、ずっと静かにしていると思っていたら、静かにしているのではなく、しゃべれないようにされていたのか？

「嚴重ね？」

「当然です。騃はだいじなの」

「騃って・・・」

なのはの言う事は正論だが、これが生き物だったら呼吸も出来ないだろう。

騃という名の虐待になりかねない。

リンディの顔が引き攣る。

ちなみに、クロノはいまだにリンディの腕の中だ。

もはや諦めたのか、ぐったりしていて・・・きつと今日は、クロノ・ハラオウンの人生で、天中殺な日に違いない。

「このままじゃお話も出来ないから、バインドを解いてくれないかしら？」

「い、いいんですか？」

「艦長!？」

「この艦の艦長として許可します」

なのはの疑問と、クロノの抗議を無視して、リンディが許可を出した。

困ったのはなのはだが、さあさあと乗り気で促して来るリンディに折れて、バインドを解除する。

『バインドから生まれたルビーちゃん!!』

バインドで雁字搦めにされていたというのに・・・独特のルビー節は健在だった。

「貴女がルビーちゃんね?」

『貴女がリンディさんですね?』

絶賛女装中（本人未公認）を抱えた女と、トンでもふざけた人工精霊が互いを認識した。

リンディにしてみれば、被害者^{クロノ}の母親である。

さぞや言いたい事も多からう。

ルビーに対してどんな言葉をぶつけるのか、思わず見守る全員の喉がゴクリと鳴った。

「そもさん」

『せつぽ』

「かわいい子には?」

『かわいい服を。クロノ君の艶姿は?』

「勿論、360度あらゆる角度から撮影して永久保存」

「お前もか!?!」

なのはとユーノがシーザー調に叫んだ。

今回、おそらく最も被害を食らうであろうクロノは口を開くも言葉

が出てこないらしく、真っ赤になって口をパクパクやっている姿は金魚のようだった。

「貴女とは話が合いそうね？」

『こちらこそ、桃子さん、忍さんに次いで三人目ですよ』

二人はしっかりと手と手を触れ合わせる。

それを見る全員が青くなった。

なのは達はリンディの事を、クロノはルビーの事をよく知らないが、本能的にまずい感じがする。

「もっとたくさん話したいけど、今は先にやらなきゃならない事があるから・・・」

「そ、そうです艦長！ルビーと言ったな、お前一体・・・」

「エイミィ？」

「はい、艦長。準備は万全です」

「何？」

会話がどうにも噛み合っていないと気付いたクロノがエイミィを見る。

「・・・エイミィ？」

「何かなクロノ君？」

「それは何だ？化粧道具に見えるんだが？」

女性が化粧道具を持っていること自体はおかしいことではない。子供でもなければ、学生だって常に一つ二つの化粧道具を常備しているのは女の嗜みだ。

しかし、エイミィの手にあるそれは、コンテナ一つ分ほどの量と種類があり、常備と言うには多すぎるだろう。

「しかも、なんで今、化粧道具を用意する必要がある?」

「それは勿論クロノ君の為」

「なっつ!?!」

「そうよ。服は完璧なのに、化粧をしていないなんて片手落ちだわ」

「ちょ・・・ま・・・」

『おおールビーちゃんっかかりですよ』

「余計なこと言うな杖!!」

クロノの反論は、エイミー、リンディ、ルビーに封殺された。

しかも、女二人に拘束されて、わっしょいわっしょいと引きずられてゆく。

「楽しみね、男の子もいいけど、娘も欲しかったと思っていたの」

「艦長?クロノ君のアイシャドウは背伸びをする女の子と言う感じに紫で行こうかと」

「それ採用」

「やーめーてーくーれー!!」

哀れ、子牛のように連れて行かれるクロノは全米の涙を誘うだろう。

『おたっしやでー頑張ってくださいね』

ルビーだけが、去ってゆく三人の背にエールを送る。

リンディとエイミーが振りかえらずに片手を突きだして親指を立てて行った。

とつても頼もしい。

「・・・ねえユーノ君?時空管理局ってみんなあんななの?」

「えーいや、そんな色ものじゃないはずだし、執務官とか艦長とか

呼ばれている人達は結構なエリート・・・「本当に？」・・・のはず

どう見てもあの二人は一番上に腐の文字がつく人種だ。だって目の中にお星さまが見えた。

無性に、エリートと言つ言葉を辞書で引きたい。

「ところでユーノ君？」

「何？」

「私たち・・・どこに行けばいいのかな？」

「・・・・・・・・」

初めてきた場所で、しかも案内役はさつさとどこかに行つて・・・じゃない、誘拐されて行つた。
むしろ逝つた？

つまり、なのは達は全自動で迷子である。

「そ、遭難した時は、下手に動かない方がいいらしいよ？」

その後、艦のスタッフが通りかかるまで、一匹と一人と一本はずつと待ちぼうけだった。

あの三人は戻つてきやあしなかったのである。

「フェイト、まずいって！あいつ絶対時空管理局だ！！」

「・・・・・・・・」

ジュエルシードを回収したフェイトとアルフは、可能な限りの速度で公園から離れていた。

いきなり飛び出してきてはじき飛ばしてしまった誰かには悪いとは思うし、罪悪感で胃が痛い。

彼女達は元々時空管理局の存在を知っていたこともあって、被害者が何者なのかと言う事にすぐに気付いたのだ。

フェイトだって、自分達のやっていることが違法な事だと気が付いているからこそ、逃げるしか選択肢がなかった。

「もう無理だよ。連中が乗り出してきたら・・・ねえフェイト？」

むしろ、フェイトよりアルフの方が表面的には焦っていた。

「一緒に逃げよう。このままじゃフェイトまで犯罪者になっちまうよ」

アルフは、フェイトが望んで犯罪を犯しているわけではない事を知っている。

彼女は母親の願いを叶えただけなのだ。

そしてそれによって、母親に自分を見てほしいと・・・その程度のわがママが何故と売らないのかとすら思う。

「・・・アルフ？」

「え？」

「ジュエルシードを集めよう」

「な!？」

予想もしていなかった言葉にアルフがうめく。

「正気かいフェイト!？あの婆は確かにあんたの母親かもしれないけど・・・」

「母さんをそんな風に呼ばないで、それに私は冷静だよ？」

言われて、アルフは気がついた。
今のフェイトは自棄になっっている感じはしない。
いつものクールなフェイトだ。

「ねえアルフ？今はチャンスなんだよ。時空管理局はまず最初に、
事情を知るためにあの子達を事情聴取するはず」

「そりゃあ・・・まあ」

目の前にいる人間と、居所が知れない自分達、100%の確率でま
ずなのは達から事情を聞こうとするだろう。

連中は、この世界にジュエルシードが降りそそいだことは知ってい
ても、自分達の関係までは知らないはずだから。

「それがどうしたって言うんだい？」

「あのルビーに話を聞いて、すんなり済むと思う？」

「それはないでしょ？」

絶対一悶着ある。

「だから、時空管理局の初動は間違いなく遅れるよ？」

アルフにも、フェイトの言いたい事が理解できた。

現在、なのは達は間違いなく時空管理局に拘束されているだろう。
時空管理局も、なのは達から話を聞くまでは動けないはずだ。

フェイトとアルフの邪魔をする連中はいない。

「わかったよ。なら急ごう、連中が本格的に動き出す前に、ジュエ
ルシードを回収してしまうんだ」

「うん」

「・・・誰も来ないね？」

「・・・うん」

「・・・」

なのは達は、転送ポットの前で絶賛放置プレイ中・・・フェイト達の出した答えは実に正しかった。

第十五話 魔法少女は急には止まらない（後書き）

時空管理局に空中衝突に関する法律があるかは知りません。
次回からシリ阿斯方面に傾倒してゆく予定です。

第十六話 主人公退場？

アースラとは、時空管理局が保有している戦艦の一隻らしい。

次元世界を移動する能力を有し、次元の狭間で管理局員の前線基地となり、戦艦と言うだけあって武装も搭載している。

あと、食堂のミルククッキーが絶品との事、最後に妙なお勧め込みで転送ポットの前を通りかかった一般職員に懇切丁寧に説明された。最後のクッキーはともかく、これが全て魔法理論で動いているというのだから純粹に驚きだ。

外の不思議な宇宙空間もどきを見た時には感動すら覚えた。

進化した科学は魔法と見分けがつかないというが、この船などはその逆、進化した魔法は科学と見分けがつかないという例だろう。

そんな事を考えつつおのぼりさんと化したなのは達が挙動不審にきよるきよるしていたら職員の人に苦笑されてしまい、恥ずかしさで真っ赤になったりしたが、なんとか艦長室、つまりリンディの部屋に到着した。

「うわ」

「これは・・・」

『流石リンディさん、趣味がエキセントリックですね』

今回ばかりは、なのもユーノもルビーの言葉に同意だ。

盆栽がある。

茶室がある。

そして極め付けに室内なのにししおどしがある。

艦長室という所から、リンディの趣味なんだろうと思うが・・・フロアリングとのミスマッチが凄まじい。

っというか、茶道はともかく、あのリンディが植木バサミ片手に盆

裁の手入れをしている図というのがイメージ出来ない。

「おまたせ」

部屋の主達が帰還したのはそれから一時間後だった。

複数形なのは、リンディの他にエイミィとクロノも一緒にいるからだ。

「……………」

ちなみにクロノの現状は、捕獲されたエイリアンよろしく、リンディとエイミィに両脇を抱えられている。

「クロノ君・・・微笑み忘れた顔になっているの」

「愛を取り戻せるといいね、主に家族愛」

支えられているのは、たぶん一人ではたっていられないからだろう。リンディとエイミィがやったこととはいえ、眠っていた物に点火してしまったのは間違いなくルビーなのでバリバリに申し訳ない。

ところで、鵬という文字は二人の男の間に女が一人と書くのだが、そのまま今のクロノ達の姿である。本当の性別が逆だが。

「どうかしらなのはちゃん？家の子は？」

思いつきりリンディが自慢してきた。

「うっ、負けたかもなの」

なのはがうめく。

さつきぶりに再会したクロノはすごい事になっていた。
化粧だけじゃない。

髪 of 短さをカバーするために、どこから持ってきたのか長髪 of ウィッグを付けている。

しかもポニーテールで上げられた髪の下にあるうなじが色っぽい。
ゴスロリ of 雰囲気 を壊すことなく、むしろ相乗効果を発揮していた。
背が低いのもポイントが高い、似合い過ぎていて怖いくらいだ。

8歳とはいえ女の子 of のなのは心境は複雑で、「悔しい、でも可愛い！！お持ち帰りー！！」とか思っている。

・・・そっち of 趣味はなかったはずなんだが？

『リンディさんにエイミィさん・・・いい仕事してますね』

ルビー of 言葉に、リンディとエイミィがサムズアップしてくる。

ルビーに手があれば同じ様に返していただろう。

クロノに関してはご愁傷様、男としてのプライドはボロボロだろうが・・・生まれてくる性別を間違えたんじゃないだろうか？

「エイミィ・・・君はまだやるべきことがあるだろう？」

ふらふらと、いい感じに生ける屍になったクロノが言った。

「うん、そうだねクロノ君！！これからクロノ君ファンクラブを立ち上げない！！」

「仕事しろって言うてんだよ！！」

クロノとの接点は少ないが、明らかに壊れて言っているのがわかる。

「艦長！！なんとか言ってください！！」

「会員番号の一番は私ね」

「勿論！！」

「オウ・マイ・ゴッドオオオオ！！」

クロノの神は死んだ。

「大丈夫、アースラの記録を本局の広報にインストールさせればコアなファンがザクザクだつて！！」

「アンインストール！アンインストール！！恐れを知らない戦士のようにー！！！！」

「くっろくろにしーてやんよっ」

「するなー！！そんな（主にクロノにとって）暗黒の世界を作ろうとするんじゃない！！」

部屋を出て行くこととするエイミイの腰に、クロノが縋りついて止めるようにしている。

セクハラで訴えられかねないと思うが、今の両者を見比べてエイミイを被害者と思う人間はいないだろう。

しかも、鼻息荒く目が行っちゃって・・・もとい、逝っちゃっているエイミイはそんな事じゃ止まらない。

クロノをぶら下げたまま部屋を出て行った。

復活のクロノ・ハラオウン・・・再び退場！！

クロノがボカロデビューする事があれば、ぜひ自分のパソコンに降臨いただこう。

クロノタンとか言ったりして・・・。

「大丈夫なのはさん？」

「え？」

「あの子も執務官なんだから、この程度は自力で乗り越えてもらわないとね」

「は、はあ・・・」

『執務官というのは想像以上に厳しい役職のようですね』

それは間違った知識だ。

「さて、落ち着いたところで事情説明をお願いできるかしら？」

そしてこの人はかなりの大人物だなーとも思う。

さっきまでの事を全部丸々と無視ですか？

どうやら、やるべきことは忘れていなかったらしいが、それが仕事に対する責任感なのか、それともクロノ弄りに満足したからなのかは判断に困るところだ。

ちなみに、必死の形相で女性の腰に縋りつくゴスロリ少女というアイスラ七不思議の怪談が誕生するまであと3分。

「処で、このままでは話しづらいからバリアジャケットを解除していただける？」

「え？あ、はい」

忘れていたが、ずっとバリアジャケットのままだった。

バリアジャケットをまとっているという事はすなわち、武装しているという事で、OHANASIIじゃないお話をするのには向かないだろう。

なのはは素直に解除して普段着に戻る。

「貴方も、元の姿に戻ったらどうかしら？」

「え？」

リンディの言葉の意味を理解できなかったのはが、首をかしげる。彼女の視線は、自分ではなくユーノを見ている？

「あ、そうですね。ずっとこのままの姿だったので忘れてました」

しかし、ユーノはリンディの言いたい事が理解できたらしい。頷くと、何やら魔法を発動させた。

足もとに魔法陣が展開され、ユーノの体が突然光りだした。

「ふう、なのはにはこの姿を見せるのは久しぶりかな？」

現われたのはクリーム色の髪に、どこかの民族衣装のような服を着た少年だった。

しかも半ズボン・・・一部の人間にはここ重要かもしれない。

「え？」

しかし、仮面ライダーを凌ぐ変身ぶりに、なのはは呆けたままだ。理解が現実を追いついていない？

「だ、誰なのこの人!？」

「ぼ、僕だよユーノだよ!! 最初に会った時の姿だよ!!」

「し、知らないよ!？ユーノ君は最初からフェレット君だったよ!」

「あ、あれ? そうだったっけ？」

『ひよつとして、あのB級夢SFの事ですか?』

「そ、その通り! 何だ。ちゃんと見てくれていたんじゃ・・・」

『あれだったら安眠の妨害だったのでジャミングさせてもらいましたから、なのはちゃんは見えていませんよ?』

「人のSOS念をブツするなんて何考えてんだお前えええ!! こ

の人でなし!!」

『ルビーちゃん杖ですもの、何をいまさら』

・・・このメンツの、話の脱線率はとんでもなく高い。

そんなもって・・・あらあら・・・おやおや・・・それからどこ
こしょ・・・説明終了

「そう、貴方があのジュエルシードを発掘したの」

説明を聞きながら、リンディが自ら茶をたててふるまってくれた。
どうやら茶室は飾りではなく現役らしい。

リンディは日本通であるようだ・・・そんな風に思っていた時も
あった。

リンディが角砂糖を三つ緑茶にぶち込むという茶葉農園の人達にフ
ライング土下座を見るまでの短い時間だったが。

「ル、ルビーちゃんは知っていたの!? ユーノ君が男の子だって!
?」

『ええ、まあ・・・だから温泉でも拘束していたでしょう?』

「で、でもでも・・・私ユーノ君の前で普通に着替えたり、お姉ち
ゃんやお母さんと一緒にお風呂に入ったりしちゃったんだよ!」

『つちい!! このけだもの!! ルビーちゃんの見えていない所です
でなのはちゃんだけでなく美由希さんや桃子さんまで毒牙に!』

「冤罪だ!! ってなのは落ち着いて!! レイジングハートを構え
ないでー!!」

「立派だわ・・・って皆さん? お話を聞いてほしいんだけど・・・
なのはさん、それはダメ!!」

リンディの話なんか誰も聞いていなかった。

特になのはのパニクリ方がひどく、砲撃モードのレイジングハートをユーノに向けていた。
流石にこんな所でぶっぱなされては逃げ道がないので、リンディも焦る。

『なのはちゃん、やつちゃえやつちゃえですよ〜』

しかもルビーは煽っているし……。

「リ、リンディ艦長！！助けてくださいー！！」

本格的に命の危険を感じたらしいユーノが、リンディに縋りついてきた。

割とかわいい系の男の子が膝にすがり付いてくるシチュって萌えね？
リンディは鼻血が出そうなのを我慢してまずユーノを見て、そして真っ赤になっているのはを見る。

「……ユーノ君？」

「は、はい？」

「エッチなのはいけないと思います」

その一言に、ユーノがマホラさんいやく！！と女の子っぽく絶望する。

自分の艦を壊されるのは勘弁だが、リンディも女だ。

ユーノには悪いが、なのはの気持ちの方がよくわかる。

「……思えば恥の多い人生を送ってきました」

ユーノが人間失格的な辞世の句を読み始めた。

確かに、覗きで殺される人生の終焉など恥以外の何物でもなかつ。

そんないい感じに生ける屍になっていたユーノの肩にポンと手が置かれた。

「苦勞しているな、ユーノ君？」

「あ、クロノ執務官」

いつの間にか戻ってきていたクロノだった。とても優しい笑みを浮かべている。

「わ、わざとじゃなかったんです。見ないように逃げようとしてもフレットじゃ抵抗しきれなくて・・・」

「そうか・・・大丈夫、情状は酌量されるだろう。君は正直に話してくれればいいんだ」

「う、うう・・・あ、ありがとうございます」

・・・何かいい雰囲気だ。

しかも、クロノはいまだにゴスロリ姿・・・二人の周囲の空気が妖しい。

なのはとリンディは別の意味で赤くなって、見つめあっている二人を見ている。

・・・今さらだが、二人とも男だ。

ルビーが何も言わないのは、放っておいた方が面白そうだからか？

「クロノ執務官？」

「何だい？」

「実は僕、ルビー被害者の会というものに入っているんですが」

「それはいいな、僕も入会させてもらっていいかい？」

「勿論」

クロノが被害者の会に入会した。
友情度と親密度が上がって、更に妖しくなった。

「しかし、それはそれとしても君の行動は無謀だ」
「すいません」

少し落ち着いてから、クロノのお小言が始まった。
根がまじめすぎの委員長的キャラらしい。

「話を聞けば、ジュエルシードのモンスターの中には、危険な物もいたらしい。その被害を抑える事が出来たという点で完全な間違いとはいえないが、やはり結果的に上手く行ったというしかないな、もう少し自分の身の安全も考慮すべきだった」

「はい・・・」

言っている事は一々尤もだ。
以前ルビーにも指摘されたが、かなり運が良かったと言わざるを得ない。

「そのくらいでいいでしょうクロノ？本題に戻します。まだおそらくの段階ですが、ジュエルシードは彼の話とこちらの記録から、次元干渉型のエネルギー結晶体と推測されます。幾つか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物です」

「次元震？」

「簡単に言えば次元世界間で起きる地震だね。規模にもよるけど、起きれば発生源の周辺世界はただではすまない」

聞いたことのない固有名詞に首をかしげるなのはにユーノが説明してくれた。

なんでも、アースラがこの世界に来たのは、前回のジュエルシードの暴走によって起こった小規模次元震を観測したかららしい。つまりあの時、下手をしたらこの世界にとんでもない災害が起こっていたかもしれないと聞かされたのはがぞつとする。

「っというかそれを力技で破壊したネコアルクとは何者だ？」

クロノの疑問に、なのはとユーノが顔を見合わせて真剣に唸る。ここまで説明が難しい存在も珍しい。

「ルビーちゃんのペンフレンドでね、猫・・・よ、ようせ・・・」

『ネコ妖精ですよなのはちゃん？』

「形容しがたいけど猫に似ていなくもないナマモノです！」

いまだに妖精の形容詞にためらっているなのはにルビーがずばりと言ったが、ユーノが大声でもみ消した。

「そ、そうか・・・」

三者三様の反応に、クロノはそう言うしかなかった。

突っ込んだじゃいけない気がしたのだ。

「しかし、次元震は厄介なんだ。実際に旧暦の462年、次元断層が起こった時、とてつもない被害がでた」

「ああ、あれはひどかった」

そんな知らない歴史を紐解いてしみじみ語られても困る。他の皆はともかく、話についていけない。

『・・・・・・』

「ルビーちゃん？」

何所かに仲間はいないかと周りを見回したなのは、珍しく黙って話を聞いているルビーに気がついた。

クロノやユーノにはわかるまいが、長い付き合いのなのはにはルビーが何かを考え込んでいるという事に気づく。

「・・・・ルビ」

「素人のなのはさん達にこれ以上の負担をかけるわけにはいきません」

「「え？」」

再度声をかけようとしたのはだが、リンディの言葉に遮られた。クロノが視界の隅で当然という風に頷いている。

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収は管理局が全権を持ちます」

「君達は今回の件は忘れて、それぞれの世界で元通り平穏に暮らすといい」

一方的に、反論の隙なくまくし立てられたのはとユーノが面食らう。

考えてもいなかった申し出だ。

「いきなりそんな事を言われても・・・」

「次元干渉にかかわる事件だ。民間人が介入するレベルの話ではない」

・・・まあ、言っていることは間違いではない。

こっちは魔法を覚えたばかりの素人、相手は専門家だ。それなりの自信もあつて言っているのだろう。

玄人は、素人が下手に介入してひっかきまわすのを嫌うものだ。

「まあ、いきなり言われても気持ちの整理が付かないでしょう・・・」

「あ、ちよつと待つてください」

「え？」

何か言いかけたリンディの言葉に、なのはが待ったをかけた。

「作戦たーいむ！」

バローム的に腕をクロスさせたなのはの号令で、ルビー・ユーノ・レイジングハートが円陣をくむ。

「ここからは時空管理局がつて言われちゃったけど、どうしたらいいなの？」

「なのは、餅は餅屋と言うし・・・ロストログアの扱いに関しては彼等の方が習熟しているのは確かだよ？」

なのはの疑問にユーノが答える。

何と言っても、なのは達は個人レベルの集団だ。

ノウハウも足りていない。

回収した後も、より嚴重に保管できるといふのなら任せるのも手だろつ。

「で、でも・・・いいのかな？このままお任せしちゃって？」

『なのはちゃん？レイジングハートもルビーちゃんも、私達はなの

「はちゃんの礼装でデバイスです」

『なのは様のご意志のままに』

ルビーとレイジングハートがなのはの思いを聞く。

「私は・・・私はやっぱりフェイトちゃんと話がしたい。このままうやむやのままお別れなんて・・・」

『ではそうしましょう』

「え？」

ルビーがあっさり答えを言った。

さもそれが当然と言うかのように。

「で、でも・・・この件は時空管理局がつて・・・」

『問題ありません、時空管理局はジュエルシードを追っているんです。ここ重要、そして私たちはフェイトちゃんとお話したい。両者の目的は対立していないんですよ？』

つまり、共闘が可能だという事だ。

『あんなことを言っていますけど、本心はなのはちゃんの助けが欲しいに決まっています。だって執務官つて役職持ちなのに、クロノ君つてなのはちゃん達に一発KOされちゃったんですから』

「ふぐおー!」

何か、言葉の刃が刺さったような苦悶が後ろから聞こえてが気にしない。

『現状、最も問題なのは、このままジュエルシード回収が進んでいく上で、フェイトちゃんが犯罪者認定された場合、なのはちゃんと

フエイトちゃんがお話する機会なく永遠のお別れエンドを迎える可能性がある事です』

「それは嫌だよ」

『でしよう？連中と一緒にいれば弁護も出来るかもしれませんが、何かあつたら時空管理局ポイ捨てしちゃえばいいんですよ』

「ポ、ポイ捨て？」

後ろから啞然とした声が聞こえるが、これも無視。

「うん、わかった」

いいのか？

そこに解つたと答えていいのか？

『そう言う事でリンディさん？私たちジュエルシードの回収をお手伝いしますから恩に着てください』

「い、いやまあ、協力してくれるのは正直ありがたいんですけど・

・」

リンディの顔は盛大にひきつっていた。

「ま、魔力の大きさが戦力の決定的な差じゃないやい」

クロノなんか、部屋の隅で地面にのの字を書いている。

後で知ったことだが、クロノは14歳らしい。

背が低いのは成長期に入る前だからとか・・・クロノは6歳も年下の女の子達にノされたわけで、しかも女装までさせられたと・・・涙が出ちゃっても、今のクロノは外見女の子なので問題無し。

「相談くらいはしてほしかったな」

時空管理局に協力する事情を説明するため、なのは達に先じて帰宅したルビーの説明を聞いた士郎が渋い顔になる。

『すいません士郎さん、なにぶんにも急だったんですよ』
「信用していいのかい？その時空管理局は？」

ジュエルシードを回収する為に学校を休まなければならないという
ものもあるが、組織というものにあまり良い思い出がないからだろう。
同じ理由で恭也と美由希もあまり面白くない顔だ。

高町家にとって、組織とは集団で襲いかかってくる連中という認識
が強い。

『リンディさんとクロノ君は割と信用がおけますけど、基本的には
ギブ・アンド・テイクですよ。ジュエルシードをさっさと回収し
てくれるっているのなら望むところですからね』

ルビーは最初から、ジュエルシードを処理することを優先していた。
それが時空管理局であろうと、フェイトの母親だろうとそんな事は
問題ではない。

時空管理局に協力するのは、単純に数が多いからだ。

数は力だよ兄貴である。

そして人手があればなのは負担も少なくなる。

「本当に、ルビーちゃんとはばけたようでいろいろ考えているんだ
な？」

『それ程でも』

苦笑するしかないが、なんだかんだでルビーはなのはを守るだろう。基本的にルビーの思考は高町家を、それもなのはを中心に展開されるのだから。

「となると、俺達は身を引いたほうがいいのか？」

「親父!？」

士郎の言葉に、恭也と美由希が驚く。

「いや、時空管理局と一緒に動くというのなら、俺達が下手に手を出すわけにはいかないだろう」

護衛ならともかく、共に闘うというのならかなり高いハードルが存在する。

なのはは魔法に出会って間もないとはいえ魔導師だ。

やってやれない事はないかもしれない。

しかし士郎達は、本物の魔導師と一緒に戦う経験がないし、時空管理局の人間も御剣剣士との連携の経験などあるはずがない。個々に強力でも、十分な連携が取れなければ互いに足を引っ張って役に立たない事もある。

今回の場合、事が魔法がらみなので、その時空管理局主体で行くべきだ。

士郎達が外れるというのは道理が通っている。

不満がないわけではないが、なのはの安全を考えればそちらの方がいいだろう。

ルビーの話では、場合によっては世界の命運が掛ってくる。

わずかなミスが世界崩壊につながるというのも信じがたいが、すでに魔法や魔術などにかかわっているので完全否定も出来ない。

「ところでルビーちゃん？」

『何ですか？』

「そのクロノ君というのは、どう言う子なんだい？」

場の空気が別物に変化する。

『クロノ君ですか？一言で言うと』

「言っと？」

『どこか別の世界で、魔力を無くしたなのはちゃんと恋人になっている感じの男の子です』

「そうか・・・それは一つ、見極めなきゃならんよなあ？」

おもむろに、小太刀の手入れを始めた士郎に、恭也は云々と頷き、美由希は彼氏の第一条件は強さだと理解し、桃子はそんな家族をにこにこ笑って見ていた。

同時刻、クロノがいきなりくしゃみをしたかどうかは不明だ。

「あと・・・小動物になって娘の部屋に入り込んでいた不埒者とも
OHANASIIしないとな・・・」

同時刻、ユーノが正体不明の寒気を感じたかどうかは定かではない。
友情とか儚いものである。

二人の明日は・・・・・・・・・・どっちだ（デッド・オア・
アライブ）？

「ただいまー」

「今帰りましたー」

とりあえずなのはとユーノが帰宅した。

「母さん・・・ジュエルシードを回収してきました」

フェイトの持つバルディッシュから、ジュエルシードが吐き出される。

その数は五つ、青い光が薄暗い室内を照らしだす。

時空の狭間、時の庭園の深部にあるホールだ。

そしてフェイトの正面・・・玉座にはいつものようにプレシアが座っている。

「・・・たつた五つ？」

「う、ごめんなさい」

いつもはクールで表情もあまり変わらないフェイトがしゅんとなる。怒られると思ったのだろう。

しかし、それを見たプレシアがフェイトに聞こえないくらいの小さな声でうつと呟いた。

「ま、まあいいわ！じ、順調に集まっているようだし・・・」

「か、母さん？」

褒められた事で、フェイトの顔がぱつと花咲く。

さっきまでの無表情とのギャップに、またプレシアが萌えそうになった。

「で、でもまだまだよ！！私の娘ならこのくらい！！そ、それにあの杖もまだ奪えていないじゃない！！」

思いつききよどつているというか、大声でいろいろなものを誤魔化そうとしているのが丸分かりだが、それを見抜けるほどの人生経験のないフェイトの目が潤む。

・・・ざ、罪悪感が！！罪悪感が胸に刺さる！！

プレシアさんも、内心でいろいろ大変そうだ。

「と、つとにかく今日は休みなさい！！こんなんじゃ全然足りないわ！！ちゃんと栄養のあるものを食べて英気を養いなさい！！」

「はい・・・」

とぼとぼとホールを出て行くフェイトの後姿を見送ったプレシアが深いため息をつく。

「な、なんであの子あんなに感情表現が豊かになったのかしら？」

ずっと人形として扱ってきたのに、笑っている顔とか泣いているかを見ていると、嫌が応もなく“あの子”を思い出してしまう。

・・・やっぱりあのルビーという杖のせいかな？

「それ以外に何かあるっているんだい？」

「そうよね・・・ってなあ！？」

てつきりひとりつきりだと思っていたところに声をかけられ、プレシアが見事にうろたえる。

見れば何時の間にかアルフが傍にいた。

いや・・・思えば最初からいたのだ。

フェイトがホールに入ってきたのを見ていたのだから、単純にどうでもいい相手と意識にも止めていなかっただけの事で、てっきりフェイトと一緒に出て行っただけだと思っただけだが、部屋にそのまま残っていたらしい。

その彼女が目丸くして自分を見ている。

「な、何よ？」

「いや、あんたもちゃんとリアクションとれるんだなって」「ぐつつ!!」

思いつき見られた。
ずつといたのだから当然だ。

「それにあんたってツンデレだったんだな？」
「がは!!」

思いつき吹いた・・・血を・・・。

「お、おい大丈夫かい？」

「だ、大丈夫!!」

「でもあんた血を吐いたぞ？」

「リアクションよりアクション!!」

苦しい・・・誤魔化し方が苦しいプレシアさん。

吐き出した血を拭いながら、なんとか冷静さを取り戻したプレシアがアルフを睨む。

「それで、駄犬が何のようなの？」

「駄犬言うな・・・なあ、もうこの辺りで辞めさせてくれないかい

「？」

アルフの申し出に、プレシアが眉をひそめた。

「もう無理だよ。時空管理局が本格的に動き出しているんだ。何とか先手を取って集める事が出来たけど、これ以上は無理だよ」

その意見は正しい。

今回フェイトが持ってきた五個は、時空管理局が本格的に動き出す前に回収できたものだ。

現に、あと二つ、フェイト達はジュエルシードの位置を掴んでいたが、先を越されてしまった。

設備、人員ともに向こうの方がはるかに上なのだ。

たった二人で対抗できる道理は存在しない。

「ダメよ」

プレシアが短く、あざけりの笑みを込めて、有無を言わせない返答をする。

それを見て聞いたアルフの血が一気に沸騰する。

「何だよ！？何でジュエルシードなんて集めないといけないんだ！？」

「命令だからよ」

「理由を言えって言ってるんだ！！」

「貴女ごときが知る必要なんてないわ」

悔しそうに、牙をむくアルフに対して、プレシアは自分の杖を向けた。

「駄犬が、主に噛みつこうっていうのかしら？」

「ふざけるな、アンタだってフェイトがどれだけ頑張っているのか
見ているはずだろう？」

「・・・・・・・・」

胸にチクリときた何かを、プレシアは無理やり押し込む。
今、そんな感傷に意味はない。

「それに、ジュエルシードはともかく、あの杖はいまだに私の前に
持ってこれないでいるじゃない？」

「う、だ、だからアイツは・・・」

「言い訳なんて聞きたくないわ」

もはや話す事はないと、プレシアはアルフに背を向ける。
これ以上煩くされては敵わない。

「どうしてだよ・・・あんた、フェイトの母親なんだろう？」

「・・・・・・・・」

声に答える気にはなれなかった。

答えてしまうと、さつきから胸にチクリチクリとくる何かに向き合
わなくてはならないから・・・その代り・・・。

「そうね、アルフ？別にフェイトじゃなく、貴女でもいいのよ？」

「え？」

「ジュエルシード、見つからないね」

「うん」

アースラの食堂で、お勧めのミルククッキーをポリポリ齧りながら、なのはとユーノが対面に座っている。

アースラに協力してすでに10日、最初の方でフェイト達に先行を許してしまい。

おそらくは五つ程のジュエルシードを先に回収されてしまった。

何とかなのは達が回収できたのが二個だ。

それ以来ぱったりと、ジュエルシードの反応もフェイト達の反応も観測されていない。

アースラのセンサーは、なのは達の感覚より鋭敏らしいので、本当に動いていないようだ。

「これだけ探してないとなると・・・地上にはもうないかもしれない」

「海の中って事？」

海鳴は海に近い町だ。

ジュエルシードが海に落ちた可能性は否定できない。

なのはとユーノの予想は、数分後に響いた警戒のアラームにもとに現実となる。

「艦長、こちらから地球の海にジュエルシード反応が、六個です。

ジュエルシード反応が一気に六個!!」

「エイミィ、その場所を検索して画面にだして」

「はい・・・出ます、これは・・・」

なのは達が駆け付けたブリッジは騒然としていた。

「フェイトちゃん!？」

正面、巨大モニターに映っているのはフェイトだ。
彼女がいるのはどうやら海上らしい。

しかもただ海の上を飛んでいるのではなく、六本の竜巻に周囲を取り囲まれていた。

同じ場所に、同時にこれだけの竜巻が発生するのは明らかに変だ。
自然現象の竜巻ではない。

「エイミィさん、何があつたんです!？」
「それが・・・」

エイミィがコンピューターを操作しながら説明してくれた。
どうやら、あの竜巻はジュエルシードによるものらしい。

なのは達と同じく、海の中に残りのジュエルシードが落ちたと、フェイトも判断したのだろう。

なので、以前にもやったように強制発動させてからジュエルシードを封印、回収するつもりだったようだ。

「なんとも呆れた無茶をする子だわ!」

「無謀ですね、明らかに個人の成せる魔力量の限界を超えている」

リンディとクロノの言うとおりだ。

いくら何でも一人でできる事では・・・一人？

「あれ?・・・アルフさんは?」

モニターをどれだけよく見ても、フェイトに付き従っていたあの魔狼の女性の姿がない。

主であるフェイトがピンチなのに、傍を離れているのか？

『きやー!ー!』

「つつ!!」

スピーカーから聞こえてきたフェイトの悲鳴に、疑問が棚上げされた。

モニターの中のフェイトは、風に舞う木の葉のように翻弄されている。

ただでさえ6個のジュエルシードを発動させるために魔力を放出したのだろう。

今のフェイトに魔力はどれだけ残っているのだろうか？

「あの!! 私達も急いで現場に・・・」

「その必要はない。放っておけば、あの子は勝手に自滅する」

「え？」

クロノの言葉に、なのはの頭が真っ白になる。

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「仮に、自滅しなかったとしても、力を使い果たした所を叩けばいい」

「でも!!」

「今のうちに、捕縛の準備を!!」

「了解」

なのはの訴えを無視して、クロノが指示を出す。

クルーがそれに従って動き出した。

「残酷に見えるかも知れないけど、私達は常に最善の選択をしないといけないの」

この艦の最高意思決定者であるリンディもクロノの意見を認めてし

まった。

これでは部外者のなのには何も言う事が出来ない。

『お話は終わりですか？』

重い空気をぶち壊したのはルビーだ。

いつもどおりの調子で、何も変わらずなのはそばに寄り添っている。

『では、フェイトちゃんを助けに行きましょうか、なのはちゃん？』

「え？」

「な!？」

ルビーの言葉に、なのはが聞き返し、驚きの声を上げたのはクロノだ。

「き、君は僕達の話聞いていなかったのか!？」

『ええ、聞いていましたよ？それが何か？』

「それが何かって・・・」

あまりにもあっさり返されて、クロノは二の句が告げられなかった。それはクロノだけではなく、ブリッジにいる全員が同じ思いだ。

『何故そんな不思議な顔をしているんです？元々、私達は互いの利害込みでの民間協力者でしょう？それが一致しなくなったのならハイサヨナラヨ』です。当然じゃないですかあゝ？そちらは存分に最善の選択をしてください。私達も私達の最善を目指しますのです』

こんな皮肉っぱいルビーを見るのは、長い付き合いのなのはも初めてだ。

「ルビーちゃん？何か怒っているの？」

『あはあく愉快痛快ルビーちゃんはカレイドランドのプリンセス。怒っちゃったら火山が噴火しちゃってますよ？』

・・・やはり何かおかしい。
しかし今は・・・。

「・・・行つていいの？」

『なのはちゃんの力は時空管理局の為にあるわけじゃないでしょう？誰かの涙を止める為の力です。今泣いているのは誰ですか？』

「そ、それは」

なのはの視線が、モニターに浮かぶフェイトをとらえる。

六つの竜巻に囲まれて、木の葉のように頼りなく揺れているフェイトの顔には苦悶の表情が浮かんでいた。

「私・・・フェイトちゃんを助きたいよ」

『GOOD』

「は、話を勝手に進めるな！！」

クロノが怒鳴るが、ルビーは意に介さない。

『手を伸ばせば救える人がいて、誰かを救いたいという思いがあれば行動する理由として十分です』

「そんなのはエゴだ」

『^{それ}エゴイストが魔術師ですから』

クロノの言葉はルビーに届かない。

『クロノ君、小利口にまとまり過ぎですよ？誰の遺志を継いだつもりか知りませんが、“借り物の正義”じゃルビーちゃんの説得は無理ですよ。何時か本当の信念にしてから出直してきて下さい』
「な！？」

『じゃなけりや理想に溺れて溺死しますよ。あはあ。これ一回言ってみたかったんですよ。』

いつものルビーに戻った？

クロノに反論する暇さえ与えない。

『さ。あ、行きますよなのはちゃん！ちなみに、ユーノ君はお留守番です』

「何で！？」

いきなりの仲間外れ発言が来た。

やーってやるぜ！！という顔をしていたユーノが涙目になる。

『なのはちゃんにも見せたことない、ルビーちゃんのちょっと良い所、本邦初公開！！巻き込まれたら素で死にます』

「・・・マジ？」

『大マジです』

ここまで断定するルビーも珍しい。

なのはが覚悟を決めてルビーの柄を左手で掴み、身の内の魔術回路を起動させる。

なのはからの魔力を受け取ったルビーからいきなり目のくらむ閃光が放たれ、納まったそこにはルビーとなのは達の姿はなかった。

「転移したのか？」

正面モニターの中に、フェイトに向かって落下するなのはの姿が映った。

「フェイトちゃん!!」

周囲のすべてを竜巻に囲まれ、強制発動したジュエルシールドを何とか封印しようとしていたフェイトは、背後にその声を聞いた。

「な、なのは!?!」

聞き間違えようがない位、何度も彼女の声を聞いた。

そして、多分ここに来るだろうと確信さえしていた彼女は・・・予想を裏切らなかった。

嵐の海の上、白いバリアジャケットを風にはためかせた彼女がいる。右手にレイジングハートを握り・・・。

『今回のルビーちゃんはとってもやる気ですからねー、やってやりますよ〜』

左手にはルビーを握っている。

いつもながらの口調で、本気でやる気があふれているのかは疑問だ。

「やれるの、ルビーちゃん!?!」

『なのはちゃん、フェイトちゃんをゲットしてください!!』

「わかった!!」

なのはが、ルビーの言ったとおりフェイトを抱き寄せる。

躊躇なく従ったのは、長い付き合いからルビーの本気を感じたから

だろう。

「な、何を!？」

「おとなしくしてフェイトちゃん!！」

右手でフェイトを確保すると、左手のルビーから間欠泉のような魔力が噴き出した。

『座標設定、ルビーちゃんを中心に半径200メートル』

「ル、ルビーちゃん? なんだか怖い位の魔力が集まってくるのを感じるよ!？」

右手に抱いたフェイトなんか、その魔力を見ただけで金縛りになっている。

それほどに強大な魔力量だ。

これがルビーの言う所の本気?

こんなふざけた魔力を何に使うつもりだ?

『気にしない気にしない。っと準備オツケーですよ、なぎ払っちゃってくださいーい』

「わ、わかった」

ルビーにとりあえず振れと言われ、とりあえずブンと水平に振り抜いてみる。

『第二魔法奥義! だーいざーんげーき!！』

「「え?」「」

なのはとフェイトが異口同音の声を漏らした。驚きによるものではない。

理解不能な事は、驚きではなく思考停止を誘発する。

要するに、なのは達はあっけにとられた。

彼女達が見た物は、たとえ誰であろうとあっけにとられるに足るものだったのだ。

「世界が、ずれた？」

茫然と・・・その超常現象を成す手伝いをしたはずのなのはがつぶやく。

一瞬ではあったが、視界がルビーが振られた線をなぞる様に、上下がずれたのだ。

瞬きよりも早く、ずれは元通りになったが、決して見間違いではない。

そして夢でもない。

その証拠に、天を突くほどに荒れ狂っていた六本竜巻・・・そのすべてが断ち切られていた。

魔力ごとである。

『さあなのはちゃん、フェイトちゃん？封印ですよ』

「う、うん」

「はい」

ルビーの言葉で、なのはとフェイトははっとして、自分のやることを思い出した。

あわててなのはがフェイトを開放すると、自分の魔力でフェイトが空中にとどまる。

二人は揃ってレイジングハートとバルディッシュを構えた。

「行くよフェイトちゃん」

「う、うん」

二人の封印魔法が放たれる。

先ほどまで、あれほどの猛威を奮っていた六個のジュエルシードは、驚くほどあっさり封印された。

なのはとフェイトの中間に、六個のジュエルシードが浮かんでいる。

「ル、ルビーちゃん？今の何？」

封印を確認して、ため息をついたなのはがルビーに説明を求めた。ジュエルシードより、今はルビーが何をしたのかの方が気になる。

『第二魔法の応用で、ちょっとだけ空間をずらしました』

第二魔法は並行世界の運営、つまり空間に影響を与える魔法である。

これの応用で任意の空間を設定、ちょっとだけずらしてやっただけだ。

空間そのものは、世界の修正力が瞬時に復元してしまうが、そこにあった物は世界のずれに分かたれたまま残る。

いわば空間のギロチン、世界その物を武器とするのがルビーが発動した力の正体・・・確かに、これは巻き込まれば死ぬしかない。ジュエルシードの竜巻を一閃した所から、魔力すらもその運命から逃れられないだろう。

プロテクションすら無意味という事は、防御不可能という事だ。

以前、ルビーは自分が本気を出せば海鳴が真つ二つになるといった。なるほど確かに、この能力は切れないもののない究極の剣・・・。

『なのはちゃん？』

「は、はい？」

ルビーの力の一端を目にして呆けていたなのはが呼びかけられて現実に戻ってきた。

『ルビーちゃんの事が怖くなりましたか？』

「うん・・・少し・・・」

それは偽りないなのはの本心だった。
ルビーはともかく、あの力は怖い。

『それでいいんです。それでこそなのはちゃんです』

「な、なんでそんなに嬉しそうなの？」

『怖い物を態々使う人なんていないでしょう？さあ、前座はこのくらいにして、まずはフェイトちゃんとの決着ですよ』

「うん、わかった」

なのはは頷いてレイジングハートを、フェイトはバルディッシュを構える。

「・・・いいの？」

「え？」

「あの子を使わなくて？」

フェイトがちらりとルビーを見る。

ルビーの使った魔法・・・あんなでたらめな魔法を使えば、勝ちは揺るがないだろう。

だが、なのはが手に持っているのはレイジングハートだ。

「うん、でも・・・それだとルビーちゃん的能力でなのはの力じゃ

「ないから・・・」

「・・・」

「フェイトちゃんには、なのはが向かい合いたいの」

「そう・・・」

言葉が尽きた。

元々、言葉だけで済まないお互いが理解している。

決着をつけずに、二人の関係は前に進む事が出来ない。

「「え？」」

それに気がついたのは二人同時だった。

頭上にいきなり現われた強大な魔力、空から光の槍が降ってくる。

一直線になのはとフェイトに向かって・・・それはあまりにも巨大で強力な砲撃・・・しかし、それに気がついたところで、すでに避けるには遅すぎた。

「母さん？」

フェイトのつぶやきを飲み込んで、光る黄金色の魔力が弾けた。

『だれですか？なのはちゃんとフェイトちゃんにおいたする悪い子は？』

しかし、砲撃が二人を焼くことはない。

なのはには、彼女の危機を黙って見ていない守人が常に傍にいる。

ルビーがなのはとフェイトに迫ってきていた砲撃を、魔術の結界を展開して受け止めていた。

強力な砲撃を、同等以上の強大な魔力が受け止めている。

「ルビーちゃん」

『なのはちゃん・・・ってえ?』

「え?」

なのはの見ている前で、砲撃を受け止めきつたルビーが光る輪に捕らわれた。

・・・バインドだ。

「アルフ?」

「つつ!?!」

フェイトの茫然とした声になのはが反応する。

彼女の視線をなぞっていくと、ルビーに手を向けているアルフの姿が見えた。

姿を現さなかったというのに、ここにきて不意打ちを仕掛けてきたのか?

「悪いね、あんたに恨みは・・・結構あるが、これもフェイトの為なんだよ!?!」

バインドだけじゃない。

アルフは並行して、別の魔術を発動させようとしている。

「転移魔法だ!」

「クロノ君!?!」

何時の間にか、クロノが姿を現していた。介入のタイミングを計っていたようだが、緊急事態でアースラから出張ってきたらしい。

「そいつはルビーを何処かに飛ばそうとしている!!」
「つつ!!ルビーちゃん!!」

クロノの言いたい事を理解したとたん、なのははルビー目掛けて飛んだ。

すでに、ルビーの下には魔法陣が発生している。
あれが転移の魔法だろう。

「ルビーちゃん!!」
『なのはちゃん!?!』

バインドで拘束されたルビーは動けない。
なのはは必死で手を伸ばす。

その伸ばした手の先で・・・なのはの瞳に映るルビーの姿がかき消えた・・・なのはの手は、何もつかめずに空を切った。

第十六話 主人公退場？（後書き）

今回の更新が今年最後になります。

次回の土曜日は元旦ですから、なので今年を振り返って。

えゝまずなんで今だに書き続けているんでしょう？

年末までには終わらせて、今頃エース編の構想を練っていたはずなのに・・・とりあえず少なくともあと4話はかかるのは間違いないですね。

当面の終わりは見え始めています。

また伸びるかもしれませんが、とりあえず予定としてはそんな感じですよ。

そんなこんなでみなさんよいお年を。

第十七話 抑止降臨

月村すずかは自他共に認める大人しい子である。体育以外は基本的に目立たない、なのはを中心にリーダーシップをとるアリサの対極みたいな女の子だ。

「はあ・・・はあ・・・」

そんなすずかが珍しくも焦っている。

彼女が走っているのは、巨大戦艦という漫画やアニメにしか登場しないような場所、誰もが目を剥くだろう。

しかし、今の彼女にはそんなもの目に入らない。目につこうがどうでもいいとばかりにただひたすらに目的の場所を目指している。

「なのはちゃん・・・」

やがて、聞いていた部屋の扉を見つけ、自動で扉が開くのももどかしく中に飛び込む。

「・・・すずかちゃん？」

探し人はすぐに見つかった。

隠れる理由もない彼女は、開いた扉の先にちゃんといってくれたのだ。呼びかけの返事が返って来たことにほっとするが、そんな安堵はなのはの姿を見た瞬間に霧散して、再び焦りに取って代わられる。

「なのは・・・ちゃん？」

なのはは泣いていた。

彼女が泣く所など、すずかも初めて見る。

アリサと喧嘩をした時だって、なのは泣かなかったのに……。

「なのはちゃん!!」

「ぶきゅ!!」

思わず駆け寄る途中で、クリーム色というかそんな感じの何かを吸血鬼の身体能力で轢いてしまったような気がする。

しかも悲鳴まで聞いた気がするがそんなものは後でいいだろう（断定）

今のなのはの状態は良くない、危ない。

すずかは本能的な危機感に従って、なのはを抱きしめた。

「すずかちゃん……ルビーちゃんがなくなっちゃったの……」

「つつ!?!」

微妙になのはの焦点が合っていない。

目の前にいるすずかを見ているようで見ていないようなそんな目をしている。

……事情は呼び出された時に聞いている。

ルビーが誘拐……と言っているのかどうか迷うが、連れ去られたのだという。

そのため、なのはが不安定になってしまい。

少しでもなのはに近い者をと、月村の家に連絡を取り、すずかがここに来たというわけだ。

しかし……なのはの状態はすずかの想像を超えていた。

「なのは、大丈夫か!?!」

「怪我とかない!?!」

恭也と美由希が遅れて到着する。

全員がなのはの事を心配して駆けつけて来て・・・ずずかと同じように、なのはを見てショックを受ける。

魂が抜けたような・・・そう評するのが正しいだろう妹の姿に・・・友達とはいえ他人のすずかがこれだけショックを受けているのだ。家族の心痛など、どれだけ想像しても足りないに違いない。

「高町士郎さんですね？」

背後からかかった声に、全員が振りかえる。

そこにいたのはライトグリーンの長髪の女性と、全身黒ずくめの少年だった。

「この艦の艦長、リンディ・ハラウンです」

「執務官のクロノ・ハラウンです」

名前に聞き覚えがある。

ルビーから聞いた時空管理局の現場責任者と、実動の魔導師・・・話には聞いていたがやはり若い。

「高町士郎です」

「桃子です」

士郎と桃子が名のり返して頭を下げる。

リンディとクロノもそれに習った。

「申し訳ありません。事情をご説明したいのですが？艦長室まで？」
足労いただけますか？」

「わかりました。恭也、美由希？なのはを頼むぞ？」

「わかつている」
「大丈夫だよ」

子供たちの返事に頷き、リンディに促された士郎と桃子が部屋を出て行く。

なのはの事も心配だろうに・・・二人の背中を子供達が見送った。

「ところで、なんでボロ雑巾になっているんだユーノ？」

「そんな所にいたら踏んじやうよ？」

「うっ、僕は要らない子なんだ・・・」

最初にすずかに轢かれ、そのまま放置されて誰にも気付かれなかったユーノは目の幅涙を流していた。

「そうですか・・・」

リンディの例の部屋で、ルビーが奪われた事情を聞いた士郎は溜息とともに頷いた。

「そしてジュエルシードも？」

「ええ・・・残念ながら・・・」

あの時、なのはとクロノは奪われてゆくルビーに気を取られていた。しかも、ルビーのいた場所とジュエルシードの場所には距離があった事・・・ルビーが目の前でさらわれたことに茫然とするのはは勿論、それに気を取られたクロノの隙についてアルフが六個のジュエルシードを回収、逃亡を許してしまった。

ジュエルシードは、現在半数以上がフェイト達に奪われたことにな

る。

「お預かりしていたお子さんを・・・申し訳ありません」

「艦長！！」

畳に深く頭を押し付けて謝るリンディにクロノが声を上げる。

「今回の事は明らかに彼等の失敗です。艦長が謝る理由はありませんん！」

「静かになさいクロノ、そういう問題ではありません。貴方にはまだわからないでしょうけど・・・」

リンディはクロノの言葉を見捨てて頭を下げ続ける。

ここでそんな理屈を持ち出せば、少なくとも親などとは名乗れない。

「僕達は止めたのに、それを無視したのは彼らです！！」

それを理解するのは、まだクロノには無理のようだ。

彼がもう少し人生の経験を積むか、人の親になれば理解できるかもしれないが・・・どちらにしろ早すぎる。

「クロノ君といったね？」

尚も言い募ろうとするクロノに、士郎が声をかけた。

それに反応して、士郎を見るクロノの視線が多少きつくなる。

「・・・はい」

「君にひとつ聞きたい事があるんだが・・・」

軽く興奮しているクロノを落ち着けるため、士郎は努めて穏やかに

話しかける。

それが功をそうしたのだろう。

クロノに多少の冷静さが戻ってきた。

不機嫌を隠せていないが、話に耳を傾けてはいる。

「君はフェイトちゃんを殺す気で命令を出したのかい？」

「な！？」

これは流石に予想外だったらしい。

クロノがあわてている。

隣のリンディも顔を上げて目を丸くしていた。

「いや、話を聞く限りにおいて、フェイトちゃんはそのままだらうよ。大怪我、かなりの可能性で死んでいたかもしれないと思うのだが？」

「それは・・・」

確かにあの状況では、命の危険もあっただろう。

暴走したジュエルシード六個のど真ん中にいたのだ。

魔導師でなかったら、間違いなく死んでいた状況だ。

「なのは達から話を聞いたのならわかるだろう？あの子は利用されている側の人間だよ？」

「し、しかし！あの子を助けに行くことで、僕達にも少なからない危険があった！！僕は執務官として、あの時の判断には自信を持っています！！」

「君の中で、時空管理局や執務官という肩書は人を傷つける理由になるのかい？」

「な、侮辱するんですか！？」

クロノが立ち上がり、士郎を睨みつけてくる。
だが、睨まれている士郎はただじっとクロノを見返したままだ。

「・・・人の上に立つ以上、そう言う判断が必要になる場面もある
だろう。・・・しかしだ」

士郎はじっとクロノを見ている。
見られているクロノは金縛りにあっていた。
母親である二人の女性は、男同士の語りあい介入する事なく見守っている。

「それでも君は、人殺しになりかけたんだ。それは自覚しなければ
ならない」

「つつ!？」

クロノから反論は来なかった。
と言うより出来なかったようだ。
口はあいているものの、声が出てこないらしい。

「だから、僕の正義は借り物だと言いたいんですか・・・？」

やっと、苦しげな声が漏れ出た。

「借り物？」

「あいつが言ったんです。僕の信念は借り物だって・・・」
「なるほど・・・ルビーちゃんらしいな」

士郎がふっと笑った事で、クロノの金縛りが解ける。

「あの子は、君が自覚もなく人を殺してしまったら、いずれその矛

盾に行き当たった時、自分の手にこびりついた血を見て君が壊れるかもしれないと心配したんだろう」

「つつ!?!」

「ルビーちゃんはああ見えて、私達より子煩悩だよ?」

それは、長い間を戦いの中に生きてきた男の言葉だった。

たとえ彼の半生を知らなくても、言葉ににじみ出るものはクロノに伝わる。

桃子もクスリと微笑んでいた。

フェイトは勿論、もし彼女を救えなかったら、なのはの心には確実に傷が残る。

ルビーはさらにクロノの事までも考えていたという事か?

「君が全て間違っていたわけじゃないと思う。ただ、それが正しいからと言って、それが犯罪者だからと言って、簡単にあきらめていいほど命つてもものは軽いものかな?」

「・・・すいません、失礼します」

それだけ言うと、立ち上がったクロノは振り返らず部屋を出て行った。

扉が閉まり、彼の背中が見えなくなった事でやっと三人は息を吐く。

「すいません、部外者が生意気な事を言いました」

今度は、士郎がリンディに頭を下げる番だった。

「頭を上げてください。高町さん」

「はい」

リンディの言葉に、士郎は素直に従う。

「クロノの事、ありがとうございます」

「いえ・・・いずれは彼自身が自力で気付く事になっていたでしょう。私は余計な事をしただけです」

「ダメですね、女親はこういいうとき何と言ってやればいいのか分かりません。どう教えたなら良かったのかも分からないんです」

「彼の父親は・・・」

「はい、同じ局員で執務官でしたが・・・殉職して。ルビーちゃんがクロノに誰の遺志を継いだつもりなのかと聞いたとき、真っ先に夫の事を思い出しました」

リンディの目が遠くを見ている。

おそらく、今は亡き夫を見ているのだろう。

「リンディさん？」

そんなリンディに桃子が声をかけた。

「良い人でしょう？」

「ええ、本当にいい旦那さんですね？」

「ぶっ!!」

いきなり自分ネタで惚気られた土郎が吹いた。
年甲斐もなく赤くなってしまう。

「あげませんよ？」

「あらあら、それは残念」

桃子とリンディの間で、一瞬ではあったが確かに空間がゆがむほど重い重力の塊が発生したのを、土郎は見て震えあがる。

寿命ががりがり削られて行っている気がするが、ナメツク星の神龍なら縮んだ寿命をサービスしてくれるだろうか？

『ムムっ！？きゅぴーんときましたよ！！』

「どうしたのかしら？」

『今・・・今何かとつても弄りがいの有りそうな状況が発生したような気がしたのですよ！！くっ、がつでーむ！！ルビーちゃんとおるう者が何にもできなかったなんて！！』

「何か良く分からないけど、自分をほめたい気分よ。すごくいい事をしたような気がするわ」

『しかも続けてひどい事を言われた気がします！！』

「それはなぜか自業自得な気がするわね」

プルプル震えるルビーを、冷めた目が見ている。

紫の長髪に、扇情的な紫のドレス・・・プレシアだ。

「そろそろ本題に入りたいんだけどいいかしら？初めまして、私の名前はプレシア・テストロッサ」

『これはご丁寧にくるビーちゃんの事はルビーちゃんとお呼びください。フェイトちゃんのお母さん？』

フェイトの母親という言葉が出たとき、プレシアの表情が一瞬ではあるが確かに変わった。

それにルビーが気付かなかったとも思えないが、追求する気はないようだ。

「ごめんなさいね、乱暴なご招待をしてしまって」

『いえいえ、お気になさらずにくるビーちゃんも、フェイトちゃん

のお宅訪問に突撃する手間が省けましたから〜あはあ〜」

豪華な椅子に座っているプレシアが妖艶に微笑みながら、ルビーを気遣う言葉を“鳥籠”の中にいるルビーに掛けた。

ルビーの現状は、絵に描いたような囚われの身という奴だ。

「・・・少なくとも、主が客人をもてなすといった風ではない。

当然、鳥かごには魔力を封じる機能が付いている。

そうでなければルビーが大人しくしているわけがない。

『いえいえ、逃げるつもりなんかありませんよ？王子さまに助け出されなきゃ何のためのお姫様ポジションですか？ピーチ姫とか、それとピーチ姫とか、後はそうですね〜ピーチ姫とか？』

「そ、そうね・・・」

お姫様の存在意義に悪者にさらわれて助け出されるシチュエーションが含まれるかどうかは疑問だとプレシアは思う。

後、ピーチ姫ばかりだな・・・桃姫って誰？とも思っていた。

『それにプレシアさん？とはお願いしたい事がありましたから』

「そう？奇遇ね、私もあなたとお願いしたい事があったのよ」

プレシアがにやりと笑った。

どうやらここからが本番らしい。

場の緊張が高まる。

「その前に、貴女はどういう存在なのかしら？デバイスでは無いのでしょうか？別の世界から来たマジックアイテムさん？」

『・・・初めてですね〜魔導師の人でルビーちゃんをデバイスと呼ばない人は』

「管理局のボンクラどもと一緒にしないでもらいたいわね？」

プレシアがルビーを見る目に熱がこもっている。
恋のそれより熱い視線・・・例えるなら、砂漠に迷った旅人がオアシスを見つけた瞬間のような、そんな心から求めていた物をついに手に入れた人間の目だ。

その感情の名を・・・渴望という。

「貴女の力を私に貸してほしいの」

冗談やごまかしを入れる余地など微塵もなかった。
それは有無を言わせない圧力を内包していながら・・・どこか懇い願う言葉にも聞こえる。

『・・・ごめんなさい。ルビーちゃんのマスターはなのはちゃんだけです』

ルビーは正直に否と答えた。
油断させるという手もあるし、ルビーがその程度の事を思いつかないわけがない。

しかし、一人の人間の真摯な願いに対して、ふざけた答えを返すほど、ルビーは腐っていない。
これはルビーなりの真摯な態度だった。

「そう・・・道具の性かしら？主に操を立てているの？」

プレシアの瞳が一瞬で凍った。
すでに、ルビーをただの物としか見ていない。
交渉は決裂したようだ。

「考え直す気はないかしら？・・・これでも、私は最高クラスの魔導師なのよ？あんなひよつ子の魔導師なんかより、余程貴女を上手く使ってあげられると思うのだけど？」

『プレシアさんでは不可能です。ルビーちゃんを使う事が出来るのは、この世界でなのはちゃんだけです』

プレシアの顔が怒りで赤くなる。

ここまで決定的に拒絶されるとは思っていなかったのか？それとも、魔導師としてのプライドに傷がついたからか？

・・・おそらく両方だろうという気はする。

「・・・マスターの設定を、あの子から私に切り替えてくれればいいのよ？」

『そんな事をして、プレシアさんにルビーちゃんは使えません』

「言うわね・・・貴女を分解して言うなりになるように組みなおす事だって・・・」

今度は脅迫できた。

プレシアはどうあってもルビーの力を手に入れたらしい。

『出来ないんでしょう？』

だが、ルビーの返事は冷静だった。
くっつとプレシアの声が詰まる。

それは、ルビーの言葉の肯定に繋がる。

『もしそんな事が出来るんなら、最初からルビーちゃんとお話しようなんて思わないはずですよ？』

もし、プレシアに言葉通りの事が出来るのなら、こんな回りくどい話などせずにさっさとやっているだろう。

プレシアからは、そのくらいの事では躊躇わない本気を感じた。

それをしないのは、ルビーがデバイスではなく礼装だからだろう。

流石のプレシアにも、礼装を扱った経験はあるまい。

下手に弄って、ルビーの持つ本来の能力に不具合を起こすことを恐れたのだ。

だから、ルビーの自主的な協力を求めていると考えれば、ルビーに交渉を持ちかけてきたことの話は通る。

『ルビーちゃんに何をさせたいんですか？』

「・・・協力を約束してくれないのなら話すわけにはいかないわね？今度は貴女の番よ？貴女のお願いとは何かしら？」

プレシアが、話の方向を変えてきた。

このままでは平行線のままだと気がついたのだろう。

ルビーのお願いからアプローチをかけるつもりのようにだ。

『プレシアさん、ジュエルシードを使わないでください』

「・・・何故？」

『何に使うつもりか知りませんが、危険です』

プレシアの目が細くなる。

「ストレートな物言いね、確かに貴女のマスターのいるあの世界も、場合によっては危険になるのだから仕方・・・」

『いえ、危険なのはプレシアさん？貴女ですよ』

「え？」

『もし、貴女が行う事で次元震が起これば・・・そしてもし、

本当にそれが世界が滅ぶような代物だったら・・・」

ルビーが言葉を切ると、今までにない重い空気がのしかかってくる。我知らずプレシアも唾を飲んだ。

「貴女は死にます。逃れ得ない形をとった死が、貴女の前に現れるでしょう」

「・・・何だ、その程度の事？」

拍子抜けしたと、プレシアから力が抜けた。

「プレシアさん・・・今回のルビーちゃんはマジです。冗談でも嘘でもありませんよ？」

「そんな事は、“私”にとっての脅しにはならないわよ？・・・気づいているんでしょう？」

「・・・」

ルビーが、おそらくは初めて言葉を失った。

今度はその沈黙が、ルビーがプレシアの状態を理解していることを肯定してしまう。

それに満足したのか、プレシアが玉座から立ち上がった。

「死ぬ事が決まっているのなら、後はどうやって死ぬかでしょう？・・・私はあきらめないわ、貴女に自主的に協力させる方法はいくらでもあるのよ？」

「なんと！？王の力は貴女を孤独にしますよ！？」

「・・・王の力？何それ？」

「いえ、何でもありません。聞き流して下さい」

滑ったギャグの説明ほど気まずい物もなからう。

自信があつたりしたら泣きたくなる。

ともあれ、どうやらこれで話は終わりらしい。

ルビーに背を向けて、プレシアが部屋を出て行く。

『プレシアさん？フェイトちゃんの母親として、それでいいんですか？』

「・・・あの子は、お人形よ。娘ではないわ」

扉が閉じて、プレシアの姿が見えなくなる。

重い音は拒絶そのものにも思えた。

『やれやれ、プレシアさんは魔導師より、どっちかと言うと魔術師わたしたちに近い気がしますよ〜ギャグが通じません〜』

・・・そう言う問題なのか？

つーか今のは確実にルビーの一人自爆だろう。

『ってあああ！！』

そしていきなり絶叫。

『「時代が彼女を求めているのよ」って台詞を言ってもらったのを忘れてましたー！！』

それはずっと忘れていた方がいい事じゃないだろうか？

何所まで行っても、ルビーの本質が変わる事はないのだろう。

「犯人の目星がついた」

アースラの艦橋に全員を集め、開口一番クロノが口火を切った。
今回は高町家の全員が参加している。

なのはも・・・まだ青い顔をしているが気丈にも参加していた。
左右のユーノとすずかが、心配そうになのはを見ている。

「プレシア・テストロッサ・・・名前だけは昨日ぐらに出てきたんだが、フェイト自身の戸籍がないことから今回の件の大元か判断ができなかったんだ。だがさっきの攻撃の魔力波動が登録データと一致したことからようやく確証を得られたというわけだ」

なのはとフェイトにはなたれた、次元を超えて打ち込まれてきた魔力砲は、同時にアースラにも放たれていた。

その直撃を受けたアースラは、現在エンジンその他の機関に障害が出て動けないでいる。

これだけでも、彼女が卓越した魔導師であることを察するのはた易いだろう。

「専門は次元航行エネルギーの開発、偉大な魔導師でありながら、違法研究と事故によって放逐された人物です」

「違法研究・・・まさか・・・ルビーちゃんも違法研究に？」

「・・・うん」「・・・」

なのはの疑問に、この場にいる全員が首をかしげた。

「ルビーって何もしなくても違法っぽいんだけど、今更？」

「アイツ、妙な能力を持っているからそれを狙って？」

「でも、ルビーちゃんが本気を出したのはついさっきの事なんだよ？行動が早すぎない？」

ジュエルシードだけなら話はわかりやすい。

しかし、そこにルビーまでが加わるとなると、とたんに相手の意図が読めなくなる。

長い時間共にいる高町家のメンツにも理解できない部分の有るルビーだ。

考えられる可能性が多すぎて絞りきれない。

何もかもできそうな気がするだけに・・・そう言う意味では性質が悪かった。

「艦長!!」

思考に行き詰まった場を、エイミイの緊張した声が砕く。

「どうしたの!？」

「レーダーに転移魔法の反応が来しました。魔力の波長から、フェイト・テストロッサのものと確認!」

「フェイトちゃんか!？」

「場所は・・・海鳴市の海上、ジュエルシードが発動していた場所です!!」

それを聞いた瞬間、なのはは転送ポットへ向かって駆け出していた。

アースラのセンサーが感知した通りの場所に、二人分の人影があった。

数時間前の嵐が嘘のように静まった海上に浮かんでいるのは、フェイトとアルフだ。

「うっ・・・ったく、プレシアの奴!どう言うつもりだい!？」

「どうやら、ここにいるのは彼女達の意味ではないようだ。
アルフの悪態からして、プレシアの仕業のようだ。」

「アルフ、大丈夫？」

「すまないね、フェイト」

アルフはフェイトに支えられていた。

良く見れば彼女は、魔力によるものだろう火傷のような傷を負っている。

「母さん、なんで・・・」

フェイトもまた、アルフと同じ疑問を何度も反芻していた。

何が起ったのか理解できない。

フェイトとアルフは、プレシアに確保したジュエルシードを渡した後、ジュエルシードの嵐の中で負った傷を癒していた。

そこにいきなりプレシアが現れたのだ。

プレシアはいきなり安静にしていたフェイトの腕を掴み、文句を言うアルフを力尽くで黙らせた。

アルフのダメージはその時のものだ。

そしてそのまま目を丸くしているフェイトとアルフをまとめて転送ポットに放り込み、この場所に転送してのだ。

何を考えてこんな事をしたのか、本当に理解できない。

「と、とにかくこの場を離れよう。時空管理局の連中が来る」

「う、うん」

「フェイトちゃん!!」

アルフの言葉に頷くフェイトだが、行動に出るより早く声が来た。

しかも、今一番会いたくない人物の声だ。

「なのは・・・」

見下ろすなのはの視線の先に、アルフを支えながら宙に浮かんでいるフェイトがいる。

彼女の視線が、なのはを見て揺れているが、今のなのはにその思いを察してやる精神的余裕はなかった。

「フェイトちゃん！何でなの！？ルビーちゃんはフェイトちゃんも助けてくれたんだよ！？それなのに、卑怯だよ！！」

「そ、それは・・・」

「あ、あれはあたしがやったんだ！フェイトには関係ない！！」

答えられないフェイトに代わって、アルフが弁明してきた。

こつちも、まともになのはを見ようとはしていない。

いや、実行犯である彼女は罪悪感から見れないのか。

「何のために！？」

「それはあたしも・・・」

本当にすまなさそうに、言葉が尻すばみになる。

本気で知らないのか？

『それはね、お嬢ちゃん？私が彼女に会いたかったからよ？』

「「「つつ！？」」」

いきなり、空間にモニターのような映像が現れた。

「誰？」

見覚えはない。

紫色の長い髪に妙齡、あるいは熟女と言つべき女性だ。

「母さん」

「え？」

反応したのはフェイトだ。

モニターの女性を見て、母さんと呼ぶやいたという事は……。

「フェイトちゃんのお母さん？」

『いいえ、違うわ』

帰ってきたのは否定の言葉だった。

困惑しているフェイトの事を見もしない。

・・・本当に母親では無いのか？

それでいて、なのはを見て妖艶に、でもどこか危うい笑みを浮かべている。

そんな二人の様子に、なのははついて行けずにおろおろと視線を彷徨わせた。

『人形の事なんて気にしなくていいのよ。なのはさん？』

「に、人形？」

『フェイト、貴女の事よ？』

「え？」

フェイトの口から疑問詞が漏れた。

「プレシア・テストロッサ、時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃の容疑で貴女を逮捕します」

なのはの傍に、クロノとユーノが遅れて転移してきた。それに対して、プレシアが分かりやすい不快の表情になる。

『これからがいい所だったって言うのに、無粋ね？話の腰を折るなんて礼儀を教わらなかったのかしら？』

「ロストロギアだけでなく、他人のデバイスを誘拐した人間がどの口でふざけた事を言う？」

『反論できないのが悔しいわね』

罵倒されてもプレシアは余裕だ。微笑むことができる程度には。

「観念しろ、彼女の転移フェイトと通信の魔力をたどってその場所の特定はできた。逃げられないぞ！？」

『逃げるなんて、私は旅立つのよ。そんな後ろ向きな言い方をしないでほしいわ』

「何を言って・・・」

『フェイト、最後に貴方にはいいものを見せてあげる』

プレシアが、クロノを無視してフェイトに話しかけた。

訳が分からず、不思議そうな顔をしているフェイトを見て、ニヤリと笑ったプレシアが横に避ける。

「……………つっ！？」

全員が息をのんだ。

プレシアの影になって見えなかった物・・・それはガラス製のポツドだった。

『もう良いの、終わりにするわ、この子を亡くしてから暗鬱な時間も、この子の身代わりの人形を娘扱いするのも』

ポツドの中には人間が入っていた。

なのは達よりも幼い少女だ。

全裸で水に浮かんでいる姿は眠っているようにも見えるが・・・おそらくあれは死んでいる。

そして何より、少女の顔は・・・。

「わ、私？」

『いいえ、違うわフェイト。この子があなたなんじゃない。貴方がこの子に似せて作られた人形なのよ。間違えるなんて本当にダメな子ね』

プレシアは愉快そうだ。

何所が笑うべき所だったのか、クスクスと笑っている。
どうしようもなく寒気のする笑い方だった。

『折角、アリシアの記憶をあげたのに・・・そっくりなのは見た目だけの、役立たずでちっとも使えない・・・私のお人形』

『クロノ君？』

エイミィからの通信が入って、あっけにとられていた子供達に少しの冷静さが戻ってくる。

『最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テストロッサを亡くしているの』

「つまり・・・あの子がアリシア・テストロッサなのか？娘の遺体を保存していたのか？」

『多分そう・・・そしてね、彼女が最後に行なっていた研究は、使い魔とは異なる・・・・・・使い魔を超える人造生命の生成』

「ホムンクルス？」

なのはが茫然とつぶやいた。

『そして、死者蘇生の秘術・・・ フェイト って名前は、当時彼女の研究に付けられた時のコードネームなの』

『よく調べたわね』

黙ってエイミイの説明を聞いていたプレシアが、愉快そうに言った。

『そうよその通り。でも、駄目ね。全く上手くいかなかった』

スクリーンの中のプレシアの目は、物を見るそれだった。

『作り物の命は所詮作り物、失ったものの代わりにはならないわ』
「フェイト!？」

ふらりと墜落しそうになったフェイトの体を、アルフが受け止める。プレシアに視線を向けられたフェイトが、アルフの腕の中でガタガタ震え出した。

『アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我儆も言っただけ、私のいう事をとてよく聞いてくれた』
「やめて・・・」

思わずなのはの口から声が漏れた。

今すぐに、プレシアの口を閉じたい。

『アリシアは、いつでも私に優しくかった。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者よ。せつかくあげたアリシアの記憶も、あなたじゃダメだった』

「やめて・・・やめてよ!!」

『アリシアを蘇らせるまでの間の、私が慰みに使っただけのお人形、もう必要はないけれど、でも最後に私の役に立って頂戴』
『そこまでです!!』

なのは達が脱力している間に、もう一つのスクリーンが展開された。

『また邪魔するの？本当に時空管理局は話の腰を折るのが上手いからね？』

『子供がいじめられているのを見れば、当然の行動と思いますが？時空管理局所属艦アースラ艦長、リンディ・ハラOWNです』

映っているのはリンディだ。

これ以上は見えていられないと、出張ってきたのだろう。
確かにここから先は大人の仕事だ。

『初めまして、プレシア・テストロッサよ』

リンディの名乗りにプレシアが答えた。

プレシアも、話の相手をリンディに切り替えたようだ。

『貴女がいる場所にはすでに突入隊が向かっています』

『御苦労さま、でも捕まらないと思うわよ？』

『・・・ルビーちゃん？』

全員がはつとする。

結局、ルビーをなぜ必要とするかの理由はまだ明かされていないのだ。

『察しがいいわね、彼女には道を開いてもらいたくてご招待したのよ』

『道？』

『伝説のアルハザードへの道を』

『「「な！？」」』

皆が驚愕の表情になる。

反応出来なかったのはなのはただだ。

「ユーノ君、アルハザードって何？」

「忘れられた都とも呼ばれている、ずっと昔に滅んだって言われている御伽話の世界だよ」

『アルハザードは存在しているわよ。ぼーや？』

返事を返されるとは思っていなかったユーノがびくつとなる。

「な、なんでそんな断言ができるんだ？」

『証拠があるもの』

「証拠！？そんなまさか！！」

ユーノが信じられないという顔になっている。

今の心境を例えるならば、トロイア戦争の实在を証明された時の考古学者たちの心境だろうか？

「え？ルビーちゃん！？」

スクリーンの中に現れた見覚えのある姿に、思わずなのはが叫ぶ。

『あ、なのはちゃん』

いつもと変わらないルビーの調子に、空中だというのになのはをはじめ、一同ずっこけた。

心配ないとは思ってはいたが、ここまで気楽に返されると来るものがある。

『私は彼女を見た瞬間に確信したわ、アルハザードは存在するんだって』

プレシアは陶醉しているかのような顔になる。

『貴方達は何故気付かなかったの？魔法陣を展開させることなく、自力で魔法を使えるこの子の力はミッド式でもベルカ式でもない』
『それがアルハザードの魔法だ？』

リンディの問いにプレシアが頷く。

確かに、ルビーの使うそれは魔導師達の知らないものだ。
アルハザードのそれと違うかどうかは誰にも分からない。

『アルハザードってなんですか？』

話の中心にいるというのに、ルビーが一番話について来れていない。

『そうね、貴女達は自分の世界をアルハザードなんて呼んでいないのかもしれない。なら一つだけ教えてくれないかしら？貴女の世界には死んだ人間を生き返らせる技術は存在しているのかしら？』

『ばかばかしい』

プレシアの言葉を、吐き捨てるように否定したのはクロノだ。

「そんな事、出来るわけがないだろう！？そんなのは奇跡の領域だ」

「え？魔法にはできないの？」

「・・・何？」

思わず聞き返したクロノが見たのは、キョトンとした顔をしているなのはだった。

魔法と魔術・・・二つを比べたとき、破壊力という面では、一部の常識はずれを除いて圧倒的に魔法の方に軍配が上がる。

しかし、バリエーションという意味では魔術の方が上なのだ。

それは魔術師達が、根源に至る為に様々な方法を模索してきたからに他ならない。

その中には、当然生命に関する魔術も含まれている。

むしろ、黎明期から率先して行われ、現在も尚研究され続けている分野だ。

理由は実に簡単で、人間の一生は根源に至る為には短すぎる。

実際問題として、魔術での死者蘇生は不可能ではない。

勿論ピンきりではあるが、彼の聖杯戦争における英霊の召喚などは、まさに死者蘇生その物だし、意思を交わすだけなら時計塔の中に降霊学科というものが存在しているくらいだ。

いよいよとなれば、死徒に噛ませるという手も在りはする。

その後、ちゃんと死徒になれるかどうかは別問題ではあるが、ちゃんと死んだ人間が生き返っているという意味で死者蘇生は成立しているのだ。

さて・・・なのはは元々魔術師である。

基本的に魔術師としての知識が存在する。

それに対して魔法を知ってまだ一カ月もたっていない。

魔導師の魔法と魔術の差異を完全に把握していなくとも、ある意味で仕方がないと言える。

『あら、貴女は知っているようね？』

だが、両者の差異を知るタイミングが最悪だった。

プレシアの唇が裂けるかと思うほどに吊りあがり、それを見たのはが恐怖で真っ青になる。

今のプレシアの顔はそれほどに危険で恐ろしかった。

『プレシアさん、貴女の目的は黄泉返りだったんですか？』

スクリーンの中のルビーが話しかけると、反応してプレシアが振りかえる。

子供たちがそれにほっとしたのはやむを得ない。

『その通りよ。貴女の世界の魔法で、私はアリシアを取り戻すの、誰にも邪魔させない』

『・・・ルビーちゃんにはそんなことできませんよ？』

『そうでしょうね』

娘の蘇生は不可能と言われても、プレシアに落胆の様子はない。

『それでもあなたはここにいる。この世界で過去、次元震が起こった事はなかった。それはつまり次元震を起こすことなく、貴女はこの世界に移動してきたという事を意味する。貴女は世界を越える力を持つ道具なのでしょう？』

頭の良い奴はこれだから・・・察しというか洞察力というか・・・頭が切れすぎる。

『無理です』

『あの世界にいる全員が人質になっても？』

「……何——！？」「……」

いつの間にか、プレシアはこの世界の全員を人質に取っていたようだ。

多分ルビーに対しての・・・はったりとは思えず、そしてそれは直後に証明される事になった。

プレシア・テストロッサは、世界を人質にしてルビーを脅迫するという前代未聞の犯罪をやつてのけたのだ。

『何を考えているんですかプレシアさん？まあ大体の所は予想できますけど？』

「そつ、それは話が早いわね？」

プレシアを中心に、十五個のジュエルシードが円状に配置される。全ての青の石が同時に魔力を放出し始めた。

「さあ、次元震が起こるわよ！？あの世界にいる全員が死ぬわ！！」「やめてください。こんな事、無意味です！！しかもあなたの寿命が！！！」

「そんな言葉が聞きたいんじゃないわ！！」

プレシアの様子は鬼気迫っていた。

その口元に、血の筋が顎の形に沿って流れおちる。
二回の次元跳躍魔法、そして今ジュエルシードを発動させたことが
無関係ではあるまい。

「私が聞きたいのはYESという答えと実践よ！！何故！？世界を
滅ぼすほどの魔力がここにある！！何が足りないの！？私とあの小
娘の何が違うつていうの！？」

『そう言う問題ではありません』

ルビーがため息とともに語り出す。

プレシアに協力できないその理由を・・・。

『プレシアさん？なのはちゃんは魔術師です。魔術師というものは
まず魔術回路・・・貴方がたの言うリンカーコアを、魔力を使って
魔術を使う事に特化した形に作り直すところから始まるんです』
「な！？」

プレシアがうるたえた。

リンカーコアを弄るなど、思ってもみなかったのだろう。

「そんな・・・アルハザードではリンカーコアの人為的な改造まで
可能なの？」

『つまり、私の能力を完全な形で発動する為には、魔術師でなければ
ならないのです』

「なら、私を魔術師にきなさい！今すぐ！！」

『無理です。そんな事をすれば、魔術回路を作り出す前に、プレシ
アさんは死にます』

普通の状態でさえ、万全の注意を払っていながらも失敗して命を落
とす魔術師見習はいる。

二度の大魔法とジュエルシードの発動で命を削ったプレシアでは、残り少ない命の火を一気に吹き消してしまうだろう。魔術回路の構築には耐えられない。

ルビーの見ている前で、力を失ったプレシアが膝をつく。

『だから、もう止めてくださいプレシアさん……そうじゃないと最悪の結果に……』

「ふふふ……」

『プレシアさん?』

プレシアの方が小刻みに震えている。

「……どうって事ないわ、最初の予定に戻っただけじゃない」

『プレシアさん!?!』

「このまま次元震を起こして、アルハザードへの道を……」

『そんな力技で平行世界への道が開くわけがないです!?!』

第二魔法の結集であるルビーだから断言できる。

次元世界の理屈も大体理解した上での結論だ。

次元世界の行き来を、近所の家に遊びに行くのだと仮定すれば、平行世界の移動は昨日の我が家に行くに等しい。

根本的な部分が違うのだ。

力技でどうこうなるものではない。

過去の魔導師達がアルハザード……と言っていいのか分からないが、ルビー達の世界にたどりつけなかった事も、この辺りの勘違いが関係しているのだろう。

大規模な次元震で道が開くのなら、過去に一度も開かなかったというのはおかしい。

『プレシアさん、このままでは本当に取り返しのない事になっちゃいます!!』

プレシアが忘我しようが、目的を軌道修正しようが、ジュエルシードは今も段階的に魔力を高めている。
放出される魔力はすでに、隣接する次元世界にまで影響を与え始めていた。

『つつ!?!』

何かが変わった。

言葉に出来ない何かだ。

あえて言うのなら、周囲のすべて、あるいは世界全てに害意を向けられているような寒気、戦慄・・・世界が殺気で満たされた。
この空気に気づけないのは、生き物として終わっている。

「な、何?」

プレシアも同じように何かを感じて、あわててモニターの映像を空間に表示する。

「これは・・・魔力が集まっている?」

表示されたデータは、周囲の魔力が一点に向けて集まって行っていることを示している。

しかもその場所は、次元空間内の何もない場所だ。

何か、あるいは誰かが存在しているとは思えない場所である。

『・・・遅かった』

ルビーの言葉に、初めて聞く苦渋がにじむ。

彼女はこの状況の意味を知っていて、そしてこうならぬことを望んでいたのだから。

「あれは・・・人？」

モニターを見ながら、プレシアが茫然とつぶやく。

移動する魔力の終着点に変化があった。

魔力が凝縮し、物質としての形を取り始めたのだ。

それは無の空間に有を生み出す、まさに魔法と呼ぶべき光景・・・
そして魔力が変じたそれは・・・。

『・・・シロウさん』

そこにいたのは、赤い外套を翻し、銀の短い髪の下に鷹のような鋭い眼差しを持つ紅の弓兵の姿だった。

第十七話 抑止降臨（後書き）

本当は休むつもりでしたが、思いのほか早く仕上がったので投稿しておきます。

でも来週は本当に休み、ラストバトルに突入するので練りこみが必要なのです。

さあ、上げて行こうか!!

第十八話 無限の剣製VS・・・？

・・・見渡す限りの一面に銀の輝きがあった。

人型をしたそれは製作者の意思に基づいて行動する機械、人型の道具、御伽話の魔法使いが使役する人形・・・魔導師達のゴーレム、傀儡兵・・・その外見は西洋騎士の人形と言った感じた。

傀儡兵は、大抵の場合で戦闘用であり、いくつかのバリエーションが存在する。

小さい物では人間より少し大きい位、大きい物では小さなビルほどの大きさがある。

どれも強力な戦闘力を持った個体が数十体・・・それがプレシアの居城である時の庭園に収納されていた戦力だった。

全ての傀儡兵は戦闘準備を完了し、各々の砲門からは砲撃魔法の光が洩れている。

軍とでも真正面からやりあえそうな傀儡兵の群れだが、物言わぬ冷たい人形が相対しているのは“たった一人”だった。

「・・・・・・・・」

鋼鉄の兵団を前にするのは、紅の外套を着た男だ。

周囲を隙間なく囲まれていながら無関心、そこにいる敵に何の興味も抱いていない。

ただ、前だけを見て一歩踏み出す・・・無造作に・・・その瞬間、世界が白く光った。

傀儡兵達が、プログラムに従って侵入者の排除を行ったのだ。

圧倒的な破壊力、圧倒的な数の差、圧倒的な優劣が両者の間には存

在する・・・ように見えた。

「・・・熾天覆う七つの円環」
ロー・アイアス

向かってくる魔力に対してただ手を翳し、紡がれたのは短い呪文だった。

しかし、その短い言葉による変化は劇的に現われる。

手の先に展開されたのは7枚の花弁を持つ巨大な花、その一枚一枚が古の城壁に等しい防御能力を持つ、ギリシャ神話に語られるアイアスの盾の模倣。

投擲武器に対して無敵という概念を持つそれは、傀儡兵の砲撃を受け止めきる。

「・・・投影・・・開始」
トレース オン

現われたのは黒い洋弓、矢のないままに弦を引き絞るその姿は美しささえ感じさせる。

我が骨子 は 捻じれ 狂う。

「・・・I am the bone of my sword .

」

黒の弓に、捻じれた矢がつがえられる。

禍々しいフォルムの歪な剣だ。

「――― 偽・螺旋剣」
カラド・ボルグ

解き放たれた結果はすぐに出た。

雷光を纏い、空間すらもえぐる捻じれた剣は傀儡兵達を文字通り穿つ。

傀儡兵達が空を飛び、引き裂かれ、ばらばらと部品単位になって降

り注ぐ。

「・・・・・・・・」

それを見ても男は無言、何の感慨もわかないのか、壁であつた傀儡兵のいなくなつた前方へと足を踏み出す。

それは偽・螺旋剣カラドボルグによつて作られ、時の庭園の中心にまでまっすぐに続く轍・・左右に積み上げられた傀儡兵の残骸に目もくれない。変わらず前だけを見て男は歩き出した。

「な、何だあいつは？」

茫然とつぶやいたのはクロノだ。

他の皆は驚き過ぎで声も出ない。

見せつけるつもりだったのか、つながりっぱなしだったスクリーンの中で行われるプレシアとルビーの会話を聞いていた一同だが、おかげで一部始終を見るに至ったのだ。

『・・・・これでこの事件は終了のようですね』

「「「「「え？」「」「」」」」

沈黙を壊した声に、全員の視線が集中する。

「レ、レイジングハート？　どう言う事なの？」

声の主は、なのはの持っている杖・・レイジングハートだった。

『この事件はプレシア・テストロッサ女史の死亡を持って終了する

という事です』

全員が絶句した。

いまだにアルフの手の中で支えられているフェイトが、わずかに身じろぎするが、それに気がついたのはアルフだけだ。

「ま、まで！プレシア・テストロッサは犯罪者だが、裁判も無しにいきなり殺人など許されないぞ！？」

クロノが慌てる。

彼の立場上、プレシア・テストロッサは可能な限り生きて捕獲して法の下に連れ出さなければならない。

それでなくても、犯罪者だからといって死ねばいいなどと思ってもいない。

「そもそも、あの男は何なんだ！？」

いきなり現われ、圧倒的な戦闘力をまざまざと見せつけた第三者、何故あの男がプレシア・テストロッサを殺そうと狙うのか、何一つ分からない。

『ク、クロノ君』

エイミイの声が震えている。

これは・・・恐怖の感情か？

『あの人・・・人間じゃないよ』

「何！？何を言っているんだ！？」

・・・理解の及ばない展開に対して、人間は困惑するしか出来ない。

『見た目は人間だけど・・・センサーを通して見ると、あれは人の形をしている濃密な魔力なんだよ』

「・・・・・・・・」

クロノが茫然となのはを・・・正確には彼女の持っているレイジングハートに向けた。

あの男の正体を知る者は、この場においてレイジングハート以外にいない。

「何を・・・知っているんだ？」

『あの人は抑止の使者と思われます』

「抑止？まさかあの人は守護者なの？」

『そうです』

話について行けたのはなのはだけだった。

さっきまでのプレシアとの会話とは逆に、ほかのみんながなのはとレイジングハートの話について来れていない。

「な、なのは？どう言う事が教えてよ？」

「う、うん・・・なのはも良くは知らないんだけど・・・あの人が本当に守護者なら・・・」

なのはの言葉を待つ全員が、ゴクリと唾を飲んだ。

気がつけば喉がからからに干上がっている。

「守護者さんはね・・・正義の味方さんなの・・・」

「・・・・・・は？」

やはり理解は及ばなかった。

だが、なのはの真剣な話は続く。

守護者・・・それは世界に危機が迫る時、あるいは霊長の種が存亡の危機に瀕した時・・・それを防ぐために、世界は英雄という名の先兵を派遣する。

彼等は、世界という存在が持つ一種の防衛本能の化身だ。

「でも・・・ルビーちゃんがその事を話してくれたとき、『彼らは《掃除屋》なんですよ』って言ってた・・・あのルビーちゃんがつても悲しそうだったなの」

「・・・・・・・・どんな話かと思えば・・・」

クロノが頭を抱えている。

「聞いたことないぞ、そんな話？」

クロノだけではない。

ユーノもアルフも、スクリーンの中のリンディも困惑している。

『当然です。何故ならばこれは魔法ではなく魔術の領域の知識です』

だからこそなのはにはそれが理解できた。

魔導師ではなく魔術師だから・・・ルビーから魔術的な知識として以前に聞いたことがあるからだ。

『・・・・・・・・ちよつといいかしらクロノ？』

「何ですか？艦長？」

『なのはさんがその守護者等の事を知っていたのは分かるとしても、何故レイジングハートは魔術師の知識を持っているの？』

「・・・・・・・・あ」

考えて見れば変な話である。

レイジングハートは魔導師側の産物、それがいまだに未熟とはいえ、魔術師であるのはより先にあの男が守護者と見抜けたのか？

『姉さんは、自分がなのはさまの傍にいらなくなることを想定していました』

「……な！？」

「ルビーちゃんが？」

予想外の言葉に、なのはの目が丸くなる。

『なのは様、姉さんは今回のジュエルシードに関わる諸々の事が簡単には済まないだろうという事を予想していました。その途中において、姉さんがなのは様の傍にいらなくなる可能性も考慮し、魔術に関するデータをある程度私の中にコピーして自分の代わりに助言できるようにしていたのです』

変わっていたのは、人格プログラムだけではなかったらしい。

そこまで先を読んでいたというのも信じられないが、おそらくこれは役に立たない方がよかった保険だろう。

「母さんは……」

「フエイト？」

「母さんは……死ぬの？」

アルフに抱えられながら、真つ青な顔色のフエイトがレイジングハートに聞いた。

『……守護者とは、人間ではありません。世界という概念の命じるままに動く魔力の機械です。プレシア・テストロッサは世界その

物に敵として認識されたのです』

「フェイト、もう良いじゃないか。もうあんな女のことなんか忘れちまいなよ!!」

アルフがとんでもないという風に怒鳴り散らす。

本人達以外には知りようもないが、様々な思いがこもっていることは察する事が出来る。

「アルフ・・・」

フェイトが悲しそうな声を出すと、アルフはそれ以上何も言う事が出来なかった。
頭では分かっている。

「・・・フェイト・テストロッサ？」

そんな彼女に声をかけたのは、意外にもクロノだった。

「このままでいいのか？」

「・・・私は・・・人形だって母さんに・・・」

「僕は行く」

クロノの言葉には、今までにない力が宿っていた。

本当なら、余計な危険を冒すべきではない状況だ。

だが、リンディやエイミィでさえ、今のクロノに声をかけづらい物を感じている。

「世界はいつだって、こんな筈じゃないことばかりだよ。ずっと昔から、いつだって、誰だって、そうなんだ。こんな筈じゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ。だけど、

自分の勝手な悲しみに無関係な人間まで巻き込んでいい権利はこの誰にもありはしないと思うから・・・僕は行く」

そう言ったクロノの姿からは、何かを吹っ切ったような風を感じる。その背中を見たフェイトの目に、光が宿った。

「私も・・・」

「フェイト・・・」

「アルフ、それでも母さんなんだよ」

たとえ殺されそうになったとしても、プレシアはフェイトの母親なのだ。

「で、でもどうするんだい？」

ユーノが気まずそうに声を上げた。

「相手はレイジングハートの言葉を信じるなら世界その物だよ？人間個人がどうにか出来る物とは思えない」

水を差すと分かっている、言わなければならない事はある。

無策で守護者と呼ばれる存在の前に出るなど、死に行くようなものだ。

相手には、こちらに対して手加減をする理由はないのだから。

「・・・レイジングハート、もう出来る事はないの？このまま終わりになんて・・・」

『・・・危険すぎます』

「そんな」

「なのは」

レイジングハートに尚も問いかけようとしたなのはの肩を掴むのは
ユーノだ。

「落ち着いてなのは、デバイスは基本的にマスターを裏切る事はな
い」

「う、うん・・・」

彼が何を言いたいのか分からず、なのはが首をかしげた。

「さつきから、レイジングハートは危険とは言っているけど、無理
とは言っていない」

「つつ、レイジングハート！？何か出来る事があるの！？」

『なのはさま・・・申し訳ありません』

レイジングハートの返事は謝罪だった。

それは、ユーノの指摘を認めたという事でもある。

『しかし、やはり危険です守護者とは世界の脅威を速やかに処理す
る為だけの存在です。交渉やお話など最初から不可能です。下手を
すればなのはさまも敵と認識されかねません。そうなれば・・・』

「それでも・・・やらないよりはずっといいよ。お願いレイジング
ハート」

・・・ここまで言われて、デバイスであるレイジングハートが答え
ないわけにはいかない。

『はつきり言つて、まともにやりあえば勝ち目などありません・・・
しかし、なのは様ならば・・・』

一つだけ、残っている可能性を、レイジングハートは伝える。

「え？」

『なのは様ならば、かすかにではありますが可能性があります』

「なのはが？」

みんなの視線がなのはに集中するが、誰よりも本人が一番驚いている。

「何をすればいいの？」

『姉さんです』

「ルビーちゃん？」

『なのは様が姉さんを取り戻し、その真の力を行使できれば……あるいは……』

「な、何なの？」

プレシアは、モニターに表示されるデータを見て啞然とした。

男……ルビーがシロウと呼んだ紅の騎士のデータだ。

そこには、驚くべき結果が表示されている。

「人間じゃない？いえ、そもそも生き物ですらない？魔力で編み込まれた人型の何か？」

流石と賞賛すべきだろう。

プレシアは、シロウの正体がある程度まで分析しているようだ。

「こんな……これじゃ魔力のみで作られた人形？」

『それでほぼ正解です』

背後からの声に、プレシアが顔を上げる。

鳥籠の中のルビーは、どこか沈痛なものを感じさせた。

『プレシアさん、貴女はやり過ぎたんです。その為、世界は貴女という世界に対する脅威を排除するため、あの人を送り込んできたんです』

「これが、貴女の言っていた形を持った死という所かしら？」

この期に及んで、ニヤリと笑える胆力は大したものだ。

『“今の”シロウさんは貴女を殺して、この状況の鎮静を図るためにここに向かってきているんですよ』

「くだらないわ」

この期に及んで、プレシアは自嘲の笑みを浮かべていた。

状況が理解できていないわけではない。

むしろ、その非凡さから、シロウという驚異を正しく認識している。

「見くびらないでほしいわね、アリシアを取り戻すためなら、世界くらいいくらでも敵に回してやるわ」

・・・これが母の愛か？

わが子の為に、ここまで出来るものなのか？

だが・・・それならば・・・。

『・・・プレシアさん？』

「何かしら？」

『貴女、本当にフェイトちゃんを殺すつもりだったんですか？』

プレシアの動きが止まった。
ルビーを振り向く事さえしないが、黙って次の言葉を待っていることがわかる。

『フェイトちゃんも一緒に、あの世界諸共消し去る気なんてなかったんでしょう？』

「何で・・・そう思うのかしら？」

あの世界の何処にいても人質としては十分だったはずだ。
世界その物が消え去る時に、安全地帯など存在しない。

『フェイトちゃんが現れた場所はアースラが警戒しているであろう場所のど真ん中でした』

まさに見つけてくれと言わんばかりの場所、現にフェイトはすぐになのは達に捕捉され、保護された。

あの場所に転移させたのはプレシア本人なのだ。

もし本当に、世界が消滅する事になったとしても、あの場にいた全員はアースラで逃げ出せた可能性がある。

むしろ高かったと言っているいだろ。

「・・・見当違いね」

『フェイトちゃんを利用してたと、解り易い悪女だったのも？』

本当に人形だと思っていたのなら、憎しみをぶつける事もなかったはずだ。

そもそも、プレシアの語ったフェイトに対する感情が全て本当だと
しても、それならば尚の事憎しみをぶつける理由にはならない。

何故ならば、別人だとしてもフェイトはアリシアの写し身なのだ。愛娘の姿をしたものを・・・死んでも生き返らせたいと思った娘の姿をした彼女を・・・嬉々として傷つける事が出来るだろうか？

『プレシアさん？貴女・・・フェイトちゃんは今まで利用されていたという事にするためにあんな・・・』

「それ以上フザケタ事を言えばガラクタにするわよ！？」

自分のデバイスである杖をルビーに向けるプレシアには、冷めた怒りの顔になっていた。

これ以上・・・これ以上話せば許さないと、ルビーを睨む目の中に滾る感情が見えた。

「私はあの子を利用したの、人形のあの子を捨てようがどうしようが、製作者の私の勝手でしょう！？」

『プレシアさん』

「それでいいじゃない？」

その一瞬に浮かんだ表情を見て、ルビーは何も言えなくなった。

「それに、もうすぐ彼がここに来るわ、無駄話をする時間はないよ
うよ？」

モニターには傀儡兵を剣の一振り、弓矢の一射で簡単に蹴散らすシロウの姿があった。

相当な防御力、耐久力を誇る傀儡兵の装甲が紙のようだ。

・・・凄まじい、その一言に尽きる。

モニターから聞こえる破壊音と、音響を通さない生の破壊音がシン

クロする。

徐々に両者の差異が少なくなってきたのは、シロウが近くまで来ている証拠だ。

「・・・ん？」

何かに気がついたらしいプレシアがわずかに首をかしげる。

次いで、それが何を意味するのかを悟ったプレシアの額に皺が寄った。

『どうかしたんですか？』

「いえ、何でもないわ」

そう言つて、プレシアがモニターを消すと、死角になる位置にいたルビーには、プレシアが何を見て不機嫌になったのかを知る術はない。

「・・・あの子、何しに・・・」

『プレシアさん！？』

「は！？」

ルビーの鋭さを含んだ声に、プレシアがその場を飛び退く。

一瞬前にいた場所の床をぶち抜いて、螺旋を描いた魔弾が破裂し、プロテクションを展開したプレシアを吹き飛ばした。

「くっつー！」

地面に足の裏で線を刻みながらもなんとかプレシアが踏みとどまる。

「早すぎるでしょう！？」

床に開いた穴から飛び出てきたのは赤の騎士・・・その瞳は鋼の色に冷たく、プレシアをとらえる。

・・・血の気・・・いや、生気が感じられない・・・死んだ魚のような目だ。

「世界が私に死ねと言ってるからって・・・まだ私は死ねないのよ！！」

部屋を膨大な魔力が満たす。

シロウがふと気がついたというように見上げれば、天井が見えないほどに隙間なく配置された雷の刃が自分を狙っている。

「アリシアを取り戻すまでは！！サンダーブレイド！！」

一斉に、本来ならば広範囲を一気に吹きとばす目的で使用される、奥の手の一つは屋外とは比べようもなく狭く、そしてたった一人を目標に、豪雨の如く降り注いだ。

黄金の稲妻がフラッシュのように光り、爆風が全てを覆い尽くしてゆく。

いかにプレシアとはいえ、これほどの大魔術を予備動作もなく、しかも気付かれずに行使するのは不可能だ。

・・・プレシアはシロウが外に配置していた傀儡兵達を鎧袖一触にするのを見て、あの程度では止まらなと理解していた。

故に、最終目的地である自分のいるこの場所に最初からわなを仕掛けていたのだ。

外とは違う、逃げる事の出来ない密閉空間の中における全方向から

の一斉攻撃、しかもこれはジュエルシールドの補助も得て威力を増している。

プロテクションを展開したままでいなかったら、術者であるプレシアも無事では済まなかっただろう。

「まだよ！フォトンバースト！」

更にプレシアが砲撃を重ねる。

圧縮された魔力が、降り注ぐ雷の刃の群れに横からぶつかる。

あの花びらのような防御が間に合っている、それは上方からの攻撃に向けられているはず。

しかも、未だ上から降り注ぐ雷の刃の中では動けまい。

直角方向からくるこの一撃は、避ける事も防御する事も出来ない。

「消えなさい！！」

放たれた圧縮魔力弾は、扇状に破壊の風を吹かせた。

無事なのはプレシアとその背後だけだ。

後は全て破壊され、城の一部がそっくりそのまま消滅している。

「こ、これで・・・ぐつつ！！」

膝をついたプレシアが片手で口を押さえる。

しかし、その指の隙間から漏れだして来る滴りをを押さえる事は出来なかった。

「ごほ！！」

『プレシアさん、大丈夫ですか！？』

床に落ちた液体の色は赤だった。

二度の大魔法・・・すでにプレシアの体はボロボロだった。

それなのに、奥の手の一つをジュエルシードの魔力を補助にしたとはいえ二つも連続で行使した。

今のプレシアの状態は、限界の先にある。

『無茶したらダメですよ』

「こ、この位しないと止められなかったでしょう?」

プレシアの後方にはアリシアの入ったカプセルがあった。

彼女はあくまでも娘を守る母親だったのだ。

未だに鳥かごに捕らわれたままのルビーが無事だったのは、単に置いてあった場所がアリシアのすぐ近くだったからに他ならない。

「ふふ、でもこれで・・・」

『・・・残念ですが』

「え?・・・そんな!?」

思わず・・・プレシアは悲鳴を上げた。

やっと破壊による埃がおさまってきて・・・その先にいる者の姿が見えるようになった。

「無傷!?!」

完全に無傷ではない。

外套の所々には、爆発によってついた汚れのようなものが見てとれる。

しかし、今この場で起こった破壊の連鎖を考えれば、五体満足どころか生きている事さえ信じられない。

「つつ!?!」

そのなにも写さない・・・死んだ瞳と目が合ったプレシアが本能的に後ずさる。

「・・・」

「あぐ!?!」

体力を使い果たしていたプレシアには、急接近するシロウに対して無力だった。

とつさに展開したプロテクションも、どこから取り出したのか・・・剣であつさり、豆腐を包丁で切るかのように抵抗なく切り裂かれ、無防備な体の中心に蹴りを食らった。

血をまき散らすプレシアは、アリシアのポットに激突してやつと止まる。

「あ・・・アリシアア・・・」

ポットの中の娘は、母親の言葉に何も答えない。
答える事などできない。

「ま、まってね・・・アリシア・・・今母さんが・・・ぐう!?!」

娘に語りかけるプレシアの肩が容赦なく、飛来した剣に貫かれる。
立ち上がるうとしたプレシアの膝が、再び折れた。

『プレシアさん!! やめてくださいシロウさん!!』

呼びかけにシロウは答えない。

今の彼は抑止の使者だ。

その存在意義は世界にとっての害悪・・・プレシアの排除・・・デバイスを握る力すら失い、娘の眠るポットに寄り掛かっている事しかできないプレシアにとどめを刺すべく、黒弓に剣をつがえる。

『シロウさん、それではアリシアちゃんの遺体まで！！』

剣は偽・螺旋剣・・・万が一にもプレシアが反撃に出ないように・・・あるいは避けても余波に巻き込んで抹殺する為に・・・。

「や・・・やめて・・・アリシアは・・・」

いや・・・そもそも母親が。プレシア アリシア娘を見捨てるわけがない。背後に娘がいる限り、母親である彼女は偽・螺旋剣を避ける事は出来ない。

今の彼女に出来る事は、アリシアの盾になる事くらいなのだから・・・それを計算して狙いをつけているのか？
鋼鉄の視線は揺るぎなく強固で冷たく・・・彼の思いを読み取る事は出来ない。

「・・・・・・・・」

シロウは無言で剣を解き放つ。

もはや余計な事は無用と、魔力はこもっていない。

・・・それでも、今のプレシアを殺すのには十分だ。

残像の尾を引いて襲いかかる鋼色の死に対して、プレシアは目を閉じた。

「・・・・・・・・ごめんね」

・・・それは誰に向けた言葉だっただろうか？

背後にかばうアリシアか？

それとも、巻き込んでしまったルビーやなのは、管理局の人間？

それとも・・・だが、次に来たのは肉に潜り込む刃の奏でる音ではなく、もっと大きな破砕音。

「え？」

思わず目を開いたプレシアに見えたのは、桃色と黄金の魔力光・・・どちらも見覚えがある。

特に黄金の魔力・・・あれは・・・やがて、魔力が消えると天井と床に大穴があいていた。

強力な砲撃が部屋を貫通したのだ。

床に開いた大穴から、黒と白の人影が飛び出して来る。

「フェイト？」

それになのはだ。

「ルビーちゃん!!」

『なのはちゃん？何でここに？危ないですよ？』

「そんな事はどうでもいいなの!!大丈夫だった!？ひどいことされてない!？」

さっきの砲撃の余波で、部屋の隅に飛ばされた鳥籠入りのルビーに気づいたなのはが駆けてゆく。

後にはフェイトとプレシアの二人が残った。

「・・・何をしに来たの？まさか助けに来たとは言わないでしょう

ね？」

フェイトの傍には、空間に投影されたままのスクリーンがある。映っているのはこの場所だ。

そう言えば、ルビーとのやり取りを見せつけるために映像を送っていた事をやっと思いついた。

この城の構造を知るフェイトが砲撃を放ち、なのはがその威力を上乗せしたのだろう。

おまけに、砲撃がそのままこの場所までのショートカットになっている。

「そんなに私が憎かったの？放っておいても私は死んでいた。それを邪魔してまで私に恨みを晴らしたかったのかしら？」

「・・・違います」

フェイトの言葉から感情が感じられない。

「・・・貴女に言いたい事があつて来ました」

「何かしら？時間がないから手短かにね」

「私はアリシアじゃありません」

てつきり恨み言が来ると思っていたプレシアは見事に虚をつかれた。

「確かに母さんにとって私は人形でしかなかったかもしれませんが。

ですが、私はあなたに生み出されて、あなたに育ててもらったあなたの娘です。あなたは否定しましたけど、私は覚えています。あなたの笑顔を、あなたの手の温もりを・・・あなたと過ごした穏やかな日々を・・・あなたが私を娘とってくれるのなら、私はあなたと共にあります」

プレシアの見ている前で、フェイトが背を向けた。

視線の先には、無傷のシロウが立っている。

すでにバルディツシュからは金色の鎌が展開されていた。

「や、やめなさい。ジュエルシードの補助を受けても敵わなかった相手よ!？」

「たとえ誰が来ようと、どんな苦難が待とうと、あなたを守ります」

「一人で何ができるの!？」

「……一人じゃない!!」「……」

最後の返事はフェイトからの物ではなかった。

男の、しかも数人分の答えだった。

なのはとフェイトが出てきた穴から、人影が飛び出して来る。

クロノ、ユーノ、アルフを先頭にアースラの武装魔導師達に士郎と恭也に美由希までがいる。

「な、何故?……引き揚げたんじゃないの?」

「時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。プレシア・テストロツサ、次元震は母さ……提督によって抑えられている。駆動炉にも人を向かわせた」

「そんな事が聞きたいんじゃないのよ!!何を考えているの!？」

プレシアが怒鳴るが、勢いのまま咳き込んでしまう。

吐き出された物には血が混じっていた。

「母さん!？」

「貴方達は何を考えているの?あれはジュエルシードの力を使っても歯が立たない相手なのよ?早く立ち去りなさい」

「……うるさい」

思いつきり、これでもかというくらいどすの利いた声がプレシアの口を塞がせる。

声の主はクロノだ。

・・・目が据わってプレシアを睨んでいる。

「お前はただそこで大人しく救われるのを待ってればいいんだ」「な!？」

「お前の為に助けるんじゃない。どんな親でも親だ。それがいきなりいなくなれば、子供はどうしても傷つく、それが気に入らないだけだ」

・・・何という自己満足な話だろうか？

しかもそれ以上話す事など無いとばかりに、クロノは背を向けた。

「何と言うかクロノ君？」

「何ですか？高町士郎さん？」

「いろいろ吹っ切り過ぎじゃないのか？」

「それを促した貴方に言われたくありません」

「御尤も」

それを言われると苦笑しか出てこない。
でも悪い気はしない。

「ねえねえ恭ちゃん？クロノ君が何か男の子しているよ？」

「男子三日あわざればの良い見本だ。よく見とけばいい」

「やば、惚れそうかも・・・」

「おい・・・？」

この会話が元であと後いろいろあつたりするのだが、それは未来の話だ。

重要なのは現在、全員が前を見れば、シロウが直立不動のままそこにいる。

全員油断はしていなかったとはいえ、何もしてこなかったのは・・・警戒していたというよりは敵かどうかの判断に迷っていたのだろう。しかし、こちらが臨戦態勢をとった事で確実に敵と認識されたはずだ。

その判断ができれば、後は迷う理由など無い。

シロウは速やかにプレシアを“処理”しようとするだろう。

・・・ここに、絶望的にも思える戦いが始まった。

「撃て!!」

「了解!!」

クロノの号令の元、武装魔導師達が一齐にシロウに向けて砲撃魔法を放つ。

一人ひとりの能力は、なのはやフェイトに及ばないものの、それでも数人が束にはなったその威力は馬鹿に出来ない。

「・・・熾天覆う七つの円環」

再び七枚の花弁が展開される。

クロノ達の砲撃は全てはじかれ、一枚も散らす事が出来ない。

かつて、同じでありながら異なる世界において、紅の弓兵は7枚の花弁の6枚までを打ち破られたが、持てる魔力を最後の一枚に注ぎ

込んで蒼き槍兵の必殺の一撃を防ぎきった。

そして今の彼は・・・世界という常識はずれなバックアップを得る事により、7枚の花弁のすべての防御力が常識外の強度を持っている。

「それは、想定済みだ!!」

ロー・アイアス
熾天覆う七つの円環を回り込む形で右から士郎が、左から恭也が、
ロー・アイアス
そして熾天覆う七つの円環を飛び越える形で美由希が奇襲をかけた。
きた。

三人とも十分に虚を突いているが、特に士郎と恭也は奥義・神速まで発動している。

トレース・オン
「投影開始」

迎え撃つシロウの両手に白と黒の中華剣が現れた。
御剣の剣士達の小太刀に似たスタイルだ。

「せい!!」

先陣は恭也が切った。

小太刀を殺すつもりで突き込む。

後がない、これで決めるつもりの一刀・・・士郎と美由希もタイミングをずらして仕掛ける。

恭也だけではない。

御剣の剣士達は、彼の魔力だけではない脅威を肌で感じていたのだ。距離を取って魔法を放つのが基本スタイルの魔導師には、この男の危険性をぎりぎりの所で理解できていない。

「・・・・・・・・」

「な!？」

無言で、シロウは恭也の一撃を逸らしながらかわす。

その技量がとんでもない。

恭也の剣を一瞬で見抜く目と、それを実行に移せるだけの経験によって成り立つ美技だ。

「まだまだー!!」

頭上から降ってくる美由希に対して、シロウは躊躇なく二刀を投げつけた。

「つつきやー!!」

流石に予想外だったようだ。

必死で小太刀を振るって白と黒の中華剣をはじき返すが、おかげで空中で体勢が崩れて地面に落下するが、ひらりと体を入れ替えて着地した。

「貰った!!」

最後に士郎が仕掛ける。

今のシロウの手に武器はない。

卑怯かもしれないが、相手は策を弄するに値する相手だ。

「くつつ、な!？」

しかし、気がつけば士郎の剣は受け止められていた。

投擲し、手から離れたはずの二刀がシロウの手の中にある。

「ぐつつ!!」

「親父!!」

理解できない状況に思考が停止した所にけりが来た。

とつさに盾にした小太刀を砕かれながら、空を飛ぶ士郎の体を恭也が受け止め、美由希共々離脱する。

「お前はそこにいろ!!」

追撃に駆けようとしたシロウの体に、バインドが巻きつく。息を殺し、隙を窺っていたアルフだ。

「未だフェイト!!」

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ。いま導きのもと降りきたれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

フェイトが呪文を詠唱していた。

その長さから、相当な大威力の魔法を使う気なのだろう。事前に打ち合わせでもしてあったのか、クロノ達魔道師は士郎達を保護しつつ、全力でプロテクションを展開している。

「撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス」

拘束の数が多すぎて、シロウもわずかに手間取っている。だが、その短い時間でも呪文が完成するには十分だった。

「サンダー・フォール!!!」

上方、最初にあけた穴から見える空から、稲妻が降ってきた。

わずかに拘束の解除が間に合わなかったシロウが、神鳴りの一撃を
まともに食らう。

至近と言っていい場所でそれを食らった一同はまとめてはじき飛ば
された。

防御魔法を使っていなければ、余波だけで命にかかわっていたら
う。

「やったねフェイト!!」

アルフが喜びの声を上げるのを聞いて、全員がほっとする。

破壊によって巻き起こった粉塵によって見通せないが、一億ボルト
の電圧を食らって無事な存在などありえまい。

「喜んでいる場合じゃないぞ、ここは危険だ」

クロノの言葉を証明するように、ホールの建材がぱらぱらと落ちて
きた。

密閉された空間における爆風の破壊力とは容赦ない。

すでにかなりボロボロだったホールだが、ここまで来ると倒壊の危
険性まで出てきた。

「しかも、虚数空間が穴をあけている」

ジュエルシードの魔力と、魔法使い同士の戦闘により、重力の穴が
口を開けていた。

あらゆる魔法がキャンセルされる空間の中に落ちたら最後、飛行魔
法も使えず重力の底まで落下し、二度と上がってこれない。

「プレシア・テストロッサ、君にも一緒に来てもらおう」

「・・・こんな状況では仕方がないわね」

I am the bone of my sword・（体は剣で出来ている）

「「「「「な!？」「「「「「」

全員が驚きの声を上げる。

Steel is my body, and fire is my blood・（血潮は鉄で 心は硝子）

聞き間違えではない。

ここにいる全員が、同時に幻聴を聞く可能性がない以上、この声は現実だ。

I have created over a thousand blades・（幾たびの戦場を越えて不敗）

「う・・・ウソだろ？」

それは誰の言葉だっただろうか？

あの魔法を食らって・・・それでも彼は粉塵の向こうで呪文を唱えている。

Unknown to Death・Nor known to Life・（ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない）

・・・何もかもが信じられない。

全員が・・・恐怖という感情を理解する。

ここにきてやっと自分達の甘さを自覚した。

レイジングハートから話を聞いていながら、それでもどこかで相手

を過小評価していた。

Have withstood pain to
many weapons. (彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に
酔う)

非殺傷指定なんておこがましい。

最初から殺す気で行くべきだった。

Yet, those hands will never ho
ld anything. (故に、生涯に意味はなく)

・・・それでも勝てたかどうかは未知だっただろう。

それでも、生き延びる可能性が多少なりとも上がったはずだ。

So as I pray, unlimited blade
works. (その体は、きっと剣で出来ていた)

そして・・・絶望の呪文が完成する。

「な・・・んだと？」

それは全員の思いの代弁だった・・・気がつけば、自分達が立っ
ているのは崩壊しかけたホールではない。

斜陽に染まる紅の丘の上だ。

大地は干からび、生き物の代わりに剣が乱立している死の世界。
空には鋼鉄の歯車が回っている。

・・・言葉にしなくてもわかる事がある。

ここは・・・この世界はあの男の作り出した世界なのだ。

「……無限の……剣製」
アインミッド
ブレイド・ワークス

それがこの世界の名前なのだと、シロウの言葉を受け取った全員が理解した。

――――――――――

見渡す限り、果てのない荒野だった。

動くものの姿は何一つとして見えない。

この世界には生き物の息吹が感じられなかった。

代わりに剣がある。

幾百、幾千……いや、そんな単位では数えきれない無数の剣が、主無きまま地面につき立ち、朽ちるのを待っている。

それなのに、まだ足りないと言わんばかりに空に浮かぶ歯車は回り続け、剣を作り続けていた。

「な、何……これは？」

唯一、ルビーを助けるためにクロノ達と離れていたため、シロウに敵と認識されていなかったのはは、その光景に、恐怖よりも悲しさを感じた。

自分にも覚えがある孤独という感情をこの世界から感じる。

『これが、魔法に最も近いと言われる魔術、本来なら死徒27祖等の人外の御技……固有結界です』

「固有結界？」

『これはシロウさんの心象風景、《無限の剣製》です』
アインミッド・ブレイド・ワークス

「これが……あの人の心なの？」

丘の上、世界の中心には紅の騎士がいる。

その姿は確かにこの世界の王だった。
しかし裸の王様だ。

臣下はいない。

妃もいない。

誰もいないこの場所で、ただ冷たい鉄を打ち続ける孤独の王……。

「ルビーちゃん、胸が苦しいよ。なんで？」

彼を見てみると、なのはは胸が締め付けられるような圧迫感を感じる。

危険なはずの彼に今すぐ駆け寄って、思いっきり抱きしめてあげたくなる。

『……シロウさんは、心で泣きながら世界を救っているんです。
殺す事でしか世界を救う方法知らない人なんです』

「そんな……」

そんなのは納得できないとなのはは思った。
あれは悲しい魂だ。

この世界の有りようがそれを示している。

「ルビーちゃん、あの人はどうしたら救われるの？救ってあげられるの？」

『それは……』

「ルビーちゃんが本気になれば助けられる？」

会話が途切れた。

ルビーがレイジングハートに向き直る。

『・・・レイジングハート？話しちゃったんですか？』

ルビーはなのはの言いたい事、そしてそれを誰がなのはに伝えたのか・・・正確な所を察した。

『すいません姉さん』

『いいえいいんですよ。いずれはこの時が来ると思っていましたあゝそれが今日この時だったというだけです・・・思ったよりも早かったですけどね』

『・・・すいません』

ルビーに良いと言われたとか、そう言う問題ではない。

「ルビーちゃんが本気を出せば何とかできるんだよね？お願い！」

『・・・なのはちゃん』

「私頑張るから、だから・・・」

なのはの目が潤んでいる。

シロウの孤独に感化されているのか？

『・・・はなのはちゃんにお願いがあります』

ルビーの声は落ち着いていて静かだった。

「何？なのはは何をすればいいの？」

『何時も通りのなのはちゃんにいてください』

「え？」

『そして、できればシロウさんの涙を止めてあげてください』

「え？」

『ではいただきますよゝ我はカレイド・ステッキ第二魔法を導くもの』

ルビーが呪文を唱え始めた。
良く通る澄んだ声だ。

『創造主キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグの名の下に、継承者、高町なのはの証をここに打ち立てん!!』

ルビーが、今までにない強烈な光を発し・・・第二魔法の真の力を具現化させる。

状況は誰の目から見ても絶望的だった。

クロノ達を中心に、半球状に包囲陣を敷いている剣、槍、戦斧・・・
刃の煌き達。

『クロノ君、逃げて!!』

「出来れば・・・やっている」

エイミイの悲鳴混じりの通信に应える声が震えていた。

逃げろというくらいだから、アースラの方で自分達を転送する事は絶望的なのだろう。

技術的なものか、それとも間に合わないからなのかは分からないが、どっちにしても大差ない。

「・・・母さん」

「フェイト・・・本当に馬鹿な子」

円陣の中心にはフェイトとプレシアがいる。

一人は明らかな病人、もう一人はまだ子供だ。

大人の、年長者のプライドとして前に出すわけにはいかない。

「プレシア、あんたって奴は!!」

「アルフさん落ち着いて!!」

「ふん、フェイトだけは絶対私が守るから・・・」

「大丈夫、大丈夫だよ」

二人を守る様に、アルフと美由希が傍に控えている。

「クロノ君、君も下がりなさい」

「いいえ、高町士郎さん。お気遣いなく」

隣に並んでいる士郎の言葉を、クロノはやりわり断った。

『クロノ、今そこに行くわ!』

「来ないでくれ、母さん」

『でも!!そんなのダメよ!!貴方まで私を置いて行くの!?!』

「息子からお願いだよ」

最後のと・・・それ以上の言葉はなかった。

リンディの嗚咽が、その感情とともに伝わってくる。

「やばい、恭ちゃん。クロノ君がカッコイイ!」

「美由希、お前こんな時に・・・」

「開き直ってるだけだよ。それにしても14歳か」

「いいから下がってる・・・ってマジで?」

美由希と恭也を無視して、士郎とクロノは揃って正面、自分を見る
紅の騎士を見る。

視線が交差するが、やはり彼の感情はなにも感じられない。

殺気すらないのだ。

これが・・・本当の殺戮兵器の姿というのか？

「・・・・・・・・」

シロウが無言で片手を上げる。

空中にある全ての刃物がざらりと輝いた。

「全員プロテクション展開！！」

魔導師達が全力でプロテクションを展開する。

白い輝く魔法陣は、しかし自分達を狙っている刃の輝きの前では蝋燭の明かりにも等しく感じる。

「・・・・・・・・」

「来るぞ！！」

やはり無言で、殺意なき号令が下された。

殺到する武器は獲物に向かってゆく蟻の群れのように、すべてを飲み込もうと襲いかかった。

「・・・プロテクション」

何の前触れもなく、たった一言で強大な魔法が発動した。

「な！？」

覚悟を決めていたクロノ達を守る様に、桃色のプロテクションが展開された。

しかも一枚だけじゃない。

クロノ達を半球状に囲むように何枚も、しかもクロノ達を狙っていた武器を受け止め、完全に防いでいる。

金属同士のぶつかる音、擦れる甲高い音が連続して響いた。

「だ・・・れだ？」

武器を防ぎきったプロテクションが消えると、全員がその人物の存在に気がついた。

何時の間にか、自分達と紅の騎士の間に誰かが立っている。

見覚えのない背中だ。

ロングの茶髪をツインテールにした・・・多分女性、歳は背恰好から20くらいだろうか？

何所か見覚えのある白いバリアジャケットを着ていた。

「・・・なのはか？」

「え？」

聞き間違いかと、思わずクロノが隣を見れば、啞然としている士郎がいる。

「あれが高町？そんなはずはないでしょう？」

なのはは8歳の女の子だ。

対してあの女性は20歳前後、倍以上も歳が違う。そんな見間違いなどありえない。

「いや、俺もそう思っただけど・・・」

士郎も確信がないようだ。

何故そう思ったのか、本人も理解できていないように見える。

「え、あ……ちょっと、あれ見て」

「ん？」

美由希が指さしたのは、背を向けている女性の右手……そこに握られているのは……。

「……ルビー（ちゃん）！！！！」「」「」

しかも、反対の手には待機状態のレイジングハートが見えた。

「ほ、本当になのはなのか？」

恭也の疑問は当然だろう。

妹がいきなり大人の女性に成長してしまえば、取り乱さない方がおかしかった。

「……ルビーちゃん、レイジングハート？」

おそらくなのはであろう女性は、手に持っていたルビーとレイジングハートを近づける。

その声は、間違いなく聞き慣れたなのは物だ。

『御心のままに、マイマスター』

二人の声が重なって答えた。

ルビーを中心に、レイジングハートが部品を展開する。

金属製のパーツが、ルビーとレイジングハートの本体をつなぎ、形を作って行く。

瞬きほどの時間のうちに完成したそれは、なのはの背丈より長い杖だった。

「バリアジャケット、展開」

杖から漏れたのは七色の光、なのはの体を繭のように包みこみ、それが弾けるとなのはは新たなバリアジャケットを纏っていた。

黒いインナーに白と赤を基調にした外套を羽織り、手甲や脚甲など、所々に装甲を配置してある。

左手にはルビーとレイジングハートが融合した杖を構えている姿は神秘的だった。

「・・・魔法術式」の一」

なのはが杖を構える。

「ジェノサイド・カーニバル
殲滅の祭り」

次の瞬間、視界が桃色の閃光で埋め尽くされた。

第十八話 無限の剣製VS・・・？（後書き）

来週もお休みします。

リアルの方でちょっとこたこたしているので、なかなか生活リズムが落ち着きません。

第十九話 魔法使い

圧倒的な光景・・・なのはが使ったのはおそらくデイベインバスターであって違うものだった。

まず、なのはのデイベインバスターは呪文一つに付き一回の砲撃が発射される。

しかし、【魔法術式の一、ジェノサイド・カーニバル殺戮の祭り】と呼ばれたそれは、言うなればデイベインバスターのつるべ打ち、数十本のデイベインバスターが宙に浮いていた武器達を文字通り殲滅してゆく。

その威力はあたり一面を更地にするほど、あまりにも一方的だった。

「にゃー！ー！ー！」

それに一番ビビったのは、他でもないなのは（大）だった。見た目が大人になっても、猫のような悲鳴を上げている。

「何これ、何これー！ー！？」

『落ち着いて下さいなのはちゃん』

「は、ルビーちゃん？」

やっとその存在に気付いたというか、はっとしたなのはが涙目でルビーとレイジングハートが融合した杖に話しかける。

見た目と中身と行動のギャップが凄かった。

「ああ！なんでなのは、大人になっちゃってるの！？」

『うおお！！方向を変えての天井！？』

「胸が大きい！！はやてちゃんに驚掴みされちゃうよー！！」

『しかもガールズ的なトーク？今日のなのはちゃんは突っ込みどころ満載ですー！！』

エンドレスになりかけている。

「なのはだ」

「なのはね」

「なのは以外の何物でもないな」

「なのは・・・」

「皆さん、あのやり取りで高町と判断するのは少し可哀そうでは？」

士郎、美由希、恭也、ユーノ、クロノの順番だ。

さっきまでの、死を覚悟した決意は何だったのだろうか？

スーパーシリアスタ임は終了か？

なのはとルビーのやり取りはあまりにも何時も通りだった。

「なのは？」

「あ、お父さん」

呼ばれて気がついたなのはが近づいてくる。

家族以外の男性陣はそろってあらぬ方向を見た。

外套のデザインは着物のように、胸の部分の合わせ目が開いているので、胸の揺れ具合がよく分かるのだ。

どうも、ブラに類するものがついていないらしい。

まあ・・・8歳児には必要ない代物ではある。

「ん？どうしたの皆？」

「今は放っておきなさい。それよりも本当になのはなのか？」

「うん」

につこりと・・・外見年齢とはギャップがある天真爛漫な笑いになるのは面影があった。

「お父さん、無事でよかった」
「う、ん」

そして抱きつかれた。

なのはにしてみれば、大事な家族の無事をその身で確かめたかった
だけなのだろう。

しかし、いきなり途中経過を省いて大人になってしまった娘は、妻
によく似た初対面の女性でもある。

娘相手に不埒な思いを抱いたりはしないが、それでもドキドキする
くらいは見逃してほしいところだ・・・っと、そんな風に考えてい
た時期が高町さん家の士郎さんにもありました。

「ぐお!!」

もうね・・・悲鳴というか断末魔というか、声の主である士郎にも
分からないものが口から洩れた。

なのはが思いつき抱きついているその両手が、士郎の体を締めあ
げている・・・サバ折り？

『なのはちゃん、なのはちゃん?』

「え?」

『士郎さんを放してあげないと、ちよつと危なくなってますよ?』

「にゃー!」

やっと自分が父親の百面相の原因だと気がついたなのはが、士郎を
解放するとどさりと言う感じに地面に崩れ落ちた。

「だ、大丈夫か親父?」

「ほ、骨は逝っていない」

何とか大丈夫だったらしい。

内臓的なものを吐き出さずに済んだようだ。

「な、何でいきなりこんな事に？」

『今のなのはちゃんが魔法使いだからです』

答えは、なのはが握っている杖から来た。
ルビーの声だ。

「ま、魔法使い？なのはが？」

この場合の魔法使いの意味を、なのはは知っている。
それがどれだけ途方もない事かすら、おぼろげながらに理解している。

『はい、限定的ではありますがけど、間違いなく第二魔法の魔法使いです。8歳児ボディでは反動を受け止めきれないので、肉体ごと上書きしました。今のなのはちゃんには無尽蔵とも言える並行世界の魔力が流入していますから、素で肉体強化がMAXです。気をつけないと指先一つでダウンですよ』

アベシとかそういう意味だろうか？

アベシな具合に弾けるのか？

士郎の顔が真っ青だ。

魔法使いであることの意味は、魔術師でなければ理解しがたい。
ここにいる面子の中で、その意味を知る事が出来たのは高町家一同だけだ。

『そして、同時に魔導師でもあります』

レイジングハートが補足説明を入れてくる。

「え？え？魔法使いで、魔導師？何でいきなりなのはが魔法使いになっちゃうの？」

『それは、ルビーちゃんが元々、魔法使いを探すための礼装だからですよ』

「え？魔法使いを探すための礼装？」

『正確には、“魔法使いになれる可能性”を持つ人を探すための礼装なんですけどね。そんな事は全部丸ごと置いときましょう』

ルビーがこの話はここまでと流れをぶった切った。確かに、先にやらなければならぬ事がある。

『いいですかなのはちゃん？今のなのはちゃんは間違いなく魔法使いの一人です。人間が持てる力のほぼ限界点にいますと言っていいでしょう。しかし、それでもシロウさん・・・あの守護者の人には勝てません』

『姉さん！！』

レイジングハートの警告に、複数の事が同時に起こった。

まず、十数本の武器が降ってきて、なのはを中心に円状に突き立つ・同時に爆破、なのはの視界は巻きあがった地面の色に塗りつぶされる。

『右です！！』

「つつ！？」

土煙を切り裂き、シロウが迫って来た。左右に持った白と黒の中華剣を振りかぶっている。

なのは右からくる黒の剣を杖で、左の白い剣を手甲で受けるが、体重の差によって跳ね飛ばされる。

「このつくらい！」

『アクセルフィン』

後ろに飛ばされながら、なのはは飛行魔法を発動した。

地面に叩きつけられることなく、そのまま空に駆け上がる。

「つきゃあー！」

それを追って、ロケットのような速度で武器達が追ってきた。自分に向かってくる刃の群れを反転し、わずかに体をずらし、急制動を織り交ぜて避けるが、逃げる空間をつぶすように武器は迫る。

「くっ」

『ジェノサイド・カーニバルですよ。なのはちゃん！！』

「その名前いやー！！！！」

いやでも何でも、魔法は発動した。

再び、複数のデイベインバスターが同時に放たれ、なのはに迫る武器を消し飛ばしてゆく。

「こ、これ何？」

『あはあ、その言葉を待っていました！これこそ第二魔法の真骨頂！！多重次元屈折現象！！並行世界のデイベインバスターをちょっと拝借してきてなのはちゃんは完全無敵の魔砲要塞となるんです！！！』

「何か、字が違ふ気がする」

意味はよく分らないが、目に見えるものは一大スペクタクルだった。

イメージ的には、巨大生物に向かってゆく連合軍の戦闘機達？

噛ませ犬な彼等は当然、怪獣に傷すらつける事が出来ずに退場してゆくわけだが、殲滅される剣達はまさにそんな感じである。

殺戮の祭りというネーミングも、そんなに的外れではない。

怪獣の立場に立てるというのは、かなりレアな体験だというのは分かるが、それを楽しんだり喜んだりするのは色々と難だろうとなのはは思う。

『なのはさま、大きいのが来ます』

「レイジングハート!？」

空を飛ぶなのはの死角、真下からシロウが狙っている。

黒弓に番えたのは捻じれた剣、宿った魔力が紫電となってほとばしっている。

カラドボルグ
「偽・螺旋剣」

「デイベイン・バスター!!!」

打ち出されたカラドボルグに対し、なのはは周囲をなぎ払っていたデイベインバスターの光芒を一点に集中した。

十数本の桃色の砲撃と、空間すら抉り取る螺旋の魔弾が激突し、大爆発を巻き起こす。

「なんだ・・・これは・・・」

啞然と空を見上げるクロノが呟いた。

全員が空を見上げ、二人の戦いを見守るしかない。

こんなものは人間の介入できるものではない。

例えるならば、世界を作り出した創造神と、すべてを打ち抜く破壊神の戦いだ。

神話に語られるような神々の戦いを前にしては、人間はただ見上げ恐れるしかない。

『何をしているんですか!?!』

「「「「「っつ!」「」「」

完全に心を奪われていたところにきた、念話による怒声は聞こえた者達の心臓を握りつぶすかと思うほどの威力があった。

「これは・・・ルビー?」

高町家のメンバーは魔導師ではないので、念話の主に気がついたのはユーノが一番早かった。

『そうですよ、呆けないでください!』

「わ、悪かった。しかし僕達に何か出来るとは思えないぞ?」

クロノが申し訳なさそうに答える。

助けるどころか、近づく事さえ危険だ。

あの戦いには非殺傷指定などない、巻き込まただけで命にかかわるだろう。

『そんな事は分かっていますよ。助けなんて期待していません』

思いっきりストレートに返されて、クロノ達アースラ組が軽くへこむ。

見た目は大人とはいえ、中身は8歳の子供への手助けなど期待されていなかったらしい。
どん底までへこむ。

『さつきも言いましたが、なのはちゃんは限定的な魔法使いでしかありません。今は拮抗状態を作れていますが、時間が経てば負けます。だから・・・』

「なのはがこっちにくるよ？」
「何？」

美由希が指さす方向を見れば、数多の武器に追われながらも空を逃がっているなのはの軌道がこっちを向いている。

「あ、あれ！！」

そのまま、頭上を通り過ぎたのはが何かを落とした。
きらきら光る青い石だ。

「ジュエルシード？」

ひょっとしたら必要になるかもしれないと、リンディからレイジングハートに返されていた残りの5個だ。

クロノ、ユーノ、土郎、恭也、美由希があわてて受け止める。

『急いで残りのジュエルシードを封印してください』

「どう言う事だ！？」

『世界崩壊の危機を招いているのは突き詰めて考えればジュエルシードです。なので、ジュエルシードを封印し、差し出せばプレシアさんは彼の目標から外れるかもしれない。ほかに方法はありません！！』

残り15個、プレシアが発動させたジュエルシールドは、あっちこっちに散らばっていた。
未だに力を放出しているその一部は、どう見ても戦場の真ただ中に在る。

「あれを、封印してまわれって言うのか？」

戦いに巻き込まれかねないのは勿論、普通に発動状態のジュエルシールドは危険な代物だ。

『時間がないんです!!』

「・・・分かった」

クロノは武装魔導師達を振り返る。

「聞いた通りだ。決死隊を募る。拒否しても恨まない」

・・・全員が手を上げた。

「ここまで来て何をいまさら」

「世界が消えるかどうかって時です。やってみる価値はありますよ」

脱落者はいなかった。

「しかし、高町さん？貴方達は・・・」

「私達もいくぞ、封印している時の護衛くらいにはなるだろう」

「僕も、防御魔法くらいは使える」

「高町さん、ユーノ・・・すみません」

本来、こんな命がけの状況に一般人を連れて行くわけにはいかないが、今は少しでも成功の可能性を上げたい。彼等が素人では無い事が素直にありがたかった。

「・・・本当にバカばかりね？」

蒼い顔に不敵な笑みを乗せて、憎まれ口をたたいたのはプレシア・・・。

「本当に時空管理局の連中は使えないわ」

「母さん!!」

「プレシア、アンタ・・・誰の為に皆頑張ってると思ってんだい!？」

フェイトに縋りつかれ、アルフに睨まれてもプレシアは動じない。

「仕方ないわ、フェイト? 貴女も協力してやりなさい」

「え？」

「億劫だから聞き返さないでほしいわね、この連中に協力しろって言ってるの」

この場においてさえ、あくまで上から目線の物言いだった。

「やってくれるんでしょう? 母さんのお願いよ」

「で、でも・・・母さんが一人に・・・」

「人形に心配されるいわれはないわ」

人形という言葉に、フェイトがビクリと反応する。プレシアはそんなフェイトから目をそらした。

「ちっ、行こうフェイト。こんな奴巻き込まれてしまえばいいんだ」
「で、でも・・・」

「それでいいのよ。さっさと行きなさい。目障りだから」

まだ迷っている風のフェイトの手を掴み、アルフが連れて行く。
後に残ったのは、プレシアとアリシアを入れたポットだけだ。

「・・・ごめんね、アリシア・・・貴女を生き返らせてあげる事は・・・
できないかもしれない」

急旋回、急滑降、そこから更に上昇してループを描きながら左右に
体を振つて的を絞らせない。

「はあ・・・はあ・・・」

まさに無限とも思える剣を掻い潜りながら、なのはは自分の限界を
意識し始めていた。

限定的とはいえ、魔法使いになったのはだが、その中身は変わ
らず8歳の女の子のままだ。

こんなドッグファイトまがいのをしながら、斬られるかもしれない
恐怖と闘う経験など無い。

プレッシャーに今にも気を失ってしまいそうになる。

『なのはさま、来ます』

「つつ!」

レイジングハートの言葉に反応して旋回すると、目の前を赤い剣が
通り過ぎて行った。

偽・螺旋剣ほど問答無用な威力はない。

しかし今度の剣は、避けたのには対して軌道をねじ曲げて再びか
かってくる。

フルンディング

『赤原猟犬です。解き放たれたら最期、敵の血を吸うまで追いか
まわすという伝説の魔剣です』

「なにそれ、こわいよ」

『全くです』

再度避けるが、これまた方向転換してなのはを追いかける。

「そつれなら!!」

『デイベインシューター』

桃色の魔力スフィアが4つ飛んだ。

フルンディング

赤原猟犬と短い攻防の後に相打ちとなる。

『後ろです!!』

「つつ!!」

フルンディング

赤原猟犬に気を取られている間に、シロウの接近を許してしまっ
ていた。

初見で、地面から数十メートルジャンプして襲いかかってくるのを
予想しておけというのも無茶な話だが、左右から襲いかかってくる
白と黒の刃は待ったなしだ。

『プロテクション』

魔法陣が盾となる。

防御は一瞬・・・一瞬で砕かれた。

「きゃああー!!」

プロテクションが破られた反動を、なのはがともに食らった。
直に刃を受けるよりはましだが、飛行魔法を維持できなくなったな
のはが墜落する。

「「なのは!!」」

空からたたき落とされ、地面に落ちたなのはに士郎と恭也が叫び声
を上げる。

「大丈夫です。あの程度ならバリアジャケットの防御力で」

「まだ封印は出来ないのかユーノ!?」

みんな必死にやっている。

それは分かっているが言わずにはいられなかった。

「それが・・・」

見れば、ジュエルシードは個々が干渉しあっているのか、魔導師達
の封印魔法がなかなか効いていない。

一つ一つ封印してゆくしかないのかもしれないが、それではあまり
に時間がかかりすぎる。

「フェイト!?」

「はやく、しないと・・・」

アースラで観測したフェイトの魔力値はクロノよりも高かった。
そんな彼女を加えても、封印作業は遅々として進まない。

そうこうしている間にも、剣がなのはの落下した場所に殺到してゆく。

「なのは！！」

次の瞬間、桃色の竜巻が吹きあがった。

「はああああ！！！」

キシユア・ゼルレツチを使い、数を増やした桃色のスフィアが、なのはを中心に嵐のように周囲を回転して剣を撃墜している。

いくらなのはが常識はずれの才能の持ち主だとしても、これほどの数のスフィアを制御する事は出来ない。

せいぜい単純な軌道モーメントを設定してそれに沿って動くようにするくらいが関の山だが、今はそれで十分だった。

迫りくる剣と、スフィアが相打ちになって行く……しかし所詮は苦肉の策だ。

『なのはちゃん、これ以上はなのはちゃんが持ちません！！なので、スフィアを解除すると同時に最後の賭けに出ましょう』

「わ、わかったよ……」

なのはも、己の限界は感じているらしい。

よくて後一撃……それに全てを込めるしかない。

『レイジングハート？』
『はい』

ルビーとレイジングハートの杖が組み換わって行く。
一度分離し、新たなパーツの下で再構築されたそれは、杖ではなかった。

銃と弓を組み合わせたような武器、大人のなのは身長ほどもあり
そんな巨大な武器だ。

『カレイド・ステッキ砲撃バージョンですよ』

なのはは、完成したそれを左手で持ち、右手で弦を引く。
たったそれだけの事で、周囲の魔力が武器に集まり出した。

収束系の砲撃魔法、並行する世界から魔力を集める事が出来る第二
魔法のルビーならば造作もない事だろう。

しかもここには、世界をバックアップにしたシロウの魔力と互角の
戦いをしたなのはの魔力が飽和状態になっている。

この場でそんな物を使ったら、たとえ非殺傷指定でも間違いなく相
手を殺してしまうが、それくらいの事をしなければ、シロウの足止
めは出来ないのだ。

『なのはさま、もうすぐスフィアの防御が消えます。敵は正面』
「わ、わかったよ」

弓銃を構えるなのはは、緊張で滑りそうになる右手の指を意識して
強く弦を握った。

自分の中に渦巻いている魔力が怖くなる。
ディバインバスターなど問題にならない、本来はフェイト用に開発
したなのはの奥の手だ。

やがて、スフィアと剣による総力戦はほぼ互角のまま終わった。

幕になっていた桃色のスフィアが消え、シロウの姿が見える。

「え？」

『あーあれは！？』

シロウは逃げも隠れもしていなかった。

堂々と正面で剣を構えている。

黄金の輝きを放つ星の剣だ。

『エクスカリバー約束された勝利の剣の真名解放！？まずい、なのはちゃん！！先に撃ってください！！』

「ス、スターライト……」

『エクス約束された……』

なのはが弦を離すのと、シロウが剣を振り下ろすのは同時だった。

「ブレイカー！！！！」

『カリバー勝利の剣』

純白の光が、砲口から放たれた。

地面を刻みながら、文字通り星すらも砕かんと駆ける。

迎え撃つのは、星から作られたという最強の幻想（ラストファントズム）、贗作とはいえ、世界という存在のバックアップを得たそれは、本物に勝るとも劣らない輝きを放っていた。

両者の激突は一瞬……一瞬で、世界が砕けた。

「うつつ……！！」

破壊の余波に投げ出されたなのは、地面に体を打ちつけてうめき声を上げる。

気がつけば、半壊したホールに戻ってきていた。

スターライトブレイカーと約束された勝利の剣のぶつかり合いは、エクスカリバー
アンリミテッド・ブレイド・ワークス
無限の剣製の世界すら破壊したのだ。

『な、なのはちゃん』

なのはが元の、彼女本来の8歳の姿に戻っていた。

元々限定された力・・・ルビーも時間がないと言っていたその限界が訪れたのだろう。

「・・・・・・・・」

半ば気を失っているなのはに、シロウが近づいて行く。

あのぶつかり合いですら、シロウを打倒するには至らなかったようだ。

世界という存在の加護を得た守護者の力・・・その手には一本の剣が握られていた。

「なのは！！」

士郎の呼びかけにも、なのはは答えない。

魔術の基本は等価交換、身に余る力の行使に、反動が来ているのだ。言葉は現実の状況に対して、あまりにも無力だ。

「待ちなさい」

しかし、シロウの歩みはその一言で止まった。

「貴方の目的は・・・私でしょう?」

プレシアだ。

青ざめた顔のまま、血の気のない笑みを浮かべて立っている。

「母さん!!」

プレシアの行動に気がついたフェイトが叫ぶ。

「そんな小娘を気にしている暇があるのかしら? 貴方は私を殺しに来たんでしょう? 私はここにいるわよ?」

挑発している。

元々シロウは、プレシアを殺すためにこの場に現界したのだ。優先順位はやはりプレシアの方が高い。

「プレ・・・シア・・・さん?」

「貴女はそこで寝ていなさい、お嬢ちゃん」

起き上がろうとしたのはを、プレシアが睨む。

既に、シロウは目標をプレシアに切り替えていた。

『ダメですプレシアさん!!』

「母さん、逃げて!!」

ルビーの声にも、フェイトの声にもプレシアは答えない。ただ、その笑みが深くなったような気がする。

「・・・・・・・・」

しかし、そんな事はシロウには関係ない。

手の中に作り出した長剣を振りかぶり、プレシアに斬りかかった。それを受けるプレシアは避けない……。いや、もしかしたらすでに避ける余力すら残っていないのか？

「母さん!!」

娘の声を聞いたプレシアは、覚悟を決めたのか目を閉じた。
その頭上に、銀の刃が振り下ろされ……。

「ふむ、何やら面白……。いやいや、物騒な事になっているようじやの？」

「え？」

……。振り下ろされなかった。

初めて聞く声に、閉じていた目を上げれば、伝説の一瞬を切り取ったような光景が目の前にある。

大上段から剣を振り下ろすシロウ……。そしてその刃を、七色に輝く宝石の剣で受け止め、白髪を獅子のようになびかせる老人。

「だ、だれ？」

「うん？ワシか？言っても理解できんとは思うが……。ワシは……」

『何美少年でもないくせに、颯爽登場しているんですかこの爺？あなたの青春はとっくの昔に謳歌し終わっているでしょう？』

名前は、悪意を飽和状態にまで含んだ声に遮られた。
声の主はルビーだ。

どうやら、この老人の事を知っているらしい。

「ルビー・・・お主、相変わらず口が悪いのう?」

そして、老人もルビーの事を知っているようだ。
毒を含んだ言葉に、老人はニヤリと笑って返す。
二人の関係の深さが見えた気がした。

「ルビーちゃん、誰なの?」

『このくつそ爺はですね』

「初めましてお嬢さん?」

ルビーの説明を遮って、老人がなのはに話しかける。
好々爺の笑みだ。

「ワシはキシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグと申す」

それは現在存在していると言われる4人の一人にして、「魔道元帥
ゼルレッチ」「宝石翁」「万華鏡」カレイドスコープ「宝石のゼルレッチ」などの二
つ名を持つ第二魔法の魔法使いの名であり、並行世界を放浪中で消
息不明のはずの本人だった。

第十九話 魔法使い（後書き）

ほとんどの布石がばれました。

自分のルビーに対する考察というか予想はそう言う事になります。ルビーの能力はその人間の可能性を引き寄せることですから、はっちゃけ爺さんが未完成ではなく完成した状態でルビーを封印したのならその用途はおそらくこの辺りだろうと思うわけです。

封印した理由の方に関しても、大まかにですが予想も出来ます。ちなみに今日は自分の誕生日だったりするんですね。

第二十話 英霊さんいらっしゅい

「久しいなルビーよ。しかし守護者を相手取るなど、無茶をするのう？」

突然乱入してきた老人は笑う。

強大な敵を前にしていながら、不敵に、楽しそうに、この状況でそんな表情が出来るところが、彼の性格を表しているような気がする。

『誰がやりたくてこんな事しますか、呆けたんですか爺？』

「ふむ、それもそう・・・か！」

ぎりぎりの所を、切り返しの刃が通り過ぎた。

感情を全く宿さない鋼色の瞳を見て、タラリと老人・・・ゼルレッチの顔に冷や汗が流れる。

「大斬撃」

老人が宝石でできた剣を振る。

同時に世界がずれた。

それはそのまま空間の刃となり、頭上の死角から襲いかかってくる剣を文字通り一閃して斬り飛ばす。

その機械的な容赦のなさにも寒気を感じるが、それより今ゼルレッチが使ったのは…

「これは・・・ルビーの？」

「ルビーも出来るだろうが、ワシのほうが元祖だ。マダム？」

プレシアの言葉にゼルレッチが反論する。

拘りでもあるのだろうか？

そのまま振り抜いた宝石剣が地面を両断、不可視の絶対的切断力を持つ大斬撃の刃を、シロウはかるうじてかわすが、よけきれなかった外套が世界のズレに巻き込まれて切断された。

「時の庭園が・・・」

大地を割った斬撃は断崖を作り出し、両者の距離を広げながら離れて行く。

大斬撃の一振りは、時の庭園その物を真つ二つに両断していた。以前、なのはとルビーが見せた物とは威力も規模も段違いだ。

『ルビーちゃんとなのはちゃんだつてやろうと思えばこれくらい』

ちよつと悔しかったのか、ルビーがそんな事を言っているが、聞き流そう。

下手に突っ込んで『あはゝ私達と爺、どっちが上か試してみますか？』などとどこぞの幻な拳の打ち合いになっても困る。

「しかたないとはいえ、会話に剣で乱入してくるとは無粋よのう？」

ゼルレッチが、離れて行く大地の半分を見ながらそうやれやれな顔をしていた。

どうやら確信犯でやったようだ。

人様の家というか城というか、そう言うものを真つ二つにしてこの反応・・・相当に面の皮が厚いと見た。

『相変わらずはっちゃけてるようですねゝ年寄りの冷や水って言葉を知れてかんじですよ』

「ル、ルビーちゃん？助けてもらったのに失礼だよ。す、すいませ

ん・・・えっと、ゼルレッチさん？・・・あれ？」

ゼルレッチの名前を口にしたなのは記憶に引っ掛かるものがある。
キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグの名を知っている？

「聡い子じゃな？いかにもワシが君が持っているルビーの生みの親
じゃよ」

「ルビーちゃんの？」

そう言えば、ルビーは力を開放する時の呪文の中に、創造主として
ゼルレッチの名前を含めていたと思いだした。

『色々和中二病な二つ名を持っているくそ爺でファイナルアンサー
ですよなのはちゃん』

「そ、それはちよつとなの」

ルビーが上機嫌な声でそんな事を言うてくる。

しかも黒い。

今のルビーはとっても黒かった。

「えっと、ルビーちゃんはゼルレッチさんの事嫌いなのか？」

『嫌いですね』

即答だった。

こんな反応をするルビーは初めてで、なのはは本気でどう返してい
いのか悩む。

「クククツすまんのお嬢さん、ルビーがワシを嫌うのは仕方な
い事なのじゃよ」

「あ、ゼルレッチさん」

「何せ、完成した直後にワシ自らの手で封印したのだからな、責められるべき咎はワシの方にあるっ？」

「え？」

ルビーが、作られてすぐに封印された？

それはなのも知らない。

確かに、率先して話すような内容でもないが・・・。

「じゃあ、ルビーちゃんはそれで拗ねているんですか？」

『なのはちゃん？勝手にルビーちゃんをツンデレキャラ設定したらプンプンですよ？』

「ご、ごめんなさい」

表面的にはふざけているとしか思えないが、なのはは素直に謝った。何となくだが、これに関しては安易に聞いたり踏む込んでいいとは思えないものを感じる。

虫の知らせという奴かもしれない。

そんな二人のやり取りを見ていたゼルレッチがニヤリと笑った。

「重畳重畳、ルビーよ？良いマスターに巡り会えたようじゃな？彼女がそうなのだろう？」

『・・・それはそうと、やたらとタイミングよく出てきましたね。出待ちしてたんですか？それともなのはちゃんの雄姿に惚れでもしましたか？』

無理やり・・・ルビーが誰から見ても明らかに話の方向を変えた。ゼルレッチの問いかけに、何か追及されたくない内容が含まれていたのだろうか？

当のゼルレッチも、ルビーの挙動不審に気が付いていないわけではないだろうが、あえてそれを問いただすことはしない。

『通報するかどうかの選択肢ですのでは是非ストーカー行為をしてい
たと白状してください。幸いにも近くに警察モドキな人たちがいる
んですよ』

「そんな事をせんでも、最初からお前が候補者の証を立てれば、創
造主と製造物としてのパスが通ってワシが召喚される事になってお
っただけの事よ」

『んな！？このエロ爺！！乙女の体になんて物付けているんですか
！？なのはちゃん、ルビーちゃんが汚されちゃいましたー！！』
「え、えつと・・・」

胸の中に飛び込んできた長杖を受け止めて、なのははどうしたもの
かと困惑する。

あのルビーがこうも一方的にやり込められるのを見るのも初めてな
ので、リアクションに困る。

そんな思いのこもった瞳でゼルレッチを見れば・・・力力カツと愉
快そうに悪魔超人のような笑い声を上げていた。

役者が違うようだ。

「しかし、こんな並行世界の果てで、これまた珍しい才能を見出し
たものじゃの〜」

「は、はあ・・・」

間違いなく自分の事だろうが、何と答えればいいのか分からない。
じろじろと見られて緊張する。

「なるほど、この世界の魔法と魔術の両方を扱える逸材か・・・」

緊張だけですんでいるのは、ゼルレッチの瞳の中にある好奇心の色
のおかげだろう。

まるで子供のような・・・おもちゃを見つけた時のような目だ。それがなければ、ルビーの言う通り変質者認定されても文句が言えなさそうではあるという感想は内心だけにとどめておこう。

「さて、お嬢さん？」

「なのはです」

「ではなのは嬢、横に避けなさい」

「ニヤ？」

ゼルレッチに突き飛ばされた目の前を、銀の輝きが通り過ぎた。輝きは剣の形をしている。

「ニャー！ー！！レイジングハート！！」

『デイベインバスター』

剣が飛んできた方向を見て悲鳴を上げつつ、なのはが杖を構えるとタイムラグ無しにデイベインバスターが放たれた。

桃色の砲撃が迫ってきていた剣の群れをまとめて消し飛ばす。

「・・・・・・・・」

その破壊を掻い潜ってシロウが来た。すでに白と黒の中華剣を構えている。

「話に口ではなく力で割り込んでくるとは、事情は理解できるが本当に無粋かな？」

「ゼルレッチさん！」

「下がっておれ」

ゼルレッチがなのはを背にかばって前に出る。

なのはの見ている前で、シロウとゼルレッチの戦いが始まった。無数に放たれる大斬撃を、培った心眼を頼りにシロウが避け、反撃に放たれた剣をゼルレッチが空間を歪めて反らし、受け流し、あるいはシロウに向けて返す。

それはシロウと魔法使いとなったなのはの戦闘に匹敵するほどのぶつかり合いだが、明らかに習熟の時間差を感じさせる戦いだ。

なのはのそれは所詮借り物ではないが、この二人の戦いは全て彼等の力だ。

「守護者と真正面からやりあう事になるとはな、久方ぶりに血が騒ぐぞ」

魔法使いの一角が笑う、嗤う、嗤う、ワラウ。

強大な魔力を、一切の制限なく行使する姿は畏怖の対象だ。

「すごい」

放たれる七色の魔力、伝説の武器が飛び、交差する。

「わ、私も・・・」

なのはもゼルレッチの援護をしようとするが、一步踏み出した所で膝をついてしまった。

一時的にはいえ、魔法使いの力を制御する事はまだ幼いなのはには厳しく、体力を消耗しすぎている。

「ルビーちゃん、手伝って・・・」

『なのはちゃん、これ以上の無茶はダメですよ』

「でも・・・」

半人前の魔術師が、守護者を相手にここまで時間を稼げたのは十分すぎる戦果だ。

なのはがいなければ、ゼルレッチが来る前にプレシアは勿論、ここにいる全員の命がなかっただろう。

何より目の前のゼルレッチとシロウの戦いに、素人のなのはが介入できる隙など無い。

それが本物と借り物の差なのだろうか？

「おい、ルビーよ？」

戦いの最中でありながら、ゼルレッチが話しかけてきた。

世界をバックアップに持つシロウを相手にこの余裕、流石・・・「こりゃちつとやばいかも知れんぞ？」・・・でもなかったようだ。

「ええええええ！？」

『はあ？あなた仮にも本当の魔法使いでしょう！？』

あまりにもあつさり言われて、その内容を理解したなのはが叫び、ルビーが突っ込む。

「仮は余計じゃ仮は。ええい、無茶を言うではないわ！世界一つ分の魔力を供給されている相手にどうやって勝てというんじゃ？」

だんだんと、ゼルレッチの顔に余裕がなくなってきた。

大斬撃の乱れ撃ちと、剣による絨毯爆撃による境界線がゼルレッチの側に近づいてきていた。

『こつの耄碌爺！！玉と砕け散るくらいのちよつといいところを見せなさい！！』

「ルビーちゃん、それこそちよつとなの！！」

読んで字のごとく玉碎である。

それでいてちよつと良い所レベルらしい・・・ハードルが高すぎるだろうと二人の会話が聞こえていた全員が思った。

「こりゃ、本格的にまずいか？」

そんな事を聞かれても困るしかないのだが、ゼルレッチが防御に回る率が多くなってきた。

対してシロウの猛攻は衰える事がない。

『赤い月を殺った時のようにちよいってやってくださいよ!!』

「ワシも歳じゃからな、全盛期のようにはいかん」

『こんな状況で老けこむな爺!!』

「何・・・この緊張感のなさ？」

結構命がけなのは間違いない。

それなのに会話だけ見れば漫才のようなのだ。

なのはが茫然とつぶやくのもやむなしだろう。

近くにいるプレシア何か、展開について来れずに目を丸くしている。

「むう、お嬢さん？」

「は、はい？」

「どうにかならんかのう？」

「いや・・・そ、そんな事言われても・・・」

いきなり話を振られても、なのはにとってはどうしたものかである。忘れてはいけない。

才能を持つてはいても、なのはは8歳児で半人前の魔術師なのだ同時に、こんな状況で考えることでは絶対にならないが、間違いなくゼ

ルレッチはルビーの生みの親なんだな」と理解した。
この無茶ぶりはルビーに通じるものがある。

「あ、そう言えば！さっきルビーちゃんがジュエルシードを封印して差し出せばあの人も見逃してくれるかもって！！」

「ジュエルシード？」

「あれです！！」

なのはが指さす方向には、未だに魔力を放出し続けているジュエルシードがある。

「なるほどのう、あれが守護者が現界した理由か、ならばあれをどうにかすればいいわけじゃな？」

言うほど簡単にいかない。

起動しているジュエルシードの15個はそれぞれに干渉しあっていて手が付けられない状態だ。

クロノ達が総出で封印作業にかかっているのに、まだ封印が完了していない事の意味を考えれば、どれだけ困難なことなのか想像もたやすkarou。

「ルビーよ。別にあの宝石を封印せねばいかんというわけでは無かるう？」

『は？』

「あの魔力、使いきってしまえ」

・・・これまたとんでもない事を言い出したものだ。

数個を同時起動しただけで、世界を破壊することさえ可能な代物が15個、それだけの魔力をどうやって使いきれというのだろうか？
下手な事をすれば、そのまま世界の崩壊につながるというのに・・・

それは封印するよりリスクが高くて困難な話だ。

『このはっちゃんけ爺は、無茶にも程があるでしょう？』

「やかましいわー!!」

ルビーに言われたくないだろうが、無茶なものは無茶だ。

「なんかこう、ぶわわわわ々な感じで何かないか？」

『アバウト来たー！ー！！』

ゼルレッチ翁がお茶目なのかそろそろ本気でやばいのか考えものだ。

「ルビーちゃん？」

『何ですかなのはちゃん？』

「どうしたらいいなの？」

なのはのまともさが清涼剤のようだ。

ゼルレッチとルビーでは話が進まない。

『うーん、そうですね、方向性を与えてやればいいだけですから、ジュエルシードの魔力をまとめて消費できるようなとんでもない魔術でも使えばいいわけですけど』

ジュエルシードの魔力のケタが違う。

これを一気に使い切るほどの魔術とはどれほどのものだろうか？

基本的に、魔術師は魔力の確保に血眼になる事が多い。

魔力がなければ魔術の行使も実験もおぼつかないからだ。

それなのに使いきれないほどの魔力を前にして使いきれないようなとほざいている現状はぶん殴られても文句が言えないほど贅沢な

のだろう。

状況さえ許すならだが。

『うーん、とにかく魔力をやたらめったら使えばいいわけですから・
・あ』

ルビーが分かりやすく何か思いついたらしい声を上げた。

『この理論なら・・いや、でも・・この状況じゃリスクが・・
』

「ルビーちゃん！思いついたんならやってみようよ！！」

『なのはちゃん・・わかりました〜！！』

ルビーの迷いをなのはが掃う。

ならばあとは行動だ。

『なのはちゃん！まずはプレシアさんゲット！！ここにいたらあぶ
ないですからね！！』

「了解！！」

ここからは阿吽の呼吸だ。

状況に置いてけぼりを食らっていたプレシア拉致って、なのはが飛
ぶ。

「つつきゃーーーー！！」

プレシアが外見を裏切る可愛い悲鳴を上げているが気にしない。

『ジュエルシードの所へGO〜！！』

当然だが、飛んで行くのは達にシロウが気がつかないわけがなかった。

すぐにそちらに攻撃の矛先を変えようとするが、その前に再びゼルレッチが立ちふさがる。

「今しばし、時間稼ぎにつきあって貰おうか？語り継がれる英雄よ？」

「・・・・・・・・」

シロウは何も答えない。

戦闘が、闘争が何よりの言葉と言わんばかりに、苛烈な攻撃を再開した。

「到着！！」

「え、なのは？つきやああああ！！」

「フエイトー！！」

勢いがつき過ぎたなのは達がジュエルシードの封印をしていたフェイトに激突して、テストロッサ親子がもみくちゃになっているのも気にしない。

二人揃って目がナルトになっているが無視だ。

後で誠心誠意謝ろう。

「な、なのは？」

いきなりの事にユーノがびっくりしている。

封印作業をしていた魔導師達の手が止まっていた。

『レイジングハート、この魔法陣を！！』
『了解しました』

なのはを中心に、桃色の魔法陣が展開される。
しかしそれは何時もなのはの使っているミッド式の魔法陣ではない。
魔導師達が初めて見る形・・・魔術師の魔法陣だ。

「何をするつもりだ！？」

なのは達に気がついたクロノが声をかけるが、なのは達は止まらない。
い。

『そしてジュエルシードをここに！！』

暴走状態の１５個だけではない。
クロノ達に託していたジュエルシードも合わせた２０個のジュエル
シードが、魔法陣を中心にして円状に並ぶ。

「ルビーちゃん、次に何をすればいいなの！？」

何をするつもりか、これから何が起こるかすら聞かない。
なのははルビーを信頼して、ルビーはなのはを信じている。
故に、なのははただ自分のやれることだけを問いかけるだけだ。

『呪文を、レイジングハート』

『はい、なのはさまにインストール、行きます』
「受け取ったよ！！」

良いコンビネーションだ。

礼装のルビー、デバイスのレイジングハート、そして主であるなの

はの完璧な連携が取れている。

「何するつもりなの？」

「なのは？」

『しゃらーっぷ！お二人はただそこでじっとしててください！！』

「は、はい！」

事情説明を求めたプレシアとフェイトがルビーに怒鳴られて素直に黙る。

アドリブに弱いのは血筋だろうか？

二人はなのはの傍でべたんと座って置物と化した。

『魔力の導入はルビーちゃんが、収束と制御はレイジングハート、なのはちゃんが魔術の行使で行きます』

『承知しました姉さん』

「うん、わかったよ！」

『危険ですからしまつていきましょう』

全てのジュエルシードが輝きを放った。

おそらくはルビーがジュエルシードを発動させたのだろう。

「なんて事を、世界を滅ぼすつもりか！？」

クロノ達が戦々恐々となる。

次元震を押さえるだけで精一杯だったというのに、すべてのジュエルシードが発動してしまつてはもうどうにもならない。

しかし、その中心、魔法陣の中心に立つなのはの周囲だけは静かだった。

「……………魔術回路、全力全開」

なのはの声は凜として、喧騒の中にあつてなお、この場にいる誰もがその声を聞き取った。
同時に、なのはの魔術回路に桃色の魔力がほとばしり、文字通りの全力で起動開始する。

「素に銀と鉄礎に石と契約の大公。 祖には我が大師シュバインオーグ。」

降り立つ風には壁を。 四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

呪文だ。

なのはが呪文を唱えている。

周囲のジュエルシールドの魔力が、強引になのはに集められていた。肉眼で見えるほどに濃密な蒼の魔力の中で、なのはの瞳はここでないどこか遠くを見ている。

トランス状態という奴だろう。

もはや誰の声であろうと、今のなのはには届かない。殺されても今のなのはは気がつくまい。

これが魔術師の行使する魔術だ。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。 繰り返すつどに五度ただ、満たされる刻を破却する」

だれも、こんな呪文は知らない。
そして長い。

魔導師であっても、強力な魔術の行使には呪文を必要とする事があるが、つまりなのははそれだけ強大な魔術を行使しようとしているという事を全員が察する。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

朗々となのはが呪文を唱える姿は、神に祈りを捧げる巫女のようにも見えた。

ジュエルシードの魔力が渦を巻き、流れ、収束してゆく。

世界を滅ぼすほどの魔力は、8歳の少女の意のままだった。

魔術師だろうと魔道師だろうと、生涯でこれほど巨大な魔力を制御する機会などまずあるまい。

「誓いを此处に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

呪文が完成した瞬間、集められていた魔力が派手に爆発した。

「やったか？」

シロウを足止めしながら、ゼルレッチは背後で行われた魔術が完成した事を悟ってニヤリと笑う。

苛烈に攻め立てていたシロウの攻撃が止んでいた。

世界の、霊長の危機を回避する為だけに存在する守護者の動きが止まるという事はつまり……。

「せ、成功したの？」

トランス状態から現実に意識を戻したなのはが眩く。
すでに魔法陣は消え去り、ジュエルシードもない。

蒼いかけらが宙を舞っているところを見ると、どうやら魔力を完全に放出して砕け散ったようだ。

「ルビーちゃん、何したの？」

ここでやっと、なのははルビーに問いかける。

今更だが、なのはは何の魔術を使ったのかすら分かっていない。

ジュエルシードが消失した以上、当座の危機は去ったと思うのだが？

『ムフフゝ成功しましたよ』

ルビーがやたら上機嫌だ。

何かいい事でもあったのだろうか？

『なのはちゃんもそれは感じたんじゃないですか？』

「うん、うん」

確かに、あの魔術を使っていた時に何かをつかんだ感覚はあった。
間違いなく何かに手が届き、それを手繰り寄せた感覚がある。

『あれこそ、サーヴァント召喚の魔術です。過去の英霊を呼び出す魔術ですよ』

「え、英雄？」

『はい、本来は聖杯のような強大な魔力を必要とする魔術ですけど、今回は代わりになるものがありましたから』

つまりそれがジュエルシードという事だろう。

ルビーの話によれば、サーヴァントは存在しているだけで大量の魔

力を消費していくらしい。

使いきれない魔力を消費するにはうってつけ、それでもまだ余るようならシロウにぶつけて魔力を消費してもらおうと言うのがルビーの狙いだったようだ。

幸い、ルビーの生みの親であるゼルレツチは、疑似聖杯の作成にも協力していた過去があるらしい、そのあたりから英霊召喚の魔術のデータを流用出来たのでこの計画を速攻で考えたとの事・・・やはり一筋縄でいかない杖だ。

「え〜っと、つまりなのは使い魔を召喚する魔術ってことだね？
その子に魔力を吸収させて使い切ろうって事？」

『そうですよ〜』

とはいえ、かなり高レベルな魔術なので、なのはは大分端折り重要な点だけ理解した。

懇切丁寧に説明されても、今のなのはでは理解しきれない。
ルビーも気にしじゃない風なのでそれでいいのだろう。

「ねえルビーちゃん？その使い魔さんは何処？」

『そこにいるでしょう？』

「うっん、いないよ？」

『は？』

これは完全に予想外だったのか、ルビーが素で驚く。

確かに、周囲にはなのはとプレシア、フェイトしかいない。
召喚したはずのサーバントの姿は何処にもなかった。

『え〜うっそだ〜凜さんじゃあるまいし〜なのはちゃんがうっかり？』

本人が聞いたなら怒り狂うような事を平然と言う。

それでも、やはり現実にサーヴァントの姿はない。

なのは何かをつかんだような気がすると言っているので、魔術その物は成功しているはずなのだが・・・空を見上げててもサーヴァントが落ちてくる様子はなかった。

『おつかしいですね、本当ならここになのはちゃんにぴったりの英雄がいなきやおかしいのに、どこ行っただでしょう？・・・ん？』

何所かでぴしりという音がした。

静かになったこの場において、その音は思いのほか良く響き、全員の視線が一点に集まる。

「アリシア？」

プレシアが茫然とつぶやく、音源はアリシアの入っているポッドだ。そのガラスの表面にクモの巣状のひびが入っている。

戦闘に巻き込まれて壊れたか？

そんな事を考えている間にも、ヒビは大きくなっている。

まるで本当にひな鳥の孵化の瞬間のように見えて、全員がわけのわからない期待にゴクリと唾を飲んだ。

「え？にゅあー！ー！？」

「なのは！？」

とっさになのはの名前を呼んだのがだれかを確認する事さえできなかった。

皆に見ている前で限界に達して破裂したポッド、その中から何かが一直線になのはに向かって行ったのだ。

影しか見えないほどのスピードで、誰も反応できない。

反応した時には既に、その何かはなのはの下に到着してしまっていた。

「にゃー！ー！ああああ！！」

しかし、なのはの状態もまた普通じゃなかった。

自分に向かってきたものが何かを考えるより早く体が動いていた。自分にとびかかってきた物に両手を差し出し、掴んだと思ったら体をのけぞらせて巴投げというか投げっぱなしジャーマンの如く背後に投げ飛ばしたのだ。

基本的になのはの運動神経は切れているはずだが、人間極限状態になると信じられない事をやらかすものらしいと、なのはは実体験で理解したがそれは後での話だ。

今のなのはは絶賛パニック中である。

「な、何何何！？」

『なのはちゃん、落ち着いて下さい』

「え？」

自分が投げ飛ばしてしまったものが何なのかと振り返ったなのはは、そこにいる“人物を見て目を丸くした。思考が停止する。

「アリシア・・・ちゃん？」

見間違えようもなく、フェイトによく似た金髪に顔立ち、ポッドの中にいた少女が、“死んでいたはず”の彼女は自分の両の足で地面に立っている。

その姿もまた、ポッドの中にいたときと同じ、一糸纏わぬ姿だが、

彼女はそれを隠そうともしない。

何より彼女自身、今の自分の姿に興味など持つてはいまい。

感情を感じさせない瞳が安っぽいガラス玉のようだ。

感情のない瞳に見つめられたのはが、恐怖に身を固くする。

「アリシア!？」

傍にいたプレシアが断言した。

という事はなのは目が悪くなったのでも、幻を見ているわけでもないという事になる。

間違いなく目の前にいるのはアリシア・テストロッサだ。

「・・・マスター」

「え？」

機械的に、あるいは自動的に発されたような平坦な声に、なのはは自分が話しかけられたのだという事に気がつくまでわずかに時間がかかった。

「マスター、アナタノオナマエヲ・・・」

「マスター？なのはの事？」

「ナノハ・・・マスターナノハ、リョウショウ、アリシア・テストロッサ・・・サーヴァント・・・」

「え？あちよつと!？」

ふらりと、力が抜けて倒れこんできたアリシアの体を、なのはは思わず受け止めた。

「痛つつ!？」

なのは手がアリシアに触れた瞬間、左手に痛みが走ってなのはが顔をしかめた。

直後に、アリシアの体重が完全になのはにかかって来る。その“温かさ”になのはがはっとした。

「生きて・・・る？」

温もりがある。

暖かい。

それは生きている証拠、ついさっきまで、間違いなく死んでいたはずの少女の体には、確かな命の脈動が感じられた。

「アリシア！！」

なのはの言葉に反応したのか？

それとも娘の姿に色々な感情が噴出したのか？

プレシアがあわててアリシアに手を伸ばす。

なのはも、それに逆らわずにアリシアの体をプレシアに引き渡した。プレシアは受け取った娘の体を手早く自身が来ていたマントでくるんだところはさすが母親と言うべきか。

『まさか・・・こんな事になるなんて・・・』

ルビーの言葉も硬い。

本人の言うとおり、この状況は予想していなかったのだろう。

「ど、どう言う事？」

『どうやら本当に彼女がなのはちゃんのサーヴァントのようですね』
「ええー！？」

なのは驚いた。

これは間違いなく驚くべき状況で、驚かざるを得ない状況だ。
ルビーが言っている事はつまり、アリシア・テストロッサがなのは
の使い魔になってしまったという事だから・・・死んだ人間が生き
返っただけでなく、なのはのサーヴァントになってしまったなどと、
予想出来ていたらそれは確信犯だ。

『うーん、これはルビーちゃんのうつかりですねー最初から失敗も
考慮していたとはいえ、この展開は想定外です』

「意味不明にも程があるよ！説明して！！」

『召喚の時、近くにいたのは誰ですか？』

「え？プレシアさんと、フェイトちゃんがいたよね？」

『それと、アリシアさんのポッドも近くにありました。ずばり、そ
れが原因です』

「は？」

『その二人も、術式の一部に組み込まれちゃったんですよ』

サーヴァント召喚の術式は、過去の英霊を呼び出す魔術だ。

本来ならば、英霊ゆかりの聖遺物を用いて召喚をおこない、召喚す
る英霊を特定する。

しかし今回の場合、そんな物を用意する暇はなかった。

この場合、なのはにゆかりの英霊か、近しい性格の英霊が召喚され
る。

『そこで、プレシアさんとフェイトちゃんとアリシアちゃんの遺体
です』

魔法陣の中にいたプレシアとフェイトの存在が、魔術を歪めたのだ
ろうとルビーは考える。

プレシア
フェイト
根源と、同一存在、そして何より、本人の遺体というこれ以上ない

遺物が英霊召喚の触媒として作用し、アリシア本人をこの場に呼び出したのだろっ。

「で、でもアリシアちゃんが英霊？」

『似たような前例ならありますよ』

事実として、神とは名ばかりのなんの力も持っていない人霊がこの術式によって召喚された事がある。

「でも生身だよ？ちゃんと触れたし、幽霊じゃないよ？」

『問題はそこなんですよね』

魂と肉体は切り離せない縁でつながっている。

召喚されたアリシアの魂がその縁で肉体に牽かれ戻ったと考えるしか説明のしようがないが、アリシアの肉体は生命活動を停止していたはず・・・文字通りの生き返り？

しかもサーヴァントと名乗ったがクラスが分からないと来ている。

正直な話、正体が不明すぎて訳が分からない、受肉した英霊・・・と言っているのかさえ迷う存在だ。

ルビーも何らかのイレギュラーが起こる事までは想定のうちだった。本来ならば、きちんと入念に前準備をして行う魔術儀式をこんなやつだけで執り行ったのだ。

問題が起らない方がどうかしていたのだが、基本的に英霊を呼び出せればそれでよかったので、『まいつか、えい！』な感じで決行してしまった結果として何が起こるかをあまり考えていなかった。この状況はジュエルシードの魔力を使い切ったという意味で予想通り、その結果何故かアリシアがよみがえってしまったという意味で予想外の様相となっている。

『これ以上は検証なしには分かりませんよ？』

「う．．．ん？」

そんな会話をしていると、タイミングよくと言つべきかアリシアが目を覚ましたらしい。

一瞬、あの透明な瞳を彼女の瞼の先に想像したなのはが身を固くするが、目を開けたアリシアの瞳は人間のそれだった。

「アリシア？」

「どうしたの、ママ？」

「本当にアリシアなの？」

プレシアの問いかけに、アリシアはその意味を測りかねているように見える。

それも当然だろう。

寝起きにいきなりお前は本物かと聞かれて、その意味を理解して答えろと言つのはちょっと難しい。

「変なママ、私は私だよ」

「そう．．．そうね．．．」

プレシアはそれ以上何も言わなかった。

それだけで十分だと言つように娘を抱きしめる。

瞳からはとめどなく涙があふれて伝い落ちていた。

「なんでだろ？すごく長く寝過しちゃっていた気がするの、それにとつても怖い夢を見た気もするの．．．」

それは．．．彼女が命を落とした時の記憶なのだろうか？

「そう、怖かったの．．．大丈夫、それは夢よ」

プレシアは大丈夫、大丈夫と繰り返す。

長い時間を経て、願い、求めて成就した母子の再会・・・それですべてが終わればこの上なく理想的な終わり方だが・・・。

「フェイトちゃん？」

「は、はい？」

「何でなのはの背中にくっついてるなの？」

何時の間にかぴったりと、なのはの背中にフェイトがいる・・・というかしがみついている。

手とか握っているのは無意識だろうか？

何となく子猫を庇っているようなイメージがわいてくるが、これっていい事なのだろうか？

「ご、ごめんなさい」

「・・・いいんだけどね」

フェイトの複雑すぎる家庭事情を考えれば、隠れたくもなろうとなのはにだってわかる。

母親と思っている女性が、自分とおなじ娘、あるいは元となった少女と再会しているのを見て何も感じないわけがない。

なのはは、この後どう言う展開になったとしても修羅場以外の選択肢を考えつかないので、背中を貸すくらいの事は訳がないのだが・・・。「あ、ママ？あの子誰？」・・・そう言う時に限って目ざとく見つけたりたくない人間に真っ先に見つかる物だ。

その理屈に従ったのかどうか、隠れているフェイトをアリシアが見つけた。

「つつ！？」

なのはの背中でフェイトが息を飲む。

「大丈夫、大丈夫だよフェイトちゃん」

「なのは・・・」

プレシアがアリシアに向けた言葉をなのはがフェイトに贈る。

握った手からフェイトの震えが伝わってくる。

何か本当に迷子の子猫を保護しているような気がしてきた。

涙目のフェイトを思わずお持ち帰りしたいな〜とか思ってしまったのを意志の力でねじ伏せる・・・そんな場合では無い。

内面での戦いは理性が勝った。

『なのはちゃんも目覚め始めてきましたね〜？』

「ルビーちゃん？」

『何でもありませんよ〜フフフ』

思いつきり妖しい笑いだった。

やがて、フェイトも覚悟を決めたのか、なのはの背から出て横に並び立つ。

二人の手はつながれたままだ。

「わ、大っきくなつた私がいる」

「・・・」

その言葉に、フェイトは何を思っただろうか？

フェイトは何も言わずにアリシアを見ている。

誰もが今目の前の状況を忘れて見入っていた。

喉を鳴らす。

——プレシアは、娘の疑問に何と答えるだろうか？

フェイトはある意味でプレシアの罪その物だ。

そしてその罪はアリシアの為に犯した罪だ。

プレシアはそれを告白できるのか？

貴女の為にやったと言えるのか？

そして・・・それに対してアリシアの反応は・・・答えは？

プレシアは迷い、戸惑い、そして悩んでから、二人の娘を見る。

「アリシア・・・フェイトは貴女の・・・え？」

プレシアは最後まで語る事が出来なかった。

何故ならば、プレシアの体を貫通するほどに深く、剣がその胸に突き刺さったのだから・・・。

第二十話 英霊さんいらっしやうい（後書き）

・・・あれ？

予定ではここで本編を終わらせる予定だったのに・・・あれ？

しかもアリシアの英霊化なんて思いつきり思いつきで書いてしまいました。

最近、作品が自分の手を離れて暴走します。

第二十一話 パンドラの真実

きつとこれでみんな良くなるだろうと・・・思っていた。

娘を取り戻した母親が、きつと元の優しい彼女に戻ると・・・いろいろな障害はもちろんあるだろうが・・・それでも不器用にでも、少しずつ家族三人・・・ああ、もう一人、使い魔の加えて四人か？四人で良くなつて行けると言う・・・これで悲しいことの全てが終わったと思っていたのが悪かったのだろうか？

気を抜いていた事は罪か？

それは、やっとわかりあう事が出来るかもしれないかった母親の胸に剣が突きたてられるほどに大それた望みだっただろうか？

わからない・・・わからない・・・。

ああ・・・そう言えば誰かが、誰が言ったのかは思い出せないが、世の中はこんなはずじゃなかった事ばかりだと言っていた。

きつとその通りなのだろう。

きつと、プレシア・テストロッサの胸に剣が突き刺さっているのは、こんなはずじゃなかった事のはずだ。

——夢は終わる。

啞然として、自分の胸に刺さっている剣を見降ろしているプレシアという現実がそこにある。

「母さん!-!」

「ママ!-!」

フェイトとアリシアの言葉が遠くに聞こえる。

その胸から生えている剣が、とても眩しく光を反射していた。

「貴様!!」

「おまえか!？」

誰もが振りかえる。

こんな事をする奴はこの場に一人だけだ。

抑止の使者・・・エミヤシロウ・・・彼はただ、黒い洋弓を構えたまま、静かに残心している。

その当然という姿に、全員の頭に血が上った。

「なのは!？」

だが、誰より早く逆上したのは他でもないのはだった。

全員の脇を、桃色の砲弾となったなのはが通り過ぎる。

一直線にシロウの元へ、迎撃されるなどと、全く考えていない。

カウンターを放たれれば避ける事も出来ないだろう。

だが、予想に反してシロウは動かなかった。

何もせずになのはを受け入れ、そして・・・パンと乾いた音がした。
シロウの頬で・・・。

「…………ええええ!？」

なのは以外、その他全員の怒りは純粋な驚きに塗りつぶされた。

なのはの一発で、シロウがふらついたのだ。

ほぼ無敵と・・・否、まさしく無敵と言って差しさわらない守護者にダメージを入れた？

しかもビンタ一発で？

「・・・なんでかな？」

「・・・・・・・・」

頬を叩かれたシロウと、なみだをぼろぼろながしているなのはが
いる。

なのはの顔に表情はなく、ハイライトが消えている。

なのに、なのはの全身から放出される意味不明な威圧感とはドドド
とかゴゴゴとか擬音をつけたい感じた。

それを見た全員が、本能的に感じる何かにビビる。

「フェイトちゃんもアリシアちゃんも、プレシアさんも・・・みんな
これからだったのに、これから始まるはずだったのに、なんでこ
んなひどい事するんですか？」

なのはの言葉は静かだ。

しかしそれは彼女が冷静であると言う事では無い。

むしろめちゃくちゃに怒っているのがわかる・・・きっとそれは憎
悪というべきものに匹敵するだろう。

「・・・答えてください」

「・・・・・・・・」

シロウは答えない。

言い訳不要と思っているのか、言葉の自由意志すら許されていない
のか、それは分からない。

なのはの目の前にただ黙って立っているだけだ。

『なのはちゃん・・・』

「うるさい！！ルビーちゃんは黙ってて！！」

今のなのはにはルビーの声も届かない。

ただ激情に任せて、シロウを睨んでいる。

「えーっと、お嬢ちゃん、落ち着いて」

「だからうるさい！！落ち着けるわけない！！この人はやつちやいけない事をしたんだよ！！」

「私の事で怒って貰えるのは嬉しいんだけど、大丈夫だから」

「何を言っているんですかプレシアさん！？プレシアさんが殺されちゃったんですよ！？……ってあれ？」

何かがおかしいと、なのはも気がついたようだ。

真後ろから聞こえた声は、なのはの勘違いでなければプレシアの物だ。

そして、プレシアは死んだはずで……それなら、なのはと話していたのは誰だ？

「ええええええええ！？」

振り返ったなのはが見たのは、薄ら笑いを浮かべているプレシアだった。

理解不能すぎたり、もうどうしようもない状況になった人間は、文字通り笑うしかないらしいが、今のプレシアがまさにそうなのだろう。

何故ならば、プレシアの胸にはいまだに剣が刺さったままだから。

「なんで生きているの！？」

失礼かもしれないが本心だ。

胸に剣を突き刺して生きている人間などいるはずがない。

どう見ても即死に見えるのに、プレシアは倒れる事さえしない。

『そう言えば、昔ニユースになった矢ガモって結構長生きしたらしいですね』

「えい！！」

『痛い！！なのはフィンガーは痛い！！』

なのはが桃色に光って唸る手で、ルビーを鷲掴みして握りつぶそうとしている。

『姉さん、TPOをわきまえましょう』

『あーずるいですよレイジングハート！？何時の間に分離しているんですか！？おかげでルビーちゃんだけが命の危機！？』

疑問形にするまでもなく、壊れるかどうかな状況である。
デッド・オア・アライブ
みしみしと嫌な音がし始めていた。

「ルビーちゃん痛い？痛いの？やっぱり夢じゃないんだ」

『なのはちゃん！！そう言う事は自分の体で試すものですよー！！』

「ど、どう言う事！？プレシアさんと言い、アリシアちゃんと言い、テストロツサー族って不死身だったりするの！？実は人魚の肉とか食べてたりする！？三つ目の妖怪さんに魂を取られたとか！？残機はいくつ！？」

『なあー！！！！なのはちゃん興奮しないでー！！ほんとに壊れる碎ける割れる逝っちゃうー！！』

「はっ、ひょっとしてフェイトちゃんもリアルで伊達にあの世は見えてねえぜなことに！？」

バツと見れば、フェイトが涙目でプルプルと子犬の如く震えている。前にも温泉で見た事があるが、あれは脅えている様子だ・・・一体、誰に？

なんでそんな目でなのはを見る？

どうでもいい疑問とか結構信じられない疑問とかがぐるぐると渦を巻き、もう何と言うか緊張していた空気がグダグダで収拾がつかない。

シリ阿斯？

何それおいしいの？

ギャグメインの物語で何を期待してらっしゃったウサギさん？

腐ってやがる・・・早すぎたんだ。

「ママ？痛くないの？」

「ええ、痛くはないわ」

本当に痛くはないらしい。

アリシアの問いかけに普通に返している。

外見はともかく、内心ではこの場で一番取り乱しているのはプレシアのはずなのだが・・・。

「母さん？本当に大丈夫なんですか？」

「そうね、むしろ何か・・・あら？」

皆が見ている前で、剣が溶けるようにして消えた。

プレシアの体には傷一つない。

手品と違うのはこれが種も仕掛けもない事だ。

マジシャン達のそれはそう言いながら種も仕掛けもあるのだが、これは本当に種も仕掛けもなかった。

「ルビーちゃんせーつーめーいーい！！」

『いやー！！裂ける？げる潰れる千切れるー！！！！！！』

そろそろルビーが本気でやばそうだ。

『なのはちゃん!!ガタキリバ!!』

「ガータガタガタキリツバガタキリバ!!」

『ラトラーター!!』

「ラットラッター!ラトラーター!」

『サゴーズ!!』

「サゴーズ・・・サゴーズ!」

『シャウタ!!』

「シャシャシャウタ!シャシャシャウタ!」

『タジャドル!!』

「タジャドル」

『落ち着きましたか?』

「・・・なんとか」

本人達以外には、なにがなにやわからないやり取りの果てに、フーとダースベーターみたいな荒い息をつきながらもなのはが落ち着いた。

ただし、なのはの目はオームの攻撃色のように真っ赤だ。

普段物分かりがよく、手のかからない子だけに一度弾けると手が付けられなくなるらしい。

なのはの暴走振りに、高町家一同も含めて全員ドン引きしている。

あれはなのはじゃない。

なのはの姿をした白い魔王様だ。

「おけおけ、それでルビーちゃん?どう言う事なのカナ?なのは、気のせいかとんでもないことしちゃったって言う予感をひしひしとを感じるなの?」

思いつきり、全力全開のビンタをシロウにかましてしまった事だろうか？

なのはの頭にでっかい汗の幻が現れている。

『ちょっと待ってください。今確かめますから、プレシアさん？』
「何？」

『今どんな感じですか？』

「何か重い物が抜け落ちた気がするわ、体が軽いの。これって何事？」

『あ、やっぱり？』

ルビーはそれだけで納得できたようだが、ほかの皆は？マークを浮かべるしかなかった。

『え〜つとですね、多分ですけどあの剣は癒しか浄化の概念を持つ剣だったんじゃないかな〜と思うんです』

話を聞いていた誰かがロスト・ロギア？とか呟いたが、まさにその通りだろう。

『英霊だからって、誰でも出来るってわけじゃないですよ？シロウさんが色々な意味で規格外だから作り出す事が出来るんです』

「でも、何でそんな物を？」

『なんか、プレシアさんって結構致命的な病気だったみたいで、シロウさんはそれを見抜いていたんじゃないかと』

「「「「「何——！？」「」「」「」

全員の視線がプレシアに集中する。

「えっと、はい」

プレシアが素直に頷いた。
なのはが真っ青になる。

「えっと、つまり・・・？」

『シロウさんはプレシアさんの命の恩人って事になるのかもしれないね。大方、脅威が排除されたことで、世界からの制御が甘くなったんでしょう。残った魔力を総動員してあの剣を投影したんじゃないんですか？おいしい所といいところはきっちり抑えるのが正義の味方クワリテイ？』

案の定、シロウはその姿を急速に薄れさせていった。

元々霊体である彼は、自分を構成する魔力がなくなれば消えてしまう存在だ。

「にゃーーーーー！！ごめんなさーーーーーい！！」

なのはのやった事は、第三者から見ても責められたりする物では無い。

悪いのは、どう考えてもいきなりやかしたシロウの方だ。

人命救助とはいえ、事情を知らなければ殺人的な事をやかしたのだから。

「わ、私何にも知らなくて」

なのはがあわてて頭を下げたのは勿論、目の前にいるシロウだ。

たとえ自分がやった事が理屈として正しくても、知らなかったんだから仕方がないと、それで良しと出来ない潔癖なところがなのはらしいと言えるだろう。

フェイトという友人の母親の命の恩人にピンタをくれてしまった事

が、なのはにとつてはとんでもなく罪悪感だ。

「・・・・・・・・」

しかも、シロウからの返事はない。

言葉を取り戻していないのか、それともかける言葉がないと思っているのか判断できない。

純粹に怒っていると言う事もあり得るか？

「え？」

その代わり、シロウの手がなのはの頭に置かれた。

びつくりして顔を上げたなのはの頭を、シロウが撫でる。

まるでよくやったと、言葉の代わりに行動で示しているかのようだ。

「あ、あの・・・」

『シロウさん』

なのはの言葉をルビーが遮って声をかける。

何時になく強引だが、ここを逃せば、もう言葉は届かないだろうと思つたのかもしれない。

『私はこの世界では無い別の世界で、救われたあなたを見ました』

「・・・・・・・・」

『あの世界の貴方は、答えを見つけ、沢山の人に囲まれていました。正義の味方にはなれなかったけど、その世界の衛宮士郎さんに料理を教えたりして、幸せそうでした』

消えゆくシロウには、本当にルビーの言葉が聞こえているかどうか
も怪しいが、構わず語り続ける。

『だから、自分を責めないでください。貴方は救われていい人間なんですから』

全員の視線の集まる場所で、シロウの体が完全に消え去る。

まるで最初からそこに誰もいなかったかのように、何一つ残さずいなくなった。

それはまるで、冬の日に降るひとひらの雪のように……。

「ルビーちゃん？」

『……まったく、やっぱりシロウさんはシロウさんなんですな〜』

「やっぱり、あの人が前に話していた……」

『ええ……なのはちゃんは本当に気にしなくっていいんですよ？ 誰かの為につて、それだけを理由に戦い続けて裏切られて殺されてそれでも笑っていたようなそんな人です。なのはちゃんに叩かれた事なんて気にしちやいませんよ』

「そう……なの？」

ルビーの独白は、どこか愚痴にも聞こえた。

なのははそれに対して何を言えば良いのかわからない。
裏切るだの死ぬだの、物騒な単語が多い。

『だからこそ、道化師のルビーちゃんとしては、ほっとけないんですよな〜』

「ルビーちゃんはその人の事が好きなの？」

『あはあ〜シロウさんに惚れたら火傷するぜい？』

……あまりそのあたりは追及してほしくないのだろうか？
あえて追求しないのがカレンな乙女のポリシー。

「・・・ルビーちゃん？」

『はい？』

「きつと、ルビーちゃんの言葉はあの人に届いたよ」

『どうでしょうかね？』

「うん、だってあの人・・・消える瞬間に笑っていたもの・・・」

ルビーは適当に流そうとしている。

しかし、なのはは確かに見た。

完全に消える直前に、シロウの口元に浮かんでいた笑みを・・・。

「ルビーちゃんは間違いなく、あの人涙を止める事が出来たんだよ。なのはにはきつとできなかった。もつと頑張らなくちゃだね」

『フフフ、その考え方は、なのはちゃんらしいですね。愛してますよ、なのはちゃん？』

「よくやったな、二人とも」

ポンとなのはの肩に手を置いたのは、なのはの父の方の士郎だ。気がつけば周りに皆がいる。

なのはの家族も、アースラの武装局員も、それにプレシアにフェイトにアルフとアリシア・・・世界を敵に回して戦って、だれ一人欠けていない。

それどころか一人増えている。

それがどれだけ凄い事なのか、今は理解できなくてもきつと、時間と共に分かつて行くはずだ。

今はただ、生き残れたことに感謝しよう。

「さて皆、準備はいいか？」

クロノの言葉に全員が頷く。

これからやるべきことは明確だ。
何故なら、ここまでの戦闘とか魔術行使とかで虚数空間の穴が大きくなっている。

すでに時の庭園は半分以上が重力につかまって虚数空間に落下を始めていた。

「走れ！！生き延びろ！！」

了解の言葉は要らなかった。

弾かれたように全員が虚数空間から距離をとるために駆けだし、動けない人間に関しては手を貸して逃げる。

ここで犠牲が出てしまえば、ハッピーエンドで終われない。
全ては生き残ってから考えればいい事だ。

「生きてるって素晴らしいな皆！！」

「！！！！はい！！！！」

「お前たちの喜びはそんなもんか！？」

「！！！！NO——！！！！」

アースラのブリッジはとんでもなくテンションが高かった。

暑すぎるくらい暑かった。

温度上昇の原因はクロノを中心としたアースラの魔導師達だ。

彼等は生きている事の喜びを享受し、感動し、そしていろんなものに感謝していた。

「世界は美しい！！」

「！！！！イエース！！！！」

「そして僕達は輝いている！！」

「『『『『『オフコース!!』『』『』『』」

崩壊する時の庭園から脱出するに当たって、彼等は文字通り生と死の狭間を垣間見た。

隆起し、沈下する地面を必死で蹴り、走り、何度も「俺はもう駄目だ」「諦めるな!!」ってな感じでファイト一発的な友情ドラマがあった。

たった三十分程度の時間ではあったが、小説にすれば感動巨編で一冊出来るかもしれない。

そんな視線を潜り抜けてきた彼等のテンションはウナギ登りで、衰える事を知らなかった

彼らの絆は強固になったかもしれないが、正直ちょっとウザい。こいつら本当に元に戻るのだろうか？

「みんな、よく戻ってきてくれたわ!!」

「うわ、母さん!!」

リンディの感極まった声が響くついでに、クロノにダイブして抱きつく。

皆と言っているが、やはり息子が帰ってきてくれたことが一番うれしいのだろう。

旦那はすでに亡くなっていると言っていたので、彼女にとってのクロノは唯一の肉親かもしれない。

一人の母親としてのリンディが出てきても仕方がないだろう。

「なかなか老骨には響いたのう」

そして全然疲れた風に見えないくせに、一人だけどこから出したのか椅子に座っているゼルレッチだ。

「艦の長として、部下の命を救っていただいた事に感謝の言葉もありません」

「ありがとうございました」

リンディとクロノがゼルレツチに謝辞を述べる。

時の庭園からの脱出に際して、ゼルレツチも少なからず手を貸してくれた。

それがなければ、流石に全員生還とはいかなかっただろう。

「いやいや、ワシもなかなか楽しかった」

命の危機さえ楽しいと言うあたりで、この老人の感覚もぶっ飛んでいるな—と思うが、勿論それを口にしたりしないのが社交辞令とか人間関係構築のクワリティー。

ちなみに、あそこまで容赦なく時の庭園が崩壊したのは、爺の大斬撃乱れ撃ちが少なからない原因なのは間違いない。

「そう言えば、あの娘さん達はどうしたのかね？」

プレシアとフェイト、アルフにアリシアの姿がない。

「アリシアさんに関しては医務室に搬送しました。私達の経験上、一度完全に死亡した死者が蘇生した事例はなく、精密な検査が必要と判断しました。プレシアさんも、病を患っていたそうなので一緒に、フェイトさんとアルフさんは二人の付き添いです」

本当ならば、犯罪者として独房に入って貰わなければならないところだが、うち二人は病人と言うべきか悩むが、とにかく最低限の検査は必要な状態にある。

それならフェイトとアルフだけでもという考えもあるが、リンディ

の一存で四人まとめて医務室に放り込んだ。

今頃何を話しているのかは知らないが、あの家族に必要なのはゆっくり話す時間だと判断したからだ。

モニターで見ていた限り、逃亡の危険性もあるまい。

これでいきなり人間関係が良くなるなどと、安易で簡単で単純な事を考えているわけではないが、きつかけくらいになればいいと思う。

「あ、あの・・・」

会話が途切れるのを狙って、会話に割り込む声があった。

全員の視線がなのはに集まるが、なのはが見ているのはゼルレッチだけだ。

「何かな、なのは嬢？」

「なんで、ルビーちゃんを封印したんですか？」

それはとても直線的な問いかけだった。

『なのはちゃん・・・』

ルビーがどうにも言いづらそうな声を出す。

時の庭園でも、核心に触れそうになった所で無理やり話を逸らしていた。

追及してほしくはないのだろうとは思う。

「教えてください」

しかし、なのはに退く気はないらしい、それを見たゼルレッチがフムと頷く。

「それはのう。ルビーが危険だからじゃよ？」

「危険？ルビーちゃんは、それは確かに悪戯好きですけど・・・」

「少し説明が必要じゃな、なのは嬢？君はパンドラの箱という話を知っているかの？」

「え？は、はい・・・」

その名を出せば、大抵の人間が知っているだろう有名な伝説だ。かつて、この世の災厄の全てを詰め込んだ箱があった。

しかしその封印は一人の女、パンドラの手によって解き放たれる。

そのため、すべての災いはこの世に解き放たれ、世界は苦しみと貧困に満ちた。

己の罪深さに嘆き悲しむパンドラの耳に、かすかな声が聞こえた。閉じられた箱の中から、出してくれと訴えかける声だ。

恐る恐る、声の悲痛な訴えにパンドラは再び箱を開ける。

中から出てきたのは 希望・・・多くの災厄という名前の絶望が解き放たれたせかいにおいて、人間には希望が残った。

「なのは嬢は良く勉強しておるようじゃの？」

「あ、ありがとうございます。でもこれがなんでルビーちゃんの危険になるんですか？」

「それはのう、その話の真実にある。パンドラが希望を開放した事が美談のように思われておるが、そうではない」

「え？」

「本当は、希望は解放したが、その後続く最悪の災厄を箱の外に出さなかった事で、人間はいまだに生き続けていられるとそう言う話なのだよ」

災厄の詰まった箱の中に、希望という救いが入っていたという所からしておかしいと考えなければならぬ。

ならば希望もまた災厄のひとつかけらなのだ。

確かに人間の希望とは、出来るかどうか分からない事を前にして、曖昧なまま歩を進ませる。

その結果、引き返せない所にまで進んでしまう事もあるだろう。希望を現実に出来なかった時、そのすべてがむだになるかもしれない。

全ては解釈次第、世界は二面性で出来ている。

「それじゃあ、解放されなかった災厄って言うのは・・・何ですか？」

「前知 じゃよ。未来予知とも言っな」

『ルビーちゃんは限定的にはありますが、それが可能なのです』

話を黙って聞いていた全員がザワリと反応した。

だが、今は三人だけのターンだ。

『なのはちゃん？たとえばなのはちゃんが翠屋の二代目になりたいと思います』

「う、うん」

『でも、本当になれると思いますか？』

「そ、それは頑張れば・・・」

『それが 希望 です。そしてルビーちゃんは並行世界からなのはちゃんが“翠屋の二代目になったなのはちゃん”の可能性を引き寄せる事が出来ます。しかし、もし並行世界の何処にもなのはちゃんが翠屋の二代目になる未来がなかったとしたらどうですか？』

「え？」

そんな事、考えもしなかったとなのはは驚く。

『これが 前知 です』

並行世界はあらゆる可能性の世界だ。

その中に、夢に辿り着く可能性がないという事はすなわち、その人間の夢は絶対になかないという事を意味する。

占いとかそんなちやちな物ではない。

もつと確実に断定的なものであり、そこには希望すら残らない絶対的な事実だ。

『ルビーちゃんを使うと言う事は、そのまま自分の可能性の限界を知ると言う事に等しいんですよ。貴方はここまでしかありません、これ以上はどんなに努力しても無駄ですよって、はつきり線引きされちゃうんです。そしてルビーちゃんは礼装です。つまり扱える人間は魔術師ということ・・・』

魔術師はすべからく根源を目指し、魔法使いになることを夢見ている。

しかし、魔法使いになると言う事は喫茶店のマスターになることよりももつと難しく狭き門だ。

当然、その可能性を持つ人間も少ない。

希望を絶たれた人間は自棄になるか、それとも無気力になるか・・・魔術師は魔法使いを目指し、辿り着けなければ次代にその願いを託すものだが、どうあっても魔法使いにはなれないと断言されれば間違ひなく絶望する。

根源は、魔術師にとってそうまでして追い求めるべきものだ。

中には勿論、俗物的な権力などを求める魔術師もいないわけではないが、そう言う連中はそもそも根源や魔法使いに成る事を必要としていない。

「ふむ、今思い返せば若さとしか言えんな」

「若さ？」

「なのは嬢？君のような若い物には理解しがたいかも知れんが、自

分の辿り着いた境地を自身の死と共に失われる事を恐れたのだ」

根源に至る。

あるいは魔法使いになると言う事と、寿命が延びる事は同一ではない。

現に、魔法使いの一人である蒼崎は根源に辿り着いたのちに、数度の代替わりを経ている。

『この爺は昔から人望がなくて弟子に恵まれなかったんですよ』
「反論できんのが残念じゃの？」

ルビーが補足説明を入れてくる。

ゼルレッチが苦笑したのを見ると真実らしい。

つまり第二魔法は、初代魔法使いのゼルレッチの代でいきなり存亡の危機に陥っていたのだ。

「だから当時のワシはルビーを作ったのだよ」

第二魔法の結晶、カレイドステッキ。

それは第二魔法の全てを伝えるとともに、魔法使いになれる可能性を持つ人材を見出す目的もあった。

全く可能性がない人間に師事するよりは可能性がある。

魔術師らしい合理的な思考だが、同時に当時のゼルレッチの焦りをも感じさせる話だ。

「たとえ根源に至れる可能性を持っていても、必ずしも辿り着けるか分からんしな・・・それが焦りだったと言えば言えるじゃろう」

人間とはそんなに強い生き物では無い。

自分には魔法使いになれる可能性があると知れば、当然それに胡坐

をかいてしまう事もあるだろう。

樂をしたいと思ってしまう。

わざわざ厳しい道を選んで進む人間はいない。

ルビーを手に入れば、何の努力も無しに魔法使いの力を扱えるのだから・・・だが、ルビーのそれはあくまで限定的な魔法使いであり、ルビーがいなければ意味がない。

そんな物は所詮、魔法使いの紛い物だ。

あくまでフェイク、本当の魔法使いでは無い。

しかし、すでに老人だったゼルレッチにしてみれば、後継者が間に合わなければ、第二魔法は記録にしか残らない文字だけの存在になる。

そんな板挟みになったゼルレッチの思いを完全に理解できるのは、自身でも恭也と美由希に御剣流を教えている土郎と、母親である桃子とリンディくらいだろうか？

『結局その問題は、この爺が吸血鬼に噛まれて半ば不死化したことで解消されたんですけどね』

「え？ゼルレッチさんって吸血鬼なの？」

「ああ、ほれこの通り」

ゼルレッチが自分の長い犬歯を見せると、耐性のないアースラ組がどよめく。

本物の吸血鬼など、見るのは初めてなのだろう。

ゼルレッチは以前、朱の月という最高レベルの吸血鬼との一騎打ちの果てにこれを打倒したが、その最中に噛まれ、吸血鬼化した経緯を持つ。

「それに、この世界にも吸血鬼はいるようだし？」

ちらりと視線を向けられ、隅に控えていたさすがビクリと反応する。

幸い、それに気がついたのは高町家一同のみだった。

何か言いたそうなすずかだが、人の多いこの状況では話したくても話せないだろう。

ゼルレッチは頷いた。

それを見たすずかがほっとする。

「しかしルビーよ？お主もやはり道具の性からは逃れられなかったようだな？」

『よけーなお世話です』

結局、封印を解かれたルビーは、本来の目的である魔法使いになる可能性を持つ人間を見出した。

高町なのは、しかも彼女は魔術師としてだけでは無い。

魔導師としての才能も併せ持つまれに見る人材だ。

魔術師であり魔導師でもあり魔法使いにもなれる。

ルビーとレイジングハートが合一した事も、なのはの力を完全に使用する為には単体では不可能だったため、魔術と魔導の融合したあたらしい系統が必要であり、それが魔導術式というわけだ。それだけ彼女が規格外だという事を意味する。

「・・・ゼルレッチさん？」

「何かな？」

今まで黙っていた土郎が口を開く。

事は娘に関する事なのだ、父親として放っておくわけにはいかない。

「なのはがあなたの後継者になりうると言う事は理解しました。そ

のうえでお聞きしますが、貴方はなのはをどうするつもりですか？」

単純に考えれば、なのはを自分で育てたいと言いだすだろう。話だけ聞いていても、なのはの才能はとんでもない物らしい。

魔術でも魔導でもない、全く新しい系統などというものに才能だけでたどり着いてしまえるほどに、これになのは本来の勤勉さが加われば、どこまでいけるか誰にも想像できない。

指導者として、ゼルレッチがなのはの到達点を見たいと思う可能性は十分に考えられるし、もしも無理やりにという事にでもなればそれを阻む事が出来るかどうか分からない。

相手は魔術師の最高峰、魔法使いの一角であり、あの守護者を足止め出来る力の持ち主なのだ。

「ふむ、なのは嬢はどうしたいかな？」

「え？」

「君が望むならワシがじかに魔術を教えよう。あまたの世界をめぐり歩き、様々な物を共に見よう。君が一人で立てるようになるまで、キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグの名の下に、守ると誓う」

それは多くの魔術師が望む事だ。

破格の条件を、魔法使いの一人であるゼルレッチが保証してくれた。魔法使いから直々に教えを受けると言う事は、直系の弟子になると言う事に等しい。

つまり、次代の魔法使いの座を約束されたようなものだ。

魔法使いを夢見る誰もが全てを捨ててでも、差し出されたゼルレッチの手を掴むだろう。

「・・・ごめんなさい。ゼルレッチさん」

だが、なのはの答えは否だった。

「フム、理由を聞いてもいいかね？」

ゼルレッチはこれと言って落胆した様子は見せず、しかし差し出した手はそのままなのはを見る。

「わたし、この世界に家族がいます。お友達もいます」

「ワシが言うのもなんだが、こんな好条件は二度とないかも知れんぞ？」

「それでも、です。私は誰かの涙を止めたくて魔術師になりました。私のせいで誰かが悲しむなんて嫌です」

なのはの答えに、高町家の面々はほっとした顔になる。

8歳のなのはを、いきなり連れて行かれるようなことはなさそうだが、他の面子は、自分達が何かを言っていていい状況ではないと判断したのか黙っている。

「泣いている誰かの涙を止めるか・・・それは根源に至るより難しい事かも知れんぞ？」

「それでも、決めたんです。なのはは泣いている誰かに手を差し伸べる事の出来る魔法使いになりたいって。それになのはの師匠はルビーちゃんですから」

『なのはちゃん!!』

「おっとと」

感極まったのだろう。

ルビーがダイブしてきたのを、なのはが驚きながらも受け止める。

「ふむ、そう言う事か」

ゼルレッチが差し出していた手を引つ込める。

『そう言う事です。大体、廃人が死亡の二択しかないような貴方の弟子になるなんてルビーちゃんが許すと思っていたのですか？』

「「「「「え？」「」「」「」

全員が声を上げた。

「ル、ルビーちゃん？何それ？どういうこと？」

『この爺はですね、弟子を嫌な意味で可愛がりすぎると言うかスパルタ過ぎると言うか、とにかくみんな潰れちゃうんですよ。後継者がいないって言うのも、そう言う理由です』

「軟弱な連中が多いだけの事よ」

ルビーの説明を聞いてけらけら笑うゼルレッチ・・・しかし、それを見る目は全員白い。

本人は全く気にしていなさそうだ。

ある意味で、危険度はルビーと変わらないかそれ以上らしい。

『そんなわけで、今は才能のありそうな魔術師の家系に宿題を出して、自主的に根源に至れるのを首を長くして待っているわけです』

吸血鬼になったからこそ、そんな悠長な手が取れるのだろう。

逆説を言えば、そうしないとともに弟子を育てられないということだ。

魔法使いとしては優秀かもしれないが、師としての才能はないらしい。

「そ、そうなんだ」

なのはにはそう言うしかない。

数秒前にした自分の選択は正しかったと今ならはつきり言える。
少なくともルビーが師匠なら、死ぬ事も廃人になる事もないだろう。
やはり魔術師の世界というのは怖い物なのだと再確認できた。

「なのは、おめでとう」

「なのはちゃんよかったね」

「よかった。本当によかったよ」

皆がなのはの選択を祝福してくれる。

なのはを囲んで拍手してくれる。

「みんな、ありがとう」

『これで下が地球だったりしたら完璧ですね、個人的にはアニメ版より劇場版の方がいいと思うんですけど』

「あ、赤い海に取り残されるのは遠慮したいな、なのは」

なのはもなかなか通な事を言う。

「残念だが、仕方がない。年寄りはこの辺りでお暇するでしょう」

ゼルレッチが懐から宝石でできた剣を取り出した。

第二魔法使いであるゼルレッチの杖、宝石剣だ。

「あ、ゼルレッチさん？何処に行くんですか？」

「何、また並行世界をぶらっと流れる事にする。今回はなかなか面白い物を見れたしの」

本音だろうが・・・リアルに命にかかわる状況を体験して面白かったというエキセントリックな感覚は理解したくないとも思うのだ。

「それに、例の守護者のエミヤシロウ？その男にも興味がわいたしな」

『シロウさん逃げてくださーい！くそ爺があなたをロックオンしていまーす！ー！』

並行世界にいるシロウが、虫の知らせを聞いたかどうかは知らない。

「フフ、ルビーをよろしく頼む」

「は、はい。がんばりますありますがとうございました」

なのはに倣って、全員がゼルレッチに頭を下げる。

彼がいなければ、全員の生還などありえなかっただろう。

『余計なお世話ですよ』

そして、ルビーは変わらず悪態をつく。

全員の見ている前で、ゼルレッチが宝石剣を振るうと空間が裂け、並行世界への道がひらく。

ゼルレッチだからこんなに簡単にやってのける事が出来るが、十分に驚異的な事だ。

「ではな、皆の衆？また会おう」

『今度はお土産を持ってくるがいいのですよーお菓子とかお菓子とかお菓子とか』

「ル、ルビーちゃん」

生みの親との別れだと言うのに、この気楽さはルビー特有だ。

ゼルレッチが空間の裂け目に飛び込むと、斬り裂かれたハザマは自己修復するように閉じた。

これで、あの老人はこの世界の何処にもいなくなったのだろう。
ルビー同様、油断の出来ない、しかしどこか憎めない老人だった。
・・・そして、ジュエルシードをめぐる事件は、これで一応の
解決を見たのだった。

第二十一話 パンドラの真実（後書き）

何とか本編終了までこぎつけました。

次回はエピソード、来週までに書きあがるかはちょっと微妙です。更新されなかった時は、間に合わなかったんだと思ってください。

エピソード

・・・世界は崩壊の危機を迎えていた。
蒼い宝石の魔力によって、跡形もなく消え去るはずだった。
しかし世界はまだまだ存在し続けている。
変わらない日常を迎えている。

何故か？

その理由を知る者は少ない。
わずか20名ほどの集団が、この世界を救った事など誰も知らない。
それどころか、自分達が最後の時を迎えかけていた事さえ気づかないままだ。

ましてや、その中心にいたのがわずか8歳の女の子だったなどと・・・
・誰も思えない。

「うん、うん」

そんな誰にも知られず英雄的偉業を成し遂げた少女は現在、自分の部屋で唸っていた。

その日、なのはの部屋には一匹のUMAが出没していた。
その生き物の名前はタレなのは、スライムのように造形を崩してだれているのはだ。
見ようによつては実に可愛いが、本人は全く嬉しくないだろう。
世界を救った英雄どころか、女の子としてそれはどうよ？な有様だ。

当然だが、本人も別に望んでだらしなくしているわけではない。

「大丈夫、なのは？」

「ありがとうユーノ君、おみじゅー」

「ああ、はいはい」

二日酔いの酔っぱらいに見えなくもないが、今の彼女の状態は、医学的に言えば全身筋肉痛と診断される症状だ。

ちなみに、いまのなのは8歳児でありながら全身に湿布薬を装着している。

筋肉痛の治療など、ほかに方法がないので仕方がないのだが、おかげで臭いが凄い。

部屋に臭いがこもる。

「うっ、目にしみるの〜」

『筋肉痛って、その時よりも後で症状が出てきますからね〜』

「こんなにきついなんて知らなかったなの〜」

8歳児で筋肉痛の経験があつたらそっちの方が問題だろう。

一体何やらかしたのだと言う話だが、それに対しては世界を救ったからだと誰にも言えない理由がある。

なのはがこんな状態になつた原因は、魔法使いとしての力を行使したからだ。

過ぎた力は身を滅ぼすとはよく言ったもので、魔法使いとしての力の反動がなのはの体に筋肉痛として返ってきていたのだ。事件から数日が過ぎてもまだ復活できない。

『なのはちゃん？何時も教えてくださいますが、魔術師の魔術は等価交換が基本なんです』

まあ確かに、魔術師の中には魔術回路を構築する段階で死んでしま
う者もいるし、世界を救うなどといった偉業の代償と考えれば破格
もいい所だろう。

ここ数日はニユースが全部特番になって延々と災害ニユース三昧だ
った。

ジュエルシードが発動していた時、地球は地震と嵐がセットで荒れ
狂ってまさに末世状態だったらしい。

場合によってはリアルに北斗の拳の世紀末な世界になりかねなかつ
た。

一家総出にすずかまで加えてアースラにいた間、誰とも連絡が取れ
なかったアリサとハヤテに電話で怒鳴り倒されたのを鎮めるのが、
実は一番骨を折った。

「うう、ルビーちゃんがまともな事言っているの、もう終わりなの
かもしれない」

『ああ〜結構ひどい事言ってますよねーなのはちゃん』

「なのは、安静にしてなくちゃ駄目だよ」

なのはの看病を率先してやってくれるユーノには頭が下がりっぱな
しである。

更に小学三年生とはいえ、自分のダメダメな部分を見られて女の子
のプライドがボロボロと削られている。

家族は心配してくれるのだが、それぞれ仕事や学校という如何とも
しがたいものがあり、それならここは居候の出番とユーノが名乗り
を上げてくれた。

ところでフェレット姿でちょこちょこ頑張ってくれるのは見ていて
微笑ましいのだが、なんで人間に戻らないのだろうか？

彼なりに、なのはの退屈を紛らわそうとしてくれているのか？

「ユーノ君？」

「ん？何？」

「えへへーありがとうございます」

「う、うん」

なのはに微笑まれたユーノが真っ赤になる。

『ぴらりーん！なのはちゃんがニコポのスキルをゲットしました！これは逆ハールートのフラグ？』

「え？そうなの？」

『何でそこに食いつくんですかこのイタチは？まさかなのはーれむに参加したいとかぬかすんじゃないでしょうね？』

「作りませんから、なのはーれむなんて作りませんから！！残念！！」

視界の隅で、本当に残念そうにしているユーノなど見えないし知らない。

「ってあいたた！！」

なのはが痛みにつめいた。

びくびく痙攣している。

『そりゃあ、身動きも出来ない癖に叫び倒せばそうなりますよね？』

「ルビーちゃんのせいなの！！」

誰が、彼等がこの世界を救った英雄達だと言って信じるだろうか？

「・・・フェイトちゃん達、どうしているかな？」

あの後、なのは達は簡単な健康診断の後で家に帰ってくる事が出来たが、テストロッサ親子は、未だアースラの中で事情聴取を受けているだろう。

プレシアのやった事は、理由が理由だけに同情の余地はある。

しかし、事が世界崩壊に発展しかなかっただけに、情状酌量にも限界があるだろうとリンディとクロノは言っていた。

なのはもそれに関しては仕方がないと思う。

やはり罪は罪だ。

しかも、世界という絶対に取り返しのない物を失うかもしれないなかつた罪となれば、子供であるなのはにも、簡単に許されるものではない事くらいは理解できる。

それでも、出来るだけ軽い刑で済むといいなとなのはは思うのだ。

『・・・なのはさま？』

「レイジングハート？」

名前を呼ばれた事で、なのはが思考の海から帰還する。

騒がしい部屋の中で、唯一静かに黙っていたレイジングハートだ。

『時空管理局、アースラからの通信が届いています』

「か、帰って来た！海鳴臨海公園よ！！なのはは帰って来たなの！
！」

何かをやり遂げた達成感を得ながら、なのはは宣言した。

連絡を受けたのはがやってきたのは、海鳴の臨海公園である。
先日、ジューエルシードがとりついた木とやりあった所なので、帰ってきたと言つのもすべて間違いというわけでもないだろう。

未だに筋肉痛が治っていないのはにとつては、近所の公園に行く事さえまさに冒険でつしよでつしよだったわけだが、やり遂げたなのははどや顔だ。

キランと輝く歯が芸能人並に白い。

ともかく、そんな無茶を押して出てきたのは、レイジングハートが受けた通信の内容が、無理を押してまでやってくるに足るものだったからだ。

事情聴取が終わったアースラが、この世界を離れると聞けば無理をしてもお別れを告げに来ないわけにはいかない。

本当なら、バリアジャケットを展開して飛んでくるのが一番早く、無理も少なかったのだが、空を飛んでいるところを見られたらUMA（未確認生物）からUFO（未確認飛行物体）にクラスチェンジしてしまうので自重するしかかった事情もある。

なのはが魔術師で、強化の魔術を使えなかったら途中で行き倒れていたかもしれない。

筋肉痛と魔術行使のおかげでなのはのHPはそろそろ0である。

「もう、ゴールしてもいいよね？」

「いやいやなのは、待って待あって！！ここから、ここから始まるんだよ！！」

AIR風にゴールしそうになっていたなのはを、ユーノが引きとめる。

ちなみに、ユーノの他にはルビーとレイジングハートも一緒だ。
本当ならみんなも連れて来たかったが、何やら時間もないらしいの

でなのはだけで来たと言うわけだ。

『結界が張ってありますね』

「うん、リンディさん達が張ったのかな？」

公園の敷地に、薄い壁のようなものがあるのを魔術師としての感覚がとらえる。

おそらくは、認識障害か人払いの結界だろう。

かまわず、むしろより問題である筋肉痛を押して公園の中に入って行くと、薄い膜を素通りする感覚と共に、公園の外から見た時には気がつかなかった人物が公園の中に現れた。

おそらく視覚障害で、外からは見えなくなっていたのだろう。

「なのは！？」

内一人がなのはを見つけて声を上げると、全員の視線がなのはに集中した。

次いで、声の主である少女がなのはに向かって駆けてくる。

見覚えのある金髪の少女はフェイトだ。

「あ、あれ？な、何これ？何でフェイトちゃんからプレッシャーを感じるの？は、これはもしかしてニュータイプの目覚め？」

『いやゝただ単に本能が危険信号を発しているだけじゃないですか？』

「危険信号？」

ルビーの言っている事の意味が分からず、なのはは首を傾げるしかなかった。

『フェイトちゃん、走り込んできて抱きつく気満々に見えますけど、

今のなのはちゃんは全身筋肉痛だから生存本能が命の危機を訴えかけてきているんですよ』

なのはは血の気が下がる音を聞いた。

立っているだけで精一杯で避ける事も出来ないのに、このうえ飛び付かれた日には本当にゴールしかねない。

「フエ、フェイトちゃんちょっと待った!？」

残念、すでに阻止限界点は超えている。

フェイトはすでになのはに向かって最後の一步を踏みこんでいた。もはや止まる事は出来ない。

そして、くどいようだが全身筋肉痛のなのはに、人間ロケット・・・あくまでなのはの感覚で・・・を避けるような運動神経は残されていない。

現実は残酷である。

なのはは色々な物に別れを告げて目を閉じた。

次の瞬間、ドンとぶつかってきた物を受け止めたなのは・・・。

「Nyaaaaaaaaa!」

自分でも驚くような怪獣的悲鳴は、結界に阻まれて公園の中だけにとどまった。

防音結界万歳と言う言葉と共に、なのはは意識を手放す。

「うーん、うーん」

気がつけば、なのははベンチで唸っていた。

自分の部屋から公園のベンチに移動しただけで何も変わっていない。むしろベッドから木のベンチに代わって寝ぐるしい分でマイナスだ。

「ご、ごめんなさいなのは」

「き、気にしないでなの」

申し訳なさそうに、ベンチの横から覗き込んでくるフェイトに根性で笑みを返す。

「ごめんなさいね、そんな事になってるなんて知らなくて、言うてくれれば私達の方からお宅にお邪魔したのに」

「き、気にしないでください。ってだれ？」

紫の長髪をポニーテールにして、瓶底のような丸いレンズの眼鏡をかけている女性がいた。

しかも服装が・・・上下ジャージ？

あのポニーテールにしたって、おしゃれの為というよりは面倒くさいからひとまとめにしたと言う感じにも見える。

「えっと、多分プレシアさんだろうけれど、誰ですか？」

「プレシアよ」

「そんな、声まで変わってる!？」

『なのはちゃん、そのエステティックなネタが分かる貴女は一体いくつですか?』

魔法少女に年齢はNGだが、少なくとも精神年齢が8歳ではあるまい。

それはともかく、やはりプレシア本人ではあるらしいが、あの露出の高いドレスは？

女王様なプレシアは何処に行った？

ビフォーよりもアフターの方が見た目レベルが低くなるというのはどう言った理屈だ？

「この前はごめんなさい。貴方達には本当に迷惑をかけたわね」

深々と頭を下げる殊勝な彼女・・・なのはの知っているプレシアは娘命の唯我独尊女王様だったはずだが・・・本当に誰だこいつ？

プレシアに似た誰かほかの人間じゃないのか？

なのはがマジマジとプレシア（仮）を見ていると、隣に立っていたアルフがやれやれだぜな顔をした。

「なのはさん、混乱するのは分かりますけど、これがこの女の素の状態らしくって」

「なんですと？」

つまり、これが真というか素のプレシア・テストロツサ？

むしろなのは達が知っているプレシアの方が偽物？

娘の死が彼女を変えてしまったのだろうが、その本性は研究以外は割とずぼらだったと言うオチか？

「だって、これが楽なんだものゝジャージってきるのも脱ぐのも楽だし、所で何で駄犬はなのはちゃんの事をさんづけで呼んでいるのかしら？」

「駄犬言うなって、敬語なのは当たり前だろう？誰だってあんな極太砲撃で躰られてたまるもんかい。普通に死ぬるだろ？」

「そうなの？あのスターライトブレイカーって魔法にはおばさん驚いちゃったけど、あんなので躰るなんてなのはちゃん、怖い子！！」
「いや、いくらなんでも折檻でそんな事しませ・・・」

しませんと言いつれなかった。

あの時はディバインバスターだったがいっきりに前例があるし、アルフはそれを見ていた。

フェイトなんか、何を思い出しているのかプルプル震え出している。

「「「あいた!!」」」

嫌な沈黙を打ち破ったのは、ほぼ同時に三つの軽快な音がした。見れば三人が三人とも自分の頭を押さえている。

「母さんも姉さんもアルフも、病人を困らせるようなことしちゃダメ!!」

「「「はい、ごめんなさい」」」

三人がそろってなのはに頭を下げる。

犯人らしき人物は、片手に超特大ハリセンを軽々と持って構えている少女だ。

フェイトによく似た容姿と、共通する金髪でその正体がたやすく知れる。

「アリシアちゃん？」

「はい」

ぺこりとなのほに対して頭を下げる彼女は、間違いなく先日蘇りを果たした少女だ。

それに彼女は今……。

「フェイトちゃんをお姉ちゃんって……」

「はい、全部聞きました」

ずんとアリシアが沈む。

どうやら本当に嘘なく全部聞いたらしい。

「でも、それは全部私のせいだったんです。そして姉さんも、どんな生まれであつてもフェイト・テストロッサは私の妹でお姉ちゃんです」

・・・なんていい子なんだろう。

フェイトなんか涙目をウルウルさせているぞ。

「うう、ごめんなさいアリシアー!!」

・・・そしてこっちはなんてダメな大人なんだろう？

大人のマジ泣きしている姿なんて見たら、退く以外のリアクションがとれないんですけど？

「フェイトもごめんなさい!!」

「か、母さん・・・」

「こんな私をまだ母さんなんて呼んでくれるのね」

フェイトに縋りついて泣いているのは本当に誰なんだろうか？

プレシアそっくりの別人という選択肢はないのか？

「ま、まあ・・・家族関係が順調に再構成されているって好意的に見るの」

そう言う事にしておこう。

そっちの方が誰にとっても幸せになれる冴えたやり方だ。

「これから姉共々もよろしくお願いしますねご主人様」

「はい、ちょっと待ったなの」

なのはがアリシアの言動に反応して待ったコールをかける。
反応せざるを得ない単語が混じっていた。

「ご主人・・・さま？」

「はい、なのはさまは私のマスターです。それはすなわちご主人様です」

忘れていたわけではないが、なのはの左手にはマスターの証である令呪が存在している。

つまり、どう言う紆余曲折を経たのか全く分からないが、なのはとアリシアの主従関係ははまだ継続中であり、二人のマスターとサーヴァントの関係も変わらない。

ちなみに、サーヴァントを直訳すると 奴隷 となると言う事を知っているだろうか？

「だから、なのはさまに一生ついていくんです!!」

「ええ!？」

「不束者ですけど、どうぞ末永くよろしくお願いしまゝす」

につこり笑うアリシアは可愛いが、思いつきり問題発言だった。

少なくとも女の子が女の子に対して笑顔込みで言う言葉じゃないだろう。

しかも三つ指ついて、誰が余計なことを教え込んだ？

「うつ、よくできたわね、幸せになるのよ。アリシア？」

犯人はお前だ!!
アリシア

「ええー！？」

「・・・何かしらなのはちゃん？」

声の温度が冷えた。

眼鏡の奥の瞳は、ブラックプレシアに戻っている。
身動きのできないなのはがビビった。

「家の娘を使い魔にした挙句、責任もとらないつもり？なのはちゃんはそのダメ男な事はしないわよね？」

「そ、そんな事を言われても！！」

人様の娘を、望んで使い魔にする外道扱いは嫌だ。

しかも後は知らないと放り出す無責任は人間のクズだ。

そんななのはを見たプレシアはふっと笑った。

「わかった。わかりました。もうなのはちゃんったらおねだり上手ね！！それならフェイトとアルフもつけるわ！！」

「何でそこでのなのはが催促したみたいな方向になっているのか理解できないの！！」

理解出来たらそれは鬼畜だろう。

明らかに人身売買っぽい物言いだからだ。

お前はたった今母親とか言っていたはずだろう？

娘を押し付けようとする母親はダメ女では無いのか？

「なのは？」

「フェイトちゃん助けて！プレシアさんが壊れてる！！」

「これからよろしくね」

「なんでこの展開に対してその台詞が出てくるの！？」

なのは突っ込みまくり・・・病人なのに・・・。

「え？これってオンガエシって言うんじゃないの？なのはには母さんを助けてもらったし、ほかに・・・そんな人にはちゃんと全身全霊で恩返しをしないって・・・」

「誰がそんな事を！？」

「よくできたわね、フェイト？」

やっぱり犯人はお前だ！？
ブレスシア

「今までごめんなさいフェイト、私は悪い母・・・いえ、母親なんて言えないわね・・・」

「母さん・・・そんな・・・」

「あつれー？心の壁が展開されているなの？」

絶対家族領域（A・Tフィールド）を張られてしまつては、他人であるなのは立ち入れない。

「今さらだけど、アリシアだけでなく貴女とアルフの幸せも願っているわ」

「そんな、母さん！！」

「ママ！！」

しかもアリシアまで参加して、絶対領域がさらに強固になった。あの母子の会話を止めようとするれば、その前になのはの心が折れるだろう。

なのははNOと言えない日本人。

「うつ、テストロッサー家総出で追い込まれている気がするなの」

プレシアもフェイトもこんな性格じゃなかったはずだろう？

たかが数日、されど数日、それは人格を豹変させるには十分な時間なのか？

どうやら、なのはがタレなのに退化している間に、彼女達の関係はカオスに突入していたようだ。

「なのはさん……」

「アルフさん」

ポンと肩に手を乗せて慰めてくれる忠犬の優しさが暖かった。

「なのはーれむ……これがなのはーれむか……女の子同士なんて……不純だけどそれが……いい」

「ユーノ君、何を想像しているなの！？」

真っ赤になって不埒な想像をしている（断定）ユーノに、八つ当たり気味のガンドがたたき込まれる。

「はは、見て見てなのはー！飛んでる、僕飛んでるよ！！I Can Fly！！」

空を木の葉のように飛んでゆくフェレットは輝いて見えた。

何時も自力で飛んでいるくせに……。

『あはあ〜楽しそうですね〜』

身動きも出来ないのにわたわたししているなのはを、ルビーはちょっと離れた場所から見ていた。

『自分でひっかきまわすのもいいけれど、たまにはこうやってなのはちゃんを愛でるのもなかなか乙なものですね』

何所までも根性が腐っている物言いだった。

本当にこいつはなのはの礼装なのだろうか？

『それにしても・・・アリシアちゃんは一体何なんでしょう？』

正直、彼女が今どう言う存在かは、ルビーを持ってしても測りかねている。

本人やプレシアには絶対言わないが、おそらくまともな人間ではあるまい。

アースラの身体検査においては特に問題なしと診断された。

唯一、生前にはなかった魔力資質が確認されたが、ジュエルシードの魔力が彼女に流れ込んだはずだから、ある意味でそれも当然と言えば当然だろう。

しかもアリシアはなのはをマスターと呼んだことからサーヴァントではあるらしいし、本人にも自覚はあるらしい。

・・・彼女は一体、どんな存在になってしまったのだろうか？

「・・・ルビーちゃん？」

『はい？』

アリシアの事を考えていたルビーに声をかけたのはリンディだ。隣にはクロノもいる。

「ごめんなさいね、わざわざ来てもらって」

『いえいえ、それよりも結局どうなったんですか？』

「今回の事件は、すべてプレシアさんが一人で首謀し、計画した事になっているわ」

ジュエルシードを運搬していた次元航行艦の事故から、ジュエルシードの同時発動まで、フェイトとアルフはあくまで何も知らずに、母であるプレシアの言う事に従っていたと言う事になっている。

報告書の上では、フェイトもアルフも被害者の一人として扱われている。

つまり罪を裁かれるのはプレシア一人・・・全てはプレシアの願いだ。

『だから、フェイトちゃんとアルフさん、アリシアちゃんをなのはちゃんに任せたいと？むしろすがりたいと言うのが本音ですか？』

かなり遊びが入っているのは確かだが、大元の部分はそんな所だろう。

犯罪者として見られている今の彼女にとって、知人は頼れまい。

迷惑がかかるし、フェイト達もどんな目で見られるか知れないからだ。

ならば、この世界にいた方が彼女達の為にもいいのではないか？

最も信頼できるのが一度は戦った相手というのは皮肉を感じざるをえないが・・・なのははこの97世界という管理外世界の人間で、時空管理法になじみがない上に、本人はフェイトと友達になりたがっていた。

彼女の両親も信頼が置ける。

フェイト達の保護者兼後ろ盾にはちょうどいい。

正直に話しても断られる可能性は低いと思うが、割と重い話をからかいのネタにするあたりでプレシアも只者では無いと思う。

本人は優秀らしいので、馬鹿と天才はのアレだろうか？

『でもリンディさんはそんな話を話したかったわけじゃないんですよ？』

「・・・・・・・・・・」

リンディとクロノが分かりやすく身を固くした。

クロノはともかく、リンディはその立場を考えれば少し素直すぎるかなーとも思う。

「今、この97世界は時空管理局に最も注目されている世界です」

世界意志と呼ぶべきものの存在が確認された。

そして世界意志の代行者である守護者と、その驚異的な戦闘力と、無から有を作り出す様な常識はずれの能力に、それと真っ向からガチな勝負が出来る“人間”と、奇跡としか思えないような死者蘇生。

「なんとか、アリシアさんに関しては誤魔化せたんだけど・・・」

死んだ人間が生き返ったと言う奇跡は、宗教的にも科学的にも問題がありまくる。

そんな事が知れ渡れば、アリシアはまともな生き方が出来なくなるだろう。

「・・・・・・・・ルビーちゃんには・・・現在、ロストログアの疑いが掛っています」

しかし、誤魔化せたのはアリシアに関してだけだった。

そもそもこれほどの大事、穏便に済ます為には、ジュエルシードが事故で散逸した事件からなかった事にするしかない。

『それはそれ／＼でもルビーちゃんは世界を滅ぼしたりできませんよ?』

「・・・ロストログアと言っても、全てが危険な物ではないのよ」

『ああ、そうだったんですか?でも、そんな言い訳抜きにルビーちゃんに欲しいんでしょう?』

「それは・・・」

リンデイが言い淀む。

時空管理局がルビーを欲しいと思う理由は簡単だ。
どうにか出来そうなのがルビーだけだからだろう。

世界意志と守護者はほぼセツトになる。

その存在を確認し、守護者を顕現させる方法自体は簡単だ。

もう一度、世界が消え去るような事をやらかせばいい。

その場合もなく守護者に世界の敵認定される上に、道義上も時空管理局の存在意義的にもそんな事は出来ないしするわけにもいかない。

そんな中で、ルビーだけは個人の所有物だ。

『あはあゝルビーちゃんモテモテですね』

「・・・・・・・・」

コメントに困るが、ルビーが注目されているのは確かだ。

ロストログアかどうかを判定するという名目通りの目的は確かにあるだろうが、持ち主の可能性を引きよせ、それしだいにおいては最強クラス的能力をほとんど無条件で与える事ができ、何より魔術という未知の技術によって作成されたデバイスよりも明確な人格を持つマジックアイテム・・・ルビーの人格はあれだが、その能力は誰も無視できない

人の善悪関係なく、ルビーの力は興味をひかずにはいられない代物だ。

『いいですよ』

「え？」

『だから時空管理局、行ってもいいですよ』

その答えはリンディにしてみれば意外だったらしく、しばらくその意味を理解できなかった。

「いいの？」

ルビーは愚かでは無い。

普段の言動があれだが、ルビー自身は決して暗愚では無い。

自分が何故ロストログニアとして疑われているのかの理由・・・その表も裏も理解しているに違いない。

『断ると勧誘とか面倒くさそうですしね』

「それは・・・」

あっさり諦めるには、カレイドステッキの能力は魅力的すぎるとリンディも思う。

カレイドステッキは、ルビーの言うように大量破壊や殺戮をもたらす様な物では無いため、強制的に強奪するような無茶な真似はするまいが、ルビーが拒否すればリンディは持ち主であるのはに交渉するしかなくなる。

それが迷惑だろうと言うのは簡単に想像できるのだが・・・ああ、宮仕えの悲しさよ。

そんな理由で、ルビーが素直に了承してくれたのは渡りに船だった。

「ごめんなさいね、脅迫するような形になってしまって、出来るだけ早く帰れるように手配するから」

『よろしく願いしますね』

『って言う事でちょっと時空管理局本部まで行ってきますね』

「え？いきなり何なの？」

なんとか、現在フェイト達が借り受けているマンションで、そのまま三人で生活し、保護者として士郎と桃子をつけると言う事で話を収めた・・・ように見せかけて悪女に誘導された途端にこれである？マークも乱舞しようというものだ。

『だからですね、時空管理局の中に身の程知らずにもルビーちゃんにちよつかい出そうとしている連中がいるみたいで、』

「え？時空管理局ってシヨッカーだったの？」

『そうなんですよ、寝台にルビーちゃんを拘束して『やめろ、やめるんですよ、時空管理局――！』って』

「『そんな事はしませ^{ない}ん！！』」

ハラオウン母子の二人で一つのW突込みだった。

「うーん、大丈夫なの？」

『大丈夫じゃなかったら、リンディさんが魔法少女になります』

「え？」

『しかもクロノ君がマスコットになります』

「なに！？」

『しかもその格好のまま一週間、生き恥をさらしてもらいます。勿

論、本気と書いてマジですよ」

ルビー
災厄は常に周囲を巻き込まずにはいられない。

予想外の方向から飛び火して来たリンディとクロノがぶるぶると震えて……。

「どうしようクロノ？母さんまだ少女で行けるかしら？」

……訂正、リンディにはその気があるみたいだ。

「母さん、歳を考え……ろ！！」

最後の一言は鋭い呼気だった。

一瞬でクロノが崩れ落ちる。

リンディがにこにこ笑っているから何かをしたのは彼女だろうが・
・何をしたのか全く見えなかった。

ひそかな強者がここにも一人？

「……本当に大丈夫なの、ルビーちゃん？」

なのはは、その全てをみなかった事にして、話を軌道修正した。
彼女もなかなか肝が太い。

『どっち道、断るのも面倒の種になりそうですからね、ちょっと時
空管理局潰してこようかな』と』

「思いつきりテロリストな事言っているよね？」

なのはは動じていない。

何時もは使っていないが、彼女のスルースキルはなかなかのものである。

それをあえて使っているところから、なのはも真面目なのだと思えるのはこの場ではルビーだけだ。

「はあ、ちゃんと寄り道しないで帰ってこれる？」

『あはあ、なのはちゃんはいいいお母さんになれそうですね』

「なるだけ早く帰ってきてね」

『はいはい、わかりましたー』

話が終わると、ルビーはリンディと彼女の手に気絶したまま引きずられているクロノの所に飛んで行った。

「それじゃあ、なのはちゃん？三人の事、よろしくね」

プレシアも、なのはに別れを告げてリンディの傍に立つ、最後に見た頬笑みは、どこか桃子に似ていたかもしれない。

「それじゃ、確かにルビーちゃんは預かりました」

「ルビーちゃんをよろしくお願いします。何かいたずらしたら容赦なく叱って下さい」

『あはあ、信用0ですよ』

最後までふざけながら、ルビー達は転移の魔法陣の中に消えて行った。

「・・・なのは？」

「フェイトちゃん」

「行かせてしまつて良かったの？」

「何で？」

「何でって・・・」

フエイトが気にしているのは、ルビーがさらわれてしまった時の事だ。

人づてに聞いたことではあるが、なのはは大分ショックを受けていたらしいと・・・フエイトはそれを気にしているのだ。

「あの時は連れ去られたわけだし、今回は自分から行くって言いだしたのルビーちゃんだからね」

「でも・・・」

「ルビーちゃんは帰ってくるって言ったもん」

につこりと笑うなのは顔は、ルビーに対する信頼にあふれていた。

「なのはとルビーちゃんの出会いは運命だと思うの」

「運命？」

「そう、運命。あの日ルビーちゃんがなのはの前に現れたのも、その後タバタな毎日が来たのも、こうやってフエイトちゃんと会えたのも、それにルビーちゃんの契約は呪い級だから、きつとすぐに帰ってくるよ」

フエイトは、そこになのはとルビーのつながりの強さを見た気がした。

もし、二人の間に呪い級の運命が存在するのなら、きつとルビーはすぐにでも帰ってくるだろう。
そんな気がする。

「なのはが気になるのは・・・」

「気になるのは？」

「管理局の人達は大丈夫かって・・・」

「ああ、なるほど・・・」

フェイトとアルフの主従コンビは、その言葉に全てを納得した。同時に、管理局の局員たちの冥福を祈っておく。本当に時空管理局が潰れるような事になれば良いなと思う。

「マスター、どう言う事ですか？」

一人だけ、ルビーとの接点が少なくて何の話なのか理解できていないのはアリシアだ。

「・・・さあ、まずはなのは家に行くの、お父さんとお母さんにお話ししないと」

「そうだね、なのはさんはあたしがおんぶしようか？」

「お願いねアルフ」

「え？マスター？姉さん？アルフ？」

明確な言葉にするのを避けた三人に、アリシアがついて行く。ちなみに、ぶっ飛ばされたユーノは気絶したまま放置中・・・それから三時間過ぎた。

『ただいまーですよ』

「」「」「帰ってくるのはや！」「」「」

公園から家に戻って士郎達に事情を説明していたなのは、フェイト、アルフ、ユーノの四人が異口同音に叫んだ。

「お騒がせしました」

「邪魔します」

玄関から普通に入ってくるのはルビーで、それについて入ってくるのはリンディとクロノだ。

二人とも、キツネにつままれたような顔をしている。

「ど、どうしたのルビーちゃん!?」

『おや? 早く帰ってきたことが不満ですか?』

「そんな事ないけど、早すぎない?」

『それなんですけどね、何ですか?』

ルビーが後ろについてきたクロノに伺いを立てる。

「さっき説明しただろう? グレアム提督が・・・」

『そうそう、そのクレ餡提督が』

「グレアム提督だ」

『その愚レ唾無って人が・・・』

「わざと間違えてるだろお前?」

全員がルビーとクロノの漫才からリンディに視線を向けた。

口ほどに目で雄弁に語られ、リンディがため息を漏らす。

「グレアム提督は私達の上司に当たる人なのですが、その方がルビーさんを本部に招くに当たって問題あるのではと・・・」

曰く、97世界である地球は管理外世界であり、その世界の住人であるなのは時空管理法の適用は難しく、その所有物をロストロギア認定するのは横暴である。

確かに、ルビーの能力は破格だが、それはあくまで持ち主であるマスター^{マスター}のはに限定したものであり、その全力を持ってしても次元世界に大きな影響を与えうるものではない。

「言っている事は一理も二理もあるな」

間違っではないが、それならば最初から余計な事をしなければ良いのと思う一同・・・因果は巡り巡って蝶の羽根効果バタフライ・エフェクト・・・グラムがルビーが本部に来る事を妨害した理由は、その能力にある。彼は事前に、ルビーが相手の魔力を見ぬき、更には個人の特定までが可能だと言う事を知っていたからだ。

もし、ルビーが本部にきて、彼女達と鉢合わせするような事態になれば・・・あるいは、グラム自身に会う事になれば・・・そしてルビーが魔力を感知する事が可能な距離が広ければ・・・“気づかれてしまうかもしれない”。

しかし、これらの事は今の時点で知りうる者はこの場にはいないので、皆不思議な顔をする事しかできない。

「そう言えばルビー？」

『何ですかクロノ君？』

「君はリーザロッテとリーゼアリアという女性を知っているか？」

『いえ、初めて聞く名前ですけど？』

「そうか・・・」

『誰なんです？』

「ああ、僕の魔法の師匠に当たる姉妹なんだが、やたらと君が本部に来るは良くないって熱弁していたな、彼女達はグラム提督の使い魔だから感化されているのかもしれないが・・・妙におびえているように見えたのは気のせいだな」

むしろ、ルビーが本部来ると聞いて、いちばん戦々恐々としていたのが彼女たちであり、クロノの考えは正反対なのだがそれもまた知る者はいない。

「ルビーちゃん？」

『はい？』

「お帰りなの」

『はい、ただいまですよ』

・・・どうやら、二人の間にあるFate^{うんめい}という奴は簡単にはなれる事さえも許してくれないほどに強固なものようだ。

エピローグ（後書き）

何とか完結しました。

話が伸びたり、時間が取れなかったりとアレでしたが、無事におわれて一安心。

続編に関しては少し時間を置くつもりです。

色々布石的なものも仕込んだので多分書くんじゃないかなーと思いますが、時間を置いていろいろ練ったほうがいいだろうという判断です。

第一話 Re - ignition

「ハッピーバースデートゥーユー」ハッピーバースデートゥーユー

海鳴市の隠れた名店、翠屋の店内に誕生日の歌が響く、歌っているのは4人の少女達、なのは、すずかにアリサとフェイトだ。

閉店した店内には子供達の他に、大人達が各々適当な椅子に座って子供達の合唱を微笑ましく見つめていた。

「ハッピーバースデーディアはやて」ハッピーバースデートゥーユー

明かりを消した店内で、唯一の光源は？燭だ。

ケーキに刺さった蠟燭の明かりに照らし出されているのは今夜の主賓、八神はやてである。ケーキの上に置かれているチョコプレート製のプレートには《誕生日おめでとう！はやてちゃん》とある。

「おおきに、皆おおきにな」

車椅子に座ったはやての瞳からにじむものがある。

自分の誕生日を祝ってもらえることがよほどうれしく、何度何度もありがとうと言い続けるはやてからは、喜びと感謝を存分に感じられた。

「うちゅーても私の誕生日は明日なんやけどな」

誕生会を一日早くしてくれと頼んだのははやてだ。

八歳最後の夜を皆で語り明かして終わりたいという我儘だが、友人達は満場一致でそれを快く承諾してくれた。

なので誕生会の後は、なのはの家にてお泊まり会が控えている。そんな理由でもなければ、まだ小学生のこのメンツがとくにゴホームしてなければならぬような夜中に、集まる事などできなかっただろう。

「もう、はやてったら大げさよ？」

「さ、はやてちゃん、蠟燭を吹き消して」

「よっしゃ」

気合い充填、息を大きく吸い込んだはやてが、一息で9本の？燭を吹き消すと、唯一の光源を無くした店内が真っ暗になる。

次いで、明かりが付けられた室内は誕生会の飾りつけがされており、はやてに向かって四方からクラッカーが鳴った。

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとうはやてちゃん」

皆がはやてを取り囲み、口ぐちに祝福する。

「ありがとう。みんなありがとう。わたしはわたしのままでええんやね！？」

「なんでいきなり最終回な事言ってるのよ？」

しかも打ち切りっぽい終わり方だ。

劇場版の予定でもあるのだろうか？

「フツ、愚問やね」アリサちゃん？目の前にネタがあればとりあえずボケとく、それが関西人のDNAを持つ者の義務や！！」

関西在住の人が聞いたら強烈な突っ込みが来そうな事をのたまいやがった。

ひよつとしたら愛すべき馬鹿かもしれないが…この女、油断も隙もあつたもんじゃねえ！！

「いっやゝごめんなアリサちゃん、今日のわたしは最初っからクライマックスなんよ」

今宵のはやては笑いに飢えている？とにかくテンションがまともじゃない。

両親を事故で亡くし、財産管理をしてくれる叔父はいるものの、海外にいてなかなか日本に来る事が出来ない。なので、はやてもその叔父さんの名前は知っていても、実際に会った事はないのだから、ホームヘルパーの人は来てくれているらしいのだが、彼等は家族では無い。仕事が終われば家に帰らざるを得ない人達だ。

後にははやてだけが残される。この辺りはそれぞれの家庭の事情

なので、他人ではなかなか踏み込めない。

そんな彼女だからこそ、皆が自分の為に店を借り切って誕生日会を開いてくれたことがうれしくてたまらないのだろう。

「し、仕方ないわね…き、今日だけは特別よ？勘違いしないでよね！」

「グフフフ…デレたアリサちゃんが可愛いすぎる…チューしたい」
「なんだってー！ー！！」

アリサの絵がナワヤ調に濃くなった。
MMRですねわかります。

「なゝむゝ」

「手と手のしわとしわを合わせて拝むんじゃないわよー！！」

「ツンデレ御馳走さんです！！」

「誰がツンデレか！！後食べるな！！」

「アリサちゃんのクギミ」

「誰よそれ！？」

分かる人には分かる。

分からないなら今すぐ釘宮でググれ！！

「アリサちゃんのイケズゝわたしもファーストキスをかけてんのに」

「どんだけ体張ってんのよあんた！？」

ファーストキスから何を始めようというのか…そこまでやるのかこの女？

「にやはははゝ」

最近、特に息のあつて来た二人のやり取りに、なのはは笑うしかない。

「二人共仲いいよねゝ」

すずかもなのはと一緒に、二人から距離をとったところで微笑んでいる。

二人とも、アリサの親友であるという事は間違いないが、はやてとアリサの掛け合いはそれとは少し違うのだ。

あえて言うなら漫才コンビのボケ役と突っ込み役？今の状態の二人に割って入って行くためにはちよつと特殊な感覚が必要になる。

なので、あれはその中にダイブして行くたぐいの物では無く、テレビと同じようにはたで見えるものなのである。何よりここが重要なのだが…。

「はやてちゃんに弄られてワタワタしているアリサちゃん可愛いよね」

「赤くなっているのがいいわよね」

「お、二人とも分かつてるやん」

「う、裏切ったなー三人そろって私の思いを裏切ったのねー!?」
親指を立てあう三人にアリサが絶望した。

最近の四人の関係はこんなものである。

一定レベル以上の真面目ちゃんは、総じて弄られ要員かその候補生である。そのギャップが人を萌させるのだ。つと言うかいい加減三番目の子供達ネタから離れよう。

「はいはい、子供達ゝ飲み物持って来たよ」

トレーにジュースを乗せて、子供達に配り歩くのはアルフだ。

「おお、温泉のお姉さんやないですか!？」

「お、覚えていたのかい？」

アルフが嫌そうな顔だ。

ここにいる面子で、アリサの次くらいにはやての被害を受けている人物なので仕方がないと言えば仕方がない。

すではやての目がアルフの胸にロックオンだ。

手などわきわきさせてスタンバっている。

「相変わらずええ物をお持ちで!!」

「近づいたらガブツと行くよ!!」

はやての存在に、アルフが割と本気でおびえていた。

やはり、温泉での事が軽くトラウマになったか？

「あ、あの…」

「ん？」

二人の一触即発状態を解除したのはフェイトだった。

「フェ、フェイト・テストロッサです。よ、よろしく」

人に慣れていないが故だろう。

フェイトは少しおどおどしながらも自己紹介した。ひょっとして自己紹介すら初めてかもしれない。

ルビーに名乗った時のあれはノーカンだ。名乗ったというより策にはまって聞きだされたのだから、なのでこれはフェイト・テストロッサのファースト自己紹介？

「これはご丁寧に、わたしの名前は八神はやてや、よろしゅうな」
「よ、よろしく」

差し出されたはやての手にフェイトが自分の手を重ねる。

握った手の温もりに、フェイトがほっとした頬笑みを見せる。

「まゝったく、なのはもすずかも人が悪いわよ？何で今まで紹介してくれなかったの？」

「にやははゝ最近知り合って友達になったばかりなの」

「そうなの？」

「ほ、本当だよアリサちゃん」

「ふゝん」

アリサの追及&ジト目にタジタジになりながらも、二人は何とかごまかしに成功した。

親友に嘘をつく事にはなれる事がないが、流石にこの世界の存在をかけた戦いの中で知り合ったとは言えない。言ったらまず間違いなく心配される。主に頭の中身が大丈夫かどうかという意味において、親友にそんな目で見られるのはいくらなんでも勘弁であるし、かといってフェイト達がこの世界に留まる事が決まった以上、無関係ではいられまい。

ちようどいい事に、はやての誕生日が近かったので、合わせて二人に紹介したのだ。

「よ、よろしくバニングスさん」

「え？ああ、こちらこそよろしく、それと私の事はアリサでいいわ

よ。私もテストロッサさんじゃ無くてフェイトって呼んでいい?」

「あ、それならわたしもフェイトちゃんって呼びたい」

「ど、どうぞ、ってえ?」

フェイトがコクンと頷くと、はやてがその手を掴んで握手してくる。

速度に優れた魔導師であるフェイトに反応さえさせないとは…今日のはやてはどれだけスペックを水増ししているのだろうか?

「感激やな」誕生日に新しいお友達が出来るなんて、最高のプレゼントや」

本当に嬉しそうなはやての眼には涙が滲んでいる。

ただそこにいるだけで、こんなにも歓迎してもらえるなどとは思っていなかったし、こんな反応は見るのも聞くのも初めてだ。

思わず目を白黒させても仕方があるまい。

「いい加減にしなさい。困っているでしょう?」

「あいた」

感激しているところに悪いが、話が進まないのでアリサがはやてをはたき倒した。

はやてもはやてで、痛いとか言っているが、その声は明らかに楽しそうだ。

「フェイトは気にしないでいいわよ。はやてはこう言う恥ずかしいキャラなんだから、いちいち相手してたらきりがないわよ?」

「そ、そうなんだ」

「うゝん、フェイトちゃん?そこは納得せずに否定してほしいんやけどな」

「ご、ごめんなさい」

わたしと焦るフェイトの姿は、実によく萌える。

「フェイトちゃんはかわええな」

「えう?あ、ありがとう…」

どうやら、二人の顔合わせは大成功のようだ。

「さって、そろそろいいかな?はやてちゃん、私達からのお誕生日

プレゼントだよ」

「八神はやてさん、お誕生日おめでとうございます」

なのは達が横にどくと、今までその背に隠れていた人物が前に出てきた。

金髪に濃い赤の瞳の色、何よりフェイトを小さくしたような容姿の少女が、花束を持って前に出てきた。はやての目が丸く見開かれている。

「はやてちゃん、この子はフェイトちゃんの妹でアリシアちゃんだよ」

「アリシアちゃん？」

はやてがアリシアを見てプルプル震え出した。そんなに花束に感動してくれたのだろうか？かなり奮発して大きいのを用意したのだ。

「も、もらってええの？」

「勿論、はやてちゃんの為に用意したんだよ」

「そんなら遠慮なく」

そう言うとはやては花束を受け取った。

持っている“アリシアごと”。

「ありがとうな皆、わたしらきつと幸せになるから」

「はい、ベッタベター！！」

スパーンと小気味良すぎる音がした。

アリサがその手に持つ巨大ハリセンではやてに突っ込みを入れた音だ。

今度はさっきまでと違って本気の突っ込みだ。はたかれた方のはやては、顔をのけぞらせている…前から行ったのか？

「いったゝアリサちゃんの突っ込みがどんどん容赦なくなってくゝ大体そんなもん何処に持ったん？」

「女の子には秘密の隠し場所がたくさんあるのよ」

「私も乙女やけどそんな凶悪なもん仕舞えるシークレットゾーンなんて知らんよ！？」

追及は罪である。

「あゝも、それはもういいわ、でも顔面叩く事はないんじゃない？ しかも三回も」

「は？一回しか叩いてないでしょ？」

「えゝ確かに三回叩かれたんやけど？」

それはひよつとしたら、巨大ハリセンに書かれている《物干し竿 Mk2（対はやて専用）》の文字が原因かもしれない。参加者の御剣剣士の目が「こいつ出来る」な感じになっているのが気になるのだが？

「な、なのは」

そして、この流れに付いてこられないのはフェイトだ。

このメンツに参加してから日が浅いのがやはり致命的か？

「だ、大丈夫だよフェイトちゃん。はやてちゃんだって本当にアリシアちゃんを連れて行こうなんて思っていないよ」

「そ、そう？」

涙目：本気と書いてマジに、アリシアが取られるとかそんな心配しているらしい。

この子は：生まれと今までの人生が問題ありまくりなので、仕方がないと言えば仕方がないのだがやはりもつと人生経験が必要だ。迂闊に冗談も言えない生真面目さんはきつと騙されて宗教の壺とか買わされてしまう。特に人間に慣れるという意味で、多くの人と関わった方がいい。

まあそれは、なのは達という信用できる人物がいるので問題はなからう。何よりなのはとすずかという魔法の存在を知る人間が傍にいるという事は大きいはずだ。

来週には、なのは達と同じ小学校に転校する手筈も整えてあるのだし。

「…ごめんなさい八神さん」

なのは達がそんなやり取りをしている間、あっちの方でも話が進んでいたらしい。

何故かアリシアがはやてに謝っている？

「ん？何やアリシアちゃん？わたしの事はお姉さまでええんやで」
「この女、まだ諦めてないの？」

突っ込みに疲れたのか、アリサのリアクションがおざりだ。
はやてもはやてで、その不屈の精神だけは評価してもいいだろう。
もう少し軌道修正した後でなら尊敬してもいいと思うが今のまま
では駄目だ。

「ごめんなさい。私、もうなのはさまのものです」

ピシリと…空間が凍る音がした。

「にゃ？」

いきなり思いもよらない方向から来た流れ弾に、なのはが反応で
きずに目を丸くする。

究極的な爆弾投下…事情を知る全員が目をそらす…なのはから。

逆に、はやてとアリサがギギギと音がしそうな動きでなのはを見た。
その表情をなんと形容すればいいだろう？とりあえず女の子がす
るにはちよつとな顔だ。

「…アリシアって言ったわね？」

「なのはちゃんの物って…どう言う事なん？」

「私となのは様はサーヴァントとマスターの関係なんです」

人生において、嘘というのは割と潤滑剤として重要な事がある。

まだアリシアちゃんには難しいかもしれないが…それなら空気を
読んで何も言わないでくださいお願いします…^{ブリス}そんなのはの思
いは、アリシアに届く前に遅すぎる。

「…奴隷？」

「御主人さま？」

「えー何で二人共、そんな難しい言葉を即答できるの！？」

ちなみになのはは、英語と日本語の二ヶ国語サラウンドで問題な
く会話が出るスーパー小学生である。人の事を言えた義理では無
い。

「なのはちゃん…」

背後から、肩におかれた手に体が硬直する。振り返るのが怖い。

「す、すずかちゃん？」

振り返ったそこにいたのはやはりすずかだった。何でそんな決意の籠った視線を向けてくるのか…これはまずい、時限爆弾だ。

「私…負けないから!!」

「主語を明確にしてください!!」

思わずテスト口調になってしまうのはだった。

「なのは…」

「フェイトちゃん!？」

ぬあゝぜそこで赤くなつてやがりますかこの萌っ子は？

無言は時として千の言葉より色々な事を語るというのに…しかもこの状況はとてつもなくまずい。勘違いされる要素が多すぎる!？

「なのは…」

「なのはちゃん？」

だからほら…なのはの両肩に死神の手が置かれるんだ。

「わたし、なのはちゃんの事みくびつつたわ、ごめんな」

「なのは…きつちりOHANASIしましょう」

「え？ち、ちよつと!？」

事情はある。

二人の脳内に展開されているお子様お断りな妄想より、はるかに健全な理由だ。

しかしそれを話したら、神秘の秘匿とかその他もろに引っ掛かってしまう。

今のなのはは、魔術師であると同時にミッド式の魔導師でもあるのだ。もれなくその秘密の重要性も二倍二ばーいである。

「安心しーやなのはちゃん、わたしらはなのはちゃんを見捨てたりせーへん」

「そうよ。絶対なのはを“更生”させて見せるから…大丈夫」

「ちよま!!二人の中ではなのははどんな立ち位置になっているの!？」

やはりコンビか…連携が流れ作業の如く淀みない。

「さあなのは、あんたの罪を数えなさい？」

「つ、罪！？な、なのは悪い事してないよ！！」

「まあ、その辺りはなのはちゃんの部屋で聞こうか？すずかちゃん、かつ井よろしく」

「よ、夜中にそんな力ロリーの高い物を食べるのは良くないんだよ！？」

そう言う問題でもなかるうに…。

「あつれえゝなんでかなのは、捕まえられた宇宙人みたいに引きずられて行くなの？」

片方は車椅子のはずなのに、抵抗できる気がしない。…リリカルとマジカルの全力全開…主人公逮捕により完！？

深夜…はやて宅のはやての部屋にて、棚に飾ってある一冊の本が身じろぎした。誰も触ることなく、まるで目覚めを迎えた生き物のように、その身を震わせたのだ。

“それ”は見るからに奇妙な本だった。何所からどう見ても本のはずなのに、まるでそのページが開かれるのを拒否するかのように、鎖で雁字搦めにされている。本が持つ本来の機能、その内包された知識を開帳する事を防ぐかのように…あるいは中に封じられている物を外に出さないかのように、強固で徹底的な拘束。

本は誰も触れていないにも関わらず、本棚から浮き上がり空中浮遊を始め、更には無機物でありながら魔力を放出し始めた。

暗い室内よりなお暗い、闇色の魔力だ。

本の内部から発される魔力の圧力に負けた鎖がはじけとび、本のページが開く。何も書かれていないページが確認を求めるかのように右から左へと高速でめくられ続け、最後のページに到達すると表紙がぱたんと閉じられる。

『Ich entferrne eine Versiegelung

g。」

本から電子音が響いた。英語では無い、ドイツ語の発音で“封印を解除する”と語る。

「Anfang」

次いで、“起動”の言葉と共に、本から目がくらむような光が発された。見るものが見れば理解できるだろう。放出された物の正体は魔力だ。解き放たれた膨大な魔力が室内に放出され、一瞬で集約し、気がつけば誰もいなかった場所に同じ、黒のインナーのような服を着た数人の男女がいる。

一人は金の髪を肩のあたりで切りそろえた母性を感じさせる女性、一人はまだあどけない容姿を持つ赤い髪の少女、一人は凛々しい印象を与える桃色の髪の女性、最後の一人は精悍な体躯を持つ男性…その四人が、主に傳く騎士のように片膝を付き、頭を垂れていた。

「闇の書の軌道を確認しました」

「我等、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

四人が口上を言い終わる。どうやらヴォルケンリッターと言うのが彼等の名前のようなのだ。

しかし、口上を述べ終わったはずなのに、その間もその後も、現われた4人は無言で片膝をついたまま頭を上げない。彼等の言葉をそのままに受け取るのなら、主の言葉を待っているのだろうか？

うつて変わって静かになった室内を、静寂が支配する。

「…なあシグナム？」

「し、静かに、ヴィータちゃん」

「主の御前だぞ、無礼は許されない」

「そのくらいわかってるけどさ……」

「だったらなんだ？」

「気のせいかも知れないんだけどさ、人の気配なくねえ？」

「…なん…だと？」

シグナムと呼ばれたポニーな彼女が顔を上げる。そこにあるのはどうしようもなく無人の室内であり、自分達は誰もいない場所に対して頭を下げていたようだ。

「……っつ！？」

恥ずかしい……誰もいない場所に一人芝居を真剣にやっていたのだと気づいて見れば、大噴火の如く羞恥心が湧きあがってくる。そしてそれは別にシグナムだけの物では無く、ヴィータと呼ばれた少女と、残り二人も顔が真っ赤になっていた。

「あ、主、どちらにおいでですか！？」

返事はない。ただの屍すらないようだ。

「さ、探せ」

「主、主はいずこ！？」

「主様——！？」

その夜、無人のはずの八神家はとつてもにぎやかだった。

「燃え尽きろ——」

「キャ——！！！」

同時刻、海鳴市の月村邸において、割烹着の悪魔が箒に乗り、空中を飛びながら火焰瓶に見えるそれで少女を丸焼きにしていた。

「ああ、某のさっちゃんが——！！」

ゲーム機から、コントローラーの端子を直接本体に接続して絶叫しているのはだれあろう、フェイトのデバイスであるバルディッシュだった。

テレビの中では 1P WIN の文字が輝いている。

「結構なお手前でした。よし、わたしももつと鍛錬して、お屋敷を牛耳——い、いえ、秋葉さまと土貴さんをお守りしなくては！」

そして、割烹着の悪魔の勝ち名乗りに自分の台詞を重ねているの

は当然の事ながらルビーだ。

相変わらず危険な事を平気でやらかしているらしい。

『ひどいでござる。ひどいでござるー！！今のはハメでござろう！』

？あの技は卑怯でござる！！』

『やはり、個人シナリオがないのがアレなんだろうかね？』

『さっちんをバカにしたらルビー氏でも許さんでござるよ！？』

勘違いないように言えば、別にルビーはバルディッシュに何にもしていない、レイジングハートのように人格プログラムを弄ったわけでもなければ、口調を変えろと言った事さえない。

なのに、ちよつと日本のサブカルチャーのデータを与えた途端この有様である。後は独自に自分の能力を使ってネット接続で、気がつけばこんなでましたである。

変われば変わる物… と言うのはどうにも人間に限ったことでは無かったようだ。

『姉さん、今度は私がお相手します』

『おつけですよ』

『では私は翡翠を選びます』

『レイジングハートも分かってますね』

レイジングハートも参戦してきた。

何故主を放つて、デバイスと礼装が月村邸に揃って、しかも《土器！ポロリはないよ！！デバイス・礼装ゲーム大会ー！！》などという縄文式か弥生式か分からない物を開いているのかと言えば、なのはの家でお泊まり会をするに当たって邪魔だったからである。

ついでに、ルビーが『その欲望、実に素晴らしい！！ハッピーバースデー！！』と誕生会に突撃してくる事を予防するためだ。

あり得ない可能性だとは思っただが、二人を知る人間としては完全な否定が出来ない。

はやては、間違いなく桃子とか忍やリンディ側の人間である。ルビーとの相性率は400%を超えて溶けてしまうかもしれない。

そんなわけで、お目付け役のレイジングハートとバルディッシュ

付きで、月村の家に隔離である。

『さっちゃん、大丈夫でござる！！きつと報われる時が来るでござる！！』…訂正、お目付け役はレイジングハートだけだ。

ゲームパッケージに向かって何言ってんだこいつ？

『きのこ氏だつてわかつているはず。きつと月姫2ではさっちゃんシナリオも追加されるはずでござるよ！！』

バルディッシュ

あいつ…かなり危険な事を抜かしているような気がするが…突っ込まないが吉か？

『てや〜！正義の魔法少女、ただ今参上〜』

『ご要望であれば、お相手します』

『うわーお手柔らかにお願いできます？』

『あなたを、KOです』

かろうじて二人の区別はつくものの、それがゲーム内音声なのか、それとも本人達が直接しゃべっているのかは声だけでは判別できない。今、MELTY BLOOD Actress Againにおいて、世界を超越した姉妹対決が始まるうとしている。メタすぎだ！！…そんな彼等が、自分の部屋でアリサとはやてに詰め寄られたのはが涙目になっている事など知りようがない。

ただ…もしこの日、それぞれの歯車が後もう少しだけ噛み合っていたならば、どうでもいい事から割とクリティカルな事まで、運命は大幅にその形を変えていただろう。

だがしかし、仮定に言葉遊び以上の意味はない。この日がターニングポイントだったと気がつくのも大分先の話だ。

確実に、そして静かに、多少のすれ違いを含みながらも…この世界の危機を内包した時限爆弾は起動した。

第一話 Re - ignition (後書き)

再開しました。

出来るだけ週に一回の更新を心掛けたいと思います。

ある意味、ヴォルケンリッターたちとはやての最初のすれ違いまでを書きたくて、はやてを先に出した部分がありました。

第二話 Family

「ふふん」

その日、八神はやては朝から上機嫌だった。

両親を事故で亡くして数年、仕事の忙しい、会ったこともない叔父に我儘を言うのも気がひけた去年のはやては、自分の家で一人で自分の誕生日を祝った。

フェイトとアリシアという新しい友人まで出来た今年の誕生日の事は、きつと忘れないだろうとはやては思う。

特にフェイトはからかうと実にいりアクションを返してくれるので、弄りがいがあるなとなかなかに外道な事を考えつつ、満ち足りた気分で自宅玄関の鍵を開け、ノブをひねった。

「たっだいま」

「おかえりなさいませ、主様」

「え？」

独り暮らしをしているため、メイド喫茶のような返事が返ってくるなど思いもしていなかった事と、狭い玄関に揃って片膝をついている四人を見たはやての思考は停止した。

あ、ありのまま今起こった事を言うで？

なのはちゃんの気持ちをほんのちよっぴりだが、体験した。いや…体験したというよりは、全く理解を超えてたんやけど…皆に誕生日を祝ってもらうて、なのはちゃんをさんざんからかってお泊まりした翌日、プレゼントと花束を持ってほくほくと帰宅したらいきなりご主人様になってしまった。

な、何を言ってるか分からんと思うけど、わたしも訳が分からなかった。

何時の間にわたしはなのはちゃんと同類になり下がっていたか！
？と頭がどうにかなりそうやった。

「ど、どちらさんでしょう？」

「闇の書の起動を確認しました」

「我等、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

しかも、言つとる事が欠片も理解できんかった。

コミュニケーション不足とかサプライズドッキリとか、そんなチャナもんじゃ断じてない！！もつと恐ろしいもんの片鱗を味わったわ！！

「……」

わたしは少し考えて、自分の中にあるライフカードから一枚をドロ―する。

引いたカードは携帯電話や！！

「とりあえず通報やね」

すかさず110番とのコンボ発動！！

「もしもし、警察ですか？今家に見つめて猫目な格好の怪盗さん＋1がおるんです」

「……ちよつと待った――――！！」「――」

「……何でこんな事になったんやろ？」つと口に出してみれば、（ははっさっぱりわからない）つと脳内の自分が某地動説的な大学教授風に返してきた。

「も、申し訳ありません、主――！」

そして唯一事情を説明してくれそうな4人はそろって目の前で土下座中、平に平についてそのまま二次元の住人になってしまうのではないだろうか？

「あゝ謝るのはええから、これ解いてくれます？」

はやての現状は、居間のソファ―に座らせられている…光る縄のようなものに拘束された状態だ。

自分の留守中に勝手に家に入られ（住居不法侵入）、帰宅したはやてとご対面（現行犯）、そんでもって警察を呼ぼうとしたら、光る縄のようなもので縛られた（監禁罪）時には本気で貞操の危機まを感じた（強姦未遂？ビミョー）…これだけされたのだから、怒っても文句は言われなと思うし、はやて自身そこまで人間が出来ていないと思う…のだが、どうにもはやては怒る気になれない。

頭が、自分の身に起こっている事について来れていないのか、あるいは謝り倒している四人の姿に怒りを湧きあがらせる前に、哀れを感じているのかのどっちかだろう。

「すいません」

光の縄…後で聞いてバインドと言う事を知った…が砕けるようにして消えた。

「それで、説明してもらえますか？」

どうもこの不法侵入者達は自分を傷つける気はないらしいが、事情を聞くまでは油断できない。

「だって、出て来たら主いなくなつたし…」

「ヴィータ…！無礼な口を叩くな…！」

赤い髪の少女がふてくされ気味の顔で憎まれ口らしきものを叩いたのを、ポニーテールの女性に怒鳴りつけられた。小さい方がヴィータと言うらしい。

「失礼しました主、私はヴォルケンリッターの将、シグナムです」

「シャマルと申します」

「守護獣、ザフィーラ」

「…ヴィータです」

「八神はやてです」

なんとか自己紹介は完了した。

「主って私の事よね、どう言う事なん？」

なのでここからが本番だ。

「闇の書？」

「はい」

一通りの説明を聞いたはやてが受け取ったのは、見覚えがありまくる一冊の本だった。

何時の頃からか覚えていないが、自分の傍にあった正体不明の本、何故か頑丈な鎖に巻かれていてなんとか開けようとチャレンジした回数数知れず、そのすべてに失敗して、それでも何故か捨てる気になれなくて棚に飾っていた本だ。

なんでも、この本は本では無くデバイスと言うものらしい。

返された本には、あの頑丈な鎖がなくなっていた。

今では普通にページを開く事が出来るが、そこには何も書かれていない白紙のページがあるだけだ。

シグナムの話を信じるならば、魔力をこの闇の書が吸収する度、白紙のページはうまって行くらしい。

「はあ、魔導師か…」

確かにはやては本が好きだ。本が大好きだ。

ファンタジーが好きだ。

恋愛小説が好きだ。

叙事詩が好きだ。

ゲームが好きだ。

アニメが好きだ。

そしてちよっぴりボーイズ系にも興味がある。

図書館で、病院の待ち時間で、ネットで、書籍で…長くなりそうだからこの辺りで切るが、まあ要するにそう言う事だ。

だから魔法だって興味がある…いや、魔法に関しては、とある事情からより興味があるのだが、それらはフィクションだから純粋に楽しめるのであって、実際に自分がその渦中に放り込まれた時には反応に困るというものだろう。

残念なことにこれは夢では無いし、何よりさっきまで自分を拘束

していたバインドという物の事を思えば信じるしかない。自分の目で見て、触って感触を感じて確かめた物を否定する事は、現実主義者ではなく妄想狂のそれなのだ。

何より、あんな事が出来るような人間が、自分をだまして何の得があるのだろうか？実際にそう言う裏の理由があつたとしても、はやてにそれを知るすべがない以上は意味がない。

「そんでわたしがこの本の主になつてもうたと？」

「はい、我等ヴォルケンリッターは、主様の僕です。いかなるご命令にも従う所存」

「……え？」

つまり、彼等は八神はやての物だと？

シグナムやシャルの胸も？

ザフィーラの厚い胸板も？

ヴィータは…残念…だけど小さくて可愛いから許す！！

「あ、あの主？」

「ウエヘヘ…って何？」

「あの…何か身の危険を感じたのですが…」

何故4人とも腰が引けているのだろうか？

「き、気のせいや！！」

「そ、そうですか？」

絶望した……！！

はやては自分のオツパイ星人ぶりに絶望した……！！

あと、男の胸に興味を持ったのはちよつと安心した。これで何とか女に走る未来は回避できそうだ。

「で、では早速蒐集に…」

そして、一番頭が痛いのはこれだったりする。

はやての手の中にある闇の書と言う物は、他人のリンカーコアから魔力を蒐集する事で完成に近づき、666ページの全てを埋めた時に、強大な力を持ち主…はやてにもたらされるらしいのだが…。

「そ、それはあかんよ」

「な、何故です？」

「むしろ何でそこで疑問が返ってくるんや？」
良いわけがない。

むしろ何処に良い所があるのだろうか？

人を襲うという所からしてまず問題だし、魔力を吸い取る量が多ければ相手が死んでしまう場合すらあるという。

「人様に迷惑かけてまで力が欲しいとは思わん！」

八神はやてと言う少女は、それは確かに笑いを取りに体を張るし、オツパイ星人だが、根はやさしい子である。

犯罪を良しとしない一本筋の通った女の子なのだ。

いつもの犯罪っぽい行動と言動は、あれは確信犯である。

「ふはは、そうやろうそうやろう、ただの変態さんやないんやでー
ー！！存分に見直すがええ！！」：だからといって、許されると思
ったら大間違いではある。

しかもはしやぎすぎだ…出る杭は打たれるもんだと言うのに…。

「お？言うたな？言うてしまったな？そんならわたしは「本当の杭
は打たれても尚出るもんだ」と言うで？これでわたしもシエリルさ
んやランカちゃんの仲間入りや！！」

銀河つながりでそこまで言うとは、それに少年ではなく少女だろ
う？

「こまけーことはいいんや。若さうちゅーのは振り返らん事らしい
で？」

ダウト、それは宇宙刑事であつて銀河では無い。

「あ、主？何を言っておられるのか分からないのですが、一体誰と
話しているのです？」

「ん？…あれ？なんでやろ？何か言わなきゃあかんような衝動でつ
い、”また”妙なところとチャネルがつながってしまったようや。
ベントラーベントラー」

「また…初めてでは無いのですか？」

テヘツとか舌を出されても困る。

そろそろ人間の枠を超え始めたはやてだった。

今の彼女の設定はどうなっているのだろうか？キャラシートの備考の欄がとっても気になる。

「は、話を戻してよろしいでしょうか、主？」

「うん？ああ、どうぞどうぞ」

シグナムがそれでも話を続けようとする。

他の三人はまだ立ち直れていないというのに…すごいぞ烈火の将、さすがは烈火の将、君こそヴォルケンリッターの将だ！！

「…私達は主の為、闇の書完成の為に…闇の書に登録されたプロゲラムです」

「関係ない…そんならわたしがあんたたちに新しい役目を与えてあげるわ！！」

「あ、新しい役目ですか？」

「そうや、皆で家族になろう」

「……え？」「……」

はやてのこの一言に対して、シグナムだけでなく四人全員が驚きの声を上げた。

「これは主としての命令や。少なくともわたしが主のうちはこの家で一緒にまったりゆったり過ごしてもらおう。安心してええで、主として衣食住はきっちり面倒見るさかい」

薄い胸を張って言い切るはやてに、四人はそろって茫然とするしかない。

多分ではあるが、歴代闇の書の主でこんな事を言いだした前例はないのだろう。

「そしてヴィータちゃん！？」

「は、はい！？」

「特にあんたは妹になって貰うから！！」

「い、妹！？」

「べたべたに甘やかすから夜露死苦！！」

完全に暴走している。

4人が、目を丸くして珍獣を見ているような顔になっているのは気が付いていないのか？

「あ、あの…主？」

「いややな～おねえちゃんって呼んでええんよ？」

完全に振り切っている。

何時の間にアクセルフォームになっていた？

「そんでなこの世界に慣れて、家族になったら、わたしの友達に皆を家族やって紹介するからそのつもりでおってなー！ー！」

本当なら、嬉々として即座にみんなに紹介したい所だろうが、問題ははやてが彼等を“家族”として紹介したいという事だ。

両親を亡くしてから、ずっと家族と言う物に飢えていたはやてが、自分の言うなりになるコマより、家族と言う存在を求めるのはある意味で当然でもあった。

そして、はやては賢い子だ。家族と言う絆が一朝一夕で出来るものではない事も知っている。

いくらはやてが主と言っても…いや、主だからと言って家族になる事を強制するのは話が違う。今のはやて達が家族を名乗っても、それはお遊戯会の劇と同じだ。そんな物を、友人達には見せたくないし、何よりはやてがそんな物では満足できない。

時間がいるのだ…同時にやはり自分の誕生日会でフェイトとアリシアという二人も新しい友人が出来たことがとても嬉しく、その余韻を引きずりまくっていたのだろう。

自分も同じように“特別な日に自分の新しい家族”を紹介したいと思うのは、ある意味当然の発想だったのかもしれない。残念な事に、自分の誕生日と言うイベントには手遅れだが…

「決戦はクリスマスやー！」

当日が金曜日かどうかはカレンダーを見なければ分からないが、クリスマスまでは大分時間がある。それだけあれば、彼等がこの世界に慣れるのにも、家族としての絆を作るのにも十分だろう。はやてもそれまで色々頑張るつもりだし、それに一応クリスマスだって

誕生日だ。…イエス・キリストのだけれど…。

「ん？あれ、つちゅー事はあの魔女っ子も魔導師なんか？」

「……は？」「……」

いきなり話が飛んだ上に、どうにも聞き捨てならない言葉を聞いて、四人が反応した。

「主はやて、この世界に魔導師がいるのですか？」

「ああ、たぶんやけど、この街には魔法を使える子がおるよ。魔導師やなくて魔女っ子やけどな、その辺りは良く分らんけど」

「魔女っ子？」

シグナム達は互いに顔を見合わせる。

「シヤマル？この世界には、魔法文明はないはずではなかったのか？」

「そのはずだけど…」

「でもさ、魔女っ子ってなんだよ？魔導師じゃないのか？」

「子と言っあたりから子供だからなのではないか？」

どうも、ヴォルケンリッター達だけでは答えが出そうにない。意を決したシグナムがはやてを見る。

「主はやて、その魔女っ子と言っのは魔導師と何が違っのでしょっうか？」

「ふむ、説明が難しいなー、具体的にはこんな感じ？」

はやてはテレビのリモコンを手に取り、スイッチを入れる。

画面に現れたのは、スーパーヒーロータイムの文字…97管理外世界と呼ばれるこの世界の、しかも小さな島国における日曜朝の約束があんな大事件に発展するとは…この時は誰も予想さえしていなかった。

時空管理局、ミッドチルダ本部にその男の執務室は存在する。
部屋の主の名はギル・グレアム、時空管理局の中でも、歴戦の勇士

と呼ばれる男だ。

「…お父様」

「リーゼにアリアか…」

部屋の扉が開き、よく似た二人の女性が入ってくる。

猫の耳としっぽを持つ彼女達は、リーゼ・アリアとリーゼ・ロツテ、グレアムの娘のような猫の使い魔だ。

「闇の書の起動を確認しました」

「…そうか、始まったか」

返答までのわずかな沈黙に、その短い言葉の中にどんな感情が渦巻いていたかは本人以外に知り得ない。

「すいません、半月前には起動していたようです」

「気にしないでいい。この程度の誤差なら修正は可能だろう」

グレアムに報告が遅れた事を責める気はない。

あの世界…特にはやての傍に接近することが困難な状況になっているのだ。

無理にはやての動向を探ろうとして、“あの杖”に痛い腹を探られてはかなわない。

なによりあの杖の事を考えるだけで、リーゼとロツテがしばらく使い物にならなくなる。

前回、二人は何か逃げる事が出来た物の、二度目もうまくいくとは限らない…今はまだ自分達の目的を知られるわけにはいかない。そのために、あの杖が本部に来る事も強権を行使して阻止したのだ。実に忌々しい。

「被害が出たという報告は来ていないが…連中は蒐集を始めたのかな？半月ほど前からと言うのなら、まださほどページは埋まっていないだろう？」

「はい…しかし…」

「ん？」

報告の歯切れが悪い事に気が付き、グレアムは自分の使い魔である女性を見る。

「どうかしたのかね？何か問題でも？」

「それが…ヴォルケンリッター達は確かに蒐集を始めているのです
が」

「その何が問題なんだ？」

「…良い事をしています」

「……………何？」

たつぷりためを作ってから出てきた言葉は疑問符だった。

鳩が豆鉄砲を食らったような顔と言うのは、今のグレアムのようなものを指す言葉だろう。

「ですから、ヴォルケンリッターがよい事をしています」

「どう言う事なんだそれは！？」

「具体的には、次元世界を飛び回ってトラブルを解決してまわったり、悪人を見つけては捕まえたりしているという事です」

「な、なんでそんな事を…」

すでにこの時点で理解不能らしい。

「それとですね、お父様？」

「ま、まだ何かあるのか？」

「その…ヴォルケンリッターが襲撃した違法研究施設に関してなんです…」

「それが？」

「いくつかに関しては、時空管理局が関係している証拠が出てきているみたいで」

「何……………！？」

青天の霹靂と言うのはこう言う事を言うのだらう。

巨大組織を形成するに当たり、その全てが清廉潔白と言う事は“絶対”あり得ない。

グレアム自身は関わってはいないが、そう言うものが存在するかもしれないという噂程度は聞いた事があるし、必要悪と言う言葉だって勿論知っている。

それに関しては他でもないグレアムが誰よりもその必要性を感じ

ているのだから……しかし、それはそれでこれはこれだ。必要悪と言う物は、必要ではあっても決して表に出てはいけない。秘密にしておかなければならない物だ。表に出てしまえば、時空管理局の正義は色褪せ、言葉に重みがなくなる。

「その間、関係していた次元犯罪者や、研究員から蒐集しているようです。ね、しばらく動けないように処置したようで死者は出ていません……ただ、数自体が少ないのであまり進んではいけないようですが、一応蒐集は行っているようですので八神はやてに限界が訪れるのも大分先になると思います……ってお父様——！！」

気がつけば、グレアムが倒れていた。

分類すれば老人のカテゴリに片足突っ込んでいる男だ。急な血圧上昇や興奮が良いわけがない。

この件を機に、時空管理局は内部正常化の風が吹き……つと言うか荒れ狂い。上層部のかなりの頭数がすげえられる大混乱に陥る事になった。

ちなみに、なんでこんな事になったのかと言えば……仮面のドライバー的な人や、怪人とロボットの物を持ちだしてきて戦う大体五人組な連中や、本命の魔女つ子的な物を見たヴォルケンリッターの皆さん……何か騎士として、地球とか人間とかを守ってた戦う戦士と言う設定にやたらと感じ入る部分があったらしく、妙な物に目覚めたらしい。

一番食いついていたのがヴィータなのは言うまでもないが、そんなでもって……他人に迷惑をかけるのはいけない……ならテレビのように悪者相手なら良くない？「うん、それならいいんじゃない。せっかくの魔法を全然使わんと言うのももったいないしな。おいしいの作ってまತ್ತるから、皆夕食までには帰ってくるんやで？」「↓レッツゴーヴォルケンリッター……」つという単純図式だったのだが、この事件の全容が発覚するのはここから半年後の話だ。

話を聞いて、事件に関わりがある者もなかった者も、そして裁かれた者も含めて全員が白く固まったのは言うまでもない事だった。

『…そう言うわけなんだ』

「た、大変そうだね」

レイジングハート経由で連絡を入れてきたクロノに、なのははそれ以外にかけの事が出来る言葉を思いつかなかった。

空間に表示されたモニターに映るクロノはげっそりとやつれていて、目の下にアイシャドウのような真っ黒い隈が出来ている。今の彼がどれほど激務の中にあるのかがうかがえるというものだ。

なんでも、大量に職員が退職届を提出した為に、単純に手数が足りないらしい。

『上層部が芋蔓式に首が飛んでね、5日ほど寝ていないんだ』

時空管理局の醜聞だろうに、言葉を飾る余力すらなくしているのが哀れだ。

クロノの後方で、崩れ落ちてきたつばい書類の山から辛うじて見える手はリンディとエイミィの手に見える…二本ともやたら白く見えるのだが…生きているのだろうか？

『まったくあの豚ドモメふんぞり返ってろくでもない事やらかしやがる。予算からこっそり裏金作ってそっちにまわしてやがったもんだから追跡調査にどれだけ手間がかかると思ってたやがるのかとおもいはべりいまそかり大体気に入らなかつたんだよあん畜生ども…』

「く、クロノ君！息継ぎして、酸欠になっちゃうよ！！句読点なしにしゃべるのはやめて！！」

クロノもずいぶんと色々図太くなっているようだ。

ちよつと暗黒面に落ちかけているかもしれないが、ダース・ベイダー卿にならないことを祈ろう。

『…話を戻そう』

「そだね」

『そんなわけというか、おかげでプレシア・テストロッサが昔起

こしたとされている事故についても、再調査する必要が出てきた。彼女は研究の危険性を訴えていたのだが、上層部が強行、研究チームのリーダーだったとはいえ、一研究員だった彼女は逆らえなかったらしい」

「そう…なんだ」

大人の事情を、子供であるのはが理解する事は難しくはあるが、それでも真剣に聞く。

怒りを感じないわけではないが、すでに終わった事で未来は変えられない。

事故が起こってアリシアが死んだことも、それによってプレシアが罪を犯してしまった事も…変える事が出来るのは何時だって現在であり、変える資格を持つのはその場にいた人間だ。

「無罪…とはいかないだろうが、裁判で情状が酌量されれば場合によつては減刑になるかもしれない。フェイトとアリシアにそう伝えてほしい」

「それはいいニュースだね」

本当にいいニュースだ。

確かにプレシアは許されざる事をしようとしていたが、それはひとえに愛ゆえだ。

子を思う母親の思いは、裁判官の人達にも汲み取ってほしいとおもう。

『そう言うわけで…』クロノ追加の書類を持って来たよ』……………』

モニターに映るクロノの背後で自動扉が開き、ユーノがコンテナに書類を山盛りにはいつて来た。

プレシアの事件が終わって、引き取られて行ったのだが、まだアイスラに乗っていたらしい。

『…………ガハ!!』

「にゃーーーーー!!」

クロノが無表情になり、盛大に吐血したのを見たのはが恐怖で悲鳴を上げる。

まあ、この世界はきつと、ギャグとご都合主義で出来ていた…よ
うな気がするから死にはすまい。

ただのプラッター映画的一幕…っとか思っていたら、モニター
がブラックアウトしてやたらと和む自然風景が現れた。

しかもど真ん中には《少々お待ち下さい》の文字がでかかと…
こういうのは魔法も科学も変わらないらしい。

『うつがああああ！！イタチモドキー！！お前僕になんか恨み
でもあるのか！？』

『え？ええ！？僕はただ頼まれて書類を持ってきただけだよ！？』
でも音声だけは通じているようだ。

クロノとユーノの声がばっちり聞こえる。

『そんなもんお前が処理しろ！！』

『無茶言わないでよ、これ全部執務官の決裁が必要なんだよ！？』
あのクロノが壊れている。

普通のクロノならもつと理性的に話すし、自分の仕事を他の人間
しかも一般人に丸投げしようとは思わないはずだ。

いろいろあり過ぎて心が荒み、頭のねじが数本飛んでいるのだろ
う。

『うふふ〜ユーノ君〜』

『リ、リンディ提督！？』

聞き間違いでなくリンディの声だった。

こっちはまるで幽霊のようで、夜道で後ろから声をかけられたら
確実に心臓が止まる。

声だけなのがむしろまずかった。むやみやたらと想像力がかきた
てられる。

『何でユーノ君は半ズボンなのかしら〜』

『あ、やめてー！！ズボンを脱がそうとしないでー！！！！』

『スカートをはいて男の娘になりましょ〜きつと似合うから〜』

『ひiiiiiiii！！エイミィさん、羽交い締めにししないでー！！！！
引き込まないでー！！！！』

癒し系の映像は変わらない。

それだけに、ユーノの悲鳴が想像力をかきたてる。

『『さあ、さあさあさあ！！』』』

『たすけてなのはー！！』』

ユーノの断末魔っぽい叫びは…聞かなかった事にしよう。

多分大丈夫だろうと、最後までは怖くて聞いていられなかったなのはがモニターを消す。

『か、管理局は怖い所なの…』

色々と否定できないが、怖いの意味がちょっと違うかもしれない。ユーノの人生に幸あれ。

『それにしても、次元世界を超えて人助けをする人がいるなんて…』
なのはも似たような事をしてはいるが、あくまで海鳴と言う町限定だ。

クロノの話にあつた謎の正義の味方は次元世界をまたにかけてやっているらしい。レベルが違うがなにより…。

『ルビーちゃんと似たようなこと考える人がいるんだね』

そこがちょっと気になる。

一体どんな人がやっているのだろうか？

『……』

『あれ、ルビーちゃん？』

『パクられたー！！！ルビーちゃんの壮大な野望がパクられちゃいましたよー！！オノレー！！』』

『パクられたって…』

別に正義の味方はなのはとルビーの専売特許でもない。……実行犯達が、そもそも自分達の行動をマネしてこんな大事件をやらかしたなどとは、当然二人が思いつくわけもないわけで…。

『どこの誰だか知りませんが、ルビーちゃんに挑戦しようなんて、受けて立ちますよ！！』』

まさか本当に月光仮面じゃあるまいな？

どちらにしろ、ルビーに目を付けられた名前も知らない誰かさんに

ご愁傷様。良い事をしたのに、面倒な奴に目をつけられたものだと冥福を祈っておく。

祈るだけならタダだ。

『って言うか主人公なのに出演少な過ぎませんか!?!』

「ルビーちゃんは何を言っているか分からないの」

人間はみな、自分の人生と言う名の舞台の主役である。

『納得が行きませんよー!ー!ー!』

知ったこっちゃねーのである。

黙って終われ!ーもとい、つつけ。

第二話 Family（後書き）

ここまでがプロローグとなります。

今回は数人の読者の方から要望があつた小説風の書き方を試しに行ってみましたがいかがでしょうか？

個人的意見では正直どっちでもこだわりはないんですが。

第三話 Initial - R

12月1日

日本人は基本的に何でもありな民族である。

これだけ言うとな節操無しと受け取る事しか出来ないが、その良し悪しはともかく、これだけ別の文明圏の風習やら文化やらを、躊躇なく取り込む民族も珍しいのではないだろうか？

宗教からして多神教で、元から存在した神道を始めに、一週間を陰陽道、正月は神社に詣で、葬式は寺で上げ、2月14日のバレンタインにはお菓子会社の策略に乗せられた女の子は好きな異性にチョコレートを贈りつつ、一ヶ月後の三倍返しを期待し、最近是一部でハロウィンとは名ばかりなコスプレ集団の練り歩きまでやつたりするのだから、よく言えばマルチで興味と好奇心旺盛な民族とも言える。

その中でも特に、一年で最も俄かクリシタンが増えるのが12月である。言わずと知れたイエス・キリストの生誕祭、クリスマスがあるからだ。

日曜礼拝なんて知っているかどうか怪しく、教会なんて近づいた事さえない人間だって、この日ばかりはケーキにプレゼントを用意してどんちゃん騒ぎをやらかし、恋人達に至ってはデートに告白にと大忙しなのである。

もしクリストさんが生きていたら、この俄共が！！俺の誕生日をダシにはしゃいでいんじゃないかねえ、俺も混ぜやがれ！！と突撃してくるのではないかと考えるのは偏見が過ぎるだろうか？

まあ、日本中がそんな感じなので海鳴の街もその例外では無い。最近ではデパートや商店街で、一カ月以上も前に飾りつけが行われるなどさらに、12月に入ったら本格的にクリスマス一色になる。

「もつゝいゝくつねゝとゝくゝりゝすゝまゝゝ」

「混ざっているわよ。はやて？しかも気が早すぎ」

そんなクリスマス商戦真っ盛りの街を、なのは、すずか、アリサ、フェイトにはやての仲良し5人の少女達がウインドウショッピングをしている。

その中でも特に上機嫌で改造した歌を口走っているのは、車椅子に乗っているはやてだ。

「えゝそんなにはようないよゝ？だって今日はクリスマスイブイブイブ…」

「ああ、はいはい分かってるわよ」

指折りでイブの数を数え始めたるはやてにアリサがやれやれと苦笑して止めさせる。

「にやははゝはやてちゃんずっと楽しみにしてたもんね」

「んゝばれてもうた？実はうち、今年のクリスマスを一万年と二千年前からまっとうたんよゝ」

思いっきり嘘だが、にこにこ笑うはやてに水を差すのがためられる。彼女がクリスマスを楽しみにしていたのは本当だ。

実は相当前から似たような感じで、日を追うごとにおらとつてもワクワクしてきたぞと言うのが目に見えて分かる有様だっただから、気がつくなと言う方が無茶である。

むしろ隠す気があったのだろうか、そっちの方が意外だ。

「今年のクリスマスはうちの家でやるから、皆出席してな」

しかし、詳しい事を聞かないのがこの場の正解だろう。

自分の家でクリスマスパーティーをやりたいと言い出したのははやてだ。

それに加えて彼女のワクワクドキドキな擬音が見えそうな有様を考えればきつと何かサプライズな事を考えているに違いない。

それを事前に聞いてネタばれさせるなど、KYの汚名は免れまい。

「うん」

「わかってるわよ」

「プレゼントもって行くね」

「アリシアも、連れて行くから」

なので、ここはなんにも気付かなかったという事にして、当日せいぜいびつくりさせてもらうのが正しいのだ。

「やっと思つけたー!!」

「……え?」

いきなり聞こえてきた声に、思わずびくつとなつた5人が振りむく。
「え、えつと……」

目に入つて来たのは、高校の制服を着た女の子が、男を前にしてうろたえているという図だつた。

一体なんだろう? 昼間の往来だし、犯罪臭はとりあえずしないので緊急では無いのだろうと思う。

「あれ? あの女の人?」

「なのは、知り合いなの?」

「うゝん」

知り合いと言えなくもないだろう。

ただ彼女はなのは本人の事を知らないはずなので、それを知り合いと言つていいのかは困る。

今年のジュエルシード事件の直前に、オタクな男から救つた女の子だ。

男の目的がなのはの方にあつたので、救つたと言つていいのかどうかも疑問ではあるのだが……。

「男の人も?」

「男の人は知らない」

本当に知らない。

すらりとした長身で、二十代後半と言つたところか? しかも、結構な美男イケメンですね。

「な、何か御用ですか?」

女の子がびつくりしながらも、男に話しかけた。

どうも男が見つけたと言つたのは彼女で間違いないらしいが、それにしては彼女の反応が初対面の人間に対するそれだ。顔見知りでは

無いらしい。

「ずっとあなたを探していました…貴女こそ…貴女こそ…」

「え？ええ？」

これは所謂、告白と言う奴だろうか？

「………おお〜！？」「………」

思わず5人揃ってゴクリと唾を飲みつつガン見してしまう。

そこはそれ、女の子ですもの、ドラマでは無く、正真正銘の生告白？略してナマコクに興味がないわけがございません。

「そ、そんな事言われても、ま、まいっちゃうな」

彼女の方も、満更では無いらしい。

割とレベル高めのイケメンに告白されて悪い気はしないのだろうか、赤くした上にニヤケた顔で、何を困っているんだお前？

「貴女こそ僕の女王様ブヒー！！会いたかったデブー！！」

イケメンの口から出たとは思えない、思いたくない言葉が世界を凍らせる。

「………何？」「」

一瞬の空白の後、最初に現実に戻って来た彼女となのはが声を上げる。

二人はとっても良く似た顔をしていた。

語尾にデブ？…更にはブヒ？…何だ？何かその取り合わせにはデジヤブーを感じるぞ？

「あ、あんたまさかあのキモオタ！？」

「ああ、なるほど」

得心が行ったなのはがポンと手を打つ。

魔女っ子のなのは目当てで、あの女の子を相手に強姦未遂した男だ。あくまでなのはをおびき出すための演技であり、本人は14歳以上には興味がないと言っていたので、実際のところ女の子の方には危険は全くなかったのではあるが、それで法律の網をすり抜けられると思ったら大間違いである。

確か警察に捕まったと聞いた気がするのだが？

「あ、あんた病院送りにしたはずでしょう!？」

「昨日退院したブヒー!!」

「ええー!？」

真面目に聞き逃せない事をしゃべっている…未だに名前も知らない彼女の気持ちは分からなくはないが、半年も入院させるような大けがを負わせたのか？

同じ女としてもやり過ぎを感じないわけにはいかないぞ？

「しかも全然別人じゃない!!」

それは激しく同意である。

あのオタクのパーツが何一つ残っていなかった。

「カロリー計算された病院食でちよつと痩せただけデブよ!!」

「ちよつと?」

すごいな病院食、世の中の体重に悩む女の子の味方じゃないのか？

「さあ女王様、カムオン」

全員が見ている前で、男がリバーズ五体投地…要するにアスファルトの道路にあおむけで寝転んだ。

その眼が何かを期待して少女を見ている。

スカートの中を堂々と覗こうとしていると考えられなくもないが、この男の変態ぶりはその程度では済まないようだ。

「ぷり〜ず、きつく、みー」と言わんばかりに、親指だけを立てた両手で「おれおれおれおれ」と自分を指している…これはやはり、踏めと言う事か？

「女王様…ヒソヒソ…」

「美男子とのプレイ?…ヒソヒソ…」

「最近の若い連中の性風俗は乱れている…云々…」

ギャラリーの言葉が、静かになったこの場にはよく響く。声を抑えようとしているのかどうかも疑問ではあるのだが…。

「う…あ…」

気がつけば彼女の顔が真っ赤だ。

これは逃げるなと誰もが思い…「いやー!」…「そして案の定、

逃げた。

「あ、待つてくださいデブー！女王様——！！」

それを追いかけるキモオタもといイケメン男。

「女王様言っな——！！」

「へプロ——！！」

とって返して来た彼女に、カウンターの拳を美顔イケメンに叩き込まれた。男の体がある場で縦に一回転してベシヤリと音を立てて大の字になる。ぴくぴくしているのはまさか断末魔のけいれんではあるまいな？

「いや——————！！」

風と共に去りゆく彼女を追う者はいなくなった。

彼女：明日からこの街を歩けるのだろうか？このショックでひきこもらない事を切に願う。

「ま、待つてデブー——！！」

「————おお——！！——」

撲殺されかねなかった一撃を受けてなお、アグレッシブに立ち上がって、彼女の後を追う男の姿に、その理由はどうあれ称賛の声が上がった。

「がんばれ——！！」

「全米が泣いた——！！」

やたらと無責任な声が聞こえるが、皆が彼を応援している。

千鳥足ながらも彼女を追って行く彼の姿が見えなくなった所で、やっとなのは達の金縛りが解けた。

「な、何なのあれ？」

「さ、さあ……」

「よ、世の中色々あるしな——」

何故か、なのはだけでは無くはやての反応も悪かった。

「ん？なのはにはやて、どうかしたの？」

「にやはは、何でもないよ——」

「そうや——何でもないんよ——」

ともあれ、人間が数力月で全くの別人になるという奇跡が存在す

るという事が証明されてしまった。

聖夜には奇跡が起こると言うが、イブ×23でこれだ…本番の24日の夜には一体どんな奇跡が起こるだろうか？

魂がルフランしたりしないだろうか？…そんな風な期待に胸を膨らませる時間がなのにもありました。

「ここか…」

深夜、海鳴の街を一望できる場所に人影があった。

町で一番高いビルより、更に高い場所から見下ろしているのはまだ幼さを残している少女だ。

赤のゴスロリ風の服と帽子が、彼女の性格をストレートに表しているような気がする。

その右手にゲートボールのようなスティックを持ち、肩を叩きながら何かを探しているようだ。

「先日から感じている強大な魔力、おそらく間違いあるまい」

彼女の保護者と言うには、少々毛色が違う男が傍に並び立っていた。

赤に対する青、動きやすさを重視したのか薄手の服に、両手足には銀の手甲と脚甲を装備している。

ゲームで言えば、格闘家のスタイルだ。

何より、彼の頭にある犬のような耳と、腰から伸びるふさふさの尻尾が尚の事ファンタジー色を濃くしている。

「しかも複数だ」

「一人じゃなかったのか？」

「噂では一人のはずだがな」

「どっち道、見つけてみれば分かることだし、見つけないと何にもはじまんねーし、そろそろ行こうぜ」

不安要素を出たとこ勝負で対応しようとする少女に、男は溜息し

か出てこないらしい。

「ここからは分かれて探そう」

「わかった。集場所は例の所で、気をつけるよヴィータ」

「ふん、誰に言っただよ。ザフィーラ」

ヴィータの顔にニヤリと交戦的な笑みが浮かび、それを見たザフィーラがやれやれと頭を振り、姿を消す。後にはヴィータだけが空中に取り残された。

「さつてと、いっちゃやるか？ グラーフアイゼン？」

気楽に、ヴィータは自分の杖を構える。

『Gef? ngnis der Magie . (魔力封鎖)』

「封鎖結界」

ヴィータを中心に魔力が展開され、結界を形成する。

「この魔力、見つけた。行くぞ」

『Jawohl . (了解)』

結界の中に取り込んだ魔力を感じたヴィータが、一直線に飛んだ。

「な、何これ？」

そして、結界の中に取り込まれた張本人、なのはもその異常に気が付いていた。

『結界ですね』

あっさりルビーが状況を看破した。

いつもはふざけていても、ルビーだって礼装だ。

いざとなればすぐに臨戦態勢をとれる。

『ミッド式の結界では無いようです』

『魔術式でもありませんね』ひよっとしなくても緊急事態って奴ですか？ レイジングハート？』

『強力な魔力が一直線にこちらに向かってきています。確実に捕捉されているかと』

なのははとつさに、ルビーとレイジングハートを掴んで部屋を飛び出した。

『Gegenstand kommt an.（対象、接近中）』
「へえ」

己のデバイスの報告にヴィータはニヤリと笑った。

「手間が省けるな」

いきなり結界の中に取り込まれたのを警戒して、逃げられるかもしれないと思っていたのだが、それは杞憂だったようだ。

むしろ本人から近づいてくれるというのなら都合がいい。

やがて、とあるビルの屋上に見た目が自分と同じくらいの年齢の少女が現れたのを、ヴィータの目は見つける。

封鎖結界の中に取り込んだのは一人だ。

故に、この世界で自分以外に動いている人間は、自分が探していた人間である可能性が高い。

懸念材料は、その相手がただ魔力を持っただけの人間という可能性、あるいはまったく関係ない魔導師である可能性だが、それに関してはこれから調べればいい事だと、ヴィータは高度を落として少女と話す事が出来る場所に降りて行った。

封鎖空間を駆け抜け、適当なビルの屋上に出たなのはの前に現れたのは、赤いバリアジャケットを着た女の子だった。

「いきなり封鎖結界を張るなんて、どこの子？」

なのはの声が聞こえた証拠に、彼女は唇の端を釣り上げた。

おや？何故か目がよく言ってくれたという風にキラキラ輝いているように見えるのは気のせいかな？

しかもハンマー状の杖をくるくる回し始めたのは何故だ？

「名乗るほどのもんでもないが、天地爆砕！あらゆる物を打ち砕く鉄の伯爵グラーフアイゼンと鉄槌の騎士、ヴォルケンレッド、ヴィータとはあたしの事だ！！」

ドドンと、効果音が聞こえそうな勢いでびしりとポーズをとったヴィータに、なのはは正体不明の寒気を感じた。

明らかに痛い子だ。しかも名乗るほどのもんじゃないとか言いながら自己紹介しているし、何よりあたしの事だ！！とか啖呵を切られても初対面だし、その台詞は最低限自分の事を何かしら知っている相手に言つべきものだろう？

おかげでリアクションに困る。

「フツ怖いくらいに決まっただぜ…」

なのはは本当に怖かった。

あんな恥ずかしい決めポーズ付きの台詞を言い切れるなんてそれだけで只者では無い。

「ん？驚き過ぎて声もでねえか？」

確かに驚き過ぎて何も言えないのは本当だが…羞恥は時として本人より見ている人間の心を折るのだという事を知ろう。

なのはの顔は目の前で見たヴィータの奇行のせいで真っ赤だ。

「まあいいか。それで、お前が魔女っ子で間違いないよな？」

「は？」

かなり予想の上を行かれた為に、反応が遅れた。

「え、ええ〜っと、不本意な部分も無きにしても非ずだけど…」

『なのはちゃん、ここは任せてください』

「ルビーちゃん？」

なのはの言葉を遮って、ルビーが前に出た。

『なのはさま、私もお願いします』

「レイジングハートまで？」

ルビーだけならまだわからなくもなかったが、レイジングハートまで名乗りを上げてきたのは意外だ。

なのは不思議顔で、待機状態のレイジングハートを翳す。

『お前が魔女っ子かと聞かれば』

『答えてあげるが世の情け』

我々は…この台詞を知っている…この分厚い鉄板の台詞を知っている。

『世界の破壊を防ぐため』

『世界の平和を守るため』

『愛と正義の魔法で貫く』

『ラブリーチャーミーな正義の味方』

ルビーが魔術でやたらと派手な光の演出をしている。

『ルビーちゃん!!』

『レイジングハート』

終いには花火のような爆発のエフェクトまで使い出した。

至近距離にいるなどはなど、驚きで硬直してしまっている。

『銀河をかけるR団の二人には!!』

『ホワイトホール、白い明日が待ってます』

『に、にやんでなす?』

思わずなのはも勢いに乗せられて参加してしまった。

しかも両手は猫の手…実に萌える。

だって仕方がない、なのはの世代にポケモンはドがつく真ん中ストライクなのだ。

『はっ、ルビーちゃん!レイジングハートも何を言っているの!?』

二人のRはロケット団のRなの!?

『や、やるじゃねえか…』

『えええー!?!?』

思わずなのはは叫んでいた。

この状況と流れで、その発言はあり得ないだろう?後、一体何にヴィータは恐れ戦いているのだ?

『いえいえ、そちらもなかなか』

『感服いたしました』

そして、互いの健闘をたたえあうルビーとレイジングハート。

「え、え〜っと」

更には完全に状況においてけぼりを食らった主人公なのは。

まさか名前にRが入っていないから仲間外れなどと言わないだろうな？

『それにしても黒でも白でもなく、あえて定石を外す赤のゴスロリとはなかなか斬新ですね〜自分でデザインしたんですか？』

「お、この良さが解るか？これは主は…いや、姉ちゃんがデザインしてくれたんだぜ」

さて、少し余談だが、詐欺には二種類あるという事を知っているだろうか？

『実にエクセレントですね〜』

「そ、そうか？お前話せるじゃねえか」

『赤と言う事は、やはりリーダーだからです？』

「ん、いや違うよ。あたいたちヴォルケンリッターの将はシグナムだ。赤じゃなくてピンクなんだよな〜あいつ、でも炎使いだから赤いっちゃ赤いんだけどさ」

一つ目は、あからさまな嘘について騙す方法、もう一つは相手に勝手にしゃべらせて情報を吐き出させるように誘導する方法である。

どちらがより高度かは言うまでもないが、後者に関しては場合によつては詐欺とすら認識されない事もある。

『やはりヴォルケンリッターは正義の戦隊なんですね〜？』

「ああ、あたいたち4人は姉ちゃんの騎士だからな！！無様な事は出来ねえよ」

『ええ〜四人もいらっしやるんですか〜？』

「あたいにシグナム、シャマルにザフィーラだ」

そして、このヴィータと言う少女はこの詐欺ととっても相性が良いようだ。

ルビーが誘導していると言ってもしゃべりすぎである。

ノリノリで情報を開示している本人は、間違いなく気が付いていな

い。

『へへ、実はこの帽子の人形も姉ちゃんが買ってくれたのを参考にしているんだぜ』

そう言つて、自分の帽子にくつついている呪いウサギ人形を見せながらにつこり笑うヴィータ…そのセンスはどうなんだろうな？

ウサギはウサギなのだが、その口と目が糸で塞がれている様子が実にあれだ…それはねえよと言いたいシユールさだ。

キモ可愛いと言えなくもないが…あくまで呪いウサギである。…まあ、誰でもない本人が嬉しそうなので他人がどうこう言う事でもないか。

『いいお姉さんなんですネ、所で貴女の主兼お姉さんのお名前は？』

「ああ、やが…つてうおおおおお！？何言わせようとしてんだよおまええええええ！？」

「あ、気がついた」

どうやらそれはトップシークレットだったらしく、寸前で思いとどまって正気を取り戻したようだ。

ヴィータが荒い息をつきながら焦っている。

心臓は高速の16ビートを刻んでいるに違いない。

『チツ、もうちよつとだったのに』

そしてルビーが黒い事を言っている。

「ルビーちゃん、説明ドウゾ」

『彼女、人間じゃないですね、魔力で編まれた存在、サーヴァントに似ている感じがします。つまり、彼女を存在させる要になる何者かがいるという事です。それが彼女のマスターですね』

「な！？」

いきなりそこまで見抜かれるとは思っていなかったのだろう。

ヴィータがわなわなとふるえている。

しつこいようだが、普段その片鱗すら見せなくても、ルビーは結構優秀な部類の礼装なのだ。

「だ、騙したのか！？」

騙したと言うよりも、単にヴィータが迂闊だったただけなのだが…。

「卑怯だぞ!？」

「え？なののはが？」

びしつとヴィータが指さしているのはどう見てもなのはだった。

ここまで蚊帳の外だったのに、いきなり指さされた上に睨まれては頭に？マークを浮かべてしまっても仕方がないだろう。

「こいつはお前の物^{デバイス}だろう!？」

「くっ!」

ヴィータが中々に反論できない事を言う。

確かにルビーのマスターはなのはで、持ち主が誰かと言われればやはりなのはだ。

「友達になれると思っていたのに…」

「え？いや…いくらなんでもそれは段階をすっ飛ばし過ぎだと思うの」

なのはも大概だが、この発言はそんなのはを持ってしてもあまりである。

人間関係構築の手間をなめんな、あつてすぐに友達関係になれるのはゲームの中だけである。

「あんなに一緒だったのに!!」

「夕暮れどころか、出会ってから10分と経っていませんが!？」

「姉さんは、会って5分であたしを妹にすると宣言したぞ？」

何だそいつは？

誰だそいつは？

「裏切りものー!!」

「ええ!？」

ヴィータが銀の鉄球を取り出して、自分の杖を構える。

それが何なのかは分からないが、おそらくは攻撃系の何かだ。

見ず知らずの誰かの偏った考えでヴィータに恨まれ、しかもルビーのせいで悪化して、悪くもないのになのはは裏切り者扱い。

「……」

普段温厚なのは、ちよつといらつときた。

「ルビーちゃん!!」

「はい？え？」

答えたルビーをむんずと掴み、なのはがヴィータに対して半身になる。

「ち、ちよつとなのはちゃん!?」

「内角をえぐる球に対しては、肘を折りたたみ……」

「何するつもりなんですか——!?」

流石のルビーも焦る。

なのは全然ルビーの言葉を聞かずに、ぶつぶつと多分危険な事を呟いていたのだから。

「シュワルベフリーゲン!!!」

Schwalbfliegen

ヴィータが鉄球をハンマーで叩くと、赤い魔力を纏った鉄球が高速で打ち出される。

残像と紅の魔力の尾を引いた鉄球は、一直線になのはに向かい…。

「球に逆らわず、素直に打ち返す!!」

「イチロー……！」

ゴンとかガンとか金属同士の激突によつて生み出された結果は、それはそれは見事なピッチャー返しだった。

「だあ――！！？」

叫びながら、思わず仰け反ったヴィータの頭上を、同じ軌道を戻って来た鉄球が通り過ぎる。

本能がとらせた行動は正しい、あんなものをキャッチするのは無理だ。

同時に、ぎりぎりで避けた為に、鉄球が“それ”を打ち抜く光景を、ヴィータの目ははつきりと見た。

「な、なんて事するんですかなのはちゃん！」

バットの代わりにされたルビーが文句を言うてくる。

杖のくせに、タンコブをつけているところなど芸が細かい。

「ごめんねルビーちゃん、代わりになりそうなのがあったの、かつとなつてやったけど今はちゃんと後悔しているよ」

謝りながらも、なのはの顔は何所かすつきりしたものだつた。

しかも、あの高速で飛んで来た鉄球を打ち返すとは…当然、魔術の強化を使ったとはいえ、なのはもそろそろ人間と言う枠に収まりきれない存在になりつつあるようだ。

「…お前ら」

「え？」

『おや？』

気がつけば、ヴィータがプルプル震えている。

しかも、なのはをはつきりと憎しみをこめた目で睨んでくるこれは…怒っている？

「さ、最初に攻撃したのはヴィータちゃんだよ？」

『なのはちゃん、なのはちゃん？』

「ん？」

『多分原因はあれですね』

「あれ？」

ルビーが示す先にあるのは、鉄球で真つ二つになって落下してゆくヴィータの帽子だつた。

「……」

『やつちやいましたね、テヘ』

そういえば、ヴィータがああ呪いウサギ人形は彼女の姉が買ってくれたものをモチーフにしたとかどうか、嬉しそうに言っていたのだつたか？

「あたしはおまえを倒さないとかかん、倒さないと気が済まんのや…！」

兄じゃなく妹のくせに…分かりやすく、思いっきり八つ当たりの台詞だつた。

しかも目からハイライトが消えている。

突っ込みと言つか、反論するより早くヴィータが新たな鉄球を取

り出した。

「今度は四個！？同時に来られたら本物でも打ち返せないなの！！」

『なのはちゃん、またルビーちゃんをバットの代わりにしようとしていましたね！？』

ルビーに答える暇も惜しかったから、なのはは躊躇なく走った。

全力で自分の後方、屋上の反対の端へ。

「レイジングハート！我、天命を以下略！！」

『了解しました。セツトアップ』

背後で金属同士がぶつかる音を聞きながら、なのはやはり躊躇なく飛んだ。

魔術回路を起動、体重を魔術で軽減しつつ、強化の魔術で足の筋肉を強化、一つ飛びで屋上の転落防止用柵に飛び乗ると、踏みこみで足の形にひしゃげさせながら全力で前に踏み出す。

なにもない虚空へと、なのはの体はすぐに重力と言う名の鎖にからめ取られ、落下を始めた。

その一瞬後に、寸前にいた場所を鉄球が通り過ぎる風切り音を聞きながら、なのはは白い光に包まれ、光の繭を突き抜けたなのはの体は白のバリアジャケットに包まれていた。

平穏な日常の終わり、非日常のターンの始まり始まり。

第三話 Initial - R（後書き）

もう少し先までいけると思っていたんですけど、でもこれで一応バトルパートがかけそうかな？

ここは実はバトルなしで行こうか思っていましたので、前後篇にすべきか？

原作ってほとんど戦闘シーンとかで背後の色々が出にくいなと思うのです。

第四話 The Gift of the Magi

例えば、いきなり貴方の目の前に以下の例題が出題されたとする。

少女＋重量級巨大武器Ⅱ？

勿論、各々の価値観において答えが違っているのは当然だ。

あるいは、小さな体と大きな武器のアンバランスに、萌を感じる者もいるだろう。

あるいは、武器その物に対して純粋な燃えを感じるロマンな答えもありだろう。

しかし、なのははそのどちらの答えも選ばない。

少女＋重量級巨大武器Ⅱ狂戦士

それがなのはが、“体験から”導き出した答えである。

「ごめんなさーいーいー！！」

「マーーーーテーーーーー！！」少女＋重量級巨大武器Ⅱ狂戦士

ビルの屋上を踏み台に加速した次の瞬間、一瞬前までいたビルが鉄槌の一撃で崩壊した。

屋上からノーロープバンジーをやらかしたなのはは、バリアジャケットを展開してからひたすら逃げ回っていた。

それは当然、ヴィータが大事にしている人形を破壊してしまったという負い目があるからだ。

如何に、バリアジャケットだから再生が可能と言っても、破壊されて困るならバリアジャケットに使うなと思ってはいても、それでも誰かの大事な物を壊してしまうというのは、誰かの涙を止める魔術使いのなのとしては罪悪感バリバリで反撃する気がいまいち起

こりにくい。

これがずっと逃げ回っている理由の一つ、もう一つは…。

「抱きしめてやるぜ、銀河の果てまでな——！！」

「何それこわい——！！」

「Killアー——！！」

「それ絶対最後のが言いたかったただだね！？」

背後からの破碎音を聞いて、その正体を悟ったのはが振り返ってプロテクションを展開するとほぼ同時に、まるでマシンガンのような勢いでプロテクションを打ちすえるものが来た。

その正体は、コンクリートの塊だ。

ビルの建材に使われたそれが、巨大な横薙ぎの鉄槌によって破壊され、巨大な質量弾となつてなのはに向かって飛んで来たのだ。

一個一個の大きさは、十分人体を破壊するに足るものだった。

飛んでくる瓦礫の先には、ハンマーを構えたヴィータがいる。

そのハンマーがすでにして常軌を逸していた。

でかいのだ。ものすごく…下手なプレハブ小屋よりでかいのではあるまいか？

あの小さかったハンマーの部品がスライドして、葉莢のようなものが排出されたと思ったら、いきなりこんなものが現れた。

ギガントハンマーとか言っていたが、これは確かにその名にふさわしい、ゼヒルフィ辺り持ってもらいたい代物だ。

「姉ちゃんが言っていた。嫌よ嫌よも好きのうちって奴か——！！？」

「子供にとんでもない事を教えるそのお姉ちゃんとは一度じっくりOHANASSIしたいの——！！」

八つ当たりだろうがなんだろうが、その姉とやらに全く罪がないとは言わせない。

「大人しく光になれや——！！」

「そのハンマーは違うハンマーだから光にはならないの——！！」
なるとしたら光じゃなくてスプラッタ的なものだろう。

その未来予想図は色々な意味で却下だ。

「ヴィータちゃん！！謝るから落ち着いてーーーー！！許してーーーー！！」

「■■■■——！！」

涙目のなのはの声は、ヴィータには届かない。

話を聞いていないというより、すでに何かをやめかけている風にも感じる雄叫びで鬼ごっこ再開、あんなもので殴られたら、「冗談でも何でなくなのはが壊れる。」

ついでに、金輪際モグラ叩きだけはやらないようにしようと心に誓った。

叩かれるモグラさんが可哀そう、あれは憎しみを増大させるゲームだ。

『困った時のルビーちゃんだのみ』

「ルビーちゃん！！」

なのはの目に希望の光が宿った。

こんなデット・オア・アライブな極限状態だ。

ルビーだって、きつとお茶目を封印して真面目にやってくれるはず。

「お願い！！」

『お任せあれ』

なのはと並走しながら、ルビーが背後のヴィータを振り向く。

『へいへいへいビツチャービビってる』。へいへいへい』

「誰も挑発なんてお願いしていないのーーーー！！」

なのはの淡い期待はまたも裏切られた。

「ん？ヴィータちゃん？」

気がつけば、追いかけて来ていたヴィータが静止している。

「いい度胸だ白いの……」

「ヴィータちゃんも挑発に乗らないでーーーー！！言ったのはルビーちゃんなのーーーー！！」

「勝負だ！！」

「…え？」

ヴィータが鉄球をツーシームに持って見せつけている。

ツーシームとはピッチャーの直球の握りなのだが…そんな事は今はどうでもいい、何故いきなり、スポ根物の決闘フラグがたった？

『おお、やつと効果が出たようですね』

「…ねえルビーちゃん？ヴィータちゃんに何したの？具体的には暗示系の魔術とか？」

初対面とは言え、彼女の様子がおかしいと言う事くらいはわかる。そして本人の自白までつけば、この状況で何かしたのはこいつしかないのだが…それでも疑問は残っている。

仮に暗示の魔術だったとしても、感知系が苦手とはいえ直ぐ傍にいるなのにも気付かれずに使えるものでは無いだろうし、ヴィータだって、魔術を知らなくても魔力で干渉されれば気がつかないほど鈍感にも見えない。

『いえいえ…ただの催眠術ですよ』

「催眠術！？」

『赤い連中って基本的に正義の熱血漢ですけど、割と単純なんですよね』

「それは赤い人とか赤が好きの人に対する挑戦状になると思うの」
シロウとか遠坂凜とか結構条件に該当すると思う。

この物体が、いまさら何をしようと驚くには値しない。

本人がやれると言っているし、ヴィータの様子を見れば事実出るのだろう。

「でも何時の間に催眠術なんて」

『魅惑のルビーちゃんダンスです』

あの意味不明に飛びまわったり震えたりしていたあれか…あの動きの中に催眠術の要素を混ぜていたと言うわけだ。

それ自体はすごい事だと思っし、事実すごい事なのだろうが…直視する事さえ危険なのか、この物体は？

魔力を介入させなかったから、ヴィータ自身も気付かないうちに

催眠にかかったと言うのは理解できたが、気になるのは何時からでヴィータが催眠状態に陥っていたのかと言う事だ。

やっと効果が出たとかルビーが言っていたが、割と最初からずれていた気がするのではつきりどの時点でと言うのが分からない…どこまでが彼女の素だろうか？

「さあ、魔女っ子君！一球入魂の勝負だ！！」

どや顔なヴィータのお目目の中でお星さまが輝いていた。

「ルビーちゃん、ドイウコト？」

「ルビーちゃん催眠で催眠状態になると、108通りからランダムにセレクトされた人格が一時的に上書きされるのです。今回は分かりやすく、友情・努力・勝利の人みたいですな」

「それって本当に催眠術？」

もつと別の、危険な何かに思えてしょうがないのだが？

まあ、猟奇的な人格じゃなかったただけましと思うしかないだろう。

「さあ魔女っ子君！」

「えっと、なのは。魔女っ子じゃなくて高町なのはだよヴィータちゃん？お願いだから魔女っ子は止めてほしいな」

「高町なのは君か、とてもいい名前だね」

どうしよう、ヴィータがウザいレベルでさわやかだ。

あるいはさわやか過ぎてウザいと言うべきか？

しかも芸能人並に白い歯がキラツとばかりに光を反射している…

今は夜中、何の光をそんなに反射してるのだろうか？

「大丈夫、ボールは友達、怖くないよ！！」

「それって野球じゃない球技だね？って言うかヴィータちゃんの持っているボールは鉄球ですから！！そんな物シュートしたらなのはの足の方が壊れちゃいますから、残念！！」

自分の足を粉砕骨折させかねない無機物は十分怖いし、そんな物と友情が成立するとは思えないし、結びたいとも思わないし…むしろ積極的にごめんなさいである。

だれが砲丸と友愛を結べますか？某愛と勇気だけが友達のヒーロー

ならあるいはと思わなくもないが、なのはには無理である。

『でもなのはちゃん？これはもう勝負を受けないとダメっぽいですよ』

「うー」

ルビーの言っている事が理解できるので、なのはは唸るしかなかった。

どう見ても、ヴィータは勝負し^{デュエル}ようぜー！！と言う目でなのはを見ていて、別の意味でのバーサク状態だ。流れるにも、ひと勝負しないとおさまりがつきそうにない。

「しかたないな…一球って言ってるから、多分あの手を持っている一個だけだよね？」

『さっきのように4個同時じゃなければどうにかなりそうですね、所でなのはちゃん？何でレイジングハートを仕舞うんです？そして何故ルビーちゃんを掴んで構えるんですか？』

「え？壊れたらレイジングハートが可哀そうでしょ？」

なのはの構えたルビーは、まっ直ぐヴィータを指している。

「さあ、来るがいいのヴィータちゃん！！なのはが勝ったら色々お話ししてもらうからね！！」

『やっぱりまたルビーちゃんをバットにするんですねー！！？そしてルビーちゃんなら壊れてもいいと言っんですかー！！？』

「ルビーちゃん…信じてるよ」

『この状況でその台詞は卑怯ですよ！！しかもパツチりって星が出そうなウインクしながらなんて、畜生可愛いじゃねえですか！！何時の間に女の武器を身につけてるんですか！！？』

「ありがとうルビーちゃん。褒め言葉と思っておくの」

「フツボくを相手に予告ホームランとは、それでこそライバル！！ルビーの必死の訴えはヴィータの声にぶった切られる。

なのははいつの間にライバルにされていたのか全然わからなかったが…人格を上書きされていても、やはり基本はヴィータのままなのか？

きつと意味などはないのだろうと思うので、考えたら負けだ。

「いくよ、なのは君！！僕達の銀河は、きつと輝く！！」

わけが判りません。

ヴィータがポンと鉄球をテニスのサーブのように、自分の直上にほうり上げた。

ツーシームはどうしたツーシームは？

「つてええ！？」

『げ、元氣玉！？』

なのはとルビーが驚きの声を上げる。

ヴィータがほうり上げた鉄球が膨張と言うべきか巨大化というべきか、目に見えて膨らんでゆくのだ。

運動会の玉より、ふた回りは確実にでかい。

そしてそれを打ち出そうとしているハンマーも、ギガント状態だ。

「これが僕の全力全開だ！！」

「それはなのはの台詞なの！！」

台詞を取られたのはに向けて、特大大玉が打ち出された。

しかも、あの大きさと結構速い、基本的に衝撃とは質量×速度で威力が跳ね上がって行くものである。

「ルビーちゃん！？いつもの不思議ばうわーでがんばって！！」

『無理無理無理無理無理無理無理無理ですー！！！！』

「大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫だからー！！」

この期に及んで…案外余裕でもあるのか？

向かってくる鉄球の大きさは、なのは達を覆って尚お釣りがくるほどデカイ。

避けようにもすでに遅く、プロテクションを展開してもそれごとプチッと潰されそうだ。

「にゃー！！！！！！！！」

『あはあー！！！！！！！！』

これは流石にまずい、走馬燈のOPが 千の風になって だった

とは初めて知ったが、それすでに死んでいるから！いきなりクライマックスがデフォなのか？

安西先生、あきらめる前に試合終了しちゃいそうです！！

「なのはーーーーー！！！」

「にやあああああああーーーーー！！！」

EDの《蛍の光》が終わり、スタッフロールと共に 高町なのは9年間の人生終了のお知らせ がながれ始めたが、いきなりなのはの視界と悲鳴が右から左に流れた。

「何！？」

最初にそれに気がついたのは、当事者であるのでは無く、少し離れた場所にいたヴィータだった。

鉄球が当たる寸前に、新たな人物がなのはを横から攫って鉄球の軌道から逃げたのだ。なのは達がいた場所を通り過ぎた鉄球は、背後のビルに衝突して粉碎した揚句に爆散した。

「だ、誰だ！？つつく！？」

飛びだそうとしたヴィータの動きが脈絡なく止まる。

勿論、彼女の意味では無い。別の要因がヴィータの動きを止めたのだ。

「バインドだと！？」

ヴィータの腕は、光る円環状のバインドが掛り、その動きを拘束している。

以下に破壊力抜群の武器とはいえ、それを動かす力点であるヴィータ自身を拘束してしまえば、それを振るう事は出来ない。

はつとしたヴィータが見つけたのは、緋色の犬耳としっぽを持つ女性…アルフだ。

彼女は更にバインドを発動して、ヴィータの残りの四肢も拘束してゆく。

「えっと、何かなのはさんが攻撃されていたんで、とっさにバインドで拘束しちまったけどよかったのかな？」

GJアルフである。

「ごめん、遅れた」

「え？」

迫りくる鉄球の恐怖に目を閉じていたなのはが、声に応じて目を開けると、そこには黄金の輝きがあった。

「フェイトちゃん!!」

見間違えるはずなど無い。

至近にあるのは親友の安堵した顔、なのはは悲鳴にも似た叫びで彼女の名前を呼んだ。

「結界の中に侵入するのに手間取って…」

「フェイトちゃんフェイトちゃんフェイトちゃん!!!!!!」

「な、なのは？」

今の二人の状況は、フェイトがなのはを両の手で抱えている。

所謂、お姫様だっこの状態だ。

そこから首に手を回され、ぎゅっと抱きつかれた方のフェイトが目を白黒させるしかない。

「こ、怖かったの…」

「う…」

瞳から涙がこぼれ出しているなのはを見たフェイトは、我知らずうめいていた。

身のうちから湧きあがってくる物がある、保護欲と似ているがもつと何と言つか…上手い言葉が見つからない。

(マスター)

(ば、バルディッシュ!?)

念話で話しかけてきた相棒に、フェイトがはっとする。

（今マスターは、言葉に出来ない“トキメキ”を感じていると思いますそれが萌と言うものです（どーんと断言）！！）

「そう、これが萌なのね…」

「フェイトちゃん？」

思わず声に出ていたらしく、とつさにフェイトがなのはから視線をそらした。

「だ、だいじょうぶだよなのは、なのはは死なないわ、私が守るもの」

「あ、ありがとう」

「いい、だってなのはは私の嫁だから」

「…え？」

やっとなのはが何かおかしいと気がついた。

『フェイトちゃんがデレた。フェイトちゃんがデレた』

『フェイトさまが萌ました。フェイトさまが萌ました』

『マスターが攻略された。マスターが攻略されました』

「ええ！？何でルビーちゃんとレイジングハートにバルディッシュまでアルプスの少女風にテンションあがってるの！？」

しかも、バルディッシュの物言いが特に不穏当だ。

誰が誰を攻略したと？

『『『わーいわーい』』』

三人：三機のデバイスと礼装は、腕があれば音高らかにハイタッチを決めていただろう。

「何で練習したみたい息ぴったりなの！？」

『『『いえ、全くのアドリブですがなにか？』』』

良い仕事してますね、ちなみに第三者から見れば、現在の二人の様子は顔を赤くした美少女が、これまた美少女を抱えて見つめあっていると言つ実絵になる状況だ。

「ひゃ！」

「な！？」

見つめあふ（主にフェイト主観）なのはとフェイトの間をすり抜

けるように、白いものが通り過ぎだ。

比喻では無く、本当に白い何かだ。

「す、すずかちゃん？」

あわてて見れば、何時の間に現れたのか、近くのビルの屋上にすずかがいた。

しかも極上の笑みで、両手には片方4本ずつ、計8本の黒鍵を握っている。

さつき、二人の間を通り過ぎた白い色は、文字通り白刃の白さだったというわけだ。

「あぶなかつたね、なのはちゃん？」

「う、うん」

すずかの言葉に頷きながら、今一番危険を感じるのはすずかのようない感じがするのは、気のせいでは無いだろう。

半年前に魔術の道に入って来た彼女だが、元々吸血鬼の因子が魔術に適性があったらしく、なのはほどの魔力容量こそない物の、メキメキと制御や礼装の製作などに才能を発揮している、すずかが持っている黒鍵も、全て彼女のお手製だ。

修業を始めて、まだ短い時間でありながら、すでに見習い魔術師の域に達している彼女は、なのはと方向性こそずれているものの、彼女もまたまぎれもなく天賦の才の持ち主だった。

「フェイトちゃん？」

「何、すずか？」

ギシリと、視線をかわす二人の間で、目に見えない何かがきしみを上げた。

「フェイトちゃん、なのはちゃんを嫁にするのは、残念ながら日本で二番目よ」

「…それなら、一番は誰」

すずかがにやりと笑い。

無言で自分を親指で指した…貴女は何処の快傑ズバットですか？
「フェイトちゃん？そろそろなのはちゃんを降ろしてあげて欲しい

な」

「だめ、なのは私が守るの」

親友のはずなのに、二人の交わす視線は苛烈そのものだった。

再び二人の間で目に見えない何かがきしみを上げる。

「フェイトちゃんもすずかちゃんも落ち着いて!!」

そして、全く望んでなかったわけではないが台風げんいんの目は何処までも無風だった。

「何やってんだいフェイト？」

頭上で展開される女だけの三角関係を見ながら、アルフがやれやれだぜな顔をする。

男がいなくても三角関係と言うのは成立するのだなと妙な感心もしていた。

「君こそ何やってるんだ！」

「ん？」

振り返れば、バインドで空間に貼りつけにされたヴィータがいる。
「いきなり勝負に乱入してくるなんて、君には男の美学と言うものがないのか!？」

「いや、あたしもあんたも女だろ? そんな、孤独な笑みを夕陽にさらして背中で泣いてる趣味はないよ」

当然、たとえるなら風をはらい荒くるう稲光的な固有結界の持ち合わせもない。

「まあいいや、こっちはこっちで始めちまおう。あんた一体「必殺——!!」な!？」

とりあえず事情を聞こうとしたアルフだが、いきなり降って来た声と、必殺と言う物騒極まりない言葉に、とっさに背後に飛ぶ。

「ザッフィーラキック!!」

直前にいた場所に蹴りが降って来た。

いや、正確には男が蹴りの体勢で突っ込んできた。

「む、避けたか!？」

いきなり蹴り込んで来たのは男だった。

久しぶりの男性キャラの追加である。

青と言うよりは紺に近い色の袖なしの上着に黒のズボン、両手足に手甲と脚甲を装備し、露出した二の腕は筋肉がラインを引いている分かりやすい格闘キャラだ。

そして一番の特徴は銀の短髪から生えている青の犬耳だろう。

よく見れば青の犬尻尾もはえている。

「そりゃあ、あれだけ大声で叫んで蹴ってくれば避けるに決まっているだろう?」

逆に言えば、完全な不意打ちでは避けられなかったかもしれないが…そんな事を考えていると、男が精悍と言うべき顔立ちをにやりと笑いの形に歪める。

「フン、これだから…」

「あん?何が言いたいのさ?」

馬鹿にされている態度に対して、アルフが犬歯を剥きだしにして威嚇する。

「確かに、無言で蹴りを放てば確実に当たっていただろう。だが、そこにどんな美しさがある!？」

「……は?」

「技の名を叫びながら攻撃すれば避けられやすくなるのは当然、それでもなお当てる所に機能美以上のロマンがあるのでないか!」

「……まずい」

こいつも美学持ちだ。

しかもヴィータやアルフと違って男で、しかもかなりニヒル…この男なら、都会の闇に体を溶かして口笛吹いてる姿がとっても似合

いそうだ。

「やば、真面目に似合いすぎる」

美形キャラでは絶対に出来ない男の哀愁だが…この男なら、文句

のつけどころがあるまい。

異論なんぞ認めてたまるか!!

「ってそんな事はどうでもいいだろ!!」

自分で自分に突っ込みを入れるアルフがいた。

確実に、そして間違いなくルビーの汚染は広まっている。

「それで、あんたザファイラって言うのかい？」

「む？何時の間に俺の名前を？」

「あいな…」

「お前が自分で名乗ったのだろう。ザファイラ」

「つつ!!」

アルフの全身の毛が逆立った。

蹴りで奇襲された時の比では無い。

全力で現在地から距離をとる。

「大丈夫かヴィータ？」

気がつけば、場にいる登場人物の数が…一人増えていた。

もう一人、桃色の髪的女性がヴィータの傍に現れている。

まさに騎士と言った風の女性で、片手に鞘に入った剣を持っていた。

だが、そんな外見上の特徴などどうでもいい。

「何って気配の消し方をしてるんだい？あたしが、まったく気づけなかった？」

野生の狼をベースに作られたアルフは、人間のそれより五感が鋭い。

そのリーダーに全く引つ掛かることなく、こんな傍まで近づかれていた。

彼女にその気があれば、一刀両断に切り殺されていた可能性は否定できない。

あからさまなまでに、相当な実力者…しかも、最初の男も決して弱くはないのだ。それが一人ではなく二人…そう言った表面的な不利を差し置いても、アルフの本能が警鐘を鳴らしている。

「いい所に来てくれてありがとうシグナム…あれ？」

シグナムと呼ばれた女性に話しかけられたヴィータの目の色が文字通り変わった。

お星さまが輝いていた瞳が、通常のそれに戻る。

「あたい、何してんだ？何でバインドされてんだよ？」

「何を言っているのか分からんが…」

とりあえずと言う風に、シグナムが剣を振るうと、バインドが全て断ち切られ、ヴィータが自由を取り戻す。

「事情は後で聞くとして、見つけたのだろうな？」

「ああ、多分な…あそこにいる白いのがそうじゃないか？」

そう言つて、ヴィータが指さした場所には、未だにフェイトにお姫様だっこされているのがいた。

「あの子が…確認していないのか？」

「それは…」

「なのはさんに何の用だい？」

無視されるのが我慢ならなかったのか、会話に乱入してきたアルフに三人の視線が集まり、本能的にアルフがファイティングポーズをとるのをシグナムが手を上げて制する。

「警戒しなくていい。我々は争う気はない。少し話をさせてほしいだけだ」

「…信じられないね、あんたたちの言葉ってのは肉体言語なのかい？」

「う…」

半眼でヴィータを見れば、思い当たることがありまくる彼女がうめく。

しかもシグナムとザフィーラの冷たい視線まで加わって…さっきまでギガントハンマーを振り回していた本人とは思えないサイズにまで小さくなっていた。

「お前は…」

それで大体の事は察してくれたらしい。

シグナムもヴィータの性格をよく知っていると云う事だろう。

「な、なんだよ？文句あんのかよ？」

「ないと思っっているのか？帰ったら説教だ」

「だー！ー！！ねえちゃんには内緒にしてくれよ！！」

「知らん、説教に溺れて溺死しろ」

撃沈し、魂が抜けかけているヴィータを無視したシグナムがアルフに向き直る。

「失礼した。今回の事は全面的にこちらの非だ。ヴィータが暴走したなどと言いつくをするつもりはない」

「う、すいませんでした」

「申し訳ない」

あつさりと、そして予想外の謝罪、ザフィーラも合わせて三人がそろって頭を下げている。

「あ、ああ」

一気に状況が混乱し、敵かどうか把握できなくなったためにアルフが面食らう。

「あんたら…マジで何もんだい？」

アルフの疑問は尤もだろう。

むしろそこを気にしなかったとしたら、そっちの方が変だ。

「少なくとも敵対する気はない。貴方は彼女の知人と言いつ認識でかまわないか？」

「あ、ああ…そうだね、知らない仲ってわけじゃないよ」

「では、お聞きしたいのだが、彼女は管理局の関係者なのか？」

「何だって？」

アルフの目が鋭くなる。

「ひょっとしないでも脛に傷持ちかい？」

「手前…」

「落ち着けヴィータ、いきなりこんな質問をすれば、疑われてもしようがあるまい。彼女はただ友人の身を案じているだけなのだ」

直情傾向のあるヴィータ相手だと、油断していたら容易く話が脱

狂人である。

「くつつ、すずかは親友…でもここは押し通る…！」

そして、そんなすずかにこれまた速度で張り合っているのはフェイトだ。

「押し通らないでフェイトちゃん！！すずかちゃんもやめてー！！」

更には、二人をなんとか止めようとして必死なのは、始まりそうでは無くとつくに現在進行形になっているカオスな有様を見て、アルフが飛び出した。

無論なのはに加勢する為である。

その後、フェイトとすずかの頭にでつかいたんこぶを作りながらもなんとか事態を収めた時には、すでに三人の姿は何処にもなかった。

12月2日

「ぐつも〜に〜ん」

「おはようみんな」

八神家のリビングに、今日も元気なはやての声がする。

彼女の車椅子を押しているのはシャルだ。

「おはようございます主」

「おはようございます」

そんな二人をシグナムとザフィーラが迎えた。

「お、おはようはやて姉ちゃん…タスケテ…」

「ん？何しとんのヴィータ？」

一人だけ、ヴィータが変な事をしているのにはやてが首をひねった。

リビングの隅で正座をしているのだ。

しかも明らかに足がしびれていると見えて、全身がプルプル震えつつ、目の幅涙を流している。

その胸には《私は騎士失格であります》との文句の書かれたプレートが下がっていた。

「主はお気になさらずに、昨晚少々粗相をした為に仕置いているところですよ」

「ふん、一晩中？」

答えは縦の首肯だった。

一晩中正座していたとなると…今のヴィータの足をちょんちょんしたりしたら、ショック死してしまうかもしれない。

興味はあるが、流石にそれはお茶目の範囲を超えているだろう。

「それで、あのマンガ雑誌はなに？」

一番訳が分からないのは、正座した足の上に置かれている分厚い月刊誌3冊だ。

「そろばんと抱き石にちょうどいいものがなかったの」

「ちよま、シグナムお前そんなこと考えていたのか!？」

知っている人は知っている。江戸時代の拷問の一種で、時代劇の奉行所で時々出るが、真面目に洒落にならない代物らしい。

「なるほど」

「は、はやて」

「事情は知らんしあえて聞かんけど、シグナムがそこまでやるんなら相当なもんやろ? 同情の余地ないな」

「のおおおおお!!」

べたべたに甘やかしはするものの、締めるところはきっちり締める。

それがはやてクワリティー。

「さって、早いとこ朝飯作るかね」

「あ、はやてちゃん。お手伝いしますね」

「はやてくかむばーつく」

「ちゃんと反省するんやで」

妹の願いの言葉を笑って無視する姉の姿が…そこにはあった。

「さてと…」

はやてが台所に入ったのを確認して、シグナムは半眼でヴィータを見る。

据わった目に何を感じたのか、ヴィータの背筋がしゃんと伸びた。「まずなんで“戦闘”などと言う状況になったのか説明してもらおうか？“我々の目的”を考えれば、そんな事になるはずはないんだが？」

「う…そ、それは…成り行きで帽子を飛ばされて…そのまま流れるに…」

「流れるに戦闘にはいるなバカ者」

「シグナム、ヴィータちゃん？見つかったの？」

はやてに断りをいれ、リビングに戻って来たシャルルが会話に加わる。

彼女も昨夜、何が起こったかを大まかながらにも知っているようだ。

「ああ、見つけた。見つけはしたんだが…」

ため息込みの言葉と、やれやれな視線に再びヴィータが小さくなる。

そろそろ、漫画おでんを持たせて“ちヴィータ”と呼んでもいいのではなからうか？

「まあいい、まだ時間はある。何とか誤解を解けるように努めるとしよう。我々には彼女の“協力”が必要なのだ」

シグナムの言葉に、全員が頷く。

「全ては主はやての為…」

「絶対知られちゃいけないんだ」

「そうね、はやてちゃんにだけは私達がやっている事を知られちゃダメ」

「我々は何としても主はやての願いをかなえる」

視線を交わす彼等の心は一つだ。

「『『『今年のクリスマスパーティーに、主はやての恩人である魔女
つ子を招待する！』』』」

おい…ちよつと待てお前ら……。

「みんなーできたからテーブルに運んでーな」

「『『『はい』』』」

そして、いつもどおりに八神家の朝はスタートする。

「そんで食べ終わったら朝から反逆のルルーシュ一期〜R2までを
連続オンエアで〜」

「『『『イエス・ユア・ハインス！』』』」

ヴォルケンリッター達の汚染もとどまるところを知らない。

ノリノリで答える彼等の人気者はオレンジさん、暑苦しいまでの
忠誠っぷりが何気に大人気だ。

賢者の贈り物と言うクリスマス定番のお話を知っているだろうか？

簡単に言えば、一組の夫婦が互いの持つ大事な物の為に、自分の
大事な物を差し出してプレゼントを用意すると言うお話だ。

結局プレゼントは無駄になってしまったが、二人は互いを思いあ
うと言う形に出来ない物を手に入れると言うお話である。

それ自体は実にいい話なのだが…やはりサプライズとはいえ、最
低限の情報交換は必要ではないかと思うのだがどうだろう？

第四話 The Gift of the Magi (後書き)

次回、大暴走の予感

そのうちこのすずかで外伝か何かを書いても面白いかも

第五話 Concentration

『襲われたってどう言う事!?!』

「にやう…」

空間投影されたモニターから響いたユーノの声の大きさに、なのはがうめく。

「ユーノくん、声大きい。もっと押さえて」

『あ、ご、ごめん』

素直に心配してくれるユーノに、そっけない言葉を返してしまつて悪いと思うのだが、今のなのはにはとりあえず余裕がない。

「私こそごめんね、でもとっても眠いの…」

昨日と言つか、すでに今朝の話になるのだが、深夜にあれだけの戦闘エトセトラをやらかせば、10歳にもならない子供に夜更かしがどれだけ困難か?と言う話になる。

何とかルビーとレイジングハート、そしてバルディッシュに記録している三人のヴォルケンリッターの映像と名前、音声データを管理局のクロノ達に送る事は出来た物の、その後はベッドにボタンキユーしたのが大体一時間前である。

やっと寝入れたと思ったら、レイジングハートを介した通信が返ってきて叩き起こされたのだから、不機嫌どころか切れても文句は言われないと思う。

すでに、耳の大きなネズミさんのいない夢の国が手招きしているし、脳内電飾パレードはゴール近くまで来ている。

「心配してくれてありがとね、ユーノ君」

『と、当然だよ!』

えへへと笑うなのはに、モニターの向うのユーノが真っ赤になるが、すでに攻略済みのフラグ立てが終わっているユーノの好感度は最初からMAXなのであまり変わらない。

「うーん…そう言えばリンディさんとクロノ君は?」

送ったメールの内容が内容だけに、真っ先に返信してくるのはあの二人のどちらかだろうと思っていたのだが…。

『…リンディさん達は、今修羅場の真っただ中なんだ』

「修羅場？」

『管理局の仕事は何か目処がたったんだけど、今度はグレアム提督の指令でその原因になった人達の事を調べなくちゃならなくて…』

聞き覚えがある名前が出てきたなと思ったら、ルビーが管理局に持って行かれそうになった時に反対してくれた人だ。

おかげで余計な面倒に巻き込まれなくて済んだし、あの混乱の中でルビーの鎖が解き放たれてもしたら、本当に管理局の崩壊もありえたかもしれない。

結果的にはかもしれないが、管理局を救った英雄である。一度会ってお礼の一つも言いたいものだ。

「ああ、この頃流行りの正義の味方さんのことを調べて修羅場になっていたんだね？」

『え？何を想像していたの？』

修羅場と聞いてベタを塗っているクロノとか、トーンを貼っているエイミイとか、資料片手に背景とモブを書き込んでいるリンディの姿とかが、真っ先に想像できたなのは頭はそろそろ睡魔におかされて「くやしい、でも眠っちゃう」な感じで末期だ。

「あれ…しかしこれじゃアシスタントばかりで作家がいないの？」

『な、なのは？なのはが何を言っているか分からないよ』

「大丈夫だよユーノ君、なのはも何を言っているのか分からないから」

ユーノが、その何処が大丈夫なのかと突っ込みたそうな顔をしている。

「なのは〜」

「なのはちゃん〜」

ちなみに、いつの間にこんな事になったのか、寝ぼけた頭では思

い出せないのだが、なのはベッドにフェイトとすずかが潜り込んでいる。

多分、夜遅かったのでこのまま解散よりは、皆でお泊まり会をしようとかそんな流れだろう。

『な、なのハーレムリターン』

ユーノが何か言っているが、文句を言うのも億劫だ。

ついでに、フェイトとすずかがどんな夢を見ているのか知らないが、とっても幸せそうな笑顔で寝ぼけながらもなのはを引き寄せようとしている事などを考慮して、聞かない方がいいような気がする。

「パトラッシュ…もう疲れたなの…」

って言うかい加減に限界だ。

『あ、ごめんなのは、疲れているのに長く話しちゃって』

「……」

『なのは？』

返事はない。

ただの屍では無いが、ポテンとベッドに倒れ込んだなのはは既に寝息を立てている。

それを見てやれやれと苦笑したユーノが通信を切ると、室内に静寂が降りてくる。…そして起きている人間は誰もいなくなった。

『フッフ、あはあ』

そう、“起きている人間”はこの場にはいない。

ただし人間では無い物はある。

『ふむ、フェイトちゃんはもったこう、なのはちゃんにしなだれかかるように、すずかちゃんはなのはちゃんの胸に顔をうずめるようにして…』

『…姉さん？何をしているんですか？』

レイジングハートが、なのは達の周りを飛び回っているルビーに質問した。

『何って、美少女三人の天使の寝顔を記録に残しておこうかな』

て、これは売れる。売れますよ。』

『姉さん、流石にそれは犯罪です。見過ごせないです。なのは様に言いますよ?』

いくらなんでもなのはにばらされるのはまずいと思ったのか、ルビーがあわてだした。

『な、何を言ってるんですかレイジングハート、これは芸術活動ですよ? お金に変えられないプライスレスです!』

『…今売れるって自分で言っていたじゃないですか?』

『買ったー! ルビー殿、二万までなら出します!』

『バルディッシュ、貴方が要自重です』

がんばれレイジングハート、君が最後の良心だ!!

「闇の書の守護騎士?」

『そう、それが君が遭遇したヴォルケンリッターと名乗る彼等の正体だ』

なのはの言葉に、テーブルを挟んで対面に座っているクロノが頷く。

その隣にはエイミィが、なのはの左右にはフェイトとさすが座って真剣に話を聞いている。

「その闇の書って言うのは…やっぱり、危険なの?」

なのはの知るロストロギアはジュエルシードしかないので、自然とそれが基準になってしまっただが…案の定クロノがうなずいた。

嫌な予感程良く当たる…その諺は、案外正しいのかもしれないと三人は顔を見合わせた。

「元々、闇の書は管理局が長い間追いかけている危険度の高いロストロギアの一つなんだが…詳しい事を話す前に、君に聞きたい事がある」

「え、なのはに?」

「そうだ」

気がつけば、隣のエイミイも真剣な顔でなのはを見ている。

自分に向けられる視線に、なのはは無意識に姿勢を正して聴く態勢を作っていた。

「このお店のお勧めはなんだい？」

「翠屋のお勧めはシュークリーム、焼きたてでとってもサクサクしてるんです。紅茶と一緒に頂くとおいしくてお勧めですよ」……つてあれ？」

質問に営業口調で即答してから、なのはは何かがおかしい事に気がついた。

条件反射おそるべし。

「何でそんな事を聞くのかな？」

「それはここが翠屋と言う喫茶店で、君は経営者の家族だろ？」

「それに良くお手伝いしているらしいし、お勧めは店員さんに聞くのが一番確実だよね」

クロノとエイミイがこれまた即答してきた。

阿吽の呼吸で、何気にコンビネーションがいい。

クロノ達の言うとおり、ここは翠屋の店内、ちなみに仕込み時間兼休憩時間なので、店内には他のお客さんの姿はない。

「すまない。注文いいかな？」

「はいはい。おまたせ」

営業スマイルで現れたのは、ウェイトレス姿のアルフだ。

この店でアルバイトを始めてそろそろ半年……元々元気がよく、順応性の高かった彼女の事、直ぐになのは達と並んで翠屋の看板娘になり、今では彼女の目当てに通う常連さんも付いている。

ちなみに、犬耳に尻尾は隠していないのはどう見てもコスプレだし、おかげで主に桃子の趣味を満足させつつ、そっち系のお客さんのハートキャッチだ。

「シュークリームを五人分とコーヒーを」

「私は紅茶がいいな、なのはちゃん達はオレンジジュースで良い？」

「……は、はい……」

「まいどあり〜待っててね〜」

アルフが注文を聞いて、さっさと厨房に帰って行くのを見送ったのはたちは、啞然としてクロノ達に向き直った。

「あ、あの……ロストロギアの話をするんじゃない……」

「長い話になるし、せつかく喫茶店に来たのに何も頼まないのはそっちの方が失礼だろう？」

「それでいいの？」

「まあ、最悪の場合この世界が破壊されるかもしれないが、甘い物を楽しむ時間位は残されているさ」

その発言に、クロノを知る順番に目を丸くする。

「甘い物は女の子を虜にする魔法だよ〜」

そして何故エイミイは良い事言ったとばかりに、自分の発言に対して頷いているのだろうか？

「クロノ執務官？」

「クロノでいいよ。その代り僕もフェイトと呼ばせてもらっていいかな？」

「う、うん……クロノ……でいい？」

「ありがとうフェイト」

何か、クロノが柔らかい？っと言うよりも余裕がある？

「あ、あの……何かあったんですか？」

クロノとは接点の少ないすずかにまでそんな事を言われるとは、やはり勘違いでは無いレベルでクロノの様子が変だ。

割と失礼な物言いではあったが、当のクロノの反応は苦笑するだけだった。

「自分ではそれほど変わったつもりはないけど、この半年……一皮どころか脱皮位しないと色々やってられなくてね」

クロノが哀愁漂う男前な顔になっている。

しかもエイミイもフツとばかりに遠い目になって……クロノが言う所の色々の内容は、きつと聞かない方がいい事だろう……冗談にしろ

本気で言ってるにしろ、内容がブラックすぎるのが予想出来過ぎる。一度書類の雪崩に遭って埋まると言う、漫画やアニメのギャグでしかないような映像を見ているので、笑って否定が出来ないのが割と厳しい所だ。

「そ、そう言えばリンディさんは？」

空気の悪さに耐えかねたフェイトが、気を利かせて話の方向を変えてくれた。

なのはとさすが、心の中で親友のナイスフォローに親指を立てる。

「母さんはまだ本局だよ。まったく、間の悪い事は重なるものだ。おかげで余計な時間もかかってしまったし」

今日の日付は12月8日、なのは達がヴォルケンリッター達と遭遇してから一週間が過ぎている。

何故クロノ達の到着がこんなに遅れたのかと言うと、原因はアースラがメンテの為にドック入りしてしまったかららしい。

そのため、クロノ達は小さな次元航行艦を乗り継ぎし、世界をいくつか中継してこの世界までやって来た。

なのはから送られてきたデータの検分も合わせてかかった時間が一週間と言うわけだ。

初動捜査は絶望的だなど、クロノが苦い顔になる。

「母さんはアースラのメンテが完了したら、それに乗ってこっちに来る予定だ。それまでは、あの書類の部屋に缶詰だけだね…」

「だ、大丈夫なの？」

あの量を相手に一人とは…リンディに死ねと言っているのかこの息子は？

「その為に、あのイタチモドキを置いてきた」

「え？あ、ユーノ君がいない」

先日 of 剣幕では、真っ先になのはの所に来そうなものだろうに、その姿が何処にもない事に全く気がつかなかったとは…哀れユーノ、君の春はまだまだ遠そうだ。

「でもなんで、ユーノ君がリンディさんのお手伝いを？」

「いや、お手伝いって言えばお手伝いなんだけどね」

何故そこでエイミイが照れる？

そして何故クロノは全力でそれを見逃しているんだ？

まさかオレンジと同じギアスをかけられたわけでもあるまいに？

「……………最近、母さんはかわいい物とかから活力を補充する方法に開眼したらしい」

「は？」

それは間違いなく、一般人にはマネのできないエネルギー補給方法だろう。

「かわいい子が視界の中にとやる気が出るからね」

「ソ、ソウデスネ……」

「やっぱりお手伝いしてくれるのはメイドさんだよな」

「ソウデスネ……」

「お嬢様、紅茶のお変わりはいかがでしょう？とか言われたらキャー……！」

「ソウデスネ……」

全自動でギアを上げて行くエイミイに対して、なのはは機械的にいいとも参加者のような返事をするこゝろできなかった。

具体的に、ユーノが現在どうなっているのか怖くて聞けないし、想像は容易いので聞くまでもない気がするが……これだけは言える。

局員でもない一般人に何させてるんだこいつら？

なのははに助けを求めるユーノの幻聴が聞こえそうだ……しばらくリンディとの通信はつながらないようにしよう……ユーノ・スクライアの人生に救いあれ、場合によっては訴えるのも可だ。

絶対勝てる気がする。

「な、なのはごめんね……」

「あゝフェイトちゃんのせいじゃないよ」

話を振っただけのフェイトに罪はない。

誰が悪いと言うわけではないが、あえて言うなら半年の間に地雷

の数を増やしまくって帰って来た友人の不幸が悪いのだ。

「エイミィ、そろそろ落ち着け…そう言えばルビーは？」

「…っっ！！」

そして今度はこちらのターン、クロノが地雷を踏む番だった。

フェイトとすずかが息をのむが、何故かなのはだけにはっこり笑った。

その笑顔に、クロノとエイミィが何を感じたのか、だらだらと冷や汗をかき始める。

「ルビーちゃんならあっちだよ」

「あっち？」

なのはが指さしたのは、カウンター席だった。

「ういゝひっく」

そこには、解りやすくヤサグレた風のルビーがいた。

『かわいい寝顔を記録保存したくらいで、そんなに怒ることないじゃないですかゝうゝレイジングハートの裏切り者ゝ委員長ゝ』

『ルビー殿、今日はとことん付き合いますぞ！！』

ルビーをバルディッシュが慰めている…のか？

『よくぞ言ってくれました心の友ゝそうとなればアルフさん。高級ワックスもってこゝい。今日はとことんピカピカに磨いて綺麗になってやるんですよ』

『さすがルビー殿、そこに痺れる懂れるゝ！！』

ルビーとバルディッシュがわけのわからないレベルの意気投合していた。

内容だけを見れば、嫌な事があつてくだをまくどこぞの中年サラリーマン同士の会話のようだが、まさか礼装やデバイスはワックスを塗ると酔っぱらうのか？…それとただ妄想に酔っているだけなのか、判断が難し過ぎる。

「あれは、一体何だ？」

あまりに小芝居が臭すぎて、逆に何がしたいのか分からない。

しかも、アルフが「やかましい！店内で騒ぐんじゃないよ！！」

つと投げてよこしたワックスをキャッチして、本当に自分を磨いているし…これが正しい意味での自分を磨くと言う奴かと言う現実逃避は…ダメだな、いくらなんでもそれはナシだ。

「ん？気にしないでいいよ。うちのレイジングハートがとってもいい子だつて言う話なんだから、今はねレイジングハートの特別扱いキャンペーン期間中なの」

『ありがとうございます。なのはさま』

「ルビーちゃんはお仕置きキャンペーン中で無視しているから協力よろしくね」

何となく、ルビーがまたいらん事したのを、レイジングハートが密告して、なのはからお仕置きを受けているのだろうとは思うのだが、クロノとエイミイが見るなのはの笑顔はとっても奇麗で、逆に怖い。

すでに地雷を踏んでいるのに、そのままタップダンスを踊る勇氣は二人共になかった。

『ふ〜んだ。仕返しにあの写真をコンクールに応募してやったもんね〜ですよ〜』

「つつな！？何それルビーちゃん！？私そんなの聞いてない！！」
キャンペーンで無視中じゃなかったか？やはりルビーの方が一枚上手だ。

ちなみに後日、その写真がコンクールの大賞をとりましたという通知が来る事になる…流石は主人公、スペックがマジパネエツ。
「おまたせ〜翠屋特製のシュークリーム、じっくり堪能しやがれ〜つてどうしたんだい皆？」

互いに仲良く相手の地雷を踏みあい、微妙な空気が形成されて身動きのできなくなった場に、シュークリームと飲み物を持って現れたアルフの背中からは後光が差した気がした。

「闇の書とは、古代ベルカの残した魔導書型のデバイスだ」

「古代ベルカ？」

翠屋のシュークリームを堪能しながら、クロノが話を振って来た。やはり、本筋を忘れていたわけでは無いらしい。

「昔、ミッド式の魔法と勢力を二分した魔法体系だよ」

エイミイも説明に加わってくれたおかげで、なのは達の理解が進む。

ベルカ式の魔法とはミッド式と違って対人戦に特化した魔法体系らしい、カードリッジと呼ばれるものを使って爆発的に魔力を高めるのがその特徴だとか、そして優れた使い手を指して騎士と言っらしい。

「ヴィータちゃんが使っていたのがそれなんだね」

あの時は色々な意味で必死だったので、注意して見る事が出来なかったが、思い返してみれば、あの葉莢みたいなものを排出した後、確かにヴィータの魔力が上昇していた。

「古代ベルカのロストログアの中でも、闇の書と言うのはその実態があまり詳しく知られていない。分かっているのは様々な主の元を渡り歩く魔導書だと言う事、その最大の特徴は魔導師のリンカーコアを食って魔力と魔法を吸収し、完成に近づく事だ」

「「リンカーコアを！」？」

なのはとフェイトが同時に驚くが、それも当然だろう。

リンカーコアは、魔導師の心臓と言ってもいいものだ。

「軽く蒐集されるくらいなら回復も望めるが、度を超すと最悪死亡する事もありうる危険な行為だ」

ゴクリと、全員の喉が鳴った。

「じ、じゃあ…なのはを探していたのも？」

「可能性は高いと思っている」

なのはの魔力は、この歳にして規格外だ。

その魔力を蒐集する為に現れたと言うのが、一番無理のない説明ではある。

ただ：ヴィータ達は結局蒐集をする事なく、なのは達の前から消えた事の説明は出来ない。

「魔導師のリンカーコアを吸収する度に、666ページの白紙のページが埋まって行き、完成すると主に強大な力が与えられる…」と言われている」

「言われている？」

「確かに力はもたらされるんだろう。しかし、完成した瞬間にそれが暴走。歴代の持ち主は例外なく死亡している」

なので、闇の書は正しい意味で完成した事が一度もないらしい。

「しかも、一定期間蒐集が行われなければ、持ち主のリンカーコアを食い始める事も確認されている。その場合、主が死亡すると同時に暴走が起こったと記録にあった」

「そんな…！」

「ひどい…！」

なのは達が声を上げたとしても、それは仕方がない事だろう。

闇の書に選ばれた時点で死が確定してしまうのだから、救いようがないと誰もが思った…ただ一人を除いて…。

『その話、何かおかしいですね』

「……え？」「……」

五対の視線が一か所に集まる。

そこにいるのは、いつものように空中浮遊しているルビーだ。

「何がおかしいんだ？」

『全部ですよ。何一つおかしくない所がないですね』

「…詳しく聞かせてくれ」

クロノがルビーに続きを促す。

『いいですか？ルビーちゃんが魔法使いを探すための礼装であるように、レイジングハートが魔法を使うためのデバイスであるように、道具と言う物は目的があって作られるものです。ここ大事、むしろ基本、そこで闇の書を考えてみましょう。まず、魔力を蒐集する為に作られた物だとしたら、完成した状態で暴走するわけがあり

ません」

「魔力を蒐集する為に必要なのは容量、しかも666ページ分の魔力を貯めこめるってはっきりしているんだから、少なくともそこまでの魔力を保持で来るだけの容量はあるはずだよね？」

「なので、魔力のオーバーフローによる暴走はあり得ません」

技術面の話なので、エイミィがルビーの話に合いの手を入れる。

『では最初から暴走するものだったのか？暴走する為の魔力を余所からかき集める必要があるなんて、手間が大きすぎますし、理屈に合わない。では特定の持ち主以外では暴走するのか？つというのも、複数の主の手を渡り歩いていると言う事から考えられない。本当に、持ち主に強大な魔力を与えるデバイスだとしたら、直後に持ち主が死んでいては意味がない…エトセトラ、エトセトラ』

つらつらと感じた疑問を重ねて行くルビーに、久しぶりの尊敬のまなざしが集まる…何で普段それが表に出てこないのだろうか？

『…“道具”として見た闇の書は切り貼りしたようにチグハグで、何を目的にした道具なのか見当もつきません。そこに何か秘密があるのではないですか？』

自らも道具であるルビーだからこそ、その言葉には誰よりも確固とした断言と説得力があった。

闇の書の在り方は、どこまでも歪であると…。

「…なるほど」

一つ頷いたクロノは目を閉じた。

おそらく頭の中で、ルビーの言葉を吟味しているのだろう。

闇の書の抱える大いなる疑問と矛盾について…。

「ルビーちゃん…」

『フッフ、惚れなおしましたか、なのはちゃん？…そろそろお仕置きキャンペーン終了してもいいんじゃないかな〜と思うんですね』

「うん、それとこれは別だよね」

ルビーはやっぱルビーだった。

「ルビー？」

思考が終わったのか、クロノがルビーを呼んだ。

『なんですか？』

「闇の書に関して…管理局が何もしなかったわけでは無い。長く追いかけているのにはそれなりの理由がある」

何故ならばと、クロノが一呼吸分の間をおく、そのわずかな時間にはどんな意味とかがもっていたのかは分からない。

「闇の書には転生・再生機能がある。その為に、主が死亡した時にはすべてをリセットして次の主をランダムに選択して転移する。そうやって魔導師達の手を渡り歩いているんだ。途中で闇の書に干渉しようとしても、接触した瞬間に防御プログラムが働いて、持ち主の魔力を使って暴走してしまう。破壊しようとしても強力な再生機能の前になすすべがない」

『それはまた厄介な…』

「現状、闇の書に対して、僕達を取りうる手段は一つだけだ。高威力の艦載砲撃によって持ち主ごと消滅させる」

「え、クロノ君それって…主になった人ごと…」

思わずなのは話に入ってこようとしたのを、クロノが手を上げて制する。

「悪いが…邪魔をしないでくれ…」

「う、うん」

妙に迫力のあるクロノの様子に、なのはは頷くしかなかった。

「十一年前、発見された闇の書を時空航行艦で移送中に暴走が始まり、その処置が取られた。その時、僕の父は巻き込まれて死んでいる」

「……っつ！？」

少女達が同時に息を飲んだ。

例外は事前に話を聞いていたのだろうエイミイだけだ。

「そう言った個人的な理由があるのを否定はしないし、むしろだからこそ闇の書をどうにかしたいと思っている。…だから教えてほし

い。僕達の魔法は闇の書に対して有効な手段が存在していない。だが、今の僕達には父さん達の持っていない手札がある。君なのはだ」

「あ、そうか、魔術…」

魔法と魔術はそのベクトルが違っている。

魔法でどうにもできないからと言って、魔術にも不可能だとは限らない。

『……概念能力か…それに類する武装なら可能です』

第七聖典に用いられている転生否定の弾丸、あるいは魔力を食らうゲイ・ジャルクで闇の書を刺し、機能を停止させたうえでゲイ・ボウによって破壊するなどの方法は存在する。

『事実、無限転生や特定の条件がそろえば現われる現象その物ですら、直死の魔眼と言う能力によって停止、消滅した事例が存在しますが…』

「そうか…」

ジュエルシードの時にルビーが言ったが、ルビーとなのはが使えるのは、あくまで第二魔法と見習い魔術師レベルの魔術だ。

世界の理を強引にねじ曲げる概念武装や礼装、もしくはそれを可能とする特技の持ち合わせはない。

「ここまでだ…ない物ねだりは無意味だ」

ならば現状の手札でどうにかするしかない。

「闇の書の調査に関しては、これはユーノに頼もうと思う」

「ユーノ君に？」

「本局には無限書庫と言う巨大なデータベースがある。またグレアム提督に迷惑をかけてしまうのが申し訳ないが、連絡を入れれば手を貸してくれるはずだ。問題は我々現場だな」

闇の書に何か秘密があるとしても、現在進行している状況を見ても出来ない。

「僕達がやらなければならない事は、闇の書の主を見つけ出して確保する事だ」

「闇の書の完成前なら、主もただの魔導師だからね」

「その通り、だが今代の主らしき人物は確認されていない。なので僕らはまず守護騎士を確保して主を引きずりだす必要がある」

空間に投影されたモニターに先日の子、シグナム・ザフィーラ・ヴィータともう一人、見覚えのない緑色の女性の映像が現れた。

彼女も含めた4人がヴォルケンリッターのメンバー全員なのだろう。

「そう言えば、守護騎士の人達って言うのは一体何なんですか？」

「守護騎士とは、闇の書と主を守り、蒐集を行うために作り出された魔法生物…なんだが…」

いきなり言葉を切ったクロノに、全員が？マークを浮かべた。

「以前に闇の書が現れた時にも、主の傍にいたのを確認されている…が、記録によると感情のない実体化したプログラムのようだったらしい」

「え？」

「会話が出来るのは過去の記録から確認されているんだけど、ただ魔力を蒐集する為の機械みたいだったらしいわ」

なのははクロノとエイミイの言葉をじっくり考える。

「…それって別人じゃないですか？」

考えて出した結論がそれだった。

実際対面して、言葉を交わしたなのはとしては、あのヴィータを無口で感情がないと言われても、はいそうですかと納得出来かねる。むしろとんでもなく濃かったと思う。

なのはの意見には、クロノとエイミイも同意なのか、しっかりと頷いてくれた。

「ま、まあなのはちゃんがそう思うのも仕方ないよね、調査の途中で私達もおんなじことを思ったわ」

あの連中…一体なにやらかしてきたんだ？

「僕達も、そのおかげで例の事件にヴォルケンリッターが関わっているという確証がなかなかとれなかったんだ」

「ああ、あの事件ってヴォルケンリッターの人達の仕業だったんだ」
そう言えば、どこぞの変身ヒーローのような口上を上げていた。
あのヴィータなら、ノリノリで正義の味方の真似事の一つや二つ
…百や二百でもやるかもしれない。

なので、だからこそやはり別人だろうとしか思えないのだが、あれが感情のないプログラムなら、世界は笑いとにぎやかさに満ち満ちているだろう。

「残念だけど、残っていた映像記録との照合が取れたから間違いないわ」

「そうですか…」

よく分からないが、何か大事な物に裏切られたような気がする。

「闇の書の主が関係してるんじゃないかしら？ 守護騎士にそこまで影響を与えられる人間なんて、他にいないだろうし」

俄然、まだ見ぬ闇の書の主に興味が出てきた。

なのはとしては、ヴィータ経由でいろいろ言いたい事がある。

「…エイミィさん？」

「何、フェイトちゃん？」

「人工的に作り出された魔法生物…それって、私と同じ？」

「ちが…違うわー!!」え？

クロノの否定の言葉を、何かが遮って落ちてきた。

すっとテーブルの上に降り立った人影に全員が凍りつく、すでに皆食べ終えていたからいい物の、そうでなかったら大惨事になっていた所だ。

何てことしやる。

「フェイト・テストロッサ!! 貴方はそんなデータで作られた物では無いわ、生まれこそ普通では無いけれど、貴女はちゃんとした人間、そしてわた…じゃない、プレシア・スタロッサの娘よ!!」

いきなりジョジョ立ちで捲くし立てられたのはアレだが、ちよつと暗くなったフェイトを励ますいい言葉だ…いい言葉なんだけど…こいつ今何処から出てきた？

ばつと頭上を仰げば、そこにはいつもと変わらない翠屋の天井、隠し扉も天井裏もない。

だがしかし、いきなり現われて好き勝手言った上に、自分の発言に照れて悶えているこの人物を、我々は知っている。

いや、この扇情的なドレスと黒の長髪を知っている。

「『プレシアさん？』」

「プレシア・テストロッサ？」

「母さん？」

地獄のような沈黙が来た。

テーブルの上にいる…多分プレシアは固まって動きを止めている。心臓もショックで止まっているんじゃないだろうか？

「な、何を言っているのかしら！？私の名前は…そう、お蝶夫人よ！！」

どこからどう見てもプレシアだった。

全体的に、紫にやたらとこだわりのありそうな所などプレシア以外の何者でもないだろう…ひょっとして、顔につけている実に派手なパピヨンマスクで、自分の正体を隠せていると思っているのだろうか？

何気にそれが一番の謎だ。

「プ、プレシア・テストロッサは改心して、時空管理局の本部で清く正しく自主的に謹慎して…」あ、僕だ。ちよつと早急に調べてほしいんだが、ちよつとプレシア・テストロッサの部屋に行ってくれないか、空間投影型の立体映像が何か使って抜け出し…」ちよつと待ってー！ー！私の話を聞いてなかったのかしら！？プレシア・テストロッサは清く正しく改心しているのよ。そんな事するわけないじゃない！！」

ブチッとプレシアがクロノの通信を遮断した。

それだけで半ば以上自白しているようなものだ。

「…プレシア・テストロッサじゃなければ、きみは誰だと言った？」

クロノの目は何処までも冷ややかだった。

彼もまた、こういう手合いに対する耐性が高まっているらしい。

「だからお蝶夫人と言っているでしょう！！その節穴にはこの蝶華麗なマスクが見えないのかしら！！？」

「いや、それただのパーティグッズだろ？…やはりプレシア・テスタロッサと言う事でファイナルアンサー？」

「お蝶夫人でファイナルアンサーよ！！！」

「いい加減にしつこいな？かわいそうにフェイトなんか真っ赤になってうっむいてしまったぞ？思春期の女の子のトラウマになったらどうするつもりだ？」

「くっ」

フェイトを持ちだされると弱いのか、解りやすくお蝶夫人がうめいた。

以前の感情の薄い彼女なら…いや、それでもやっぱりダメージはでかかっただろうか？

身内のこんな奇行に耐えられる精神力は、それだけで只者ではないだろうから…どこぞの貴公子の如く、その生まれの不幸を嘆かないといいと思う。

「まあいい、そう言う事にしておこう。それでお蝶夫人は何の用なんだ？さつさと帰らないと裁判に響くぞ？」

「くっ、関係ないと言っているのに…貴方達、ヴォルケンリッターが何処にいるのか知りたいんでしょう？」

「……知っているのか？」

クロノを先頭に、全員が話を聞く態勢になり…。

「知らないわ」

そして一気に砕けた。

「君は喧嘩を売るために出てきたのか！？いい度胸だ買ってやるぞ！！そして強制送還してやる！！！」

「全く、これだから子供は…」

「その上から目線がめちゃくちゃム力つくんだがな！」

ここは怒ってもいい所だと思う。

「話は最後まで聞きなさい。確かに何処にいるのかは分からないけど、別に乗り込む必要はないのでしょうか？逆に連中を出て来させればいいのよ」

「出来るのか？」

「こんな事もあるのかと用意していたものがあるわ……」

さっきの事があるので、多少疑心暗鬼になりながらも全員で次の言葉を待つ。

「……こんな事もあるのかと……」

そしたらお蝶夫人がまた繰り返した。

しかも何故か声が小さくなっている。

『ダメですよ皆さん、彼女も科学者なんですから、せつかくのお披露目とお約束を前にして、ノーリアクションはメー!!』

「わ、解ってくれるのね!？」

それが科学者全員に適應されるのなら、科学者とはなんて厄介な生き物だろうか？

『勿論ですよプレシアもとい、お蝶夫人!!さあ三度目のトライです!!』

「三度目とトライをかけたその思いにこたえるわ!!こんな事もあるのかと用意していたものがあるのよ!」

『な、何なんだって!?!』

「ふふ、いいわゝそのハンノウ。アドレなるわねゝそれはともかく、これよ!!」

そうやって現われた物に、全員が目丸くする。

………同日の夜、海鳴の中心に巨大な封鎖結界が展開された。

第五話 C o n c e n t r a t i o n (後書き)

割とシリアスっぽくなったので笑い成分が少なくて不完全燃焼、大暴走までいけなかったので次回は遠慮なくやつちまおうと思う今日この頃、ヴォルケンリッターとの接触は…まあ色々ですよ。

ゲイ・ジャルグの能力が便利すぎる。

ゲイ・ボウがなくても刺しとくだけで永久封印が可能じゃないか？
自分は使いませんが、誰かこのネタでA S 編を書かないかな？

っというわけで、次回はつちやるので・・・ついて来れるか？

第六話 Legend

高町なのはは考える。

何でこんな事になったのだろうか？と…元々、ルビーと関わってからこつち、自分の人生がまともとはいえない物になってしまった事は自覚していた。

なんせ、おとぎ話や伝説の中にしか存在しないような…魔術師である。

思えば常識から遠くに来たものだ、9歳ながらに達観した思いを抱く事もシバシバだが、自分で選んで掴みとった道である。

後悔はない…後悔はないがしかし、この所の騒動はそろそろなのはの限界を超えつつあるのも事実だ。

何せ世界崩壊の危機である。

しかも二回目である。

ハイジャック程度ですら、遭遇する確率は宝くじに当たるより低いと言うのに、それが一年にもならないうちに二回、どれだけ自分の人生は嫌な意味でフィーバーしているのかとすら思う。

一歩間違えば世界が消えると言うのは、自分で言うのもなんだが子供の肩に乗せるのはハードすぎるだろう？

「えっと…なんですかこれ？」

そして、拳句の果てにはこの状況…なのはは今、空にいた。

ただし、いつものように魔法で飛んでいるわけでは無く、海鳴で一番高いビルの屋上から、やたらと太い釣り竿に、ロープに縛られた状態で吊下げられているという…まさに、なんですかこの仕打ちは？である。

「良い質問ね？」

そして、釣り竿の根元にいるのは、例のお蝶夫人であった。

翠屋で、こんな事もあるのかと何処からともなく取り出したのがこの釣り竿だったのだ。

「ヴォルケンリッターが何処にいるかはわからないわ、でも彼等の行動半径を調べたところ、この世界から転移出来る世界に限定されている事が分かったの」

つまり、ヴォルケンリッターもその主も、この世界に潜伏している可能性が高いと言いたいらしい。

「はあ、それはわかりますけど、私がこんな事になっている事と何の関係が？」

「せっかちな、女の子がガツいたらみっともないわよ？」

ひよつとして喧嘩を売られているのだろうか、思わなくもない。ヴォルケンリッターが、なのはちゃんに興味を持っているのは確かでしょ？」

なのはは頷いた。

いずれ謝罪をするとシグナムが言っていたのだから、再度なのはの前に現れるつもりがあるのは間違いないだろう。

蒐集の為に用があるのか、それ以外の理由かはまだ分からないが…「だから、こうしておけばヴォルケンリッターの方からくるんじゃない？」

「アバウトキターー！！しかも、なのはは餌なんですか！？」

『正しくは生餌ですね』

ルビーが補足してくるが、そんな事はどうでもいいのである。

「題して、オペレーション“ヴォルケンリッターホイホイ”！！」

ちなみに、こういう事に反対してくれそうな高町家の皆さんは不参加だ。

今回は特に空中戦がメインになりそうなので、遠慮してもらった。刀が届かなければ話にならない。

すずかの“あれ”はある意味人外の力なので、人間の限界近いスペックもちであつても、カテゴリーヒューマン内に収まる人達と同じことを期待するのは無理がある。

「無茶ですよ！！こんな分かりやすい罠で出てくるわけが…」

「……ヴォルケンリッター参上！！」「……」

「……………何——！？」「……………」

叫び声は、なのはだけの物では無かった。
近くに隠れていたクロノや武装局員やフェイト達の悲鳴も混じっている。

隠れていた意味が全然なくなってしまったが、全員が啞然とした驚きでそれどころでは無いようだ。

「盾の守護獣、ザファイラ——！」

「鉄槌の騎士、ヴィータ——！」

「湖の騎士、シャマル——！」

「列火の将、シグナム——！」

呆れた事に、全員集合している。

しかも真正面から正々堂々と、封鎖結界の中に入って来て名乗りを上げて…こいつら頭は大丈夫か？偏差値はいくつだ？

「やはり現れたわねヴォルケンリッター——！」

全員が金縛りになっている中で、お蝶夫人だけが動いていた。

しかもノリノリで…不安しか湧いてこない！！

「いきなり町中に封鎖結界が現れたんで、何かと思えば…」

「若い女子に対する非道…見過ごせん…」

「手前等、時空管理局だよな？」

「彼女を放してやれ！」

ヤバイ…なのは涙が出そうになった。

味方よりも、顔見知り程度の相手の義理人情に感動してしまう。

「あ、あの…ヴォルケンリッターの皆さん？お話したい事が…」
「者ども、であえであえ…」え？

不満はあるが、ヴォルケンリッター達をおびき出すことには成功したのだから、ここからは会話で問題を解決しようとしたのはの言葉を、お蝶夫人が遮った。

武装局員達がヴォルケンリッター達を囲む。

「こんな畏に引つ掛かるなんて無様ね——！」

「くつつ、卑怯な！！それでも法を守らせる立場の人間が管理局！？」

注）この話は管理局アンチではありません。

「勝てばいいのよ！！敗者に正義を語る資格がないという真理を知らないの！？」

「ちよつと待ってお蝶夫人、それはどう考えても悪人の台詞だと思うのー！！」

注）この話は管理局ヘイトでもありません。

一つ間違えばこの世界が破壊されるのだから、罠だろうがなんだろうが手段を選ぶ余裕などないし、負けるわけにも失敗するわけにもいかないとなのはでも分かるが…もう少し言葉を選んでもいいだろう？

胸元の開いた体のラインがはつきり出る紫のドレスに黒マント…極め付けにこれでもかと言うくらい派手なパピヨンマスクまでつけてこの発言…正気かどうかを問いただしたくてしようがない。

おかげでヴォルケンリッターの皆さんがめっさ警戒している。

「まだ犯罪者の時の癖が抜けていないのか！？って言うか何で君が場を仕切ってたんだ！？」

「遅い。クロノ君遅いよ！！」

本当に今さらだった。

まずなのは宙吊りにする所から気付けよと言いたい。

「見る、武装局員の皆さんのやる気が霧散していくぞ！色々あっても管理局に残ってくれた大事な人材なのに！！」

クロノ…キミの苦勞と哀愁が透けて見えた気がしたよ。

「えーっと、ヴォルケンリッターの皆さん？私は大丈夫だから、まづ落ち着きましょう。」

「フツ、安心してほしい、魔女っ子のなのは殿」

シグナムの言葉を聞いて、なのはは逆に警戒した。

そう言われて安心できた記憶がない。

むしろ、より面倒な事になった覚えは腐るほどにある。

「騎士道大原則一つ！騎士たる者、弱きものを助けねばならない！」

「うわ…」

うめき声が出るほどに、シグナムが何を見て影響を受けたのか分かりやすかった。

すでに瞳にダイヤモンドを輝かせている。

あれは青春の名の下にどんどんやっちゃう目だ。

「それに、ヴィータちゃんの好敵手でもあるしね」

「友の宿敵は…友だ」

「へへ、悪いな皆…」

いや…何でそこで全員がデバイスを構えてワクワクした顔になる？
何所の戦闘民族だこいつら？

「くつ、不本意にも程があるが止むを得ん…」

戦闘の意思を見せられて、ガンジーレベルの無抵抗主義と言うわけにはいかない。

右の頬を張られたら即座に左のストレートを差し出すなんて事、
現実の世界では割と良くある話だ。

「抵抗するなら、力づくで拘束するしかない」

「最初からそのつもりだったのだろう？」

「そこだけはきっちり否定させてもらおう！！」

クロノの言葉に全員が頷いた。

暴走しているのはあくまで…あーくーまーでお蝶夫人だけだ。

「どの道、我々は彼女に用がある（クリスマスパーティーのお誘いをするために）」

「やはり、そう言う事か（魔力を蒐集する為に…）」

両者の考えは決定的なところで致命的に、そして絶妙にずれている。

共に、基本的な認識が一致しているだろうという思い込みから、
逆にそこを問いただす事を思いつかないのだろうが…そのバランス
はある意味芸術的でした。

「主の為に…」

「それが君たちの意志だと言うのなら…止めて見せる」

なのに、表面上は何処までも熱い空気が流れていた。

「み、皆やめて…!」

なのはの言葉が、逆に開戦の鎬矢となつて両者が激突する。

自他共に認めるヴォルケンリッターの将、シグナムはその手に持つ直剣のように、まっ直ぐになのはに向かって飛んだ。

途中包囲を突破する為に、すれ違いざまに武装局員の胴を剣と鞘で薙ぐ、鞘は勿論、剣も峰を返して打ったので、死んではない。

主は暴力を嫌い、蒐集ですら悪人に限定するほど…そんな彼女の意思を無視する事などできないし、そもそも魔法少女とコンタクトをとることにしたって、主の笑顔の為なのだ。

正直なところ…シグナムを初めとしてヴォルケンリッター全員、なんでこんな事になったのかよく分かっていないのだが、成り行きとはいえ一度戦闘が始まってしまえば、騎士としての意志がそれらの疑問をひとまず棚上げしてくれる。

戦場は考える場所では無い…戦う場所だ。

「行かせない!!」

「む!？」

横合いから突撃してきた黒い人影に反応して、シグナムが剣を向けると、金属音の奏でる甲高い音と共に、吹き飛ばされそうな圧力が来て思わず両手で剣を保持する。

金の魔力刃と銀の刃の起こす鏢迫り合いの火花の先に、金髪をツインテールにした少女がいた。

「やるな、私に守りに入らせた事は誇ってもいいぞ」

「ありが、とう…!」

同時にお互いが相手突き飛ばし、距離をとる。

「さつきも名乗ったが、列火の将シグナムと私のデバイス、レヴァンティンだ。名前を聞いても？」

「…フェイト・テストロッサとバルディッシュ」

「良い名とデバイス、そして迷いのない良い太刀筋だ。よい師に恵まれたと見える」

『フラグ？フラグがたつたと申すか！？』

「貴女とレヴァンティンも」

『D a n k e .』

バルディッシュの発言はどうでも良すぎてスルーされた。

冬まつ盛りだと言うのに、ごくごく小さな場所にだけ木枯らしが吹いている。

「なのはは…渡さない」

「それは困ったな、我々は彼女の協力がどうしても必要なのだ。つと！？」

いきなりシグナムが身をかわした場所を、見覚えのある白い物が通り過ぎた。

「だ、誰だ！？」

「クスクスス…」

「つつ！？」

見れば、近くのビルのわずかな凹凸の上に、見覚えのある少女が危なげなく立っている。

しかもシャリンシャリンと、まるで包丁で包丁を研ぐかのように左右の剣の刃を合わせ、神経を刺激する不快な金属音を響かせている。

僅かにうつむいている為に前髪が顔にかかっているのだが、その髪の間隙から瞳の形をした赤い輝きがシグナムを見返してきているのは…下手なホラーよりよっぽど怖かった。

「クスクスス…私からなのはちゃんを奪おうなんて悪い人…」

これはヤンデレか？と心に問えば、おそらくこれがヤンデレだと答えが返って来た。

しかもシグナムは彼女の地雷を踏んだようだ。
今さら足を上げてても手遅れだろう…後は爆発するしかない。

「初めまして、シグナムさん、私は月村すずか…そしてさようなら
…永久に…」

闇に、吸血鬼の末裔が飛んだ。

後にシグナムは語る。

力が強いとか、技がさえているとか、魔法の強さなどとは別の…
できるならば関わりたくないと感じる何かを彼女は持っていたと…。

「フン!!」

「でりゃ!!」

ザフィーラは、自然な流れでアルフと拳をかわしていた。

素手、そしてバインドや防御系の魔法が得意等の接点が、互いに
自分の敵として相手を見定めたのだろう。

「ガウ!!」

「グルオ!!」

そして二人が似ているのはそれだけでは無かった。

二人とも、緋と蒼の獣と化し、牙を相手につきたてようと争う。

人と獣、両者はその姿を変えながら戦いあっている。

「やるじゃないか、あんたも使い魔なんだろう？」

「使い魔ではない。主の牙となり盾となる存在、守護獣だあっ!!」

二人の間には男女と言う性別の差は存在していなかった。

拳と拳、けりとけりがぶつかり合って魔力同士の干渉による火花
が、星空の輝き以上に互いの姿を飾る。

「雄鳴鳴鳴!!」

「あ、あれは!!」

人間形態のザフィーラが、足の下にプロテクションを展開して蹴
り込んでくるのを、寸前でアルフはかわした。

「…ザファイラキック」

「や、やつぱ…」

なのはプロテクションダイブを見ていなかったら、避けられなかっただろう。

あれは点では無く、面単位での打撃なので打撃範囲が比べ物にならないくらい広いので、全力で回避に回らなければ避けきれない。

盾の守護獣と名乗っていたので、こういう攻撃方法も考慮しておくべきだった。

「…必殺技を出すときは、技の名前を言うんじゃないか？」

「技の名前は後で言ってもいいらしい。盲点だった」

…元ネタはやはりあれか？

強さに泣かなきゃならないあいつか？

「余計な知恵を仕入れてきやがって…なあ、アンタ？」

「何だ？」

両者の距離が開いた事で、会話をする余裕が生まれた。

「あんたも使い魔…守護獣ならさ、ご主人様の間違いを正そうとしなくてもいいのかよ？」

「間違い？これ（クリスマスに魔法少女を招待するの）は我らが意志、我らが主は（サプライズイベントだから）何もご存じない」

「なんだって…そりゃ一体！？」

ザファイラ…言葉が少ないにもほどがあるだろう？

全部話してしまえば、お互いの勘違いが一気に解消されそうなものだが…なぜこんなにすれ違ってしまうのだろうか？

「貴様には関係のない事だが、主の為であれば己が手や体を血に染まる事も厭わず」

しかも何故、ザファイラはクリスマスイベントで血に染まる必要があると思っていやがるのか謎だ…ブラックサンタの伝説でも信じているのではあるまいな？

「我と同じ守護の獣よ、お前もまたそうではないのか！？」

「そうだよ。でも、ただけどさ！理由は知らないけど、あんた達の主

が命令してるんじゃないとしたら……」

「けどなんだ？何より、彼女を囷に我々を呼び出すなど、お前こそ主の間違いを正さなくていいのか？」

「ぐは！！」

思いつきり痛いところを衝かれたアルフが呻く。

人権侵害で訴えられたら、確実に負けるだろうと思えるくらいの自覚はある。

「あ、あれはプレシアがやった事でフェイトは……むしろプレシア殺す……」

「殺人予告とは穏やかでは無いな、悪い事は言わない。考えなおせ」

「お前に……何が分かる！？」

あれ？……何時の間にかアルフとザフィーラの立場が逆転している？

「落ち着け、悩みがあるなら相談に乗ろう。誰かに話す事でその胸にたまったものを流すがいい。殺人と言う暴挙に及ぶ前に、やれる事があるはずだ。」

「お前……良い奴だな」

アルフの目が潤んでいる？

おや、敵味方を超えた何かのフラグがたったか？

「フフ、もう逃げられないわよ」

シグナムにフェイトとすずか、ザフィーラにアルフ、そして残りの面子は、シャマルとヴィータを包囲していた。

「いや、だから何で君が仕切るんだお蝶夫人？」

「ふん、手前が親玉か？」

ヴィータがそんな事を言いながら、ハンマーを突きつけたのはやはりお蝶夫人だった。

まあ、ヴィータの勘違いも致し方がないとは思うが……はつきり言ってお蝶夫人に指揮権はまるでない。

この場の指揮者は当然クロノになるので、本当ならクロノの指示に従うのが筋のはずだ。

なのになんでだれも文句を言わないのかと言えば、実に簡単な話で彼女が間違った事を言っていないからだ。

ヴォルケンリッター達を確保しなければならぬと言っるのは本当だし、やり方はどうあれ有言実行でヴォルケンリッター達を封鎖結界の中におびき出したのも確かだし、二人を包囲している事にしたって、元々彼等もそうするつもりでいたので、彼女の言葉に従って動いても何の問題もないからである。

「わかりやすく派手な格好しやがって…歳を考えろおばさん」

確かに、彼女の着ているドレスとかマントとか、後はやはりパピヨンマスクをつけて平然としている所とか…大きな子供のいる母親の姿として問題を感じないか？と言われれば頷くしかない。

事実、お蝶夫人の目の前でクロノと武装局員の皆さんがそうだそうだと頷いている。

派手と言われても全く反論の余地がないどころか、むしろ知り合いで協力者と言うアドバンテージがなければ、彼女の方こそ不審人物として逮捕されても文句は言えない所だ。

しかし、前半はそれでいいとして…問題は後半だった。

「…何か言ったかしら？この小娘？」

びしりと、お蝶夫人の体から電撃がほとばしった。

マスク越しにでも分かるほどの怒気に、歴戦の猛者のはずの武装局員たちがビビる。

忘れてはいけない……彼女の本業は技術屋だが、同時に高レベルの魔導師でもある。

病気の治った彼女は次元跳躍魔法も使いこなし、その気になればこの辺り一帯を吹き飛ばすくらいいけない実力を持った魔導師なのだ。

天は二物を与えないとかは完全な嘘っぱちである。

しかも厄介な人物に二物を与えちゃったようである。

「ダメよヴィータちゃん、おばさんに現実を叩きつけちゃ。誰だ
って好きで“小皺”を刻んだり“弛んだり”するわけじゃないのよ
?」

「よ、容赦ねえなシヤマル?あたいはそこまで言っただけぞ?」

小さな子をたしなめるお姉さん風だが、内容的には明らかに喧嘩
を売っていた。っと言いか煽っていた。

同じ女だけに、容赦なく同性の闇をえぐる姿は笑顔を浮かべた鬼
のようだ。

味方のはずのヴィータにまで退かれているぞ?

「オホホ伊達にお昼のドラマを煎餅片手に見ていたわけじゃない
のよ。ヴォルケンリッターの参謀役は伊達じゃないわ!」

きつとドロドロで女の意地とか妄執とか愛憎渦巻くドラマなのだ
ろう。

一体何をやってたんだこいつ?

きつと何もやってこなかったたのでテレビばかり見てたのだらう
…この二ト参謀役が…挑発する技術だけむだに高くしてどうする
つもりだ?

「だ、大丈夫か?立て、立つんだお蝶夫人!傷は浅いぞ、がっかり
しろ!」

「誰ががっかりしているのよ!!私?私がかかりって言いたい
!?」

「失礼、噛みました」

「噛んで無い!何所の蝸牛の迷子よ!」

「失礼、本音が漏れました」

「本心だったのね!」

正直な心の声だったらしい…流石はクロノ・ハラウン!!

図太くなつてからキワモノの扱いが上手くなっているぞクロノ・

ハラウン!!

数少ない突っ込み役なのだから頑張ってくれクロノ・ハラウン
!!

「時空管理局って案外色もの集団だったんだな？」

「……失敬な！！」

お蝶夫人以外の全員で、異口同音にヴィータの言葉を否定した。色々やらかしているのは否定しないが、それは全て管理局外の間である。

クロノだつてぎりぎりこちら側に踏みとどまっている……はずだ！！
「まったく、大人の色気も分らない小娘どもが好き勝手言ってくれるわね、果物だつてお肉だつて熟してからが美味しいのよ！！」
「落ち着けお蝶夫人、何が言いたいのか真面目によく分からないから、後すぐ負け犬の遠吠えっぽい……大体、実年齢ならあの二人の方がはるかに上だろう？」

——えるしってるか、ぷろぐらむはとしをとらない

ヴォルケンリッターの二人が一発で固まった。

「は、そ、その通りよ！！」

お蝶夫人の表情がぱつと明るくなって……すつごく嬉しそうだ。

「盲点だったわ、見た目は若く、中身はおばあちゃん。その正体は合法ロリータおばーちゃんと毒舌おばーちゃんなのね！！騙される所だったわ！！」

「騙されるなよ、一応天才なんだから……しかも言いたい放題だな？」
誰か、こいつを大人しくさせる方法を教えてプリーズ……。

「なあシヤマル？あいつらグラーファイゼンの頑固な汚れにしちまつてもいいよな？」

「ええ、私の心も叫んでいるわ、（私にとっての）悪を倒せて……いい言葉よね？」

二人もやる気と言うか殺る気満々だ。

特にシヤマルは（ ）の中に本音が駄々漏れである。

「フン、勝てるかしら？私と武装局員の皆さんに！？」

「……何！？」「……」

「あら？何で驚くのかしら、貴方達は彼女を捕まえに来たんでしょ？」

「そ、それはそうなんだが…」

当初の目的はたしかにそうだった。

しかし、この場に至ってはどうにも私闘に巻き込まれた感が否めない。

やる事は変わっていないのに、どうにも納得のいかない状況だった。

「できれば帰って寝たいと思ってても責められる…だろうな、いろいろな方面と色々な人から…悪いが皆頑張ってくれ」

「……はい……」

武装局員の皆さんの士気が低すぎた。

あからさまに気が進まないのは理解できるが、割り切って頑張ってもらえない。

たとえどんなに気が向かなくても、納得できなくてもである。

「かかって来なさい“おばあちゃんズ”、ピチピチの若さに勝てると思うなら！！」

彼女もやたらとこだわる…最近、自分より年上の人間が周りにいなかったからだろうか？

リンディも変わらないくらいの歳のはずだが、見た目的に彼女の方が年上に見えるし…それでもピチピチはやっぱり死語だと思うんだ。

実年齢がばれるぞ？

「皆やめてっばー！！」

激化する戦場を見下ろす位置で、未だになのはは宙吊りのまま、封鎖結界の中心でラブ&ピースを叫んでいた。

ドラマならこういう時、刃物の一つでも持ちこんでいて、縄を切

って脱出するのだろうか、現実はいよいよに非情で残念である。

こうなると、なのは本来の力で脱出するしかないのだが、当り前に世紀末霸王のごとく筋肉の膨張だけで切れたりしないし、そんな筋肉質の魔法少女は嫌だ。

『あはあゝ皆さん盛り上がっていますね〜』

ルビーの物言いにイラツとくるが、眼下の光景はまさにそうだった。

一部で妙な事になっているようだが、あっちこっちで魔法の爆発が起こり、魔導師達が飛び交っている。

数の差があるにもかかわらず、それと真っ向からやりあっているヴォルケンリッター達の実力は大したものだ。

『あれってギガディンでしょうか？派手ですね〜』

クロノ達のいるあたりの戦闘音と閃光が特に激しい、かなり気合を入れてやりあっているようだ。

あの落雷はお蝶夫人のそれだろうか…非殺傷設定はちゃんと付いているんだろうな？

ついていても命にかかわりそうな気がするのだが…ここはあえて気のせいにしておこう。

さらにドツカンドツカンと餅つきのようなリズムで何かを押しつぶす音も聞こえるので、巨大なウサギでもいるのかもしれない。

「やめてって言っているのに！！」

『誰も聞いてませんね…なのは様、ガンバです』

レイジングハートが気の毒そうに言ってくれるが、あの状況の中ではなのはの声など爆風にまぎれてしまって、誰の耳にも届くまい。

「止めてって…なのは…言ったよね？」

『おや？』

『なのは様？』

ルビーとレイジングハートは、顔を伏せたなのはが妙な気配を放散しているのに気が付いて？マークを浮かべた。

色的に…黒？

なのはの魔力光は桃色だったはずだが？

「…ルビーちゃん、レイジングハート？」

『「は、はい！！」』

妙な威圧感に、ルビーとレイジングハートが同時に答える。

なのはの顔が、見たことのない無表情になっていた。

人間、怒りが度を越しきると無表情が笑ってしまおうと言うが、なのはの口元にもうつすらと笑みが浮かんでいる。

「変身だよ」

『へ、変身ですか？』

『し、しかしなのは様？バリアジャケットは既に展開されていますが…』

お蝶夫人も、女の子の体に縄の痕をつけるのはいくらなんでもダメだと、バリアジャケットの上から縄をかけたのだ…このうでで変身などと言われると…答えは一つしかない。

「変身…いいよね？答えは聞いていないよ」

『「イ、イエッサ！！」』

それはつまり、最後通告であって、本人が言うように確認では無い。

レイジングハートが即座に分解し、ルビーを中心にして新たな形に作りかえられてゆく、現われたのはルビーとレイジングハートが合体した魔法術用礼装型デバイス…同時に、なのはが七色の光に包まれ、拘束していた縄がブチッと音をたてて切れる。

それは物理的なものだけでなく、もっと決定的な何かが切れる音だったかもしれない。

「む！？」

「げ、何だありや！？」

ほぼ同時に、全員が“それ”に気がついた。

封鎖された結界の中を埋め尽くす様な強大で強烈な魔力のほとばしり、気がつかない方がどうかしているほどに濃密な存在感が、いきなり結界内に出現したのだ。

全員の視線が集まる一点…巨大なビルの頂点で、地上から空に向かって駆けあがる虹の中、魔力に包まれながら、一人の少女がその姿を変える。

「な、なのは!？」

「なのはちゃん!!」

すらりと伸びた四肢、大人のスタイルを白と赤の着物に似た外套に包み、銀の手甲と脚甲、身の丈以上の巨大な錫杖型のデバイスを持ち、屋上の縁に降り立った彼女は…魔法使い…高町なのは。

「…ねえ、何で皆してなのはを無視するのかな？」

「………っつ!」「………」

怒鳴り声のように大きくはない。

むしる呟くような小さな声だったのに、何故か聞き逃した人間はいなかった。

そして全員が理解する。

理解できなくても理解出来てしまう。

彼女は怒っているのだ…この上なく怒っているのだ。

重要なんで二回言いました!!

「私、言ったよね?戦わないでって…お話ししようって…なのになんで無視して戦うのかな?なのは…さみしいな…」

言葉と共に、なのはから息苦しいほどに強大な魔力が発散されている。

「いいよ、皆がなのはを無視するなら、無理やりにもお話を聞いてもらうから…」

しかも、なのはの目にハイライトがない!?

危険度のパラメーターが振りきれている!?

『あ…なのはちゃん、無視されてほっつておかれるのにトラウマがありますからね』

全員の血の気が引いた。

理屈？

HAHAHA、子供は感情で動く生き物だよBOY。

「な、なのはちゃん、私たちなのはちゃんを無視したわけじゃないよ！！」

「そ、そうだよ！！忘れていただけ！！」

「フェイト、君はもう何もしゃべるな！！」

「あう…」

あわてているため、実に正直な事を口走ったフェイトをクロノが黙らせる。

正直だから何でも許されるわけでは無い。

「そうよ。貴女の体を張ったヴォルケンリッターホイホイ、見事だったわ！！」

「テストロツサ家は親子揃って黙ってる！！」

お蝶夫人…めんどくさいのでプレシアも、なのはから感じる魔力でいっぱいぱいで頭が上手く働いていないようだ…やはり血か？

以前は守護者と言う同等以上の相手に対して向けられていた力が、自分達に向けられている。

まるで砲弾の装填された八八砲の砲口の前に立っているような緊張感だ。

「な、何だよあれ？」

ヴィータの、信じられないという声に、全員がはっとして再びなのはを見上げ、そして絶句する。

その光景は…まるで曼陀羅のようだった。

なのはを中心に展開される無数の魔法陣…数は、目測で三桁近い！？

「まさか…あの全てが砲撃魔法なのか？」

「た、多分…」

シグナムの信じられないという言葉を、シャルが嫌な意味で肯定してくれた…誰だってそんな嫌なお墨付きは欲しくなかっただろ

う。

『皆さん知ってますか？』

「……………な、何を？」……………」

常と変らないのんびりしたルビーの言葉に、全員が無意識に聞き返す。

『ソーラーシステムってコロニーだって融かせるんですよあはあ』

「……………っ！」「……………」

全員が抱いた未来予想図はきつと正しく、ほぼ同じイメージだっただろう。

「…皆、ちよつと頭冷やそうか？」

なのはがその手に持つ杖を構えると、もはや恥も外聞もなく全員が散った。

だが残念…彼等は「大魔王様からは逃げられない」と言う名言の意味をその身で体験する事になるのだ。

ジェノサイドカーニバル

「大虐殺祭！！」

『怒りの翼を解き放て、ストライク！！』

その光景は正にフリーダムだった。

降り注ぐ浄化の光…桃色の砲撃から逃げ惑う武装局員とヴォルケンリッター…黙示録の日が訪れたとしたら、きつとこういう光景なのだろう。

システムエラー

聖書にある悪人の町もかくやという勢いで、街が桃色の光に吞まれ、さら地へと変貌して行く。

その合間に吹き飛ぶ建物…魔法無しに空を飛ぶ人影…。

「お、おいザフィーラ！！盾の守護獣、なんとかしろ！！」

「後ろに隠れるなどは言わんが、ちよつと待てヴィータ！！我にも心の準備が！！」

「ザフィーラの、ちよつといいとこみてみたい！！」

「むしろ望むところだが四肢を関節技っぽく拘束するなシャマル！！そんな事をしなくても逃げん！！」

「ザフィーラ…気高き守護獣よ…その雄姿、胸に刻む…！」

「勝手に死亡フラグを立てるなシグナム、本当に死んだらどうする！？」

本人もちよつと駄目かもしれないと、後ろ向きな事を思っているようだ。

「くつ、仲間の命を背負い、今！必殺の…！ザフィーラシールドー
ー…！！！」

ザフィーラの前方に、強力な結界魔法が展開される。

「我等も行くぞ」

「おうさー…！！！」

「了解…！」

『『Panzer Schild』』』

シグナムのレヴァンティン、ヴィータのグラファイゼン、そしてシヤマルの手にある指輪型デバイス、クラールヴィントの電子音声
が重なる。

一歩前にいるザフィーラを中心に、残りの三人がプロテクション
を重ねがけたのだ。

やはり騎士と言うべきか、あんな事を言っていたが、仲間を見捨
てる気はなかったようだ。

その友情パワーで作られたプロテクションは、滝の濁流をコップ
で受け止めるような無謀な行いではあったが、ぎりぎりの所で桃色
の奔流を防ぎきった。

ヴォルケンリッター達は、全身ほんのり焦げてダメージを負った
ものの、空中にとどまり続けている。

「見たか、これぞ我等の全力全開…！」

「クスクスクス」

「…え？」

笑ってる。

四人が見ている先で、白い悪魔が笑っている。

「ヴィータちゃんに続き、一度ならず二度までもなのはの台詞を取

「っちゃったんだね？」

「吐けヴィーター！！お前あんな闇笑いを向けられるような何をした！？」

「し、知らねえよ！！あ、あたいはな…に…も…」

ギガントハンマーで追いまわした事とかが、脳裏にフラッシュバックしてきたヴィータの声が尻すばみになって消え、顔色が怒りの赤から真っ青へと信号機のごとく切り替わる。

「あ、あの…魔女っ子…さん？いや、様！」

自分の意思を裏切って、ザフィーラの口調に敬語が混じり、端が笑みの形になる。

逃げられない死の予感に、獣の本能が反応しているのだろう。

背後にいた三人は、ザフィーラの尻尾がすでに丸くなって降参しているのをしっかり見た。

「人の台詞を勝手に取っちゃうなんて悪い子だね？えっと…ザフィーラさん？」

「ま、待つてください！！お話をお願いします…！！」

ザフィーラが何か懇願ぽい事を言っているが、笑うだけで答えないなのはに再び魔力が集まって行く。

広範囲殲滅型の魔法に匹敵する砲撃の嵐を降らせながらも、まだなのはには余裕があるという事実…もうそれは感心とか尊敬を通り越して恐怖の対象だ。

『あはあ…昔の剣豪は言いました。過ぎた力つてのは時として周囲に「卑怯」と取られる事があるらしいですよ』

いやもう、誰の言葉か知らないが激しく同意だった。

再び展開される曼陀羅魔法陣…この時点で世の中は不条理とか思ってしまう。

「なのはと…お話したいの？」

「そ、そうです…！！」

闇笑いしながら、なのはがコテンと首をかしげると、ここぞとばかりにザフィーラが頷いた。

いつもの無口な彼は返上したらしい。

今こそ交渉役ザフィーラの名前は悪役を任じる時だ！！

皆の命……はいくらなんでも大丈夫だから……明日はキミにかかって
いる！！

何かなのはに一番目をつけられている気はするけども…頑張れぞ
フィーラ!!

「お話は大事だね、リリンの作り出した最高のコミュニケーションだよ。そうは思わない？ ザフィーラさん？」

「御尤です！！」

「じゃあ、終わったらゆっくりお話ししようね?」

⌈ ⌋ ! ! ! ! ! ! ! !

交渉は失敗した。

語尾の？だけちょっと可愛かったが、それ以外は容赦なしの待たなしかった。

言葉にならない悲鳴は…数十本の桃色の光の彼方に消える…とりあえずヴォルケンリッター達に、主以外で逆らつてはいけない人間の名前として、高町なのはの名前が恐怖と共に心に刻まれたのは間違いない。

すべてが終わった後に立っていた。もとい、空を飛んでいたのはただの空だった。

非殺傷設定だったため、これだけ大規模破壊を巻き起こしていながら死者は0、ただし巻き込まれた武装局員の皆さんは繰り返し同じ僚や友人に恐怖とともに顛末を語り、最終的には親が我儉な子供に對して「言う事を聞かないと白い大魔王様がOHANASIしくするぞ?」つとなまはげ的な扱いをされるところまで行くことになる。そして伝説へ…生きているうちに伝説を作れる人間は稀である。

たとえ本人が不本意極まりなくても伝説は伝説… 本人が読んで字の如く伝え説かれて嬉しいかどうかは… また別の話ではあるのだから。

後日談として、何でこれほどの力を持つ礼装がロストロギア認定されないのかと言う抗議文が、グレアム提督の元に段ボール単位で届く事になり、老体に鞭打ち過ぎた彼が過労死寸前まで追い込まれる事になる……アーメン。

第六話 Legend（後書き）

大体半分まで来たはず。

プロットを書かないので確かかどうかは自分にもわかりませんが、今回もかなり行っています。が、本当にやらかすのはむしろ次回なんですよ。

完全に原作が壊れる予定です。

さて・・・どうしたものか・・・

第七話 Dream o i c h i

ヴォルケンリッターの一角、鉄槌の騎士ヴィータは昔の事を思い出すのが嫌いだ。

彼女を含め四人のヴォルケンリッターは闇の書を完成させるため、主の補佐をするために作られたプログラム、魔法生物…生まれた瞬間の事を覚えていないように、気がつけば自分に与えられた役目を遂行していた。

生みの親と呼べる人物がいたはずだが、記憶と言うか記録に残っていない。

あるいは思い出せる主の中にいるのかもしれないが、それを確かめるすべはないし、必要性もないだろう。

…知ってどうなるものでも、何かが変わるわけでもない。

重要なのは現在の主、そして闇の書の完成という自分達に与えられた目的、存在意義レイゾンディールの遂行、ただそれだけで事足りてしまう。

他の三人も似たような考えだろう…それを確かめた事はないし、あるいは別の考えを持っていたとしても、自分達の存在理由をブレさせない限りにおいて問題はないはずだ。

…何故ならば自分達は人間では無いのだから。

人間の姿をしているのも、言葉を話せるのも、疑似的な心があるのだって、ないよりもあった方が便利だからだ。

人の中に紛れ込んでいる高ランク魔導師に近づくためには、やはり人間の外見の方が都合がいい。

ゴーレムのように機械的な方が、戦闘には都合がよかったかもし

れないが、それではあまりに目立ち過ぎて、警戒されてしまうだろう。

そう言った都合と便利性でヴォルケンリッターの身は出来ている。

…ヴォルケンリッターは、闇の書を完成させるための“駒”であり“道具”である。

事実、歴代の主達は自分達をそのように扱った。

力を得るための道具として…無骨な鎧型のバリアジャケットのみを与えられ、人目につかないよう、石の地下牢に隔離されたこともあったが…彼等の自分達に対する接し方は正しい。

ヴォルケンリッター達を目的のための手段として扱ってきたのだから…所詮、道具は道具、自分の持ち物に愛着を持つ人間はいても、好意や愛情を抱く者はいないだろう。

それと同じであり、自分達も主達のそういった対応に疑問を感じる事もなく従い、当たり前的事として受け入れて来た。

闇の書の完成の為に、特に問題は無かったから…。

…しかし…もう無理だろう。

ヴィータだけでなく、他の皆も…表面上はどうあれ、昔には戻れない。

…全ては今代の主…八神はやてのせいだ。

彼女は自分達に教えてしまった。

戦わない平和を…暖かく穏やかな生き方を…家族と言う絆を…誰かの為に、命じられたわけでもなく何かをしたいという思いを………

…こんなのは…道具には無用だ。

闇の書の完成に不必要な感情だ。

存在意義を揺らがせるバグだ。

…だが、もう遅い。

手に入れた物があまりにも美しく、あたたかいから…ずっと手放したくないと思ってしまふのを止められない。

自分達だけの“願い”が、身の内に芽生えている。

…はやての笑顔が見たいから、自分達は命令されたわけでもないのに動いた。

プログラムされた命令や目的に何の関係もない行動をとった。それもまた、この世界に来るまでは一度もなかった事だ。

…きつと八神はやてと言う少女は、歴代の闇の書の主の中でも、群を抜いて酷い主なのだろう。

自分達を道具から人間してしまったのだから。
知れば願い、求めてしまう。

知らずにいれば、こんな不安や恐怖を抱く事はなかったはずなのに…はたして、この夢の時間が終わったとき…八神はやての死を今までと同じように受け入れ、次代の主に仕える事が出来るだろうか？

それはきつと、ヴォルケンリッターの誰もが口に出さないけれど抱いている不安で…思えば、長い時を共に過ごして来たのに、彼等に対して同胞以上…家族なんて思った事はなかった。

そう言う目でシグナム、シャマル、ザフィーラを見る事が出来るようになったのも、この世界に来てからだ。

…本当に…八神はやては酷い主で…大好きな姉だ。

ヴィータは昔の事を思い出すのが嫌いである。

闇の書に“選ばれてしまった” 歴代の主…闇の書の■■達
力を求■て他人■■犠にした主…好■心を満た■ために蒐■た
主…闇の書の存■を忌避して怖れ■抱いた主…■■等は皆■■だの
だから…。

…あれ？

■人の例外なく、闇の書が完成した瞬間、彼等は■■だのだ。
多くの魔導師のり■■コアを蒐集し、あるいは自■■達を最後の
■■として蒐■した結果、完成した■■書は■走を始め…。

…あれ、何だこれ？こんなの覚えがないぞ？

そして、■■の書を完成させる事のなかった主も、闇■■に取り込
まれて■■だ。

きつとはやても…■■でしまう。

…待て！ちよつと待て、何だそれは！？ノイズが邪魔で聞こえない
！！ちゃんと分かるように！！

「……ヴィータ…？」

…え？

ふと、名前を呼ぶ声が聞こえた。

大好きな姉が自分を呼んでいる。

それだけで奇妙な焦燥が薄れていく…今、自分は何を焦っていた
のだったか？

…思い出せない…さっきまで何に恐怖して不安だった？…何で…こ
んなすぐに忘れてしまった？

「…ヴィータ…？」

…まあいい、姉が呼んでいるのだ。
それに優先されるものなど無い。

姉が自分と呼ぶならば、妹は応えなければならないのだから…何時ものように朝の挨拶をして笑いあうために目を開けよう。

主で家族で友人で…そして姉であるはやての姿を見ればきっと、訳の分からない不安も淡雪のように消え去るはず。

瞳をゆっくり開けば、世界が光に満たされた。

「おはよう姉ちゃん」

くらむ視界の中に、自分を笑みと共に見降ろして来る人影があった。

「おはよう…ヴィータ…」

にじむ輪郭が明確になる。

藍色の瞳に…栗色の……………ツインテール？

「ちゃん？」

「ぬあああああ！！！」

女の子として色々とまずい叫び声とともに、ヴィータは飛び起きた。

そこは何時ものベッドの上では無く…。

「何で宇宙！？星が見えるじゃねえか！！」

そして星の海のご真ん中に、光をさえぎる“奴”がいる。

「にやはは…どうかなヴィータちゃん、この装備？」

「すつつつごくでかすぎますね！！」

白と黒と青に塗り分けられたボディ、パーツ同士をつなぐ関節部は金色、背中には最大の特徴であるEQFU-3X スーパードラグーン 機動兵装ウイングと、額にトレードマークアンテナをつけたなのは笑顔…そこにいたのは、ZGMF-X20AストライクフリーダムNANOHAだった。

『西の空に…明けの明星が輝く頃…一つの光が…宇宙へ飛んで行く』

「それが、ボクなんだよ」BYモロボシダン「WowWow」
「ミーティアまで持ち出してきやがった!!」

ヴィータの言葉はすでに悲鳴だ。

M・E・T・E・O・R (Mobile suit Embedded Tactical Enforcer) モビルスーツ埋め込み式戦術強襲機」：宇宙を駆ける超巨大兵器の上に、見覚えのあるおもちゃのようなステッキが刺さっている。

同時に、なんで宇宙だったのかも合点がいった。

重力のある所ではミーティアもスーパードラゴンも使えないからだ。

「シリアスうう？いい加減その幻想をぶち壊すところから始めるよブラザー兄弟。」

「西の空に明けの明星が輝いてたまるか!!」

あれ、突っ込むところそこか？

「にはははは、ルビーちゃん、合体だよ」

『あはあ、なのはちゃんとの合体なんて心がトキメキますね』

上昇したなのはに合わせて、ミーティアルビーの一部が変形し、ドッキングする。

大鑑巨砲主義の権化のような代物が現れた。

「畜生、悔しいけど恰好いいじゃねえか!!」

ヴィータのテンパリ方もMAXだ。

おそらく自分でも何を言っているのか分かつちやいまい。

即座に二十以上ある火器が全て展開されたのを見たヴィータの血の気が引く。

「な、なんであたしにそんな物騒な物を向けてるんだよ？」

全ての砲口はローマ……じゃない、ヴィータに至る。

マルチロックシステムの意味が全然なくね？

「受けて見て！ディバインバスターのバリエーション!!」

「絶対に嫌じゃアーーーーー!!」

一機でザフトのモビルスーツ群を相手に出来る火力の一斉射撃……誰が好き好んで受けたいとほさくのか？

少なくともヴィータは、そんな究極のM趣味は持ち合わせていない。

「これが私の全力全開、ジェノサイド・ブレイカー大虐殺祭!!」

ヴィータの抗議もむなしく、オーバーキルをさらに上回る砲撃の光が放たれる。

「どう考えても、ミサイルはデイバインバスターじゃないだろーーーが!!」

最後の言葉がそれってどうよ？

「オーバーキルは嫌だーーーーー!!」

「ゴフ!!」

思わず突き出した拳に、肉を殴打する感触を感じてヴィータはハッとする。

何かをぶん殴った感触だと理解し、聞こえてきた悲鳴に上を見れば、人間が宙を舞っていた。

「チャンス!!」

戦士の本能が訴える。

ここが勝負どころだと。

「まだまだーーーーー!!」

空中の影を追って、ヴィータが飛んだ。

そろそろ落下を始めた人物の背後を取り、バインドで自分ごと拘束すると、そのままギョルギョルと音を立てて高速回転を始める。

「おーもーてーれーんーげーーーー!!」

「ぎゃわーーーーー!!」

悲鳴が聞こえたがやめる気はまるでない。

ここで決められなければ、反撃で自分が終わるのだから必死である。

そのまま二人は頭から地面に落下してゆく。

「バラバラ大脱出！！」

まさか本当にバラバラになったりはしない。

バインドを解除したヴィータが、寸前で離脱する。バラバラと言ったのは、気分以上の理由はあるまい。

ヴィータはそんな風にして脱出したものの、拘束されていた人物はそれに反応できず、頭を下にした状態で“砂”に突っ込んでつかい砂塵を上げ、らせん状の溝を地面に描きつつ、地面に突き刺さった犬神家状態になってやっと止まる。

■ □ ■ □

あの時、本当にダメだと思ったよ。

でも、奴の隙を見た途端、あたしの体は自分の意思を無視して、フィニッシュホールドを決めていた。

思えばありゃあ、毎週購読していた成果って奴かな？

コミックの積み重ねだよ、姉ちゃん達にはちゃんとかたづけろよ。ってお小言ばかりだったけど、それが実を結んだんだと思う。

今じゃあもう手放せねえな、勿論これからもずっと読み続けていくつもりさ！！

U市在住の愛読者、Vさんからのお便り

■ □ ■ □

「読んでてよかった少年ジャンプ！！」

何気に語呂がいいな？

「何をやっているんだヴィータ？」

「お、シグナムー!!」

いつの間にか、傍に目を丸くしたシグナムがいた。彼女がこんなびっくりした顔をするのは本当に珍しい。

「お互い無事みたいで何より!!それより見てたか?一対一で、ヴォルケンリッターの可愛い赤い野獣に敵はいねえ!!」

「赤いタイツを着てから言え、何やら宣伝っぽい事を口走っていたが、おかげで余計に理解が困難になった」

「何言ってるんだ。あの大魔王……を?」

気がつけば、自分達は砂漠のど真ん中にいた。

確か海鳴の街の中にいたはずだが…大魔王の容赦ない攻撃で砂漠になった…と言うのも何か変だ。

しかも……。

「なあ、あいつだれ?」

未だに砂で犬神家をやっている誰かさんは…どう見ても男だった。大魔王様は女である。

「詳しく話を聞くのはまだだったが…」

「なんだよ?」

「私達の恩人らしい」

「……」

本当にヤバイ時、人は無口になる。

「……」

「ヴィータです。」

気がつけば別の次元世界にいたとです。

「ヴィータです。」

なんか魔王様の砲撃が当たる直前に、黒ひげ危機一髪で助けられたらしかとです。

「ヴィータです。」

そんな命の恩人を寝ぼけてぶち殺そうとしてしまったとです。
気まずいことこの上なかとです。

ヴィータです。

その相手が、正座している自分の目の前にたつととです。

何とか窒息する前に恩人（仮）を掘り出して見れば、変な仮面をかぶった男だったとです。

とりあえず死んでなかったんでほっとしたとですが、仮面なのに額に怒りマークを浮かべるなんて、特殊な才能をお持ちの人のごたつです。

マジで怒っているとです。

ヴィータです。…ヴィータです。…ヴィータです。

「何か言いたい事は？」

見渡す限り砂の海のと真ん中…地球とは違う世界の砂の上で、ヴィータは暑さとは別の冷たい汗をだらだらと流していた。

そして、そんなヴィータに対して、仮面越しに怒りの視線をぶつけている男は、ヴィータがイズナ落しを決めた相手でもある。

その頭にはでっかいたんこぶが出来ていた。

こんなにてかいのはギャグ漫画かアニメでしか見た事がない。

「えっと、よく首折れなかったな？」

「おかげさまで防御魔法が間に合ったからね！！間に合わなかったら頸椎骨折か頭がい骨陥没かそれとも最悪のセツトメニューかってどこだったわよ！！三途の河の半ばからバタフライで戻って来たんだから！！」

やけに具体的な事を言う…ひょっとしてこれは、本当に臨死体験をして帰って来た口か？

何故か妙な女言葉をしゃべる男だが、昨今は色々人権の問題とかも絡んでくるのでスルーした。

これ以上地雷を踏むのは嫌でござる。

「仮面がなかったら即死だったわよ！！」

言葉通り、仮面には見事にひびが入っている上に、そこから血が

流れ出していた。

なんとか割れずにはすんでいるようだが、何時パカッと逝っても不思議では無い。

突っ込み？そんなもんを入れられる空気だと思うか？

「ほんつと悪かった。ごめんなさい！！許してつかーさい！！」

ヴィータ涙目…恩人を寝ぼけて殺しかけたというのは、いくらギヤグ補正がかかりそうな世界とはいえ、しゃれでは済まないし、済ませていい事では無い。

人間性が問われる。

ヴィータ自身、逆の立場だったら問答無用でグラーファイゼンを振るっていただろうと思うので、仲間の白い視線と照りつける太陽そして地味にきつい正座による足の痺れくらいは甘んじて受けるべきだろうとすら思う。

「聞いているのかしら！？」

「は、はひい！！」

「あゝそろそろいいだろうか？」

いい加減見かねたというか、見飽きたという感じのシグナムが男に話しかける。

思わず、ヴィータがホツと息を吐いたら、男から視線だけでとてもなく睨まれたので、再びびしつと姿勢をただす。

「助けてくれたのはありがたい。本当に感謝している。…しかし、何故我等を助けたのだ？」

「……」

質問に対しての答えは無言だった。

男の方でも、やっと本題を思い出したのかもしれない。

シグナムだけでなく、ヴィータもシャマルも、ザフィーラだって目の前の男が通りすがりの文字通り仮面ライダーだとは思ってはいない。

仮面は付けていても、バイクが見当たらない…のはどうでもいいが、あの状況での介入…4人の状況を知らなければ、介入しような

どとは思わずがない。

そしてそれでもなお自分達を逃がしたという事は、目的があるという事だ。

「…蒐集を再開しろ」

「……っつ！」「……」

その一言で全員が緊張した。

ヴィータも正座をやめ、グラーファイゼンを構えている。

「貴様…何者だ？」

シグナムがレヴァンティンを男に向けて問いかける。

仮面の為に、刃を向けられた男の感情は読めないが、戦闘の気配は纏っていない。

「…お前たちの主は、闇の書にリンカーコアを食われ始めている」「え？」

何か引つかかるものを感じたヴィータが疑問の声を上げるが、全員が集中している為に聞き流された。

「何…だと？」

「気づいていなかったのか？彼女が自分の体調の不良を黙っていた事を？」

シグナムだけでなく、全員が言葉を詰まらせる。

男に向けたレヴァンティンの刃先が震えていた。

確かにはやてなら、体調が悪化していても自分達に気づかれないように強がってしまう可能性は高いが…まさか…。

「…話は終わりだ」

言いたい事は言い終わったとばかりに、男が背を向ける。

その足元に、転移用の魔法陣が展開される。

術式はミッド式…男の正体は、少なくともミッド式の魔導師のようだ。

「ちよつと待て…」

「ずああああ！！」

いきなり男の足に何かがからみつき、引きずり倒し、地面を擦り

ながら魔法陣の外まで移動させる。

つけててよかった変な仮面、もしなかったら顔面がひどい事になっていたところだ。

今にも壊れそうだが、よくぞ保ちこたえてくれた。

「な、何!？」

見れば、シグナムのレヴァンティンが変形し、連結刃状態になっている。

それが男の足を文字通りの意味で引つ張った物の正体だった。

「常識がないのか!？ 転移魔法の途中で何って危ない事をするんだお前ええええ!？」

発動前に完全に外に出ていたから良かったものの、もし魔法陣の境界線に体が残っていたら、中と外で男の体が分断され、泣き別れになっていた所である。

転移魔法の基本、本格的に転移魔法が発動してしまったら危ないので手出し無用、良い子も悪い子も真似しちゃダメである。

「お前に一つ確かめたい事が出来た」

「確かめたい事があるだけでこんな無茶をするな!!」

男の意見は実に尤もであるが…シグナムはそれよりも気になる事があるのか、じつと男を見ている。

まるで何かを観察するかのよう、そして確かめるかのよう…

その視線に男が居心地悪そうに顔を逸らした。

「……何だ? 悪いがこれ以上話す事はないぞ?」

「いや、そうじゃなく…」

何かを思い出したらしいシグナムが、ポンと両手を合わせた。

「やはり…私はお前の顔に見覚えがあるようだ」

「な!？」

これはいくらなんでも予想外だったのだろう。

仮面越しであつてもはつきりと分かるぐらいに男が驚いた。

「お前…海鳴に來た事があるだろう?」

「そ、それは…」

「幼子にいたずらする為に」

「なんじゃそら——！！？」

それは魂から絞り出した叫びだった。

「とぼけても無駄だ。その仮面顔の指名手配書を見た覚えがある」

「し、指名手配書——！！？」

どうやら、男本人は自分が指名手配されていた事を知らなかったらしい。

「そう言われて見れば、一昨日の回覧版に挟まっていたわね、年末の不審人物に気をつけましようって」

「回覧板？そんなレベルで手配されてるの！？」

シャルルの言葉に、男が啞然としている。

「あたいは見た覚えがないな、シャルル？こいつ何したんだよ？」

「えっと、確か幼女に対する拉致に監禁、誘拐に暴行罪、ストーカ

ー」

「後は猥褻物陳列罪と視姦で懸賞金までかけられている変態だ」

「ちよつと待って——！！！！」
「なにその不名誉極まりない罪状の羅列は——！！」

シャルルとザフィーラがつらつらと手配書の内容を並べて行くのにたまりかね、男が女言葉に戻って反論するが、ヴィータがあからさまに男から距離を取っていた。

最初に幼女の単語が混じっていたからだろう。

自分の外見に自覚があったヴィータがじりじりとグラーフアイゼンを構えたまま後退するのに合わせて、シャルルとザフィーラがさりげなく男との間に入って視線から隠す。

「さいつてーだな——！！」

「ぐは——！！」

シグナムとザフィーラの後ろに隠れているヴィータの男を見る目が、害虫を見るそれになっている。

見た目幼女のそんな視線には、グサリと心を抉りに来る何かがあった。

男が胸を押さえてゆらりとよるめく。

「ち、ちが…そんな事してない！！似たような事をしそうになったけど全部未遂よ！！」

「……未遂でも十分だろうが！！」「……」

御尤もである。

男がヨヨヨとシナを作りながら膝をつく…この男、歌舞伎の女形か何かじゃないだろうか？

さつきから仕草の一つ一つが妙に色っぽい気がするんだが？

「読めたぞこの野郎、ここで恩を売っておいてあたしに続いて姉ちゃんを手に入れるつもりなんだな！？ロリコン！！」

「な、ちが…」

「なるほど、将を射んとすれば馬からか？」

シグナムがようやく合点がいったという風に頷くのを見て、男から言葉が消えた。

無言で言い分を認めたというより、仮面の下で口を金魚のようにパクパクさせているらしい。

思いが言葉にならないのだ。

「そんな下心があつたなんて…感謝して損したわね…」

「お前に一つだけ言っておく、我は馬では無い…狼だ…！」

ヴォルケンリッターの敵意丸出しな視線を向けられ、男がタジタジになる。

特にザフィーラ…何か色々気にしていたようだ。

「ちよま、その話の発展仕方は何！？私はロリコンじゃないノーマル！！普通に、自然に、男の人が好きよ！！」

言った瞬間…場の空気が変化した。

全員が白い目になり…ヴィータの代わりに、今度はザフィーラが距離を取る。

まあ、女言葉を話していて、しかも女に興味がないとぬかした揚句、男が好きでそれがノーマルとかほざくような“男”を前にすれば…当然の反応では無いだろうか？

「はあ！！ま、待つて…そう言う意味じゃなくつて…」

自分が何を言ったのか、やっと理解したらしい男が慌てるがもう遅い。

「…すまないが、名前を教えてもらっていいか？」

「ロツテ…ってしまったー！」

ザフィーラの問いかけに、思わず素で答えてしまった男が絶叫する。

ガムを連想してしまう名前だが、どうやら本名だったらしく、それがNGで焦っているらしい…だが、この場はとりあえず置いておこう。

「ロツテ殿か…すまん」

いきなりザフィーラに謝られた。

「世の中には色々な趣味を持った人間がいるが…我ではお前の思いには応えてやれそうにない」

ザフィーラがごめんなさいしつつ、いつもの無表情を無理やり作ってそっぽを向く…何でシャマルはそんな期待するような視線を、二人の間で行ったり来たりさせているのか？

こいつも腐ってやがるのか？

「ち、違うの…そんなんじゃない…そんなんじゃないんだからー！」

男は逃げ出した。

仮面から目の幅涙を流しつつ…ヴォルケンリッターは、去り行く彼にどう声をかけていいものか悩み…そもそも出来れば声をかけるのもちよつと嫌だなーとか思ったりしながら、結局姿が見えなくなるまでその後ろ姿を見送ることしかできなかった。

「アリア！…！」

「ぎにやあああああー！」

グレアム提督の使い魔の片割れ、リーゼ・アリアは本局で仕事をしていたところ、いきなり後ろからのタックルを食らって吹っ飛んだ。

そのまま襲撃者と一緒にごろごろと転がり、壁に激突してやっと止まる。

「だ、誰！？ってロツテー！」

身を起こして見れば、自分と同じグレアムの使い魔にして双子の片割れ、リーゼ・ロツテだった。

しかもマジ泣きしている。

これで何かあったと思わない奴はいねえ。

「な、何があつたの！？」

「？ 鹿鹿・・・××（カクカクシカジカマルマルバツバツ）！！」

「な、何ですってー！！ やっぱりあの杖がー！！！」

何でそれで伝わるんだ？

やはり双子だからか？

「子供も女の子も好きです！！でも男の人はもーっと好きです！！」

「わ、解ってるわ、貴女は正常、普通、何の問題もないから落ち着いて、ね？」

「うん……」

未だに泣き続ける姉妹を腕に抱き、リーゼはルビーに対する新たな怒りを燃やすのだった。

第七話 D r e a m o i c h i (後書き)

まずはごめんなさい。

この話で完全に原作崩壊まで行くつもりだったんですが、行けませんでした。

だって… ヴィータの夢オチで行こうって考えたらテンション上がりまくり… 妙に話が伸びるわ、もっと書き込みたいわで… 9000文字オーバー！。

ついでに不二子先生にもごめんなさい。確かあの人夢オチダメとか言ってた気がする。

次回完全にやらかします。

暴走振りは今回が上かもだけど、やらかすのは次回が上かな？

第八話 The second generation

リリカルとマジカルの全力全壊、前回までの三つの出来事!!

一つ、闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッターが復活、なのはに接触してきた!!

二つ、闇の書の回収と主の保護を目指す管理局とヴォルケンリッター達はすれ違いの果てに戦闘に突入、私の話を聞いて!!とばかりに魔法使いに変身したなのはの怒りが炸裂!!

三つ、正体不明の仮面男がヴォルケンリッターを救い、はやての危機を告げ!!紆余曲折の果てに、何故か管理局の猫姉妹はルビーへの復讐を改めて誓うのだった!!

『あはぁおっけーですよルビーちゃんはいつ何時、どんな相手からの挑戦でもどんとこいですよ』

「ルビーちゃん、ルビーちゃんは何言ってるのか分からないよ?」いきなり脈絡もへったくれもなくチャレンジャーカモン宣言をやらかし始めたルビーになのはが面食らう。

『あれ、今誰か呼びませんでした?おかしいですね、何やらネコ耳な誰かの怨嗟の声が聞こえたような気がするんですけど?』

「ルビーちゃん、色々と恨み買ってそうだもん、流石は常時妙なところと電波がつながっているだけの事はあるね?」

なのはの物言いが割と辛辣だった。

普段ならもう少しオブラートに包む物言いをする子なのだが、言葉を繕う余裕がないのだろう。

『いやそれ程でも』

「…褒めてないから…」

『ああ、なのはちゃんの突っ込みに勢いが無い！！これはいいよまずいのでは！？』

「なのはの…存在意義が突っ込みみたいと言わないで…」

冗談はさておき、なのはの調子の悪さは一目瞭然だった。

現在の彼女は、タレなのフォームでベッドの中で唸っているのだから…例の魔法使いへの変身による反動、筋肉痛である。

魔法使いになればこうなる事は予想してしかるべきだったのだが、それをすっかり忘れて、感情のままに大暴走をやっちゃったもんだから自業自得以外の言いようがない。

「なのは様…大丈夫ですか？」

「うう、だいじょうぶなの」

ベッドの横で心配そうに聞いてくるアリシアに、なのはも頑張つて返事を返す。

笑顔を浮かべたのは見上げた根性だが、まともに動けない状態を大丈夫というまい。

「アリシアちゃんのメイドさん姿に癒されるの」

「あ、ありがとうございます」

そう、今のアリシアはメイドさんである。

ほめられたことが嬉しかったのか、ほんのり顔を赤くしているのが実にGOODですね。

「なのは、お水はどう？」

「うん、ありがとうフェイトちゃん」

しかも姉妹でと言うのがポイント高い。

ダブルメイドさんに世話をされるなのは…どこのお嬢様ですか？と言う状況だった。

「グフフ、可愛いわーアリシアもフェイトも」

『はいはいプレシアさーん、とっとと手を動かしゃがれですよ』

「ギニャー！！！！」

ピシッと音がしたと思ったら、別の意味でとろけていたプレシアが悲鳴を上げた。

蝶華麗なマスクと派手なドレスはすでにキヤストオフ済み、何故かマスクはルビーが付けていると言う訳のわからなさぶりである。アリシアの「ママ、その変なお面は何？」の一言に、自分ちよっといけてない？とか思っていたプレシアの勘違いは崩壊したのだ。

ただし、彼女の異様がそれで衰えたかと思えば…そんな事は全然なかった。

今の彼女は素の状態…素プレシアとか言えばちよっとハイソな響きだが、この女の基本装備はジャージに瓶底眼鏡、適当にまとめたポニーテールである。

人目がない場所とか、気を使わずにくつろぎたいときはこの姿になるらしいが、正座した彼女の目の前に置かれている昔懐かしのミカン箱とのマッチングが凄まじく合っている。

しかもその上にはやたらと数のある原稿用紙に鉛筆と来れば何処の苦学生か漫画家という具合だ。

「ル、ルビーちゃん！何かしらその鞭は！？どう見てもおもちゃなのにやたらと芯まで響いて来たわ！！私にはそっちの趣味も才能もないのよー！」

どうやらお目付け役らしいルビーが、彼女の言う所のおもちやの鞭を羽根の部分で持っている…ピシッという音の正体はこいつだったらしい。

『魔力で強化しているだけですよ…さあ女王様とお呼び…では無く、さっさと書くがいいのですよ』

「は、はいはいはい！」

ここには10歳にもならない女の子が三人もいるのに…情操教育と言う言葉を知らないのか？

特にプレシア…子供は親の姿を見て育つ物だぞ？

「一まゝい…二まゝい………二十八まゝい…あと972枚足りない」

目の幅涙を流しながら、プレシアがやっているのは漢字の書き取り、今回のもろもろに対する罰だが、内容を考えたのがフェイト、流石は小学三年生である。

そして千枚と言う数を決めたのがアリシア…全然容赦なしである。四百字原稿用紙千枚なので、ざっと四〇万文字書くまでプレシアは許してもらえず、スキップ禁止を娘達から言い渡されている。「ね、ねえアリシア？タイピングで書きちゃダメかしら？そしたらママ、赤城リツコばりの高速タイピングを披露して一時間もたたずに終わると思うんだけど？」

「…ママ？」

「はい、ごめんなさい」

娘は強し、母は弱しで涙目のプレシアが漢字の書き取りに戻る。プレシアもアリシアとフェイトには頭が上がらない。

そして以前助けてもらった事からなのにも頭が上がらない上に、ルビーは存在自体が無茶な奴なので言わずもがな…高ランク魔導師のはずなのに、この場におけるヒエラルキーが一番下なプレシア・テストロッサであつた。

「なのはちゃ〜んお湯もつて来たよ〜」

そんなプレシアに同情していると、タイミングよく入ってきた三人目のメイド、すずかがお湯を入れた桶にタオルを持って部屋に入つて来た。

ちなみに、三人娘のメイド服は月村家からのレンタル、形から入るのがジャパニーズクラティー。

「三人ともごめんね」

なのはが申し訳なさそうに謝る。

本来ならば、家族に手伝ってもらふべき所かもしれないが、それぞれ学校に店になどの事情がある…なのはは知らない事だが、事実高町家の皆さん三人による押しの強いジェットストリーム説得に折れたからだ。

そしてプレシアは、アリシアとフェイトについてきたおまけであ

る。

お仕置き中なのでスキンシップは出来ないが、久しぶりの娘たちとの再会に、なるだけ傍にいたいのだろうと察してみる…早くお仕置きが終わるといいな。

「さあ、体を拭こうね」

親友に手伝ってもらうのは心苦しい事この上ないが、今のなのは真面目に動けない。

根性を入れれば動けなくもないが、毒の沼地の強制行軍に近いので、一步ごとにHPが削られてゆく。

動けないとはいえ、汗をかくしそのままでは気持ちが悪いく、友人達の手を煩わせるのは心苦しいしで二律背反なのはだが、最終的には女の子的な身だしなみ意識が勝った。

「うう、お願いします。ごめんね、皆に迷惑かけちゃって…」

「遠慮しないで、湿布も替えるね」

なのはは思う…何っていい友人たちなのだろうか…同時に、一時の衝動に負けて彼女達に魔法を放ってしまった自分の若さゆえの過ちに自己嫌悪になる。

シャア・アズナブルが認めたくないわけだ。

「ごめんね、フェイトちゃんにすずかちゃん、もうお友達に魔法を向けたりしないから…許してくれる？」

おどおどと謝るなのはに、二人がにっこり笑って頷いてくれた。

「気にしてないよ」

「私たちこそごめんね、もうなのはちゃんを無視したりしないから」

「ありがとう!!」

三人が笑いあう事で仲直り完了、同時になのはは金輪際、友人に魔法を向ける事はしないと固く心に誓う。

だが、なのはは別の危険に気づいていない…自分一人に、似非とはいえメイドさんが三人そろって奉仕してくれているこの状況…そろそろハーレムの完成形が見え始めている事に気がつけ…!

外堀が埋められ始めている事に気がつくんだ高町なのは!!それ

と、見えない位置で「予定通り」と新世界の神のような顔で笑っているプレシアとルビーにも…ルビーには顔がないけど、あの雰囲気は絶対笑っているぞ!!

「あ？」

「い？」

「う？」

「え？」

「お？」

なのはがパジャマを脱ぎ、手伝ってもらって熱いタオルで体をふいていると…何か音が聞こえてきた。

「…って何かこれ、前にもやったような気がするの？」

あの時は何があったんだったか？

あんまり思い出したくないような事があった気がするのだが？

「誰かが家の中で走っているのかな？」

ドドドとか形容できる音だ。

しかもこれは…近づいてくる？

「帰って来た!!なのは、僕は帰って来たよ!!」

部屋の前で音が止まったなと思った瞬間、いきなりドカンと部屋の扉が開き、見覚えのあるマントをつけた民族衣装のような服にクリーム色の髪にエメラルドの瞳の少年が突入…そう言うのがふさわしい勢いで部屋に入って来た。

『あれ、ユーノ君じゃないですか？』

ルビーの言うとおり…見覚えがあると思ったらユーノだ。

「ただいまなの…は？」

ユーノの言葉が途中で切れる。

部屋の中の状況…服を脱いでいるなのはと、彼女の体を拭いている三人のメイドさんと言う倒錯的な光景に、ユーノの顔色が真っ赤になる。

「いつつ…」

ユーノの反応を見て、正気に戻ったらしいなのはが、これまた自

分の恰好を思い出して真っ赤になる。

「きつつやあああああ!!」

「ぐっはああああ!!」

次の瞬間、抜き打ちで放たれたガトリングガン드가ユーノを木の葉のように吹き飛ばす。

約束とは破るためにするものなのかもしれない…まあ、女の子の部屋にいきなり突撃して来て、裸の少女をガン見する奴を友達とみなさなければ問題は無いのかもしれないが…やはりノックは日常生活における必須マナーの一つである。

「まったく、いきなりラッキースケベをかますなんて、貴女は何処のギャルゲー主人公ですか？帰って来たって、セクハラするために帰って来たんですか？」

「はい、すいません…」

「爆発して死にたいんです？」

「死ぬのは勘弁です。ごめんなさい」

部屋の天井から、バインドで簀巻きにされたユーノが吊るされている。

ガンドでぼこぼこだが、部屋の中にいる誰も同情しない。

「な、なのは？大丈夫だよ。一瞬、一瞬だから…きつとユーノもガンドの衝撃で忘れちゃったはずだよ」

「……」

なのはからの返事はない。

ただの屍では無く、布団を頭からかぶってカメなのフォームにモードチェンジしていた。

フェイトがなんとか顔を出してくれるように説得しているが、天岩戸は簡単に開きそうにない。

『でもまああれですよ、ユーノ君にとって悪いことばかりじゃな

いですよね。なのはちゃんがあんな反応をするって事はユーノ君？
一応男の子として意識されているって事ですよ？哀願動物から二階級特進ですね。』

二階級の基準がぜんぜん判らない。

「え？そ、そうかな」

そこで照れるな、単純すぎるぞユーノ・スクライア！！

しかも、その発言は女だらけのこの場では死亡フラグになる！！
『では壁は厚くてかたいくて高いですが頑張ってくださいね
』

「え？」

「うふふ…なのはちゃんにセクハラするなんて…ユーノ君っていけない子ねえ…」

「す、すずか？」

すずかが黒化している？

今は昼間で、魔術を使ってもいないようだけど？

「ねえユーノ君？」

「な、何？」

「フェレットの毛皮って襟巻に出来るのかな？」

「ひいひいひい！！」

ユーノが悲鳴を上げるが、バインドで雁字搦めでは逃げ場がない。

「それとも…？いた方がいい？」

「止めてー！！それは男の子のデンジャラスゾーンー！！」

『ユーノ君、運命とあれば心を決めるもんですよ？』

「そつとしておいてよ！明日に繋がる今日くらい！！」

二階級特進って死亡込みで？

「そろそろお話をさせてもらってもいいかしら？」

ユーノ限定で猟奇EDルート一直線だった場を、一言で収めたのはリンディだった。

本当はユーノに続いて部屋に入って来ていたのだが、瞬時に状況を理解して、尚且つフオローできないと思ったのかそれとも放つて

おいた方が面白そうだと思ったのか、ユーノが一通り折檻されるまで空気になっていた薄情者……一応処刑は止めてくれた物の、それが当然の如くミノムシばりに吊るされているユーノの現状にはノーコメントだ。

やはり女か…。

「まずは久しぶりですね、皆さんも変わり（？）なさそうだなにより」

ジャージ姿の天才女科学者に、少女メイド×3、そしてこいつだけは絶対に変わりそうにない愉快型魔術礼装に、亀状態のなのは…略してカメなの…これだけ濃いカオスを前にして変わらないと言う辺りに、リンディの慣れを感じさせる。

「いろいろ積もる話もあるけれど、まずはなのはさん？」

「はい？」

「ちよつと顔を出してほしいのだけど…」

いくらなんでも、亀状態では話がしづらい。

なのはも同じことを思ったのか、布団の中でもぞもぞと動き、方向を変えたようだ。

リンディ達の見ている前で、布団の裾がめくれ上がり、なのはが目を潤ませて顔を出す。

「ふにゃ〜？」

「『くは!!』『』」

そしたらいきなりリンディとプレシアとついでにルビーが吐血した。

「ど、どうしたの？」

「な、何でもないわ!!ちよつと危なかったけど…」

「凄まじい破壊力…フェイトとアリシアに匹敵するわよ」

『狙ったわけでもないのにこの可愛さ…パネエツす』

どうやら、まさに亀という有様のなのはに萌えて、わきあがってきた加虐心とかいろいろを無理やり抑え込んだらしい…いい歳して吐血するほど萌えたのかこいつら？

「なのはちゃん可愛い!!」

「なのは…」

「な、ナデナデしてもいいですか？」

「にゃー!」

そして、大人たちほどこらえ性のない子供達は、遠慮なくカメなのはを愛でる。

筋肉痛で身動きのできないなのははなされるがまま……そんな様子を大人達＋ユーノが羨ましそうな目で見ていた。

ちなみにその全ては映像記録としてルビーが永久保存済みである…その後、何とかなのはの布団をはがし、全員を正気に戻してから仕切り直しがされたが…それまでにかかった時間は約一時間…なんとか落ち着いたものの全員顔は赤く、息が荒いのがちよつと怖い。

特に元々筋肉痛だったなのはが余計に疲れた風になっている上に、着ている物が乱れていて…今この場に何も知らない第三者を放り込んでらどう判断するだろうか？

『ダメですよ皆さん、いくら何でもやり過ぎです。いたいけなカメラなのはちゃんは病人なんですから、無理させたらメ!』

「……はい……」

『ではなのはちゃんに謝罪をどうぞ』

「……ごめんなさい……」

言っている事は正論で、反論の余地などないが、普段が普段だけにルビーから言われるとどこか納得できない物が残る。

日ごろの行いがどれだけ大事なのかと言う話だ…っと言うかこいつもなのはの映像を記録する為に傍観していたくせに、何で自分とは関係ないみたいな顔をしているのだろうか？

「…もういいです」

ちよつと膨れてしまったが、なのはのお許しが出てほつとする。

「なのはさんこれ、お見舞いね」

そう言っリンディがなのはに差し出したのは、A4サイズの封筒だった。

何が入っているのか、割と薄い。

「あ、ありがとうございます」

「ふふ…開けて見て」

促されたなのはが何だろうと思ひながら封筒を開け、中身を確認して目を丸くした。

「…あの、リンディさん？何ですかこれ？」

「何だと思ふのかしら？」

「便箋…に見えますけど…」

見えると言うかそのものだっただ。

「ええそうね、始末書というか、反省文用の便箋ね」

「し、始末書？」

びつくりするなのはに、リンディは何処までも優しい笑みだ。

「報告ではかなり張り切ったらしいですね？」

「うっ」

なのはが呻いた。

心当たりがあり過ぎる。

「なのはさんは民間協力者だけど、かばうのにも限界があるのよ？」

「ご、ごめんなさい…」

本来なら、始末書で済まない所だが、あの場における責任者はあくまでクロノであったため、リンディと入れ替わるようにミッドチルダに呼び戻されたのだ。

確かに指揮を取りきれなかったという意味での責任はあるだろうが、このメンツの手綱を取ることに難しさを考えれば、同情の余地くらいはあると思う。

「よろしい。体が治っても、始末書が提出されるまで作戦の参加は許しません」

「はい…」

有無を言わず、ビシッとリンディが締めた。

年季の違いと言うか年の功というか、この辺りはまだまだクロノには真似できない。

『なるほど、これがなのはちゃんの記念すべきファースト始末書ってわけですね』

「ル、ルビーちゃん？それだとなのはがこれからしょっちゅう始末書を書くようになるって言っている気が…まさかだよな？」

ルビーは並行世界の自分ともリンクしているので…ある意味でなのはの通る予定の未来を知っている可能性がある。

『あはあ』

「な、何かなそのとっても気になる言い方は…ってあたた…」

やはり全身筋肉痛では分が悪い。

「プレシアさんも始末書を書いて下さいね」

「わ、私も！？」

固まったプレシアの目の前に、リンディの笑顔と共にドンと置かれたのは千枚の原稿用紙タワーと同じ高さはあるだろう便箋タワーだった。

仲良く並んだ左右二つの塔に、プレシアの顔が思いっきり引き攣る。

「はい、大人げなさすぎな暴走の責任はとってください」

「うう…はい」

なのはに続いてプレシアも撃沈した。

この時点で既に、二人の中では若さゆえの過ちと大人げない過ちが黒歴史化している……人は痛みを伴わなければ何も学ばないとは、誰の言葉だったか？

「さて、では本題に入りましょうか？我々が優先させなければならぬ事は、闇の書の確保とその主の保護です。その基本方針は変わりません」

真剣モードとなった全員が頷く、異論は無しだ。

「問題はヴォルケンリッター達の事ね、同じ手は使えないだろうし…」

「……リンディさん？」

その口ぶりでは、同じ手が使えるなら実行するつもりがあると聞

こえるのだが？

YESとか答えられるのが怖いので、あえて聞かないけど…きつと気のせいだと思う。

気のせいと言う事にしておいたほうがきつと良いだろうという処世術を学び、なのはは大人に一步近づいた。

「リンディ艦長、質問があります」

「はい、何かしらフェイトさん？」

「彼等はどうやってあそこから逃げ出したんですか？」

フェイトの質問は彼女だけでは無く、あの場にいた全員の思いだった。

なのははジェノサイド・カーニバルの大虐殺祭は、砲撃ではあるが、同時に広範囲殲滅魔法でもある。

あの時ヴォルケンリッター達に逃げ道はなく、逃げても効果範囲の外まで逃げ切る事は出来なかったはずなのに、砲撃が止んだ後にあの四人の姿はなかった。

たとえ信じられなくても、事実が目のある以上、そしていきなり現われたり消えたりできない以上、逃げ出す事に成功したと考えるしかない…ならば問題はその方法である。

「その…なのはちゃんの魔法が着弾する直前、誰かが四人を強制転移させたの」

「出来るんですか、そんな事？」

砲撃を避けたとしても、その周囲には封鎖結界があった。

直撃はしていない物の、ジェノサイド・カーニバル大虐殺祭の余波を防ぐ程度には強固な壁だ。

ヴォルケンリッター達を助けた何者かは、一瞬でそれを破壊して同時に転移魔法を発動させたというのか？

「…いえ、違うわ…あの時、何者かがシステムに介入して封鎖結界の一部が解除されていたみたい」

「…え？」「…」

「調べて見て、初めて判明した事ですが…逆に言えばそれほどまで

に、システムを操作した何者かの隠蔽は完璧だったと言う事です」

「それはちよつとびっくりね…」

子供達だけでなくプレシアも、驚いていた。

管理局が次元世界の警察じみた事をしているのは伊達では無い。

そのシステムも、どこのだれかも分からない輩に、勝手を許すほどザルな物ではないはずだ。

「痕跡すら残さずハッキングしたなんて…そんな事が可能なの？少なくとも私には出来ないわよ？」

技術屋として優秀なプレシアが断言するのだから、管理局のフアイヤーウォールは相当に硬いのだろう。

この場合、それを突破した何者かの技術をほめるべきか？

「…プレシアさん…失礼ですけど貴女のお知り合いに出来そうな人はいませんか？」

リンディが少し申し訳なさそうにプレシアを見た。

皮肉を言うつもりはないのだろうが、事実としてプレシアはそう言った方面へのつながりもある。

「……痕跡も残さずって言うのはちよつと…闇の書の主ってそんな事も出来…ああ、そう言う事なのかしら？」

「やはり、そう思います？」

何やらプレシアとリンディの間で分かりあっているが、それ以外の誰も付いていけない。

「クロノにエイミイをつけて本部に戻しました。話を通しておきますので、少し動いてもらえませんか？」

「そこまで先を読んでいたの？確かに、“それ”を調べるならミッドチルダに戻る必要があるけれど…」

プレシアが言い淀む、何か問題があるような口ぶりだ。

『いいんですかリンディさん？それは多分、管理局の…』

どうやらルビーも話について来ているらしいが、子供達には主語のない会話から裏事情を見抜けるほどの人生経験はない。

「今さらですから…」

『そうですか』

リンディが苦笑したのを見て、ルビーもそれ以上何かを言う気はないようだ。

二人のやり取りを見ていたプレシアがフムと頷く、彼女も手を貸すことに異論はないようだ。

「ところでリンディ艦長？」

「何ですか？」

「…司法取引って素敵な言葉だと思わない？」

「首尾よく行ったら、裁判では大分考慮されると思います」

よく分からないが…何かが台無しになった気がする。

二人共怪しい笑みを浮かべてウフフなんて笑っているが、これが年の功といべきか、腹黒さと言うべき代物かは線引きが難しい。

「な、何？」

『子供には難しいアウトローなお話ですよ』

「そ、そうなんだ」

何となく、まだ立ち入るには早い世界な気がしたなのは、それ以上聞けなくて黙った。

『それにしてもさすがはリンディさん、なかなかの策士ぶりですね』

「褒め言葉として受け取っておくわ、ルビーちゃん」

『そんな貴女にプレゼントフォーユー』

ルビーが何処からか取り出した“それ”をリンディに差し出す。

「扇？」

『正確には軍師扇って言うんですけどね…リンディさんにはぴったりだと思っんですよ』

「あ、ありがとう」

後の諸葛リンディ誕生の瞬間であり、そして同時に並行世界の果てで、新たなる軍師が誕生した瞬間でもあった。

「では、そろそろ話を戻しましょうか？」

扇を受け取り、軽く振って持ち心地に満足したリンディが、場の

流れを本題に軌道修正した。

「当面の問題は…やはりなのはさんが作戦に参加できないのは痛い
ですね…」

「うっ…」

前回の事を考えれば、おそらく10日前後なのはは役立たずだろ
う。

何だかんだで、なのはの戦闘力はアースラと同等かそれ以上、何
よりその恐怖はヴォルケンリッターも骨身に染みただろうから、そ
こにいるだけで抑止力の期待が出来る。

「いつそ立っているだけでいいから出てもらうべきかしら？」

「ち、ちよつと待ってください！…恐怖って何？何の事！？」

「知らないほうがきつと幸せだと思うけど…聞きたいのかしら？」

「いえ…いいです」

につこり笑うリンディに対して、なのははそれ以上の言葉が出な
かった。

内容に関しては、身に覚えがあり過ぎて困ってしまう。

リンディも、軍師扇を受け取ったことでより策士ぶりに磨きがか
かった気がする。

「現実問題、なのはさんが抜けた穴は簡単に埋められないわ、人員
も簡単に増やせないし」

万年人材不足の管理局だが、暗部が暴露された騒動中の現在はそ
れに輪をかけて人間がいない。

例のグレアム提督が手と人員を回してくれたおかげでアースラは
改修と、クロノが言っていた対闇の書用兵装、アルカンシエルの搭
載が予定より大分早く完了して、まさにグレアム提督さままだが、
逆にこれ以上頼るのは無理だろう。

既にこの世界の近くまで来ているアースラの乗組員と、現在この
世界に滞在している武装局員以上の人数は動かせない。

ただでさえ戦力と人員が多いに越したことはなかった所に、なのは
の戦線離脱は冗談でも何でもなく痛かった。

「わ、私がマスターの代わりになります!!」

「……え?」

全員でどうしたものかと悩んでいたら、いきなりアリシアが名乗りを上げて来て、全員が目を丸くする。

アリシア・テストロツサは、マスターであるなのは為にかし
たいと思っていた。

それはマスターとサーヴァントと言う関係以上に、母を助けてくれたこと、そして妹であり姉でもあるフェイトを助けてくれた事に
純粹な恩義を感じていたからだ。

ここまでされて何も返さないですませる事は、子供ゆえの純粹さ
も手伝ってありえない。

「アリシア…貴女の言いたい事は分かるけど…」

「それは…ちよつと…」

プレシアとフェイトが顔を曇らせる。

その理由はアリシア自身も理解していた。

確かにアリシアはサーヴァントである。

なのはとのパスがつながっている事に疑いはないが、同時にただ
それだけである。

ずかのように人間離れした能力の持ち合わせはないし、宝具も
持っていないし、クラスさえない…何よりアリシアは“魔術師”で
も、“魔導師”でもない上に、そのどちらにも“なれない”のだ。
確かにジュエルシードの事件以降、アリシアの中には魔力が宿っ
ていた。

しかしそれはただ単に宿っただけ…魔力はアリシアの中に存
在している物の、魔導師に必要なリンカーコアが形成されていない
と検査で判明している。

リンカーコアがないという事は、なのはのような魔術師は勿論、

母や姉のような魔導師にもなれないということ、ただ巨大な魔力を保有しているタンクであると言うのが、現在サーヴァントアリシアに対して分かっている事のすべてだ。

『アリシアちゃん、それはいい考えですね』

「……え?」「……」

だが一人だけ、場違いな事を言ったルビーに、全員の視線が集まった。

『アリシアちゃんに魔法少女になって貰いましょう』

「ル、ルビーちゃん? と言う事? アリシアちゃんにはリンカーコアがないんだよ?」

『なのはちゃんが作ればいいですよ』

「作るって……」

「作れるんですか!？」

ルビーの話にアリシアが食いついてきた。

なのはの力になれる可能性が現れた事で、思わず声が大きくなっている。

『はい』アリシアちゃんは、かなり異端ではありますけどサーヴァントです。これはOK?』

「はい」

『サーヴァントのマスターには絶対命令権である令呪が三つ与えられます』

「これの事?」

なのはが軽く呪文を唱えると、左手に令呪が浮き出してきた。

通常は魔術で周りの皮膚と見分けがつかない色に変化させているが、三つの令呪はずっとなのはの左手にあったのだ。

『令呪は何も、無理やり言う事を聞かせるためだけあるんじゃないやありません。普通なら出来ないような事も道理を無視する事も出来るんですよ』だからなのはちゃんが令呪に願えば』

「アリシアちゃんの中にリンカーコアを作れる?」

『エグザクトリ』

全員がその無茶な話に目を丸くしていた。

「なのは様、お願いします」

「えっと…」

いきなりそんな事を言われても、なのはも困る。

どうしたものかと、プレシアとフェイトを見た。

「なのは、アリシアが思うとおりにしてあげて、なのはの力になりたいって気持ち…分かるから…」

「私達は元々魔導師だもの、いきなりアリシアが魔法を使えるようになってても大丈夫、受け入れられるわ、むしろ嬉しくさえあるのよ」
母親と姉の了承を受けてしまった。

本人も同意しているとすれば障害はない。

「うーん、でも…魔導師になるって事は、アリシアちゃんが戦うってことだよな？」

『大丈夫ですよなのはちゃん、リンカーコアを作るとき、同時に魔術回路にしまえばルビーちゃんがサポートできます』

「え？ルビーちゃんか？」

『はい、マスターはあくまでなのはちゃんのままですけど、仮のマスター権を発行すれば問題無しです』

レイジングハートや他のデバイスをアリシアに持たせるのは無理がある。

アリシアは魔法の勉強をした事がないし、デバイスを手に入れても彼女にあった魔法を設定しなければならぬ。

レイジングハートなのはに合わせて設定してあるので、これをそのままアリシアに渡しても使いきれないのだ。

『その点、ルビーちゃんならある程度制御できますから』

「お願いします。なのは様…」

「…分かった」

ルビーの説得と、アリシアのお願いに押し切られた形だが、アリシアがそれを引け目に感じているというのならやってみるのも悪くはないだろう。

「でも、危ないと思ったら無理しないでね？」

「はい」

「じゃ、行くよ」

なのはが、令呪の宿っている左手をアリシアに向けると、視線がここでない遠くに合わさり、トランス状態になったことが分かる。

なのはの魔術行使を見るのが二度目な一同は息を飲んで成り行きを見守った。

「令呪に告げる。聖杯の寄る辺に従い。この者、我がサーヴァントに、戒めの法を重ね給え（Ein neues Gesetz, Ein neues Verbrechen）」

令呪から膨大な魔力が噴出し、アリシアに取り込まれてゆく。

「アリシアちゃんのリンカーコアを生成、同時に魔術回路を構築せよ」

今度はアリシアの体から魔力があふれ出し、彼女の胸の前に集中してゆくの全員が見守った。

「リンカーコアの創造……」

「本当に神のような所業ね」

常識に浸かりきっている分、大人であるリンディとプレシアの驚きは特に大きい。元来研究者であるプレシアは特に、何一つ見逃さないと目を皿のようにしていた。

やがて魔力が凝縮され、白く強い輝きを放つリンカーコアが形成されたが、それだけでは終わらない。

リンカーコアの表面にクモの巣のような筋が走る……おそらくこれが魔術回路のサーキットだろう。

リンカーコアから伸びた糸状の魔術回路がアリシアの胸を中心にして全身に広がり、彼女の体を魔術を使うのに特化した形へと作りかえて行く、ほどなく工程の全てを終えたリンカーコアは、アリシアの胸に沈んで行き、完全に見えなくなると、先ほどまでの魔力の嵐が嘘だったかのように、室内が静まりかえった。

「終わりました。これが……リンカーコアなんですね？」

自分の体の変化を感じ取ったのだろう。

愛おしむように自分の胸に手を当てたアリシアがそう言った事で、緊張が切れたみんながほっとする。

「本当にアリシアちゃん、無茶しないでね？」

「……なのは（ちゃん）が言っても……」「」「」

「あう」

彼女以上に無茶をする人間はそうはいまい。

なのはが盛大に墓穴を掘ってオチがついた。

『さあさあ、さっそく変身ですよアリシアちゃん！？』

「は、はい」

ノリノリで強引なルビーに押され、アリシアがその柄を手に取り、と、七色の光が輝いた。

光の中でアリシアの服が変わって行く。

薄い青のレオタードに、腰の部分にスカートのようなフリル、太ももまであるニーソックスにひじの先まである長い手袋、背中には巨大なマントが翻り、頭にはこれぞ魔女と言う感じの三角帽子が乗っている。

『いよっしゃー！！新しい魔女っ娘ゲッターー！！ひっさびさの魔女っ娘衣装ですよー！！』

ルビーのテンションが天井知らずに高い。

最近、なのははバリアジャケットばかり着ていたので、その反動か？

「ど、どうですか？」

変身を終えたアリシアがはにかみながら聞いてくる。

「とっても可愛いわよアリシア！！」

「うん、可愛い」

プレシアとフェイトの評価は上々だ。

似たようなバリアジャケットを着ているので、抵抗がないのだろう……プレシアは言わずもがな、流石は親子というところか、趣味が似ているのだろう。

「どうですかなのは様？」

「う、うん可愛いね」

クルンとその場でターンを決めるアリシアに、なのはもそう言うしかなかった。

笑顔などところを見ると、本人も嫌と言うわけでは無いらしい。

まるでプラグスーツのようなデザインの魔女っ娘だ。

『ちなみに、デザインはなのはちゃん用エロカッケー最終決戦用衣装です!!』

「その設定、まだ残っていたの!？」

てつきり黒歴史化していたと思っていたのに、とんだ不発弾もあった物だ。

「って事は…なのはがあれを着ていたかも…」

「ユーノ君、何を想像しているの力ナカナ？」

「な、何でもないよ」

ハイルイトの消えた目と、自分を指す指先に灯る魔力の光を見たユーノが、あわてて取り繕う。

余裕がないせいで突っ込みがきつくなっているだけだと思いたい。

『さあアリシアちゃん、これから貴女は魔法少女、マジカル　アリシアとして愛と平和の魔術使いまくりですよ』

「はい、頑張ります!!」

「何か…とってもデジャブーなの…」

なのはが表現に困る表情でアリシアとルビーを見ていた。

昔の自分の姿がアリシアに重なる…きっとルビーに目を付けられた魔女っ娘の誰もが通る道なのだろう。

アリシア・テストロッサがルビーの新たな犠牲者となるか否か…実はそこが何気に一番心配な点だったりする。

『あはあゝ戦いの空に、新たな魔女っ娘、マジカル　アリシアが飛びたちます!!次回リリカルとマジカルの全力全壊、第九話【ぱわーあつぷ】にドライブ・イグニッションですよ!!』

ルビーが予告みたいないなことを言いやがったので終わる。

第八話 The second generation（後書き）

ここまでやれば原作なんて設定くらいしか残っていないだろうと思うんですがどうでしょう？

主役交代って究極の原作ブレイクだと思うんですが。

そんなこんなで、とりあえずネタを使い切ったので来週は休みます。手持ちのネタはラストにしか使えないものばかりなので、中間をどうするか…終わりが見え始めていると言えばそうかもしれないですけど、まだまだ遠い気もするんですよ。

第九話 Power - up

「くそ!!」

シグナムはいらだたしげに言葉を吐き捨て、目の前の白い壁を殴りつけた。

別に壁が憎いわけでも、白い色が嫌いなわけでもない。

彼女の抱いている怒りは対外的な物では無いのだから。

「ごめんなさい、私が真っ先に気づかなきゃならなかったのに…」
「言うな、私が怒っているのは己のふがいなさに対してだ!」

シヤマルへの返事にも、抑えきれない物が滲んでいる。

……海鳴総合病院。

男… ロッテの意味深な物言いに、まさかと思っていた四人は地球に帰還すると真っ先に直行してきたのだ。

はやてには聞けない。

ロッテの言う通り、あの子は自分の体調が悪くても無理に笑顔を作って誤魔化してしまうだろうし、何より本人に確かめるだけの勇氣は四人の誰にもなかった。

故に白羽の矢が立ったのは、本人の次くらいに事情を知っているだろうかかりつけの女医だ。

「まさか… 本当だったとはな…」

ザフィーラの呟きも、何時になく平坦で感情を押し殺していると言う事が分かる。

度々はやての定期検査に付き合って来ていたのがよかったのだろう。

本来患者の病状はプライバシーにかかわるのでおいそれと明かす事は出来ないが、はやてが家族と紹介した四人ならばと女医は打ち明けてくれた… その内容はロッテの言葉の肯定… 徐々にではあるが、

はやての病状は進行している。

そして案の定はやては自分でそれに気づいていながら、四人には告げないでくれと口止めまでしていた。

「助けなきゃ……」

ぼそりとした呟きに、全員がはつとする。

見れば、ヴィータが泣きそうな……それでも何かを決意した目をしている。

わざわざ何をと問い返す必要はない……彼女の思いはきっと、四人共通の物のはずだ。

「そうだな……シャル？ 闇の書のページはどのくらい溜まっている？」

「まだ……100ページと少し……」

全体の六分の一ほど……トラブル解決の片手間にやっていたので、ほとんど溜まっではない。

この100ページの蒐集のおかげではやての病状の進行が遅れたのだろうが、同時に自分達が病状に気がつくのが遅れたという事情もある。

「どの道、蒐集しか手はない」

「そうね、前向きに考えましょう。闇の書の完成まであと五〇〇ページ」

「闇の書が完成すれば、きっと主も助かるはずだ」

「え？」

気がつけば、ヴィータは疑問の声を漏らしていた。

「どうしたヴィータ？ 何か気になる事でもあるのか？」

「い、いや……何も……」

自分の口から洩れた言葉のはずなのに、一番驚いたのは本人だ。ヴィータ自身、何に疑問を持ったのか分からなかった。

三人の会話の中に、何か気になる事があったような気がするのだが……何に引っかけかりを覚えたのか分からない。

「そうか……とにかく、主の意思に逆らう事になっても、我々はやら

ねばならんだ」

「ああ、姉ちゃんを助けるんだ」
それだけは譲れない。

主と言う意味だけでは無く、家族を救うために…考える事ならば
あとも出来る。

今必要なのは行動だ。

「問題は…やはり魔導師を襲うしかないということか…」

「そうね、はやてちゃんは禁止していたけれど…それしかないと思うわ、魔獣の中にはリンカーコアを持つ種もいるけれど、効率は落ちるし危険よ」

魔獣のリンカーコアの魔力は、魔導師のそれに比べて劣る。

基本的に生まれたままの先天的な魔力しかもたないので、どうしても魔導師のそれと比べて少ないのだ。

それでも尚、魔力の高い物を選ぶとなればそれはすなわち強力な魔獣であると言う事と同義になり、そんな魔獣でページを埋めるためには相当な数を相手取る必要があり、容易いことではない。

如何にヴォルケンリッターが歴戦の兵とはいえ、物事には限度と言うものが存在する。

「ロツテという正体不明の輩も暗躍しているようだしな…」

全員が領いた。

一番の不安材料はやはりあの男…何を目的に動いているか分からず、敵か味方が判然としない不確定要素…どう動くか分からないという意味で、敵となるであろう時空管理局より厄介だ。

「どっち道やらなきやならねえんだ。なるだけ魔力を貯めこんでいる魔導師を狙って早く終わらせよう」

「……」「……」

会話が途切れると、何故か全員が目をそらして脂汗をかきだした。

「む、地震か？」

「そ、そうみたいね…日本って地震大国とか言われているし」

「物騒な国名だな」

「ほ、本当だよな、ギガあぶねえよ」

この場に第三者がいれば、四人が揃って震えているのを見て取るだろう。

リンカーコア・魔力沢山・魔導師…このキーワードからヴォルケンリッター達が連想したのは偶然と言うべきか必然と言うべきか…同一人物だった。

しかも彼女は、管理局に所属しているかどうかはともかく、一緒に行動していたのは確かであり、自分達が本格的に蒐集を開始すれば、ぶつかり合わないという選択肢はない。

再び管理局と相対する時…その時きつと、自分達が見上げる空には、彼女の姿があるはずだ。

「と、当面…リンカーコアの蒐集は魔獣に限定する」

「そ、それがいいわね、接触するにしてもその前に出来るだけ蒐集を進めておくべきだと思うわ」

「賛成」

「同意だ」

あの冗談と言うか馬鹿げた魔力を吸収すれば、どれほどのページが埋まるか予想も出来ないが…それは最終手段と言う事で全員の意見は一致していた。

シヤマルの旅の扉などの空間湾曲魔法によるリンカーコアへの不意打ちを掛ければ何とかと思わなくもない。

騎士の誇り等、はやての命の前では文字通り埃だが、それでもなお必勝を確約できないリスキーぶりだ。

彼等の中に置けるなのはの立ち位置とは、避ける事が出来ないならぶち破るしかないのだが、避ける事が出来るうちは全力で避けたい危険人物と言う事で認識をされている。

上手くすれば戦わずに蒐集が完了してしまう可能性も無きにしも非ずだし…。

「では、行くぞ」

「おう」

「はい」

「待っててくれよ、姉ちゃん……」

そしてヴォルケンリッター達は散って行った。

『夜天の魔導書？』

全員が集合したアースラのブリーフィングルーム、静かな室内にルビーの疑問の声は驚くほど響いた。

「そう、闇の書の本来あるべき姿にして原型だよ」

一同の前に立ち、映像資料を前に無限書庫をあさって判明した闇の書の新事実について語っているのはユーノだ。

本当なら、なのはの家に行った日に伝えるはずだったのだが、あんな事になって今日まで説明する時間が取れなかったというオチである。

「本来は主と共に旅をして、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究するために作られた収集蓄積型の巨大ストレージデバイスだったんだけど……歴代の持ち主の何人かがプログラムを改変したために破壊の力を使う闇の書へと変化したみたいなんだ」

『なるほど……』

話を聞いたルビーが、自分の感じていた違和感の正体に納得する。元々、設計段階から想定されていない機能を求められたため、なんとか主の意思をかなえようとしたら存在自体が歪んでしまったと言ふ事だろう。

明らかな人災だが、それをやった当人もこんな事になる事を予想していたのか疑問だし、何よりすでにしてこの世の者では無いから文句を言う事も出来ないのが……またやるせない話だ。

「ロツテさんは「元は健全な資料本が、なんとまあ」って呆れていたよ……」

『ロツテさん？』

「調査を手伝ってくれたグラム提督の使い魔だよ。本当に何から何まで、提督には頭が上がらないね」

アースラのメンテ早期終了からこっち、まさに至れり尽くせりと言っ奴だ。

「一緒についてきてほしかったんだけど、リーゼさん共々、断られちゃって…何かに怯えているみたいだったけど、あれは何でだろ？」
『何かこの世界に来たくない理由でもあるんですかね？』

実は天敵に近づきたくないだけなのだが、事情も知らずにそれを察しろと言っのは無茶な話である。

分かっているのは猫姉妹だけだ。

「しかも、グラム提督、連日の激務で倒れちゃったらしいよ？」

『それはそれは、今度お見舞いに伺うべきでしょうかね』

ルビーの見舞いに関しては全力で拒否されそうな気がするし、場合によっては容体悪化になりかねないのだが…それもまた知りようのない事情だ。

「ユーノ、何とか…出来ないの？こんなんじゃ…」

フェイトが気の毒そうな目でモニターに映る闇の書を見る。

主となった誰かはただ運悪く魔法の才能を持っていて、それが元で闇の書に選ばれてしまったただけだ。

ある意味で主になってしまった誰かも被害者である。

これが率先して力を求め、誰彼かまわず襲うような外道と言うなら同情の余地なく叩きつぶせばいいので心情的に楽なのだが…今代のヴォルケンリッター達が、ともに蒐集をしていないどころか、次元世界のトラブルを解決してまわっていた事を考えると気が重い。本来、闇の書の完成の為にだけに存在するはずの彼等が、そんな本来の在り方と矛盾した行動をしていた事に対して、その主が無関係とは思えない。

つまり今代の主は、少なくとも罪に問われるようなことはしていない…このまま死なせていい道理は存在しないだろう。

「…残念だけど」

フェイトの言葉に対するユーノの返答は、首を横に振る動作……否定だった。

「改変により、旅をする機能が転生機能に、復元機能が無限再生機能へと変化してしまっている。この二つがあるために、闇の書の完全破壊は不可能とされるんだ。また、真の持ち主以外によるシステムへのアクセスを認めない。それでも無理に外部から操作をしようとする、持ち主を呑み込んで転生してしまう機能が付いている。プログラムの停止や改変ができないから完成前の封印も不可能なんだ」

「だから、主の確保が重要と言う事よ、フェイトさん？」

ユーノの言葉を、リンディが引き継いだ。

「闇の書：夜天の書を救えるのは闇の書のアクセス権を持つ主だけです。何としても主を確保して、協力してもらうしかありません。それが出来なければ……アルカンシエルの使用しかありませんが、それではやはり問題の先送りでしかないわ、私は、以前闇の書の起こした事件により、夫を亡くしています」

フェイトやユーノだけでなく、武装局員も含めた全員が息を飲んだ。

「その時にもアルカンシエルが使用され、夫は死にました。……私事ではありますが……私は、あの人の死がただの時間稼ぎでしかなかったとは思いたくありません。そして夫のような犠牲者をもう出たくない」

……やはりクロノの母親と言うべき所だろうか？

「その為には負の連鎖を続ける闇の書の停止、あるいは夜天の書への回帰しかないと考えています。皆さん、協力してください」

「……はい……」「……」

「ぎりぎりまで……主からの協力を取り付ける方向で捜査の方針を定めます」

リンディの旦那であり、クロノの父親が闇の書のせいで帰らぬ人になってしまった事は、この場の誰もが知っていた。

だからこそ、その事は暗黙の了解として禁句になっていたのに、
ほかならぬリンディからその話をした事で彼女の並々ならぬ覚悟を、
この場にいる全員に悟らせた。

何より、アルカンシエルの火器管制機構はリンディが持っている。
つまり彼女は、最悪の展開となった時に闇の書の主をその手にか
ける人間…闇の書に個人的な恨みもある。

なのにぎりぎりまで主の救済を願うという…これで奮い立たなければ人間ではあるまい。

「ミーティング内容は以上です。異論、質問は？」

答えは無言の了承として帰って来た。

「よろしい、では今回の作戦に対して、新しい協力者を紹介します。
アリシアさん」

「は、はい」

呼ばれ、おっかなびつくりと言う体で前に出てきたのは、フェイトとそっくりで、しかも数年分幼くしたかのような少女だった。

「なのはさんの代わりに、協力して下さるアリシア・テストロッサさんです」

「よ、よろしくお願いします。マスターのようにはいかないかもしれませんが、精一杯…」

「……ちつがーうー！……」

「ひゃうー！？」

いきなり的大声&自己紹介を否定され、アリシアがびつくりする。
隣のリンディや、ユーノも目を丸くしていた。

しかも何故かこの状況について来れていないのは三人だけらしく、
とんでもない疎外感が襲いかかって来た。

「君は、君はあんな大魔王になっちゃいけないー！！」

「大魔王様がツインス…世界の終わりじゃー！！！！」

「オハナシ…キキマス…オハナシ…キキマス…だから砲撃はいやー
ー！！！！」

「ち、違うんです大魔王様——！！！！」

何か本人がいないからって好き勝手言ってるようだが…後半に行くに従って何やら危ない人になっている。

見えない誰かに必死で謝っている奴までいるが…その見えないはずの誰かはきつと白いバリアジャケットを着て笑っているのだろう。気を抜くと自分達にもそれが見えそうな気がする。

「ね、姉さん!？」

「だ、大丈夫だよアリシア…みんなちょっとその…病んでいるだけだから…」

展開について来れていないアリシアが、武装局員達のいきなりの変貌に怯えるのをフェイトが慰める。

美少女姉妹が抱き合う姿は実に絵になるが…フェイトのそれはぶつちやけ過ぎだ。

「なのはさん…」

「リンディ艦長…その…ご愁傷様です」

うなだれるリンディに、ユーノもそれ以上かけられる言葉が見つからない。

「…仕方ないわね」

どうにも收拾がつかなくなりそうだなと判断したリンディが、切り札を出した。

それは小型のボイスレコーダー、警察の事情聴取などにも使われるあれだ。

「ぽちつとな」

リンディは、レコーダーの録音では無く、再生のボタンを押した。

『…少し、頭冷やそうか?』

「………っつー!」「………」

たった一言で、パニックに陥っていた武装局員が整列、正座して話を聞く態勢になった。

この間、わずか0.05秒、その動きに一糸の乱れもない。

あまりに素早く、迷いのない動きについていけなかったユーノとフェイト、アルフにすずか…どうやら彼等はパプロフの犬化しては

いないようだ。

「あら？思ったより効果観面ね？」

やった本人のリンディも、ここまで劇的に反応するとは思っていなかったらしく、吃驚した顔をしている。

「リンディさん…何か今の、マスターの声に聞こえたんですけど？」
アリシアがそう言うのならまず間違いないだろう。

どうやらインストールされているのは、なのはの例の台詞だったらしい。

既にトラウマ化している記憶を刺激された武装局員の皆さんが、正座したままだらだら汗を流している。

「……」

「リンディ艦長？何でこれは使えるって感じの悪い笑みを浮かべているんですか？」

「え？そ、そんな顔なんてしてないわよ？」

ユーノの言葉に、どうやら凶星を衝かれたらしいリンディがawatてて体面を取り繕うが……まずは無意識に取り出していた軍師扇をどうにかしよう諸葛リンディ！！

「で、でも」教導隊に推薦状を書く位……」

「もう止めてください！武装局員さん達のHPは0です！！」

中には早速泡を吹いている奴までいる。

一緒に訓練をするくらいならともかく、まかり間違つてなのはが教導隊の教官にでもなった日には、彼らとて無関係でいられる保証はないのだ。

そんな未来が実現してしまえば、管理局をなのはが無意識にのつとつてしまう事もありうるのではあるまいか？

「や、やーね皆、なんでそんなに引いているの？」

すぐ隣にいるはずのユーノとの距離ですらとんでもなく遠く感じる……間違いなく現状でリンディは孤立していた。

「と、つとにかく！申し送りは以上です！！」

盛大に誤魔化した……が、それに突っ込みを入れる人間はいない。

むしろこの微妙な空気をチャラにしてくれるならウェルカムだ。

これで話は終わりとされた聞いた武装局員とアースラスタッフは、明らかにホッとしてリンディに敬礼を返すと退室し、各々の仕事に戻って行く。

残ったのはリンディ達だけだ。

「がんばってね、アリシアちゃん」

「はい、姉さんと一緒に頑張ります」

『その意気ですよーアリシアちゃん』

少なくともアリシア本人はやる気があるらしいし、ルビーが傍についているとなればめったなことにはなるまい。

色々ふざけ過ぎな奴だが、なのはの時同様にアリシアを守るはずだ。

何だかんだでルビーの防御力その他の性能は高い、それを打ち抜いてダメージを与える事が出来る人間はそう多くはないだろう。

「無茶しないでね、アリシア…私も頑張るけど、危ない事はしないで」

それでもやはり心配なのか、フェイトがアリシアに声をかける。

プレシアがいない現在、アリシアの保護者は究極の所でフェイトと言う事になるのだが、同時に妹と言う存在が出来た事でフェイト本人の年下に対する責任感とか庇護欲みたいなものが刺激されているらしい。

悪い変化では無いだろう。

「だーい丈夫だってフェイト、あたしも付いているからさ」

「うん、ありがとうアルフ」

アルフ？…見た目は大人、頭脳は子供の彼女は対外的な保護者である。

「そんなフェイトちゃんに朗報だよ」

「……え？」「……」

いきなり会話に乱入してきた陽気な声に、全員が反応する。

『おや、誰かと思えばプレシアさんに入れ替わりに帰って来ていて、

最初からいたけれど空気になっていたエイミイさんじゃないですか？」

「説明的な紹介ありがとうルビーちゃん。でもどこことなく悪意が混じっている気がするのは何故かな？…まあいいけど、それよりフエイトちゃん？こんな事もあるうかと、用意してきた物があるのだよ！これがあればバルディッシュの性能は数倍に跳ね上がったんだよ！だから！！」

そう言っ取っ出したのは、何やらリボルバー拳銃のシリンダーのような部品だった。

バルディッシュ云々と言っていたから、多分デバイスのパーツだろうとは思っただが…。

『エイミイさん…酸素欠乏症に…』

「なって無いよ！！このパーツだって古いどころか最新式なんだから！！」

『それで、これは何なのエイミイエモ〜ン？』

「テケテッテテ〜」カートリッジシステム〜って誰が耳なしネコ型ロボット！？」

『いいノリ突っ込みです！！』

エイミイは結構空気に流されやすい性格のようだ。

「え？それってシグナム達と同じ？」

聞き覚えのある言葉に、フエイトが反応した。

以前に説明を受けていたため、それがどういふものなのかの説明は必要ない。

「その通り、このパーツを組み込めばフエイトちゃんの魔力が倍率ドン更に倍の状態だよ！！」

『ぜひお願いします！！プリーズギブミーカートリッジシステムー

ーーーーム！！』

「……………はあ？」「……………」

疑問の声が重なる。

「バ、バルディッシュ？」

声の主はフェイトの言葉通り、彼女のデバイスだった。

「な、なんでマスターのフェイトちゃんを差し置いてデバイスがそんなチヨコレートくれみたいなノリで自己主張しているのかな？」

デバイスに熱烈懇願されたことのないエイミィが、目を白黒させて引いている。

そんな経験がある方が稀ではあるだろうか…。

「そうですね。バルディツシュ？そこは『や、やめろ！やめるんだ
エイミィ！！ぶつ飛ばすぞー！あー！ー！ー！ー！』が**お約束**じゃ
ないんですか？」

「静まって私の右手！！グーパンチで殴っても痛いのは多分私の方

怒りに悶えているエイミィには悪いが、本人の言うとおり物理的な意味でルビーは結構硬い……とうとう、エイミィまでルビーの毒牙にかかってしまった。

『フフン、ルビー殿？今やストーリー途中での乗り換え・改造強化はテンプレ、いわばストーリー後半型……しかもその後はやたらと一騎当千になって無双解禁になる傾向が多いのでござる……！ ストライクとかフリーダムとかストライクフリーダムとか…… e t c。何より……！』

何より？

「きっと後半型の方が目立つでござる!」

[
[
[
[
...
[
[
[
[
[

主の補佐と、必要ならば助言者としての機能も求められるインテリジェントデバイスだが…目立ちたがりの助言者兼補佐役ってどうなんだろう？

皆、問題ありまくりと思つたらしく、あきれて言葉を失っている。ルビー氏、レイジングハート殿、そして某の三人で出発したデバイストリオ……しかし気がつけばルビー氏はともかく、レイジングハートにまで水をあけられる始末……ここで一気に巻き返しを図るでござる……！』

『あれ？私達トリオなんて組んでましたっけ？』

『ガーーーン！！』

自分で擬音を放つなんて切れているなバルディツシュ？

『そ、それはないでござるよルビー氏！！それでも自分、当初はプレシア・テストロッサお手製の高性能デバイスとして登場したのですぞ！？気がつけば魔法発動の時しかしゃべらなくなってストレージでも良くね？みたいな扱いでしたけど！！』

またメタな事を言い出したものだ。

何やら色々たまっていたみたいだが、青少年ならぬ青デバイスの主張か？

『大体、姉妹合体って何でござるか！？不純にも程があるでござるう！？自分だけ仲間外れなんてひどいでござる！！』

『そうは言っても、フェイトちゃん魔術使えませんしーバルディツシュは基本男でしょう？』

『尚の事問題ないではござらんか！！女同士で更に姉妹合体なんてアブノーマル過ぎでござるよ。どうせなら3P…』

『はいそこまですよ』

『ぶぎゅ！！』

いきなりリンディがバルディツシュを掴むと、笑顔のまま適当な壁に叩きつけた。

ぽこんとバルディツシュの形に壁がへこむ。

『子供の前で教育上良くない単語を連呼するのは見逃せないわね？』
『はくおー！ー！！』

しかも、壁からはがれおちた所を容赦なく踏んだ。

ぐりぐりとつま先をねじ込む動きが何所か手慣れている、容赦の欠片すら見いだせなかった。

『な、中身が漏れ出る！ー！ー！！』

『り、リンディ艦長？』

『ああ、フェイトさんちよっと待ってね、貴女のデバイスだけど調教…もとい教育は大事よ』

「は、はあ…」

『マスタータスケテーーー!!』

バルディッシュの叫びが悲痛だ。

一応デバイスは精密機械なのだが、そんなの関係ねーと言わんばかりの扱いである。

おっぱぴーしそうになっているのはバルディッシュの方だけど。

「あ、あの？」

「何かしら？アリシアさん？」

「女で姉妹だと何がアブノーマルなんですか？」

『「……」……「……」……』

アリシアの無垢な質問に一同は顔を赤くして黙るしかなかった。勢いでしゃべっていたバルディッシュさえ、気まず過ぎて何も言えない。

「それに3Pってなんですか？」

「エイミィさん!!バルディッシュもこう言っていますので、改造の方お願いします!!」

「え、姉さん？」

アリシアの言葉を、フェイトの大きな声が潰す。

自分の質問が無視されたアリシアの頭に？マークが浮かぶが、他の皆は心の中でフェイトに向かい親指を立てていた。

GJフェイト!!

「い、いいのフェイトちゃん？」

「はい…シグナムは強かったですから…」

短い時間ではあったが、刃を交えたからこそ分かる事もある。

実力者であるフェイトが自分の勝利を信じられないほど、シグナムの実力は完成された本物だった。

「私も…もっと強くないと…」

今回はアリシアも参戦するのだ。

ルビーがフォローしてくれるとはいえ油断は出来ない。

正直、少しでも戦力を上げる方法があると言うのなら、目立つか

どうかは関係なくフェイトだって望むところだ。

「わかったわ、それじゃあバルディッシュを預かるね、システムを組み込んで動作確認するまで数日かかると思うから」

「はい、お願いします」

フェイトの覚悟を確認し、待機状態のバルディッシュを受け取ったエイミーが、さっそくカートリッジシステムを組み込むために部屋を出て行く。

『マスター、帰って来たら拙者…絶対目立つでござる』

「が、頑張つてね」

「そんな方が一にも帰って来なくなるようなフラグを立てないでほしいな…」

作業前からすでにクライマックス近くになったエイミーが、自動扉の先に消えた。

『よゝつし、それじゃあバルディッシュの改造が終わるまで、私達も特訓ですよ』

「…はい…!」

………そんなもって、数日が経過した。

『フェイトちゃん、もっと早くです…!』

「はい…!」

『すずかちゃん、ポジション取りがずれていますよ…!』

「はい…!」

『アリシアちゃん、貴女がメインです…!』

「はい…!」

『苦しくつたつて…悲しくつたつて…』

「…はい、先生…!」

アースラの訓練室ではここ数日、三人と一本の訓練が続けられていた。

指導しているのはルビーだ。

「はい、バルディツシュの改造完了！みんなのお姉さん、エイミイが戻って来ましたよ」

陽気な口上と共に訓練室に入って来たのは自己申告の通りエイミイだった。

ほくほく顔なところを見ると、改造は上手くいったようだ。

「お、皆頑張ってるね！お姉さんは感動した！！はい、フェイトちゃん。バルディツシュかえすよ」

エイミイのテンポがいい。

ちよつとハイになっているようにも見えるが、きつと急ピッチで仕上げてくれた反動だろう。

差し出された待機状態のバルディツシュをフェイトが受け取る。

『帰って来た！！マスターよ。私は帰って来たでござる』

「バルディツシュ、そんな無理してネタに走らなくていいから。あ、ありがとうございますエイミイさん」

「いえいえ！それでルビーちゃん、これは何の特訓なの？」

見た所、三人の連携に係る特訓のようだが…。

『フッフ、見たいですか知りたいですかそーですか、ではお見せしましょう』

「お、お願いね…」

むしろ何が何でも見せてやるという感じのルビーに、若干引きながらもエイミイは頷いた。

実際、興味はあるのだ。

『さあ三人とも、行きますよ』

「……はい！！」

三人が元気よく答えると、どこからともなく軽快な音楽が流れてきた。

それに合わせて三人は、踊るようにして移動し、自分の立ち位置に立つ。

「……勝利のポーズ、キメ……」

ビシッと戦隊物の決めポーズみたいなものを決めた。

その背後では、ルビーお得意の魔術式の花火が上がっている。

「えっと…何これ？」

「だから決めポーズですよ。せつかく三人揃ったんですし…この辺りでちゃんと決めポーズを…」

「いや、そうじゃなくて、魔法の練習とか魔術の練習とかは？しなくたっていいの？」

「エイミーさん…」

ルビーがやれやれだぜな声を出した。

多分呆れているのだろうが、そんな反応をされるほど変な事を言っただけでもない。

「たった数日の練習や修行で強くなれたら誰も苦労しませんよ？何所のチートキャラですそれ？」

「う…」

確かに正論だ。

そんな一夜漬けみたいなやり方で実力が上がるのなら、普段の練習や修行の意味がない…ジャンプ系のマンガに真正面から喧嘩を売るような物言いだが、エイミーはあまり深く考えないようにした。

踏み込んだ足下に地雷が埋まっていそうな気がするし、ルビーの奇行は第三者として見る分には割と楽しい。

そして、巻き込まれるのがほぼ確定している少女達にはご愁傷様、彼女達の未来に幸あれ…本当に、幸あると良いなと思う。

「あはあ…バルディッシュも帰ってきて、これでなのはちゃんが復帰したらいいよ四人！あと一人は…いつそ間に合わせでヴィータちゃんにときましようかね…赤いし…。や…っぱり初志貫徹ですよね…」

ルビーがやたらと不穏当な事を言い出した。

初心とか言っているけど一体何を考えているのだろうか？…部屋の隅にアイドルマスターのゲームが落ちているのは何か関係があるのだろうか？

しかもヴィータが間に合わせ？

本人が聞いたなら怒り狂いそうだが…それともルビーに見つからないようにした方が彼女の為だろうか？

「なのはちゃんの抑止力って実は凄かったんだね」

エイミーが心底感心した声を出す。

なのはがいないと、ルビーはここまで暴走するものらしい。

フェイトにアリシア、そしてすずかでは三人揃ってもルビーのストッパーには力不足のようだ。

思えばなのはは、結構力技の突っ込みも遠慮なく行っていた武闘派さんでもあった。

いなくなつて初めて気がつくありがたみ…死んではいけないけど、適当なところで戻ってきてくれると助かるなとも思う。

「……え？」

「おや？」

そんな事を考えていたら、いきなり警報が鳴り出し、弛緩していた空気が緊の一字に取って代わる。

現状で警報が鳴るような状況は一つしかない。

「見せ場キタ　　（。（。（。（。（。（。（。（。）

。）　　！！！！」

バルディッシュが織田雄二風に叫んだ。

残念ながら本人のようなさわやかさは微塵もないが、テンションが最初っからクライマックスになっているのは良くわかる。

「飛んで火にいるなんてやらゝ赤色ゲットのチャーンズ」

ルビーのテンションも高い…これはまずい、危険すぎる。

ヴィータ…出来れば逃げる。

そんなルビーをガン無視で、顔を見合わせた少女達は頷いて訓練室を出て行く。

目指すのはブリッジ……様々な不確定要素を内包しながら、第二ラウンドのゴングが鳴る。

第九話 Power-up(後書き)

幕間と言っかつなぎで一話使ってしまいました。

本当は削ってよかったんでしょけど、テム・レイネタからドラえもんネタで仮面ライダーファーストネタにつなげる流れが書きたかっただけです。

後、どうも7月はリアルの関係で更新が不定期になりそうです。来週は特に、更新できる自信がありません。

第十話 Hope

「に、にゃ…」

なのはは多分、人生最大の危機に直面していた。

これほどのプレッシャーを感じたのは英霊エミヤシロウと真正面からガチンコをやらかした時以来…あるいはそれ以上だろうか？

正直逃げ出したいのが本音だが、そう言うわけにもいかない。

本人非公認ではあるが、悪魔を通り越して魔王の異名で呼ばれるなのはにそれほどのプレッシャーを与える最恐にして最凶の相手は、御剣剣士である家族の脇を通り抜け、レイジングハートの警戒網をスルーして、いきなりなのはの目の前に現れた。

「体の調子はどう？」

当然と言っべきか当り前と言っべきか…“自分の見舞いに来た友人”を防ぐような防御は存在しない。

ただし、アリサの目的がただの見舞いだけで終わりそうないのが問題だ。

「だ、大丈夫だよ。まだ少し体がきついけど、普通に動くくらいは出来るようになったの」

「そう、それはよかったわ」

アリサは笑顔だ。

笑顔なのに…今その顔がとても怖く見えるのはきつと目が笑っていないからだろう。

「それなら遠慮はいらないわよね」

「え？」

「なのは、今日はお見舞いついでに色々OHANASIしに来たのよ？」

「お、お話？」

「うつん、OHANASIよ」

高町家のお家芸であるOHANASIをよもや自分がされる日が

来るなどとは、夢にも思っていなかったのはである。

「いきなりあんたが筋肉痛で学校休んで、ずずかとフェイトも良く分らない理由でお休みするから、私とっても寂しかったわ」

「そ、そうなんだ」

あの直情傾向のあるアリサにこんな持って回った言い方はらしくないと思うが…本当は怒鳴り倒して詰問したいのを必死で押さえているのが、体が小刻みに震えているのと、笑顔がひきつっているのによく分かる。

元々こんな駆け引きに類する事は苦手な子なのだが、それもそろそろ限界らしい。

噴火までの余裕は後どれだけだろうか？

「この半年ね、我慢してきたの。でもいい加減…私、堪忍袋の緒が切れてもいいと思うのよ。海より広いあたしの心も、ここらが我慢の限界よ？」

「にやはは、アリサちゃんプリキュアみたいだね？」

「ありがとう。つまり何が聞きたいのかと言うと、あんた達が揃って何をしているのかを聞きたいの」

非常にまずい。

アリサに全くブレがない。

何が何でも聞き出してやると、サスペンスの熱血刑事のような気迫を感じる。

犯人役はなのはだ。

そして、この場にはすずかもフェイトも家族もない上に、アリサの目の前でしゃべるわけにもいかないレイジングハートはただの赤い玉である。

故に、なのははこの状況を自力で打破しなければならないのだが…かなりハードルが高いと言わざるを得ないだろう。

得意の魔法でこの状況を吹き飛ばせたらどれだけ楽かと物騒な事を、頭の隅で考えなくもないが、それは人間としてやっちゃいけない事だ。

「私、皆の事を友達だと思っていたのに…」

「うっ…」

なのはの見ている前で、アリサの目が潤む…今度は泣き落しで来られた。

アリサの性格を考えれば、狙ってやっているとは考えにくいが…天然だろうが養殖だろうがその威力は変わらない。

女の涙は場合にもよるが同性にも有効で、なのはの胸に罪悪感と言う名の見えない刃がグサリぐさりと刺さってくる。

もし罪悪感が目に見えるものだったならば、今のなのははハリネズミ状態だろう。

「そんなつもりじゃ…」

なのはは言いかけた言葉を飲み込んだ。

物事をどう受け取るかは、最終的には受け取り側の主観であり、アリサは泣いている。

意図したわけではないが、アリサを除け者に行っている自覚はなのはにだってあるのだ。

同時にそれはある意味で仕方がない事だとも思う。

自分から望んで飛び込んだなのは…最初から魔導の世界にいたフエイト…生まれつき魔の因子を持っていたすずか…そして、完全な一般人であるアリサ…ある意味で彼女は最初から仲間外れだったのかもしれない。

魔術が秘匿しなければならない物なのは言わずもがな、魔法だつてこの世界で公表するわけにはいかない技術である。

それが絶対であるとは思わないが、アリサを魔法や魔術の世界に巻き込んでいいものかどうか、なのはには判断できない…ルビーあたりなら簡単に「OKですよ」とか言いかねないが、良くも悪くもなのはにはあそこまでお気楽極楽にはなれない。

そんななのはが、アリサにどんな言葉をかけようと、言い訳以外にはならないだろう。

「そう…これほど頼んでもだめなのね…」

「え？」

どうやら思考の海にどっぷりつかってしまったようだ。

目の前のアリサが顔を伏せて震えていて…それを見ただけで状況を理解したなのはが青くなり、血の気が引く…どうやら結構な時間放置してしまったらしい。

子供は基本的にせっかちである。

「こうなったら意地でもしゃべってもらわよー!!」

「え？アリサちゃん、何するつもり？」

「八神はやての召喚!!」

「は？にやーーーー!!」

なのはの疑問より、扉がドカンと音をたてて開く方が早かった…

ここは他人の家だと言うのに、何って事しやる!!？

驚きでなのはの髪が全部逆立ってしまったぞ!!？

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん!!問おう、あんたがうちのマスターかーーーー!!？」

ハイテンションに登場したのは本当にはやてだった。

アリサと一緒に見舞いに来てくれたのだろうか、今までずっと部屋の外でスタンバっていたのか？

何って女だ八神はやて!!

「なのは…あんたが悪いのよ？」

「ア、アリサちゃんの目からハイライトが消えている!!？」

しかもいつの間にかなのはの背後に回り、拘束している!!？

「ふははは…アリサちゃんのお墨付きや…なのはちゃん覚悟しーやーーーー!!」

前門に指を卑猥にわきわきさせているはやて、後門に身動きできないように羽交い締めしているアリサ…なのはに逃げ道はない。

「いやーーーーおかーさーーーーん!!」

絹を裂くようなのはの悲鳴…だが残念、現在の高町家には家人がなのはしかない。

「はあ…はあ…」

乱れたベッドの上で、これまた着乱れたパジャマのなのはがぁえいでいた。

頬を薄紅色に染めているのが微妙に色っぽい9歳児である。

「むう…うちのくすぐり攻撃に10分以上も耐えるなんてやるなのはちゃん？」

まあ…所詮は9歳、この辺りが限界である。

「不埒な想像をした人達は爆発したらいいと思うの…」

なのはが息も絶え絶えに呟く。

治りかけとはいえ、病人相手にする暴挙では無い。

「な、なのは？なのはが何を言っているのか分からないわよ？やり過ぎた？」

「うん？ああ、だいじょうぶやアリサちゃん、多分極限状態でどつかとチャネルがつながつとるだけや、しんぱいあらへん。うちも時々あるもん」

「時々って…その判断基準が全然安心できないんだけど？」

かなりやばいんじゃないかな？とアリサに背筋に冷たい物が流れる。

「しゃーないな、ここまで頑固やといよいよお待ちかねのポイントツチで…」

「にゃー！ー！ー！ー！」

たまらずなのはが悲鳴を上げた。

はやての言うそれは、アリサで威力を実証済みである。

「なのは…ごめんね」

「同情するなら止めてくれなの！！」

收拾がつかないカオス状態なのは今更としても、騒ぎすぎである。女の子が三人集まればかましいと言うが、きっとこういう状況を指しての言葉だろう。

「アリサちゃん？私達、お友達だよね！？はやてちゃんもお友達！
！お友達でお友達を脅迫するなんて人の道に外れているの！！」
「H H H H A、なのはちゃんは何言うてんのかわからんうちは乳の道を行き、爆乳から貧乳まで全てを掴む女、八神はやてや！
！」

「調子に乗り過ぎて何言っているのか分からないの！！」
とりあえず、なのはの胸を揉みしだく気満々なのは理解できた。
じりじりと距離を詰めるはやてに、何度で同性相手に貞操の危機を感じなければならぬのかとなのはが下がるが…ベッドの端までの距離などたかが知れている。

案の定すぐに追い詰められていた。

はやてもはやてで、車椅子の病弱少女の設定は何処に行った？と言う感じのアグレッシブさでなのはにじり寄ってくるはやての顔は欲望に染まっていた。

今にもよだれが垂れそうだが、それでいいのか八神はやて！？

「あははー……！！……まあ、冗談はこんくらいにしょか？」

「「え？」」

なのは絶体絶命のピンチの救いは…ピンチの原因であるはやて本人から来た。

あまりに意外過ぎる展開に、なのはとアリサの言葉が重なる。

「堪忍な…なのはちゃん、悪気はなかったんよ…からかう気は一杯やったけど」

それはそれで問題ありまくりだとは思うが、はやての豹変に対して目を丸くしている二人では突っ込めない。

「でもな…なのはちゃんも悪いんよ？何しているのか知らんけど、アリサちゃんを除け者にしたらあかん！」

「「……」」

二人は無言、口は一応動いているが、言葉になって出てこないでいる。

あのはやてが…まともな事を言っているだと？

「アリサちゃんもな～なのはちゃんやすずかちゃんが心配なんよ～
勿論うちもや。そりゃあね、お友達にも秘密にしときたい事くらい
あるやる？でもそれで心配させてもつたらあかんよ。それが友達つ
てもんや」

うんうんと頷きつつ、いいこと言っただばかりにどや顔なはやて
…。

「アリサちゃんもな、そう頭ごなしに吐かせようとせんでええんや
ない？お話の余地はあると思うで？」

言いたい事を言い終わつたはやての目の前で、なのはとアリサが
視線をかわして頷きあう。

「誰よあんた！？」

「こんなのはやてちゃんじゃない！？」

「え？」

啞然としていた友人二人から、いきなり知らない人扱いされたは
やてが呆ける。

「アリサちゃん大変！！この人はやてちゃんの偽物だよ！！こんな
のはやてちゃんじゃない！！」

「間違いないわ！！はやてがこんなまともな事を言うわけがないも
の！！きつとはやての妹とかでクローンだわ！！」

しかも何やら好き勝手な事を言われ始めた。

流石のはやてもちよつと傷つく。

「あーないない、妹とかクローンとかそんな設定ないよ。うちは正
真正銘八神さん家のはやてちゃんや。二人共何テンパツとんの？」

「それなら病気だね！！」

「頭が悪いのね、はやて！？」

「あれ？うち今ケンカ売られとるん？」

アリサの言い方は問題がありまくり過ぎる。

「大変だよはやてちゃん、早くここに横になつて！！」

「え、いやそこはなのはちゃんのベッドで病人はなのはちゃんやろ
？」

残念ながら、はやての主張が聞き入れられる事はなかった。

「何でこんな事になったんやろ？」

結局、はやては二人に抵抗できず、なのはのベッドを占領するはめになった。

なのはのお見舞いに来たはずなのに、いつの間にかはやての方が病人扱いされていると言うミステリー……いや、確かにはやても現在進行形で原因不明の病人ではあるのだが……。

「くつつ、これが世界の修正力っちゅーやつかいな？」

関係ないとおもう。

日ごろの行いと、あまりにキヤラ違いな事をやらかしたはやてが悪い。

なれない事をする、自分だけでなく周りにまで異様なリアクションを取らせてしまうといういい例だ。

(……まあいいか、かんにんなくなのはちゃん)

心の中で、はやてはなのはに謝る。

なのはが何かを隠しているのは間違いなく、それが自分を含めた人間関係をぎくしゃくさせているのに違いはない。

はやてもなのはが何を隠しているのかを聞き出すために今日ここに来たという点ではアリサとの違いはないのだが、二人で協力してはやてを布団の中に放り込んだコンビンেশョンを見れば、なのはの秘密が開帳されれば、二人の仲は案外すんなり元に戻るだろう。

同じ流れでするかとフェイトに関する関係も修復されるはずだと、狸なはやてはこっそりニンマリする。

自分から進んで道化になったかいがあつたと言う物だ……半分くらいは本能と言うか趣味的な物が混じっていたことも否定できないが……ちなみに何故アリサの追及を止めたのは、あのままアリサがなの

はに無理やり口を割らせた場合、その後に間違いなく遺恨が残ってしまうからだ…そんな“心残り”を作りたくなかった。

（…そう言えば、あの子たちは大丈夫なんかな？）

心残りと言う単語に、はやてが思い浮かべたのは自分の家族達…ヴォルケンリッターだ。

まだ半年、されど半年……ヴォルケンリッター達との間には、確かに絆が結ばれているとはやては思う。

彼女達も、戦わない平穏な生活になれてくれた。

（後は…うちが少しでも長く…）

自分の体に起こっている原因不明の麻痺が進行している事を、他ならぬはやてが一番理解しているが、しかしそれを誰にも伝える気はない。

ヴォルケンリッターは勿論、目の前にいるのはやアリサ、ここにいないすずかやフェイトにもだ。

伝えてしまえばきつと…この時間が終わってしまう。

変わってしまう…今のままではいられない。

（だから…少しでも長く…生きたいな…）

何より自分が死ねば、ヴォルケンリッター達は、別の主の元で再び戦いの日々を送る事になるかもしれないのだ。

それが避けられない運命だと言うのならせめて…少しでもこの時間を楽しんでほしい…ただこの安らぎの時間だけを持って行ってほしい。

そして自分も、願わくはこの時間を持って逝きたいと思う。

（連絡もほとんど入れてこんし、帰って来たらお説教やね）

とはいえ、肝心の家族たちは数日前から家を開けている。

数日前、いつもの人助けで少し時間がかかりそうな事件が起こったと言つて、彼等は家を留守にすることを詫びて出て行った。

いきなり一人に戻つて、はやてもさみしいが何時もの人助けとなれば、最初にOKを出した手前、わがままも言いつらい。

本当はずっと一緒にいてほしいが、今更のように引きとめて、は

やての異常に気付かれたくもないし、今回は妙に四人ともやる気にあふれていたのも、水を差すのも躊躇われたのだが、一体どんな事件なのやら…クリスマスパーティーには戻ってくると約束してくれたが、出来れば早く終わらせて帰ってきてくれると嬉しいと思う。

「アリサちゃん大変！はやてちゃんがんばんだか遠い物を見る目になっているの！！」

「やばい、いよいよ症状が悪化している！？こうなったらお金はかかるけどB J先生に…」

「だから勘違いやって…チョイ待ち！アリサちゃんB J先生に繋ぎつけられるんか！？」

何気にそっちの方が凄い事だと思う。

今日のなのは部屋はとってもにぎやかだ。

はやてがそんな風にじゃれあっていた時、彼女の家族が何をしていたのかと言うと…。

「……とってもおいしく焼けましたー！！！！」

別の次元世界の中心で、愛を叫ばずに肉を焼いていた。

しかも漫画肉である。

肉を焼くという意味では焼き肉で間違いないが、広い草原のど真ん中でたき火をし、その上に漫画肉を置いて焼いて大自然を満喫していた。

流石にはやても、自分の家族がこんな豪快なアウトドアをやっているなんて夢にも思わない。

どこぞの騎士王が見れば雑だと言で切り捨てられるであろうが…青の槍兵辺りは嬉々として参加しそうだ。

「この世のすべての食材に感謝をこめて、いただきます！！」

「……いただきます」

四人が肉を中心に手と手のしわとしわを合わせていただきます…

礼儀はちゃんとしているのだが、状況が状況だけに妙なサバトじみた物に見えなくもない。

「思ったより蒐集も順調だな」

「本当だよな、案外魔力を持った魔獣もいるもんだ」

シグナムの言葉に、ヴィータが頷いた。

ここ数日、ヴォルケンリッター達は別にキャンプを楽しんでいたわけでは無い。

魔物とバトル↓勝利↓蒐集とリアルモンハンな事を繰り返していたのだ。

ちなみにその後の手順に仕留める↓捌く↓焼く↓食べる（今ここ）の手順を加えた物が漫画肉の正体である。

これで直ぐ傍に恐竜もどきの全身骨格でもあれば、実に昭和的な光景だ。

「転移事故で変な次元に入り込んだ時にはどうしようかと思っただけだね」

「シヤマル…笑いごとでは無い。あの時はどうなるかと思ったぞ？」
嬉しそうに肉をほおばりながら…何やらとんでもない事を言ったシヤマルを、呆れたザフィーラが窘める。

「うゝん、今でも何で事故ったのかよく分からないのよね」
シヤマルは本当に困っているらしい。

「そんな適当な…」

「まあまあ、結果が良かったんだから」
あっけらかんとそう言うと、持っていた闇の書のページを開いて見せる。

「じゃゝん、389ページよ」

すでに半分以上のページが埋まっていた。

本格的に蒐集を始める前には一〇〇ページと少しだったと言うのに、この数日で二〇〇ページ以上の蒐集をした事になる。

上機嫌の理由はいいづらいが、確かに有頂天になっても仕方のない成果だろう。

闇の書のページを二〇〇ページ埋めるだけの魔力と言うのは、単純計算で上級魔導師十人以上と言うとんでもない量である。

当然それ程の魔力の持ち主はめったにいないし、いたとしてももれなくかなりの強者である。

それを相手にする危険性を回避できたと言う事ともう一つ、はやてを救う可能性が上ったと言う事なのだから、四人の纏う空気が異常に軽く弛緩しているのもまた仕方がない。

以下に騎士とはいえ、彼女達も楽しければ喜ぶし悲しければ泣く、予想していた以上の成果を前にして、少々気が抜けてしまったとしても責められるべきことではないはずだ。

「やれやれ……」

ザフィーラがため息をついた。

儼然たる成果がある以上、お小言も言いつらい。

問題の転移事故がなければ、この短期間でこれほどの成果は望めなかったのもまた事実だ。

「しかしあの生物……不細工な見た目にも関わらず。一匹一匹がなかなかの魔力を持っていたな？」

『へえ、そんな生き物がいたんですか？』

「ああ、何か潰れた饅頭のような生き物だったな。ほら、あれじゃねえの？ 美味しい物ほど見掛けが悪いとかなんとか？」

肉をほおばりながら、ヴィータが合いの手を入れてきた。

「そ、そんなにすごかったんですか？」

「まさに踊り食いと言う奴だったな」

「みんな足腰立たなくしちゃったのは申し訳なかったけど……」

皆好き勝手な事を言っているが、特にシャル辺りがひどく物騒な事を言っている。

『そんな奇妙な生き物がたくさんいた物ですね』

「ああ、彼等には悪い事をしてしまったが、殺してはいない。主が無意味な殺生を嫌われているからな」

「いい人なんですな」

「当り前だよ、なんたつて姉ちゃんだぜ？」

会話が途切れると、しばらくは黙々と食事を進めて漫画肉を骨にした。

「さて…そろそろやるか」

「だな」

「そうね…」

「うむ、異論はない」

食事が終わり、一息ついたシグナムが姿勢をただし、全員がそれに倣う。

「一番、列火の将シグナム！！」

「二番、鉄槌の騎士、ヴィータ！！」

「三番、湖の騎士、シャマル！！」

「四番、守護獣、ザフィーラ！！」

『五番、ルビーちゃんですよー！！』

「ろ、六番、アリシア・テストロッサです…」

「………」

六つの沈黙が重なる…やはり、二人多い。

レオタードのようなバリアジャケットに、大きなマントをつけたどこかで見たような気がする金髪の少女と、その手にあるおもちゃのような杖…。

「……誰だお前！？」あなた「……」

「ひゃうー！！」

重なる誰何の四重奏に少女…カルデットアリシアがびくつと身をすくめる。

「何時の間に近くに來てたんだ！？って言うか何普通になじんだんだよお前！？」

「そ、それはルビーさんが…」

「……ルビー？」

ヴォルケンリッターの4人の胡乱な視線＋アワアワ状態の1人の視線が一点に集中する。

両側にそれぞれ《やったね大成功！！》《ドッキリ大成功！！》

のプラカードを持っているルビーの姿は突っ込みどころに困らない、
つと云うか何処から突っ込みを入れたものか迷う。

『さぶらーいず~~~~~!!』

「またお前か!!」

『またルビーちゃんですよ!!』

「何で怒鳴るんだよ!？」

『ノリです!!』

この中でいちばんルビーとの接点が…不幸な事にも多いヴィータ
が代表で怒鳴りつけるが、カウンターで怒鳴り返されたうえに漫才
のようなやり取りに飲み込まれた。

「つて言うかお前がここにいて事は魔王も来ているのか!？」

魔王と言う単語に、ヴォルケンリッター達が目に見えて緊張した。
すでにさっきまでの弛緩した気配はなく、戦闘モードになっている。
る。

『ああ、なのはちゃんは今回はお休みですよ…その代りピンチヒッ
ターを連れて来たんです』

「は、初めまして、アリシア・テストロッサです」

改めて自己紹介をするアリシアに、ヴォルケンリッター達があか
らさまにホツとする…ちなみに魔王と言って普通に通じているよう
だが、ここに本人がいたらどんな反応をしていただろうか？

「え〜っと…もう一度聞くけど、お前ら何時の間に現れたんだ?」

『あはあ〜よくぞ聞いてくれました〜これぞルビーちゃんお楽しみ
機能の一つ〜』

「お楽しみってなんだよお楽しみって、こっちは心臓止まるかと思
ったんだぞ…」

「ヴィータ、黙って聞け」

突っ込みを入れようとしたヴィータを、シグナムが黙らせた。

ルビーはサプライズと言っているが、これはなかなか冗談で済ま
ない状況だ。

確かに、気が抜けていたのは認めるし、浮かれていたのも確かに

はあるが…だがしかし、駄菓子かしである！！

障害物のない草原のど真ん中で、ベルカの騎士が四人も集まっていながら、だれ一人気がつかなかったなどありえるだろうか？

いやない（反語）！！

今回はたまたま無事だったが、いきなり不意を突かれて全滅していたかもしれない…その秘密をわざわざ自分から明かしてくれるというのなら、この場合は黙って聞くのが正しい選択だろう。

シグナムの言いたい事に気がついたヴィータだけでなく、シャマルとザフィーラもゴクリと唾を飲んで緊張する。

『使ってる魔術は気配遮断ですよ〜ルビーちゃんとそれを持っている人限定で、何となく目をそらしてしまったり認識を誤魔化す魔術です』

簡単に言うが、ヴォルケンリッター全員の目を欺くなどかなり高度な魔術なのは間違いない。

『名付けて〜“こっそり近づいて膝カックンして驚かしちゃうぞ〜”の魔術です』

「……なんじゃそら！！」「……」

アリシア以外の全員から突っ込みが来た。

「膝カックンってお前！！日本妖怪の総大将みたいな能力を何くだらない事に使ってたんだ！？」

『え〜だってびっくりしたでしょう？』

「確かにびっくりしたよ！！そのネーミングセンスにな！！」

『律儀に突っ込みを入れてくれるヴィータちゃんは気真面目ちゃん

！！』

「やかましいわ！！」

凄まじいまでの才能の無駄遣いである。

「…パトラッシュ、あたいうち突っ込み疲れたよ…眠いんだ」

「ヴィータ、我はパトラッシュでは無い。いい加減犬扱いしていると嘔むぞ？」

「もうこの杖が何しても驚かないわ…」

…ヴォルケンリッター達はルビー一般人からルビー初心者レベルアップした。

「もついい、結局お前は何をしに来たんだ？ 場合によっては…斬るぞ？」

シグナムの声の含まれる怒気の量がそろそろメルtdownレベルだシグナムが切れそうだ。

あのシグナムが切れたと言うべきか…それともシグナムだからこそ今まで良く持ったと言うべきかの線引きは難しい。

すでに白く燃え尽きかけているヴィータは参考にならん。

「まさか本当にからかうただけに來たと言っなら…」

「見つけた。シグナム」

はっとして空を見れば、いつの間にか周囲を武装局員に囲まれている。

「時空管理局！！」

「しまった、こいつらはおとりか！？」

「フェイト・テストロッサ！？」

包囲網の中心、シグナムの正面にいるのはフェイトだ。

フェイトの前方の空間にウィンドウが開き、翠色の髪の女性が映し出されるのを見たヴォルケンリッター達が自分の武器、拳を構える。

『時空管理局所属艦アースラ艦長、そして今回の事件の現場責任者のリンディ・ハラウンです』

「ヴォルケンリッターの将、シグナムだ」

たとえ敵対する者同士とはいえ騎士故に名乗られれば名乗り返さないわけにはいかない。

それが騎士のクオリティー。

「目の前に道化を放り込んで気を引き、我等の気が散っている間に包囲する手際、敵ながら見事、賞賛させていたどころ」

『そ、それは…ルビーちゃんの独断専行なので気にしない方がいいと思うわ』

「……」

…何か色々失敗した。

出だしから躓いてしまった感がある。

モニターの先で乾いた笑いを浮かべているリンディは勿論、本気で感心していたシグナムもいたたまれずに、赤くした顔を逸らした。関係ないが奇麗どころの羞恥な顔は結構萌える。

「と、とにかく、貴方達にお話したい事があります！！」

微妙な空気の中では話が進まないと、リンディが無理やり切り出した。

前振りも何もあつたもんじゃない。

それに対して、ヴォルケンリッターの方ではヴィータが挑戦的な目でリンディを睨む。

すでにして喧嘩腰に加え、凹凸のない胸を張ってシグナムの前に出た。

「管理局の話なんて…聞いてやろうじゃねえか！！」

「え？」

リンディだけでなく、武装局員やフェイトが疑問符を吐き出した。今何か言い回し的に変じゃなかったか？

国語の先生が聞いたなら怒り出しそうな言い回しだったぞ？

「え、えっと…それはこちらの話を聞くつもりがあるって言う事でいいのかしら？」

「人の話を聞くのは当然だろう？」

何故か他のヴォルケンリッターもその通りだと頷いている。

特にザフィーラ…こいつは何で犬モードになって待ての姿勢になっているんだろうか？

「えっと…もしかしてなのはさん？」

「……っつ！」「……」

非常に分かりやすく、ヴォルケンリッターが身をすくめた。

「な何を言っているんだ？」

「ま、魔王様がどうかしたのかしら？」

「か、彼女がいなくてホッとしているなんて事はないんだからね！
！」

分かりやす過ぎて、誤魔化す気があるかどうかの方が疑わしかった。

「またなのはさんか…」

傍にいてもいなくても影響を振りまく少女…高町なのは。

ルビーだけかと思っていたが、案外彼女も…。

「まあ、なのはちゃんですから」

ルビーの言葉は何のフォローにもなっていなかった。

むしろどう言う意味を含ませたのコメントなのか気になるが、今はそれを追求する時間もない。

「まあ、話が出来ると言う事を前向きにとりましょう」

リンディは開き直った。

初めて、なのはの影響がプラスに働いた瞬間かもしれない。

気を取り直したリンディは語り始めた…全てを…闇の書が元は夜天の書であった事、歴代の主の何人かがプログラムを改編した事、何より転生機能と再生機能により破壊不能な闇の書は、最終的に主の死をもって大規模な破壊を振りまく事実。

話が進むにつれて、ヴォルケンリッターの顔色が誰の目から見ても悪くなっていった。

特にヴィータ…思い当たる何かがあるのか、小刻みに震えている。

「…ヴィータ、お前は知っていたのか？」

「い、いや…でも何か忘れてるって…そんな感じがずっとしていたんだ。蒐集している間ずっと…」

「そうか……話は分かった」

ヴィータの答えに頷きを返すと、シグナムがリンディに向き直る。

「それでは…」

「だが、蒐集をやめる事は出来ない」

「そんな…！」

この場にいる全員がほっとしかけた直後に放たれた言葉にがくぜ

んとする。

「勘違いしないでほしい。その情報を信じられないという思いはあるが、頭から否定するわけでもない」

『それなら何で！？』

『蒐集をやめたら、彼女達の主の命を諦めるのと同じだから…でしよう？』

リンディとシグナムの会話に、ルビーが割り込んできた。

『それは…』

ルビーの正論にリンディが言い淀む。

管理局が掴んでいるのは、書の真実と現状に関する事だけであつて、それ以上の「ならばどうする？」と言う部分がない…管理局は主を救う方法を確立していないのだ。

「貴公等の言っている事は…おそらく正しいのだろう。しかしすでに、闇の書による主の浸食は始まっている」

この時点で、蒐集をやめるという選択肢も消えた。

既に闇の書は主の命を削っている…ここで蒐集をやめれば、残されている寿命を縮めるだけだ。

「主の死を、ただ座して待つ事は出来ない」

「そ、それなら私達も協力します！！」

『同じ事ですよフェイトちゃん、魔力蒐集を続ければ延命にはなるでしょうが、根本的な解決にはなりません』

フェイトの言葉を、ルビーが魔術師の残酷さで切り捨てた。

闇の書に魔力を蒐集しても、闇の書の完成に近づくだけで、最終的に完成した時点でやはり主は死ぬせいぜい時間稼ぎが出来るかどうかというレベルの話だ。

結局のところ、主と闇の書の関係を絶たない以上、手詰まりの状況は何も変わらない。

「わかってくれとは言わない。間違っているのは多分我々で、これからの行いは多くの人間の目に間違っていると映るだろう。それでも…」

カチリと言う音と共に、シグナムがレヴァンティンを抜いた。

「我等には蒐集しかない。わずかでも助かる可能性があるのなら……」
蒐集をやめれば主の死が決定してしまうが、闇の書が完成すれば管理者権限で突破口を開けるかもしれない……わずかな可能性ではあるが、主が生き延びる可能性がある。

むしろそれ以外に主を助ける方法がないのだ。

たとえその可能性が1%……あるいはそれ以下だったとしても絶望^{ゼロ}ではない……たとえそれが溺れる者にとつての藁であつたとしても、この差は大きい。

『……私達が、同じことを考えなかったとでも？』

リンディの夫が犠牲になつた前回の事件だけでは無い。

闇の書を何度となく封印しようとしてきた管理局だ……シグナムが簡単にひらめいた程度の事に気がつかないわけがない

なのに、未だ闇の書はその機能を停止していないという事実が存在するその意味……。

「分かつてくれとは言わない。だが、我々も主を失うわけにはいかないのだ」

シグナムの覚悟を見たザフィーラとシャマルが構える。

「そう……だな……」

自分の中の葛藤に決着をつけたのだろう。

ヴィータも、グラーファイゼンを構える。

ヴォルケンリッターの四人は管理局と対立する道を選んだようだ。

『これ以上の説得は無理っぽいですね……あれは見ず知らずの百より大事な一を取る人間の目ですよ』

「その通りだ。故に、先に謝っておく……すまない」

ルビーの言うとおり、彼等は悪では無いのだろう。

ただ、どうしても救いたい一人がいるだけだ。

大事な人を救いたいという思いが悪だと言うのなら、そもそも救いなどと言う概念は存在しない。

『仕方ありません。管理局の法にのっとり、貴方達を拘束します』

リンディも、苦渋の決断で武装局員達に拘束命令を出す。

勧善懲悪など幻想だ。

現に、この戦場に正義も悪もない。

ただ両者に譲れない物があるだけだ。

「……」

もはや言葉は語りつくしたと、誰もが理解していた。

自分の正義を譲れないのならば、後はぶつかるのみ……ここに、誰も望まない戦いが始まる。

第十話 Hope（後書き）

やーっと投稿できましたー！！

めっちゃめっちゃ難産、内容的にそうは思えないかもしれないですけど、ここで方向性を間違うと変な方向に話が転がるので慎重に書き上げました。

とりあえず吞もうという気分です。

今月中にもう一話投稿出来ればいいな～なかなか全編ギャグとはいかないもんですね～。

第十一話 A new gate opens

緑の草原を、刃の形をした音が駆け抜ける。
しかも一つでは無い。

先に走り去った音を追いかけるように、いくつもいくつも音が重なる。

「刃あああああ！！！」

「破あああああ！！！」

『だっしやーーーー！！！！』

音源は桃色の剣士と黒の魔導師…シグナムとフェイトだ。

刃の白銀と、魔力刃の黄金が鏢迫り合い火花と魔力を散らす。

「相変わらず良い太刀筋だな、テストロッサ！！！」

「ありがとう！！！」

『マスターなら当然！！！！』

「だが！！！」

鏢迫り合った状態から、シグナムが押し込む。

体重、身長、力において、未だ成長途中のフェイトよりシグナムの方に分があるのだ。

「ぐっ！！！」

『マスターファイトー、１パーツ！！！！』

それを理解しているフェイトは、自分に向かって来る力に逆らわずに引く。

これが数年先ならば、腕力でも拮抗出来たかもしれないが、そんな仮定に意味はない…それに何より、ただで終わるようなフェイトでもなかった。

「雷鳴！！！」

「何だと！？！」

短い呪文と共に放たれたのは…蹴りだった。

互いに武器がふさがった状態での生身での蹴り、そこまでならば

シグナムも驚きの声を漏らす事なく、冷静に対処できただろう。

フェイトの蹴りに魔法…彼女の属性である電撃がまわりついていなければ…炎熱や冷却魔法ならばいい…いや、よくはないが火傷や凍傷を負いながらも、それを耐えて反撃できる位の自制は可能だ。

だが、電撃はダメだ…電撃はまずい。

スタンガン为例に出すまでもなく、電撃は表面よりも内面にダメージを与える属性、電気を流された筋肉が硬直してしまう生理反応は意志の強さではどうにもならない。

「こつのおおお！」

いかにシグナムとはいえ、わずか瞬きほどの間に、ここまで理路整然とフェイトの攻撃の危険性を看破できたわけでは無い。

故に、フェイトの蹴りに対して自分の肉体での防御では無く、レヴァンティンの鞘を合わせたのは戦士としての本能が思考の速さを凌駕した結果だっただろう。

『ちいいいいい！！防ぎやがったでござるな！？』

「くっ！！」

今度はフェイトがうめく番だった。

所詮、デバイスの補助も受けていないシングルアクション一小節の魔法…鞘が金属製だったとしても、それを伝わって感電させるまでの電気は起こせていない。

「ああああ！！！」

フェイトの攻撃が不発に終わった以上、今度はシグナムのターンだ。

剣を振り抜く間合いすらないほぼゼロ距離から、シグナムがフェイトに向けて肩からぶつかって行く。

「キャ！！」

蹴りで体勢を崩した状態で体当たりを受け、体重の軽いフェイトの体は、はじかれたように飛ばされた。

「バルディー…シュ！！！！！！」

『喜んでー！ー！ー！』

返って来た反応がアレだが、砲撃モードになったバルディッシュに魔法の光があつまる。

更に、バルディッシュに新たに組み込まれたリボルバーのシリンドラー状の部品、カートリッジシステムが稼働し、フェイトの魔力を底上げする。

『「プラズマスマッシャー！ー！」でござる！ー！』

後方に吹き飛び続けながら、フェイトが黄金色の砲撃を放つ。

「くっ！ー！」

タツクルを放った状態のまま、動きを止めているシグナムに避ける事は出来ない。

出来る事は受け止めて耐えるかもしれない。

「紫電……」

レヴァンティンのカートリッジシステムから立て続けに薬莖が排出される。

シグナムの魔力が炎に変換され、刀身に炎が宿った。

「一閃！ー！！！」

タツクルで居合抜きのような体勢になっているシグナムが、気合と共に逆袈裟の一刀が放つ。

剣筋に沿って赤が走り、炎の龍が空に駆け上がる。

金色の槍と赤炎の龍、両者は互いを食らいあい、爆発という結果を招いた。

「くっ！ー！」

「うっ！ー！」

背後に吹き飛ばされる二人の中間で爆煙が起こり、互いの姿を見失わせる。

本来ならば追撃は不可能が普通……可能とするのが一流だ。

「な！？」

フェイトが思わずうめいたのも仕方ないことだっただろう。

爆煙を突き破って鋼の蛇……レヴァンティンの連結刃の奇襲が来た。

「プラスマスマッシャー!!」

迫りくる刃に対して、フェイトは回避では無く攻撃を選んだ。こちらに向こうが見えないのと同様に、シグナムにもフェイトの姿は見えていないはず。

しかも攻撃の直後となれば、動きが止まっているだろう…黄金の魔力弾が、連結刃と共に爆煙を蹴散らす。

「な、いない!？」

だが、煙を貫いた先には誰の姿もなかった。

『マスター、上でござる』

「は!」

バルディッシュの助言に視線を上げれば…いた。

「迂闊だな」

シグナムが、連結刃を戻しながら大上段に構えて落ちて…斬りかかってくる。

爆煙だけでは無い。

連結刃まで囷にした奇襲…この巧みさは重ねた戦場の数か？

「まだだよシグナム…バルディッシュ!!」

シリンダーが回転し、三発ほどのカートリッジがロードされる。

再びバルディッシュに魔力刃が形成されるが、今度のは鎌より厚く、重い。

『ひつさびさの魔人狩りですぞー!!!受けて見れシグナム氏
!!!』

「な!？」

今度はシグナムが驚く番だった。

フェイトが構えているのはハルバート状の巨大な斧、今までのフェイトの戦術とはかけ離れたパワータイプの武器だ。

何より、竿状武器のハルバートと片手剣に属するレヴァンティンではリーチの差が存在する。

レヴァンティンの刃がフェイトに届くより、バルディッシュの刃がシグナムに先に届く。

「はあああああ!!」

『大車輪でござるなあああ!!』

フェイトがタイミングを計り、ハンマー投げの様に一回転して遠心力を刃に乗せる。

重量武器の威力を増大させる動きと、すでに軌道変更も迎撃も無理なタイミングだ。

シグナムは十分に遠心力の乗った一撃が、自分の脇腹に吸い込まれて来るのを感じる。

「ぐっつ!!」

両者の激突は、甲高い金属音となった。

少なくとも、肉や骨の立てられる音では無い。

「そんな…」

フェイトは啞然とした。

必中必殺のタイミングに合わせた最高クラスの一撃…シグナムはそれに対して、剣を持つ右手、剣の原に当たった左の肘と太ももで威力を吸収し、魔力刃そのものはレヴァンティンを盾にする事で受け止めていた。

「ぬ…くっつ…」

しかし、反動までは消せなかったらしく、剣を盾として保持したままの姿でシグナムが吹き飛び、フェイトとの距離が開く…今度は見失わない。

「……ふう」

レヴァンティンを降ろし、深いため息をついたシグナムが無形の位でフェイトを見る。

「…素直に賞賛させてもらおう。テストロッサ…見事と言うほかにいい」

笑みの形になった唇から洩れたのは、フェイトを褒める言葉だった。

近接戦に特化したベルカ式、しかも一流の騎士であるシグナムからの賛辞…めったに受けられる物ではないのは確かだろう。

「デバイスを介さない魔法で肉弾戦とはな…背筋に走った物がまだひかないぞ」

あのやり取りは、シグナムをしても驚きだったようだ。

デバイスの補助なしで魔法を使う事は理論を知っていれば不可能では無い、ただしその場合どうしても威力が落ちるし、発動までのタイムラグが必要だ。

故に、魔導師同士の魔法合戦になるとデバイスを中心とした物になりがちなのだが、フェイトはそんな思い込みを逆手に取り、魔力刃に意識が向いている所に魔力を込めたけりを叩き込んできた。

もしシグナムの魔法形態が近接戦主体のベル力式でなく、しかも彼女の技量が一流でなかったなら、間違いなく落とされていただろう。

「私が、思いついたわけじゃないから…」

フェイトが参考にしたのは、なのはの魔法と魔術の両立だ。

自分も初めて相対した時はかなり驚き、追いつめられたのを思い出す。

魔術回路を持たないフェイトでは魔術が使えないので、なのはのようにデバイスで砲撃しながら剣を振るような完全な両立には至っていない。

特に威力と言う面でどうしても劣るが、自身の持つ電気の属性でそれを補っているのだ。

「自分の物でもない物を容易く取り込める柔軟性も、貴公のセンスだと思うが…」

シグナムの目が意味ありげに向けられたのは、フェイトに手の中にあるバルディッシュだ。

「そのバルディッシュに組み込んだカートリッジシステムのようにな」

『フハハハ、よくぞ言ってくれました!!』

「…何？」

予想外すぎる反応が返ってきて、思わずシグナムは聞き返してい

た。

先ほどまでの戦いの中でも、デバイスには必要ないやたらと気合の入った奇声を上げていたが…。

『天が呼ぶ！！地が呼ぶ！！人が呼ぶ！！新たな力を手にいれたバルディッシュ物語後期型！！その名も「バルディッシュ・アサルトです」…な！？』

あのフェイトが…バルディッシュの口上をつぶしただと？

『そ、そんな殺生なマスターー！！夜なべして考えた決め台詞が…』
「ねえバルディッシュ？」

『お、おや？何故にマスターがなのは様と同じ魔王色の覇気を纏っていらつしやる？某、気を失ってしまいそうでござるよ？』

しかもすごくいい笑顔だ。

「さつきからはしゃぎ過ぎでしゃべりすぎで煩いと思うんだ。…ちよつと邪魔だよ？」

『も、申し訳ござらん…少々、調子に乗り過ぎていたようでござる。本体フレームがみしみし言うような熱烈な握りしめをされなくとも、マスターの思いははつきり伝わってござる。っと言うかユルシテクダサイ』

「目立ちたいのは分かるけれど…気が散るから必要な時以外、静かにしてないと折…怒るよ？」

『Y…Yes, Master!!』
バルディッシュの口調が昔に戻っていた。

それだけでなく小刻みに震えているような気がする…フェイトが途中で不自然に言葉を切った時の文字が違っていた気がするのに関係があるのだろうか？

しかしフェイトは自分のデバイスの返答に満足したのか、それでいいんだよと呟きつつ前を見る…何故か啞然としたシグナムと目があつた。

「ごめん、待たせたねシグナム？」

「あ、ああ…いや、今来たところだ」

思わず待ち合わせの恋人みたいな返しをしてしまったシグナムに、首をかしげたフェイトだが、気を取り直してバルディッシュを構える時には、薄い笑みを浮かべていた。

それを見たシグナムが…何かまずい物の扉を開けてしまったような、やつちまった感を感じたのだが、それをフェイトが知る事は出来ない。

「行くよ、シグナム!!」

「こ、恋!否、来い!!」

シグナムの返事が上ずっていた。

再開された戦闘は、その激しさと規模を広げて行く。

「……………」

フェイトとシグナムの戦闘に、全員の目が奪われていた。

二人だけ、戦いのレベルが違う。

もし二人のうちどちらかが相手より劣っていれば、すでに数回は落とされているであろうレベルの接戦…このバランスを崩して、フェイトの不利になる事もありうるとなれば下手な援護も躊躇われる。しかも、本人達は周りに全く気を払っていないので、見ているだけでも物騒でしょうがない。

ついさっきも、シグナムの避けたプラズマスマッシュが流れ弾となり、仲間のはずの武装局員達のすぐ傍を通り過ぎ、あわてて回避するという一幕があった。

そんな二人の戦いが、戦場のだ真ん中で行われているとなれば、悠長に自分達の戦闘とはいかなくなるのは仕方のない事だろう。

「え〜っと、あの子すごいわね」

「ああ、我等の将と互角とはな」

武装局員達と同じ理由で傍観者に回っていると言うか、回らないわけにはいかないザフィーラとシャルが、二人の戦いに感心して

いる。

元からヴォルケンリッターの将として設定されたシグナムだが、同時に実力的にも将として十分な技量をもっているのだ。

その彼女と手加減なしに互角に戦っているフェイト…自分達の将が負けるとは思わないが、シグナムの言葉どおり、フェイトの技量は認めるべきだろう。

「それにしてもあの子、バトルジャンキーだったのね」

「ぐあ!!」

悲鳴とともにやたらと生々しい音が聞こえた気がするが…気のせいだろう。

「ああ、しかも魔王と同レベルになりつつあるな」

「のあ!!」

また聞こえた…どうも空耳じゃなかったらしいと見れば、orz状態のアルフだ。

「あ、あたしの…あたしの…フェイトが染められていく…いや、もう染められている?」

「…」

「あんなにいい子だったのに…」

なににそんなに絶望しているのかは知らないが、ダメージがでかそうなのは良く分かる。

「…事情はよく分からんが、頑張れ…アルフ」

「あんたに…あんたに何が分かるんだよ?」

ヤバイと言うか、ウザい感じにアルフがやさぐれている。

しかし、そんなアルフを見てもザフィーラは怯まない。

「相談には乗ると言っただろう? 何にショックを受けているかよく分からんが、そんな状態のお前を放っておけるか」

「ザフィーラ、あんた…」

アルフの目が潤んでいる。

それを見たザフィーラは頷きで返した…そこで頷きを返すのは正解なのか?

「…ねえザフィーラ？」

互いに見つめあい、フェイトとシグナム達とは違うタイプの二人の世界を作っている所に、シャマルが話しかけてきた…なんでそこでアルフが「何で邪魔するんだよテメー!？」と読み取れる不満そうな顔をするのだろうか？

「何だ？」

「貴方、前回からその人にフラグ立てまくっていない？狙ってるの？」

「…は？」

ザフィーラが何言っただという顔になり、理解できないという意味の言葉を漏らした。

「なにを言っただ？」

「な、何言っただかい？ザフィーラがあたしを狙ってるって？何やらアルフがあわてだした。」

しかも顔を赤くして挙動不審…おや？

「だ、大体だな、あたいたちは今戦ってるんだぞ？」
「だったら戦え。」

最後の一人になってガンダムオブガンダムにでもなるくらい。

「ば、馬鹿なこと言っただじゃないよ……!!」

アルフはにげだした。

「え？あれ？」

そしてザフィーラは残された。

「ひょっとして、自分がフラグを立てていた事に、全然気がついてなかったの？」

「……マジでか!？」

キャラに似合わない絶叫を上げるザフィーラ…ザフィーラのステータスに、鈍感主人公属性が追加されました。

ハーレム属性はない…っと言うか家に帰れば女の中に男が^{オス}一人状態なので必要ないだろう…多分…そしてアルフのステータスに、分かりやすいツンデレ属性が付加された。

「おお、シグナム達派手にやってんな」

戦闘の中心から離れた場所でヴィータが呟いた。

シグナムとフェイトの戦っている空域では、派手に爆発やら選考やらが起きている。

それを見るヴィータの視線に、若干ではあるがうらやまげなものが含まれている。

彼女も、その本質は騎士だ。

様々な制約と紆余曲折があつて望まぬ戦いの中にいはするが、基本的に己の力を存分に振るう事は望むところである。

それが実力の拮抗している相手となれば、それ以上言う事はない。「だってーのに…やれやれ、なんであたいはこんな奴があいてなんだ？」

ため息とともに前を見る。

そこにいるのはルビーを剣道の竹刀のように構えるアリシアだ。

「魔力は多いようだ…何で素人が戦場に出てんだよ？」

流石と言ふべきだろう。

放出される魔力はともかく、アリシアの体勢と重心、それとルビーを構えた姿から彼女が素人である事を見抜いたようだ。

しかも、周囲には二人以外の武装局員が一人もいない。

完全に一对一の決闘状態だ。

「が、頑張りますから…！」

「がんばりますって…」

この場合、どう答えればいいのだろうか？

自分を捕まえに来ている相手に、がんばってくれと言つわけにもいくまい。

「まあ、やるからには負けるわけにはいかねーんだけど…サポート

も無しに何が出来ると言うんだ？」

やはりヴィータは気が乗らないようだが、それも仕方があるまい：
基本的には手加減などは苦手そうなのヴィータだが、素人相手にベル
エッショナル
力の騎士が本気を出すわけにもいかないだろうくらいの常識は備えているはずだ。

『いいんですか？ヴィータちゃん？』

「あん？」

『油断していると後悔しますよ？』

億劫そうにグラーファイゼンを構えるヴィータだが、ルビーの言葉に視線がきつくなった。

「…お前何言ってるんだ？あたいをなめてんのかよ？」

『いえいえ…ただ、アリシアちゃんがなのはちゃんより“安全”かどうかは分からないって話ですよ』

「何だと？」

ヴィータが改めてアリシアを見る。

じっくり上から下まで、これが男だったなら視姦とか言われかねない。

見られているアリシアは、自分に向けられる視線に硬直しているようだが、ヴィータはお構いなしだ。

「…やっぱり素人じゃねえか」

見返して見て尚、ヴィータの判断にぶれはなかった。

どう見てもアリシアは素人だ。

戦闘どころか、まともに魔法を使えるかどうかも怪しい…ヴィータが油断出来ていたのはそこまでだった。

「い、行きます！！だ、大斬撃——！！」

「は？」

瞬間…世界が切れた。

否、世界がずれた。

アリシアがルビーを振るっただけで、ヴィータはあまりに緊張感のない掛け声と、自分の目が見た物が理解できずに呆ける。

「……」

何か嫌な予感を感じて、世界がずれた断面だった部分…自分の真横を見たヴィータが言葉を失う。

大地が切れていた。

砕くでも裂けるでもない。

純粹な意味で大地が切断され、直線上に存在する物は岩だろうが木だろうが関係なく、鏡面のような切断面を見せている。

切断面の端は刃として十分使えそうなほどに鋭い。

「ダメですよアリシアちゃん、大斬撃だとヴィータちゃんが真つ二つになっちゃいますよ〜」

「ご、ごめんなさい」

「この後で魔女っ子にスカウトするんですから気を付けてください〜」

やっと理解が追い付いてきたヴィータが真つ青になる。

「だから魔力弾に切り替えましょう。非殺傷設定なんて便利な物はありませんけど、きっとヴィータちゃんは生き残ってくれるはずですよ〜」

「なんだそりや!?!」

いくらヴィータでも焦る。

さっきの斬撃に、ヴィータは反応さえできなかったのだ。

この上、非殺傷設定がないなどと聞けば平常心ではいられない。

「お、お前!! ルビー!?!」

「なんですか?」

「さっき安全かどうか分からないと言ったな!?!」

アリシアがなのはより弱いとは言っていないのがネックだ。

「ええ、アリシアちゃんは先日魔術師になったばかりです。だから

…」

「だから?」

「手加減とか分からないんですよね〜」

手加減と言うのは技術である。

自分の持てる能力を完全に把握した上で、どの程度の力を出せば狙った結果が得られるかをイメージし、実行し、結果を出すという工程を経て初めて手加減と言うものは成立する。

なので、急に力を手に入れただけの素人であるアリシアには、なのはのような手加減が出来ない。

これが魔法ならば非殺傷設定と言うものがあるのだが、ルビーは礼装である。

しかも、技術が伴わなかつと魔力的に問題はないのが最悪だ。

結果として、アリシアの攻撃はなのはお得意の全力全開の一択しか残っていないため、常に最大レベルの攻撃がヴィータに向けて放たれる事になる。

「むちゃくちゃ危険じゃねえか!!」

子供に刃物や火を使わせるのと同じである。

『だーい丈夫ですよ』

「その根拠は何だ根拠はー!? 言ってみやがれ!!」

「なのは様の代わりにがんばります!!」

「がんばるな!! がんばり方を間違えてるぞお前!! あの魔王に代わりなんていてたまるか!! 世界が滅ぶぞ!!」

…そこまで言うか?

言ってる間にも、アリシアの頭上に魔力が集まり…多分ガンドのような属性の魔力弾が形成される。

「げ、元氣玉!?!」

『あはあゝ二度ネタはメ!ですよヴィータちゃん?』

因果は巡る…ヴィータは欠片も覚えていないので理不尽な事この上ないだろうが…。

「シグナム!?!」

「む?」

背後からの声に、思わず戦闘の手が止まる。

一騎打ちをしていたフェイトも声に驚いたらしく、動きが止まった。

この声は… ヴィータ？

「何だヴィータ、決闘の最中に無粋だぞ！！ やつと調子が出てきたと言っのに」

やはりこいつもバトルジャンキーのようだ。

最初はともかく、そろそろ純粋に戦闘を楽しみ始めている気配がある。

「良いから、こつち見やがれ！！」

「まったく、そんなに慌ててみっともない。何が… ってなんだそれは！？」

シグナムが叫んだ。

あの冷静で皆の頼れるお姉さんで劣化の将… もとい、烈火の将で凜としたクールビューティのシグナムが… ついさつき慌てるヴィータみっともないと言った張本人が… イメージを根こそぎ無視して大声で叫んだのだ。

ただしそれは、シグナムがどうこうでは無く、彼女が見た光景の方に問題がありまくりだったので責めるのは酷だろう。

「あれは、魔力弾か！？」

ただの魔力弾なら、いきなりとはいえシグナムが取り乱す事はなかっただろう… ただの魔力弾だったなら… 問題はその大きさだった。でかい… とにかくでかいのだ。

「助けてくれシグナム！！」

小さなビルくらいのでかさの魔力弾から、ヴィータが必死こいて逃げている… 自分の方に向かって… すなわち、特大の魔力弾が自分に向けて飛んできていると言う事だ。

「お前何で追いかけてるんだ！？ 元氣玉は悪い心を持った人間にしか向かわないんだぞ！？」

「そのネタはもう良いから！！ 逃げろ！！」

「フン、勘違いするなヴィータ！！ベルカの騎士に後退はない！！だが、後ろに向けての前進はある！！」

「全くその通りだぜシグナム、こりゃ一本取られたな！！」

「あははっははー！！！！」

シグナムはこんらんしている。

ヴィータはこんらんしている。

盛大にメダパニっているようだ。

「では行くぞ！！」

「オウヨ！！後ろに向かってダツシュだ！！」

シグナムはにげだした。

ヴィータはにげだした。

「ザフィーラ！！」

「シャマル！！」

「む、シグナムにヴィータ…ってなんじゃそら！？」

「まさかそれが伝説の元氣玉なの！？」

「そのネタはもう良い！！」

天井も流石に三回はやり過ぎだ…あれ、四回か？

「迎撃する！！」

「わ、わかった！！」

「やーってやるぜ！！」

シグナムのレヴァンティンとヴィータのグラーファイゼンから連続してカートリッジが排出される。

その隣で、ザフィーラの前方に銀のベルカ式魔法陣が展開された。

「縛れ！！鋼の軛、てりやああああ！！」

魔法陣から飛び出した銀の鎖が魔力弾を拘束する。

「くっ、何と言う馬鹿げた魔力、抑えきれんのか！？」

みしりみしりと鎖が悲鳴を上げる。

それでも迫ってくる魔力弾の動きは止まらない。

「シュランゲバイセン！！」

『Schlange bei?en』

シグナムのレヴァンティンが連結刃状態になり、鋼の軛に捕らわれた魔力弾を更に拘束する。

「このまま押しつぶしてやる！！ヴィータ！！」

「おうさ！！ギガントフォーム！！」

グラーファイゼンの部品が組み換わり、巨大なハンマー状になったかと思えば巨大化した。

「ギガントシュラク！！光になれやーーーー！！」

『Gigant schlag』

グラーファイゼンが迫ってくる魔力弾にカウンターで叩き込まれる。

破壊力だけは文句なく最強ではある。

高速で動く物にはあてづらいのが玉に傷の技だが、シグナムとザフィーラによって速度を落としていた魔力弾は絶好球だった。

ヴィータの言葉通り、魔力弾は光る魔力になって霧散する。

「……」

何とか窮地を脱する事が出来たが、ヴォルケンリッター達の顔色はすぐれない。

「…ヴィータ、後何発だ？」

「ゼロだ。全部使っちゃった」

「私の魔力も、大分もって行かれた」

ヴィータとザフィーラの返答に、シグナムは頷きで返した。
シグナムの状態も似たようなものだ。

「シヤマル…」

「ごめんなさい。予備のカートリッジは皆に渡した分しか…」
「……」

どうやら、全員のカートリッジが切れたようだ。

ただしそれが間違いだったか？と言われれば否と答えるだろう。

カートリッジを使い切らなければならない状況だったし、それほどの代償を支払わなければ回避不能な状況でもあった。

しかし……その後が続かない。

すでに自分達は、管理局員達に包囲されている。

本人の魔力で戦う事は可能だが…この数の差を覆すことが可能かと言われると難しい…結局のところ、数は力なのである。

「…投降してください」

そんなシグナム達の状況を勘づいているのだろう。

フェイトが降服勧告をしてきた。

一気に攻め込めば勝敗が決してしまいそうな状況で…それでも最後の勧告をするあたりを彼女の優しさと言うべきか甘さと言うべきだろうかと考え…シグナムは独断と偏見で優しさだろうと判断する。

そちらの方が色々と気分がいいからだが…。

「悪いが、その申し出は断らせてもらう」

たとえ不利であろうと、追い込まれていようと曲げられない物がある。

主はやての事は、間違いなく曲げられない事だ。

「そう…ですか…」

フェイトも、シグナムの返答は予想していたはずなのに顔を歪めて苦しそうな表情を作っている。

これも彼女の優しさか…だが、それとこれとは話が違う。

バルディッシュを構えるフェイトとルビーを構えるアリシアを見て、シグナム達も構える。

一見して手詰まりな状態だが、突破口がないわけでもない。

魔力はあるのだ。

「シヤマル…最悪の場合、闇の書の魔力を解放する準備をしておけ」

「おいシグナム…」

「ヴィータ、他に方法がないんだ」

せっかく集まった魔力を開放するという事は、闇の書の完成が遅れると言う事、そして被害者を増やすと言う事、本来蒐集されるはずではなかった誰かが、運悪く被害にあうと言う事だ。

「ここで、捕まるわけにはいかないんだ」

「…分かったわ」

シヤマルが闇の書を取り出して構える。

それを見た管理局員達が、ヴォルケンリッター達に殺到した。

「え？」

その一音は…誰の口から洩れた音だっただろうか？

言葉にすらならないそれは、考えて発された物では無い。

むしろ無心、あるいは空白…思考停止した思考が、反射的に漏らした疑問符だ。

いつの間にか、アリシアの背後に今までいなかった人物が現れていたが…この場の全員が目を離せないのはいきなり現われた男では無く、アリシアの方だ。

人間には当然ではあるが手足が二本ずつ付いている…決して三本目の手などと言うものは存在しないし、アリシアにそんな物があつたわけでもない。

…なのに何故？

アリシアの胸から、三本目の腕が生えているのだろうか？

そして何故…その手はアリシアのリンカーコアを掴んでいるのだろうか？

あまりにも現実離れた光景が世界を停止させる。

第十二話 w a k e u p

人間には限界がある。

あまりにもひどい怪我、理不尽、驚愕に直面したとき、脳には自我を守るために思考の一部を放棄、あるいは麻痺させる機能が備わっている。

年端もいかない少女…アリシアの背中から入った腕が胸を貫いている光景は、初対面のヴォルケンリッター達諸共、この場にいる全員を思考停止させるのに十分な衝撃だった。

「アリシア!!」

驚きから一番早く正気に戻ったフェイトの叫びで硬直が解け、凍った時が流れ出す。

「おねえ、ちゃん？」

「え？ア、アリシア？」

それは二重の驚きだった。

苦しそうではあるが、はつきりと聞き取れる返事が返って来た事に、安堵よりむしろ驚愕の声が漏れる。

胸を貫かれた状態、明らかに即死に見えるのに…アリシアは生きている？

それどころか、意識まであるようだ。

「…動くな」

「つつ!？」

とつさにアリシアの元に行こうとしたフェイトだが、制止の声に動きを止めざるを得なかった。

アリシアの姿があまりにもショッキング過ぎて、そこにばかり目が行って気がつかなかったが…アリシアの後ろに誰がいる。

仮面をつけた男…そしてその立ち位置からして、間違いなくアリシアを貫いている腕の持ち主だろう。

「この娘がどうなってもいいのか？」

「う…」

フェイトだけでなく、この場にいる全員が従うしかなかった。

アリシアは生きている…しかし、男の手は相変わらずアリシアを貫いたままで、その手の中には彼女のリンカーコア…完全にアリシアを人質に取られた形で、下手な事は出来ない。

「アリシアを…離せ…」

だれもが初めて見る…フェイトの明確な憎しみが男に向けられている。

彼女も今の状況が分かっているわけではないが、湧き上がる衝動と怒りの感情を御しきれていない。

普段、いくら冷静に見えても、彼女もまた十にもならない子供なのだ。

家族の命を人質に取られて、それでも冷静でいられるほどの感情制御を求める方が無茶である。

「落ちてテスタロッサ!!」

飛び出そうとするフェイトの肩に手を置いて止めたのはシグナムだ。フェイトの相手をシグナムがしていたのは僥倖だった…他の誰かがフェイトのストッパーになれたとは思えない。

「貴様…どう言ってもりだ？」

しかし、だからと言ってシグナムが冷淡かと言えば……そうでもない。

ヴォルケンリッターの将として、常に冷静な彼女だが、その本質はむしろ彼女の属性である炎に近く、同時に誇り高い騎士のそれでもある。

そんなシグナムが、背後からの完全な不意打ち、しかも年端もいかない子供を狙った行為に対してどんな感情を持つかは、言葉以上にそのスカイブルーの瞳が語っている。

むしろ男に向ける視線には、十分すぎるほどの敵意が内包されている。

しかもそれはシグナムだけに限ったことでは無く、他のヴォルケ

ンリッター達も似たような厳しい視線を男に向けている。

「窮地を救ってやったただけだ」

「それに関しては…感謝しよう。ならばその少女はもう不要だろう？解放してやれロツ…」

「その名を呼ぶな！！」

「くっあ…」

感情が高ぶったのか…それとも脅しの為に態とやったのか…アリシアのリンカーコアを持つ手に力が籠ったらしく、アリシアが苦悶の声を上げる。

「アリシア！！」

「テストロツサ、こらえろ！！」

もはや肩に手を置くだけでは止められないと、シグナムがフェイトを羽交い締めにする。

ここで彼女を止めなければ、最悪の結果すらありうるのだ。

「チツ…余計な事をしゃべるな」

「くっ…」

仮面で表情は読めない物の、忌々しげな男の言葉に、シグナムは悔しげに黙るしかなかった。

アリシアのリンカーコアは、奴の手に握られているのだ。

これ以上刺激するわけにはいかない。

「そして、お前もだくそ杖、こっそりチャンスが来るのを待っているのだから、お前がそこにいる限り油断はしない」

『…迂闊でしたね〜ルビーちゃん大失敗です〜』

だらりと脱力していたアリシアの手から、ルビーが抜け出して自立飛行で浮かぶ。

男の言う通り、アリシアを助ける隙を窺っていたのだろうが、とっくに見抜かれていたらしい。

『まさかこのタイミングで介入してくるなんて…ルビーちゃん一生の不覚ですよ〜』

「……」

何時も通りの口調を崩さないのは、ルビーなりの強がりだろうか？
男が無言で空いた手をルビーに向けると、複数のバインドが展開されるが、当然ルビーは抵抗どころか身動きすらしない。

されるがままに空中に磔にされる。

流石のルビーも、魔力を封じるバインドに拘束された状態では何もできない。

『用意周到ですね〜？』

「…お前が一番邪魔だったからな」

『あはあ〜ルビーちゃんの人気者〜』

男の言葉は本音だろう。

会話の内容から両者が初対面では無いのが窺い知れるし、それならばルビーの脅威を知っていてもおかしくない。

アリシアを人質にしたのも、本命はルビーに対する抑止力と言う可能性もある。

『でも〜少し迂闊じゃないんですか？そんな恰好でルビーちゃんの目の前に現れるなんて〜ねえ、“猫”さん？』

“猫”と呼ばれ、男が苦々しく、苛立たしげにあからさまな舌打ちをする。

ルビーもルビーで、こんな状況でありながら何時も通りの口調だ……しかし、言葉の中に含まれている何かがその怒り様を感じさせる。

「魔力の質で個人を判別するお前には無意味だろう？」

確かに、魔力で個人を特定できるならば、外見がどうであれ意味はあるまい。

『でも〜このタイミングで現れたおかげで、ルビーちゃんには夜天の書の主が誰なのか分かつちやいましたよ？』

「……っ！」「……」

男だけでは無く、ヴォルケンリッター達も同様に息をのむのだった。

ルビーの言った事は、男よりむしろ彼女達にとって聞き捨てならないことなのは間違いない。

『ちょっと迂闊でしたね、彼女が主なんでしょう？書の主はやが…』
「それ以上しゃべるな!!」

いきなり、光と怒声が降って来た。

ルビーと男の会話に集中していた所に、完全な不意打ちだ。

だれ一人として反応できない…光が砲撃魔法だと理解できたのは、光が通り過ぎた後にルビーの姿がなく、地面に大きな爆発とともにクレーターが出来ていたからだ。

「…しゃべり過ぎだ。奴のペースにのせられるな」

「す、すまない…」

やっと状況把握が現実を追いついた一同が空を見上げる。

声の主はすぐに見つかった…っと言うより、最初から隠れる気はなかったのだろう。

堂々と、自分より低い位置にいる全員を見下ろしている…仮面のスリットから…。

「な!？」

「もう一人…だと?」

そこにいたのは、やはり男だった。

アリシアを人質にしている男と同じ仮面をかぶり、着ている服や姿勢、好みもそっくりだ。

一人でも厄介な事になっていると言うのに、正体不明の怪人物がもう一人…奴がルビーを打ち落とした張本人に間違いあるまい。

『私は時空管理局所属艦、アースラ艦長のリンディ・ハラオウンです』

空間に投影されたウィンドウが開き、映ったのはリンディだ。

アースラからこの状況を見て、あわてて通信をつなげて来たのだろう。

この状況は、子供や一般局員に任せるには荷が重い。

『貴方達の目的はなんですか?』

法律的看着て、男達の行動は公務執行妨害に加えてアリシアの傷害・拉致監禁に当たる。

次元間を移動できるような力を持つ魔導師が、時空管理局も管理局法も知らないと言う事はないだろう。

いきなり魔導師になったなとは違う。

故に、こんな大それた事をする目的があるはずだがしかし、男達は自分達に話しかけているリンディを無視して、シグナムを見ている。

「…蒐集しろ」

「……何だと？」

「ここにいる連中から、魔力を蒐集しろと言っている」

理解できなかったわけでも、聞こえなかったわけでもないが、思わず疑問符で返してしまったシグナムに、より具体的な言葉で返してきた。

「主を救いたいのだろうか？何を躊躇する事がある？」

「……」

それを持ち出されると痛い。

主の限界に近いのは事実だし、フェイトは勿論、アリシアだって魔法は素人だが、その内包する魔力が強大なのは、先ほどの魔力弾を見ても明らかだ。

この場にいる全員から魔力を蒐集すれば、かなりのページを埋められるだろう。

蒐集する相手として、申し分はない…申し分はないが…。

「その子の人質に…蒐集しろと言うのか？」

ギシリと、噛み合わせた上下の歯が軋む。

言葉に出来ない怒りがシグナムの中を駆け抜けていった。

「フザケンナ手前！！」

そしてそれはシグナムだけの感情では無いらしい。

元々沸点の低いヴィータは、一瞬で自製の限界を超えた。

「離せ、離せよザフィーラ！！シャマル！！」

「こらえるヴィータ！！」

「そうよ。シグナムが何故フェイトちゃんを押さえているのか考えなさい！！」

もはや問答無用と飛び出そうとしているヴィータを押さえているザフィーラとシャマルに、心の中で感謝する。

『シグナムさん、彼等は貴方達の仲間では無いのですか？』

両者の相対に疑問を感じたのだろう…。むしろ疑問を感じない方がどうかしているが…。リンディはとりあえず話が通じそうなシグナムに聞いてきた。

「…この状況では説得力はあるまいが、我等の仲間では無い。一度救われているが、ロツ…あの男が何を考えて行動しているかは分からない」

『……』

映像越しに、リンディの戸惑いが伝わってくる。

奴等の行動は、明らかにヴォルケンリッターに与する物ではあるが、かと言って仲間と言うわけでもないらしいときた。

下手にアドリブを利かせるためには、アリシアと言うリスクがかすぎるため、対応を決めかねているのだろう。

「どうした？人間では無い魔導生物が、ヒューマニズムにでも目覚めたか？」

「くっ…」

シグナムだけでなく、ヴォルケンリッターの四人全員が顔をしかめた。

分かりやすい嘲りと挑発だが、言われて気分のいいものではない。それならば、蒐集する理由を作ってやろう」

「う…ああ…」

「見境なしに貴様！！」

アリシアの顔が苦悶に歪むのを見たシグナムが怒鳴る。

連中は…アリシアを使って時空管理局だけでなくシグナム達まで

脅迫し始めたのだ…その強引さに、あるいは連中も、何か追い詰められている事情があるのかもしれないとは思うがしかし、どんな事情であれ考慮する余裕などないし、これだけの事をされては考慮する気もない。

「我々がこのまま蒐集をせず、逃げ出すと言ったら…どうする？」
「それはつまり、この子供を見捨てると言う事だな？」
「……」

ロッテ達が、本気でアリシアを害する気があるのかどうか、仮面に表情が隠れていて本気かどうかを測りかねる。

「…シャマル？」

「おい、シグナム!!」

シグナムが何を言いたいのか理解したのだろう。
ヴィータが声を荒げる。

「本気か！？本気で連中の口車に乗るのかよ！？ぜってえ裏があるぞ!!」

「そんな事は分かっている」

ヴィータでさえ気づく事に、シグナムが思い至らないわけがない。

「だが、彼女の命を博打に使うわけにもいかないだろう？」

敵対する組織の人間だと切り捨てるのは簡単だ。

シグナム達自身、過去の主達の元で多くの敵を屠って来たが、これはそれとは全くの別物だ。

何よりアリシアの命を保証する方法は提示されているのに見捨てたとしたら、はやてに会わせる顔がない。

「シグナム…」

「すまないテストロッサ…私達も望むところでは無いが、ここはこらえてくれ…彼女の命は保証する」

「……はい」

フェイトも渋々ながら頷いてくれた。

『大丈夫なんですか？』

硬い表情のまま、リンディがシグナムに質問する。

この場の責任者として蒐集は止めなければならない、しかし同時にアリシアを見捨てることも出来ない彼女の心情と立場を考えれば、内心の苦悩は自分達以上だろう。

それでも邪魔をする指令を出さないと言う事は、アリシアの命を優先したか…。

「一度蒐集すれば、同じ人間から二度の蒐集は出来ないのは知つての通りだ。加減をすれば、しばらく魔法が使えなくなるだけで済む」
何より、アリシアのストレスを考えるとこの状況のまま時間をかけるのは得策では無い。

肉体的に無事でも、トラウマや心的外傷を負う危険もあるのだ。

「シャル、やれ」

「…わかったわ」

シグナムやリンディの内心の葛藤を理解しているシャルは素直に従った。

闇の書を開き、蒐集の準備を始める。

「話はついたようだな、まずはこの子からだ」

そう言うと、ロットはアリシアのリンカーコアを差し出して来る。
一瞬、シャルの表情が歪んだが、深呼吸をして気を落ち着けると蒐集を開始した。

「うつ…」

自分の中から魔力を持って行かれるのが分かるのか、アリシアがうめいた。

それをこの場にいる全員で見ている事しかできない…未だアリシアのリンカーコアはロットに握られたままなのだ。

「この子…すごい魔力…ってえ？何これ？」

「どうしたシャル！？」

驚きで声を上げたシャルに、何事が起こったかとヴィータが声をかける。

しかし、シャルの方はそれどころじゃないらしく、闇の書を見て唖然としているだけで、反応が返ってこない。

「完成…した？」

「は？」

「完成…したの…」

何がと言う言葉が続かない。

この場にいる誰もが、シャマルの言葉の意味を本能的に理解し、まさかと言う思いがそれを否定する。

全員が、その最悪の予想に目を背けたいと思っただろう。

「闇の書が…完成したの…」

淡い現実逃避は、シャマルの決定的な断言に切り裂かれる。

『…しまった！！』

モニターの先で、何が起こったのかを正確に理解したリンディが叫ぶと同時に、闇の書から膨大な魔力があふれ出した。

「そんな…闇の書が…完成した？」

「うそ、まだ半分くらい残っていたのに…一気にそれが埋まったって言うの？」

信じられないという言葉は、ほかならぬ男達から洩れたものだった。

彼等にとっても、この状況は予想外だったらしい。

たった一人の魔力を蒐集するだけのはずが、S級魔導師数人分の魔力を持っていたなどと…彼等は知らなかったのだ。

そのたった一人が、世界を滅ぼすほどの魔力を持つ石…ジュエルシード20個分の魔力を内包していたなどとは…魔力量だけならば、なのはすらも足元に及ばない魔力の保有者だったなどとは…。

「…早すぎる…」これじゃ…」

「アリシア！！」

「がっ！？しまった！？」

予想外の状況を前にして、茫然としてしまうのは男達も変わらな

い。

そして今度は男達がその隙を衝かれる番だった。

完成した闇の書に目を奪われている間に、文字通り雷光の速さで動いたフェイトがアリシアを掴み、離脱したのだ。

「人質が！！」

「放っておきなさい！！それよりも闇の書が！！」

全員の視線の集まる場所…闇の書がその名にふさわしい黒い魔力を放出していた。

魔力が物理的な風となり、竜巻のように吹き荒れる。

気を抜けば、木の葉のように吹き飛ばされてしまいそうだ。

「きゃあ！！」

あまりにも魔力の勢いが強すぎて、闇の書を持っていたシャマルが後方にはじき飛ばされた。

それでも尚、空中にとどまり続けている闇の書の下に、銀のベル方式魔法陣が展開される。

「まずい、転移魔法だ！！」

「主の元に飛ぶつもりか！？」

完全となった道具が、己のあるべき場所…主の元に向かおうとしているのだ。

「待て！！」

言葉は何時だって、現実に対して無力だ。
闇の書の展開した転移魔法陣が発動する。

「あう、ア、アリサちゃん…気持ちいの…」

「フフフ、ここ？ここがいいんでしょう？」

「そうなの、なのは…恥ずかしいよ」

「さあ、もっと柔らかくしてあげるわ」

「甘く語りかけたアリサは、潤んだなのは青い果実にねぶるよう

に手をかけ…「なのは…」、「アリサお姉さま…」っと…ハアハア」
「言つてない!!」

はやての勝手なナレーションになのはとアリサが二人で一つのW
突っ込みを入れた。

ちなみに二人共ちゃんと服を着ていて、ピンク色な空気は欠片も
ない。

「蹴るって何よ蹴るって!! あんた友達で何妄想してるのよ!!」

怒りが振りきれているのか、アリサがはやての襟首を掴んで怒鳴
りつける。

「いやゝ二人のやり取りがあんまりにも色っぽくてなゝ」

この女、全然悪びれてねえ…友人の定義ってなんだっけ?

少なくとも、それっぽい台詞に官能小説のようなナレーションを
つける奴を友達とは言うまい。

「ええゝシヤマ…ゴホンゴホン、知り合いのお姉さんの購読してい
る雑誌じゃゝこんくらいは卑猥にはあたらんよ?」

女性週刊誌だろうか?

女性向けの雑誌と言うのは時々、成年男子向けのそれより露骨だ
ったりするが…はやてだったらそう言うのを読んでいても驚くに値
しない気はする。

むしろ嬉々として、興味津々で読みふけていそうな光景が簡単
に想像できる十歳児だ…って言うか、そんな本を子供の目の届く所
に置く大人の女もどうだろうかと思う。

あるいは一緒になって読んでないだろうか?

「って言うかな、アリサちゃん? 仲直りのお詫びがマッサージって
それ、小学三年生の発想じゃないやろ?」

「い、いいじゃない!! なのはの筋肉痛が再発したのは私達の責任
だし、マッサージは得意なんだから!!」

マッサージが得意な小学三年生…アリサ・バニングス…微妙な力
ミングアウトだが、本人もちょっと恥ずかしいのか顔が赤かったり
する。

「えゝ？でも、アリサちゃん、とっても上手だったのゝ気持ちよかつたゝゝ」

「よっしゃ！！なのはちゃんの天然ボケーー！！」付きでいただきました！御馳走さま！！」

「お、お粗末さまでしたと言えいいのかな？」

それはちよつと違うと思うぞ高町なのは？

後、テンションたけーな八神はやて…血管切れるぞ？

同性だけで集まると、いろいろなタガが外れるのはなにも大人だけでは無いようだ。

「ありがとうねアリサちゃん。大分体が軽くなつたよゝ」

「ふ、ふん！だ、だからって容赦しないんだからね、ちゃんと事情は聞くんだから」

「に、にやはははゝお手柔らかにね」

アリサのツンデレな物言いに、なのはは苦笑するしかなかった。

これ以上嘘をつき続けるのは限界なので、なのははアリサとはやてに全てを打ち明ける覚悟を決めている…なのははだけならば、今この場で打ち明けてもいいのだが…しかし事はなのははだけの問題ですまないのが問題だ。

アリサとはやては、間違いなくフェイトとすずかの事情も聞くだろう。

特にすずか…主に彼女の体質の事などは、なのはの口から打ち明けるわけにはいかない。

最低でも打ち合わせをしたうえでなければ…そんな諸々の理由から、とりあえず二人から執行猶予をもらっている状態だったりする。

「そつえばアリサちゃん？もうそろそろ夜も遅いし、お家の人が心配しているんじゃないの？」

窓の外を見れば、すでに日は暮れて、空には星が光っている。

小学三年生の子供が出歩く時間じゃない。

「大丈夫よ」

「にゃ？」

「ちゃんとなのはの家に泊まるって言ってるから」

「き、聞いてないよ？」

「うちも、今日は家にだれもおらんしな」

「あれ？はやてちゃん一人暮らしだったんじゃ？」

「え？あ、ああ」

妙に分かりやすく、はやてがキョドリ始めた。

何か墓穴を掘ったらしいが、なのはもアリサも理由がよく分からないのでキョトンとするしかない。

「え、えつと」お手伝いさん！お手伝いさんがおらん言う事よ」

「お手伝いさん？」

はやての様子があからさまにおかしい。

心当たりがないでもない。

おそらく例のクリスマス関係だろう…当日が近づくにつれて脇が尚の事甘くなっているのかもしれない…あまり追求しないのが優しいのか？

はやての挙動不審ぶりと何を隠しているのかは気になるが、なのはも人の事を言えた義理では無いし、どうせあと数日でXデーだ。クリスマス

「そ、そうなんよ。ほ、ほらなのはちゃんちゃんとお泊まりセツトも用意しているで」

「用意周到だね！？」

はやての誤魔化し方がへたくそ過ぎる点は置いておいて、どうもこの二人、最初から事情を聞きだすまで帰る気はなく、いざとなれば泊まり込む気だったらしい。

この分だとなのはの家族も了承済みだろう…妙に荷物が多いので気にはなっていたが、アリサ達の追及に押されて聞くタイミングを失っていた。

「ちゃんとお菓子も用意してきたんやで」

「にやはは〜気配り上手さんだね」

「三人一緒に成長しようやないか…横にな…！」

「最後の一言が余計すぎ…！」

「にやはは」

はやてのボケにアリサが突っ込み、なのはが笑う。

どうやらなし崩し的にパジャマパーティになりそうだ。

考えれば、こういうのも久しぶりかもしれない…せっかく休みをもらっているのだし、こうやって友人たちと過ごすのも悪くないとなのはは思ったが…運命の神様に愛されている少女の、トラブルエスカウント率はとんでもなく高い。

『なのは様!!』

「「「え?」」」

三人のうちの誰でもない…いきなり響いた四人目の声に、少女達の驚きの声が重なった。

「だ、誰?」

「電話か何かかいな?」

「レイジングハート、どうしたの!?!」

ただし、そのうちなのはだけは驚きの意味が違っている。

驚く二人の友人を無視して、机の上に置いてあった赤い玉を手にとったなのはが問いかける。

自分と呼んだ声は間違いなく彼女のデバイス、レイジングハートの物…念話では無く、音声でなのはの名前を呼んだと言う事は、それだけ切羽詰った何かが起こった事を示している。

しかも否応なく、言い訳もごまかしも効かないレベルでアリサとはやてを巻き込んでしまう事が確定してしまう緊急事態、そのくらいでなければレイジングハートがアリサとはやての前でしゃべるはずがない事を、なのはは正しく理解していた。

『何者かが、この場所にピンポイントで転移してこようとしています!!』

「転移!? 誰か分かる!?!」

『特定するより転移が完了してしまう方が早いと思われれます!!』

自分の目で見て確認する方が早いと言う事らしい。

妨害も二人を逃がす事も無理か。

「な、なのは…誰と話しているの？」

「そ、その赤い球から声が出ているような気がするんやけど？」

アリサとはやてが状況について来れていない。

疑問に答えている時間もないと判断したなのは、自分に強化の魔術を使うと、茫然としている二人を引き寄せてベッドの上に放り投げる。

「キャー！！」

「な、何するんやなのはちゃん！？」

抗議の声にかまっている時間すら惜しい。

すでに部屋の中には、なのはでも感じる事が出来るほどの魔力が発生している。

物理的な影響まで及ぼし始めた魔力が風となり、部屋の中を荒れ狂う。

「レイジングハート！」

『プロテクション、展開します』

自分と背後の二人を守るため、なのはの前にプロテクションが展開される。

アリサとはやてが目を丸くして息を飲んだのが、背を向けていても感じられたが、なのはの方には構っていられるだけの余裕がない。

「な、何よこれ？」

「なのはちゃん、何が起こっているん？」

二人の言葉を見無視して、なのはがレイジングハートを構える。

「レイジングハート、セットアップ！！」

『承知しました』

待機状態のレイジングハートから桃色の光が放たれ、なのはの体を白いバリアジャケットが覆う。

目の前で変身を見られてしまったが…仕方がない。

即座にレイジングハートを砲撃モードに変更し、何時でも撃てる状態で待機させる。

「な、なのは？」

「あれは、デバイスか？なのはちゃんも魔導師？って事はこれは魔法なんか？」

「え？」

「今何か…背後のはやてが聞き捨てならない事を言わなかったか？」

『なのは様、来ます』

「は、はい！！」

思わず背後に振り返ろうとしたが、レイジングハートの声に前に向き直る。

疑問は後で問いただせるのだから、今は目の前の事に対処しよう。

「…ベル力式の魔法陣？」

部屋の中で光を放ちつつ回転しているのは、以前ヴィータ達と接触した時に見たのと同じ物、中心に三角形を置く銀の魔法陣だ。

「あれは…」

魔法陣の中心から何かが浮き上がって来た。

出てきた物は一見して本、しかもその意匠には見覚えがある。

「夜天の書！？」

「闇の書！？」

「…え？」

思わず叫んでから、一瞬の沈黙を経てなのはは今度こそ背後を振り返る。

そこには、はやてがおそろくなのと同じ驚きの表情で見返してきていた。

「はやてちゃん？」

「なのはちゃん？」

とつさに何を言えればいいのか、なのはには分からなかった。はやてもそれは同じらしい。

互いに二の句が出てこない。

『なのは様、気を付けてください！！』

「っ！！」

レイジングハートに言われ、あわてて構えなおすが、その頭の中

では一つの仮説が組みあがって行く。

今この場で起こっている事が魔法による物だと理解できる。

尚且つ、バリアジアケット姿になったなのはを魔導師だと断定出来た。

そして夜天の書を見ただけで闇の書と判別できる人物…魔法のないこの世界で、それら全ての条件を満たすような人物は、なのはのようないレギュラーを除けばおそらく…一人しかいない。

「まさか、はやてちゃんか？」

「まさか」をつけたのは余計だっただろう。

ここまでくれば断言できる…今代の夜天の書の主は、自分の後ろにいるはやてだ。

「こんなに近くにいたなんて…」

ため息の一つも吐きたくなる。

ずつとお話したり、遊んだりしていた相手が探していた人物だったとは…まるで幸せの青い鳥のようだ。

探索に出ているフェイト達の脇をすり抜けて、夜天の書とその主がなのはの目の前でそろそろなど、どれだけの皮肉が効いているのだろうか？

『なのは様、夜天の書と共に、大きな質量が転移してきます』

「え？あれは…手？」

魔法陣から抜け出してきた夜天の書の下部を、誰かの手が掴んでいる。

「離せヴィータ、このままではお前まで巻き込まれるぞ！！」

「やなこった！！シグナムこそ意地でも離すんじゃねえぞ！！」

しかも、何やら聞き覚えのある声まで聞こえてきた。

「「え？」」

疑問の声が二つ重なる。

「い、今の声は…」

「まさか…」

これまた、声に聴き覚えがあるのはなのはだけじゃないらしい。

はやても吃驚しているのが振り返らなくても分かる。

やがて、アリサも合わせた三人が見ている前で、まるで烏賊釣りのように人間が書に釣りあげられてくる光景には、流石に目を丸くした。

「シ、シグナム？ ヴィータやシャル、ザフィーラまで、一体何しとんの！？」

「……」

なのはは思わず天を仰ぐ。

仰いだところで、見えるのは見知らなくない自分の部屋の天井……今日の星座占いを見そこねてしまったが、魚座はきつと最下位に違いない。

「あ、主はやて……！」

「はやてちゃん！？」

「うお、なんで大魔王までいるんだよ！？」

「……」

認めたくない現実を直視させてくれたヴォルケンリッター達にありがとう。

そしてヴィータに関しては特に、後でちょっと大魔王とは誰かをじっくり問いただそうと心に誓う。

何でザフィーラが犬モードで腹を見せているのかも含めて……その「いじめないでネ」な視線を見ていると……意味もなくちよつと泣きたくなつて来るのでやめてほしい。

「こ、ここは……」

「し、しまった。私達まで」

更に、何やら見覚えのある仮面男二名のおまけまでついてきた。

一人部屋であるなのはの部屋の人口密度は、たった数秒の内にとんでもなく跳ね上がっている。

「どうしたなのは！？」

「大丈夫なの！？」

しかも、帰宅していた高町家の武闘派メンバーまで、駆けつけて

きた。

おそらく異常を感じてきてくれたのだろうか…扉をけ破りながら物騒な小太刀を手に乱入してきたらいくらなんでもびっくりするだろう？

「にゃー！？」

「なのは…この人たちは誰だい？」

「え？」

一瞬のうちに自分の部屋がとんでもないことになり、頭真っ白で悲鳴を上げたなのはだが、土郎の言葉に正気に戻る。

見れば…土郎だけでは無い。

恭也と美由希も小太刀を構え、ヴォルケンリッターの四人を警戒している。

剣士の本能が四人の脅威を感じ取ったらしく、すでに戦闘モードだ。

「なんだ？お前ら？」

そして、ヴォルケンリッター達もやはり、三人の実力を見抜いたらしく戦士の顔になる。

友人と三人にぎやかにお泊まりの話をしていたなのはの部屋は、

一瞬で戦闘のこう着状態が成立していた。

「えっと、なんだか知らないけど、いきなりなのはの部屋でなし崩しの最終局面に突入したような気がするの？」

『おそらく、なのは様の思ってたらしやる通りかと…』

とうとう、自分の部屋で世界をかけた戦いがクライマックスを迎えるまでになってしまったらしい…運のなさと言つか巻き込まれ方もここに極まれりだろう。

もはや自分の部屋ですら、安息の場所では無くなったのだな〜となのはのどこかで諦めのスイッチが入った。

「アリシア、大丈夫!？」

闇の書と共にヴォルケンリッターに加えて男達までいなくなった世界で、フェイトは脱力した妹に呼びかけていた。

「う、うん…大丈夫だよ。フェイトお姉ちゃん」

弱弱しいながらも返事が返って来た事に、フェイトがほっとする。
「よかった…」

蒐集された時にはどうなるかと思ったが、いきなりアリシアがどうにかなるような危険はないようだ。ジュエルシード二十個分の魔力は伊達ではなかったらしい…となると、問題はもう一つの方だ。
「師匠、大丈夫ですか!？」

ザックザクと言う音を立てているのはさすがだ。

夜では無く昼間、しかも高低差のない場所で、空を飛べないすずかは不利だとアースラに残っていたのだが、ヴォルケンリッターと男達がいなくなったことで転移して来ていた。

そんな彼女が何をしているのかと言えば、両手に三本ずつの計六本の黒鍵を使い、モグラのように地面を掘り返している。

ルビーが生き埋めにされたあたりの地面だ。

大分深く、しかも完全に埋まっているようで、ルビーの姿はまだ見えない。

「あはあ~~~~~!!」

「師匠!!」

聞き覚えのある笑いに、すずかが笑みを浮かべる。

やはりと言うべきか当然と言うべきか無事だったようだ。

「あはあ~~~~はははははははは!!」

「え？」

聞き覚えのない笑い方に变化した。

今までの経験から、とつさに掘り返すのをやめたすずかが背後に飛んだ直後、地面が割り砕かれ…まさに割り砕くという感じで爆発した地面の下から、見覚えのある杖が飛び出して来る。

「やあってくれるじゃないですか~~~~あの毛むくじらの愛玩動

物共~~~~!!」

初めて見る反応だが、ルビーは怒っている…のか？

何時になく、放出される魔力がどす黒い。

フェイトにすずか、アリシアまでちょっといつもと違うルビーに引き気味だ。

『あはあ~~~~~はははっはっはあ~~~~!!』

何か……とんでもなくやばい物が目を覚ましてしまったかもしれない。

第十二話 w a k e u p（後書き）

安西先生：ギャグが書きたいです。

具体的には、全編ネタで構成された話が：シリアスはここで大体終わり何で本来のギャグ路線に戻る：はずだよな？

問題は来週、お盆に突入するってことですな。

まあ本職さんのお盆前ラッシュにはかなわんでしょうが、夏コミ参加してーな。これが地方都市の悲しさか？

第十三話 Ideal - selection sacrifice

いきなり自分の部屋に転移して来て、ふよふよと飛びながらはやての手の中に納まった闇の書を見ながら、なのはは嫌な汗が流れるのを感じていた。

ひょっとして自分は…主にルビーとの関係について大きな勘違いを長年し続けていたのではないだろうか？

ルビーは自他共に認めるトラブルメーカーである。

本人（…人？）を知る誰に聞いても、なのはの意見に同意してくれる自信はあるが…だがしかし、ひょっとしたら騒動に巻き込まれる原因はルビーだけでなく、なのはにもあるのではないか？

「……のは？」

勿論、なのははルビーのように騒動を起こしたりはしないが、逆に騒動を引き寄せる体質の可能性が出てきたのだ。

振り返って見れば、あの公園で男にからまれたのはなのはであり、ルビーは関係ない…っというかルビーの存在「トラブルと仮定すると、ルビーに出会う所まで含めて、なのはがエンカウントしたトラブルと考える事が出来る。

ルビーと出会えた事…その良し悪しは脇に置いておくが、ルビーが邪魔しなければユーノのSOSドリームを最初に受け取っていたのはなのはだったっぽいし、夢を見ていないのにフレットなユーノを見つけてゲットしてしまったのもなのはだ。

おかげでと言うか、自分の意思も含めてではあるが、ジュエルシードの回収に参加する事になり、拳句の果てが世界の存亡をかけた最終決戦のど真ん中でガチンコをやらかすに至ったのは記憶が色あせる暇もないほどの、ついこの前の話…。

「…なの…ちゃん？」

そして、今回はヴィータにわけも分からず襲撃され、夜天の書…闇の書を巡る事件にも現在進行形で巻き込まれ中だ。

拳句の果てにはこの状況：右を見ればなのはの家族：土郎・恭也・美由希が各々の小太刀を構えて戦闘態勢：左を見れば、ヴォルケンリッターの四人が各々の武器と拳を構えてこれまた戦闘態勢：その中間、ベッドの縁に仁王立ちするなのはとその後ろにいるアリサとはやてと言っ立ち位置だ。

「ねえ…のはったら」

これが全てなのはの部屋に詰め込まれている状況は、とにかく狭いの一言である。

なのはの部屋は狭いというわけではないが、それはなのはの一人部屋としての話、子供達三人だけだったなら十分余裕だったが、大人も含めた十人ほどの人間が一度に部屋に詰め込まれたら息苦しくてしょうがない。

武器を振り回してもした日には、同士討ちは免れないだろう密度の高さは、逆に抑止力になっているほどだ。

「聞いた…るの、…は？」

微妙なバランスで均衡がとれているが…そもそも一人の人間の私室に、これだけの面子がそろふ事の方が異常なのだ…いよいよもつてなのはの疑惑が真を帯びてきた。

今なのはの元にルビーはいないし、流石にルビーでもこんなレベルの騒動を自分から巻き起こす様な真似はしないしできまい。

無意識に騒動を呼び込む特異点的な力はルビーを超えているのではあるまいか？

「…どうしよう…全然否定できないの」

「なのは（ちゃん）…！」

「にゃ！？」

両の耳元で名前を呼ばれ、なのはの心臓が跳ね上がる。

どうやら物思いの海の中にどっぷり沈み込んでいたらしく、思わず飛び上がるほどに驚いてしまった。

「ア、アリサちゃんにはやてちゃん！？」

「アリサちゃんじゃない！！何ぼっとしているのよ！？」

アリサの目に涙が浮いている。

どうもいきなり人間が魔法陣っぽい物から抜け出てきたり、なのは家族が物騒な刃物を構えていたりと理解不能のオンパレードを目にしてパニックになっているようだ。

まあ…その中には当然、なのはの变身も含まれるのであろうがそれは置いておこう。

「ご、ごめんね」

「それはいいから、一体何が起きているのか説明しなさい!!」
いい加減限界を振り切ったらしいアリサが爆発した。

訳の分からない事が起こったとき、少しでも事情を知ってそんな人間に説明を求めるのは間違っではない。

アリサの目から見れば、なのはも事情を知ってそんな人間の力テゴリーに入るのだろうし、事実なのははアリサよりも色々と知っている。

とはいえ、全体像を把握してはいないのだが…。

「ええっと、どう説明すれば……ってえ？」

改めて冷静に、状況を把握しなおそうとしたなのはは気がついた…
気が付いてしまった。

とつさにプロテクションを展開したので、ベッドとその後ろにいるなのは達は無傷…だが、逆を言えばベッドの上以外は無事な物が一つもない。

家族が踏み込んできたときにぶち破られた扉の破片にストライクを決められ、本体がベコベコになりつつ、プスプスと嫌な感じの煙を上げているなのはのマイパソコン…最初の魔力による暴風により、棚にあった本や置物や写真が全部落下し、床に落ちて割れたり砕けたりしてとんでもないことになっている床の惨状…しかもヴォルケンリッター達は、ここに来る前には野外にいたらしく、靴についた土やら草やらで落下した本やノートには万遍無く足形がつき、敷いている絨毯も床も泥だらけ…しかもだれ一人足下に注意を払っていないので、なのはのお気に入り“だった”諸々は現在進行形で家族

とヴォルケンリッター達に踏み砕かれ、破片はさらに細くなり続
けている……もはや素足で下に降りる事は出来ないだろう有様だ。

「なのは……この不審者達は、倒してしまっつかまわんのだろう？特
にその二人！！」

「「ええ！？」」

こつそり窓から逃げだそうとしていた仮面の男達二人が、恭也の
言葉に身をすくませて硬直する。

「お前ら、以前になのはにいたずらをしようとした変態共だろう？」

「「ここでもか！？」」

回覧板を見ただけのヴォルケンリッター達でさえ覚えていたのだ。
被害者になりかけたなのはの家族ならば尚の事、見間違えるなど
ありえまい。

「はっ、誰だか知らねえが、あたい達に勝てるつもりでいるのかよ
？おめえらも動くんじゃねえぞ？きつちりおとしまえはつけさせて
やる！！」

「「ええ！？」」

こつちは完全に自業自得だ。

勿論、ヴィータだけでなく他の三人も、男達に落とし前をつけさ
せたい所だろうが、それによって目の前にいる高町家武闘派三人組
に背を向ける事は出来ない。

それ故に、身動きのできない緊張状態が完成しているのだ。

「……さい」

「「「「「「「「「「「「は？」」」」」」」」」」」」

不吉な物を感じさせる声音に、九人が同じ一人を見る。

「皆……うるさいって言ったんだよ」

「「「「「「「「「「「「ひっ！？」」」」」」」」」」」」

全員が気付いた。

ベッドの上で、自分達を見下ろして来るなのはの目が据わってい
る事に……。

「な、何？」

例外はアリサとはやてだ。

彼女達はなののはの後ろに居るため、なののは顔が見えていない。

「何で…こんな事するのかな？なのはのお部屋、めちゃくちゃにして…楽しいの？」

「ふわ!?」

そして彼等は気がついた。

自分達の足元に散乱する物に……特に、なのはがアリサ達友人一同と一緒に写っている写真立てが、誰かの足跡と共に踏み割られていたのを見た瞬間、もはや敵味方の区別なく顔色は一樣に真つ青だ。

「ど、どのどなたが知らんが、今は大人しくしてくれ、あの状態のなのは家でもトップクラスに危険なんだ」

「承知！！私の名にかけて誓おう！！」

士郎の警告とシグナムの即答……やり取りその物は短かったが、込められた思いは十分すぎるほどに伝わった。

それとほぼ同時に全員が同じ思いを抱いて理解した。

目の前にいる彼らもまた“経験者”なのだと……なののはの恐怖は身をもつて体験した者にしか分からない……故に、誰一人として動けない。なののはの私物が散乱している室内は地雷原と同意だ。

レイジングハートに桃色の紫電とか迸っていたり、すでに魔術回路が全力稼働しているためか、周囲の風景が歪んで見えたりしているのはを前にして、これ以上何かを壊してしまった場合の未来予想図が嫌過ぎる。

すでに阻止限界点を超えているのか……あるいはまだぎりぎりですなのか……俯いているため、顔の見えないのはからは、その境界線が分からない。

そんな風に戦々恐々としていたら、なのはがバツとつつむいていた顔を勢いよく上げた。

「みんなひどいよ!!」

「泣かしちゃった――！」

てつきりちよつと頭冷やそうか？が来ると構えていた所に、瞳を潤ませてしくしく泣き出したのはが来た。

砲撃で直接吹っ飛ばされるのも嫌だが、いきなり部屋を荒らし（原因は闇の書だが…）、いきなり不法侵入、少女の大事な物を知らず知らずのうちにめちやくちゃにして泣かせてしまったと来れば、どう見ても悪いのはヴォルケンリッター達であり、外道の汚名は免れまい。

「手前等人間じゃねえ、たたっ切つてやる！！」…っとか言われ
ても反論できそうにない。

事実、ヴォルケンリッター達は人間じゃないけれど…。

「えっと…ごめんなさい」

シグナムが啞然としつつも最敬礼でなのはに謝罪した。

どうも予想外過ぎる反応に、シグナムも思考がついて来れていないように見える。

「あ、あの魔王がこんなに可愛いわけがない！！」

「ヴィータちゃん失礼よ、どんなに認めたくなくても起こったことが全て！！戦わなきゃ現実と！！」

大声で全然フォローになっっていない事をのたまうお前も十分失礼だシヤマル。

「……」

唯一、元から口数の少ないザフィーラだけは静かにしていると思
ったらこいつ…人間形態で直立不動のまま危険な痙攣を始めてい
やがった…泣いている女の子を前にしてこの反応、何気に一番失礼な
やつである。

「な、なのは？大丈夫、写真とか家にもあるから焼き増ししてあげ
る。お部屋の片付けも手伝うから、ね？」

「……うん、ありがとうアリサちゃん」

「う……」

グシュグシュと涙をぬぐっていたなのはが顔を上げ、アリサに微
笑んだが…逆にアリサがなのはの潤んだ目を見てうめき声を上げる。

いつもと違う弱弱しいなのはギャップがパネエツす!!

「アリサちゃん？」

「は!?! な、何でもないわ!?!」

「そ、そうなの？」

「た、大したことじゃないんだからね、写真も片付けの手伝いも私の好きでやるんだから!?!」

「う、うん…」

所詮は釘宮^{ツンデレ}か…。

「あ、あのな、なのはちゃん?ご、ごめんな、何や知らんけど家の子がおいたしたみたいで」

「…家の子？」

はやての言葉に、なのはが聞き返すと慌ててはやてがうんうん頷いた。

この状況に焦っているのははやても同じらしい。

「そ、そうなんよ、この子たち、うちの家族なんや」

「え?はやて、あんた家族はいないんじゃない? って言うかあんたも関係者なの!?!」

「ああ、そうなんやけどな、アリサちゃん…今はちよつと待ってくれるか?」

「んがぐつぐ…」

何の予備知識もなく、急展開に一番ついてこれていないアリサが詰め寄ろうとするが、逆にはやてがカウンターでその口に手を当てて黙らせる…鼻まで塞ぐと窒息するぞ?

「そ、そやからうちからも謝ります。ごめんなさい」

理解が追い付いていないのははやても同様のはずなのだが…おそらくヴォルケンリッター達がなのはの部屋を荒らしてしまった事を申し訳なく思っているのだろう。

ベッドの上ではあるが、深々となのはに土下座する。

これに慌てたのはヴォルケンリッター達だ。

自分達の失態で主に頭を下げさせてしまったと言う事もあるが…

それ以上にはやての言葉に不穏な物を感じさせる単語が含まれていた。

「あ、主はやて、少々よろしいですか？」

他の三人にレッツ&ゴーと無言の視線で促され、将の悲哀に内心で泣いたシグナムがはやてに声をかける。

「うん、何やシグナム」

「主は魔お…なのは嬢とお知り合いで？」

「魔王？シグナムさん今魔王って呼ぼうとしたよね？」

再び黒い物を纏いだしたなからはから、シグナムが全力で顔を逸らした。

どうにも最近、うつかり気味な発言が多くなっている烈火の将だ。

「よう分かんけど…うん、なのはちゃんはお友達や」

「……なあ！？」「…」

「本当はクリスマス・イブに皆集めて紹介するつもりだったんやけどな！！」

「……そんな！！」「…」

超がつくカミングアウトだった。

ヴォルケンリッター達の努力の半分がこの瞬間に無駄になったのだ。

「はは、真っ白に…燃え尽きちゃったぜ…」

「立て！！立つんだヴィータ！！そんな物で逃げられると思うな！！」

「私達を残していかないで！！怒られるときは皆一緒よ！！」

「ヴォルケンリッターの将、シグナムが命じる。生きろ！！」

「な、なんやのん？なんでヴィータが燃え尽きるんや？って言うかシグナム、ギアスなんて使えへんやろ？シャマルとザフィーラも、揃って何をテンパツとるんや？」

いきなり小芝居を始めた家族の反応に、いくらはやてと言えど引かずにはいられない。

自分の言った事が原因のようだが、どこがポイントだったのだろう？と首をかしげているが…さもありなん。

ただの徒労ならば0になるだけで済むが、胸に手を当てて考える
と数字の前にマイナスの横棒がつく…しかも相手がはやての友人と
来れば、お茶目で済ませられない。

「…ねえはやてちゃん？」

「え？」

そんな戦々恐々としたヴォルケンリッターの救いの手は…意外な
事になのはから来た。

はやてが名前を呼ばれて振り向けば、二人の視線が真正面から交
差し…はやてが硬直する。

「な、なのは？」

アリサもなのはの変化に気がついたようだ。

それは彼女達がよく知る親友の顔でありながら、見た事もない表
情…魔術師、高町なのはの顔…感情が抜け落ちたような親友の表
情に、はやてだけでなくアリサも息をのむ。

「はやてちゃんが手に持っている物…それが何なのか知っているの
？」

「え？う、うん…これは闇の書、うちが今代の主になったデバイス
や…ってあれ、でも何で闇の書がいきなりうちの所に来るんや？今
までこんな事はなかったで？」

クエスチオンマークを浮かべたはやてに、ヴォルケンリッター達
がそろって顔を逸らす。

そのあからさまな反応に気づかないわけがない。

「…あんたら、何したの？」

はやても、自分の家族達が何やらただ事では無いことをやらかし
たと気がつく…なのはの部屋をめちゃくちゃにしたところでは無い
何かもつとんでもない事を…。

「す、すいません主…実は蒐集を…」

「蒐集したんか！？」

はやての声には、驚きと疑問の色があった。

「何でや！？うちは人に迷惑かけてまで手に入れる力なんかいらん

ゆうとつたやないか!!」

「そ、それは…」

驚きと怒りでヴォルケンリッター達を怒鳴りつけるはやてに、今度はなのは達がついていけない。

「……」

なのははとりあえず、何も言わずにこの場を見守る事にした。

何故この場に闇の書が現れたのかはなのはも気になるし、横から口を出す状況でもなさそうだ。

「とにかく蒐集は止めや!! 迷惑かけた人たちには一緒に謝りに行つたるから、もう蒐集禁止!!」

「あ、あの…主はやて?」

「何? 言い訳なら聞かんで?」

「い、いえ…その…」

「何や、はつきりせん子は嫌いや!!」

言い訳を聞かないと言いなから、はつきりしない子は嫌いと言う暴君…その名は八神はやてが降臨している。

それでも話さないわけにはいかないとシグナムが一步踏み込んできた。

「もう蒐集の必要はないのです」

「「え?」」

なのはとはやての疑問符が重なる。

「そらぁ蒐集せんでいいのはいい事やけど…え? “もう” 蒐集の必要はないって?」

「それは…闇の書が完成したからです」

「え? ってきやぁぁ!!」

はやてがシグナムの言葉に首をひねるのに合わせたかのごとく、闇の書から魔力が噴き出した。

その名にふさわしい、闇色の魔力の奔流だ。

「は、はやて!?!」

「ダメ、アリサちゃん!!」

「なのは！？はやてが！！」

意味も理由も分からないが、はやての持っている闇の書に危険を感じたのだろう。

アリサが手をのばしてはやてと書を引き離そうと掴みかかるのを、なのはが止める。

「お兄ちゃん！！お姉ちゃん！！」

「おう、来い！！」

「カモンだよなのは！！」

「なああああ！！？」

大根を引っかく感じで、なのはに放り投げられたアリサが宙を舞い、それを恭也が空中でキャッチして美由希が支える。

一連の判断と行動までの速さに迷いが感じられない。

親友だろぅがフェレットだろぅが、必要ならば躊躇なく放り投げるのが魔術師クワリティとナイス家族の連携だ。

「まずい！！」

「暴走が始まった！？」

物騒な言葉が耳に飛び込んでくる。

背後に仮面男達の声を聞きながら、なのはは魔導師の精神状態で最善策を模索し…一秒にも満たない時間で決断した。

「レイジングハート！！」

『御心のままに…マスター』

何時でも抜き打ちで放てるようにとチャージしていたレイジングハートは桃色の砲撃を放ち、天井を撃ち抜く。

建材が円形にくりぬかれた先には夜空が見えた。

「え？な、なのはちゃん？」

いきなり、自室の天井をぶち抜いたなのはに、はやてが吃驚して目を丸くしているが、当のなのはは答えないし止まらない。

どの道やる事は変わらないのだ。

「な、何するん？」

はやてが何か言いかけたのを聞かず、問答無用で引き寄せて抱き

しめる。

いきなりなのは腕の中に捕らわれたはやてが目を白黒させた。

「主!?!」

「はやて!?!」

「はやてちゃん!?!」

「なのは!?!」

「なのは、何するつもり!?!」

「待て、なのは!?!」

なのはが何をしようとしているのかを察したのか、全員が二人の名前を呼ぶが、当のなのははそれに対してむしろ、よりしつかりはやてを抱きしめて離さないように固定する。

「飛んで!?!」

『フライヤーフィン』

なのはの靴に小さな翼が生えたかと思ったら、はじかれたように二人の姿が上昇する。

「結界!?!」

必要最低限の言葉を残し、二人は円い夜空に飛び込んで行った。

「ほ、ほわーう、うち…とんどるん!?!」

天井の穴をくぐり、空に飛び出した二人はさらに高い場所を目指して飛ぶ。

一応、ぐんぐんと自分達の足の下で街が小さくなっていくのに、はやてがパニックを起して暴れ出さないかと注意していたが、杞憂だったようだ。

むしろはやては持ち前の好奇心が刺激されたのか、眼下に見える海鳴の街をキラキラした目で見降ろしていた。

「はやてちゃん?」

「え? あ、なのはちゃん?」

なのはが声をかけると、海鳴の街に目を奪われていたはやてがはつとしてなのはを見る。

抱き合っている状態なので互いがすごく近い。

「…ごめんね」

「うーん、何をあやまつとるのか知らんけど…でもそれはなのはちゃんのせいやないやろ？」

そう言っていると、はやては視線を目の前のなのはから自分の胸元、二人の体に挟まれている闇の書に落とした。

相変わらず、黒い魔力の奔流はとどまるところを知らず、なのはが強化の魔術を使つてはやてを抱きしめていなければ、引きはがされていたかもしれない。

「うちはなんも知らん、あの子達が何で蒐集していたのか、なんもかんも…」

「……」

「でもな、闇これの書が何かまずいことになつとるのは分かるんよ」

なのはは答える事が出来なかった。

確かにはやてはなんにも知らないが…それでも一番大事な事は察しているようだ。

「なのはちゃんにも、うちの子達が迷惑かけたんやろ？でも、あの子達も理由なく誰かに迷惑かける子やないんや。それはうちが一番良く分かつてる」

「はやてちゃん…」

「うちのせいなんやろ？そんできつと闇これの書のせいやね？」

「それは…」

なのはは答える言葉を持たなかった。

この状況が闇の書の引き起こしたものであるのは間違いない。

だが、究極の原因は夜天の書を改悪した歴代の主であり、闇の書の防衛プログラム…それによって、はやてにも何らかの影響が出ているはずだ。

思えば、はやての足が不自由なのもその辺りが原因ではあるまい

か？

「巻き込んでしまったのはうちの方や、堪忍なのはちゃん？」

「うっん、いいの…なのはもお父さん達を助けたかったから…」

あの場において、なのはが助けられるのは一人だけだった。

ヴォルケンリッター達は自分達で何とかしてもらうにしても、士郎に美由紀、恭也にアリサとおそらくは階下にいたのだろう桃子…

…なのはが連れて逃げる事が出来るのは一人が限界、なのに助けた人間は両手の数より多い。

一人しか助けられない…一人だけなら助ける事が出来る。

言葉遊びでしかないそんな結論が、魔術師としての思考がはじき出した答えであり、冷徹な現実であった。

「でもなのはは誰も選ばなかったの…」

いや…選んだのだ…はやてを、ただしそれははやてを救うためではなく、はやてを犠牲にするため…暴走の中心であるはやてを、皆から遠ざける事で守ろうとしたのだ。

本当なら闇の書だけを持って行くべきなのだろうが…闇の書の歴代主は例外なく“闇の書に取り込まれて死んでいる”………完成したとたん、自動的に主の元^{はやて}に転移してくるような代物だ。

なのはが奪って逃げた所で、即座にはやての元に…みんなのいるなのはの部屋に舞い戻る可能性が高い。

だから、なのはははやてごと闇の書を持って空に向かって飛び続けている…暴走が少しでも地上に及ばないように…。

「ごめん、ごめんな…なのはちゃん…ごめん…つらかったやろ？」

仕方ないとはいえ、友人を犠牲にするような選択を強いた上…なのは自身、もはや逃げるだけの時間は残されていない事を、友人を巻き込んでしまう事を…はやては理解していた。

はやてのこぼした涙が、上昇する二人においてけぼりにされて軌跡を残す。

「うん…いいんだよ。はやてちゃん」

しっかりと、互いの体を引き寄せあったなのはとはやての間で闇

が爆ぜ、二人の少女は漆黒に飲まれた。

高町家から少し離れた場所にあるビルの屋上で、二人の仮面男がうなだれていた。

「ど、どうしようアリア!？」

「落ち着きなさいロッテ!!」

こうなつてはもはや正体を隠す必要なしと、変身魔法を解いた二人はグレアムの使い魔の猫姉妹、リーゼ・アリアとリーゼ・ロッテだった。

元の姿に戻った二人が見上げる空には、夜の闇よりなお暗い球体が浮かんでいる。

なのはとはやてを飲み込んだ闇の書のなれの果て…今はまだ安定状態だが、いずれは記録にあるように暴走を開始するだろう。

なのはの言葉で我に返ったシャマルが、とつさに封鎖結界を張って取り込むことが出来たが、暴走が始まってしまえば結界など何の役にも立つまい。

ほとんど間をおかず破壊され、この次元そのものが破壊されるだろう。

「こんな…はずじゃ…」

ロッテの呟きの通り、この状況は二人の計画した物から逸脱している。

そもそも、蒐集が完了するのはまだ先だったのだ。

あの場においての目的は、アリスアを人質に全員から魔力を蒐集する事と、厄介なルビーの無力化だった。

リンカーコアが疲労すれば、最低数日は足腰立たなくなる。

“あれ以上の人員の動員が出来ない”アースラには余分な戦闘能力がなくなれば“目的”を達するのは容易い。

残っているのはせいぜいリンディくらいになるはず…それが二人の計画であり、上手く行くはず…」と思っていた。

「まさか人質の一人目で完成してしまうなんて…」

最初から車田落ち並の勢いで思いつきり躓いてこけた。

おかげでアースラはその戦力を消耗させるどころか、ほぼ無傷な状態で維持している。

今は闇の書の転移でこちらの場所を見失っているのだろうが、やがては気付か、この世界にやってくるだろう。

そうなれば、後は数の差で事が決してしまう…相手も同じ魔導師、二人だけではどうにかなるほど数の力は甘くない。

「ま、待つてロッテ、まだ失敗したわけじゃないわ…」

最終目的のために、暴走が必要だと言う事は最初からわかっていた事…目的を達成する可能性が消えたわけじゃない。

「要は管理局の皆が駆けつけてくる前に、封印を済ませればいいのかよ…！」

「で、でも…あの子はどうするの？」

「そ、それは…」

ロッテの言葉に、アリアが言い淀む。

誰と聞き返すまでもなく、なのはの事だ。

「場合によっては、あの子も“封印”しなきゃならないんだよ？」

なのはが生きているかどうかは分からない。

闇の書に主以外の誰かが巻き込まれるなど異例もいい所だし、前例があつたとしても例外なく皆…闇の書の主と運命を共にしてきたはずだが、本格的に暴走の始まっていない今の状態でなのはが生きているかどうかは誰にもわからない。

まさにシュレディンガーの猫である。

「そ、それでも…あの悲劇をこれ以上くり返すわけには…」

『あはあゝみゝつゝけゝまゝしゝたゝよゝ』

「そう、あはあゝみゝつゝけゝまゝしゝたゝよゝ」なのよロッテ…
つてえ？」

今…何か妙な声が会話に割り込んできた気がして、アリアが振り向けばロッテが直立不動で震えている。

多分、自分も同じような感じなのだろうとアリアは思った。さつきから視界が小刻みに揺れているからだ。

「い、今の…ロッテ？」

思いつきり首を横に振られたアリアが絶望する。

姉妹である二人は、相手の姿に今の自分の姿を見た。

聞き間違えでなければ、さつきの笑い声は二人にとっての天敵のものだ。

「ア、アリア？ 奴は間違いなく沈めたんだよね？」

「と、当然、私の全力全開だったんだから！！」

「ひと…つ、人の世の生き血をすすり…」

「…ひっ…！！」

もはや聞き間違いでは無い。

“奴”が来ている。

しかもかなり近くに。

『ふた…つ、不埒な悪行三昧…』

「ど、どこ！？」

「油断しないで、ロッテ！！」

二人は背中合わせに立ち、互いの死角をカバーしあう。

しかし、肝心の奴の姿がない。

『みつつ醜いこの世の悪を…』

「アリア、下！！」

「っ…な！？」

声の音源に気がついたロッテが警告の声を上げるが、それに反応して飛び退くより早く、下の階から放たれた閃光が床をぶち抜いてきた。

『退治してくれようルビーちゃんビーム…！！』

眩しさに目を腕でブロックした猫姉妹に聞こえたのは、そんな訳の分からない声だった。

「…は！？」

シヨックに備えていた二人だが、そのままの状態の数秒待っても、予想していた衝撃は来なかった。

「何なのこれー！？」

疑問を感じつつも目を開けてみたが、そこに広がる光景に絶叫する… たった数秒の時間を持って、世界が一変している。

罅割れた大地と赤く曇った空… 果てで天と地は分かれたれ、世界はその二色の色のみで構成されている。

「転移… じゃないよね？」

「幻術でもないようよ」

乾いた風の音が、踏みしめる大地の感触が… これがリアルだと、夢ではないと二人に伝えてくる。

『あはあ』

「…っ！？」

再び聞こえた笑い声に、姉妹が背中を合わせて構える。

互いの視界を補い合い、四つの瞳が声の主を探すが… いない。

「何所にいる！？」

「隠れてないで出て来なさい！！」

『別に隠れてなんていませんけど… そんなに言っなら今すぐそこに行きますね』

「…は？」

アリアとロツテの周囲に影がさした。

なんだろうかと頭上を仰ぎみれば…

『呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃん』

「…ひっ！？」

見間違えようもなく奴がいた。

しかもでかい。

巨大なルビーが降ってくる… 降ってくる！？

「…にゃー！ー！！」

あわてて左右に飛んだ猫姉妹のいた場所に、巨大なルビーが突き

刺さる。

「な、なな……」

『あはあく固有結界、マジカル星に二名様ごあんなうい！！うえるかむ・とう・まいわーるど』

荒涼とした大地に巨大ルビーが刺さっている光景はシユールを通り越した恐怖の象徴だ。絶好調のルビーを前にして猫姉妹は、口を金魚のようにパクパク開け閉めする。

上手く言葉が出てこないらしい。

『いっつあ、すくぱるびーちゃんたいむ』

ルビーの言葉はネタ狙いか全部ひらがなだったが、可愛いと言うよりむしろ読みにくいのが先に立った。

第十三話 I d e a l - s e l e c t i o n " s a c r i f i c e (後書き)

あ、ありのまま起こった事を言っぜ？

ギャグを書こうとしたら、何故か僕の考えたカッコイイのはちゃんとはやてちゃんを書いていた。

な、何を言っているか分からないと思うが、俺にも訳が分からなかった。

頭がどうにかなりそうだった。

暴走とか話が作者の手を離れて動き出したとかそんなもんじゃねえ、もっと恐ろしい物の片鱗を味わったぜ。

…なかなか話が進みませんね。

第十四話 Cat

「皆おまたせ〜タイガー道場〜」

「始まるよー」

「……………え？な、何？」

たつぷり時間をかけた後、なのはの口からでたのは疑問符だった。

「…みんな〜おまたせ〜タイガー道場——！！」

「は〜じま〜るよ〜〜！！」

「あ、いえ、聞こえなかったわけじゃないですから」

聞こえてはいた…ただその内容を理解できなかったただだ。

「タ、タイガー道場？」

あ、ありのまま起こった事を言うの。

気がついたらどこかの道場のど真ん中にいて、ボーツとしていたら剣道着を着た栗色のショートカットの女の人と、何を狙っているのか体操服にブル魔…もとい、ブルマの銀色の長髪な外人の女の子が出てきて、わけのわからない事を言っている。

な、何を言っているか分からないと思うけど、なのはにも訳が分からないの…頭がどうにかなりそうだった。

子供向け番組とか、人の話を聞かないとかそんなチャチなもんじやなくって、もっと恐ろしい物の片鱗を現在進行形で味わっているの…！

「タイガー道場も皆さんに愛され、とうとう並行世界に出張するにいたったわけよ！！感慨深いわね〜でも師範代はやっぱり私、ご存じ冬木の虎こと藤原大河！！今日も張り切っていくわよ！！」

「異議あり…すいません、全然ご存じないです」

少なくともなのはは、タイガー道場も藤村大河なる目の前の女性も知らない。

それでご存じとか言われても困るのだ。

冷たいかも？っと思っただが、知っている事前提で話を進められ

たら絶対混乱する。

「え？…マジ？マジでご存じない？」

「はい、ごめんなさい。マジでご存じじゃないです」

なのはは物事をはつきり言える日本人。

その返事にシヨックを受けたのか、それとも自分の存在が思ったほどメジャーじゃなかった事に絶望したのか大河ががつくりと膝をつく。

「こ、これがアウエーの洗礼って奴なのね…」

「ししょーがいきなり潰されたーって言うか、どんだけ自分の知名度に自信を持っていたんすか？自意識過剰すぎっす」

そしてこれまた名前も知らぬブルマっ子がここぞとばかりに追い打ちをかけている。

実に楽しそうだ。

あれは絶対分かった上でやっている。

「うつがー！ー！ー！やつかましいはこのバカ弟子が！ー」

「キヤー！ー！ー！大河が切れた！ー！ー！ー」

悲鳴を上げている割には、二人共楽しそうなので、問題あるまい。なのはを無視して勝手に盛り上がるのは止めてほしいところではあるが…これでも一応主人公なんだぞ？

しかし、二人の騒動と言うかじゃれ合いに飛び込んで行くだけの勇氣もないので静観する。

収束の気配が全く見えないので、話が再開するまで時間がかかりそうだ…なんって事を思ったせいかわからないが、静かになるまで本当にちょっと時間が掛かった。

「み、見苦しい所をお見せしちゃったわね」

「は、はあ…」

大河の言葉にどうこたえていいのか分からず、なのはは曖昧に笑った。

本当に色々見苦しかったが、それを言うのはいくらなんでもストリート過ぎると思うので黙っておこう。

なのはは空気を読める良い子。

「改めて、タイガー道場の師範代、冬木の虎こと藤村大河見参！！」

「そしてその一番弟子、冬木の良心ことイリヤスフィール・フォン・アインツベルン、参上！！」

「えっと、藤村大河さんに、イリヤスフィールちゃん？」

未だに状況が全く読めてないが、とりあえず二人の名前が分かっただけでも一歩前進…っと思っておこう。

いくらなんでもブルマちゃんと呼ぶわけにもいかないし、年上さん付けするのは礼儀の基本です。

「ああ、なるほど。藤村大河だからタイ…」

「トペ・アインツベルン！！」

「イリヤちゃん？ニャー……！！」

完全な不意打ちだった。

Q 脈絡も前振りもなく、いきなり幼女がフライングボディータックなんてしかけて来たらどうしますか？

A それは受け止めるしかないだろう。嬉しいかどうかは別にして、危ないもん。

なので、なのはも受け止めた。

ただし、なのは自身の体重が軽いのと意表を突かれたせいで、二人はもつれ合いながらごろごろと道場の端まで転がって行く。

「な、何何何！？」

気がつけば、なのははマウントポジションを取られていた。

イリヤが真剣な顔で見下ろして来るのが、今の状態と合わせてとっても怖い。

「ししょーをタイガーって呼んじゃダメ。そんな事を言ったら吠えるんだから」

「ほ、吠える？」

人間の行動として吠えるというのはどうなんだろうか？

どちらかと言えばそれは、野生の肉食動物とかそう言う連中の行動だろう。

そう…たとえば虎とか…^{タイガー}そんな目で本人を見たら、目があった。「うん、どうかしたの？」

「あ、いえ…」

しかし、なのはにはそれを大河にぶつける勇氣はなかった。

「ん？どうしたの、言うてみんさいな？」と言う感じのオーラを存分に発散している本人を目の前にして、地雷を踏むような愚は犯さない。

何度でも言うが、なのはは空氣の読める良い子なの！！

「さゝって、時間食っちゃったからここからはサクサク行くわよ。弟子一号、今日のゲストは誰かな？」

「はいししょー、今日の相談者は海鳴市在住の高町なのはさん（9歳）です」

「よ、よろしくお願いします」

とりあえず頭を下げておく。

何時の間にゲストになったのかとか、なんで相談者にされているのかとか、しかも当然の如くさらつとなのはの個人情報まで知られているなんて何それ怖い！！エトセトラエトセトラ…突っ込みどころには困らないのだが、それを言っても多分無駄な気がする。

「え、えゝつと、タイガー道場ってなんですか？」

とりあえず一番気になる事を聞いてみる。

タイガー道場…その名前に聞き覚えはない。^{トラブル}

聞き覚えはないが、厄介の響きを感じる…実際、面倒に巻き込まれているので今更と言う気もするが…。

「よつくぞ聞いてくれました！！その質問を待っていたわ！！」

大河が嬉しそうに反応する。

説明したくて待ち構えていたか？

「タイガー道場、それはバッドエンドを迎えちゃった救われない魂に、明日のハッピーエンドの為のその一を教える場所なのだよ、な

のはちゃん!!」

「は、はあ…」

そう言ってジャブを繰り出す大河…なのはの歳を考えると…ネタを振られている事は分かってても訳が分からず困っていないぞ？

「ってバッドエンド!?ここって死後の世界なんですか？」

流石のなのはも真っ青だ。

確かに、闇の書の暴走に巻き込まれた事を考えると死んでいてもおかしくない。

むしろ、歴代の主の末路を考えると、可能性は高くさえあるだろう。

相当に無茶だったし、なのはも覚悟を決めた行動だったが、それでも自分が死んだというショックはでかい。

「ん…なのはちゃんの場合はチョツチ違うかな、ちゃんと生きてるみたい。でも諸々の色々からたまたまチャンネルがつながってここに来ちゃったみたいなのよね」

「そ、そうなんですか？」

なのはが心底ほっとする。

死後の世界がこれでは、正しい意味で夢も希望もない。

百歩譲って走馬燈だったとしても、人生最後に見る光景がこんなふざけた物だったら嫌過ぎる。

「っと言うわけで、悩める困ったちゃんを終着駅、タイガー道場に迷い込んできたなのはちゃんのお悩みは何かな？」

「な…に…かな、な…にかな？」

「な、悩みですか？え、えっと…」

大河とイリヤがノリノリだ。

タイガー道場は嘘か真か指針をくれる場所らしいので、何か言わないと収まりがつかないのかもしれない。

そして、幸か不幸かなのは一つの悩みを抱えていたりする。

「あ、あの…それじゃあ、何でもいいんですか？」

「おっしゃドンとこーい」

「どんな相談でもししょーとイリヤが相談に乗るよ」

むしろこの二人だから不安になるのだが…本当にまともな答えが返ってくるのだろうか？

まあ、それはそれとして…言うだけ言ってみるのもいいかもしれないと意を決したなのはが口を開く。

「えーっとですね、最近周りの人が、お友達とか含めて私の事を魔王様魔王様って呼ぶんです」

「ほうほう…それはたいへんね」

「オス、これが流行りのいじめっすね？」

「そ、それですね、ひょっとしたら私ってトラブルを呼び込む体質じゃないかと思って…」

なんとなくこのタイガー道場も、自分のトラブル体質が引き寄せたような気がしなくもないが、この際それは考えないようにしよう。「もしかしてなのはは、ずっとこんな感じで騒動に巻き込まれたり起こしたりしながら大きくなるんでしょうか？」

「……………まあ、割とね、ってチヨイ待ち！！何処に行くのなのはちゃん！？」

いきなりあらぬ方向に向かってダッシュしたなのはに、大河が驚く。

「うああああん、お家帰る！！」

「シヨツクのあまり幼児化！？放ついてももうすぐ帰れるから！
！魔術で強化した拳で壁をぶち抜いて帰ろうとか無茶しないでー！

！」

「うえええーん！！」

大河の訴えも、今のなのはには届きそうにない。

「お、落ち着いてなのはちゃんーん！！さっきのコメントはノーカンでお願いします！！絶対そうなる保証なんてないんだから！！」

「……………本当？」

「う…」

大河の言葉に、破壊活動をやめたなのはが振り向くが、その大き

な瞳に涙をいつぱいためた顔を見た大河がうめく。

「ししよー、新しい世界の扉が開きかけてるっす!!」

「うおっ、やべー!! もう少して道を踏み外すところだったわ!!」
一体どんな世界に踏み込みかけたんだ大河?

お前は一応教師なんだぞ?

「と、とにかくね、なのはちゃん? 未来はどんどん変わっていくものの、だから必ずそうなるとは限らないのよ」

大河が良い事言っていると自画自賛している…そんなに大したこと言っているかこいつ?

「そ、そうなの?」

「ええ、本当はこの時点ではまだ二つ名は悪魔のはずなのに、すでに魔王様になっているし」

「……」

「こりゃあ最終的には魔神とか破壊神まで行くかもしれないわね、ほら、すでにこんなに運命は変わっているのよ? って、あ、あれ? なのはさん? おーい」

「ししよー、それってフォローになってないどころかむしろ奈落に突き落してる感じ?」

「うああー……ん!!」

なのはスタンピードリターン…タイガー道場の崩壊速度が上がってる?

「だああああ!! 待って待って!! あたしの道場がどんどん瓦礫の山に!!」

「ししよー、口は災いのもとしてこういう事を言っんですね」

「他人事みたいな顔してんじゃないわよバカ弟子一号!! あんたも魔術師なんだから、なのはちゃんを止めて!!」

「あ、それ無理っす」

イリヤの返事は短くて聞き間違いようがなく、そして情け容赦のないものだった。

しかも手をひらひらと白旗のように振っているおまけつきだ。

「何故に!？」

「だってあの子の内包してる魔力、イリヤの何倍あると思っているんですか?ここまで差があると全力で仕掛けても残念賞っすね」

「ええい、役立たずめ——!!」

「うわあああ——ん!!」

泣きながら、なのはの八つ当たりは続く。

『…なのは様?』

誰かがなのはを呼んでいる。

聞き覚えのある声…引き寄せられるようになのはの意識が覚醒に近づいて行く。

『なのは様、気がつかれましたか?』

「レイジングハート?」

声の主は、レイジングハートだったらしい。

見ればバリアジャケットもちゃんと展開されている。

「なのはは…気を失っていたの?」

『はい、バイタルに問題はなかったのですが、魔されているようにしたので呼びかけを繰り返していました。時間がかかって申し訳ありません』

「レイジングハートのせいじゃないよ」

ルビーと違って、自分で動く事が出来ないレイジングハートでは、呼びかけることしかできなかっただろうと思う。

「そっか、夢だったんだ…」

この世ならざる場所に存在するタイガー道場…はたしてそれはなのはが見たただの夢なのか…それとも…。

「それにしても一度ならず二度も夢オチなんて、作者は不二子先生に喧嘩を売っているとは思えないの」

『な、なのは様?なのは様のおっしゃっている事が理解不能なので

すが…』

「うん…なのはも自分で何を言っているのかよく分からない」

元々寝起きは良くないのはだ。

目を開けていても文字通り寝言と言う可能性は否定できない。

「それで…つと、ここは何処？」

周囲を見回せば、上下左右、ただ黒いだけの世界が広がっている。先の見通せない闇の中心では、自分の居場所を知るための判断材料がない。

どうやらなのは床に寝ているようなので、上下と重力はあるらしいが、これまた床まで真っ黒で、本当に地面か結界か何かの上なのかの判断さえつかないと来ている。

長時間ここにいると、精神崩壊を誘発されそうだ。

むしろこんな真っ暗闇の中で、自分の姿だけは確認できるのが驚きだが、何かの作用で体がほのかに発光しているのだろうか？

『おそらく闇の書の内部です。取り込まれたかと』

「あ、やつぱり？」

とりあえず思い出せる記憶を順に紐解けば、はやてと一緒に闇の書の暴走に巻き込まれたのだろうかという所まではきちんと覚えている。

なので予想はしていたのだろうが、衝撃の事実を前にしてこの反応…この子も肝が太くなつたと言うか図太くなつたと言うか…どうも魔術師モードが継続中のようなので、その関係もあるかもしれない。

夢の中ではあれほど情緒不安定だったというのに…。

「ってそう言えばはやてちゃんは何処!？」

なのはと一緒に闇の書の暴走に巻き込まれたはやて…一緒にいたなのはが無事なのだ。

はやてもきつと無事で近くにいるはず。

『はやて様は右の方です』

「いた!!!」

思わず立ち上がったレイジングハートの示す方向を見れば…地面に倒れているはやてを見つけた。

「はやてちゃん!!」

呼びかけるが反応が返ってこない。

とっさに駆け寄り、はやての手を取る。

「…暖かい」

『呼吸、脈拍ともに問題ありません。なのは様と同じように意識を失っているだけかと』

「生きている…よかった」

見た所、外傷もなさそうだ。

生きているだろうとは思っていたが、生存が確認できたことで、緊張の糸が切れたのはがへたり込む。

「よかったね、はやてちゃん、そろそろ起きて」

自分で目を覚ますまで待つてやりたいのはやまやまだが、どうも状況がそれを許しそうにない。

こんな場所にいる事自体がすでにして緊急事態なのだ。

まさかはやてを担いで行くわけにも行くまい…何か行動するにしても、まずは目を覚ましてもらう必要がある。

「ねえ、はやてちゃんってば…」

何度もゆすつて見るが、はやてが目を覚ます様子はない。

「レイジングハート、はやてちゃんは気を失っているだけなんだよね？」

『はい、はやて様にはこれと言って異常は見受けられません』

「なら、なんで目を覚まさないのかな？」

レイジングハートが太鼓判を押すならかなり信用が置ける。

はやてが気を失っているだけなのは間違いないとなると、後は目を覚ませばいいだけのはずなのだが、肝心の本人は目を覚まさない…意識がなく、脱力して割と重いはやての体を抱え上げながら、なのは困った。

「どうしよう。何ではやてちゃんは起きないの？」

『こついう場合、王子さまのキスでもあればすぐに目を覚ますのですが…』

「はは、レイジングハート。それはいくらなんでもメルヘンすぎ…ん？」

何かを感じたなのはの言葉が途中で切れる。

『どうかしましたか？』

「今、はやてちゃん…身じろぎしなかった？」

「……」

はやてからの返事はない。

ただの屍のようだが、ほほにうつすらと赤みが差している。

しかも自然にそうなったように見せかけて…顔を逸らした？

「……はやてちゃん？」

『なのは様、これはキスとかそう言うイベント待ちの状態では無いでしょうか？』

「……」

なのはは無言ではやてから手を放した。

ゴンとか小気味良い音をたててはやての頭が地面に落ちたが…それでも寝たふりを継続するとはいい度胸だ。

その根性だけは評価するし認めてやるが、それ以外は何一つ認めてやらない。

「レイジングハート、とりあえず一本撃つところか？」

なのはのハッピートリガー発言に、今度は分かりやすくはやてが身をよじった…しかしそれでも目を開けようとはしない。

まだまだ頑張るつもりらしい…盛大に間違った根性の使い方をしている

『了解、オーダーは何にしましょう？』

気のせいかな、レイジングハートの物言いも普段より冷たく感じる。はやての体をスキャンしているはずなので、なのはよりもごまかしが効かないのだろう。

「勿論！全力全開のスターライトブレイカー0距離射撃…」

とうとうはやてが冷や汗をかき始めた。

なのはの言葉に、意味は分からなくてもまずい何かを感じているらしい。

あのエクスカリバーと真正面からぶつかり合い、世界を壊したほどのそれは、ルビーがない状態とはいえ、十分“必殺”の名を冠するにふさわしい威力を持つ。

勘違いしている人間が多いが、必殺技とは読んで字のごとく必ず殺す技であるからして、殺人技につけるのが本来正しい。

『至近距離だと、非殺傷設定でもかなり危険ですが？ よろしいですね？』

「よろしいよ。はやてちゃんだもん？」

「全然よろしくないわぁー！！！」

目の前で飛び起きたはやてを、なのはの冷めた目が迎える。

真正面から見られたはやてがフリーズし、だらだらと汗をかき始めた。

「おはようはやてちゃん」

「お、おはようなのはちゃん」

いくらなんでも冗談が過ぎたと悟ったらしい。

なのはの満面の笑みと向かい合うはやてがガタガタ震え出した。

砲撃モードでスタンバっているレイジングハートに気がついたせ

いもあるだろう…本気だったのか？

本気で0距離で撃ち込むつもりだったのか？

「はやてちゃん…人間、やっていい事と悪いことがあると思うの…

こういう冗談はどう考えても後者でしょ？」

「う、それはそうやけど…うちにだって言い分はあるんやで？」

「良いよ、聞いてあげる」

なのはがそう言うと、何やらはやてが真っ赤になった。

妙な反応になのはがなんだろうなと思っっていると…。

「あ、ああいう別れ方しとって、こうやって面と向かって会っのがこう…な、恥ずかしかったんよ」

「あう……」

はやての言葉で思い出されたのは、　なのは&はやてさよならの翼　ダイジェストシーン全集だ。

二人とも最後だと覚悟を決めていたため、何か色々恥ずかしいやり取りをしていた気がする……　思い出すと、なのはも赤面ものだ。

「そ、そやからな……ここは一つ笑いでも挟んで場を和ませようと……」
「お、お気づかいありがとうございます」

何か違うような気がしなくてもないが、これ以上思い出すのは羞恥心が意識のブレーカーを落としそうになっているので考えないことにした。

「は、はやてちゃん？」

「な、何かななのはちゃん？」

「あの事は二人だけの秘密って事で……いいかな？」

「いいとも……！」

はやても似たような心境だったのか、ノリよく了承する。

ここに、女の子の女の子による女の子の為の同盟が締結された。

ただし、なのはははやてが背中にもわした反対側の手の親指が立っている事には気がつかない……　上手く誤魔化したなこの子狸。

「それにしても、ここは何所なん？」

「うゝん、レイジングハートは、闇の書の中じゃないかって言うてる」

「レイジングハート？」

なのはは自分の持っている杖状態のレイジングハートを見せる。

「なのはちゃんの部屋でも見たけど、これがなのはちゃんのデバイスなんやね？おしゃべり機能があるん？」

「うん、レイジングハート、御挨拶」

『以後、お見知り置きを、八神はやて様』

「こちらこそ宜しゅうなゝレイジングハート、うちの事ははやてでええよ」

結構な状況のはずだが、自己紹介は穏やかに行われた。

「ええなうなのはちゃん。うちもお話しできるデバイスとかほしいわ」

「えへへ、いいでしょう…ってそんな和んでる場合じゃないよ！！ここから出ないと危ないんだった」

「おお、それもそうやね」

この狸…天然ボケか？

あるいは相当な大物かのどっちかだろう。

「レイジングハート、ここから出る方法は？」

「ありません」

「…っ！？」

返答はレイジングハートからでは無かった。

なのはではない…はやてでもレイジングハートもない四人目の声…とっさになのははやてを背後にかばう形でレイジングハートを構える。

「…主、目覚めてしまったのですね」

闇の奥から…女性の声が聞こえて来た。

諦めたような…何所か悲しむような声に、なのはの胸が締め付けられる。

「誰？」

姿はまだ見えない。

しかし声の主が近づいてきているのを感じる。

「貴女には…眠っていてほしかった」

闇の中に浮かび上がったのは女性だった。

銀の髪を長くのばし、赤い瞳をもつ女性がなのはとはやてを見ていた。

「貴女は…誰ですか？」

「私は…闇の書の管制人格…」

固有結界、マジカル星はルビーの固有結界本来の形である。

その姿は枯れた大地と赤く曇った空によって構成された無人の世界だ。

「「「いつやああー！ー！ー！ー！ー！ー！」」」

そんな無人の世界を全力ダッシュする人影が二つ…猫姉妹とそれに続く…

「にゃあ」「うにゃ」「み〜み〜」「ニヤースでニヤース」「にゃん」「にゃにゃにゃ」「にゃっぷにゃぷー」

猫…猫…猫の群れ……………若干匹、妙なまで混じっている気はするが、とにかく猫である。

それがかなりの数でロツテとアリアを追いかけていた。

ちなみに、猫達の鳴き声を訳すと「メス、ゲットだぜ！」「つか「おらの嫁になってくれる！」「つか「ロツテちゃん俺の嫁！」「つか「アリア様〜可愛がって〜」とかとにかく不穏当な単語が混じっている。

「何何何！？何で、あいつら、こんな殺気、立ってんの！？」

二人を追いかける猫達の眼にはハートマークが見える。

数もそうだが、一匹一匹の様子が尋常じゃない。

「知らないわよ、こつちの話なんて、聞きやしない！！これじゃまるで…」

『はい、楽しんでますか〜』

「「くそ杖！！」」

走りつつ、この世界のどこからでも見ることでできる巨大ルビーを睨む。

言わずと知れたこの場の仕掛け人だ。

「あんた、何を、したの！？説明、しなさい！！」

走りながらの怒鳴りつけは息が切れ切れになるが、それでも言わずにいられない。

『何って、婚活ですよ婚活〜出会いのない猫さん達に旦那様をご紹介〜』

「人を行き遅れみたいに言うな！そんな事頼んで無いでしょ！？」
『行き遅れた人はみんなそう言うんです。だ〜か〜ら〜、彼女^{メス}いな
い発情期のオスを集めたんですよ〜あはあ〜逆ハーレムですね〜』
「何を素で洒落にならない事してんだ貴様！！」

女性としては少々はしたない言葉使いだとは思うが、それだけに
猫姉妹の心情をストレートに表していた。

「え？つて事は、何、あいつら」

『まあ、要するに子作り所望つて事です』

「いやー！ー！！」

二人の駆ける速度が上がった。

顔が赤い所を見ると、お子様お断りな未来予想図でも想像したか？
単なる追いかけること思っていたのが、貞操と人生をかけた耐久
レースになったのだ！それは必死にもなるだろう。

「ガルルルルル！！」

「ん？…ヒツ！！」

何やらネコにしてはやたらと獣性を感じさせる鳴き声に、姉妹が
走りながら横目で背後を見て悲鳴を上げた。

いつの間にか自分達を追いかけている連中の数が増えている…い
や、増えているだけでは無く、その中にやたらとでっかい猫が混じ
っていた。

「なあー！ーんでライオンがいるのよ！！」

他にも、トラ、ヒョウ、ジャガー、チーターに小さい物ではオオ
ヤマネコやらピューマにボブキャットまでいる。

連中に共通しているのはやはり猫科と言う一点だ。

「もしかしてあれも！？」

『あはあ〜勿論旦那様候補ですよ〜猫さん達の趣味が分からなかつ
たんで〜より取り見取り揃えてみました〜』

「いろいろな意味で壊れるわ！！」

「い、嫌がらせ！！嫌がらせでしょう！！」

嫌がらせ以外に解釈の仕方があるなら教えてほしい。

『捕まった時点で結婚式を挙げる準備は出来ていますよ〜ブライダルコーディネーターなルビーちゃん』』

「『そんな至れり尽くせりなんかいらない!!』」

『ちなみにチーターさんは時速110キロで走りますよ?』

「『いやー!』」

猫姉妹が何度目かの悲鳴を上げつつ、左右に避ける。

二人の間にとびかかって来たのは話に出てきたチーター…影が差したか?

チーターとはいえ、体重は人間よりも多いし、爪は鋭く牙は長い。向うはじゃれついたつもりでも、人間側にしてみたら大怪我になる。

「『来ないで!』」

姉妹が限界を超えた速度で駆け抜ける。

その眼には激しい運動があるいは純粹な恐怖か、あるいはその両方であるかもしれない滂沱の涙があふれていた。

『あはあ〜 人生の墓場一直線!!101“万匹”の中でお嫁さんをゲットするのはDAREDA!?耐久レース!! 盛り上がったまいりました』』

「『勝手に盛り上がるな!!』」

とりあえずゼロが4つほど多い。

姉妹の悲鳴は、ルビーに呼応した猫達の鳴き声にかき消された。

『あはあ〜ビクトリー』

現実世界に戻って来たとき、勝敗は誰の目から見ても明らかだった。

「あつ」

「畜生…」

ロツテとアリアは足腰立たなくなってへばっている。

アダルトな意味では無く、単純に全力疾走し続けた為に、正しい意味で足が動かなくなったのだ。

体力が尽きて、猫達に押しつぶされる絶体絶命の瞬間に、自分達は走るだけじゃなく空も飛べるはずと気がついた時には後の祭り、すでに筋肉に乳酸がたまりきって、まともに立つことも出来ない。流石の猛獣も空までは手が届かず、やれやれとルビーが固有結界を解除して今に至る。

ちなみに、時間に関してはルビーが固有結界内の時間を操作したので、現実世界ではほとんど時間が経っていない。

「…また無茶をやらかしたようだな？」

『おや、振り返ればクロノ君がいる』

クロノだけでなく、その隣にはプレシアまでいた。

二人は揃って、諦めと同情の入り混じった視線を猫姉妹に向けていた。

「…クロノ」

「クロノ君」

「……二人を引き取りたい」

何か言いたげな姉妹をとりあえず無視して、クロノはルビーに問いかけた。

この場の主導権はルビーにあると理解しているようだ。

『別にかまいませんよ〜ルビーちゃんの憂さも晴れた事ですし〜』
ジョークでは無い。

間違いなく本気で言っているし、憂さ晴らしの為にここまでやるのがこいつだ。

『でも〜二人を保護するのは犯罪者だからですか？それとも“同僚”だからです？』

ルビーの言葉に、ロクに身動きがとれない癖にアリアとロッテが身をすくませる。

その反応だけで、ルビーの言葉を肯定したも同然だ。

「気づいていたか…」

『まあ割と最初から、管理局ご自慢のファイヤーウォールを痕跡なく出し抜く事が外部の人間に不可能なら、残るは内部犯ですよ〜簡単な消去法ですよ』

鍵は扉の内につけるものだ。

外から中に入ろうとする人間は防げるが、内から外に出ようとする人間を防ぐ事は出来ない。

単純な理屈ではあるが盲点…ルビーだけでなく、少なくともリンディ、プレシア、クロノとエイミィ辺りは気が付いていただろう。

「…最初の質問に関しては両方と言っておこう」

『GOOD、ルビーちゃんもそろそろ自分のスタンスに戻りたいんで、むしろこっちから引き取りをお願いしますね〜』

「感謝する」

ルビーに頭を下げたクロノとプレシアは、二人をバインドで拘束しなおした。

「とんでもないことになりそうだけど、大丈夫？貴方達だけでやるの？」

空に浮かんでいる漆黒の球体を見ながら、プレシアが尋ねる。

『ああ〜プレシアさん、愚問ですよ〜重要な物はすべてこの場に揃っています』

心なしかルビーが楽しそうだ。

『不屈の魂に魔法の珠玉、そしてその主がそろう時、そこに不可能が存在すると思いますか？』

「なのはさんは無事なの？」

『ルビーちゃんとの赤い糸はつながったままですよ〜』

「何で普通にパスって言わないの？でもそう、無事なのね…」

プレシアだけでなく、クロノもほっとした息を吐く。

二人ともなのはの事を心配していたようだ。

「がんばってね、こっちの面倒を片付けたらすぐに戻ってくるから」

『あはあ〜きつと戻って来た時には終わっちゃっていると思いますよ〜』

「あら、頼もしいわね」

プレシアがにやりと笑いを残し、クロノ達ともども転移魔法で姿を消した。

後に残ったのはルビーだけだ。

『さっつてとゝ邪魔ものは片付いた事ですし』

誰もいなくなったのを確認したルビーは頭上を見上げる。

そこにあるのは変わらず、夜の闇よりなお暗い漆黒の太陽だ。

『あはあゝ待っててくださいねゝ^{マスター}なのはちゃんゝ今ルビーちゃんが
行きますよ』

終わりの時は近い。

第十四話 C a t（後書き）

猫姉妹をどうすっかなーとか考えていたけど、何かこんなん出ました。

今回のネタは分かりずらいかも。

夏は集中力が続かなくて困る。

何とか前座は終わったので、そろそろ真面目にラスト練って書こうと思います。

第十五話

Unknown

漆黒の太陽…空に開いた落とし穴…どちらも現実にはあり得ない物だ。

だが、その光景を表現する為には、そんなあり得ない物を形容詞として使わなければならないだろう。

ならばこれは幻想なのかと言えば…残酷なまでに現実だ。

空に浮かぶ黒…闇の書によって生み出された球体は、周りの星々の光さえも飲み込むかのように、夜空を円形に切り取っている。

それはまるで、底と言う概念を無くした奈落のようだ。

「なのは…」

その深淵を見極めんとするかのように睨む複数の視線があつた。

なのはを除く、高町家一同だ。

「ね、ねえ恭ちゃん、なのはは…大丈夫だよね」

「ああ、きつと大丈夫だ!!」

美由希の不安に、恭也が答える。

その声が少し大きくなってしまったのも…何所か自分に言い聞かせるような響きがあつたのも聞き違いではあるまい。

「……なのは」

他の家族から一步下がったところにいる桃子は、球体から目を離さない。

彼女の心情は、家族とは言え他の誰にも理解が及ばない。

いや、理解できると思う事の方が傲慢なのだろう。

彼女はなのはの母親で、なのはは桃子の娘なのだから…。

「桃子…」

士郎も、妻にかける言葉がない。

娘が自分達を助けるために、はやてを連れて空に飛び出した事を、父は正しく理解している。

桃子がなのはの母親であるように、士郎はなのはの父親なのだから

ら…。

「お、おじさま？」

家族の誰でもない声を聞いて、士郎がはっとする。

他の皆も、同様だ。

なのはの事を心配し過ぎるあまり、すっかり忘れてしまっていた。今回巻き込まれたのは、自分達だけでは無かったと言う事を…。

「ア、アリサちゃん…」

「一体、何が起こっているんですか？」

アリサは今にも泣き出しそうな目で、しかし毅然とした姿勢で自分達を見ている。

「なのはははやてと一緒に飛んでいっちゃうし、街の中なのに全然人はいないし…」

取り乱さないだけでも大したものだが…パニック寸前と言った感じだ。

これだけ理解不能な事を立て続けに目にした上に、なのはとはやてと一緒に飛んで行った挙句、黒い何かに呑みこまれてしまふのを目にしたのだ…むしろよくぞ我慢したと言っべきだろう。

「なのは達は…無事なんですか？」

「………」

それに関しては、アリサよりも自分達の方が聞きたいくらいだが、アリサの手前取り乱すわけにはいけないので自制する。

何時ものなのはなら、ここまで心配はしない…不安にならないだろう…何故ならば、なのはの傍には常にルビーがいたのだから…どんな状況であれ、ルビーがいれば最低限、なのはの安全は保障される…そのくらいには、全員ルビーを信頼しているが…今なのはの傍にはルビーがいない…なのはの安全の保障が出来ない。

「みなさん！！」

「………え？」「……」

異口同音、5人の声が重なり、全員が声の聞こえた方向、頭上を仰ぐと声を発した本人が…降って来た。

相当高い所から飛び降りてきたのか、ドスンとか形容できる着地音をたてて降って来た“少女”を見た全員が目丸くする。

衝撃を吸収する為だろう。

どこぞのゴルゴンの末っ子のように四つん這いの着地だったが…そこは9歳の悲しさで、妖艶さとか色気が足りないどころか皆無だったりする。

せいぜい、翻ったスカートがチラリズムを誘発させる程度だが、残念な事にそれに興奮しちまったら例外なくロリペドの烙印を押される相手だ。

「皆さん大丈夫ですか!？」

高所から飛び降りてきたとは思えないほど自然な動きで立ち上がり、こちらの心配をする“人間”…何よりも驚きのポイントはそんなトンでもない事をやらかした人物が、この場の全員と顔見知りだった事だろう。

「すずか？」

「ア、アリサちゃん!？」

ここにアリサがいる事を知らなかったのか、今度はすずかの方も吃驚している。

「な、なんでここであんたが出てくるのよ!？」

「アリサちゃんこそ、なんで結界に取り込まれているの!？」

質問を質問でカウンターするのはマナー違反だ。

「アリサちゃん、ちよつとすまない」

士郎がアリサに断りを入れてすずかと向き合う。

全く予備知識のないアリサに事情を説明する悠長な時間がないし、何より一つだけ今すぐに確認しなければならない事がある

「なのはは無事なのかい?」

努めて冷静に、すずかに問いかける。

怒鳴らないように自制できただけ大したものだ。

「師匠が言うには、なのはちゃんは無事だそうです」

「そつ…か…」

すずかの言う師匠とはルビーの事だ。

とりあえず、最悪の状況には至っていないようではとずとする。

「なのはが無事！？すずか、それ本当なの！！」

やはり予備知識があるのとないのとは致命的な差があるらしい。アリサがすずかに食ってかかるのも、ある意味で仕方がないとは思う…思っただが…。

「説明しなさいよ！！　なのはだけじゃなくはやても巻き込まれているのよ！！」

「アリサちゃん、落ち着いて、ね？ちゃんと説明するけど今は時間がなくて…」

「だが断る！！ここで聞いておかないと、訳が分からずに終わった後になってやっとな事情説明されて事後承諾させられそうなんだもん！！」

なかなか鋭いな、この子…。

「だから、私に何かさせたかったら先に何が起きているか説明しなさい！！」

「あう…」

元から一歩引く性格のすずかだ。

押しの強いアリサが切れた状態で完全に攻勢に回った状況は分が悪。

このままではアリサにすずかが押し切られてしまうだろう。

「アリサちゃん…」

なのはが無事な以上、まずは自分達の安全の確保が必要だ…と考え、興奮しているアリサをなだめようと士郎が声をかけようとしたのだが…。

「アリサちゃん、あれ！！」

「え？」

いきなりすずかが何かを指さし、アリサが反応して指の方向を見る。

「す、隙ありー！！」

「な!？」

ドスンと、アリサの延髄にすずかチョップが入った。
あまりに予想を超えた光景に、口と手を出そうとした姿勢のまま
で土郎の時間が止まる。

「いったく何するのよすずか!？」

「あ、あれ? 気絶しない。えい、えい!!」

「何で!？ 何で連続でチョップを入れようとする!？」

ドラマや漫画で定番の当て身だが、素人が見よう見真似で実行し
てもそうそう都合良く気を失ってくれるとは限らない。

「アリサちゃん気を失ってー!!」

「無茶言っなー!!」

現実にはなかなか厳しいのだ。

「こ、こうなったら…」

「す、すずか、何すんのよ!!」

もはや当て身で意識を飛ばすのは諦めたらしいすずかは、アリサ
の背後に回って腰に手を回してロックする。

「バックドロップはお臍で投げるんだよ!!」

「ぬなああ!？」

抗議の言葉はそのまま悲鳴になった。

それはそれは見事なアーチを描いて、奇麗に技が決まる。

二人共スカートを履いていたので、乙女のシークレットゾーンと
かいろいろあられもない事になってサービス満点なシーンだが、二
人の名誉の為にあって描写はしないでおく。

デフォルメされた犬さんとかネコさんとか見ていない。

「ってそんな問題じゃない!!」

正氣に戻った土郎の言い分は実に尤もだ。

惜しむらくは、もう少し早く正氣に戻っていれば… 背後の恭也と
か美由紀とかドン引きしているし、一般人の桃子に至っては、「あ
らあら、二人共女の子がそんなはしたない事して…」なんて思いつ
きりずれた事を言っについて来れていないどころか色々逃避気味だ。

「すずかちゃん！！そ、その技は良い子も悪い子も真似しちゃだめな技じゃないかな！？」

地面コンクリだしね…意識だけでなく、別のもっと大事なもので飛ばしたのではあるまいか？

「だ、大丈夫です！！だってこの世界はきっと、ギャグで出来ていたんです！！」

「すずかちゃん、今すぐ謝るんだ！！どこか英雄ばかり集まる場所です赤い人が泣いている気がする！！」

色々思う所はあるがとりあえず、すずかの言う通りアリサは大丈夫のようだ。

盛大に目をナルトにしているが、息はしている。

ギャグ補正偉大なり、あつてよかったギャグ補正、もしなかったら火曜サスペンスの音楽が流れるようなことになっていただろう。

「と、とにかくここにいたら危険なんです！！だからアースラに避難しましょう！！」

いつの間にかギャグキャラにされていたアリサ・バニングスに幸あれと言う事で問題がクリアー…元々、すずかは結界に取り込まれた高町家の皆さんを発見し、保護する為に出張って来たのだ…何故それがキャットファイトじみた物になるのかについては全然わからないけれど…。

「しかし、アリサちゃんは大丈夫なのかい？」

「だ、大丈夫です！！ね、アリサちゃん！？…うん、大丈夫ですよ」

「や、やめてくれすずかちゃん！！脱力したアリサちゃんの体を人形みたいに残るから支えて動かすのは見ていてシユールだ！！全然腹話術になってないから！！」

この子もだいぶ朱に染まって来た…っと言うかすでに真っ赤な気がする。

「ん？」

「どうしたヴィータ？」

「いや、なんだか親友だと思っていた相手に裏切りのファーストバツクドロップを食らった拳句、これで最終回まで気絶が確定してモブキャラ化した少女の悲鳴が聞こえたような気がする」

「…なんだ？その具体的すぎる救いような話？」

「…何なんだろうな？」

「知らん」

いぶかしげな顔でシグナムが呆れるが、他の誰よりヴィータ自身がわけが分からずに首をひねっていた。

「そんな事より、今はこちらに集中しろ」

「わ、解っているよシグナム！！」

頭を切り替えて前を見れば、そこにあるのははやてとなのはをその内に取り込んだ黒の球体、闇の書。

今はヴォルケンリッターが四方から包囲している状態だ…いや、包囲するしかできないと言ったほうが正しいか、闇の書ははやて達を飲み込んだ直後から、この状態のまま同じ場所にとどまっている。それは決して停止したからでは無く、暴走までの準備時間か何かだろう。

下手に手を出し、それによって暴走が始まるかもしれないと思えば、ヴォルケンリッター達には闇の書を包囲して来るべき時に備えるしか手がない。

「また…終わっちゃうのか…」

ヴィータが唇をかむ。

今や彼女ははつきりと思いついていた。

自分達が今まで主として仰いできた人間達の末路…善人もいた…

悪人もいた…しかしそんな物を全て…

「闇が呑み込みやがった…」

かみしめた上下の歯がギリリと軋み音を立てる。

あの闇は全てを飲み込んできた。

主も…被害者も…そして自分達の記憶も…はやてと過ごした時間の記憶もあの闇に吞まれ…。

「ヴィータ」

「っ、シグナム？」

何時の間に傍に来ていたのだろうか？

気がつけば球体を睨んだまま、シグナムがヴィータの肩に手を置いている。

「気を抜くな、主はやてを救う…絶対にだ」

それはどうしようもない強がりだっただろう。

本格的に暴走が始まった場合、たった四人しかないこのメンツだけでどうにか出来るのだろうか？

相手は自分達のメインシステム…ある意味ではやて以外のもう一人の主なのだ。

「ああ、勿論だ」

だが、その全てを理解した上でヴィータは是と答えた。

本来ならば管理局の囲いを切り抜け、はやての元に戻り、全てを告白した上ではやてに自覚と覚悟を促すはずだったものを、それを一足飛びに飛び越してしまったため、はやてに説明をする暇もなく闇の書にはやてが捕らわれてしまった。

状況は絶望的と言える。

だがしかし、“その程度”の事で何もかもを諦める事が出来るほど、はやてとの日々は軽くない。

「ぜってえ、はやてを助けるんだ」

「ああ、その通りだ」

だから笑う。

不敵に笑って己のデバイスを握り込む、はやてを取り戻すために…もう一度はやてに笑ってもらったために…。

「シグナム!!」

「む、テストロッサか？」

振り返れば、一時間ほど前には敵として刃を合わせていたフェイトがこちらに向かって飛んでくる。

「あたいもいるよ!!」

「僕も!!」

しかも一人では無い。

使い魔のアルフと、ユーノも一緒だ。

シグナムの眼前で制動をかけた三人が停止する。

「……事情は大まかに聞いています。はやてが……闇の書の主だったんですね？」

「ああ、その通りだ」

もはや隠す意味もないとシグナムが告白する。

他の三人も、特に何かを言うつもりはないようだ。

事ここに至り、秘密にする理由がなくなったからだろう。

「……すまない。なのは嬢が主と共に取り込まれた」

シグナムだけでなく、ヴォルケンリッター全員がなのはの行動を止めることができなかった。

何故なのはがあんな行動をしたのかも、その理由も理解している。

「本来ならば、我々がやらなければならぬ事だった物を……すまない」

いきなり目の前で暴走が始まったなどと、いいわけにもならないだろう。

実際なのはは動けたのだから。

「……なのはは無事です。こちらで確認が取れました」

「そうか、何よりの朗報だ」

フェイトの情報提供に、シグナムが演技などでは無い心の底からの安堵の息を吐いた。

なのはの行動は……勿論、家族を守るための物ではあったが、同時に彼女が行動していなければ、ヴォルケンリッター達はここにいなかったかもしれない。

それを自分達の為じゃなかったからと、関係ないと言えない程度

には、シグナム達は不器用で義理がたい。

「これからどうするつもりですか？」

フェイトが表情を改めて問いかける。

「主を救出するつもりだ。なのは嬢が無事と言うならば、主も無事の可能性が高いからな」

「ねえちゃんを放っておけねえしな、ついでに魔王も救出してやるよ」

シグナムの言葉を継ぎ、憎まれ口を叩くヴィータを見たフェイトは頷きで返す。

「…分かりました。ではこれを…」

フェイトが放り投げた物を、シグナムとヴィータがキャッチする。受け取った物を確認した二人が目丸くした。

「これは…」

「カートリッジじゃねえか!？」

ヴィータの言うとおり、それはカートリッジだった。

今の二人に一番足りないもので、はやてとなのはを助けるためには一番必要な物だ。

「規格はあつていと思います」

「ありがたい…が、いいのか？」

「私達も、なのはとはやてを助けたいんです」

フェイトの言葉にアルフとユーノが頷く。

助きたい人間がいて、助きたいという思いに立場は関係ない。

特にフェイトにとっては、なのはもはやても友人なのだ。

「…感謝する。その、妹御の事は…すまなかった」

「アリシアなら大丈夫です。少し疲れたようでアースラで休んでいます。魔力は多い子ですから」

「少して…それは多いというレベルに収まるものなのか？」

高位魔導師十数人分の魔力を少しとか言われれば、シグナムでなくとも突っ込みを入れたくなるだろう。

まずアリシアが人間かどうかから疑わなければならない。

「そ、それに、アリシアを襲ったあの男の人達ですけど…」

流石にそれを追及されると痛いところを掘り返されかねないので、フェイトがあからさまに話題を変えた。

「ロツテ達の事か？捕まったのか？」

「はい、ルビーさんが…お仕置きしてから捕まえたそうです」

言ってから、フェイトが気まずげな空気を纏った。

よく見ればアルフとユーノも似たり寄ったりだ。

その微妙な反応を、シグナムとヴィータは理解できない。

「よくわかんねえけど、甘いんじゃないか？あいつらがした事を忘れたのかよ？」

納得が出来ないヴィータの意見は尤もだと思う。

あの二人がやった事は、お仕置きで済ませていいものでは無かった。

もし、目の前に現れたなら殴りかかっているだろう。

「ああ、それに関しては大丈夫だろ？今回はっかりはルビーが本気で怒っていたからね…かわいいそうに…」

「なんだそりゃ？」

やはり理解は及ばない。

及ばないが…急に遠い目になったアルフにそれ以上問いを重ねるのは何故かためられる。

「な、なあシグナム？あたい何か変な事を言ったっけか？」

「いや…しかし、多分これ以上追及しない方がいいのだろうな…」

ヴォルケンリッター達は直接的にルビーから受けた被害が少ないので、納得しろと言う方が難しいかもしれないが、本格的にルビーの被害にあうのもどうせそう先の話では無いだろう。

その時になってやっと彼女達も気がつくはずだ。

人間、知らなくていい事も存在するのだろうと思う。

「シグナム！！」

微妙にぬるい感じの空気を、シャマルの鋭い声が切り裂く。

一瞬で全員が戦士の顔に戻り、球体を振り返った。

「いよいよ来やがるか!？」

球体が黒く発光している。

脈動するかのようなリズムで身を震わせ、中心に向かって収縮していく。

現われたのは小柄な人影だ。

「……はやて(ちゃん)!!」「……」

異口同音、複数の口から放たれたのは間違いなくこの騒動の中心人物……はやてだ。

見間違えようなど無い。

「はやて、何してんだよ!!」

「冷静になれヴィータ!!あれは主では無い!!」

飛び出そうとするヴィータを、シグナムが制止する。

現われたはやてには、いつも感じる温かさが無い。

瞳からはハイライトが消え、どこを見ているかさえ分からなかった。

仮に、あのはやてが本人だとしても、少なくとも正気ではあるまい。

「我は……闇の書の主……」

はやての姿で、はやての声で放たれた言葉に込められた何かが、場の空気を重くし、プレッシャーとなる。

「やはり……主では無いか……」

ベルカの騎士に、言葉の圧力だけで足を止めさせる……はやてにこんな事は出来まい。

「この手に力を……」

掲げた手の中に、闇の書が現れる。

その名の通り、闇色の魔力を放出するそれは、ただ在るだけで強烈な自己主張をしている。

「封印……解放」

『Freilassung』

はやての姿をして何者かの言葉に応え、闇の書の封印が解放され

る。

嵐のように渦巻く漆黒の魔力の中、はやての姿が成長し、別の誰かに変化してゆく。

すらりと伸びた四肢を、夜色の外套が包み、露出した肌に拘束具のような帯が巻きつく、背に開いたのは二対四枚の漆黒の翼だ。

長く伸びた髪が銀色の輝きを放ち、耳の部分からは漆黒の羽が生えた。

「また…全てが終わってしまった」

「……………っつ！」「……………」

左右の頬に赤いラインが走り、まぶたの下から血のような深紅の瞳が現われる。

それを見た全員が、己のデバイスや拳を構えていた。

意識するより早く、現われた脅威を認識した本能在戦闘態勢を取らせたのだ。

この未だ名も知らぬ女は…危険だと…空気が…圧迫感とその密度を加速度的に上げていく中で…女が動く。

「皆おひさしぶりー！ー！皆のアイドル、闇の書さんだニャー！ー！」

「……………は？」「……………」

そしていきなりやらかした。

キラ な感じにウインクしながらポーズをとる女…本人曰く、闇の書さんはさっきまでの硬質的な雰囲気は何処へやら、擬音をつけるならば“キャルン”で砂糖のように甘ったるい感じだ。

更には頭の上でピコンと立ち上がって自己主張したのは…。

「……………ね、ネコ耳！？」「……………」

目元も、最初の鋭さは何処へやら、アーモンド形にトロンと柔らかくなっていて、威圧感などかけらもない。

あるとしたらむしろ癒しオーラだ。

「えっと…お前誰？」

何とか問いかけることに成功したのはヴィータ…他の連中はまだ、

闇の書の豹変によるギャップのはざままで茫然自失のまま戻ってこれていない。

なんとかデバイスなどを落とさずにすんではいるが、今なら並み以下の魔導師にだって楽勝で勝てるのではあるまいか？

「あ、おはろーヴィータン、一万年と二千年前から愛してるよー相変わらず幼児体型だニャー？」

「やかましい！！何でいきなり初対面の相手にマイナーな卵料理みたいな呼ばれ方した揚句、一番でっかい劣等感ぶっ刺されなきゃならねえんだ！？」

元々切れやすい性格をしていたが、一瞬でヴィータが切れた。

それを見た闇の書が一昔前のいわゆるぶりっ子スタイルを取る。

「ええーひっどーいヴィータンったら、私の事を忘れちゃったのかニャン？」

「そのあからさまに男に媚を売る語尾と、わざわざ両手で挟むバスト強調のポーズをとりやがったのは何か？あたしに対する当てつけかよー！？」

「うん当然、未来に期待できないヴィータンはただのロリなのだ。ほーらほーらヴィータンには逆立ちしても不可能な胸の谷間ニャン。うらやましいニャロメ？」

「決めた…てめえは敵だ！！」

胸の下で腕を組み、神経を逆なでしまくる闇の書にヴィータが宣戦布告し、同時に断言する。

こんな奴は知らねえと…正直に言えば頭の片隅と言うか、遠いいつかの記憶の中にこの闇の書を名乗る女の姿があるようなないような気はしているのだが、少なくとも中身とは初対面だ。

こんな濃いキャラと出会っていたら、いくら記憶が摩耗しようが絶対に忘れないに違いない。

よしんば知っていたとしても、グラーファイゼンの頑固なシミにするのだから関係ないと自己完結した。

まーさーにカオス…何と頭の悪い会話だろう？

「……」

闇の書の中から、同じ光景を見ていた“三人”は目を丸くし、ポカーンとした顔になっていた。

特に自分のそっくりさんのはっちゃけぶりを見た管理人格の女性なんか魂が抜けかけている。

色も消えて真っ白……トーン代が浮きそうだ。

「え、えつと……な、何って言ったらいいか……」

「え？い、いや違う、違うんです……」

なんとか自我を取り戻したなのはが何かを言うより早く、抜けかけていた魂を飲み込んだ彼女が反論するが、まずは主語を入れる……一体何を否定したいのか全然わからない。

「い、いや……意外やったな……お姉さんも案外大胆なんやね……」

「だ、だから違うんです主……！あれは私ではありません……」

「って言われてもな……」

モニターに映る女性と、目の前にいる女性を同時に視界に入れて見比べる。

わざわざそんな事をしなくても、着ている物が違うだけで瓜二つだ。

あえて違いを探すならば、

目の前にいる方の印象を奇麗、現実世界にいる方は可愛いという感じだろうか？

「……奇麗系の一号と可愛い系の二号でファン層もばっちりゲットやね、結構あざとい営業するな……」

そしていつかV3へと……って何が営業やねん？

「だから違うんです……！何かおかしいんです……！陰謀です……！バグです……！」

見えて哀れなくらいにうろたえている。

最初に見た時には機械みたいに冷淡な感じだったが、案外表情が豊かしい。

「あ、あの…闇の書は元からおかしかったと思うんだけど…」

「しゃらっぷ魔王！！そう言う問題では無い！！」

「ま、また魔王って呼ばれた……！！」

勇気を出したなのはの発言だったが…主以外には全然容赦ないなこの女…しかも、ほぼ唯一の突っ込み役をつぶしやがって、どうやってこの場を収めるつもりなんだ？

はやては根っからのボケ役だぞ？

「し、少々お待ちを……！！」

レストランの注文取りのような事を言っただかと思えば、いきなり複数のウィンドウを開いた管理人格さんが、ちよっと血走った眼を皿のようにして覗き込む。

しばらく高速でスクロールしている画面をにらんだ後、はっとして動きを止めた。

「こ、これは……」

「ん？何か言い訳の材料でも見つかったのん？いい加減自分の隠された一面を受け入れんと……」

「言い訳じゃありません主！！私にあんな頭軽いアパー属性もないです！！それよりこれを見てください！！」

「どれどれ…おお、これは……」

「わかっていただけましたか……」

モニターを覗き込んだはやてが盛大に声を上げ、女性が心底ほっとした安堵の溜息を吐く…甘いな…何にも分かっていない。

「いんや、全然わからん。何って書いてあるのかさえな」

ヴォルケンリッターの主であっても、はやて自身はあくまでも魔法の素人なのだ。

複雑な術式を見せられた所で一ミリたりとも理解出来るわけがない。

そこの所を分かっておらず、ぬか喜びさせられて突き落された管

理人格さんが盛大にこけた！この女、少なくともボケのリアクションは出来るらしい。

「何で半端に理解したみたいないな反応をするんです！？わからないなら分からないと言ってください！！」

「うん、そっちの方が面白そうやったから、それでこれは何なん？」

「うわ、主じゃなかったら殴りたいー！！」

盛大な下剋上発言！そろそろパニックでショートするんじゃないかな？

すでに泣き出しそうになっているのが哀れだ。

「と、とにかくですね、闇の書の中に変な魔力があるんです！！」

「変な魔力？どんな魔力ですか？」

やっと復活してきたのはも会話に加わって来た。

魔導師でもあり魔術師でもあるのはだ。

少なくとも、素人のはやてよりは話が分かるだろう。

「よくぞ聞いてくれた魔王、貴女がここにいてくれたことに感謝を！！」

「レイジングハート！いい加減撃って良い？」

『もう少しでも話を聞いてからにしましょう。何か予定外の事が起こっているみたいですし、聞き終えた所でGOです』

「とにかく、蒐集した魔力に変な物があって、それが外側の私に影響を与えているんです！！」

つまり、外にいるドッペルゲンガーさんがかしいのは、その魔力に影響されたからだと言いたいらしい。

「はあ、言いたい事は分かるんですけど、そんな事がありうるんですか？」

なのはの疑問は尤もだろう。

蒐集の能力は、闇の書の前身である夜天の書からの物だ。

元々魔力を蒐集する能力を持つデバイスが、吸収した魔力によって動作不良を起こすなどと言うのは本末転倒にも程がある。

普通ならば、真っ先に対策を立てられるべき問題のはずだ。

「そ、その通りなのだが…しかし事実影響は出ているわけで…」
「どうやら、書を管理する役目を持った彼女にも理解できない事らしい。」

パニックを経験して感情の制御がきかなくなったのか、うーんと言う感じに唸っているのがちよつと可愛いと思う。

この短時間でえらい変わりようだ。

「具体的には、どんな魔力なんですか？」

「それが、私も未だかつてみた事のない魔力で…あえて言うなら猫っぽい？」

「猫っぽい？」

それは、外の彼女の頭にあるネコ耳とかに関係しているのだろうか？

だとしたらめちやくちや影響を受けているな…。

「猫からも収集できるんですか？」

「リンカーコアを持つていれば可能だ…が、この魔力は猫とちよつと違うような…何だこのどす黒い…いやむしろどすグロい魔力は…一体騎士達はナニからこの魔力を蒐集したんだ？」

管理局で最高レベルの危険指定を受けているデバイスが唸っている姿と言うのは、おそらくかなりレアなのだろうとは思う。

問題の魔力と言うのは、話だけでも何やらあまりまっとうな代物ではなさそうだが…そんな訳の分からない魔力を持つている猫っぽい何かとは一体どんな生き物だろうか？…何故かあまり追求したくない衝動を感じる。

「ああ、なのはちゃんあれ…！」

「ええ？あーーーーー！！！」

はやての声に振り返ったなのはは、外の様子を見た瞬間に全てを悟り、叫んでいた。

『あはあ』

「ムム、何者ニヤ!？」

いきなり聞こえてきた間延びした声に、やたらと芝居がかった口上で闇の書が反応する。

ただし、何者とか誰何するまでもなく、この状況で「あはあ」

とか言いつつ介入してくる奴なんて一人…もとい、一本しかない。「とうとう来たよ…」

「来ちゃいましたね」

「あいつお祭り好きだからな、参加しないわけねーんだよな…」

フェイト、ユーノ、アルフはすでにあきらめモードで声の聞こえた方向を振り返れば、案の定ビルの上にいるルビーと…。

「何でアリシアまで!？」

フェイトの叫ぶ通り、アースラで休養していたはずのアリシアまでする。

『さてさて、そろそろ行きましょうか。でもアリシアちゃん?体は大丈夫なんですか?』

「は、はい。もうすっかり大丈夫です」

ジュエルシード20個分の魔力マジパネエ、チートすぎる。

「アースラで休んでいたのだって、姉さんの過保護なんです。子供扱いして、本当は私の方がお姉さんなのに」

ぷくーっと頬を膨らませている幼女をお姉さんと言うのは色々難だろう。

ほっぺを突つついてぷにぷにしたいとは思うがなあ!!

『ではでは、問題無しって事でキバっていきましようか』

「はい、お願いします」

『ガブツとな』

別に噛んではない。

もともとルビーに歯はないし、しかしこういうのは様式美であって理由は二の次だろう。

ルビーから七色の光があふれ出し、アリシアの体を包み込む。

光が弾けたそこにいたのは、魔女っ子姿のアリシアだ。

「さ、颯爽登場！魔法美少女！！」

『真打登場！マジカルルビーちゃん！！』

ビシッとポーズまでつけて、変身が完了した。

同時に、お約束の花火が上がってもものすごく派手だ。

「ル、ルビーさん？う、上手くできたでしょうか？」

『エクセレント！！完っぺきですよアリシアちゃん！！』

「で、でもみんな静かになっちゃいましたけど……」

『アリシアちゃんがものすごくかつこ可愛いからです！！（断言）』

「そ、そうなんですか？」

『そうなんです！！（断言）』

ことばたくみにようじょをだまするびーには、てんばつがくだればいいとおもいました……マル。

『つてわけでその猫娘！！』

「は、はい？私ですニヤ！？」

脈絡も何もあつたもんじやないが、他に猫娘に該当する人物はいない。

『あはあゝ海鳴の町でお茶目や楽しい事をするときはまずルビーちゃんに許可を取らないといけない決まりを知らないなんてどこのモグリですか？月に代わってお仕置きしちゃいますよ？』

「そ、そんな決まりがあつたのかニヤン！？」

「………ないない………」

慄く闇の書に全員で否定してやった。

いくら海鳴が地方都市だと言っても、そんなふざけたローカルルールなんてあつてたまるか……さつきから思っていたのだが、この猫娘……ヴァーカだ。

間違いない。

「だ、騙したニヤね！？」

『騙される方が悪いんですよ』

憎々しげな闇の書と、悪人な台詞を吐くルビー…一体誰がこの状況を収めるのだろうか？

「くうう、よく分からない脅威を感じるけれど、負けニヤいニヤ！

」！

『あはあゝど〜んとやってみなさ〜い』

両者の背後でちよつと造形が狂った竜虎が相打っている。

お前ら…主人公^{なのは}抜きで盛り上がり過ぎだろう。

第十五話 U n k n o w n (後書き)

誠に勝手ですが、以下の質問やそれに類する質問には答えられませんが。

Q さあ、お前のネタを数えろ！！

A 最初に言っておく、俺も知らない。

一話に三つくらい平均として……そろそろ三桁は超えているんじゃないかと思う。

えゝ型月作品を知っている人ならこの話で大体の展開は読めるでしょう。

そうです。

奴の影があります。

第十六話 What is your name?

「それはつまり、認めると言う事で宜しいのですね？」

「ああ、認めるよクロノ」

管理局の英雄と呼ばれるギル・グレアムは静かな口調で己の罪を
自白した。

勿論、クロノが証拠を固めてきたため言い逃れができないという
ものもあるのだろうが…グレアムの顔に浮かんだ表情には、何所か安
らいたものが滲んでいた気がしたのは気のせいでは無いだろうとク
ロノは思う。

「…では確認します」

だが、クロノはそれには触れずに話を続ける。

今グレアムの中にある思いをクロノが理解する事はきっとできな
いし、出来ると思う事は傲慢だろうと思う。

それは何処までもグレアムだけのものだ。

「11年前の事件から貴方は独自に闇の書の転生先を探していた。
そして見つけたんですね…新たな主となった八神はやてを…」

「その通りだ。そして私は闇の書の転生を止めたかった。転生する
闇の書を止める方法は一つしかない」

完成し暴走が始まるまでの間を狙い、極大凍結魔法によって両者
を氷漬けにする。

これによって闇の書は主を吸収して転生する事も出来ず、主共々
永久封印するというのがグレアムの計画だった…のだが…。

「それが…まさか…杖一本に十年をかけた計画を潰されるとはな、
しかも無自覚にか…私は何をしてきたんだろうなクロノ？」

「じ、自分にはお答え出来かねます」

一気に老けこんで歳以上の老人になったグレアムから、クロノは
気まず過ぎて視線をそらした。

確かにグレアムは許されない計画を立て、ロットとアリアを使っ

て実行しようとした。

それ自体に同情の余地はないが、それ以外の事については多少気の毒に思うくらいは許されるのではないかと思う。

そらした視線で周囲を見回せば、目に痛いほどに白い壁と書類タワーが乱立する室内はやたら白ばっかりだ。その純白は目に痛いほどで、クロノにもいささか覚えのある風景だ。

「また、増えましたね……」

似たような修羅場を経験した回数がすでにふた桁にかかっているクロノにして見れば他人ごとでは無い。

壁の白さは病院の証、間接的にルビーのせいで卒倒したグレアムだが、それ自体は数日で退院した。退院したのはいいのだが、その間に溜まった仕事が凄まじい量になっていて、その激務の為にほとんど間をおかずバツク・トゥ・ホスピタルしたのだ。

ただでさえ、管理局の騒動が治まらない昨今、猫の手も借りたい所での数日の休みはいろんな意味で致命的だった。

それから数回、病院と職場を行ったり来たりしたグレアムは悟った。「どうせぶっ倒れるなら病院で仕事すればいいじゃない」と開き直ったのだ。そんなわけでこの有様である。

まずはその頻繁にぶっ倒れる生活から改善しろと言いたいが、現在の管理局の状況がグレアムにそれを許さない。

おかげでグレアムは締め切り間際の漫画家の如く、病室に缶詰で仕事を捌くはめになり、激務と療養を繰り返して外出も困難になった。

おかげで闇の書やはやてに対して何も行動する事が出来ず、猫姉妹に計画を丸投げするしかなかったんだそう。しかもその姉妹はまとめてルビーにお置きされたというわけで、直接的にも間接的にもルビーのせいでグレアムの計画は潰されたというわけだ。

「う、ごべんなさいおどうぞま〜！」

「できのヴあるいむずめですいませんー！」

マジ泣きのロッテとアリアがグレアムに縋りつく姿は、どうしよ

うもなく哀れだった。

全身に湿布を貼つてのろのろとしか動けないでいる姿は亀のようでもある。

使い魔とは言え、外見も中身も女性な彼女達の姿は見れたもんじやない。

ルビーのお仕置きを受けた人間の末路は何時でも誰でも哀れである。

「ロツテ、アリア…お前達のせいでは無い」

「お父様！！」

シップの匂いがとんでもないが、それでも嫌な顔せず愛娘を優しく抱きとめるグレアムに男を見た。

「それにしても空気が悪いわね、こんなじゃ病気になるわよ？」
しかし、その感動的なつながりを他人に求めるのは酷というものだろう。

姉妹の湿布だけでなく、病院特有の消毒剤の匂いと、父娘による家族ドラマの熱気に当てられ、付き添いで一緒に来ていたプレシアが、部屋の空気を入れ替えようと窓を開けたのはなにも責められることでは無いはずだ。

空気が悪いのは病人にとっていい環境とは言えないはずだから…。

「ああ！！開いた窓から風がーーーー！！」

「徹夜で終わらせた決算済みと未決算の書類が混ざる！！混ざってしまうーーーー！！」

「書類タワーが不吉な振り子運動を始めちゃったーーーー！！」

騒ぎを聞きつけて飛んで来た看護師さんにメッサ怒られました。

「…話を戻そう」

五人で仲良く頭にたんこぶを作り、椅子とベッドにそれぞれ座りなおして話を再開する。

あの看護師…相当な武闘派と見た。

元武装局員か何かじゃないだろうか？

しかも、グレアムを管理局の英雄と知ったうえで遠慮なく殴り飛ばすあたりが一番只者では無い。

「提督は彼女が天涯孤独となった時に、後見人になって色々生活の援助をされていますね？」

差し出したのはグレアム宛の手紙と、はやてがヴォルケンリッタ達と共に写っている写真だ。

それを見たグレアムが目を細める。

「…家族がいない彼女ならば、悲しむものが少なくなると思った。

それでもせめて…永久凍結で人生を奪ってしまう彼女に不自由な思いはさせまいと…偽善だな…」

吐きだされたため息は深く重い。

様々な思いが、その呼気には含まれていたのだろう。

「…提督のお話は分かりました。しかし、八神はやては犯罪者ではありません。闇の書の暴走が始まるまで彼女に永久凍結されるほどの罪はない。貴方がやった事は…違法です」

「クロススケー！！」

クロノの物言いに反論の声を上げたのはロツテだ。

「そんなきまりに縛られていたら、どんどん被害者は増えるんだよ

！ 今ならまだ一人の犠牲で、沢山の人が救われるんだ！！」

「今からでも遅くない。私達を解放して…封印できるのは暴走が始まる数分間だけなんだ」

「法律を守る側にいる人間の言葉じゃないな、八神はやての犠牲を前提に話を進めるな、罪もない人間を永久冷凍するという事は殺人と同義だ。君たちは殺人に行くから自分達を解放しろと言っているんだぞ？」

「…うっ」

殺人…そのあまりにもストレートする物言いに、ロツテとアリアが息をのむ。

まったく考えなかったという事はあるまい…文字通りの苦悩もして覚悟も決めたはずだが…改めて自分達がやろうとしている事を突きつけられてひるんだのだ。

それが当然、人を殺すという事は割り切ったつもりでも割り切れるものではあるまい。

管理局全体を見回しても、殺人を経験した人間は少ない、勿論口ツテとアリアにもないだろう。

非殺傷設定という便利な物がある以上、結果的に死んでしまったという状況はあっても進んで命を奪う必要はない。

だが、八神はやてのケースは違う。

彼女には殺される理由がない、罪のない人間を永久封印する事は、いい訳の効かない“殺人”だ

「そんなに気に入らないなら管理局何かやめてしまえ」

「くっ！偽善で誰が救えるの！？ 実際に1000人は一人の百倍で、1000人は一人の千倍だ！！クロスケは一人の為にその何倍もの人を見捨てるの！？」

「命を数で数えたいなら、自分の命だけ数えている、他人の命を勘定に入れるな」

必死で言葉を重ねるロツテと、クロノの言葉少ない冷静さは対照的だった。

「ロツテ…本当に命の価値が平等なら、大勢を救うために一人を犠牲にするという理屈は通るだろうが、“命の価値は平等じゃない”んだよ。世の中には娘の命を取り戻すために、世界その物にさえ真っ向から喧嘩を売る母親だっているんだ」

クロノの言葉にプレシアが身じろぎしたが、それ以上何も言わずに黙っている。

「命の使い方なんて、他人が決めていいものじゃない。ましてや犠牲なんて、他人に押し付けられていいもんじゃない」

「そ、そんな奇麗事で…あんたのお父さんだって自分を犠牲にしてみんなを助けたんだよ！？」

「ロツテ…それは父さんに対する侮辱だ」

「な!？」

意外過ぎるクロノの反応に、ロツテが言葉に詰まった。

本気で怒っているのが、その睨みつけてくる目を見れば良く分かる。

「父さんと八神はやては違う。父さんは自分から命を投げ出して皆を救おうとした。八神はやては破滅の運命を押し付けられた被害者にすぎない」

前提からして違うのだ。

クライドの自己犠牲と、望まぬ力を手に入れただけのはやてを比べるのは……侮辱だ。

「クロノ…あんたも闇の書の被害者でしょ」

絶句したロツテに代わり、アリアが憐憫の表情でクロノを見る。

この歳で執務官になるのは容易なことでは無い。

クロノ・ハラオウンの才能が、もともと低かった事を、彼の体術と魔法の師匠であったロツテとアリアは知っている。

それなのに、彼は執務官となった……その原動力に、闇の書に対するわだかまりがなかったという事はあるまい。

「…もういい、ロツテ、アリア…もう良いんだ」

沈黙が降りてきた病室の時を動かしたのは、グレアムの静かな言葉だった。

「クロノ、一つだけ聞かせてほしい。そこまで言うのなら、何か策はあるんだろう?」

「あります」

返事は即答だった。

「かなり運の関係するプランで、最終的には人任せになりますが、この方法ならばきっと皆が救われます」

「そんな都合のいい話があるのかい?」

「正直、成功するかは未知です。確率は低いというほかありません…しかし…」

揺るぎなく自分に向けられるクロノの視線を、グレアムは真正面から受け止めた。

「それでも、最後の瞬間まであきらめません。全力全開で。何故ならば、僕達が諦めるって言う事は、それだけで誰かの命や大事な物が失われるのだから……」

「……その通りだ。我々は常にぎりぎりの所にいる」

クロノの言葉に頷いたグレアムは……しかし、一転して苛烈な目でクロノを見る。

管理局の英雄……その本気の威圧感に吹き飛ばされるような感覚を覚えながらも、クロノは耐えた。

「もし、君の計画が失敗し、闇の書の暴走が始まってしまった時、君はどうする？」

「その時は、この手で止めます」

暴走した闇の書を止めるには、主の死が必ず伴う。

クロノはそれを自分の手でやると宣言した……それはかつて、グレアムが通って来た道だ。

「……人の命を奪う重さを背負うつもりかね？」

グレアムの視線がクロノから落ちて自分の手を見る……この手が十年前、アルカンシエルの引き金を引き、闇の書に犯された時空航行艦エスティアをクライドごと消滅させた。

「……救おうとした相手を殺す矛盾は……重いぞ？」

体験者の語る真実だろう。

グレアムは、管理局の中でも少数の……その手で人の命を奪った経験のある人間だ。

そして、クロノの父に安らぎをあたえた人物……仕方がなかったこともある。

グレアムのやった事は最善であつただろう……しかしそれは、本人が人を殺したと自覚している以上、慰めにもならない。

「……クロノ」

「はい……」

「……いい執務官になったな？」

「いえ、まだまだ若輩者です。僕だけの力ではありません。本当は提督に偉そうなことを言う資格なんてないんです」

クロノは一度、フェイトを見殺しにしようとした。

明らかに操られている少女を、保護しなければならぬ対象を、より多くの為に犠牲にしようとしたのだ。

それをルビーに救われ、士郎に諭された。

「良い……出会いに恵まれたようだ」

クロノの告白を聞いて、グレアムは眩しい物を見るかのように目を細めた。

「願わくは、それを教えるのは私でありたかったが、そんな資格も必要もなかったのだな……」

「提督……貴方はこの十年、ずっと探していたんじゃないんですか？ 八神はやてを死なせることなく、闇の書を封印する方法を……誰もが幸せになるそんな方法を……」

クロノの言葉に苦笑して、グレアムは頭を振った。

「……私には、あの子を犠牲にする方法しか……他に手だてを思いつかなかった。十年前も、今この時も考え続けていると言っただけ……」

彼が重ねた十年分の悩み、葛藤、罪悪感……それはきつと、この老人の肩に重い荷物となって積み重なっていたのだらう。

「せめて、相談してほしかった。何故全て一人で抱え込んでしまったんですか？」

「すまない。言い訳になるかもしれないが、君達を巻き込みたくなかった」

グレアムは……己が犯罪を犯す事には覚悟できても、クロノ達まで犯罪者にする覚悟は持てなかったのだらう。

本当ならはやてを犠牲にする事だって割り切れていまい……もし納得しているのなら、そんなつらそうで疲れた顔はしないはずだ。

「……」

会話が途切れ、言葉が消えた。

何かを言ってもそれは全て無粋な音でしかない誰も分かっている。

それに、たとえば言葉がなくても伝わる物はあるはずだ。

「現場が心配ですので…そろそろ行きます」

「そうか…」

もはや話す事はないと…見舞客用の椅子から立ち上がったクロノを見て、グレアムはサイドチェストの引き出しを探ると、カード状の待機状態になっているデバイスを取り出してクロノに差し出す。

「これは？」

「闇の書を封印する為に用意していたデバイス、デュランダルだ。極大凍結魔法がインストールしてある。もって行きなさい」

「ありがとうございます」

差し出されたデュランダルを、クロノはガシツと力強く受け取った。

持っているグレアムの“腕ごと”…。

「お、おや、クロノ？何でデュランダルではなく私の腕を掴むのかね？しかもマダムプレシアまで襟首を掴んで部屋から引きずり出すとしている気がするのだが？」

「ご安心ください。それは気がするでは無く現実で事実ですから」

「誰が、子供達に丸投げして病室で隠居なんて決め込ませると思っていたのかしら？甘いわね」

ずるずると、少なくとも病人相手にする行動では無い乱暴さでクロノとプレシアがグレアムを引きずって行く。

「提督にも一緒に現場まで来て見てもらいます。申し訳ありませんが拒否権はありません」

「…私に、自分の罪を直視しろと言う事か？」

「いえ、もつと単純にあの連中がどれだけ規格外れでたくましくてあきらめが悪いかを体験してもらいたいと思っただけですよ」

「あとは、ちゃんとはやてちゃんに面と向かってわびを入れさせるためね」

「急がないと見せ場が終わってしまうかもしれないので急ぎましよう」

グレアムが見たクロノとプレシアの横顔は、悪戯っ子のようなニヤリ笑いが浮かんでいた。

「…何か君、変わったな？」

小さい頃から見知っているクロノの短期間での変化を見て、クロノをこれだけ変えた連中との対面にグレアムは戦場で感じた恐怖に近い物を感じていた。

男子三日あわざればと言うが…これは何か違う気がする。

「お、お父様」

「まって」

自分の弟子であつた少年の、あまりと言えばあまりな物言いと行動にあっけに取られ、部屋を出て行ったあとではつとした猫姉妹が三人を追いかけて部屋を飛び出していく。

そして誰もいなくなった…残ったのは書類タワーだけだ。

再び彼等がここに帰って来たとき…追加とか追加とか追加とかでとてつもない状態になっていたりするのだが、それはまだまだ先の話だったりする。

そんな風に、クロノ達が一つのヤマを越えた同時刻、あきらめが悪くてたくましいと評された連中が何をしていたかと言えば…緊張が臨界点に達しようとしていた。

もっと正確なところを言えば、ルビーを構えたアリシアと闇の書の間でバチバチつと火花が飛び、他の面子はそれを囲んで緊張しているという構図だ。

『あはあ…いっきますよ闇の書さん？準備は十全ですか？』

「受けて立つニヤー！！」

「が、頑張りますから！！」

見た目は一騎打ちではあるが、どうにもアリシアが添え物の感が強い。

闇の書との対峙において、主導権を握っているのは明らかにルビィだ。

『受けて見てください!!』

宣言とともに、ルビィの“口撃”が飛んだ。

『生麦生米生卵!!』

「ニヤまむぎニヤまごめニヤまたまご!!」

『斜め七十七度の並びで泣く泣くいなくナナハン七台難なく並べて長眺め!!』

「ニヤニヤめニヤニヤじゅうニヤニヤどのニヤらびでニヤくニヤくいニヤくニヤくニヤニヤはんニヤニヤだいニヤんニヤくニヤらべてニヤがニヤがめ!!」

『ぜんぜん違う言葉になっていますが可愛いので合格です!!』

「わーい、ありがとうニヤ!!」

合格って…何が?

『合格した闇の書さんにはこのとりいだしましたる最高級鰹節を進呈』

「わーい、嬉しいニヤ」

ルビィが闇の書を手懷けてやがる!?

「な、何やってんだよお前らー!!」

何処から取り出したのか本当に謎な鰹節を差し出すルビィと闇の書に、ヴィータの文句が飛ぶ。

ヴィータの言う事は尤もだろう。

血わき肉踊る弾幕戦や、真正面からのガチンコな接近戦、無数の砲弾を華麗な動作で回避するとかそう言う魔法決戦をイメージしていた所に…こんなほのぼの感はない。

「戦うんじゃないかったのかよ!？」

『戦うですって!?!?そんな…こんな可愛い生き物を相手に闘えと!?!?』

「何でそこで文句が出る！？何が可愛いんだよ！！」

「ニヤ？」

文句を叩きつけるヴィータと、ちゃっかりゲットした鰹節をかじっていた闇の書の視線が交差する。

「な、なんだよ…」

「じくくく」

闇の書は何も言わない。

ただ自分を見ているヴィータを文字通りの意味でじっと見ているだけだ。

何となく二人の間に割り込む事が躊躇われ、再び両者の対峙を全員で見守る形になってしばらく…。

「……………おふ」

「ヴィータちゃん！？」

いきなりくらつと膝からきたヴィータを慌ててシャマルが支える。

「だ、大丈夫なのヴィータちゃん！？何があつたの！？」

「目…」

「目？」

「あいつ…目の色がピュア過ぎる」

闇の書の目は…本当に猫の目のようだった。

しかも純真無垢な子猫のそれ…なんだこの癒し系生き物は？

「あんな奴をハンマーで叩くなんて天が許してもあたしが許さねえ

…」

「そこまで言う！？」

「後悔が…先に立っている！？」

シャマルが呆れを通り越しておっかない物を見る目でヴィータを見た。

ザフィーラも、いつものクールさを崩してあきれている。

闇の書VSヴィータ…戦う前に勝負あり…世界の危機のはずだが、存外以上に余裕綽綽みたいだ。

「…テストロッサ、少しいいだろうか？」

「え？」

完全に取り残された感じになっていたフェイトに話しかけてきたのはシグナムだ。

「すまないが、君の上役に聞きたい事がある」

『何か御用かしら？』

シグナムの願いに、フェイトが返事をするより早く答えたのは、空間に投影されたウィンドウの中のリンディだった。

こちらの状況は常にモニター済みのようだ。

「ありがたい、こんな事を聞くのは正直筋違いだとは思うが、管理局が調べた闇の書に関する事実は正しいのか？」

『どう言う意味ですか？』

「我々も記憶の欠落があつて正しく断定はできないのだが、“アレ”はとてもじゃないが世界を破壊するようには見えないのだが」

『それは…』

リンディも同じ思いだったのか、戸惑っている。

闇の書は数々の破壊を繰り返し、リンディにして見れば彼女の夫の仇だ…敵のはずなのに、出てきたのが天真爛漫で無邪気な猫娘が一匹である…二人の胸に去来するやるせなさの正体は何だろうか？例えるならば、「お前も蠟人形にしてやるー！ー！」な感じのデ―モ的な閣下や、放送禁止用語を一秒間に十数回叫びやがるデスメタルな二世が来ると思っていたら、萌え萌えなコスプレッ子が出てきた感じ？

あながち間違っていない所が実に“アレ”だ。

「ニヤ？」

『「ん？」』

妙な声に、シグナムとリンディが振り返って見れば、ネコ耳をぴんとたてて何かを考え込んでいる闇の書がいる。

まさか二人の話が聞こえたのだろうか？

あまり大きな声ではなかったはずだが、耳が四つになっているのは伊達では無いのか？

「おお」

やがて何かに思い至ったのか、闇の書がポンと両手を叩いて納得の顔になる。

「思い出したニヤ、私は色々壊すために出てきたんだったんニヤ！」

「……………何———！？」「……………」

こいつ…ひよつとしなくても自分の存在意義をきれいさっぱり忘れていたのか？

いくらヴァーカだからって…むしろヴァーカだからこそ？

「ありがとうシグニヤム」

「……………シグナム………！！」「……………」

「わ、私のせいなのか！？」

では誰のせいかと言えば…やはりシグナムだろう。

他に該当しそうな人間がない。

「よ…っし、やりたい事とやるべきことが一致したとき、世界の声が聞こえるんニヤ！！」

「……………そんな声は聞かんでいい！！」「……………」

騙されるな

それはきつと…

守護者フラグ

………字余り。

「だが断るニヤ！！」

断られてしまった。

五指を開いたまま、前に突き出された両手…合計十の指先に、闇色の魔力が灯る。

「げ、あれは！！」

「知っているのかアルフ！？」

「なのはさんの魔術だ！！」

ザフィーラとアルフのやり取りで、その危険性をすぐさま悟った全員がシールド魔法を展開する。

逃げるだけの時間はないし、背中を見せるのはもつと危険だ。

「俺の両手はマシンガンニヤ〜!!」

砲口となった指先から、まさにマシンガンと言った風情の魔力弾が放たれた。

散弾銃のように面の火力となったそれは、各々が展開したシールドに当たり、傘に降り注ぐ豪雨のような音を立てる。

幸い、魔力弾にはシールドを貫通するほどの威力はないようで防ぐことが可能だったが…。

「うおおおお!! 押し込まれる!?!」

ヴィータの言葉は悲鳴だった。

一発一発は十分防げるのだが、それが恐ろしいまでの連射力で休みなく放たれれば話が違ってくる。

弾幕の圧力でシールドごと後退させられる威力と言うのは詐欺だ。距離をあけられるのもまずいが、反撃の隙がなくて防戦一方なのが一番まずい。

一瞬でもシールドを解除して攻勢に回れば、その瞬間魔力弾の波にのまれて撃墜されてしまうだろう。

『むう〜これ本物のガンドですね〜』

「痛い痛い痛いちよつと痛いです!!」

仮とはいえルビーのマスターになったアリシアは、常にAランクの魔術防御が掛っているはずなのだが、その防御をわずかとは言えこのガンドは上回っている。

つまり、防御がなければ痛いでは済まないと言う事だ。

本来の使い手のなのでもここまでの威力はないはず…どうやら威力を底上げされているらしい。

『取り込めたら魔法だけでなく、魔術まで再現可能とは…これはちよつと予想外でしたね〜』

魔術と魔法の両立、その厄介さはほかならぬのが証明してくれている。

意外にも厄介な敵だ。

「ル、ルビーさん、感心している場合ではないと思います！！」
アリシアの言う通りだ。

今の所はしのげているが、各々の持つ魔力は無限では無い。
闇の書に蒐集した魔力の量を考えれば、まだまだ向うは元気いっ
ぱいだろう。

このままの状況ではジリ貧、いずれ力尽きた所で一気に持つて行か
れる。

さっきののんびりほのぼの展開から一転、やはり（シグナムの）
口は災いのもとと言う事が…。

「シグナム…」

闇の書の中から、全てを見ていたはやては体を小刻みに震わせて
いた。

ぐっと握りしめた拳が、彼女の感情の高まりを表しているのだろ
う。

「クールなのに天然…何って美味しい子なんや…あの子には天性の
ボケ役の才能がある…！」

「何でやねん？そう言う問題じゃないよはやてちゃん…！」

こっちはこっちでボケるはやてに、なのはが突っ込みを入れる。

偉大なる先達に倣って、平手の甲で突っ込みを入れてやったら、
はやてが満面のドヤ顔になりやがった…この根っからのお笑い体質
娘が…！

「はやてちゃん、今の状況が分かっているの？少し頭冷やして真面
目になるうか？」

「ぬわ！？なのはちゃんの顔が阿修羅面怒りに！？マジすんません
した！！アシユラバスターはマジ勘弁や…！」

速攻で謝りいれて許して貰いました。

「それはともかくなのはちゃんだけでなく、フェイトちゃんとアリ

シアちゃんも魔女っ娘やったんか」

「う、うん…」

映像の中で堂々と変身したアリシアにはもはや言い訳の仕様もない。

まあ、ここまでくればもはや秘密にする理由もないのだけれど…
そう言えばアリサにもばれてしまったのだった。

どうやって説明するか、今から頭が痛い。

「なあなのはちゃん？ちよつと聞きたい事があるんやけどな？」

「な、何？って近い、近いよ！！それに怖い！！」

いきなりはやてが両肩を掴み、触れ合う寸前の至近距離まで顔を寄せてくればなのはだって慌てる。

「わたしとアリサちゃんが魔女っ娘を探しとるってしつとったのに黙っているなんて、ちよつと友達がいなさすぎとちゃうんかな？」

「に、にや…」

「ひよつとしてあん時の魔女っ娘はなのはちゃんだったりするんか？」

「え、えつと…」

態度は時として言葉より雄弁に物を語る。

このなのはのリアクションとかがいい例だろう。

「…まあええよ」

「え？いいの？」

「うゝん、言えない理由とかあったんやろ？わたしも闇の書の事とか黙ってたわけやしね」

ある意味、この原因の一端でもある。

もう少し早く、なのは達が闇の書を見つけていれば対処の仕様も変わっていたはずだ。

「う、うん…ごめんね」

はやてが…あのはやてが頭良く見える。

「失敬な、学校には通えとらんけど、自宅学習でちゃんと勉強はしとるんよ！…！」

「はやてちゃん…まだ見えない誰かとお話ししているの？」

「お、またやってしもうたか…」

「ダメだよ。他の人が見たら頭が悪い子に見えちゃうから」

「そうやね、気をつけんと」

このやり取り…いくら互いになれた物だからと言ってもおかしくはないだろうか？

「所でなのはちゃん、あのアリシアちゃんもつとる杖は何？」

「え？」

思わずぴくりと反応してしまった。

「ル、ルビーちゃんがどうかしたの？」

「うん、あの杖を見ているとな」

「見ていると？」

「何かいい相棒になれそうだなーって気がするんや」

それは誰にとっても最悪の未来だろう。

「きっと私達はお笑いで天下を取れる気がするんや！！」

「そっち！？」

「しっかし実際問題どうしたもんかなあ…この状況？」

「あ、忘れてなかったんだ」

急に話が飛んだ事より、はやてが今の状況の事を忘れていなかったことの方に地味に感心してしまうのはの反応も、どうしたもんかな？であるがこの際それは置いておこう。

周囲は相変わらず果ての見えない闇、外では闇の書が本格的に破壊活動が始める気配を見せているというかこの時点で外の面子が結構押され気味と来た…ぶっちゃけ時間がないし放っておけない。

ベストなのは、この空間から出て外にいる皆と合流する事なのは間違いがない…間違いはないのだが、外に出るにしても扉の一つも見つからないと言う不親切設計と来ている。

さて、なのはとはやてにできる事は何だろう？

「あうう、砲撃を撃つたらここから出られないかな？」

「…なあなのはちゃん？さっきからなのはちゃんの言動がとっても

危ないような気がするのには気のせいかな？」

“まだ” 一部であるが、既に危険人物指定されているなのは本性を感じているようだ。

友人の知らなかった一面を前にして軽く引いているようにも見える。

『なのは様、少々よろしいでしょうか？』

「レイジングハート？ いい案があるなら少々じゃなくてどんどんよろしいよ」

『ありがとうございます。ここは一つ、闇の書に最も詳しい人物からアドバイスを貰うのが賢明かと思われます』

「おお〜」

なのはだけでなく、はやても関心の声を漏らした。

たしかに、詳しい人間から打開策を聞くのは正論だし、今まで思いつかなかった方が不思議なくらい正攻法だ。

どうも平常心のつもりでいるのは本人だけで、なのはもはやても思考の視野狭窄に陥っていたらしい。

「レイジングハート、その詳しい人って言うのは？」

『勿論、あの管理人格の女性です』

「ありや？ そう言えばお姉さんがおらんようになってるな？」

妙に静かだなと思ったら何の事はない。

物理的に人数が減っていればそれは静かにもなるだろう。

「よ、よろしくに…ニャン」

その一言は、暗い闇の中に消えて行っただ。

元々、ぼそりとした呟きに近い声量だ…二度と戻ってくる事はないだろう。

それでいい…。

「あ、ありがとうございます…ニャン」

二度目の眩くような言葉とともに、彼女は膝をついてうなだれた。全身から絶望とかやつちまった感とか…いろいろ目に見えない物が流出しているような気がする。

「だ、駄目だ…私にはとてもあんな風には…」

「お姉さん…こんな離れた所で何してるんですか？」

「ニャー………！」

最後の悲鳴だけは本当に猫のようだった。

それはなのはの特技なんだが…そして振り向いた先にいたのは本家本元の高町なのは、全部見られたとほとんどタイムラグ無しで理解した女性は、全身が真っ赤になって湯気まで出し始めた。

「ち、ちやう！…ちやうねん！！」

「いきなり関西弁！！」

「魔、魔が！魔が差しただけなんです！！魔導書だけに！！」

「え、えつと、えつと。上手い！！山田君座布団一枚！！」

何所の笑点だ？…慌てる女性に釣られて、なのはも訳が分からなくなっているらしい。

十枚たまったらだれがハワイに連れて行くんだろう？

「ああ、二人共まず落ち着こうか？」

「主！？」

「はやてちゃん！？」

そんな力オスに待ったをかけたのは、意外にもはやてだった。

「なのはちゃん、察してやろうや…自分のそっくりさんが外である可愛い可愛いって大絶賛されたらなあ？分かるやる？」

「だ、だね…自分も試したいと思っても仕方ないよ。誰だって可愛いなんて言われたら嬉しいはずだよね」

はやての言いたい事を理解したなのはがなるほどと納得しつつフオローに加わる。

「あ、主…」

そんなはやてのフオローに、女性が感動して目を潤ませている…って言っちゃ悪いから口にはしないが…この人も案外簡単だちよろいな…。

「せやから恥ずかしがらんでもええんよ？私達女の子やん？可愛く
なりたいと思うのはこれ本能や！！」

はやてが力説している…内容的に間違っているとは思わないが、
大声で断言するほどの事でもないような？

「主、ありがとうございます！！」

「あ、落ちた」

感極まり、はやてを抱きしめる女性を見ながら、なるほどこれが
攻略すると言う事かと理解した。

反応の仕方がフェイトと似ている。

おまけに、抱き合う二人はそのままの流れで自分達だけの世界を
作り出しているの、入っていく事が出来ないのは、おミソに
されて放置だ。

「…あれ？ひよつとしてなのは、ダシにされてない？」

実に美味な味噌汁が出来そうではある。

はやてもはやてで、彼女に見えない位置からぺろちゃんのように
舌を出し、親指を立てて見せるのは何か？

そのとーりとか言いたいわけかこの女？

「そんでな、お姉さん？」

「はい、何でしょう主ははやて？」

完全にデレたお姉さんが、はやての質問に即座に答える…とって
も嬉しそうだ。

きつと彼女の属性は犬だな。

「わたし達、そろそろここから出たいんやけど、どうしたらいいか
な？」

「そうですね、現状において主はやては書のコントロール権限を持
っています。しかし、防衛プログラムが管理者権限を掌握している
為、何もできない状態です」

要約すれば、コントローラーは持っているが、それが肝心の本体
に接続されていない状態と言う事らしい。

つまり宝の持ち腐れと言う事だ。

「どうしたらええの？」

「まず、外に出ている私は防衛プログラムそのものです。これを何らかの方法で一瞬でも停止させれば、その隙について管理者権限をこちらに移し替えることができます」

「もっと簡単に」

「外にいる誰かが全力全開の魔力でぶん殴ればOKです」

思いつきり端折られた。

全力全開はなのはの十八番なのだが…まあ外にいる連中でもやってやれない事はあるまい。

むしろあのキュートな生き物に攻撃できるかという所に不安があるくらいで…やばい、それは本当にまずい問題だ。

あのルビーが邪魔になりそうなのがする。

「よし、そうと決まればちゃっちゃと行こうかお姉さん？…ってそう言えばお姉さんって何って名前なん？」

思えば、最初に会った時に管理人格としか名乗られていない。ずるずるとそのまま来てしまったが、これから協力して事に当たるのだ。

名前すら知らないというのはいくらなんでも不義理というものだろう。

「私は…私には名前はありません」

彼女はあっさりとそう答えた。

書を管理する為に、固有の名词など必要なかったのだろう。

あえて言うのなら、闇の書というのが彼女の名前という事になる。

「そっか、そんならわたしが名前をつけたる」

「名前を…」

「そうや」

はやての声に厳かな響きが混じり、彼女はその足元に膝をつく。

それは正しく臣下と王の姿だった。

「夜天の主の名 において汝に新たな名を贈る。 強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、 リンフォース…あんたの名は今

この時からリインフォースや!!」

「恩命受諾、固有名詞リインフォースを登録しました。ありがとうございます」

ここに契約はなされた。

ただ巻き込まれただけの少女は、己の意志でより深くかわる事を選び、王となったのだ。

「さあ、そろそろ私達もパーティーに乗り込むでー!!」

「はい、主!! 何処までも付いて行きます!!」

あれ？

そういえば、なんでお前が音頭を取る？

主人公はどうした？

「ねえレイジングハート、なんだか最近、なのはの影が薄くなってきて向こうが透けて見える気がするの、気のせいなのかな？」

『なのは様…』

レイジングハートは答えなかった。

それはなのはの心情を慮ったか、あるいはデバイスの悲しさでマスターに嘘がつけないからだったのか…とりあえずなのはのテンションが駄々下がりなのは間違いない……大丈夫なのかこの世界!?

第十六話 W h a t i s y o u r n a m e ? (後書き)

次回は真面目に戦闘シーンを書こうと思います。
それで何とか最終決戦まで入れる…はずだよな？

第十七話 Reunion

「ニヤニヤニヤニヤゝあつとー的じゃニヤいかわが軍はゝ!!」

荒れ狂う闇色のスフィアの中心で、闇の書が愉快そうにのたまう。その言葉は実に的確だ。

宙を舞っているスフィアの数はずでに数えきれないほど多いとしか認識できない。

その中に、嵐に巻き込まれた木の葉のように翻弄される人影がいくつか…。

「ちつくしょ!!数が多すぎる!!」

バリアーやシールドで守りに入ってもらちが明かないと、グラーファイゼンをギガントハンマーにしたヴィータがその大質量を振るった。

確かにその巨大な鉄槌はスフィアの群れをまとめて粉碎し、包囲網に穴を穿つがそれも一瞬、周囲の無事なスフィアがすぐさまその穴を埋めてしまう。

鈍重な一撃は確かに威力こそある物の、相性の問題からこの場を打開するには至らない。

「っち、しまった!!」

それどころか、重量武器につきものの攻撃後の隙にスフィアが殺到してくる。

巨大化し、重量が増しているグラーファイゼンの切り返し速度は最悪だ。

「危ない!!」

「ぐっ!!」

完全に閉じ込められる前に、ヴィータの小柄な体を？つ攫ったのはフェイトだ。

「わ、わりい!!」

「それよりもシールドを!!」

「おうさ!!」

後方に向けて展開したシールドが、追いついてきたスフィアを受け止める。

もはや過去や遺恨はそっちのけで協力しなければ即座に落とされる状況だ。

「…まずい!!」

ヴィータのシールドを避け、進行方向に先回りしたスフィアが反転して襲ってくるのを、今度はフェイトがシールドを展開して受け止める。

「おい!？」

「こっちは大丈夫、それよりも後ろを…」

「くそつたれー!!」

止まった事で、残りのスフィアが二人に追いついてきた。

前後を挟まれ、身動きのできないフェイトとヴィータに全方向からスフィアが殺到する。

「シュランゲバイセン・アングリフ!!」

『Schlangengebeißenenangriff』

絶体絶命の二人を救ったのは銀の蛇だった。

うねる蛇体がスフィアを切り裂き、フェイトとヴィータを守る様に周囲の空間を制圧してゆく。

「無事か!？」

「済まねえシグナム!!」

スフィアを一掃し、とりあえずの安全地帯を作ったシグナムが連結刃を戻しながら二人に合流した。

彼女自身、スフィアに追いかけまわされたのがバリアジャケットの所々に煤が付いているのを見れば分かる。

「ほかの連中は!？」

「何とか落とされてはいない。ザフィーラは…」

「雄鳴鳴鳴!!」

最後まで言い切るより早く、本人の雄叫びが聞こえてきた。

「嗚呼ああ!!」

「アルフ!?」

一緒にいるのはアルフだ。

ザフィーラは拳を、アルフは蹴りでもって闇の書の上から奇襲をかける。

「おお…なんつて、甘いニヤ!!」

「なっ!?」

「冗談だろ!?」

タイミングを合わせた二つの打撃は同時に止められた。

闇の書の二本の腕が無造作に拳と足の裏をキャッチしたのだ。

体重を乗せた蹴りと打撃を細い腕が簡単に受け止めた光景は常軌を逸しているが、残念な事にその全ては現実である。

「まさか、強化の魔術まで使えるのか?」

身体能力の強化、それ自体は単純だ…単純すぎて有効な対抗策がないほどに…。

「大・回・転…!!本日も余計に回っておりますニヤ…!!」

「ぬ!?」

「げ!!」

しかも闇の書は、受け止めただけでは無くそのまま二人を振り回し始めたのだ。

子供が人形でやる様に、ただ力任せに大人二人分の体躯と体重を振り回す。

相手の力を利用するとか、そんな技術的な要素の全くない力技、一体どれだけの魔力を強化につぎ込んでいるのか?

「ぐっう!?」

「うああああ!!」

闇の書がその手を放せば、当然二人の体が遠心力で投げ出される。周りにはコンクリートのビル、この勢いのまま叩きつけられればただではすまない。

「チェーンバインド!!」

「くつつ」

「だあ!？」

二人を救ったのは、蜘蛛の巣状に展開された輝く鎖だ。
チェーンバインドは本来、拘束用の魔法だが鎖状のそれは二人の体とそれに付加されていた勢いをしなる事によって吸収し、抱きとめることに成功した。

「大丈夫ですか!？」

「助かったよ!!」

「かたじけない」

二人とも無事のようにだ。

流石に、あれだけの力で振り回されては無傷とはいかないが、潰れたトマトよりは何倍もましだろう。

「二人共大丈夫!？」

「シャマルか、すまん、油断した。頼む」

「わかつてる。湖の騎士シャマルと、風のリング・クラールヴィンは癒しと補助が本領なのだから」

駆けつけたシャマルの両手で四つの指輪が光を放つ。

光に照らされたザフィーラとアルフに変化が起こった。

「お、おおこりやすごい」

アルフの純粋な感嘆の言葉が漏れた。

気がつけば、二人の傷は完全に回復している。

癒しと補助が本領という言葉に偽りなしのようだ。

「くつつ、遊ばれているな…」

ザフィーラが悔しげに言うとおりの、闇の書に遊ばれている。

比喻でも何でもなく、闇の書は自分達と戦っているとは思っていないのかもしれない。

むしろ猫のじゃれあいに近い感覚であしらっているように見える。ただし、猫は猫でもそれがライオンやトラのような猛獣に分類される生き物だった場合、相手は遊びのつもりでも、その相手に指名されてしまった方はたまったものではない。

「ん？あれはアリシアとルビー！？」

『ちょっと可哀そうですが、狙いは彼女の羽根です。あれを切つて地上に落しますよアリシアちゃん！！』

「はい！！」

空中にとどまっているアリシアからは、魔力の紫電がほとばしっていた。

目に見えるレベルの魔力がアリシア達に集まっている。

「ムム？」

闇の書も、アリシアの存在に気がついたようだ。

その魔力を感じ取ったのか、それとも危険に対する野生の本能か、ザフィーラとアルフを相手にしていた時より難しい顔になる。

「咎人達に、滅びの光を」

指先をルビー達に向けて呪文を詠唱し始める。

同時に、周囲の魔力がその指先に集まり始めた。

「星ニヨ集え、全てを撃ち抜く光とニヤれ！！」

『なあーの魔法はまさか！？しかもなのはちゃんより魔力収束が早い！？』

「ルビーさん！！」

『こーなつたら一騎打ちですよ！！』

「はい！！」

アリシアが大上段にルビーを構え、ルビーも貯めこんだ魔力を放出する。

勝負は一瞬だ。

「貫け！閃光！スターニヤイト・ブレイカー！」

ちよつとばちもの臭いスターライトブレイカーが放たれた。

砲撃というよりも光の柱と形容するのが正しいそれは、一直線にアリシアに向かって空を駆ける。

『大斬撃！！』

「ええええい！！」

応じて第二魔法の奥義も放たれる。

世界がズレ空間の境目が刃となり、星の光が殲滅の砲撃となる。

どちらも最強、必殺の名を冠するに相応しい術は両者の中間で、大爆発という結果を招いた。

「ニヤ！？」

『ノオオ！？』

「キヤーーーー！！」

これだけの力同士の衝突となると、その余波だけで十分な破壊力がある。

闇の書とアリシアがそれぞれ自分の背後に吹き飛ばされた。

「大丈夫ですかルビーさん？」

『ま、まさか大斬撃と相打つなんて…』

何とか空中にとどまることに成功したアリシアだが、ルビーの声には珍しく純粋な驚きの響きがあった。

第二魔法の奥義は伊達では無い。

非殺傷設定がないので危なすぎて使えないというデメリットが存在するが、まともに食らってはただではすまないはず…まさかそれが力技の砲撃と相殺されるとはルビーを持ってしても予想外だった。

『空間による斬撃を相殺するって事は、あのスターライトブレイカの威力は対界宝具並という事ですか？力技にも程がありますよ…パネエですね』

『その事なんだけど…ルビーちゃん？』

敵ながらあっぱれと感心していたルビーに、通信をつなげて来たのはリンディだ。

顔色が悪いというか、頭痛をこらえているように見える。

『さっきのぶつかり合いだけど、再現は止めてほしいの…結界が一発で限界に来たわ』

リンディの言っている事を要約すると、もう一度同じ事をやれば

封鎖結界が破壊され、現実世界の中に放り出されるという事だ。

『それは…まずいですね…』

ルビーをしてもそう言わざるを得ない…理由は明白、視線を直下の街に下せば一目瞭然…海鳴りの街が、見る影もなく壊滅状態になっている。

勿論、これらは本物の町では無いが、闇の書をこの結界の中から出した後の未来予想図でもある。

これだけの破壊が人のいる現実の町の中で起これば、大災害レベルの被害が出るのは間違いない。

同時に、余波だけでこれなのだから、ルビー達というストッパーがなくなり、本格的に闇の書が破壊活動を始めた時に出る被害者の数など予想不能だ。

『でもリンディさん…それはむしろ闇の書に言ってくれませんか？』

「ムム、た…のしいじやニヤいかー！ー！！」

何と言うか向うは元気いっぱいだった

むしろ真正面から渡り合ったルビー達を遊び相手としてロックオンしたっぽい。

こっちが大斬撃を使わなくても、向うがスターライトブレイカーを使わない保証は残念ながら出来ないのだ。

そして、闇の書がスターライトブレイカーを使用したとき、それを相殺するすべも大斬撃しかないとなると八方塞がりもいい所だ。

「さあ、もつと遊ぼうニヤー！！」

やはり…やはり闇の書はこれを戦いとは思っていなかったようだ。

まあ、これだけ戦力に差があれば仕方のないことかもしれないが…。

『う…ん、決め手に欠けちゃいますね…』

大斬撃まで効かないとなると、闇の書に確実にダメージを与える術がない。

こうなると数で攻めて長期戦に持ち込むしかないのだが…本格的

で間違いないらしい。

ルビーによってなのは生存は保障されていたが、念話をつなげられる状態にある事が分かった事でフェイトが安堵の息を吐く。

普段ならば何気ない相手の言葉が聞けるという事が、予想外に嬉しい。

「あ、あニョ〜?」

なのはとはやての声が聞こえてから無視されまくりの闇の書が自己主張しようとしている。

遊び相手が他の事に気を取られているので寂しくなったか?

構ってオーラが漏れ出している。

「……………やかましい……………」

「は、はいニヤ!! 黙ってますニヤ!!」

闇の書の自己主張終了。

二人の無事に水を差されてむかつと来るのは分からなくもないが……こいつら、切れた勢いで最高ランクの危険指定ロストログアを黙らせやがった。

かわいそうに闇の書はネコ耳をペタンと倒してこちらを警戒している。

『皆、いたいけな子猫を苛めちゃ可哀想やで?』

「ニヤ?」

『とりあえずその子を皆でぼこぼこにして魔力攻撃で気絶させてほしいんや』

「ニヤんですと!?!」

それを苛めと言わずになんという?

「主、どう言う事ですか?」

『実はなあシグナム、その子が走っていると私の管理者権限が使えるらしいんよ。なんで可愛そうではあるけど魔力ダメージでその子を気絶させんとわたしもなのはちゃんも何も出来んのや』

「なるほど……」

つたない要点だけの説明だったが、全員が理解を示してくれた。

魔法に対する知識があると説明も楽でいい。

「異議あり！！そんなヤ個人理由でいたいけな猫をフルボッコにするなんて許されるはずがぁーりませんニヤー！！」

『中の本体さんからも許可をもらてるからどんどんやっちゃってええで、そっちの子は防御プログラムだけやさかい』

「ぬな！？本体のお墨付きなんてそんな悪い事しましたかワタクシ！？」

『むしろ乗り気やね、早くやってくれって言われとるで』

「…なあ、ちよつと良いか？」

どうも変だなと呟いたヴィータが、会話に入ってきた。半目で闇の書を見れば、ビクリと身をすくませている。

「さつきからお前、何慌ててんだ？」

「にやんと！？いえいえワタクシ何もあわててなどおりませんの事ニヤよ？」

どうもおかしい。

確かにこの場にいる全員の相手をするのは難しいというか自殺行為に近いが、さつきまで圧倒していた張本人にそれは通じない。

なのにこの猫…さつきから挙動不審というか戦いを必死で回避しようとしているように見える。

「……………」

「な、何ですかニヤ？」

ヴィータの疑問は誰もが感じているらしく、視線を一身に受け止める闇の書は顔を逸らしてあらぬ方向を向いてしまった。

それでもだらだらと目に見えるほどに流れる冷や汗は隠せない。

『ああ、その子今動けんから』

「ニヤーーーーー！！」

そしてあっさりはやてがばらした。

『こつちからもそんなくらの事はできるらしくって、無理矢理動きを封じとる』

つまり今ならこのバグキャラも案山子同然、口は動くようだがそ

れさえ無視すればやりたい放題だという事らしい。

『一発がつーんといつてみよか？』

「し、しかし…」

シグナムが苦い顔だ。

主であるはやての為で、しかも本人の命令とあれば否やはないのだが……それでも抵抗の出来ない相手に一方的に攻撃を加えるのは騎士としての矜持とか人間性的にどうよ？っと思う所がある。

他の皆も似たようなものらしく、少し戸惑い気味だ。

「ニヤー！！やめる、やめるんだニヤンショッカー！！」

そんな風に逡巡していたら闇の書が騒ぎ始めた。

本人にとつては無理もあるまいが…その辺りのネタも魔法と同じく、なのはやはやてからダウンロードしたのだろうか？

「誰がショッカーだ！？」

「………あー！！………」

思わず突っ込みを入れたのは、この場で一番こらえ性のなさそうなヴィータ……しかもグラーファイゼンで……ギガント状態のまま元に戻してなかったグラーファイゼンでの突っ込み………問題は突っ込み自体では無く、ギガント状態のグラーファイゼンの打撃には素で魔力ダメージが付加されている所にある。

それで突っ込みを入れられるという事はつまり……。

『よっしゃよくやったヴィータ！！』

「な、懐かしの昭和突っ込みで退場なんて嫌だニヤー！！」

ああ、まさにそんな感じだ。

闇の書の悲痛な声がドブプラー効果で耳に残る……本気で嫌だったようだ。

同時にそれを見ていた全員が膝をついたり頭をたれたりと残念なリアクションを取った。

「あ、あんなに苦労したのにこんなにあっさり？」

「結構ボロボロになったんだけどな……」

そこに勝利の余韻はなく、勝者はいない。

いるのはプライドとかいろいろ大事そうなものが音をたてて崩れていく敗者の姿だ。

「あ、あたいは…あたいはなんて事を…」

なぜか一番ダメージがでかいのはヴィータだ。

そういえば、ハンマーで殴るなんて神が許してもあたしが許さんとか言ってたな…本気だったのか？

だがそれはそれでこれはこれ、勝者のはずなのに敗者の気分を味わっていいようが関係なく、動きだした状況は止まらない。

「む！？」

「く、この光は何！？」

闇の書はひととき強烈な光を発し、漆黒と純白の球体に分離する。漆黒の球体の方は重力に引かれて地面に落ち、巨大な半球状のドームとなった。

それよりはるかに小さい白の球体は空中にとどまり続けているが、その下にベルカ式の銀の魔法陣が展開される。

「おいで、私の騎士達…」

球体の中から聞こえた声に、ヴォルケンリッターの四人が反応する。

即座に足下に転移魔法を展開すると、球体を中心に四方を囲む位置に現れた。

それは中心の球体の中にいる大事な人を守るための配置だ。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士……」

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

球体がはじけ、彼女達の真の主…八神はやてがその姿を現す。ずっと車椅子に乗っていた彼女は、闇の書の影響がなくなった事により、銀の魔法陣の上にしっかりと自分の足で立っていた。

「夜天の光よ、我が手に集え！」

厚めの黒い布地のミニスカワンピース姿の彼女は、先端に剣十字

の意匠を持つ騎士杖、シュベルトクロイツを高く掲げる。

「祝福の風、リインフォース！セツトアップ！！」

黒のワンピースの上に白と黒の上着が現れる。

スカートの金色の金具からは黒のスカートが伸び、はやての頭に白の帽子が載るとともに、栗色だったはやての髪はその色を白く染め上げた。

背中からは闇の書に在ったのとおなじ、黒い翼が三対六枚、羽ばたくように広がり、はやてのバリアジャケットが完成する。

「皆、待たせたな！！」

「ねえちゃん！！」

真っ先に飛び込んできたヴィータを、はやてはやさしく抱きとめる。

ヴィータの目にはすでに涙がたまっていた

「すみません……」

「あの……はやてちゃん、私達」

「……」

感情をストレートに出せるヴィータとは違い、大人達はそう簡単にはいかないようだ。

はやての意向に背いて行動した後ろめたさだろう。

シグナムもシャマルも言葉がうまく出てこない。

ザフィーラに至っては弁明など意味がないと思っているのか無言を貫いている。

反応は四者四様だが、はやての帰還を喜んでいるのは同じだ。

「リインフォースとなのはちゃんから話はきいとる。わたしのせいで、皆ごめんな」

「そんな……主のせいではありません」

「私達が勝手にやったことなの……ごめんなさい」

「ええんよ」

尚も何か言おうとする家族を、はやての笑顔が黙らせる。

「後で一緒に皆にあやまる、特になのはちゃんには悪い事してしも

うたしな…」

「……う……」

4人が同時に呻いた。

襲われたり宙吊りにされたり部屋をめちやくちやにされたりと、地味ではあるが今回の件で一番被害を受けているのはなのはだった。りする。

特に闇の書とヴォルケンリッター達のせいでもない事になったなのは部屋の片付けなどは率先して手伝う必要があるだろう。「ん？そう言えばなのはちゃんは？わたしと一緒に外に出てきたはずやけど…」

「あ、姉ちゃん、あれ」

「ん？なのはちゃん、何しとるんや？」

はやてがヴィータの視線と指さす方向を目で追えば、一同から離れた場所で向き合っているのはとアリシアを見つけた。

「おまたセルビーちゃん」

『あはあ〜大遅刻ですよなのはちゃん？待ちくたびれちゃいました』

「にやはは〜ごめんね〜」

なのはの帰還に、一番喜んでるのはルビーかもしれない。

「そろそろね、このお話を終わりにしようと思うんだ」

なのはは静かに、しかしはつきりと口にした。

この闇の書を中心とした事件に終止符を打つと…。

『なのはちゃんはどんなエンディングが望みなんですか？』

「うん、闇の書の悲しい運命を終わらせて、皆でお家に帰るの、クリスマスパーティもやりたいな」

『いいですね〜もうルビーちゃんの事をかくす必要もないから、頑張ってパーティー盛り上げちゃいますよ〜』

「にやはは、ほどほどにね」

そう言いながら、結局ルビーは騒動を起こすだろうとなのはは思う。

まあ今年はある程度まで大目に見よう。

あくまで大目になるので当然限界もあるが…きつとルビーは平然とそれを超えてくる。

「にやははゝあんまりタガが外れるとガンドが火を噴くよ？」

『善処しますよゝ』

絶対やらかすつもり確信犯だ。

「だから、パーティを楽しむために今を頑張ろう」

『なのはちゃんはその為に何を望むんですか？』

「魔法使いとしての…力を…」

なのはは右手にレイジングハートを持ったまま、左手をアリシアに差し出す。

それに対して、アリシアは黙って頷くとルビーを差し出した。

「なのはさま、ルビーさんをお返しします」

「御苦労さま、ごめんねアリシアちゃん？危ない事はなかった？」

「はい、大丈夫です」

微笑みとともに、アリシアはルビーをなのはに返す。

ルビーをなのはに返した事で、アリシアが魔女っ娘から元の姿に戻るが、ほぼ同時にその足下に魔法陣が展開された。

転移の魔法陣…こちらをモニターしているアースラがアリシアを回収してくれるのだろう。

いい仕事してますね^{タイミング}ゝ。

「がんばってください。なのは様」

「うん、頑張るよ。全力全開でね」

やがてアリシアの姿が消え、転移が完了する。

それを見送ったなのはは一つ大きな深呼吸をして、ルビーとレイジングハートを交差するように構える。

「行くよ、レイジングハート…ルビーちゃん」

『御心のままに、マイマスター』』

ルビーが七色の光を放ち、レイジングハートが部品単位にまで分解される。

光の乱舞の中、なのはは姿を変える。

ツインテールはサイドポニーになり、成長した四肢は少女ではなく女性のそれに変わる本当の意味での変身…少女から女性となったなのはの体を、紅と白の和服に似た外套のバリアジャケットが包み、拳と足に黄金の手甲と脚甲が装備された。

「レイジングハート…ルビーちゃん…」

『ここに…』』

ルビーとレイジングハートが合体した杓杖型のデバイスを手に取るのは、魔法使いとなったなのはだった。

ほとばしる魔力が意識しなくてもあふれ出し、その姿をほんのり輝かせている。

「…ふう」

身の内に流れ込んでくる魔力の多さに恐怖を感じるのは相変わらずだが、三回目ともなれば慣れもする。

余熱のように体にまとわりつく魔力の残滓を、杖の一振りで払えばそれだけで軽いつむじ風が起こった。

「行こうか…終止符を打ちに」

『はい』』

二人で一つになった相棒の返事に頷き、なのはは皆と合流すべく空中を滑るように移動する。

「おまたせ皆、ってあれ？はやてちゃん？」

何故かはやてがなのはを見てびっくりしている。

口を開けたり閉じたりして…何が言いたいのだろうか？

『なのは様、はやて様なのは様のこの姿をご存じないのでは？』

「え？ああ、そうだった」

レイジングハートの言う通りだ。

思えば、ヴォルケンリッター達はなのはの変身を一度見ているし、

リインフォースはヴォルケンリッター達と繋がっているはずだから知っていてもおかしくない。

フェイト達に関しては今更、なのでこの場で唯一、はやてはなのは魔法使いとしての姿を初めて見ることになる。

「あ、あのねはやてちゃん？」

「……」

はやては口を開いて何かを言おうとしているようだが、それが言葉になって出てこない。

友人がいきなり目の前で大人に成長する一部始終を見てしまったのは、この反応も仕方ないのかもしれない…っとかおもっていたら。

「あれ？」

気がつけば、はやてがなのは目の前まで移動している。

何時の間に動いたのか全く分からなかった。

後ろのシグナムまで目を丸くしているのが見えるが…まさかヴォルケンリッターの目にも止まらない速度で動いたとか？

「は、はやてちゃん？つてえ？」

これまたいつの間にか、はやての手がなのはの胸を掴んでいる。気配も予備動作もなく無拍子でポイントタッチをかましがった。

いくら同性で10歳と言え、許されるのかこれ？

しかも無拍子は色々な武道の奥義だぞ？

「つてちよつとー！ー！！」

正氣に戻ったなのはが、思わずはやてを突き飛ばしたのは性別女として当然の反応だっただろう。

「あ、主！！」

「はやて！？」

「ねえちゃん！？」

その結果、はやてが水平に空中を移動したことも自業自得と言える。

魔法使い状態のなのはには、MAXの肉体強化が常にかかっているのだ。

「なんとー！ー！！」

しかしはやてもさるもの、背中の6枚の翼を使い、姿勢を制御して勢いを殺すことに成功すると華麗な動きで空中に静止する。

「なにそのニュータイプの操縦するMSみたいな動きは！？」

「人間なせば成るもんや！！」

根性があれば誰にでもできるように言うな、今の動きは車椅子生活で長い間していた人間の物じゃないぞ？

「柔らかいし暖かった…本物や…」

「そ、そうだね…茫然と手をニギニギしているの止めてほしいな？見てて怖いから」

少なくとも作り物で無いのは確かだ。

後数年先の物ではあるが、間違いなく自前である。

「…ちゃんの…」

「え？」

「なのはちゃんの裏切り者——！！！」

「ええ！？」

なのはにしてみれば、いきなり胸を掴まれ（実はちょっと痛かった）、やつと話を通じたと思っただけ裏切り者扱いされて何その無茶ぶり？という感じなのだが…しかもまだまだはやてのターンだ。

「なんやの、その狂部突起は！！！！？」

「そ、そんな刺さりそうな物騒な物はなのはについてないよ！！！！？」

やったね、胸ではなく狂なので破壊力も凶悪さも大幅UPだ！！

「なのはちゃんが一人でさっさと大人の階段を上つてもうた！！」

「ま、間違つてないけど言い方が卑猥！！」

「こんななんつてもまだシンデレラなんかな！？」

「はやてちゃんが何を言っているのか分からないの！！」

Song by「想い出がいつぱい」（H2O）…いい感じにわけがわかりません。

それになのはは誰かが持つてくる幸せを待つ草食系ではなく、ど

ちらかと言えば障害を“撃ち抜いて”幸せをゲットする肉食系だと思っ。

「何でいきなりそんな育ってしまうんや！？胸とか胸とか胸とか！？ずるゝいゝ！」

「いやずるいつて…前から思っていたけど、はやてちゃんのその胸に対する執着は何なのかな？」

おそらく無意識にでも、自分の限界を悟っているのだろう。

主に自分の成長に対する限界という奴を…。

『あはあゝなのはちゃんの変身は魔術の奥義の一つですよ』

そしてまた、話をややこしくしそうな奴がややこしくなりそうなネタを振って来やがった。

確かに言っている事は間違っではないけれど…。

「ほんま！？ほんまに魔術を習えば瞬きの間にニンペタンが■カップのないすぽーに！？そんならわたしも魔術習うー！」

ちよつと触って見ただけでカップサイズまで分かるってなんだその無駄に高スペック？

しかも感極まり過ぎてないすぽーとか言って震えてるし、っただけだよこいつ！？

「は、はやてちゃん？魔術はバストアップエクササイズとか成長促進とかそういうものじゃ…」

「はやて、あたしもやるぜ！！そんでふたりそろってロリ卒業だ」

「ゝゝゝゝブルータスお前もか！！」

人は自分がない物を求めるものである。

大人バージョンのなのはのスタイル…特に胸をガン見しているはやてとヴィータにセルメダルを放り込んだら、すごい勢いでメダルがたまりそうだ。

セクハラで訴えても勝てるんじゃないかこれ？

「え、えつと…はやてちゃん？後でちゃんとお話するから…ちよつと落ち着いてほしいな…」

「ほんまやね！？言質はとつたよなのはちゃん！！」

「ねえちゃん、あたしも聞いたぜ!!」

「二人共食いつきが良過ぎるの!!」

シグナム達に助けを求めているが、目があった瞬間逸らされてしまった。

なんて薄情な…さっきまでの連帯感は何だったのか？

やはり戦場というものは色々熱しやすく冷めやすいのか？

「あゝちよつと良いだろうか？水を差してしまつてすまない…時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ」

「は、いい所にクロノ君!!」

盛大に脱線しそうな予感と、未来の自分の胸とはいえ、ガン見されることに女性としての危機感を感じていた所に来た合いの手に、なのはが喜んで振り返つた。

「みんな、待たせたわね」

「それにプレシアさんも…と誰？」

そこにいたのは予想通りのクロノとプレシアの他に三人…白髪の老人とネコ耳の女性が二人…二人の女性は双子らしく、髪の長さ以外に見分けのつかない格好をしている。

「この人は、僕の上司でギル・グレアム提督とその使い魔のアリア…つと、リーゼ姉妹だ」

「え、あのグレアムさん？本人なの？」

何故か途中で言い淀んだクロノの様子が気になるが、なるほどの老人が件のグレアム氏か、まさかこんな場所で会う事になるとは思わなかったが…。

「え？ギル・グレアムさん？もしかしてグレアムおじさんかいな？」

なのはが次の言葉をかけるより早く、驚いた風のはやてがグレアムに声をかけた。

「あ、ああ…その通りだよはやて君」

「いつもお世話になつとります!!」

ぺこりと頭を下げるはやてが殊勝…どうやら二人が知り合いらしいの是一目瞭然だが、どう言つつながりだろう？

「あ。なのはちゃん？この人が私の両親の友人で、財産管理とかしてくれてるギル・グレアムさん。まさかこんな所で会えるなんて思ってもみなかったわ！！」

「そ、そうだね、私も、こんな形で君に会う事になるとは思わなかった」

はやての恩人がなのはの恩人でもあったとは、人のつながりとは数奇というしかない。

次元が違っても、世界は狭いという言葉は有効なのだろうか？

「手紙では外国でお仕事をされとるって書いてあったけど、そっか、時空管理局で働いてはったんやね」

「そう言う事に、なるかな」

なんだろう？

恩人に会えて上機嫌にはしゃいでいるはやてに対して、グレアムの反応がきこえない。

何と言うか罪悪感にさいなまれているような？そんな感じに見える。

しかも使い魔の猫姉妹まで震えている…。っというか何だかちらちらとなのはの方を見ている気がするのだが…。

『あはあ、そう言う事ですか』

「「ひっ！！」」

「ん？どうかしたのルビーちゃん？向うのお姉さん達も変な声だしただけ」

『いいえ、何でもありませんよ』

「時間が無いので簡潔に説明する！！」

明らかに何か含みのあるルビーの笑いだったが、なのはの言葉はクロノの言葉に遮られた。

KYというよりわざと妨害したっぽいが…時間がないのは確かなので、ここは流しておく…後で追及してみよう。

「あそこの黒い球体、闇の書のプログラムがあと数分で暴走を開始する」

全員が頷いた。

「僕らはアレを何らかの方法で止めなくてはならない、現在停止のプランは“3つ”ある。1つ極めて強力な氷結魔法で停止させる」

クロノは指を三本立てて見せ、一本ずつ折りながら説明を続ける。
「2つめは軌道上に待機した艦船アースラの魔道砲アルカンシエルで消滅させるが、これは色々な事情からお勧めは出来ない。3つめは不確定要素が大きいのでとりあえず保留する。他に方法は無いか？ 闇の書の主とその守護騎士に聞きたい」

「1つめは例え氷結させてもコアが存在する限り再生は止まらん」

おや、何故かグレアムとリーゼ姉妹の顔色が変わったな？

何か予想外の事とか盲点でもあったのか？

「二つ目に関しては最終手段だ。可能な限り使いたくない」

「当然だろう！ アルカンシエル、駄目絶対！ こんな所で使ったらはやての家が壊れちゃうじゃんか！」

クロノの言葉に何を想像したのか、ヴィータが標語調子でとんでもない事を言いだした。

はやての家が壊れるとか聞き捨てならないにも程がある。

「そんなにすごいのか？」

「発動地点を中心に百数十キロを跡形も無く吹き飛ばすから、海鳴の街を地図から消すくらいの覚悟で使えばやれるんじゃないかしら？」

プレシアが冷淡に断言してくれた。

科学者として事実のみ語ってくれたようなので、やればおそらくその通りになるだろう。

何かユーノが台詞取られたみたいな顔をしているが…マジで空気になっているな…。

「私も反対！」

「同じく絶対反対！」

「うちも反対や！」

真っ先になのは、フェイト、はやてが反対する。

自分がこれからも生活していくはずの場所がなくなるなど、地元民として看過出来る事ではない。

「わかつている。これは最終手段だと言っただろう？ぎりぎりまで使うつもりはない」

クロノが言う事はつまり、逆を言えばこれから起こる防衛プログラム暴走を止められず、どうにもこうにもならなくなったら、その最終手段を使う可能性もあるという事だ。

その意味に気づいた全員がゴクリと唾を飲む。

「ではやはり三つ目のプランか…」

全員が黙ってクロノの次の言葉を待つが…。

「え？私？」

クロノは何も言わずなのはを見た。

何でそこで自分を見るのか分からないのはの頭上にはてなマークが浮かぶ。

その後ろでユーノがせわしなく二人を交互に見ているが、こいつは無視しても構うまい。

「ルビーに聞きたい。君の見立てはどうだ？」

「あ、ルビーちゃんなんだ」

『そうですね』

ルビーは詳しい説明を聞くまでもなく、クロノが何を言いたいのか理解しているらしい。

逆に他の人間は話についていけないので見守ることしかできない。

『“条件”は整っていると思います。あれが本当にこの世界を滅ぼし、霊長を脅かす存在ならば…来ると思いますよ』

「そうか…」

「この世界…霊長…それってもしかして…っ!!」

なのはは自分の予想を最後まで口にする事が出来なかった。

いや、すでに問いかはその意味を失っている。

分かるのだ…感じるのだ。

この気配に、この魔力に、世界が怯えているような、敵意をむき

出しにした空気はあの時と同じ…。

「な、何だこれは!？」

「わけわかんねえけど、やべえんじゃないかこれ!？」

ヴォルケンリッター達も、この空気を感じ取ったようだ。

生粋の武人だけあって、なのは達より明確にこの異常を感じているかもしれない。

―― 体は剣で出来ている。(I am the bone of my sword.)

何処からか声が聞こえてきた。

思わず全員が体をこわばらせる。

―― 血潮は鉄で 心は硝子(Steel is my body, and fire is my blood.)

肉声では無い… 念話でもない。

世界にしみこむような… 世界その物から聞こえてくるような… これは… 呪文か？

―― 幾たびの戦場を越えて不敗。I have created over a thousand blades.

「なんやこれ、誰が歌つとるんや？」

「歌？」

… そう、これは歌だ。

どうしようもなく不器用に頑張った… あの人の人生を詩にした歌… とても切なく、胸を締め付けてくる… 気を抜けば涙が出そうになるのを、なのはは頑張って耐える。

——ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない。
(Unknown to Death・No known
o Life.)

「大丈夫だよ…はやてちゃん」

「あ、なのはちゃん？」

「怖い事なんてない」

——彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。(Have
withstood pain to create many
weapons.)

困惑している友人に微笑みかけ、落ち着かせる。

そう…怖がることはない。

おびえる必要はないのだ。

——故に、生涯に意味はなく。(Yet, those
ands will never hold anything.)

「この世界が本当に危なくなった時…あの人は現われる」

「なのはちゃん…それって、誰の事を言ってるん？」

「あの人は…」

——その体は、きっと剣で出来ていた。(So as I
pray, unlimited blade works.)

「……正義の味方、そしてここはあの人の世界…」

なのはは…静かに目を閉じた。

「無限の…アインミッド・ブレイド・ワークス剣製…」

なのはと“彼”の声が重なる。

炎が自分の体を通り抜けてゆく熱を感じた。

なのはが閉じた瞳を再び開けば…そこはすでに”彼の世界”が広がってる。

「……」

何処までも続く荒野…地面に突き立ち、ただ朽ちて行くのを待つ主無き剣の群れ…斜陽に染まる空には鋼鉄の歯車が回り、鋼を作り続ける無人の世界…その中において、“彼”の姿は異質にして必然…故にその姿を見紛う事はない。

「また…会えましたね…」

この世界の創造主にして王…生命の脈動が感じられない荒野で、鉄さびの匂いにする風に赤い外套をなびかせながら、剣と共に立つ男の後ろ姿があった。

第十七話 Reunion（後書き）

王道やテンプレ、一度敵として戦った相手が最終決戦で共に戦うシチュは使い古されてるけど、それだけにいいものだと思うわけですよ。

予定では次回が最終回、その次にエピローグと二話予定です。ですが、とりあえず来週の更新は休みます。

今までに書いた奴とかいろいろ修正入れたりしないとならないし、一応ストーリーは出来ているとはいえ、練り込みたい部分はありますので、一週間間を置いても今月中には完結できると思います。

最終話 C h a o s

乱立する剣：空で回り続ける巨大な歯車：どこまでも果ての見えない荒野：圧倒的な光景の中にあつて、男の存在感は他の全ての上に立っていた。

砂の混じる乾いた風に向かい立ち、逆立てた銀の髪と赤い外套をなびかせながら立つ長身の男：背後にいる自分達に気が付いていないかのように、鷹のように鋭い視線でまっすぐ前を：闇の書の防衛プログラムを睨む男：しかし、何故かその背中から目が離せない：それはきつと目を離そうとしたら不安になるから、鋼のように固い印象を持っているのに、気を抜けば周りの剣と見分けがつかなくなってしまうような空虚さも、同時に感じるからだろうか？

「…何なのだ奴は？」

己に課された責任と義務から、説明を求めたのはシグナムだ。

いきなり何処からともなく現われたあやしい男：シグナムでなくとも、警戒するなという方に無理がある。

「彼の名前はエミヤシロウというらしい。敵じゃあ無いよ：今回はね」

答えたのはユーノだ。

「彼はこの世界の意志ともいうべきものが、世界の崩壊を防ぐ為に送り込んできた存在、君達と似ているかもしれないね」

「世界意志…だと？」

「うん、少なくとも彼の出現はこれで2回目、前回もこの世界に全ての脅威を排除する為に出現したんだ」

ユーノはあえて、前回エミヤシロウが出現した内容を端折った。

この場においてはとりあえず関係のない事だし、視界の隅でフェイトとプレシアが複雑そうな顔をしているのが見えたからだ。

「味方…と考えていいのか？」

「……そうだね」

ユーノは苦笑するしかない。

守護者は個人の援護の為に出来たりはしない。

エミヤシロウが闇の書の防衛プログラムから目を離さないという事は、今回の彼のターゲットはあの黒のドーム…闇の書の闇、防衛プログラムの排除が目的だろう。

つまり、文字通りの意味で自分達はシロウの眼中にない。

敵対しなければ敵にならないというだけで、実質は路傍の石同然に見られているはずだ…それを味方と定義するのは色々難だが、とはいえ防衛プログラムを排除するという事で自分達の目的は一致している。

一度は真正面から敵対し、その実力を垣間見た者としては、彼の前ではなく背中にいる状況は心強い。

「…これは、封鎖結界では無いな？」

まだまだ追求したい事は多いだろうが、とりあえず納得したシグナムの興味は、自分達がいる空間に向けられた。

「ああ、固有結界というらしい。術者…つまり彼の心象風景を具現化した“魔術”…」

「魔術か…所でもうひとつ聞きたい事があるんだが…」

シグナムはシロウから視線を外し、ユーノに向ける。

真剣な目で自分を見るシグナムに、何を聞かれるかと思わずユーノがゴクリと喉を鳴らした。

「お前…誰だっけ？」

「ユーノ！ユーノ・スクライアです！！」

そう言えば、フェイトもアルフも自分の名前を名乗ったが、ユーノだけはヴォルケンリッター達に自分の名前を名乗った事はなかったかもしれない。

相変わらず影が薄いようだ。

「…おしゃべりはそこまでだ」

涙目で更に何か言おうとしたユーノの言葉を遮ったのはクロノ、しかし文句の声は上がらない。

その理由は誰の目にも明らかだから……防衛プログラムから発される魔力が増大している。

「……始まる」

はやての呟きで、全員の緊張が高まる。

「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム。闇の書の……闇」

ヴォルケンリッター……そしてその主であるはやての中では様々な思いが渦巻いているのだろう。

いよいよ決戦だ。

「クロノ……これが君のプランか？」

他の皆から少し離れた場所で、アリアとロツテを背後に従え、グレラムがクロノに問いかける。

「はい……僕達の力では闇の書の完全封印は不可能です。しかし魔術にはその可能性がある」

「しかし……君の協力者には出来ないのではなかったか？」

ちらりと横目で見たのは……そしてその手にある錫杖型の魔法術デバイス……ルビーは“自分には”出来ないとはつきり名言している。

「だから、この世界の守護者に希望を託しました」

自分に足りない物があれば他人で補い、不足している物があれば余所からでも持つてくる……それは魔導師より、どちらかと言えば魔術師よりの割り切った考え方だ。

「上手くいけば、闇の書の完全消滅が可能です」

守護者は世界の脅威を排除する存在……選ばれた守護者はその驚異を排除するまで止まらない。

そして、世界意志が彼を選んだという事は、エミヤシロウには闇の書の闇を完全に排除する方法を持つているはずというのがクロノ

の見立てだ。

「君は…最初からこの世界で闇の書の暴走を待つつもりだったのか？」

一歩間違えれば、クロノも世界の敵として認識されかねないギリギリだろう。

「何って無茶をするんだい。クロスケー！」

「君に言われたくない。それにこの方法なら、多くても二人の犠牲で済む」

「っ！？」

クロノと闇の書の主…はやての命だ。

有言実行…自分の言葉の通り己の命を犠牲者にカウントして計画を立てているクロノの覚悟に、姉妹は息をのむしかなかった。

「グレアム提督…」

名を呼ばれ、正面からクロノの視線を受け止めたグレアムが姿勢をただす。

クロノの視線にはそれだけの覚悟がこもっている。

年長者だからと言って…いや、年長者だからこそ軽々しい態度で受け止めるべきではないと感じたのだ。

「闇の書は呪われた魔導書でした、その呪いは幾つもの人生を喰らい、それに関わった多くの人生を狂わせてきました。アレのお陰で僕の母さんも、他の多くの被害者遺族もこんな筈じゃ無い人生を進まなきゃならなかった、それはきつと貴方も…ロツテ達も…失くしてしまつた過去は変える事は出来ない」

「…そうだな」

呟くグレアムの胸の内に、どんな思いが去来しているのか…本人以外には知り得ない事だ。

「だから…今を戦って未来を変えましょう！！」

「クロノ？」

投げ渡されたデュランダルをあわてながらも受け取ったグレアムの目の前で、クロノが自分のデバイス、S2Uを展開する。

「…そうか、そうだな…」

『スタート・アップ』

電子音声とともにカード状態のデュランダルが起動し、杖状態となったそれをグレアムの手が掴んだ。

「ありがとうクロノ…この手で、私は未来をつかみ取る!!」

「お父様」

「私達も」

デュランダルを構えるグレアムの背後で、姉妹がそれぞれの魔法を準備する。

完璧だ。

全員の思いが一つになっている。

これならばやれる…闇の書の悲しい歴史をここで終わりにする事が出来るはずだ。

「来るぞ!!」

十を超える応の声が重なる。

すべての視線が集まる先で、黒のドームが破裂し、その中にいた物が産声を上げるように…。

「吾輩…爆誕」

「……………は?」

やたらとダンディな声で放たれた意味不明な言葉と、自分が見た物がちよつと理解しがたいものだった事で、一同の思考がフリーズする。

それだけ声の主は異様というか異質というか……………むしろフザケた存在だった。

「トンネルを抜けると、そこは一面のネコ畑だった」

尚もわけのわからない事をのたまうナマモノはふやけたクッキーのような顔に三頭身のボディ、頭にネコ耳と腰から伸びる猫尻尾がついてはいるが、そこに猫独特の愛らしさは皆無……………むしろ醜い。

黒いブラウスに灰色のスカートのようなものを履いているが…かと言って雌かと言えばそれにしては声が男のものだったので性別も

分らない。

くわえ煙草をふかしている姿は世情につかれているようにも見えて実に退廃的だ。

しかも、プログラムの影響なのか全長が数十メートルと下手なビルより巨大というジャイアント仕様と来ている。

「ごきげんよう。パーティー会場はここかね？その揺れるヒゲだけでイツちまいそんなミスター？」

「え？わ、私かね？」

いきなり現われたUMAは、この場で唯一ひげをたくわえているグレアムに白羽の矢を立てたようだが、当のグレアムはいきなり未知との接触で戸惑いが先に出ている。

「ク、クロノ…私はこういった状況の経験がないのだが、何と答えればいいと思う？」

「ぼ、僕もこんなのは初めてです」

経験がある奴の方が珍しかろう。

「あ、あいつは…」

「アレの事をしっとるんかヴィータ？」

「主、私が説明します。アレは私達が魔力を蒐集した生き物なのです」

はやての疑問に、シグナムが説明を始める。

はやてを助けるために蒐集を開始した当初の話、未だに原因は不明だが転移事故を起こしてしまった。

「それで、座標も全く不明な薄暗い場所に転移してしまったのですが、そこに大量に生息していたのが猫のなりそこないのようなあの生き物だったのです」

どう考えてもグレートキャットビレッジですありがとうございました！！

まあそれはともかく、転移に事故ったとはいえ、はやての為に早急に魔力を集めなければならぬのは変わらないのは変わらない。

そして幸いというか不幸にもそこにいたナマモノ達は魔力を持つ

ていた。

「それで…彼等には悪いと思ったのですが…」

「…あんたらそんな訳の分からない物からまで蒐集したんか？」

はやての為に贅沢は言つてられなかったのだろう。

蒐集が遅れるという事は、そのままはやてに負担を強いることと同意である。

「わたしの為にやってくれたんやろうけど、あかんよそんな行き掛けの駄賃つちゅーか拾い食いのような真似は感心せんなあ？」

リインフォースの言っていた妙な魔力というのはこいつの事に違があるまい。

そりゃあこんなわけのわからない物を内に取り込めば、ロストロギアだろうが闇の書だろうが機能不全の一つや二つ起こすだろう。

「も、申し訳ありません…」

「ごめんなねえちゃん」

「ごめんなさいはやてちゃん」

「……すまぬ、主」

はやてのお叱りに、ヴォルケンリッター達が揃って謝りを入れる。実際問題を起こしまくった以上、申し開きの余地などかけらも残っていない。

「そこのあなた？」

「ん？吾輩の事かね狸娘？」

「た、狸！？」

はやての額でぴくぴくと何かがうごめいているが、なんとかそれを抑え込む。

今回の非は間違いなく自分達の方にあるのだから…。

「…え、えっと…うちの子がご迷惑をかけて申し訳ありませんでした」

「フム、存外素直だな？それに免じて行き掛けの駄賃と拾い食い扱いは聞いたのは聞き流そう」

「き、聞こえとったん？」

はやての額から、タラリと気まずい汗が流れる。

一応抑え気味の声で会話していたはずだが…デビルイヤーは地獄耳らしい。

これでは下手な事はしゃべれない。

「そ、そんでお宅は誰です？」

「ここまできて吾輩が誰か分からぬとはなんという巡りの悪さ。ついに脳はおるか魂にまでヤニが回ったか？」

「えーっと、私まだ未成年やからヤニはご法度…」

「今こそ自分の意志で吾輩の名を明かそう！！」

「会話のキャッチボール無視して勝手に話を進めんなー！！」
はやてが一瞬で切れて絶叫する。

ネタを振られてそのままスルーされる事に、関西人の熱いパトスが我慢できなかったらしい。

ブツ千切れたはやての変貌には家族達もドン引きだ。
ヴォルケンリッター

「吾輩の名は…」

「……ネコアルク」

「……………え？」

ぼそりとした低い言葉だが、全員が声に反応して振り返る。

そこにいたのは何とも言い難い表情でなのはを見ているフェイト、アルフ、ユーノの姿…どうやら声の主はなのはのようだが、本人は顔を俯かせているため表情が見えない。

「やっと忘れられそうだったのに、何で…ここでネコアルクが出てこなきゃならないの!？」

もはや絶叫だった。

そんなに嫌だったのか？

『なのはちゃん、あれはネコアルクじゃありませんよ？』

「はあ？だったら何？」

『あれはネコアルクカオス、あの退廃的な配色とCV中田 譲治・だから間違いありません!!』

中田 譲治って…だれ？

「ネコアルク…カオス？」

『はい、遠野家の地下に広がるグレートキャットビレッジで稀に爆誕するらしいグレートカオスキャットです。しかもジャイアント仕様ですから略してGNACですね』

「吾輩の名乗りを奪ったのは何処のドイツ…な、貴様は…！そんな、貴様は…！！！つ、つまり、貴様は…！！」

ネコアルクがなのはを見てあわてだした。

そう言えば、ネコアルクはルビーに頭が上がりなかったようだが…カオスもそうなのだろうか？

「大魔王！！」

「何で初対面の相手にまで大魔王なんて呼ばれなきゃならないのかな！？」

なのはが気にしている事をストレートにボーリングマシンの如く掘削してくれた。

どうやらカオスがおののいていたのはルビーではなくなのはの方にだったらしい。

「ふ、あきらめろ大魔王、貴様の事は世界が大魔王として認識している」

「また大魔王って言ったー！！！！」

暴走しているなのはともかく…今こいつ気になる事を言ったかなのはが世界に認識されているって…まさか本体と同じく、世界の触覚的能力でも持っているのか？

しかも世界に認識されるなんて英霊や英雄クラスの人材…ということはそのうち、なのはに英霊の座からスカウトが来るかもしれない。

きっとそいつは白い小動物姿で「世界と契約して英霊になってよ」などと甘い言葉で近寄ってくるかもしれない。

「クロノ君！！」

「は、はい！？」

「と、とにかく、あのネコアルクもどきを倒せば全部終わるんだよ

ね？」

「た、多分…」

大分物騒に要点のみ簡潔に纏めて言えばそう言う事になる。

あのネコアルクカオスがどうであれ、その本質は闇の書の防衛プログラムに他ならない。

放置しておいたら何をやらかすか分かった物では無いので、いろいろな意味で見逃すという選択肢はないのだ。

「ほう、つまり吾輩とくんずほぐれつキャットファイトしようじゃあ〜りませんか！？という事かねお嬢さん？実に熱烈なお申し出に少しドキドキでございます」

「なのはを大魔王って呼んだ人とはOHANASIするって今決めたの！！」

おや？…不特定多数の人間がぎくりとしたな？

しかもなのはが何時になく好戦的でオレンジな人形師みたいなことを言っている…これは本当に逆鱗に触れたか？

「ずばりゴメン被る」

「……話が進まねーからとっとと受けるやー！！」「……」

「」

それでも、この世界をかけた最終決戦である。

「まあ…いいだろう。かつてない豪華なステージに、なんかカメラ中継とかも始まっております」

アースラがモニターしている事を言っているのだろうか？

それに気がつくとは大したものだが、褒める気が微塵もわいてこない。

「では皆さんお待ちかね、ニクキュウ〜〜、ファイトツツツ！」
「………な！！」「………」

先手はカオスが取った…って言うかいかにも体に悪そうな真つ黒なビームを目から出すなどと、生き物の所業では無い物を目にすれば、先手くらい取られても仕方がない…“初見”でそんなでたらめに対処しろという方に無茶がある。

カオスの混沌ビームは驚きで硬直しているはやて達に、逃げる暇も防御する暇もなく盛大な爆発を起こした。

「怪猫、天を揺るがす。気をつける、次は太陽ごと吹き飛ばしかねんむ？」

爆発の煙が薄れ、その先に桜色に輝く魔法陣を見たカオスが眉をひそめる。

「その技はネコアルクの時に見ているよ!!」

初見では対処できない…しかし初見じゃなければ話が違う。

出鱈目とは不意打ちでこそその真価を発揮するのだから、なのは以前のネコアルクの奇行をその目にしていた事で、多少なりともナマモノに対する耐性を獲得していた。

「ニヤンとまあ…おや？」

ふと気がつけば、カオスの体を光る鎖が拘束していた。

「フム…亀甲縛りとはマニアックな…」

「フザケンナ!! そんな特殊な縛りしてないだろうが!!」

「普通に拘束しているだけです!!」

鎖の根元をたどって見れば、アルフとユーノがダブルでチェーンバインドを展開している。

耐性を獲得していたのはただではなかったらしい。

ちなみに縛り方はカオスの言うようなマニアックな物ではなく、普通のミノムシ…逆さ吊りじゃないから通常状態でもリバースがつく。

「フム…只今絶賛新しい世界の扉を開けつつある吾輩であるが、いきなり自分の趣味を問答無用で他人に押し付けるのはどうよ? と思いついています、そのあたりどうだろねボーイズ&ガールズ?」
「やかましい!! お前はもうしゃべるな、耳が腐る!! フェイトちゃつちやと決めちゃつてくれよ!!」

「おや…ふと影が差したので見上げれば、鎌を振り上げて降ってくる美少女が一人?」

言わずと知れたフェイトその人だ。

「バルディッシュュ!!」

『Yes, master?』

「許す!目立って良いよ!!」

『いよっしゃー!ー!!見せ場キター!ー!ー!!』

一気にバルディッシュュのテンションが天元突破する。

連続してカートリッジが排出された。

『変身!!ザンバーフォーム!!』

バルディッシュュのサイズを展開している部分が二つに割れ、両側に展開される。

同時に魔力刃もその形を鎌から直線へと…あらわれたのは黄金の刃を持つ両刃の大剣だ。

完全に拘束されているカオスには避ける術も防御する術もない。

「撃ち抜け雷神!!ジエツト!!」

「おつとどっこい、エリート混沌部隊ダミアン ベレーかむおくん!!ダスク・オブ・ザ・キャーット!!」

「え?なあ!ー!ー!ー!!」

まさにとどめを刺そうとしていたフェイトだが、どこからともなく現われた黒い滝に吞まれてその姿が消える。

否、滝に見えたのは水では無い。

それは…。

「カ、カオス?」

流石のなのはもこれには啞然とするしかない。

耐性があつても十全ではないといういい例ではあるが、それはともかく数十匹の通常サイズのカオスがフェイトに降り注ぎ、押し流すようにして地面に落下していった。

「え?ええ!?!な、何するんですか!?!」

「フェイトちゃん!!」

しかもそれだけではすまない。

カオス達はフェイトを神輿のように担ぐと、そのままどこへともなく連れ去っていく。

「こら手前ら！！フェイトを何所に連れて行くつもりだい！？」

「ああ、アルフ！！チェーンバインドを解いたら！！」

「フンは！！」

カオスの気合とともに鎖が千切れる。

どこぞのマツチヨ神父のような所業だ。

そう言えばあの精神破綻者も中身は一緒だな。

「フェイトちゃん！！」

「な、なのは！！私は大丈夫だから！！」

「でも！！」

「私よりも奴を！！」

ヒロインの鏡のようなとってもいい台詞を残しつつ、フェイトはカオス達にお持ち帰りされて何処へともなく連れ去られて行く。

「待ちやがれ手前ら！！フェイトを返しやがれ！！」

まあ…流石にこの世界からは出られないとは思いつし、アルフが追いかけて行ったので心配はないだろうが…。

「ルビーちゃん、今の…小さいカオスは何？」

『番長猫屋敷のカオスバージョンですね…ネコアルクも使えますよ』

「そ、そうなの…たくさんいるんだね…ネ、ネコ妖精って…」

『そうですね…特にネコアルクカオスは一匹いたら666匹いると思わなきゃですよ』

「それは多過ぎるよ！！」

これがあながち嘘でも冗談でもないので性質が悪い。

「さらばだ麗しのハ〜レ〜クイ〜ン、君の振るチェッカーフラグの色は忘れない」

「い、いや〜フェイトは見た目確かにそんな感じだけどチェッカーフラグを振った事はないよ」

「犬3、猫7といったところだな」

「何の話！？」

カオスの世迷い言に、きっちり合いの手を入れているユーノ……
今確か戦闘中だよな？

「さて…そろそろ本題に戻ろうか？」

そう言ってカオスが見たのはなのはだ。
見られたなのも思わず身構える。

「怪猫並び立たずとよく言われますが、この辺りでそろそろ決着をつけ、どちらが真の猫に相応しいか決着をつけるとしよう」

「え？これってそんな話だったかな？その前になのはは怪猫じゃないんだけど？」

「フム、それにしても事あることにニャーニャー鳴いているようだが…ナチュラルボーンキヤートという事かな？」

「そ、そう言われても…」

後ろにいるネコ耳姉妹は無視ですかそうですか…。

「そ、それになのはだけじゃないよ！？」

「む？」

いつの間にか、カオスを剣群が包围している。

古今東西の伝説に語られる様々な武具がその切っ先をカオスに向けていた。

「ほほう、君が先約かね？」

まさに真打登場、数多の神剣魔剣を従えるこの世界の王…エミヤシロウが前に出る。

守護者は世界に雇われた掃除屋である。

そこに意思はなく、淡々と世界に命じられた命令を遂行する機械…のはずなんだが、気のせいだろうか？

自意識のないエミヤシロウにもなのはと同じく、何やらやる気と
いうか殺る気を感じるのは？

「……」

無言のままに、シロウは剣軍に攻撃を命じた。

アンリミテッド・ブレイド・ワークスの世界に存在するすべての
武器がカオスに牙を剥く。

「にゃんの！！こんな時こそにゃんぷしーろーる・ＪＣ…って避け
らんねー！！！！」

ネコアルクとネコアルクカオスの当たり判定は小さい。

その小さな体躯故だが、それが数十メートルの巨体になった場合、
辺り判定？何それという事になる。

目隠しして適当に石を投げても、後ろに放り投げない限りは当た
るレベルのものにゃんぷしーるーるもくそも何もあつたもんで
はない。

「くっ、ならば出でよわが僕ども！！」

ずるりと、カオスの陰から黒い何かがい出してきた。

「にゃー！！何か出た！！何か出て来たよルビーちゃん！！」
それを見て悲鳴を上げたのはなのはだ。

正体不明の真っ黒なおぞましい異形が現れるシチュは、初めて見
るホラー映画に匹敵する。

ついでにお前、やっぱり猫属性付きだろう？

『なのはちゃん、慌てず騒がずまずはプロテクションですよ』

「プロテクション！！」

ルビーの助言になのはが即座に従う。

展開された魔法陣に対して、グロテスクな化け物が真正面から突
っ込んでくる。

「にゃー！！」

悲鳴を上げたなのはの目の前でプロテクションに体当たりした化
け物が…ポーンと軽い音とともに跳ね返された。

「……え？」

なのはの口から、無意識に疑問符が漏れた。

『あはあゝやっぱりですね』

全く慌てていない所を見ると、どうやらルビーはこの状況を予想
していたらしい。

「ルビーちゃん、ドイウコト？」

『カオスって元タリーチは長いけど攻撃力がダントツに低いんです
よね』

「にゃ、にゃんですとー！！！！」

なんでなのはより先にお前が驚く？

「そ、そんニヤ…それじゃあ大きくなつた意味がまるでナッシング！？」

むしろマイナスだろう。

元のサイズだったらやりようもあったかもしれないが、大きくなつたことでデメリットしか目につかない。

「……ねえルビーちゃん？という事はあの怪獣さん達は？」

『張りぼてですね』

「……」

混沌の獣を指さして問いかけたなのはに、ルビーがあっさりと答えてくれた。

「あは、あははっはっははー！ー！ー！」

何やら壊れたように笑うなのはの周りに、曼陀羅魔法陣が展開される。

「怒りの大虐殺祭——！！」
ジェノサイドカーニバル

「ぬおおおお！！これが白い大魔王様の全力全開か！？八つ当たりじゃねー！ーか！！勝手にビビつたのはお前だろ！？」

「五月蠅い！！なのはびびってないもん！！大人になつたんだから漏らしそうになってないもん！！」

ああなるほど、そう言う事が…本人の言う事を信じれば、ギリギリで踏みとどまつたようだが…それはともかく、カオスの言うとおり明らかに八つ当たり込みな桜色の破壊光線が雨あられと降り注ぐ…カオスの巨体と合わせて、もはや怪獣大決戦の様相を呈してきた。

「あ、危うくウェルダンに焼きあがる所だったZE！！」
砲撃がおさまったそこで、カオスは未だにその姿を保っていた。ただし髪の毛はアフロになっている。

「くっ、しぶとい！！アフロになるくらいで済む火力じゃなかったはずなのに…」

『なのはちゃん、あれがギャグ補正というものです！！』

明らかに致命傷でも笑いごとで生き残り、常識を完全シカトした

行いを是とするそのギャグ補正の恩恵…カオスならばその存在故に最大限受けられるだろう

実際、^{シエノサイドカーニバル}大虐殺祭を受けてもアフロになる程度で耐えきられてしまったのだ。

この補正を超えてダメージを与えるのは並大抵のことでは無い。
「思ったより厄介だけど…つまりもつと大火力が必要って事だね！」

『そのとおり！！なのはちゃん理解が早くて助かります！！』
元々才能はありまくりな子だったが、そろそろ本格的に目覚めたか？

ルビーも煽るんじゃねえ！！

「強くなりたきゃ魚を食いな！！」

『「うん？」』

なのはとルビーがちよつとお話している間に、カオスはアフロな髪に櫛を通し、ブローを済ませて完全復活していた。

何と言う早業、驚きのスピードだ。

「やるなお嬢さん、ならば吾輩もラストアークで答えねばなるまい」

「ラストアーク？」

なのはの脳裏に、ネコアルクが使ったアングルモアハンマーが思い出された。

原理も理屈も全く不明に、空から巨大なキノコを降らせたあれだけはまずい、その一撃でジュエルシードが砕けたのだ。

「召還！カレイドステッキストライク！！」

「ええー！ー！！？」

カオスの言葉に対し、なのはが犯した失態は二つ…一つはルビーの名に反応してしまった事、二つ目はなまじネコアルクのアングルモアハンマーを見ていたため、とつさに頭上を見上げてしまったことだ。

それが何であれ、頭上から来る事が分かっていたのだから、問答無用に現場から距離を取らなければならなかった。

「何でルビーちゃんが落ちてくるの！？ここはルビー星じゃないんだよ！？」

確かに頭上にはなのは予想通りの物、巨大なルビーが自分目がけて落下してくるのが見えたが、それにびっくりして体が硬直してしまう。

『あはあゝジャイアントカレイドステッキ、これって肖像権を主張したら勝てませんか？』

「裁判に持ち込む前に今をどうにかしてよ！！」
なのは言う通りだ。

でも、突っ込みを入れている間があれば少しでも避ける。

「…約束された勝利の剣」
エクスカリバー

『「っ！？」』

絶体絶命のなのはにぎりぎりかすらない至近距離を、光の斬撃が逆袈裟に立ちあがった。

「ニヤンと！？」

今度はカオスが驚きの悲鳴を上げる番だ。

空に向かう斬撃は、その途中にあったルビー（？）を簡単に両断したのだ。

『ああゝん、ジャイアントルビーちゃんが』

「今のは…」

戯言を抜かすルビーを無視して、なのはは背後を振り返る。

そこにいたのは黄金の剣を振り上げ、残心しているシロウだ。

「助けて…くれたんですか？」

守護者として降臨したシロウには自意識がないはず…なのになのはを助けたのか？

あるいは摩耗したはずの、何らかの感情をルビー相手にぶつけたようにも見える。

「じゃんけん…ちねえ！」

「っ！！」

余韻に浸る暇もない。

ここぞとばかりにカオスがグーパンで殴りかかってくる。

確かに全長数十メートルの巨体によるパンチは下手な攻撃よりも威力があるだろう。

ただしこの場合、殴りかかった相手が悪かった。

自分に向かつてくる巨大質量を目にしたなのは、おびえどころかむしろ目をぎらりと輝かせて杖を構え、砲撃を放つ。

「ふっ、未熟だな？」

なのは構えた杖はあらぬ方向を向いていた。

当然カオスにはかすりもしないが…。

「ふっふっふ、改めてちぬが良いってチョイ待ち！！お前のそれはどう見てもライザーソードのパクリだろ！！」

砲撃が止まらない。

桜色の奔流が噴き出し続けているそれはまさしくライザーソード……パクリと言われてぐうの音も出ないなのはが真っ赤になる。

「こ、ここからがオリジナルだもん！！」

『魔法術式の…二』

「七の刃^{なのは}！！」

斬撃と言うには凶悪過ぎるそれが振り下ろされる。

しかも一刀では無い。

カレイドスコープ

第二魔法、万華鏡によって増えた斬撃は 七の刃 の名が示すとおり、七振りに分裂してカオスにカウンターを叩き込む。

「ふるぼっこいやー！！！！苛めカツコ悪いー！！！！」

大軍さえ振り払えそうな七刀は、個人に叩き込むにはオーバーキルが過ぎるが、ジャイアントネコアルクカオスに対してはちょうどいい大きさだ。

別々の七方向から一度に食らったダメージでカオスがズタボロになりつつ、もんどりうって吹っ飛ばされた。

数十メートルの巨体が空を飛び、地面にたたきつけられると猛烈な土煙が舞い上がる。

「キャット！ ラック！ キャット！ここは地獄だネコったれ！」

「ま、まだ立ち上がるの!？」

なのはの奥の手を食らって尚、このナマモノは即座に立ちあがりやがった。

どう言うレベルのタフネスだろう？

やはりギャグ補正は侮れない。

「こうなったら…」

「ま、まだ何か出てくるの!？」

「……」

何か企んでいるらしく、気合いを入れているカオスに対して、なのはとシロウが揃って身構える。

「は？」

「……？」

二人の見ている前でいきなり直立不動となったカオスから、ジャキンという金属的な音がした。

何の音だろうと思っていると、カオスのスカートから猛烈な白煙が噴出して視界を白く染め上げる。

「何これ!？」

『ジェットですね』

「ジェット!？」

『ネコアルクとカオスの主武装は鍛え抜かれたツメ、ひかるビーム、そしてもしやジェットですから』

「“もしや”って何!？」

律儀に突っ込みながらもなのはは思い出した。

ネコアルクがどうやって自分達の前から去ったのかを…奴はロケットよりしく空に向かって飛び去るつもりだ。

「逃げるの!？」

「真実まつこと、地球を一秒で七周半して汝に突撃する超技とかあったりするぜ。まあ、問題は三周あたりでこっちの体が溶け始めるコトにやのだが」

「そんな所までネコアルクそっくり!？」

言っている間にカオスがテイクオフした。

初めはゆっくり、徐々に速度を上げて空を目指していく。

「紙一重の戦いだった。おそらく二ボシー匹分の差……一歩間違えれば、倒れていたのは私の方だったかもしれないな……」

確かに倒れていないが、なのは達だつて倒れていない。

嘘、大げさ、紛らわしい事を言っているとJAROに目をつけられるぞ？

「行かせない！！ルビーちゃん、レイジングハート！！」

『承知しました。なのはさま』

『おつけ〜ですよ〜とらんすふお〜む』

なのはの意思に応え、ルビーに合体していたレイジングハートが自身の意志で解体する。

新たなフレームが展開され、再構成されたそれは銃と弓を合体させた重量級武器、マジカルルビー砲撃モードだ。

「……」

「え？エミヤシロウさん？」

狙いを定め、周囲の魔力を砲口に収束させて行くのはに、いつの間にかシロウが並び立つ、その手に持つのは黒弓と捻じれた剣……つがえた時点でサンダーストームを発しているカラドボルグには、なのはに負けにくいぐらいの魔力が込められている。

「むう、途端にイヤな予感に包まれる吾輩」

どうやら自分を狙っているのはとシロウに気がついたようだが……それはすでに予感ではなく、明確にそこにある危機だろう。

「スターライトブレイカー……！！」

カラドボルグ
「偽・螺旋剣」

桜色の砲撃と捻じれた剣が同時に放たれる。

雷光を纏い、空気を螺旋にえぐりながら突き進むカラドボルグとスターライトブレイカーの砲撃が一つとなり、桜色の雷光を纏う螺旋剣となって、一直線にネコアルクカオスに向かって飛んだ。

「お前がこのボイスを聞いているということは、父さんはもうこの

世にはいないのだろう。どうか父さんの勝手を許してほしい。ただ一つだけ……お前がメイド喫茶デビューする姿をこの目で見られない、それだけが心残りだ。いや、まだあった。予約済みの沙那の神フィギュアが月末あたりに届くはずなんだが……ああっ！待てっ切るなっちよつまっ」

最後にはネコアルクカオスも観念したらしく、何やら辞世の句というかここでは無いどっかにメッセージを残しつつ、最後にはリアルタイム交信しているようだったが、先方にうざがれたらしく、切られた所で螺旋剣に追いつかれ、その巨体は閃光の中に消えた……末期の言葉としては最低クラスではないだろうか？

「殺った！！じゃなくてやったよ！！」

なのはの黒い部分が顔をのぞかせたような気がするが……きかなかった事にしよう。

『まだですなのはちゃん！！』

「あ、あれ！！」

ルビーの警戒した言葉に、はっとしたなのははすぐに“それ”を見つけた。

ネコアルクカオスの巨体が消え去った……その代わりに、黒い球体状の何かが残される。

『きつと防衛プログラムのコアですね……』

「コア！？それじゃああれをどうにかすればいいんだね！？でも……」
理屈ではあれを破壊すればエンディングだ。

逆に、なのは達がプログラムコアを破壊しない限り終わらない。

時間をかけてでも、コアが健在であればカオスは再生されてしまっただろう……谷津自身相当にしぶとそうだし。

だがしかしあのコアは螺旋剣の一撃と星光の殲滅者の合わせ技……なのはとシロウの最強の一撃でも破壊できずに残った代物……現場においての最凶にして最強の破壊力を持つてしても破壊できない物かどうか？

『大丈夫ですよなのはちゃん』

「え？あ、シロウさん？」

なのはの見ている前で、シロウが手の中に作り出したのは捻じれた短剣。

「……」

シロウは躊躇なくコアに向けて短剣を投げつける。

どう見ても投げナイフとして使うのには向かない形状だが、シロウの並外れた技能により、狙いたがわずコアに向かつて一直線に飛んで行く。

ルールブレイカー

『破戒すべき全ての符、ギリシヤの神話、コルキスの魔女メディアの持っていた宝具、裏切りの短剣、その能力は刃に触れたあらゆる魔術による生成物を初期化する力です』

「あ……」

思わずなのはは声を漏らしていた。

捻じれた切っ先がコアに触れた瞬間、ガラスが割れるような音とともに球体は砕け、闇色の残滓が飛び散る。

すべての魔術の初期化……それは魔法による産物にも有効だったらしい。

それ自体が魔力で編まれたものであるプログラムコアがルール・ブレイカーの刃を受けた場合、肉体のように確固たるものを持たないその末路は、完全な消滅しかない。

「……」

多くの犠牲と悲しみを生み出したプログラムの最期を、なのはは不謹慎と思いながらも美しいと……数度の瞬きの後には魔力の残滓すら残らず消え去る光景には、潔さと同時に儚さも感じさせるものだったとなのはは思う。

「街が……」

コアの消滅で、脅威は排除されたとシロウが判断したのだろう。アンリミテッド・ブレイド・ワークスの世界が解除され、破壊されていない本物の海鳴の街が二人の周りに戻ってくる。

生まれ育ち、見慣れた街の姿になのはは安堵の息を吐いた。

「あ、あの…」

余韻が消えるのを待つて、意を決したなのはシロウに話しかける。

「助けてもらってありがとうございます。プレシアさんの時も…あの時はごめんなさい」

「……」

シロウは答えない。

ただじつとなのはを見ている…その視線を受け止め、見返す。

「その…私…ずっと…」

「おいこら…」

「そうなんです。ずっとおいこらなんなんです…って、は？」

会話に妙な合いの手が入られ、思わず振り向けば至近距離で自分を睨んでいるヴィータと目があった。

「ヴィ、ヴィータちゃん？何で怒っているのかな？それにとつても近いんですけど？」

「お前にもあたしが怒ってるのがよく解るように近づいてんだよ。それよりも何してんだ？」

「え？何って…」

シロウとお話しているのだが…それでは聞くまでもなく見たまんまだし、鬼気迫る気配を発散しているヴィータは間違いなくそんな答えを求めている。

「ここは愛しさとか切なさとか心強さとかで皆で力を合わせて勝利を勝ち取る所だろうが…！」

「ええ！？そんな熱血少年漫画な設定をなぞらなくても…」

「何二人だけでさっさと片付けて他人お断りな二名様限定の甘い世界作ってんだよ！？空気読めや…！」

「あ、甘い世界！？」

いや…二人だけの世界に入っているってわかっているのなら空気を読むのはむしろお前の方だぞヴィータ…そして何で真っ赤になるんだなの？

ユーノが何にショックを受けたのか知らないが、白い灰になっている？

「見る！！って言うか聞け！！フルボッコの曲だって今やつとかかった所だなんだぞ！！」

てつとてのぬつくもりが~~~~~♪

割とやけっぱちな音程なのは気のせいではあるまい。

「はやて姉ちゃんからもこのKYに何か言ってくれよ……って姉ちゃん？」

これだけ騒いでいながら、はやてから何のリアクションもないので変だなと思ってヴィータが振り返って見れば……はやての様子がおかしい事になっている。

具体的には頬に赤みがさして、騒いでるのは達には目もくれず、まっすぐ一点だけを見ている。

「ええな〜かつこええな〜」

「……………は？」「……………」

しかも何やら唐突に変な事を言いだした。

全員ではやての視線をたどってみると……シロウの背中に突き当たる。

「男の哀愁漂う背中って……さいっこうやな〜」

「……………何……………！！」「……………」

予想外というか斜め上を何かが素通りしていった。

驚きで硬直する一同には目もくれず、はやてがシロウの傍に近寄る。

「あ、あの〜わたし〜八神はやてって言います〜危ない所を助けていただいてありがとうございます」

はやては胸の前で手を組み、祈るようなポーズでシロウを見上げている。

その前の中にはキラキラした光があり、精一杯女の子としての自

分をアピールしていた。

こ奴…どうすれば自分を最大限に可愛く見せられるか熟知している行動だ。

「はやてちゃんが女の子している…」

なのはが初めて見る友人の一面に引いている。

「あ、あたしの姉ちゃんがこんなに可愛いわけがねえ…」

『グイータちゃん、家族としてその感想はどうなんでしょう？なのはちゃんもはやてちゃんが可哀そうですよ』彼女も女の子なんですから〜」

「「うっ…」」

珍しいルビーの突っ込みを受けて二人がうめく。

確かにその通りなのだが…普段のはやてを知っているだけに、なんか納得がいかない。

やはり日ごろの行いとイメージは大事だ。

「あ…もう行ってしまうんですか？」

見れば、現界出来る時間が過ぎたのか、シロウの姿が急速に薄れ始めて行く。

やがてその体は魔力の粒子になり、儚い一時の夢幻のように、何も残すことなく消え去った。

「もうイケズな人やね〜」

シロウが消えてもシナを作り、女の子モード継続中のはやて…真面目に誰だよこいつ？

「なのはちゃん!!」

「はい!？」

シロウが去り、目標を失ったはやては、今度はなのはをロックオンして突撃してきた。

「さっきの人!!エミヤシロウさんと知り合いなんやろ!？」

「え、うん…まあ…」

知り合いというか…命がけの真っ向勝負とかやらかした仲だ。とはいえ、あの時のエミヤシロウとさっきのエミヤシロウは、同

一人物でありながら厳密には別人という複雑で厄介な関係でもあるので説明が難しい。

「紹介して!!」

「全然遠慮ないね、はやてちゃん!!」

「恋する乙女は無敵なんや!!」

無敵なのは乙女ではなくお前だろうと思う。

今日のはやては恐ろしく行動的だ。

しかも両肩に手を置かれ、がつしりとホールドされているので逃げる事も出来ない。

まだ魔法使い状態で肉体強化が掛っているはずなのに、振り払える気がしないとはこれいかに!?

「で、でも駄目だよ。そんな簡単に会える人じゃないんだから…」

今回はたまたま闇の書という脅威が存在した為に現界してきたが、それこそ世界崩壊規模の大災害でも起こさなければシロウとの再会はかなわない。

その場合、もれなく抹殺対象に認定されてしまうので、甘い恋愛とかあこがれとかの要素は皆無だ。

そもそも、守護者として現界したシロウには感情がないし、友人としてはやてにそんな事をさせるわけにもいかない。

この世界をくまなく探せば同一人物が見つかるかもしれないが、それはエミヤシロウと同一人物でありながら別人の某シロウさん…英霊エミヤシロウとは別人…むしろ守護者^{アレ}はなるべきではない未来である。

『でも…なのはちゃんが第二魔法をちゃんと使えるようになれば、並行世界ですけどかなり近いシロウさんには会いに行けますよね』

「ルビーちゃん!!」

「ほんまに!?!」

ルビーは絶対面白がっていると思う点について…。

「なのはちゃん!!ハリーハリーハリー!!」

「いきなりそんな事を言われても!!…ってあ!!」

なのは体が再び七色の光に包まれ、光が消えたそこには元の姿に戻ったのがいた。

「な、なのはちゃんが縮んでもうた!？」

「じ、時間切れ見たい」

「そ、そんな」

「ざ、残念だったねはやてちゃん?でもどっち道なのはにはまだ並行世界を移動するような魔術は使えないの、ごめんね」

「そ、そうなん?」

「魔法使いになればできると思うけど…今のなのはは魔術師だから、ルビーちゃんの力を借りてやっと少し魔法使いの力を使えるくらいなの」

がつくりと肩を落とすはやて、見た目に分かるほど背中 of 六枚羽もおれてる。

あの羽は飛ぶだけじゃなく感情表現にも使えるのか…しかしそれも数秒…ピンと以前よりも鋭角に跳ね上がると同時、はやてが力強く立ち上がる。

「わたし復活^{リボン}!!よし、そんならわたしが魔法使いになったる!

!

「……そう来たか!!」

「それでシロウさんに会いに行く!!所で魔法使いつて魔導師や魔術師と何が違うんの?」

「……何にも知らないで魔法使いになるつもりだったんだ!？」

「……」

突っ込みどころが多過ぎる。

この暴走娘…ブレーキというものがないのか?

手段は選ぶためにあるんだぞ?

「だ、駄目だよ!!そ、そんな不純な考えで魔術を習ったら」

「ほえ?」

「魔術はとっても危険なの!!」

『あれ?その割にはすずかちゃんにはすぐにOK出しましたよね

？」

「ルビーちゃんシャラー……ッ！！」

はやてのなのはを見る目が半眼になり、全身から嫌な汗が噴き出てきたなのはの肩に手が置かれ、ギギギと振り返って見れば三白眼なはやてと目と目で通じあう。

はやての目は、犯人を追いつめる刑事のようなだったとなのはは後に語る。

「なあなのはちゃん？」

「は、はやてちゃん？」

「……ひよつとして……なのはちゃんもシロウさんの事好きかな？」

「にゃ……！！」

真っ赤な茹蛸状態になつては言い訳もへったくれもない。

なのはは全身で口以上に物を語っている。

『そう言えば前回、なのはちゃんシロウさんに頭撫でられてましたね？あの時実はこっそりフラグが立ってた？さっすがシロウさん、一言もしゃべらず女心を落とすなんてパネエですね』

「くあ……ルビーちゃん！？」

「ちいっ……！かなり先を越されてしまつとるのか！？なのはちゃん怖い子……！」

はやてが拳を握って少年漫画のようにわななく……乙女は何処に行つた？

「な、なのは怖くないよ……！」

いや、お前は色々な意味で怖い。

そしていつの間にか戻つて来ていて、電柱の陰からハンカチを噛みつつ、涙目でなのはを覗き見ているフェイトも怖い。

更には、フェイトに何と声をかけていいのか分からずおろおろとしているアルフと……さらに後方の電柱の陰から盗み見しているプレシアはどうしたものか……ちなみにその足下で白い灰になっているユイノは誰にも見向きされていない……処置なしだ。

「……なのはちゃん？」

「にゃ？」

「私達は親友や」

「う、うん……」

何か色々思う所がないわけじゃないが、なのははとりあえず首肯する。

「でも恋にかけては宿敵と書いて友と読む！！」

「ライバルじゃなくて！？」

「そうとも言うな！！」

一体だれが調子に乗ったこいつを止めるんだ？

「フッフ、子供達の恋バナじやあひというのはどうしてこつちも微笑ましいの
だろうなクロノ？あの子達を見ていると昔の君を思い出すよ」

「そ、そうですね……」

クロノは隣に立つグレラムの言葉に生返事を返した。

その口からは軽くエクトプラズムが出ている。

「それにしても……我々は何をしに來たんだったか？」

「え、えつと……さあ……」

これは自虐ネタだろうか？

気まずさMAX状態でクロノはまともな答えを返すことが出来ない。
い。

死まで視野に入れて勢いこんで来て見れば、完全観客者扱いで何もさせてもらえなかった……いや、最初の力オスの不意打ちに硬直し、その後が始まった大規模広範囲戦闘に介入の糸口さえも見つけられなかったのだから、力不足とか自業自得と言われても反論の余地はないのだが……あの戦闘は一見してフザケテはいる物の、使用された魔法や魔術は高度なものだったし、普通の魔導師の出る幕などなかったと、言い訳ならいくらでもできるがしかし……。

「こんな……こんなあつさりと決着がつくとは、クロノ？君の見通し

はすごいな？」

「そ、それほどでも…」

クロノだってここまで見越していたわけではない。

そしてグレアムも本気で思っているわけではないだろう。

これは要するに…軽い現実逃避だ。

「それに対して…ははは、私は何をしていたんだろうな？」

「お父様…！」

「衛生兵…！えいせいへーい…！」

いきなり卒倒したグレアムとそれに駆け寄る猫姉妹の姿には真面目にビビった。

おそらく十年に及ぶ重責とか罪悪感とかが一気に解消されたため、精神のブレーカーが落ちたのだろう。

「命短しはしゃげよ若人」

名言っぽい言葉とともに、グレアムの病室直帰が確定した。

今度こそ駄目かもしれない。

慌てたりンディの指示で、アースラから駆けつけてきた魔導師の皆さんに連れられて行くグレアムと付き添いの猫姉妹を何とも言えない目で見送り、気がつけばクロノだけが残っていた。

近くではまだなのは達のじゃれあいが続いているが、今さらあの騒ぎの中に突入していく気力もないクロノは、どうしようもなく一人ぼっちで絶賛孤立中だ。

「…世の中は、こんなはずじゃなかった事ばかりだよなこんちくし
よう…！」

悲しさとやるせなさ孤独感を胸に、クロノは夜空に輝くオリオンに向けて叫ぶことしかできなかった。

最終話 C h a o s (後書き)

ゆっくりでも長くても、歩き続けていればいずれはゴールにたどり着くもんです。

さて、後はエピソードのみとなりました。

クリスマス・イブ…ぶっちゃけるならば、年末最後にして最大のホーリーイベント…プレゼントやらケーキやらで友人・恋人と飲みまくりの食いまくりのはしゃぎまくりの一夜…本来のクリスマスの趣旨とは乖離甚だしい事この上ないが、少なくとも日本における大多数の認識としてはおおむね間違っではない。

25日が終われば本格的に年末に向けて動き出すので、これが最後とばかりに皆が幸せに浸り、楽しむ日………なのだが、どんな事にも必ずと言っていいほど、例外というものは存在する。

それはクリスマス・イブにも適用される不文律であり、聖夜とはいえ100%の人間が幸福の中にいるわけではない。

「んん…あつま…い！おいし…い！！」

日本の地方都市、海鳴にある喫茶店翠屋…営業を終了し、閉めた後の店内において、これでもかというほど豪華絢爛なフルーツパフェと個人用の小さなケーキ…この店のパティシエ、高町桃子による採算度外視&職人のこだわりをこれでもかというほどに詰め込んだ一品、もとい二品を堪能しているアリサ・バニングスは間違いなく前者、幸せを甘受している側である。

「………」

そしてアリサの眼の前、パフェとケーキに舌鼓を打つアリサを店の床に正座したままうらやましそうに見ているなのは、フェイト、すずか、はやての四人は不幸せを享受している側になる。

店内には他にも高町家一同とパーティーにお呼ばれしてきた月村忍とメイドの二人もいるが、皆一通りの事情を知っているか教えられたため、全力で四人から目をそらしていた。

今回の件は明らかにアリサ以外の四人の方に非があるし、ここで関係ない人間が仲裁に入ると間違いなくこじれるのが目に見えているためだ。

「な、なあアリサちゃん？ちょこつとでいいから私達にもわけ…」

「あゝおいし、それで何か言ったかしらはやて？」

ぎらりと形容できる視線に睨まれて、はやてがタラリと冷や汗を浮かべる。

ちなみに彼女、決戦時においては普通に立てていたものの、バリアジャケットを解除したとたんまた歩けなくなった…闇の書にリンカーコアを吸われていた時期が長かったのと、長い車椅子生活で衰えた足にはリハビリが必要だったからだ。

いずれは普通に歩けるようになるだろうとアースラの医者にも診断されたのだが、問題なのは今現在のはやては、まともに足が動かないということである…それでも容赦なく正座させる所にアリサの怒りようが垣間見えるというものだろう。

「えゝいや、おいしそうやね？」

「ええ、とつてもおいしいわよ」

無言の圧力に屈したはやてに、アリサは顔を元の笑顔に戻してスィーツの感想を嬉々として語る…彼女もなかなかいい性格をしている。

「それにしてもみんなひどいわよねゝ魔法？魔術？魔導師？私何にも知らなかったなあゝ」

「……う……」

重い…とつともなく重い何かが四人に押し掛かってくる。

その重みに屈して土下座したくなるレベルだ。

すずかのジャーマンスープレックスで気絶させられたアリサだが、当然というか予想通りというか、意識を取り戻したのは「なのは&エミヤシロウVSネコアルクカオスによる世界をかけた最終決戦、勝つのはDOCCHIDA?」の終わった後で、しかもなのはたちがとりあえずアースラに帰還した直後と来れば、アリサが自分の置かれた状況と本人の性格+彼女に対するもろもろの仕打ち（主にすずか経由）からすさまじいマシンガントークで説明を求めるのは当然であり、なのは達としてもここまできたら事情を説明しないわけ

にもいかなかったため、洗いざらい暴露した………のだが、なのは達の話全部聞いたところで、アリサに大泣きされた。

いつも勝気なアリサのマジ泣きには、友人一同マジで焦り、何でも言う事を聞くからと宥めて泣きやませたら、クリスマス・イブにものほしそうな四人の目の前でパフェとケーキを独り占めして至福を満喫しているアリサという構図が誕生したというわけだ。

ちなみに、アリサが堪能しているケーキとパフェの代金は四人のお小遣いから出ている……家族のカンパとかは一円たりとも認められないのも約束の内である。

「みんな私だけ除け者にして、酷いわよねゝすすか？」

「えう」

「そつえばすすかもその一人だっけゝあゝあ、これからどうやって付き合っていけばいいのかなゝ」

「ア、アリサちゃん」

アリサの攻撃というか口撃にすずかは涙目だが……これに関しては間違いなくすずかのせいなので同情の余地がない……やはりジャーマンスープレックスを路上でやるのはまずいだろう。

それを食らってピンピンしているアリサも人間かどうか疑わしいと思うが、やはりジャーマンはポテト以外は文字通りただけな

い。
「え、えつと……アリサちゃん？」

「どうしたのなの？つらそうね？」

「私ね、筋肉痛が再発って言うかまたやっちゃったって言うか……」
「いわずと知れた魔法使いになった反動である。」

いくらリターンに対するリスクが破格の低さといっても、きついものはきつい。

「このままだと正座の姿勢で体が固まっちゃいそうなんですけどおゝ」

筋肉痛の時や、運動直後にじっとしていると体が固まって動けなくなるあれだ。

一度固まってしまうと本当に動かす時に痛くなるので地味にきつい。

「そう、大変ねー頑張ってねー!!」

「二、ニヤ…はい…」

とつてもいい笑顔で形だけの応援を返された…解放してくれるようすが欠片も見えない。

きつと今日のアリサは容赦とか慈愛の精神をどこかに忘れてきたブラックアリサなのだ。

「ア、アリサ？」

「どうしたの、フェイト？あんたも何か文句があるわけ？」

「そ、その…黙っていたのは私達のせいだから何もいえないけど…何で、何でアリシアだけ？」

姉に名を呼ばれ、アリサの隣に座っているアリシアが身をすくませた。

彼女の目の前にはアリサと同じ二品が鎮座しているが、アリシアはそれに手をつけることなく恐縮してしまっている。

「だって、私達より小さい子に正座させて目の前で甘いものを堪能するなんてできないでしょう？」

自分達はいいのか？つと四人は思ったが、賢明にもそれを口にはしない…今日のアリサは王様である。

「あらあらーアリシアどうしたの？全然食べてないじゃないの？」
「えつと、アリサさん？」

そんな事を言われても、アリシアはどうしたらいいか分からず、目を泳がせるしかない…つというかどうもなのは達をいびるダシにされているような気もして来ている。

いや、これは間違いなくダシにされている…女の怒りとは書くも恐ろしいものか？

「四人の事なら気にしなくていいのよ？」

「そ、そう言うわけにも…」

アリシアの中に、アリサの言うとおりご相伴にあずかるという選

舐められない。

この状況で平気でパクパク食べるのはアリサくらいの物だろう……
アリシアにそこまでの図太さを求めるのは無理だ。

「ほら、食べないなら私が食べさせてあげるよ」

「い、いえ、自分で食べられますから……」

夜天の書の主、八神はやて……。

吸血鬼の血をひく末、月村すずか……。

現状においても高レベルの魔導師、フェイト・テストロッサ……。そして未来の魔法使いの卵、高町なのは……。

まだ10歳ほどの子供であるが、この四人がそろえば、冗談でなく師団規模の数だろうと敵に回して相手ができるだろう。

ただし、アリサ>>>越えられない壁>>>四人……それが今宵一晩のやり方である。

そんな風に色々ヒエラルキー下剋上な事をやらかしている子供達の隣では……。

「これからよろしく願いしますぞレヴァンティン殿」メリークリスマス!!」

「Merry Christmas……」

「ハハハ、元気がないでござるな」レヴァンティン殿「元気があれば何でもできるでござるよ」メリークリスマス!!」

バルディッシュが全力でレヴァンティンに絡んでいた。

双方デバイスなので表情などは当然読めないが、それでもバルディッシュが上機嫌で、対するレヴァンティンが迷惑そうにしているのは良く分かる。

「姉さん……何ですかあのバカ……バルディッシュのテンション上げ上げっぷりは？」

「ああ……一瞬、思わずバカディッシュと呼ぼうとしましたねレイジングハート？まあいいですけど」

「……まあいいのか？」

「実はですねレヴァンティンには剣、シユベルネオナルダフォーム連結刃に続く第三の形態があ

るらしいんですよ」

その名も弓、ボーゲンフォームレヴァンティンの遠距離攻撃形態だ。

『でも、それを使う機会がなかったというか、なのはちゃんとシロウさんが弓を使う時にもハブられ、出番なしに終わっちゃったわけです』

『それで、何故バルディッシュが調子に乗らなければならないんですか？』

『ほら、一応バルディッシュは、ザンバーフォームのお披露目に成功しているじゃないですか』

まったく役にも立たなかったが、それを言うとフェイトまで泣いてしまうので要自重だ。

『自分はちゃんと変身出来たけどレヴァンティンは不完全燃焼だったんで、ちよつと優越感を感じてるんじゃないですか？』

『バルディッシュ：貴方の小物ぶりが増大中です』

聖夜なのに、救いが微塵もないな…。

「ねえちゃん！！」

そんな微妙過ぎるクリスマスパーティーに乱入してきたのはサントでもブラックサントでもなく、ヴィータだった。

扉を破壊するつもりなのかという勢いで開け放ち、店内に突入してきたヴィータは、はやての姿を見つけると一直線に駆けよって来る。

「ヴィータ、何処にいったん？色々問題ありまくりやけど今日はクリスマスパーティー…」

「そんな事はいいいから！リインフォースを止めてくれよ！！」

「リインフォース？リインフォースがどないしたんや？」

主語がないのでうまく話が通じないものの、そのあわて様から何かただ事でないというのは分かる。

しかもリインフォースがらみだ。

「ヴィータ…主には何も言うなと言っただろう？」

「リインフォース？」

問い返そうとしたはやての言葉より早く、店の扉を開けて本人が登場した。

しかも彼女一人だけでなく、シグナム達ヴォルケンリッターにクロノとリンディ、そしてプレシアまで一緒だ。

全員に共通しているのは、どこか沈痛な物を抱えている表情をしている所か…これで何かあったと察しない奴はいないだろう。

「……リインフォース、どうしたんや？」

「お暇を…頂に参りました」

「っ!？」

短い、はつきりと告げられた言葉にはやてだけでなく全員が息をのむ。

「どう言う…事や？」

「防衛プログラムは消去に成功しました。しかし私が残っている限り、いずれ遠くない未来にプログラムが再構築されてしまいます」

防衛プログラム…それ自体はコアごと消去に成功した物の、それを生み出した土壌となる夜天の書は闇の書に改悪されたままだ。

このまま防衛プログラムが再構築されれば、それは再び暴走する闇となる。

「なので、私は闇の書と共に消えます」

「あかん!! 何いっとるんや!？」

はやての言葉に対して、リインフォースはやさしい笑みで答えた。
「すでに守護騎士プログラムは切り離して主はやてに依存する形に書き換えてあります」

「そんな事を聞きたいんやない!! 何か方法があるはずや!!」

「無理なのです。元の…夜天の書であった頃のバックアップデータは失われています。再構築は不可能です」

リンディ、クロノ、プレシアが揃って顔を逸らした。

彼等の力を持ってしても、リインフォースの改悪を修正する事はかなわなかったのだろう。

「もう少し時間があれば…」

「ミズ・プレシア、貴方達ができる限りの事をしてくれた。この結果は貴方達のせいではない」

プレシアのつらそうな言葉は己の力不足の悔しさか…顔を俯かせる彼女をリインフォースが慰める。

そもそも、夜天の書を作り出した技術自体が失われた物だ。研究を進めればそれをどうにかすることは可能かもしれないが、どうしようもなくそのための時間が足りない。

「そんな…」

しかし、はやてにとってそれは納得できるものではない。

「あかん！！あかんよ…せっかく自由になったのに…これからは皆一緒に…」

「申し訳ありません…主…」

泣きだしてしまったはやてを、リインフォースはやさしく抱きよせた。

誰もがそれを黙って見ている。

主と…僕の最後の別れを…。

「……」

抱き合うはやて達に、店内にいる全員の視線が向けられている時、唯一の例外であるなのは二人に目もくれず…

「ルビーちゃん？」

『はい、何ですか？』

ルビーの元に辿り着いていた。

その顔は何時になく真剣だ。

「…どうにかしてあげられないかな？」

『出来ますよ』

「あ、やっぱり出来たんだ」

ルビーの返事に、なのははほっと安堵の息を吐く。

肩に感じていた筋肉痛以外の重みも一緒に抜け落ちた気がする。

『なのはちゃん、そこは「ああ、やっぱり出来るんだ…」って本当にできるの!？」って言う所では?』

「うーん、何となく? ルビーちゃんならできる気がした」

「ほんまにできるん!？」

いきなり会話に乱入されたが、なのはもルビーも声の主がはやてと分かっているので嫌な顔すらしない。

気がつけば、店内にいる全員がなのはとルビーに注目していた。

特にリインフォースが目を丸くしているのが印象的だ……クール奇麗系の呆気にとられた表情というのは多分レアだろう。

『本当にできますよ! アリシアちゃんの時よりハードルは低めですね! ルビーちゃんの実力の範疇です!』

「それで、どうやるのかしら?」

具体的な方法を聞いてきたのはプレシアだ。

彼女もそろそろ付き合いが長いので、いい加減にルビーのやる事に驚くのは止めたのだろう。

ならば後は純粋な好奇心だけが残る。

『ルビーちゃんがマスターの異なる可能性を引き寄せて上書きする能力の持ち主なのはご存知ですね?』

「つまり、彼女の“正常な状態の可能性”を引き寄せて上書きするということ?」

『はい、その通りです。さっすがプレシアさん、リインフォースさんがプログラム体というのもラッキーだったですね!』

これがちゃんとした肉体を持っていたら最終的には元の状態に戻ってしまうだろうと解説するルビーに、全員が感心している。

ルビーを見る目が尊敬の色一色になっているのは初めてかもしれない。

「でも…彼女は貴女のマスターじゃないわよ? その可能性を引き寄せるなんてできるの?」

『確かにルビーちゃんの想定されていない使い方ですが、ここはあ

えて無理を通して道理に引っ込んでもらいましょう。その為に必要なのは」

「何！？何が必要なん！？」

はやてが必死になってルビーに続きを促す。

他のヴォルケンリッター達も同様だ。

これがうまくいかなければ、家族となるはずだった一人が永遠に失われる。

『ズバリ、乙女ばわくです！！』

「……………は？」

聞いた者全員が聞き返していた。

真剣な話だったはずだが…何かファンタジーなワードが混じって来た。

『汚れ無き少女のラブラブパワーがルビーちゃんにさらなる力を与え、不可能を可能にする力を与えてくれるんです！！』

「……………え、えっと……………」

愛と勇気の少女マンガの設定見たいだと誰もが思った。

本当にそれでどうにかなるのだろうか？

…夢物語と断じたいのは山々だが、残念な事にその中心はルビー…こいつはある意味、何をやらかした所で何となくルビーだからしようにないと思わせるところがある。

「私…やる！！」

「え？主はやて？」

名乗りを上げたのは他ならぬはやてだ。

それを見たリインフォースがあわてだした。

「き、危険です！！あんな訳の分からない物の言う事を信じるんですか？」

『あはあゝ割とひどい言われよう』

ルビーと初対面ではわけのわからないものというのは仕方がない。実際、付き合いが長くてもやっぱりルビーはわけのわからないものだ。

「それでもや、リインフォースがいなくなるくらいやったら何でもするで!!」

「主…」

「にやはは、はやてちゃん？」

なのはがはやての肩に手を置く。

「なのはちゃん？」

「ルビーちゃんのマスターはなのはだもん、魔術回路を持ってるなのはがルビーちゃんを起動しなきゃダメでしょ？」

「力を貸してくれるんか？」

「は、はやてちゃん…」

「私達も…」

「フェイトちゃんに…すずかちゃんまで…」

なのはに続いてフェイトとすずかも協力を約束してくれた。

「なのは様、私も…」

「えっと、ルビーでいいわよね？私魔術とか魔法とか使えないんだけどやれる？」

『はい、大丈夫ですよ』

アリシアとアリサまで協力を申し出てくれたことに、はやての涙腺が緩む。

「皆…ありがとうな」

「泣くのは後にしなさいはやて、その人が助かってから…」

「そうやね、アリサちゃんツンデレありがとう」

「一言多いわ!!」

通夜のようだった場が、一気に何時も通りの空気に戻った。

「あたいもやるぜ!!」

『え？ヴィータちゃんも？』

「なんだよ、なんか文句あるのか？」

『うゝん、まいっか、きつとどうにかなるでしょ』

「なんだよそれ、何か気になるな…」

実年齢●●歳の見た目幼女ゴスロリは少女にカテゴライズしてい

いものかどうか…っとか、きつと気にしたら負けだ。

『さつてと、ではまずなのはちゃんがルビーちゃんを握ってください』

「うん」

なのはが言われたとおりルビーを手取る。

『次にリインフォースさん』

「わかった」

リインフォースがなのはの手の上からルビーを握る。

『それではみなさん、ルビーちゃんの何処でもいいから掴んでください』

言われて、全員がルビーのどこかに触れた。

『では行きますよー皆さん、全力でリインフォースさんの事を思ってください』

「……はい!!」

『なのはちゃん、魔力回路起動』

「わかったよ!!」

なのはが瞳を閉じ、トランス状態になると同時にルビーが淡い七色の光に包まれた。

なのはの魔力回路で生成された魔力がルビーに流れ込んでいる証拠だ。

全員でルビーに手を当ててしばらくすると、徐々にルビーの輝きが強くなって行く。

もはや電灯を通り越してサーチライトレベル…光が目刺さってくる。

まともに目を開けているのもつらい。

『あはぁー来てます来てますよールビーちゃんびんびんに来ています!!ルビーちゃんびんびん物語!!』

びんびんって……何が？

なのは達から供給されているらしい、ルビー曰く乙女パワーという奴が過充電っぽくなっているのか、何時になくルビーがハイって

奴になっている。

『それでもってリインフォースさんと同調開始』

「う…あ…」

リインフォースの口から声が漏れる。

艶っぽい声に、見守る男性陣がどきりとした。

お姉さんキャラが顔を赤くして悶える姿は…いいものだ。

『リインフォースさんの同位存在掌握、顕現』

リインフォースの体がダブって見えた。

元々のリインフォースと、半透明に輪郭がぼやけているリインフォース…おそらく、新しく現われた方が改悪されることなく、オリジナルのままであったリインフォースの可能性なのだろう。

『シンクロ完了、リインフォースさん、“上書き”どうぞ』

「くっ…了解、“修正”を開始します！」

苦しげながらも、リインフォースが何かをやったのだろう。

両者の距離というか輪郭が一つに重なった。

「……やったんか？」

その奇跡のような光景に圧倒されながらも、問いを発する事が出来たのははやてだ。

「…はい、成功です。主はやて…」

はやての恐る恐るな問いかけに、リインフォースが答えた瞬間、歓声が爆発した。

ご近所さんの迷惑になるかもとか、そんな事を考えている余裕など誰にもない。

ただただ、今宵ここで起こった奇跡を喜ぶ声を上げている…この世界から消え去るはずだった一人の女性の運命が、確かに変わったのだ。

「ほんま、ほんまに消えんでええの？」

「はい…防衛プログラムも、正常な状態に復帰しました」

その瞬間、翠屋は聖夜に相応しく、喜びと幸せの中にあった。それは間違いないし、疑いようはない。

「……う」

「リインフォース？ど、どうしたんやリインフォース」
たとえそれが、いきなりリインフォースが苦しげに身をよじるま
での…短い平穏だったとしても…。

「どう言っことルビーちゃん！？成功したんじゃなかったの」

『え？いや…ルビーちゃんにもよく…“上書き”は成功したはずな
んですが…』

ルビーが真面目に困っている。

つまりこの状況はルビーの予想すら超える事態という事か？
その時点でかなりやばい気がする。

「しつかりするんやリインフォース、どないなっとなるんや！！」

「あ、主はやて…う…」

「う？うなんや？」

「……生まれる」

一瞬で音が消えた。

「………な、何——！？」「」「」「」「」「」

そして放たれる大絶叫、ただし今度のそれは喜びではなく、戸惑
いと困惑と…後は若干の恐怖がないまぜになった叫びだった。

「う、生まれるって子供がか！？」

「あ、赤ちゃんってこうやって生まれるのユーノ君？」

「え？いや全然違うよ！！まずは雄しべと雌しべが…」

「なのはに何教えようとしているんだこの畜生は！！」

一瞬でパニックの極みに達した一同は、普通の会話でさえ怒鳴り
つけるような大声になる有様だ。

「し、忍！？何とかならないか！？」

「え、ええ！？恭也！？何で私に聞くの！？」

「恭也様…失礼ですがそれはセクハラに当たるのではないでしょ
うか？」

「恭ちゃんのスケベ…」

「ええ！？ちょ、ちよっと待った！！」

三角形の面子は全滅っぽい。

おじやまおじやま

むしろ内部分裂中…彼等は元々、18禁な連中だから、子供の作り方は知っていても、出産に関する知識はあるまい。

「シ、シグナム…！こういう時どうしたらいい！？」

「愚問だな…！騎士に助産婦の真似事などできるわけなかるう…！私よりもシヤマルの方が…！」

「私だって子供を産んだことも取り上げた事もないわよ…！」

「こういう時こそ年の功だろうがシヤマル…！」

「一緒に作られたんだから同じ歳でしょう…！人を年上みたいに言わないで…！」

「……」

ヴォルケンリッターは端から論外、元からして主を守るためのプログラムなので、知識だけはあるかもしれないが、それはあくまで情報の域を出ないものであり、実際に直面した経験などあるわけではない。

特にザフィーラに関しては硬直して身動きさえ取れないにいるが…雄と書いて男ならばその気持ちは十分に分かる。

「…落ち着きなさい…！」

誰もがどうしたらいいか分からなくなっている所に、頼もしい声が響いた。

全員が振り返るそこにいるのは三人の女性…高町なのは母、高町桃子…フェイトの母、プレシア・テストロッサ…クロノの母、リンディ・ハラオウン…。

「……………おお…！！……………」

誰もが浮足立つこの状況で、慌てないどころかジョジョ立ちまで決めるとは…やはり経験者は伊達では無い。

ママーズの頼もしさに、全員が後光を見た…勿論、スパゲッティの麺は関係ない。

「なのは、フェイトちゃん？急いでお湯を用意して、でもあんまり熱くしちゃダメよ」

「はい!!」

「アリサさんとすずかさんは清潔なタオルを用意してください」

「はい!!」

「ヴォルケンリッターは私達の補佐をお願いするわね」

「了解!!」

桃子、リンディ、プレシアのテキパキとした指示に全員が従う。

反論や疑問は出ない。

そう言う事を言う雰囲気じゃないというか、実際そんな事を言っている場合でもなかった。

「そして男性陣は……」

「は、はい!!」

「俺達は何をすればいい!？」

「主の為、リインフォースの為、何でもするつもりだ」

口々に協力を申し出る男達だが、それに対してママーズはにっこりと笑い

「ここは今から男子禁制です」

「邪魔をしないでくださいね」

「速やかに撤収!!」

「……イエッサ!!」

三者三様の物言いだ、要するにとっと出て行けという指示に、男達は即座に従う。

「親父、男ってこういうとき無力だな……」

「言っただけ……彼女は彼方の女と書く、男が女を理解しきる事も理解され切る事もない」

「け、経験者は語るのか？」

「ああ……そう言う事だ」

やたらと重い親子の会話、しかもこの場における唯一の妻帯者の言葉に、残り三人の男達はなるほどそう言うものなのかと思う。

「どうですか？」

「うーん」「」

男達が出て行き、残された女性陣一同に囲まれながら、ママーズははやての問いかけに唸っていた。

何だかんだで勢いのまま男達を追い出したまではよかったが、三人は今更ながらに困惑している。

リインフォース

本人が生まれると言ったので、とっさに出産用意を整えた物の…どう見ても彼女に妊娠している様子がない…ならば男達を追い出す必要はなかったのではないか？と思わなくもないが、ママーズも平常心に見えてかなりパニックっていたようだが、全ては後の祭りだしとりあえずどうでもいい。

問題はリインフォースだ。

「う…う…」

「だ、大丈夫なんか？」

妊娠ではないとすると、ひょっとして性質の悪い嘘や冗談のたぐいかと言えば…それも違う。

出産かどうかはともかく、リインフォースの苦しげな表情はどう見ても演技ではない。

「そう言えば…人間じゃないのよね…」

プレシアの言うとおりだ。

今更ながらだが、彼女は人間では無い…人間の常識が当てはまらない存在だ。

となると、本当に出産だとしても、自分達の経験が全く役に立たない事になるが…真面目にこの状況から何がどうやって生まれるんだろう？

「う…生まれます！」

「え？あちよつとま…」

焦りの言葉を言いきるより早く、リインフォースの胸から何かが

飛び出してきた。

白く…リインフォースの髪の色に似た輝きの球体だ。
光を通して、中に何かが見える。

「妖精…さん？」

それを見たなのはが、思った事をそのまま口にした。
球体の中にいるのは小さな女の子…一糸まとわぬ全裸…膝を抱えるようにして丸くなっている少女だ。

「見た！？ルビーちゃん、これが本当の妖精さんだよ！！」

『なのはちゃん…まだネコアルクのネコ妖精設定を認めてなかったんですか？』

「譲れない物が…あるんだよ」

こだわりの熱意は認めるが、正しいのかそれ？

「んう…」

それはともかく、全員の注目を集める中、球体の中の少女が身じろぎし、閉じていた瞼が開く…その下にあった色彩は…。

「あ…赤い…」

リインフォースと同じ赤い瞳…容姿も、リインフォースをそのまま小さくしたような整った顔立ちをしている。

「リ、リインフォース？あれ何？あんだけ似とるんやから他人やないやろ？」

「あ、主はやて…私にも何が何だか…」

驚きではやてもリインフォースも口調が変だ。

「うゝん」

球体が消えても空中にとどまったままのリインフォース小（仮）は、羞恥心も何もなく全裸の体で大きく伸びをした…男連中をとつとと追い出していたのは男性陣にとつても、リインフォース小（仮）にとつても正解だったようだ…まあ、予想していたわけではないのだが…やがて満足したのか、リインフォース小（仮）はまだどこか寝ぼけた眼で周囲にいる全員を見回し、リインフォースに目を止める。

？マークだらけで自分を見るリインフォースとリインフォース小（仮）の視線が真っ向から交差した。

「ママー……！」

「……何——！？」「……」

さつきから何度目の絶叫だろう？

数えるのも億劫だ。

リインフォース小（仮）は本人も含めて驚愕している周囲を丸々と無視して、リインフォースの胸に飛び込んで行った。

リインフォースの方も、胸に飛び込んできた小さな自分をとっさに受け止める。

「ま、ママ？」

「はい、リインフォースママ」

どうやら本当にリインフォース小（仮）はリインフォースの事を母として認識しているようだ。

『ああゝそう言うことですか』

「ルビーちゃん？」

『あれは多分、重複したリインフォースさんの情報ですねゝルビーちゃんもこれは予想外』

“上書き”ならば問題なかっただろう。

しかし、リインフォースがやったのは“修正”、並行世界の自分のデータを元に、己の情報を正常な状態に書き換えたのだ。

『この短時間で自分の構成情報を書きかえるなんて、どこぞのスーパーコーディネーターみたいな事をしますねゝ古代ベルカのロストログアは化け物かゝって言いたくなります』

上書きと修正、この二つは似ているようで全くの別物だ。

上書きの場合、元からの情報と新しい情報を置きかえるため、基本的に元のデータは破棄される。

元のデータ…それはすなわち、はやて達との経験…それが失われれば、残るのはリインフォースそっくりでありながら、別のリインフォースだ。

それでもリインフォースには違いあるまいが、無意識にしる意識的にしろ、彼女がそれを嫌がったのは理解できる。

そのため、リインフォースは正常な自分の情報をもとに、防衛プログラムを含めた問題のある部分だけを正常な状態に戻したのだから。

「それで何であの小さなリインフォースさんが出てくるの？」

『データが重複して存在したからでしょう』

元々のリインフォースと、並行世界のリインフォースのデータだ。

「別々のOSが二重にインストールされたようなものかな？」

『大体そんな感じでしょね〜二つは根本は同じものだったはずですが、すでに別物となってますから〜』

そんな物がまともに機能するわけがない。

『なので、新しい方のリインフォースさんのデータが外に吐き出されて実体化したわけです』

おそらくは、並行世界から取り込んだリインフォースのデータが稼働しようとしたため、拒絶反応のような感じにあの小さなリインフォースを排出する事で、自己崩壊を回避したのだろうというのがルビーの予想だ。

『確かに親子といえなくもないですね〜元データが同じなので姉妹とも言えるかもしれません』

「それって大丈夫なの？」

『多分？元々あのリインフォースさんは改悪されなかった可能性のリインフォースさんです。むしろ大丈夫ではなさそうなのは…』

じっと見つめあう大小のリインフォースだ。

どうなるのかと、思わずガン見してしまう。

「ママ〜」

「え、えつと…娘なのか？私の？」

「はい〜リインはママの娘ですよ〜」

一応、親子の語らいみたいなのをかわした二人が見つめあうと数秒…。

「……主はやて!!」

「うわつとびつくりした。どうしたリインフォース!?」

「私、この子の母親になります!!」

いきなり叫んだかと思えば…これまたいきなり母親宣言ですか?

「あゝうん、わたしとしても家族が増えるのは望むところやし、なのはちゃん達の話だと危険はないみたいやけど…ええの?」

やっと闇の書から出られたと思ったら、一足飛びに母親になると波乱万丈も過ぎるだろう。

決して色々な意味で先を越されそうだからというわけではない。

「……本当やで?何も羨ましがってはおらんからな?」

「は?…主はやて、誰と話をされているのですか?」

「えう?ああ、気にせんでええよ。よっしゃ!!夜天の書の主として、新しい家族の誕生を認めるで!!」

「………おお」

皆から賞賛と拍手が来た。

「よかったな」

「はい、ありがとうございます」

「ふふ、今日からお前はツヴァイだ」

「ツヴァイ?」

「そうだ。私がアイン、お前がツヴァイだ」

「わゝい、ママから名前を貰いましたゝわたしの名前はリインフォース・ツヴァイですよ」

確かに母親が娘に名前をつける事は間違いないだろう。

間違いではないが…だがしかし、駄菓子菓子である!!

「ち、チョイ待ち!!名前はもうちょっと考えてつけようや!!そのまんま過ぎやろ!!」

一番目と二番目…はやてが待ったをかけたのもむべなるかな…そのまま、新しい家族の名前を決める八神家家族会議が開催された。

聖夜には奇跡が起こるといふ。

きつとこれも、そんな奇跡の一欠けら……神は暴君だから、時々気まぐれに奇跡を起こす。

「……………」

年末の野外は寒い。

しかも海鳴は海に面した町である……冬の海風の冷たさは半端ない物がある。

しかしそれでもあえて、五人は野外にいた。

「……………」

「ユーノ君、クロノ君？少し落ち着きなさい」

そわそわと、冬眠から目を覚ましてしまった熊のように、周囲を歩きまわっているユーノとクロノを高町士郎が窺める。

「す、すいません……」

「も、もう、生まれたんでしょうか？」

まんま我が子が生まれるのを待っている父親の姿だ。

二人の様子に、そう言えばなのはが生まれた時の自分も同じ行動をしていたなと、士郎は懐かしく昔を振り返った。

「覚えておけよ恭也、お前も忍さんの時はああなる」

「な、何を言ってるんだ親父！！俺はあんな待てを言い渡された犬みたいな事……」

「そう言う事はさつきからやってる貧乏ゆすりを止めてから言え」

「うつ……」

どうやら自分で気づかないうちにやっていた貧乏ゆすりを止めるが、ほどなくして再開したのを見て、恭也の練習メニューに精神鍛練を取り入れる事にした士郎だった。

「……………頑張るのだぞ、リインフォース」

ザフィーラ？

彼なら忠犬ハチ公よろしく、狼モードで翠屋をじっと見て身動き

もしない…あれが彼なりのやり方なのだろうと思うので邪魔はしないでおく。

「お、寒いと思ったら雪か？」

見上げれば、黒い空から白いかけらがはらりと降って来た。

とても儚い、地面に触れれば消え去る一片の雪…だがそれだけに、積り行く雪にはない美しさを見せる。

ホワイトクリスマス…聖夜には奇跡が起こるという。

今年の神様は大盤振る舞いをしてきているようなので、きっと無事に終わるだろう。

「しかし…寒いな…」

「ああ…本当に…」

事が事だけに、安易に店に戻る事も出来ず…かと言って自分達だけで家に帰るのも薄情に過ぎると寒さに耐える男性陣は無事に（？）ツヴァイが生まれ…母親役のリンフォースの強権でリンフォース小の名前は結局ツヴァイに決まった…そのままクリスマスパーティー兼ツヴァイの誕生パーティーになっている事など知りようもない。

自分達が追い出した男性陣の事？

勿論、皆忘れていてだれ一人思い出しませんが何か？

「…無事に生まれるといいな…」

「ああ…」

「そ、そうですね！！」

「げ、元気なのが一番だよ！！」

「うむ…」

五人はそれぞれ程度の差こそあれ、新しい命の誕生に期待していた…のだが、結局、女性陣が彼等の事を思い出すのはパーティーが終わった後の事になる。

ツヴァイの誕生を聞くのもその時だ。

その間、ずっと雪の振る野外で五人は寒さに耐えしのぶ事になるのだが……… Merry Christmas 彼等に幸あれ。

そんなわけで、完結しました。

書く回数文字なんです、やはり完結の瞬間は達成感とともに寂しさも若干…長かったというか・・・長くなったというか、軽く適当に書こうと思ってたらこんなんでました。

とりあえずいったんここで完結させておきます。

さすがにネタがないので、気が向けばまた続きを書くかもしれません。

とりあえずは今中途半端になっているものも書き上げないとならないし…そんなわけで、ここまで付き合ってくださった皆さん、お疲れ様でした。

ありがとうございます。

セコム憑いてますか？

オリ主というものを知っているだろうか？

オリジナル主人公の略というのはSSを読む人間にとっては今サ
ラダ…もとい今更だ。

彼等、彼女達には様々なタイプが存在するというのもご存じだろ
う。

いきなり死んで神様に力を与えて貰った者…あるいは異世界から
迷い込んできた者…中には転生だの原作キャラに憑依などと色々な
種類のオリ主がいる。

だが、オリ主といえどもその中身は人間、聖人君子ばかりではあ
るまい…これはそんな連中にまつわるお話である。

CASE 01

やあ皆こんにちは！！うん？返事が小さいな、こーんにーちわー
！！

俺の名前は英^エい^イわゆるオリ主という奴だ！！

趣味は小さい子供を見て楽しむこと、小さい子はいいよね〜何で
も素直に言う事聞いてくれるし、大人の女ように金だのプレゼント
だの言わないし毛も生え 一時間経過 …そんなわけで俺は幼女が
大好きだ！！

愛読書は格調高く源氏物語、女の子を自分好みに調…もとい育て
るって男の夢だよな！！

光源氏は俺の理想。

そんな俺だけど、とっても可愛い小学生をストーカーしてたら集
中しすぎてフラフラと道路に出ちまい、トラックにはねられてあの

世行きしちまったＺＥ。

ガッデムとか思ってたなら神様とかが出てきて手違いで殺しちゃったからチート能力付きで転生させてくれた。

やって来た世界はリリカルなのはの世界！！

理由？聞くだけやぼつてもんだろい？

だってこの世界は幼女だらけなんだぜ…そして俺は生粋のなのはスキー…俺、なのはと結婚するんだ！！（某海賊王希望の少年の如く力強く）

ユーノ？邪魔になるなら勿論排除するよ。

チート能力があれば何でもできる！！…まずはさみしがっているなのはに近づいて合法的にお兄ちゃんポジションゲットするんだ。

「そしてあわよくばアリサとすずかもウヒヒ…っとそんなこんなで第一なのは発見！！」

しかもアリサとすずかも一緒にやねえかヒヤッハー…！！

ちなみにs t s までには皆と別れるよ、二次元でも三次元でも大人に興味はねえもん。

「レッツ！！ダイナミックエント…」

『ルビーちゃん流、ぎやらくしあん・えくすぷろーじょん！！』

「へプロあ！！」

その時、俺は確かに…銀河が砕ける様を見た。

「えつと…って言うわけなんですけど…」

「君はまだ寝ぼけているのか？」

目の前には警察官のお兄さん…何でこんな事になったし？

「君は路上に大の字に寝ていたんだぞ？気づかなければそのまま車に轢かれていた所だ」

「そんな事に！？」

「ついでに、君の周囲に散乱していた周囲の家から盗まれたらしき小さな女子用のパンツについて聞きたいんだが…」

「そんな夢のような事が！？畜生、全く覚えていない…って、あ」
警察官の目が獣を見る目になった。

英の経歴に下着ドロと要注意人物のレッテルが張られた。

CASE 02

「やっと来たぞ」

わたしの名前は微意^{ビイ}、いわゆる転生者だ。

前世ではすっかり豆腐の角に頭をぶつけて死んでしまったが、気がつけばここ……リリカルなのはの世界に転生していた。

しかも私が持っていた漫画やアニメの能力を使えるチート仕様だ。

残念ながら生まれた場所が海鳴市じゃなく、この歳になるまで長期の外出ができなかったが、なんとか原作の時期には間に合ったようだ。

「待ちに待った時が来たのだ。成長するまでにかかった時間が無駄で無かった事の……証しの為に……原作介入の為に……海鳴よ！！私はやって来た」

当然というか勿論私はオタクだ。

そして私が原作介入する目的はただ一つ。

「待つてろよフェイトそん！！必ず君を管理局の魔の手から守ってみせる！！」

あんなうえから目線で子供を戦わせる管理局なんてふざけた組織（こいつの主観＋SS設定などかなり極端な認識持ち）にフェイトそんは渡さない！！

いずれは俺の力で思い知らせてやる！！

「そのためにもまずはフェイトそんを“保護”してあげないと……腹黒リンディの姦計で無理やりKYなクロノの妹にされてしまう！！

そんな事はさせん！！邪魔する奴はなのはだろぅがユーノだろぅが半殺しだ！！」

そう、私の考えは間違っていない。

正しいんだから、少しくらい無茶をして許されるんだ！！

その途中で誰か死んでしまっても、管理局のような悪の組織の人間に容赦なんて無用！！

「待っててくれよフェイトそーん！！」

『ルビーちゃん、しゃいんすばーく！！』

「ズゴッククーーーー！！」

飛び出そうとした私は、真横から来た彗星にこめかみを強打され、意識が一瞬で白濁した。

「っという事がありました…」

「何と言うか…最近多いな…流行ってるのかい？」

「お、多いんですか…」

「まあね」

私は目の前でやれやれな顔をしている警察官に恐縮しまくりだつた。

一瞬で意識を刈り取られた私が、次に見たのは知らない天井…実は交番の留置所…警官に話を聞くと、私は道路のど真ん中で全裸で寝ていたらしい…全身にマジックで“この者、危険につき”とか“猛兽注意”とか書かれていた…何故具体的に断定できるのかと言えば、使われたマジックが油性だったため、今でもはつきりと書かれたコメントが確認できるのだ…って言うかいくら擦っても消えるどころか薄くさえならない。

そんな私だが、かろうじて最悪の状況…不特定多数の人間に見られる事は回避された。

一重に目の前にいる警察官が巡回中に見つけて保護してくれたからだ。

故に、目の前にいるお兄さんは微意の（社会人的な）命の恩人である。

「ま、それはそれとして、とりあえず猥褻物陳列罪ね」
「ええー！ー！！」

微意の経歴に猥褻物陳列罪と暴力男のレッテルが追加された。
ストーリーキング

CASE 03

「こ、ここが八神家なんだな…」

ぼ、僕は椎^シ：い、いわゆるオリ主って奴なんだな、部屋でパソコンとアニメと漫画の二ート生活してたらいつの間にかリリカルなのはの世界に来てたんだな、し、しかもチートになっちゃったんだな…お、オニギリく、下さい。

「や、やってあるんだな…原作介入、するんだな…」

は、はやてちゃんを助けるんだな、そ、そしてリインフォースもぼ、僕の手ですくうんだな、そ、その為にははやてちゃん達の事をよく知らなければならいんだな。

み、みんな揃ってお出かけしたのは確認しています。

な、なのでこれから八神家に侵入して色々調べるんだな…あ、ピッキングは得意なんだな、ちゃんと経験（？）も積んでるんだな…そ、そしてこっそり忍び込んだらはやてちゃんやシグナムさんやシヤマルさんやヴィータちゃんの私物…下着とか下着とか下着とか…あ、後忘れずに盗聴器を…。

『もう完全にただの犯罪者ですから！！残念！！ルビーちゃんブレストファイヤー！！！！』

「ぬッハーーーー！！！」

その時、僕は焼き豚になったんだな…。

「…そ、そんな事があつたんだな」

「…君いい歳しているように見えるんだけど何歳？犯罪って言葉知ってる？」

「は、はい…」

ま、 “また” この世界でも警察のお世話になってしまったんだな…僕はこんがり焼けてアフロになった状態で交番の前に五体倒置していたって、警察官のお兄さんに聞いたんだな。

し、しかも僕の犯罪記録が詳細に記録されたレポート付きで転がされていたので、言い訳が全然効きません…今回は何年になるんだろうな…。

「住居侵入未遂に窃盗未遂…家の人がいたら強盗未遂になっていた所だね。盗聴も犯罪つと、色々と話が長くなりそうだけど、かつ井食べるかい？」

「あ、ありがとうございます。で、でも出来ればオ、オニギリください」

椎の経歴に住居侵入未遂と窃盗未遂が追加された。

ちなみに、盗聴が成功していたら更に電気通信事業法違反か電波法違反、ストーカー規制法と盗電による窃盗罪などが付いていた所だ。

CASE XX

「なあ…何かおかしいよな？」

「何かじゃなくてあからさまにおかしいだろうが…」

海鳴のはずれ、さびれた工場跡に久方ぶりであろう人間の姿があ

った。

数は八、年齢も容姿もばらばらで統一性がないどころか、明らかにゲームキャラやアニメキャラのソックリさん、果ては左右の目の色が違う中二臭い容姿の人間までいる。

彼らに共通するのは一つ…全員がオリ主であるという事だ。

「好き勝手できるって聞いてきたのに、こんなの神の奴には聞いていないぞ！？ルビーって誰なんだ！？」

「私だって知らん！！原作キャラにそんな奴はいなかった！！」

「お、オニギリ美味しいんだな…」

面子の中には英、微意、椎の姿もある。

彼等の共通項はオリ主であるという事ともう一つ、この世界の原作キャラであるのは達に、邪な考えを抱いて接触しようとして、寸前で何者かに阻まれた連中だということだ。

ちなみにそれぞれ程度の差はあれ、精神と肉体の両面でダメージを受けている。

「くっそ…元々俺はこの世界が嫌いだったんだよ…！」

忌々しげに、憎しみすらこめて言いはなつたのは全身包帯でぐるぐる巻きにされたオリ主、出威^{デイ}だ。

本人曰く、原作キャラが嫌いなオリ主…そもそもなんで原作キャラが嫌いな奴がこの世界に来たのか知れないが、ともかく原作に関わらないとかぬかしていたくせにやり方が生ぬるいだの、殺す覚悟もないくせに力を振るいやがって…とかどこかで聞いたような独善的な台詞をほざいた揚句、「世間の厳しさを俺が教えてやらあ！」「となのは達の前に立ちはだかろうとしたが、これまた正体不明の何者かにぼこぼこにされた。

「あはあ…非殺傷設定があるのに殺す覚悟なんているもんですかなのはちゃん達に変な事教えようとしなくてくださいよお…ルビーちゃん大・雪・山おろし…」何って言いやがって…！」

ぼこぼこにされた時の事を思い出したのか、出威が唸る。

台詞の一つ一つまで覚えているとは相当に恨んでいるようだ、

本人以外の全員は、敵というか邪魔ものであるはずのルビーの意見に、内心で同意していた。

やり方がぬるい？

殺す覚悟？

力を手に入れた事で調子に乗っているとかそういうこと以前に、前者は神、あるいは読者視点で見ているからこそ言える事だし、後者に関しては普通の日本人として生活してきた10歳の女の子に何を求めているんだこいつ？である。

しかもその教え方が…要するに痛い目を見せて体で覚えさせて悟らせようとか…そう言う事をしようとしたらしい。

外顔はともかく、中身はいい年をした大人が子供を痛めつけて、物を教えようなどとまともではない。

そんな狂人思考を持っていたが故だろうか、彼の被った被害は他の7人と比べてはるかにひどい。

ルビーは彼に対して一切の手加減や容赦をしなかった。

骨折に打ち身で全治数か月の怪我を負わせつつ、彼の保持していた能力もどいうわけか消失していた…いや、この場合はおそらく消されていたというのが正しいだろう。

それに加えて彼の危険性はネットやその他の情報媒体を通じて流され、社会的にも抹殺されている。

むしろ包帯で人相が隠れていた方が、まだしも外を歩けるという有様…近々、この世界の家族と一緒に外国に引っ越すらしい…親戚からは既に絶縁扱いされているとか…殺されていないだけましというのはこういうことを言うのだろう。

彼を見ていると、自分達は手加減されていたというのが良く分かる。

「えっと、ルビーはやっぱり俺達と同じ転生者なのかな？」

「お、おお！！きつとその通りだ！！」

一人の言った言葉に、全員が飛び付いて来た。

ギラギラと独りよがりな復讐を思って身を焦がしている出威との、

これ以上のかかわりは積極的にごめんこうむる。

ここにいる連中は色々と偏った思考を持っているが、あそこまで危険なのは出威だけだ。

「きつとなのは達を独占しようとしてるんだぜ!!」

「許せん…私のフェイトそんを…」

「こうなったら、何が何でも原作キャラに接触するんだ」

まずはお近づきにならなければ何も始まらない。

それに関しては、全員の意見が一致している。

「何か考えがあるのか？」

「こうなったら、全員で突撃する」

そして一人でもいい。

辿り着いた誰かが、自分達の存在をなのはに伝えてくれれば、彼女達の事だ…きつと助けに来てくれる。

チート能力を持った連中が、雁首そろえて何他人任せな事を考えているのだろうと思うが、正体不明のルビーという奴は、そのチート能力の警戒をすり抜け、オリ主達をさんざん翻弄してコケにしている。

そんな相手でも、なのは達を守ろうとしているのは間違いないのだ。

ならば、なのは達のことを無視してまで自分達を害そうとするとは思えない。

「そこから改めて争奪戦開始だ」

「ちっ…それしかねえか…でもなのはは渡さねえ」

「悪くはないですね、状況は皆同じですから…フェイトそんは私の嫁」

「はやてたん…シグナムお姉さま…ハアハア…」

こいつら…なのは達を勝手に賞品扱いしている事に気が付いていないのか？

「いいか？一人は皆の為、皆は一人の為だぞ」

「『一人は皆の為、皆は一人の為!!』」「『一人は皆の為、皆は一人の為!!』」

『あはあゝつまりここにいる全員を一人残らず沈めれば問題無しって事ですね』

協力を誓い合った直後、聞こえてきた声に全員が硬直する。

この声は…この声は薄れゆく意識の中で聞いたあの声だ。

『まあゝつたく、半端にしぶといから加減が難しいんですよ？』

「だ、誰だ！？」

奴はそもそも隠れていなかった。

だから、誰もが簡単に見つける…工場の少し高い場所、誰からも見えるように宙に浮かんでいる奴の姿を…。

「お、お前はカレイドステッキ！？」

「マジカル ルビーなのか！？」

それはこの世界にいる一人の少女と同じ、運命の名前を持つ物語ゲームで…あるいは本で…もしくは映像で…全く知らない、見た事もないという人間もそうはいない。

ここに集まっている連中は特によく知っている。

そしてその物語の中において、魅力的な出演者たちを翻弄し、困らせ、どこまでも賑やかにする一本の道化師^{ピエロ}…愉快型魔術礼装カレイドステッキに宿る人工天然精霊、マジカル ルビー…それがどれだけ厄介な相手をかこの場の全員が知っている。

原作におけるチートキャラ…しかも、ルビーは子供好きだ。

凜とイリアが並んでいれば、魔術師の能力を二の次にしてでも、迷いなくイリアと契約を結ぶだろうくらい子供好きな奴だ。

それを傷つけようとするなら、大統領だつて迷いなくぶんなぐるだろう。

ましてや出威ごとき…その結果が本人の惨状として目の前にある。改めて良く見れば、なのは達の誰かを傷つけようとしたオリ主ほど、段階的に怪我が重かった。

「何でお前がこの世界にいるんだよ！？ここはリリカルなのはの世界だぞ！？」

『あはあゝそんな事はどうでもいいじゃないですか』

CV：高野直子の生声・キターーー！！と感動する間もなく、ルビーは死刑宣告をした。

『ルビーちゃんも手ぬるかったから懲りなかったんですね？だからきつちりここで終わらせますからごめんなさ〜い』

「……………っ!?」「……………」

最悪だ。

一度目は見逃してくれたようだが…二度目はないらしい。

『ちなみに、今のルビーちゃんのマスターはなのはちゃんでーす。なのはちゃん達に群がる害虫のみなさ〜ん？小便は済ませましたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOKですか〜？』

一瞬で血の気が引いた。

こいつ…本気でここにいる全員を沈めるつもりだ。

オリ主達の視線を集めながら、ルビーに凶悪なまでの魔力が収束される。

「ちょまー！！なんだよそれ！？お、俺達はオリ主なんだぞー！！」

『だから？』

「何で俺達以上のむちゃくちゃな魔力が出せるんだよー！！」

『あはあ〜原作キャラがオリ主より弱いなんて誰が決めたんです？まったくもってその通り。』

連中が物語の外から来たチートならば、ルビーは物語の中に存在するチートキャラだ。

『ひやつは〜汚物は消毒ですよ〜』

「なめんなー！！こちらオリ主様だー！！簡単にやられてたまるかよー！！オリ主英が現れたー！！」

「オリ主、微意が現れたー！！」

「オ、オリ主…椎が現れたんだな…」

「オリ主出威が現れてやったぞこん畜生ー！！」

「オリ主……亥^イが……現われた」

「オリ主柄布^{エラ}が現れたでございます」

「オリ主^{ジイ}爺が現れた！！一同の者、頭が高い、控えおろー！！」

「オリ主^{エッチ}娃嬢が現れたわよ〜ん」（こいつも男）

オリ主達が横一直線に立った瞬間、何かノスタルジックな物がわき出してきた。

「み」「ん」「な」「そ」「ろ」「っ」「て」「ー」

「「「「「合体！！」「」「」「」「」

オリ主A B C D E F G Hは合体してキングオリ主が現れた。

「「「「「俺達は八人で一人のオリ主！！さあ、お前の罪を数えろ！！」「」「」「」「」

『罪？幼女相手に犯罪を犯そうとしたロリコン共の暴挙を、直前で止めた事の何が罪なんですか？』

「「「「「う……」「」「」「」

八重の呻きが重なり、キングオリ主が顔を逸らした…自覚はあったのか…。

『あはあ〜しかも安易な合体による安易なパワーアップ、そして安易な“赤信号、みんなで渡れば怖くない”精神でルビーちゃんに勝てると思っただんですか〜？』

「「「「「う、五月蠅いんだよ！！」「」「」「」

後ろめたさに負けたキングオリ主をルビーが迎え撃つ…その後、少なくとも海鳴で彼等オリ主の姿を見た者はいない。

何があつたのかを知る者もない…ただ更地になつた工場跡が残るのみだ。

『ただいま〜ですよ〜』

「あ、お帰りルビーちゃん」

窓から戻って来たルビーを、なのはがカギを開けて迎え入れる。

「今日はいつもより帰ってくるのが遅かったけど、何かあつたの？それに魔術使つたでしょ？いきなりなのはの魔術回路から魔力が流

れて行つてびつくりしたんだから」

『ごめんなさいなのはちゃん、最近よく湧いていた悪い虫を一網打尽にできたんですよ』

「え、む、虫？」

ちよつと顔がひきつってしまったのは10歳の女の子としては可愛敬。

『大丈夫ですよ、なのはちゃん達に魅かれてくる悪い虫はルビーちゃんのみーんな駆除しちゃいます』

「にはは、ありがとうねルビーちゃん」

『いえいえ』

リリカルなのはにやつてくるオリ主よ…気をつけろ、魔法少女には最強にして最凶の守護者^{セコム}が付いている。

そつと振り返れば…そこにはお前をロックオンして狙い撃とうとしている奴の姿があるかもしれない。

聞こえてこないか…奴のあの能天気な笑い声が…。

『あはあ』

セコム憑いてますか？（後書き）

何か色々くすぶっていた物をまとめてみたらものぐるおしけれ…徒然草？

別にオリ主が嫌いってわけじゃないですが、なのは達を傷つけるやつは爆発して良し！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5261n/>

リリカルとマジカルの全力全壊

2011年10月7日09時13分発行